THE CENTRAL REVIEW

中央公論

夏季特別號

第四十二年　第七號　第四百七十四號

御贈答には……

松屋の商品券

共通

東京松屋
今川橋家庭部
大森[illegible]店
横濱鶴屋

十三版

獨逸 ヘッケル博士著　文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

▼四六判總布　定價參圓　郵税十二錢

著者は、近代獨逸に於ける科學界の最大大家で、專攻の生物學に於ては世界第一の泰斗と仰がるゝ人。原書は**發賣後本國にて數十萬部**、英譯のみにて**十四萬部**を賣盡したといふ程の世界的名著である。譯筆の明快は云ふまでもない。

七版

英國 ラスキン著　文學士 栗原古城譯

胡麻と百合

▼四六判總布　定價貳圓　郵税十錢

本書は美術批評に關する以外のラスキンの著述中で最も有名で又一番弘く讀まれた書物である。原文又「**王者の寶庫と女王の花園**」と云ふ。王者の寶庫は讀書論で、女王の花園は婦人論である。孰れも修養書の白眉と云はる。

七版

印度マドラス大學 ナラス教授著　駒澤大學教授 立花俊道譯

佛教の要諦

▼四六判總布　定價參圓貳拾錢　郵税十二錢

これ幽玄なる佛教々理の眞諦を何人にも解し易きやう手に取る如く明快に說破せる稀世の名著で、佛教の知識を得んと欲する人は必ず一讀すべきものである。現に歐米の諸大學でも學生の指定參考書として汎く推薦してゐる。

再版

石龍子著

形貌學講義

▼圖面二枚入

▼四六判總布　定價貳圓五拾錢　郵税十二錢

これ博覽達識、學東西を兼ぬる當代觀相家の第一人者石龍子先生が多年の蘊蓄を傾盡せるもの。**敍述平明何人にも解し易く**、人の**顏面**、**手相**、或は**皮膚色**等に由りて心理、心術、**生涯の運命**等を知り得る術を說明せるもの。著者の所謂「**人生行路の一大羅針**」として萬人必讀の珍書。

東京本鄕西片町　**玄黃社**　電話小石川一三九番　振替東京七九九五番

豫約 明治文

◇明治時代は如何にして作られたか◇明治時代は

明治文化の回顧は現代人に取つてその半生の追憶である◇追憶は興趣を湧起し併せてまた將來に對する鑑戒を提供する

編輯擔當者

河合榮治郎
土方成美
本位田祥男
穗積重遠
吉田熊次
吉野作造

校訂解題後援者

阿部賢一
石井研堂
内田魯庵
上田貞次郎
尾佐竹猛
小野清一郎
小野秀雄
外骨
神代種亮
長谷川如是閑
佐々木惣一
下出隼吉
下村宏
末弘嚴太郎
鈴木文治
高橋誠一郎
高田保馬
瀧本誠一
常盤大定
德富猪一郎
中村勝麻呂
永井亨
那須皓
藤井甚太郎
福田德三
堀江歸一
牧野英一
牧野輝智
三宅雪嶺
三浦周行
山崎覺次郎
綿貫哲雄

◇明治文化全集に收めた書物を今買ひ集めるとなると恐らく數千圓の巨額を要するだらう。◇それも纏つてすぐはない。故に洩れなく集めるには必ずや十數年の歳月を要し、費用も更に數倍するであらう◇それが毎月たつた參圓の拂込みで求め得られるのだ。明治文化全集の特色の一つは玆に在る。◇更に本全集の他に匹儔なき誇り得る點は、今まで無價値として顧みられなかつた者の中から、專門家の鑑識に依て新に拾ひ上けられたのが澤山ある事だ之れなどは金な山と積んでも到底他では得られない貴重な文獻である

◇猶本全集の特色を要言すれば

一蒐集文獻の豐富：殆ど集め盡くして漏らす所がない。二記載範圍の廣汎：文化現象のすべての方面に及んでゐる。三選擇標準の適切：一流の大家が夫々專門に就て精選した。四分類排列の系統的：雜然たる集成では研究價値は半減す。五校訂校正の嚴密：適當の專門家自ら之に當る。六解題の精細委曲：解說に依て資料の光を增すは路傍の雜草も名園に依りて活人の眼樂となるが如し。七印刷製本の優秀：典雅にして堅牢なる點特に留意する所。八定價に低比の至廉：何人にも購求し易からしむ

化全集
募集

何物を吾人に殘したか◇本全集は直截に之を語る

第一卷 皇室篇	第二卷 正史篇	第三卷 雜史篇	第四卷 憲政篇	第五卷 自由民權篇	第六卷 外交篇	第七卷 政治篇	第八卷 法律篇	第九卷 經濟篇	第十卷 教育篇	第十一卷 宗教篇	第十二卷 文學藝術篇
第十三卷 時事小說篇	第十四卷 飜譯文藝篇	第十五卷 思想篇	第十六卷 外國文化篇	第十七卷 新聞篇	第十八卷 雜誌篇	第十九卷 風俗篇	第二十卷 文明開化篇	第二十一卷 社會篇	第二十二卷 軍事篇	第二十三卷 交通篇	第二十四卷 科學篇

現代の文化は如何なる礎石の上に立つか◇之が檢討を怠つては凡百の新建設は遂に徒勞である……

内容見本進呈

豫約規定

頒布方法 全二十四卷 豫約會員のみに頒つ

體裁 菊大判、八ポイント二段組、一冊紙數六百頁、用紙金花五十七斤、總布裝見返し錦繪恒久保存裝飾に耐ゆ

申込 先づ御入會の際申込金參圓御送附下さい。申込金は最終の會費に充當す

會費 毎月拂金參圓 全卷一時拂金六拾七圓（外に送料一冊廿七錢市內十二錢）

配本期日 九月五日より毎月一冊宛刊行して昭和四年八月を以て全二十四卷完結

入會方法 全國書店にて扱ひます本社直接の方は振替東京一六番へ御拂込み願ひます

締切 七月五日

日本評論社
東京市本鄉區弓町
振替東京一六
電話小石川一九七一 二九三二

早稻田大學教授 杉森孝次郎著 （最新刊）

社會學

本書は、歐米學界に於て好評嘖々たる氏の前著『ザ、プリンシプルスオヴ、ザ、モラル、エムパイヤ』と等しく、近く英國に於て出版せられ、世界の學界に向つて其眞價を表するであらう。

四六判三六五頁
總布函入美裝
定價貳圓五拾錢
郵稅拾貳錢

▼世界的學界への進出！

本書は精確に全部、組織的一新著として、著者によつて計畫、遂行された結果である。認識論的根本考察に起筆し、新聞及映畫論に終筆するまで、全卷これ社會學の自覺と責任に於ける著者の集注的實現である。社會は著者によつて學術的に如何に分析され、再綜合されるかを此書は著者の自信に於て報告する。新個人主義、新分業主義、機能主義、一擧にして個人主義及社會主義たる本質的關係ある新使用主義、現代を半機械時代と斷定する理由、これらは全卷内の唯だ或特徴に外ならない。普遍的試讀が性急に希望される。

倫理學

杉森孝次郎著

四六判 約四五〇頁 價 二・五〇 税 ・一二

東京牛込 早稻田大學出版部發行 振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇

腦溢血！

危險信號(高血壓)を無視する勿れ

壯年季及び初老期にある健康者の生命を………

靑天の霹靂の如く突如として奪取し、その死亡率に於て結核に次ぐものありと稱えられ、人類恐怖の中心となれる腦溢血は、何等の豫告なく襲撃するにあらずして、高血壓てふ危險信號（病的苦痛を伴はざることあり）の持續するにかゝわらず、これを無視せる必然的結果に外ならず。

腦溢血に對しては、百の治療も一の早期豫防に及ばざることは既に知らるゝところ、而してこの目的に最も汎用さるゝものは**アニマザ**なり。



動脉硬化症 腦溢血 治療及豫防劑

アニマザ

高血壓症の治療幷びに豫防に**アニマザ**の內服が現時に於ける最良の療法なることは既に多數の臨床實驗幷びに批判の結果確定さるゝところにして、本劑は血管硬化に對し原因的に奏効し、長期に亘り連用するも全く無害なるため高血壓者の常用藥劑としてその聲價を專らにするに至れり。

『高血壓の治療及豫防に就て』
と題する小冊子御申越次第送呈す

三〇錠……………二圓四十錢
一〇〇錠……………六圓八十錢
粉末…二五瓦入注射液…六管入
　　各名藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店　株式會社　田邊元三郎商店　東京日本橋區本町



クラブ煉齒磨

朝と食後の

學理上
實驗上
齒の爲めに一番
よいクラブ齒磨



衛生的なセルロイド製

クラブ齒刷子



水風　　安田靫彦筆

日本書畫家辭典 人名篇・落款篇

最高權威

● 國學院大學教授 國學院大學圖書館長 澤田章先生編著 中村岳陵畫伯裝幀 ●

本書は澤田教授が刻苦精勵半生の心血を濺いで始めて完成したる大編纂にして有史以來近代人に至る專門の畫家は勿論苟も史上の人物にして畫を良くしたる者悉くを收錄したる畫家人名辭典並に落款印譜辭典として眞に國寶的價値を有する物たるを信ず。

人名篇 記傳正確詳密、人名豊富、發音的標示、名及異稱の標示、代表作寫眞挿入。

落款篇 典據正確、實物大精巧なる二度刷寫眞版、原物と毫毛の相違なく完全無缺なり。

特價期限七月二十日

内容見本申込次第進呈

特價規定

全二冊 人名篇・落款篇 總布表裝龍畫金泥天金 特上製函入美術裝飾本

定價(二冊)貳拾四圓 特價貳拾圓

分賣

〔人名篇〕菊判六號三段組八五〇頁(代表畫寫眞挿入) 定價十二圓 特價十圓也 送料四十五錢 八月中出來の上代金拂込み

〔落欵篇〕菊判特許單式印刷黑朱二色刷八五〇頁 定價十二圓 特價十圓也 送料四十五錢 七月一日より着金順に配本

發行所 東京市小石川區大原町二十番地 電話大塚一八六五番 振替東京五九二二二番 紀元社

理想的二大歴史地圖

文學博士 吉田東伍編

新編日本讀史地圖

再版
四六倍判六六頁
定價六圓五十錢
送料二十七錢

文學博士 箭内亙編

東洋讀史地圖

第四版
菊倍判三二頁
定價七圓
送料二十七錢

讀史地圖の要求は切實であるが、これが編纂出版の困難は容易にその理想的なものの出現を見ることが出來なかつた。幸にも著者兩氏の奮起によつて、推敲改版度を重ね苦心經營終にこの二大讀史地圖を完成するに至つた。取材の精、印刷の美、紙質製本の堅牢、わが國唯一無二の最良最善の讀史地圖である。史學研究者には元より必要であるが、中等學生の使用にも適してゐる。

東京神田通神保町 冨山房 振替東京五〇一番



昭和二年

中央公論

七月一日發行

七月號

第四十二年第七號

第四百七十四號

支那時局の正視

蔣介石と唐生智と閻錫山とそして馮玉祥とが北京の張作霖を目がけて三方四方から攻め寄せる。よし接戰を見るまで多少の時日ありとしても、北軍の意氣沮喪は我々をして早く既に大勢の歸趨のいづれに在るやを想はしめるに十分だ。昨今の新聞が張作霖の沒落の遠からざるべきを傳ふるのも怪むに足らない。

此際に方りて日本の出兵は何を意味するか。政府には政府の辯明があらう、日本人としてはまた日本人としての說明の仕樣もある。併し純客觀的な情勢判斷としては、日本出兵の最も著しい効果は、南軍北上の勢を阻止し北軍に頽勢挽回の機會を與ふることであるを承認せなければならぬ。日本政府には固より北方を援けて南軍を邪魔する意圖は毛頭あるまい。從て事實上斯かる結果を生む方策に出づるは最も愼まねばならぬは勿論だ。が併し、日本がその當然の權利を保護するが爲に是非とも或る種の行動に出づるを必要とするかぎり、假令それが不幸にして間接に一方を助け一方を抑ふる結果になるとも、之を辭するを得ざる場合もあらう。只問題はそこまで立ち入らねばならぬ程出兵の必要があり又それに當然の理由があつたか否かの點にある。

田中首相の支那時局談なるものを新聞で見た。閻錫山が新に蔣介石と結んで國民革命軍の看板を掲げたのは當然だ、兩者は共に共產主義に反對だからである。然らば彼等が同じく赤化防止に熱心な張作霖に敵對するのはをかしいではないか。寧ろこの三人が互に提携して共產派の馮玉祥に當るべきではなからうか。蔣と張とは恐らく早晚妥協するであらうと。田中首相を或る一團の支那通の意見を代表するものとすれば、馮玉祥が徹底的の共產派として支那で頗る嫌はれて居り、蔣や閻やは北方軍閥よりもこの共產派を打倒することを目前の急務として居るとする謬見を抱くもの、今日の我國に案外多いことが想像される。

この謬見は遂に、閻の出動を以て張を敵とするに非ず馮を牽制するが主たる目的だとの結論に到達せしめ、又馮の有力なる牽制ある限り張の北京に於ける地位は安全だと妄信せしめるに至る。そんなら恢復し難き窮地に陷らざるうち彼の立場を擁護してやれとて、山梨大將が田中首相の命を受けて渡支したと云ふものもある。眞僞

固より明ならざるも、奉天發電は頻りに馮閻の阻隔、張蔣の妥協を傳へては張の爲に謀るものゝ策動に便宜を與へんとして居る。併し乍ら張の今日の本當の立場は、之等の策士の宣傳するが如く安全なものではない。之等の策動の結果或はより以上の窮地に陷ることから免れ得るかも知れぬといふまでである。要するに彼れの地位の最早孤城落日の觀あるはどの道疑を容れぬのである。

張と蔣との妥協を宣傳するものに、もう一つ變な仲間がある。所謂武漢派を支持するに熱心な我國の共產派が是れだ。彼等は曰ふ、勞働者と農民との本當の力を基礎とし從て革命遂行の眞の實力ある唯一の團體は武漢派だ。之を共同の敵とする點に於ては蔣も張も同一だ。武漢派こそ彼等に取て眞に最も怖るべき勁敵である。それだけ彼等は之に對抗する爲め諸外國の資本的帝國主義の庇蔭に頼る。斯くして張と蔣とは世界的資本主義の傀儡となり、無產階級勃興の鋒先をへし折る爲に提携協力すべき運命に在ると。斯くて彼等の一派は更に數步を進め、張と蔣との間には既に提携の成立せるかに妄信し、日本の出兵亦之と力を合せて共產派の剿滅を目的とするのだなどと說くにいたる。事實に基いて形勢を判ずるに非ず、先入の觀念に基いて幻象を創作するものに過ぎず、支那に關する論策としては固より一顧の價値なしと雖も、張と提携することあるべきの惡名を被らすことに依て蔣の共產派討伐の鬱憤を洩らし、併せてわが國內部に於て共產派宣傳の目的を達するには、多少の效果が無いでもなからう。併し之等の人々に就て眞面目に支那の問題を學ばんとする人は、やがて大なる失望を感ずるに相違ない。

支那に於ける共產黨は吹けば飛ぶ樣なものである。支那の爲に祝すべきか悲むべきかは分らないが、要するに彼等の勢力は今日もはや問題とするに足らぬ。蔣と唐と閻と馮との間には、過去に於て行懸り上の齟齬あり將來またどうなるか分らぬとしても、今日相當の連絡あるは疑を容れざる所、彼等相互の掛引きの爲に少しでも張作霖の立場の安全なるを期待し得べき要素は全然見出せない。是非善惡利害得失の論は別とする。張と蔣閻一派との間に眞實なる妥協の行はるべき見込の絕對にないことは明だ。若し何等か妥協の名に依て約束せられたものがあるとすれば、そは實質に於て體のよい降伏條欵でなければならぬ。張の沒落は既定の運命である。彼の勢力の打倒こそが實に蔣唐閻馮をして密にかたく相結ばしめて居る紐帶ではないか。

日本の對支政策は、何を措いても先づこの事實を正視して掛らねばならぬ。

中央公論



第四十二年第七號
七月號
第四百七十四號

我國資本主義の安定の型、沒落の型

——「財界の近狀」は何を語る？——

猪俣津南雄

一、問題の所在

(1) 資本家階級の恐慌觀——武藤山治氏の見解

突如たる倒閉、銀行パニツク、モラトリアム――最近におけるかゝる事變の續起は、疑ひもなく、我國資本主義の運命に關心をもつ總ての者に向つて、多くの深刻なる問題を投じた。五月の新聞雜誌は、かうした問題に關する考察、意見、論評をもつて充たされた。私は先づ、それらの代表的なるものの二三の要點を摘記し、吟味することによつて、私が玆に扱はうとする主題の範圍、性質、並びに重要を明かならしめるであらう。

言ふ迄もなく、武藤山治氏は、大日本紡績聯合會の首腦、實業同志會の黨首として、新しき工業日本の典型的資本家の一人である。氏は、今度の混亂を何と見るか？

『吾國今回の恐慌も、其原因遠く大正六七八年の好況時代に發したもので、當時一時の好況に浮かれ（！）資本を濫費せる上に、收支償はぬ事業に過大な資本を固定させたためである。それを、大正九年の世界大戰爭後の反動時期に、吾國のみ官民が彌縫策を採り徹底的整理を怠り（！）居るところへ、大正十二年九月一日關東大震災が起り非常なる資本を失つたにも係らず、猶相變らず彌縫糊塗を事とし、其日を送り來りたるため、早晩財界に一大動搖の起ることは避け難い運命であつた。それが今回の震災手形法案より偶々表面に現はれたに過ぎない。』（改造六月號一五頁―一九頁。）

かくの如きが、武藤氏の認識にのぼつたところの「今回の恐慌の原因」である。恐慌を惹起したものは何かといふに、それは「官民」なる言葉で表はされた或る少數の人間群の、放縱、怠慢、不心得、等の道徳的過誤に外ならない。もし此の見解が正しいとすれば、「財界の大動搖」なるものは、資本家やブルジョア政治家達の修養により、戒心により、「協力一致」によつて十分に避け得べき筈のものであつた。しかるに、武藤氏は同時にまた、

『財界の大動搖とは、俗に言ふ（！）恐慌であつて、恐慌は我國においても度々起つたことがあり、歐米では今日まで既に十二回（！）も起つてゐる。』

ことを知つてゐるのである。それが僅か十一回に過ぎないか否かを、私は玆で武藤氏と爭はうとは思はない。だが、資

本主義經濟の成立と共に初めて人類の知る所となつた恐慌なるものが、資本主義の發展につれ、一回は一回毎に、動搖と混亂の及ぶ範圍を擴大し、それに伴ふ諸結果を深刻化し來たれることは事實である。ブルジョアジーは、恐慌の經驗を重ねるにつれて智慧を増し、戒愼を深め、幾多の「對策」を案出し、實施した。しかるに、恰も彼等の聰明と努力とを嗤ふやうに、此の混亂の現象は、不思議にも、周期的な規則正しさと遞増する規模とをもつて、資本主義社會を襲ひ、遂には運命的世界戰爭の形において、その狂暴の限りをつくした。今、武藤氏は、大正九年の戰後恐慌を顧みて、それは「一時の好況に浮かれ、資本を濫費せる上に收支償はぬ事業に過大な資本を固定させた爲めである」と言ふ。およそこれまで、恐慌のあつた後にブルジョアジーが唱へないことはなかつたお題目が、また氏によつて繰返されてゐるのである。そしてそれがまさに、ブルジョアジーの理解の限界をあらはすものである。

だが、少數人間群の道德的過誤に原因を見出し、從つて資本主義經濟に生ずる大混亂を矯治し得べきものと見做すたちば如何にも不思議とするに足るところの此の恐慌現象は、ブルジョア的意識よりも一段と高き水準に立てるプロレタリアートの意識を代表するところのカール・マルクスの科學的分析によつて、既に少しも不思議とするに足らない現象となつてゐるのであつた。彼は、ブルジョアジーが見てもつて道德的過誤となすところのものが、彼等の有らゆる防止的努力にも拘らず、何故に不可避的に再現し、再々現せざるを得ないかを明かにした。彼は、資本主義それ自體の本質を、それの發展の姿のうちに見究め、組織に固有なる諸矛盾の展開し行く過程を、その法則性において把握した。恐慌は、かゝる內的矛盾の周期的爆發に過ぎない。それは、資本主義の發展過程に必然的なる現象であり、その意味において自然現象的な現象である。私は、過日『社會科學』四月號に發表した小論文「帝國主義の理論とその沒落の過程」において、恐慌の理論をば、資本主義崩壞の理論との內的關聯において展開しやうと試みた。詳しくは同論文の參照を望む。

今回の恐慌のいま一つの原因として、武藤氏が單に『官民共に緊縮策を採り徹底的整理を怠れる』ことを言ふに止まる

のもまた、現象の表層に彷徨して事態の資本主義的本質を掴み得ざるブルジョア的意識の特徴を遺憾なく發揮するものである。眞の問題は、玆でもまた、何が彌縫策を必要ならしめ、徹底的整理を不可能ならしめたかでなければならない。そればかりではない。氏の謂はゆる恐慌後の整理が徹底的に行はれないのは、我國において決して事新しいことではないのである。事新しいのは、今度の戰後恐慌の場合に限り整理の必要が資本家によつて未曾有の仰々しさをもつて叫ばれたことである。それはまた何故であつたか——その點を明かにすることなくして、今度の銀行パニックの如き特殊現象を正しく理解することは不可能である。かゝる理解を助けるでもあらう事柄として此の點に關聯する武藤氏の立場について此の機會に尙ほ一言し度く思ふのは、氏をして名をなさしめた金解禁即行の主張である。此の主張は、言ふ迄もなく、氏等の謂はゆる徹底的整理の要求の一面に外ならない。金の輸出禁止は、たしかに、「彌縫策」の「根柢」をなし、「徹底的整理」の障碍をなすべきものであつた。此事實が、氏等をして、世界戰爭の終了と共に遽かに金解禁の使徒たらしめたのであつた。だが、金輸出禁止の政策こそはまた實に武藤氏その人等の紡績資本の利益の爲めに戰時において採られたところの「彌縫策」であつたことを、吾々は未だ忘れずにゐる。わが全ブルジョア社會の「信用制度の基礎」たる金貨金塊をば、輸出禁止によつて氏等の綿花買附資金に流用することが出來ず、從つて氏等はその尨大な利潤を我物とすることが出來ず、從つてまた氏等今日の「「鞏固なる基礎」が生じ得なかつたとしても、——言ひ換へれば氏等の投じた資本の多くが、「戰後の反動期」に至り、「收支償はぬ事業に……固定せしめた」ところの「過大な資本」として現はれたとしても、しかも尙ほ氏等はその徹底的整理の要求を高唱し得たであらうか？　常識は躊躇なく否と答へる。少くとも吾々は、紡績資本が未だ今日の「實力」をかち得なかつた時代におけるかずかずの恐慌に際して、徹底的整理の叫びが彼等によつて揚げられたことを知らないのである。

(2) 小ブルジョアの恐慌觀——高橋龜吉氏の見解

資本主義的發展の過程において、一定の事情の下に繰返し生ずる一定の出來事――好景氣時代に例外なく生ずる資本の濫投――をば、資本主義の組織そのものに內在するところの、その發展の法則として把握する代りに、少數群の人間が犯すところの、矯治し得べき道德的過誤と解さうとする、それはブルジョアジーのイデオロギーである。一つの資本主義的現象を、他の資本主義的現象をもつて說明するに止どまり、資本主義的發展の法則に照して說明しない、それはブルジョアジーの方法である。資本主義の一定の發展段階において優勝的なる一群の資本家の利益を代表する政策を、全資本家社會の利益を代表する政策として遂行する、それはさうした資本家等が組織によつて與へられてゐる特權である。此の特權の行使において、さうした政策を、「國民全體」の利益、一社會全體の利益を代表する政策であると僭稱する、それはブルジョアジーの立場である。現代日本の典型的資本家の一人としての武藤氏の見解のうちに、かゝる立場と方法とイデオロギーとが、まざ〳〵と現はれてをるとしても、それこそは當然すぎる當然として何人も敢へて驚かないであらう。

けれども、吾々は、讀者諸君に若干の驚きをわかたねばならない。私はこれから、今度の事變を論評せる高橋龜吉氏の論文『資本家的機能の總破產』（改造六月號）なる一篇の要點をなすところの數節を引用するであらう。そして讀者は必ず、それに現はれたる氏の見解が、代表的ブルジョアジーの見解として今ま吾々の批判せる武藤氏のそれと、殆ど符節を合するものあるを認めずにはをられまい。しかるに高橋氏は、周知の如く、日本農民黨の顧問として、無產階級及び被壓迫大衆の指導者をもつて任ずる人であり、從つて何人も氏の見解のうちに、ブルジョア的見解に對する最も尖銳なる對立物を期待する。さうした對立的なイデオロギーと方法と立場なくして、ブルジョアジーの支配より民衆を解放することは不可能だからである。だが、高橋氏は言ふ――

『今度の財界空前の大恐慌の第一原因は、政友會內閣時代の放漫政策と、資本家側の無思慮無責任な事業の濫興並びにその場限りの巨利の配當にあつた。大正九年の大反動に由る我が財界の大負傷はその惡報（！）に外ならなかつた。

（嗚呼、「一時の好況に浮かれ」て放縦にさへ流れなかつたら！…諸侯。）しかも此の惡報を見せつけられ乍ら、政府も資本家も、之に善處する（！）ことをなさず（寧ろ善處する（！）機能を失ひ）、（嗚呼、何たる怠慢！…諸侯）、却つて姑息極まる彌縫策に腐心し、（何たる不心得！）、益々病勢をして膏肓に入らしめた。』（四頁）

武藤氏は、銀行パニックを孕める我國の資本主義經濟を病體にたとへてそれに診斷を下し、『恰も吾國の財界は戰後久しい間内面に病毒が廣く蔓延して終に外部に現はれるに至つた病人のやうなものである。』といつてゐるが、此の診斷がまた完全に高橋氏のそれと一致するのである。たゞ高橋氏の診斷の方がヨリ親切で、委曲をつくしてゐる。

『我が資本家は、大正九年以來幾度かの大負傷を一時逃れの膏藥張りで彌縫し、かくして益々内訌せる膿汁の全部が色色の管を通じて銀行貸出のコゲツキとなり、銀行資産の大穴となつて伏在してゐたのであつた。』（八頁）

しかも此の病氣は、決して必然的、運命的なものではなく、たゞ然るべき時に然るべく手當をさへすれば、癒るべき筈のものであつた。で、氏は更に言ふ――

『しかして、銀行と政府とは、之れをヒタ隱しに隱すことに腐心して次の景氣の波の來る僥倖をのみ待つてゐたが、その僥倖を待ちあぐんで、否、景氣の波は此の膿汁を整理するに非ざれば、容易に來らざることを漸くに自覺して（！）その整理に着手するに至つたのが、即ち去る五十二議會に於ける震手案であつたこと已述の通りである。』（同上）

かくて、ブルジョアジーは遂に、自覺したのである！

で、たゞ、高橋氏の見解について注意すべき點は、『この惡報を見せつけられ乍ら、政府も資本家も之を善處することをなさず（寧ろ善處する機能を失ひ）、却つて姑息極まる彌縫策に腐心し、云々』といふ一節の、括弧の中の附言である。單に善處しなかつたのと、善處する機能を失つたのとでは、全事態の、現代日本における社會的意義に、絶大な差異を生ずるかも知れない。氏の論文は、題して「資本家機能の總破産」といふ。氏の論評の力點がもし、此の機能喪失の一點に存

するならば、氏の見解は、武藤氏のそれに對して正反對の極に立つものであつたかも知れない。しかるに、氏の論文を通讀する者は、氏が實際に說く所より、資本家及びブルジョア的政治家等の無能、怠慢の指摘や「糺彈」の饒舌は之れを聞くことが出來ても、如何なる意味において、彼等がその如何なる機能を喪失したのであるかは遂に之れを知り得ないのである。

また、事實において氏は、既に指摘した通り、我國のブルショアジーが、遲蒔きながら自覺したものと認めてもゐる。また、そもそも、資本家の「善處する機能」とは、如何なる機能であらうか？　それは、社會全體の利益の爲めに生産し、分配する機能であることは出來ない。何故なら、本來的に斯かる機能を缺くことこそが資本家階級の本質的特徴であることは、マルキシズムのＡＢＣが教へるからである。否な、資本家が利潤の爲めにのみ生産し、分配するといふことだけは、少くとも現代日本知識階級の常識ではあつた。此の初等的なアキショムを前提とする限り、資本家的「善處の機能」とは、既成の搾取關係をば、與へられた事情の下に、已れにとつて最も有利に維持し擴大し行く機能以外の如何なるものでもあり得ないのである。そして、さうした機能の關する限りでは、わがブルジョアジーは、空前の銀行パニックにも拘らず、尙ほ極めて健全なることを事實によつて立證してゐる。玆において、高橋氏が過日の大混亂を特徴づけて言ふところの「資本家的機能の總破産」なるものは、氏の分析批判の科學的――無産階級的――內容の空虛をかくす一片のジャーナリスト的警句に過ぎないといふことにならねばなるまい。果して然らば、氏が資本家階級に與へた「總破産」の宣告は、氏自身の指導者機能に對する宣告として、無産階級は直ちに之れを氏に返還するであらう。

社會の小ブルジョア層は、一方ではブルジョアジーのイデオロギーの影響を脫することが出來ず、しかも他方ではブルジョアジーの支配の下に晏如たり得ないところからして、それ自身の社會的地位に相應する動搖的、中間的な、特殊のイデオロギーの諸典型を、形勢の變化につれてさまざまに展示する。例へば、彼等にあつての確信の缺除、決定的鬪爭の能

力及び意志の缺除は、彼等をば、現組織の自働的崩壞、從つて現支配層の自滅と、新しき組織の自生的な成立とを希求するの心理へと導き入れる。此の自免の小さき理想家達の心眼には、資本主義的發展の一定の歴史的段階に對應するところの、ブルジョアジーとブルジョア政黨との變質は、たゞ單なる資本家の墮落、「既成」政黨の腐敗として映じ、我國資本主義の現段階の特殊性を表現するところの、かの特殊形態の恐慌は、直ちに「資本家的機能の總破産」を暴露するものとして映ずるでもあらう。そして彼等は歡呼して言ふでもあらう、——見よ、資本家とその政黨は自ら墓穴を掘りつゝあるではないか。(——かくて小ブルジョア意識は、資本主義發展が必然的に階級鬪爭とその尖鋭化とをつくり出すことを指せる此のマルクスの警句を曲用すべく、その特異の「獨創性」を發揮する——)。われらは、われらの合理的要求を、平和的手段によつてのみ達成せねばならぬ。また、達成することが出來る。隱忍せよ、自重せよ、過激に流るゝこと勿れ、特殊國日本の資本主義だけは平和に合理的に沒落するのだから。マルクスは、社會主義社會の歴史的必然性を豫言した、歴史の車輪に身をまかせ！ 等、等。

斷はつておくが、私は此の機會においていきなり、高橋龜吉氏の全思想に、小ブルジョア・イデオロギーの刻印を捺すつもりはないのである。たゞ、本論において扱へる限りにおいての氏の見解は、必ずや、その若干の熱心なる支持者をば、無産階級にではなく、小ブルジョア層に見出さねばなるまいといふ迄でのこと——。

(3) 無産階級の恐慌觀——大山郁夫氏の見解

勞農黨中央委員長大山郁夫氏の、財界混亂に關する見解の一斑は、氏が雜誌エコノミスト（六月一日號）紙上に公にせる「損失補償法と無産階級」なる一文によつて覗ふことが出來る。氏は曰ふ——

『日本の議會に寡頭金融資本の支配が反映されかけたのは、既に幾年來のことではあるが、しかし、最近になつてそれ

が一番露骨になつて來たことは、今では誰にも否めないことになつて來てゐる。我々は、從前から、日本の資本主義が、世界の資本主義の歴史的發達の最後の段階としての帝國主義の連鎖の一として、金融資本の支配の確立に急ぎつゝも、同時に慌たゞしく沒落過程を辿りつゝあるとの認識の上に立つて、我々の態度方針を決定して來た。』

そして、氏は後段において更に言ふ――

『だが、その財界の『豫想以上』の混亂は果たして、政府反對黨や左傾團體の宣傳によつて高められたところの一時的性質のパニツクに過ぎなかつたものであらうか。若しくは、それは所謂『永久恐慌』の下における產業及び金融社會に內在するあらゆる矛盾の第一次的發露ではなかつたであらうか。』

これらの言葉を含む大山氏の小篇は、字の如き小篇である上に、經濟現象としての財界混亂そのものゝ分析なり批判なりを主題とするものでもない。だが、右に引用せる諸節のうちに既に、さうした分析、批判の出發點となり、基準となるべき諸點が示されてあることを吾々は見るのである。そして、それらがまた明かに無產階級的用意と脚地とから示されてあることを見るのである。

そこには先づ、世界的資本主義體系の一環、一構成部分としての、日本資本主義の把握が見られる。次ぎには、かゝる一環としての日本資本主義が、世界資本主義現在の歴史的段階に應當して入り込みつゝある、それ自身の歴史的段階に無關心ならざる用意が見られる。そして第三には、さうした把握に出發し、且つさうした用意の下に、今回の事變をば、我國の資本主義的發展過程の現段階の一表現として觀察し、規定せんとする企てが見られるのである。そして、かゝる企てと用意と把握こそはまさに、さきに檢討せる武藤、高橋兩氏の場合には全く缺けてゐた所のものであつた。

が、吾々は、同時に、上に引用せる大山氏の諸立言のうちに直ちに幾つかの問題を見出さねばならない。

氏は、世界資本主義の一環としての、日本の資本主義は、『金融資本の支配の確立を急ぎつゝも、同時に慌たゞしく沒落

過程を辿りつゝある』と言ふ。だが、此の立言の意味を如何に具體的に解すべきであるか？　例へば、謂ふところの「慌たゞしき沒落過程」は、之れを金融資本の支配の確立の過程を通ずる過程と理解すべきか、否か？

氏は、また、今回の財界混亂は、「所謂『永久恐慌』の下における産業及び金融社會に内在するあらゆる矛盾の第一次的發露……換言すれば、それは、沒落過程を急ぎつゝある資本主義の末期的形相の尖端の現はれと見做すべきものではなかつたであらうか」と問ふ。だが、玆に銀行パニックとの直接の關聯において述べられてあるところの、沒落過程を急ぐ資本主義とは、主としてわが資本主義の經濟的地位の急速なる低下を意味するものと解すべきか、否か？

氏は、更にまた、「安定」の問題をも提起してゐる。曰く、『七億圓といふ莫大なる犧牲を民衆に强要することによつて僅かに克ち得られた「安定」が、果たして幾分なりと永續の可能性あるものとして期待し得られるものであらうか。』

で、以上において諸家の見解を吟味しつゝ拾ひ上げたる諸問題は、私が、以下において問題としやうとするものである。即ち、以下における私の試みは、我國の資本主義の安定の型、沒落の型を、いま與へられてゐる材料の許す限りにおいて論定するにある。が、かゝる論定は、必然的に、世界資本主義の動きと、その一環としての我國資本主義が過程しつつある新しき段階の特質、並びにそれが世界資本主義の全運動において演ずる特殊の役割の性質とを、如何に見るかの問題にも關聯する。この小論文の規模に比して著しく廣汎なる問題の範圍は、勢ひ、以下における私の論定をも、輪廓的、要約的なものに止どまらしめるであらう。

二　我國資本主義の安定の型

(1)　世界資本主義の相對的安定

日本資本主義は、飽くまでも世界資本主義の一環であるが故に、前者における安定の型は、後者全體としての沒落過程と、その過程内に生じたる相對的安定の現象とから引離しては全く之れを理解することが出來ない。

世界資本主義は、世界大戰から戰後、特に一九一九年から一九二一年にかけての恐慌の下に、極度の混亂に陷り、戰前資本主義の世界的中心に、レーニンの謂はゆる「直接の革命的情勢」を現出した。此の混亂の經濟的表現は、(一)生產の激減であり、(二)國際貿易の激減であり、(三)爲替相場の崩壞であつた。しかるに爾後の數年間において資本主義は、その震撼された地位を著しく改善することに成功した。それは、資本主義經濟の主要諸中心に、「直接の革命的情勢」を見ないことによつて知られる。そして經濟的には、重要商品の生產數量において、また貿易額において、世界全體としてほゞ戰前の水準が回復されやうとしてゐることに現はれてゐる。かやうな、世界資本主義の、極度の不安定狀態からの脫出、その地位の若干の改善を、吾々は資本主義の安定と呼んでゐるのである。

が、謂ふ所の安定が、絕對的な安定ではなく、相對的な安定に過ぎないこと——全體として沒落過程を辿りつゝある資本主義の一時的安定に過ぎないことは、一切の情勢に徵して明かである。(一)生產と貿易は、增加したとは言つても、五年間のあらゆる努力をもつてして漸く戰前の水準に近づいたに過ぎない。(二)その戰前水準なるものも、諸國を合計した數字であつて、米國における比例以上の增加が、歐洲諸國の犧牲において生じてゐる。(三)資本主義經濟體が健康か病的かを示す最も正確な指標の一つである爲替相場が、多少の改善はあつても、尙ほ甚だしき亂調子にある。(四)各國を襲ふ景氣不景氣の浪は互に連絡を缺き、そのおの〳〵のカアヴは狂態を呈し、小恐慌が頻發する。(五)重大な經濟的變動が、しば〳〵經濟外の諸要因——軍事的占領、階級鬪爭、政變、等——と密接に結びついてゐる。(六)主要諸國における最廣大な民衆層の窮乏化、國內市場の異常なる狹隘化と關聯して、生產機關の運用率が恐ろしく低下してゐる。(七)生產力の增大にも拘らず、失業者は減少せず、歐洲におけるその總數は六百萬人を下らない。そして此の最後の事實こそは、現在の資本主義に

特有なる有機的缺陷を最も雄辯に語るものであり、資本主義を崩壊に導くべき、強大なる能動的要因の存在を示すものでなければならない。

現在の謂はゆる安定が、かゝる内容をもつ安定に過ぎないことは、何を語るか？　それは、資本主義の今ま克服せんと力めつゝあるものが、普通の困難ではなく、異常の困難であることである。搾取關係の上に打ち樹てられ、アナアキーを本質的特徴とする資本主義は、その一定の發展段階において、遂に、生産力と市場との間の矛盾を異常に大ならしめた。此の矛盾に打克たんが爲めに、資本主義は如何なる手段を採ることが出來るか？　資本主義は、利潤を犠牲にして消費者の購買力を高めることは出來ない。市場の狹隘化によつて低下せる利潤を高めんが爲めの、産業の資本家的「合理化」の方法は、それが生産力の増加を伴ふ限り、市場の制限と衝突する。カルテルによる生産制限は、商品の價格を高めることによつて消費者の購買力を減殺する。そして利潤を維持し、引上げんとする資本家的努力は、それが失業者を生ぜしめ、從業者の搾取を強烈化せしめる限り、勞働階級の反抗を高めて階級對立を尖鋭化し、ます〳〵熾烈なる衝突に導き入れるばかりである。既に×××體驗を經たる歐州の勞働者は、現に×××な大衆結成へと急ぎつゝあるではないか。

もはや資本家的努力を超越するほどの困難として現はれてゐるところの此の矛盾は、周知の如く、世界的規模においての帝國主義戰爭によつてつくり出された。一方では資本主義社會の大衆の購買力の激減を來たさしめ、他方では植民地半植民地諸國の資本主義的發展及び解放運動を招來して、在來の市場を失はしめたものは、「資本主義最後の段階としての帝國主義」の必然の歸結なる世界戰爭であつた。掠奪的な資本主義强國間の此の致命的な衝突は、掠奪者そのものの沒落に結果した。獨逸、佛蘭西の極度の疲弊と英帝國の著しき頽勢は、贅言を要さない。それは實に世界資本主義の中心に起りつゝある現象である。だが、世界資本主義の大いなる一環が、既に、現實に崩壊したことを忘れてはならぬ。露西亞資本主義の崩壊は、しかしながら、單に一の資本主義國が退場したことを意味しない。世界資本主義、帝國主義と飽くまで

も鬪爭するとこの、社會主義國の出現を意味する。私はかつて言つた、『玆に吾々は、資本主義の全生涯史における全然新らたなる動因を有ち、全然新らたなる對立形態を見出すのである。――頽廢の資本主義と、新興の社會主義との、漸進的に尖銳化する現實の對立！　×××プロレタリアート及び被壓迫民族の國際的規模における結成及び鬪爭は、此の對立を核心として擴大し進展するであらう。が、此の事實の特殊の重要性は、勞農露西亞の地理的位置からも生ずる。一方において荒廢の歐羅巴に接する此の社會主義國家は、他方では×××な被壓迫民族の東洋に續く。』そして被壓迫民族の東洋にあつては、帝國主義日本に國境を接する支那が、いま、打倒帝國主義の民族革命に邁進しつゝあるのである。私はかつて書いた、『後期帝國主義の現段階における革命支那の歴史的意義は二重である。（一）世界資本にとつての商品市場、原料資源、乃至放資範圍としての、支那それ自身の意義、（二）民族的革命もしくは反帝國主義運動としての成功が全東洋乃至全世界の植民地及び半植民地諸國に及ぼす影響としての意義』がそれであると。（引用文は（社會科學）帝國主義號四六―四七頁より）

かやうにして、世界資本主義の烏瞰圖は、明かに、沒落の畫面を呈する。一九一四年の英國と獨逸とがいはれたやうに、いま全盛を極むるといはれる米國の資本主義は、數週前に「空前の銀行パニック」に襲はれた日本資本主義と共に、かゝる全畫面の單なる一相として、そして全沒落過程における對立抗爭の一要因として、特殊の役割を演ずるものに過ぎない。吾々は、主として日本を問題とするであらう。

(2) 各國の安定の型

前節における、資本主義の安定の特徴づけは、多くの點において、近頃「資本主義の安定と無產階級革命」を書いたブハーリンに負ふのであるが、同じ筆者は尙ほ、現在の世界經濟の構成部分たる諸國を、六つの群に分類し、（一）支那、インドネシアの如く、現に革命的情勢の下にある國、（二）チエッコ・スロヴアキア、墺太利、ポーランドの如く、或は農業國

化し、或は半ば滅亡しつゝ、窮乏的水準において或る程度まで「安定」した國、(三)獨逸、佛蘭西、伊太利の如く、資本主義的安定化と、經濟危機の克服とを、尙ほ確實にしてゐないにもせよ、各國中最も成功的に體現してゐるもの、(四)舊資本主義世界の沒落を、最も顯著に實證してゐる國、即ち英國、(五)發展しつゝある社會主義の國としての勞農聯邦諸國、——發展の反資本主義的傾向を、最も力強く、決定的、徹底的に體現する要因、そして、(六)資本主義經濟の上向のカアヴを最も明白に表現しつゝある國として米國をあげ、『此の群には尙ほ、或る程度までは日本、カナダ等が屬する』と述べてゐる。

沒落の全畫面のうちにあつても、各國はかやうに、それ〴〵に違つた安定の型を見せてゐる。從つて、均しく相對的な、一時的な安定であるにしても、その相對性、一時性にはおのづから强弱長短がなければならない。全體として、社會主義の時代への過渡を意味するところの、資本主義の沒落過程は、一直線をえがかずして波狀線をえがき、軋轢なしにスラ〳〵と進む過程ではなくて、對立、抗爭、衝突を楔機として進む過程である。そして對立、抗爭、衝突は、國內的及び國際的に、階級と階級との間に生ずるそれであると同時にまた、一のブルジョア群と他のブルジョア群との間に生ずるそれである。此の、後の一點は、重要である。けだし、例へば今まで見る如き安定の、國別の種々相は、各國の資本主義的發展における不定性、不均衡性を示し、かゝる不定と不均衡こそは、國家機關を擁する各ブルジョア群をして、對立、抗爭、衝突に陷らしめる一先要條件だからである。吾々はたゞ、此の現實の沒落過程への出立點となれる世界大戰そのものが何を前提として生じたかを想起すれば足る。

(3) 戰後日本の經濟の矛盾せる二傾向

わが日本の戰後經濟には、二つの矛盾した傾向が見られる。一方では生産と貿易との著しき增加があり、他方では際限

もない不景氣が續く。

生産の増加は次表に見るが如くまことに顯著である。

第一表　我國の重要商品の生産増加

	銑鐵（千佛頓）	鋼材（同上）	石炭（百萬頓）	生糸（百萬貫）	綿糸（百萬貫）	製紙（百萬封度）	セメント（百萬樽）
戰前（三年）	三一七	二八二	二二	三・七	八八	二〇八	三・六
戰時最高（八年）	五九五	五五二	三一	六・三	九三	九四二	六・六
大正九年	五二九	五三七	二九	五・八	七九	—	七・八
大正一〇年	四八〇	五六一	二六	六・二	八四	—	九・〇
大正一一年	五五九	六六二	二八	六・四	九八	—	一〇・八
大正一二年	五九九	八一九	二九	六・七	九一	八七三	一三・〇
大正一三年	五八五	九〇六	三〇	六・一	八九	九四一	一二・八
大正一四年	六八五	一、一〇二	三一	—	一〇九	一、〇七九	一四・五

即ち、銑鋼、石炭、生糸、綿糸、紙、セメント等、典型的商品の生産數量は、戰後一度も戰前の水準以下に下りたることなく、（一見例外をなすかの如き綿糸についてはその生産の大なる部分が支那に移されてゐるを斟酌せねばならぬ。）大正十三、四年に至つていづれも戰時の最高水準を突破し、多きは戰前の五倍、少なきも一倍半、概して二倍乃至三倍の増加を示してゐる。爾餘の重要商品中、戰前に比して生産の減少を示しをるものには原油、銅、紡船がある。が、砂糖、小麥粉、織物、陶磁器、硝子類、ゴム製品、肥料、工業藥品、等は皆な顯著なる増加を見せ、二三のものは既に戰時最高を抜き、多くはそれに近づきつゝある。

貿易の趨勢は第二表が示す。

第二表　我國輸出入貿易の發展（單位百萬圓）

	輸出	輸入	合計	出入超
戰前（三年）	五九一	五九五	一、一八六	四×
戰時最高（八年）	二、〇九八	二、一七三	四、二七二	七四×
大正九年	一、九四八	二、三三六	四、二八四	三八七×
一〇年	一、二五二	一、六一四	二、八六六	三六一×
一一年	一、六三七	一、八九〇	三、五二七	二五二×
一二年	一、四四七	一、九八二	三、四二七	五三四×
一三年	一、八〇七	二、四五三	四、二六〇	六四六×
一四年	二、三〇五	二、五七二	四、八七八	二六七×
一五年	二、〇四四	二、三七七	四、四二二	三三二×

右によつて明かなやうに、輸出入總額は、戰前には十一億圓余に過ぎざりしものが大正八年には四十二億圓を超えた。同年にはもはや七千餘萬圓の入超を見たが、それに先立つ四ケ年間に生じた十四億圓餘の出超は、我國產業における戰時好況の根因を表現するものである。が、九年恐慌を經て貿易は激減した。即ち、九年の四十二億から、十年の二十八億への墜落を見る。にも拘らず、其後の回復は比較的急速に行はれ、大正十四年には、戰時最高を超えて四十八億に達してゐる。十五年にはやゝ減退して四十四億を示すが、此の數字を以つてしても、戰前の四倍に近く、物價水準の變化を斟酌するも尙ほ二倍以上の增加を來たせるものと言ふことが出來る。輸出のみについて見るも、大正十四年の數字は、大正八年の二十億に對して二十三億を示してゐる。

尙ほ、我國の爲替相場、圓の地位は、周知の如く震災後著しく下落し、本年初頭に至つて正貨輸送點に復したが、最近の「財界混亂」を經て再びかなりの下落を見せてゐる。此の圓價カアヴの運動は、わが資本主義的安定の質をあらはす重要指標の一として後段に關說する所あるであらうが、玆では、その運動にしてからが震災に負ふ所少くない上に、既述の如

き生産及び貿易增加の大勢に即して行はれたものである點において、英佛獨等の場合と同一視し難いことを注意して置く

(4) 安定の型の積極面

生産及び貿易の數字、就中生産の數字を見ると、八年の最高水準に比較しての九年及び十年の減少は必ずしも著大なりといふことが出來ず、十一年に至つて早くも最高水準の回復に近づいてゐる。九年恐慌は、從つて、資本主義の正常の發展過程における恐慌に類するかの感をさへ與へるのである。また僅かにそれは、歐州諸國を襲つたやうな飢餓恐慌――生産の激減と同時に生じた大衆の購買力の更に甚だしき低下に起因するところの――でなかつたことは事實である。それ故にまた、そこに、謂はゆる「直接の革命的情勢」らしき何物をも見なかつたことも事實である。で、すでに、我國の資本主義が極度の不安定に落込んだことがなかつたとすれば、それからの脱出を意味するやうな「安定」の問題は初めから存在しないのであると論じ得られぬこともないかに思はれる。

だが、かゝる見解は、一國の資本主義を概念的に全く隔離することから生ずる。國々の差別相、個別態を見るのはよく、また見なくてはならぬ。が、世界の全貌面あつてこその差別相であり、個別態である。部分があつて全體があるのではない、全體があつて部分があるのである。資本主義一般としての資本主義の、安定なり、危機なり、相對的安定たりは、一定の時に、その構成部分のおの〳〵の安定なり、危機なり、相對的安定なりに、特定の形態をとらしめる。しば〳〵、一見正反對の形態をさへとらしめる。例へば、中心的な數國を飢餓恐慌が襲ひつゝある時、或る一國乃至數國は「景氣の頂點」に立つかも知れない。が、さういふさま〴〵とした矛盾こそが、全體としての危機を表象する。また、さうした景氣が資本主義一般の發達傾向に根をもつてゐる筈もない。――日本の資本主義にとつても、それが最近一二年の世界資本主義の相對的安定に基礎づけられて來てゐるといふ點において、「安定の問題」は、最も根本的な意義を有たねばならない、――從つてまた世界資本主義が相對的安定に止どまるといふ事實も。

が、同時にまた、日本の資本主義は、（一）それと資本主義一般の相對的安定に基礎づけられる以前に、他國の如き破壞を受けず、（二）生産及び貿易の減退がそれほど著大でなく、その回復が急速に行はれ、（三）經濟全體が上向線を辿り來り、尙ほ辿りつゝある點において、特異の安定の型を見せてゐることは之れを認めねばならぬ。そして、それらの事實が、更に二つの事情に負ふものなることは、改めて言ふ迄もあるまい。即ち、世界大戰における日本の特殊の地位——交戰國の一とはいへ、戰爭による生産力の破壞を受けずして却つて戰時需要に對する獨占的供給者の一として異常に生産力を増大し得たこと——と、戰後經濟において日本が依存する米國と支那と印度と南洋とが戰禍の外に立ちつゝ多かれ少なかれ購買力を増大したと同時に、日本の競爭者なる英獨その他が競爭力を失つたこと之れである。で、茲でもまた、日本の安定の型が、世界資本主義の動き、わけてもその沒落の特定の經路と密接に結びついてゐるのを見る。

だが、右にあげたる三點は、安定の型のただ一面——積極面——をあらはすに過ぎないのである。私は既に、生産増大の傾向と並行しての「際限もなき不景氣」を指摘して置いた。讀者諸君は更に最近の事變を聯想するであらう。

(5) 安定の型の消極面

生産と貿易の水準は遙かに戰時好況期の頂點を超えてゐる。だが、大衆の生活水準はそのやうに高まつてゐるか。ゐるどころではない、吾々は却つて失業群の、過剩人口の、増大を見、搾取の益々甚だしきを見る。では、資本家の利潤はどうか。その利潤は、多大の生産制限と、手厚い保護と、補助金と、かず〳〵の「救濟」とによつて、辛うじて捻出されてゐる。日本は金本位國であるか。日本銀行の紙幣は「兌換」券であるか。——??　安定は、即ち、かうした水準において得られてゐるのであつた。これが、その消極面である。そして、それは一般に「不景氣」と呼ばれてゐる。まことに、此の不景氣でさへなければ、あの「取付け騷ぎ」もあり得なかつた。

不景氣が續くのは、財界の整理が出來てゐないからだといふ。それはその通りでもあり、その通りでもない。財界の未

整理といふ事實が、不景氣の事實となつて現はれてゐるには違ひない。だが、整理が出來たからといつて、景氣が直るとは限らない。物價が下がつたからといつて、購買力が——資本家の要求する程度に——増加するとは限らない。そもく何處まで整理すれば「徹底的」であるといふのか？　また、日本の資本家企業は事實上これまでのどの恐慌の後にも「徹底的整理」などしたことはないのである。突如として今また歐州大戰が再發して軍需品の註文が殺到したとしたら、資本家にとつての景氣の問題は立處に解決されやう。——問題の本質は、資本家が自己の「採算點」において生產し得る商品の量と、それに對する購買力との關係に存する。生產力と消費力との間の深大なる不調和、市場の狹隘化の甚だしさ、そこに不景氣の本體を見なくてはならぬ。

問題は兩面から考察することが出來る。(一)我國の資本家的產業が、その既得の生產能力に相應する程度にまで市場を擴大し得ないのは、如何なる事情によるか。(二)與へられた市場、與へられた購買力に對して過剩なる生產力、過剩なる資本を「整理」することの困難の甚だしさは、何から來るか。それに對する最も一般的根本的な解答を得る爲めには、吾々は我國の資本主義經濟に生じた戰時の大膨脹と、戰後の恐慌とが、通常のものではなく、實に異常なものであつたことを想起しなければならぬ。戰時の膨脹は、字の如く急激に行はれた。その膨脹は、變態的な戰時需要に基づいてゐた。そしてその膨脹は、速度（テンポ）においてのみならず、規模において著大であつた。が、戰時需要は、日本の產業にさうした膨脹を惹起した後、俄然として消えてしまつた。日本の產業は、市場の足をさらはれた。そのことの表現が九年恐慌である。そこに生じた生產力と市場との間の矛盾は、右の二重の要因によつて異常に大なるものでなければならなかつた。それだけではない。變態的な大膨脹の結果は、我國の資本主義經濟を新段階に入らしめ、內部的變質を必至的にした。

此の點において、吾々は、我國資本主義的安定の消極面もまた、世界資本主義の動きと密接に結ばれてゐることを見落すことが出來ない。我國の九年恐慌及び爾後の不景氣は、わが戰時膨脹の基礎をなせる世界市場の、急激にもまた著大なる縮少に基づいてゐる。そしてその世界市場は、資本主義一般の「順當な發達」によつて生じたのではなく、資本主義一

殺を沒落過程に引入れたところの世界大戰がつくり出した市場であつた。言ひかへれば、此の恐慌と不景氣とは、世界戰爭と爾後の沒落とが避くべからざるものとなるほどの發展段階に達した世界資本主義の、その一環としての日本に生じてゐるのである。

此の事實が、日本の產業が既得の生產能力に相應する程度に市場を再建し、擴大し得ざる理由の大半を說明する。

世界資本主義の病態は、市場の問題を通じて、我國資本主義の安定に特殊の型を與へてゐる。既に見たやうに、英獨佛の疲弊が、日本商品に對する競爭を弱めたことは、戰後日本の貿易及び生產の增加を可能ならしめた一因である。と同時に一方、諸國の經濟的發展が甚だしく不定であり、不規則であることは、競爭能力の回復乃至新らたなる競爭者の出現を見るべき不斷の脅威となり、市場は極めて不確實である。戰時における支那の資本主義的發達は、或る種の日本商品に對する購買力の增加を來たさしめたと同時にまた、他種の商品に對する競爭力を生ぜしめたばかりでなく、直ちに革命運動へと展開することによつて市場を崩壞せしめつゝある。（如何に支那が、病的世界資本主義の危險點をなすかは前既に之れを見た）對外的產業の多くが、輸出の增進にも拘らず、生產制限を餘儀なくされるとしても不思議はあるまい。

だが、事態をことのほか、「惡化」せしめてゐるのは、かうした海外市場難が、恰も、我國資本主義が內部的變質の故にもはや海外發展によらざれば存立し難き段階に達した時に生じたことである。

以上のやうに市場の問題を論定するからには、吾々はもちろん、國內市場の「行詰り」を前提してゐるのである。失業群、過剩人口が激增し、新しくもない「人口問題」がさも新しげに擔ぎ廻されてゐるやうな時節柄に、資本家の賴みになるほどの購買力を大衆が持ち合はす筈もない。農村の購買力の減退――少くとも相對的減退――は、諸多の徵候によつて明かであるが、その數字的指標の一つは次ぎに揭げる第三表に見出される。即ち、戰前の五ケ年間――明治四四年より大正四年まで――の平均を一〇〇として物價指數をとると、九年恐慌後における一般物價の總平均は二〇五、二〇〇、二〇四といふ水準にあるのに、穀類八品の價格の平均は、一五一、一六一、一七四といふ低位に止どまり、比較的最も高い米

でさへ、一七六、一九九、一八四を示すに過ぎない。

第三表　穀類の價格と一般物價との比較

	一般物價	穀類八品	米
明治四四——大正四年平均	一〇〇	一〇〇	一〇〇
大正八年	二四二	二三八	二六四
大正一〇年	二〇五	一五六	一七六
大正一一年	二〇〇	一五一	一九九
大正一二年	二〇四	一六一	一八四

(6)　恐慌克服の過程

吾々は、さきに『資本家が一時の好況に浮かれて資本を濫投した』といふだけでは、恐慌の部分的描寫に止まり、恐慌の説明にはならないと論じた。今や吾々は、九年恐慌前の「資本の濫投」が、如何なる特定條件の下に行はれたかを調べることによつて、九年恐慌及びその延長としての不景氣がとれる特殊の形態の由つて來る所を明かにし得た。だが、それだけで、事態の全面が説明されたのではない。變態的な戰時膨脹に伴つて生じた我國資本主義の變質が、如何なる内容をもち、如何に景氣の上に作用しつゝあるかを併せ知る時にのみ、かの特異の安定の型の消極面は剩す所なく分析され、ひいては、我國資本主義の沒落の型もまた光りのもとに置かれるであらう。吾々の考察の此の部分は、與へられた市場に比して過大なる生産力として過剩資本の形をとる所のものに即して進む。

恐慌は、常に、過剩資本を强行的に處分する手段としてやつて來る。しかるに九年三月の恐慌は、主として過剩商品を處分したに止り、多くの過剩資本は甲斐なき命を長らへた。この事實を、如何に武藤氏等が「官民の彌縫策」によるもとして糺彈してをるかは、吾々の見た所である。彼等は、その彌縫策を、最近の財界混亂の原因の一であるとする。しか

るに吾々は言つた、——眞の問題は却つて、何が彌縫策を必要ならしめたかに在ると。が、何れにせよ今度の事變の重心が過剰資本の處分に存する以上、そして九年來の資本家的努力の焦點もまたそこに存した以上、我國の資本主義は尙ほ恐慌克服の過程にあると言はねばならぬ。けだし、過剰資本の整理とは、熱狂景氣のクライマックスが突如たる市場崩壊に展開すると同時に現實となるところの、生産力と市場との間の深大矛盾——恐慌現象の實體——を、取り除く爲めの手段であるから。——即ち、日本資本主義の安定は、その恐慌克服過程における安定であつた。從つて、かゝる過程に横はる諸困難の性質は、安定の質を決定する。

では、改めて問ふ、何故に「彌縫策」が必要であり、整理が困難であつたか？

理由の一は、言ふまでもなく、沒落期恐慌の異常性を反映して、處分を要する過剰資本全體が餘りにも尨大な額に上つたからである。理由の二は、戰後恐慌の特異性に對應して、過剰資本を體現する企業の多くが軍需品工業に屬したからである。かくして、戰時品生産設備を平時品生産設備に改造するの必要が、それ自身、整理の進行を遲緩ならしめたのみならず、かゝる企業の少なからぬ部分は、收益力の如何を問はず存續せしめられねばならなかつた。けだし、世界大戰の結果一變したところの、東洋における帝國主義的對立の形勢は、もはや日本をしてその軍需品の供給を英米二國に俟つことを得ざらしめ、專ら自給によらしめるからである。加ふるに、戰時に勃興せる企業の多くは、鑛業、製鐵、造船、化學工業等、謂はゆる重工業に屬するものをはじめ、概してみな高度の資本構成を有し、巨額の固定資本を要した。しかも、それらの多くがまた、必然に、有力なる資本閥に屬した。ひとたびかゝる企業に放下された資本は、たとひ收益力を失ふとも、周知の理由によつて、飽くまでも生き殘らうと努め、且つその手段にも事をかゝない。理由の三は、それである。（讀者は、例へば松方の資本を想起されよ）第四の理由としては、整理を要する資本の中に、三大財閥の一と稱された鈴木の資本の如きが含まれてゐたといふ、今や周和の事實を擧げなくてはならぬ。（尙ほ、近來、鈴木に次ぐ二三の財閥もまた危殆に瀕すると傳へられる。）

だが、吾々は、更に重要なる二つの理由を數へ得るのである。その一つは、我國の資本主義の海外發展の要求が極度の强烈さをもつに至つたことであり、他は、我國の産業資本がます／＼銀行資本と融合するに至つたことである。それらは實に、前記の諸事情と共に、各種の救濟策並びに金輸出禁止を繼續せしめた根本動因をなすものである。

搾取關係の上に立つ資本主義經濟の發展の法則として、一國におけるその發達が一定の程度に達する時、國内市場は必然にその生産力に對して狹隘となり、海外への發展が絕對的な必要となる。日本は、戰時の産業膨脹により、かゝる必要に特徴づけられる段階に跳躍的に達した。（大正五六年來の、紡績工場の急速なる支那への移植が、何よりも雄辯にそれを語る）變態的な戰時需要の下に飛躍的に發展した我が對外工業は、さうした需要の消滅した後も飽く迄もその地位を維持せねばならない。既に、産業の重點は工業に、工業の重點は對外的工業に移り、重工業の擡頭を見たからである。傳統的な保護主義、輸出促進主義は、工業の變質によつて新たなる存在理由を得た。我國輸出産業の「太宗たる」紡績業の發展の爲に、その綿花買附資金を賄ふ手段として仕へた大正六年の金輸出禁止は、たんまりとした戰時利潤の一半を、十二分の積立金として武藤氏等の事業に殘した後、武藤氏等の事業の如く容易に平時經濟に順應し得ず、また急激な物價下落に堪へ得ざる諸事業特に對外的な商工資本の利益の爲めに、武藤氏等の反對にも拘らず、戰後も尙ほ繼續されざるを得なかつたのである。此の「彌縫策」が我國資本主義の海外發展への根本衝動を表現することの疑ひないと同じやうに、該政策の施行が、ヂフレーションの阻止乃至はインフレーションの醸成によつて、「整理の進行」を妨げたことも疑ひない。それが、アーテフイシヤルな圓價カアヴをつくり出しつゝ安定の型に及ぼした影響を概括すれば、（一）過剩資本の基礎の上に生産及び貿易の增加を可能ならしめ、（二）生産力と消費力との間の矛盾を促成し、（三）過剩資本の上に過剩資本を累加することを許して整理の過程に銀行恐慌の一突起を添加させる主因の一をなしたことにある。有名な震災手形は、同じ一般的政策の特殊の現はれに過ぎない。ついでながら、震災は、恐慌克服の過程に一曲折を生ぜしめて安定の型の論定に一つの困難を添へてゐるが、安定そのものの上に及ぼせる實作用は、その消極面を色濃くするだけの、副次的、加重的作用であつ

て、安定の型を本質的に變化せしめるものではなかつた。

(7) 金融資本と金融恐慌

資本の集積が進み、資本の有機的構成が高度化して多額の固定資本を含むに至るにつれ、金融界に謂はゆる事業資金と稱せられるものの需要が増し、銀行資本はます／＼産業資本と融合して謂はゆる金融資本に轉化する。我國にあつては、戰時の生産の膨脹、大企業の發達が急激であつた如く、銀行資本の金融資本化もまた急激に行はれた。それが急激であつただけに、また九年恐慌と共に現實となつた過剩資本が尨大なものであつただけに、産業企業に融通され放下された銀行資本にして回收困難となつたものが巨額にのぼつた。この事態が、整理を困難ならしめたことは、批評家の爭つて指摘する所である。

吾々は、産業資本と銀行資本との融合、即ち金融資本化の事實と、かく融合したる資本の大なる部分が過剩資本として現はれた事實とを混同してはならない。前者は、我國の資本主義的發展の一般的歴史的傾向を體現する。しかるに、後者は、かゝる傾向の事實化が、たま／＼、異常なる戰時經濟の條件の下に生じたことに基づく特定の出來事である。銀行恐慌の批評家達は、『多額の資金を「固定」せしめるやうな「放漫な」貸附をした銀行』を、今ま頻りに責め立ててゐる。だが、總ての銀行が爭つて産業に貸附けたあの好況當時においてどの貸附が果して「放漫」であつたかは、批評家諸彦の知らないことである。また、あの戰時の熱狂景氣が、資本主義の沒落の旅の首途の賑はしさであつたことを、今でさへ信じ得ぬほどの、資本主義の恒久性の盲信者たらねばならぬ資本家達が、あの時にそれと氣附いてをりでもしたら、或は「放漫に」流れなかつたかも知れない。今ま、ブルジョア的審判の下に「不良銀行」の札を貼られてゐる者の多くは、資本家同志の鬪爭に敗れた弱者に過ぎない。破産するものは破産せしめよといふ叫び、それは弱者の死屍の上に伸び行く優勝的な金融資本の聲である。いよ／＼破綻と定まつた銀行の貸借對照表を検討して事毎に放漫呼ばはりをされるわが高橋氏な

どは、謂はゞ弱きを挫き、強きを助けるの類ひでもあらうか。——また、もちろん、もし戰時の「濫投」時代において既に寡頭金融資本による金融及び産業の統制が確立されてをり、金融資本のメカニズムが完成されてゐたのであつたら、例へば米國におけるが如く、恐慌後の整理振りもことのほか鮮やかなものであつたかも知れない。だが、巨大銀行の、さうした地位への競爭的進出は、まさに整理を機としてのみ行はれねばならないのであつた。銀行整理の至難なりし所以は、整理の必要が恰も金融資本主義への過渡段階に起つたことにある。

吾々は、前節から本節にわたり、今回の財界混亂を孕める長々しき不景氣となつて現はれたところの「整理難」の實相を見究はめることによつて、我國資本主義の安定の型を決定し居る諸力の性質を闡明しやうと試みた。そして吾々は、それらの諸力が、資本主義最後の段階としての帝國主義のエポックに避くべからざる世界戰爭より生れ出で、我國資本主義が戰時における狂的飛躍によつて突入せる新しき歴史的段階に內在する諸力となつてゐるものであることを學び得たのである。從つて、苟くも安定の型に影響するほどの財界現象にして、それらと引離して考へ得るものはない筈である。三月の六銀行破綻を序曲とする今回の金融恐慌は、我國資本主義の恐慌克服過程に生じたる恐慌として、安定の相對的性質を遺憾なく暴露した。そして、此の恐慌過程の一般的背景をなせるものは、言ふ迄もなく、金輸出禁止政策によるインフレーションと、その反動としてのデフレーションであつた。そしてまた、此の混亂をして格段に生彩あらしめたものは、金融資本への轉形に成功せずして倒れた商業資本鈴木をめぐる對立抗爭のいきさつではなかつたか。

金融資本主義——寡頭金融資本による全產業の支配——が成立つ爲めには、銀行資本の集積が進ゝ、二流以下の銀行がみな若干の一流銀行に依存し、後者の手に支配權が集中されねばならぬ。政府は戰後頻りに銀行合同をすゝめて此の傾向を促進して來た。また、金融資本主義が成り立つまでには、時代は、自由競爭の時代から獨占の時代に進んでゐねばならぬ。少數の巨大資本と、多數の小資本との力の差が著大になつてをらねばならぬ。九年恐慌後いくばくもなくそれが顯現

されて來た。整理の過程は、一面において必然的に、強大資本による劣弱資本の併呑の過程である。それは同時にまた強大資本相互間の、獨占的地位爭奪の過程でもある。整理、整理の掛け聲の曾つてなき賑しさ、——それは、九年恐慌の異常性に負ふこと勿論としても、實にまた新しき時代に優勝的な巨大資本の聲ではあつた。彼等の鬪ひは、同時に、政府傳來の古風な救濟主義に對する鬪ひをも意味し、從つて財界における政府萬能の時代の遠逝を意味し、彼等の獨立と、彼等による制覇の過程の力強き發足をも意味した。此の獨占的地位の爲めの抗爭が、今度の財界混亂の一幕の要所々々に、如何に尖鋭に、また劇的に表現されたかは、見る眼もつ者みなの見取つた所である。

三　我國資本主義の沒落の型

(1)　若干の展望

上來論じて來たところによると、日本資本主義の安定の型の特徴は、生產及び貿易の上向運動が、至難なる恐慌克服過程を通じて起りつゝあることにあると言はねばならぬ。此のことからして、生產及び貿易の增加もまた、金輸出禁止その他各種の救濟的施設に負ふところ少なくないといふ事態を呈する。しかも尙ほ、總ての重要產業部門における生產制限は著大であり、失業は漸增の傾向にある。（各カルテル公定の操短率のみでも、少きも一割、多きは五割以上にのぼる）これらすべては、生產力と市場との矛盾が如何に深大であるかを語るのみである。過剩資本の所分の必要は痛切を極める。しかるに、新しき歷史的段階に內在的なる諸力は、整理を阻碍する方向に働く。——日本は市場を求めてゐる。

現下の資本主義日本は、更に、金融恐慌から幾つかの遺產をうけてゐる——資本の集積及び集中の急速なる進行、多數中小企業の破綻、失業の增大、「七億の血稅」、等、等。資本集中の半面は、整理の進行を意味する。が、多數中小企業の破綻と、失業增大と、救濟主義が被壓迫大衆に課する負擔とは、ますます購買力を減殺する。日本は、海外に、市場を求めねばならぬ。

近き將來において、金融原因の「中間景氣」の出る可能性と、それなくして深刻化し行く不景氣の可能性との、いづれが現實となるかは、金融政策にかゝるところ多いであらう。それがもし、前者の實現に導くとすれば、もとの筋書を蒸し返へすのである。しかるにもし、後者の道を進むとすれば、その進行は更に徹底的なる産業合理化の努力に伴はれねばならない。だが、此の努力と雖も、その自身、市場の問題を解決するものではない。産業の資本家的合理化によつて達成せんと欲する利潤の高率化、――その利潤は、元來、市場の狹隘化の故に低下してゐるのである。企業の併合、技術上及び勞働編制上の改善、等の方法による生産費の切下げは、みな大量生産化を條件とする。大量生産化は、それに伴ふ市場の擴大がなければ無意味だのに、しかるに「合理化」への發足點が、市場の狹隘に存してゐる。市場の擴大は、植民地、半植民地國の「開發」を外にしては、大衆の購買力を增大することによつてのみ可能である。だが、一國の資本主義が一定の發展段階に達し、過剩人口が一定率以上に達する時、大衆の購買力はひたすらに減退――少くとも相對的減退――の一路を辿る。我國の産業資本に生じた程度の集積の基礎の上に行はれる合理化の運動は、海外發展の停頓する限り、たゞ失業者の增大を招くのみであらう。國內市場の關する限り、合理化―低原價―高購買力―高利潤―といふ定式は、資本主義の自由競爭時代にのみ適用され、獨占の時代には用をなさない。市場の問題は、「海外にかゝる。就中、支那にかゝる。――そして市場の問題が死活的である。

で、海外發展の停頓する限り、一切の情勢は、資本家の恐慌克服の努力をして、賃銀の切り下げ、勞働時間の延長、等、一口に言へば搾取の强烈化に向はしめずには置かない。勞働階級の反抗が高まる。階級的結成と强大化への損捍。

では、海外市場はどうか？　各國資本の角逐する此の方向への發展に際してもまた、搾取の强烈化は不可避的である。原料において、燃料において、技術において勝味のない日本産業は、傳來的な「勞賃の割安す」を武器とするより外はないから。――勞働階級の反抗が高まる。階級的結成と强大化への損捍。

だが、原料において、燃料において、技術において勝味がなく、しかも「勞賃の割安す」を脅かす無産階級運動に直面す

る我國の資本は、夙に一條の血路を見出してゐる。曰く、成功的な帝國主義の政策。そして此の事にかけてだけは、卽たる極東日本は二重の強味をもつてゐる。（一）強大な陸海軍、（二）世界の半植民地國支那への近接。しかも、わが金融資本の陣容は整ひつゝあるのである。が、また、救濟主義の負擔をも含む帝國主義の負擔は、ひたすらに被壓迫大衆を重壓する。——プロレタリヤと農民の反抗が高まる。二つの民衆層の協同戰線的結成への強力な擯押。

およそこれらが、我國資本主義の相對的安定の型に含まるゝ社會的意義であらうか。そして勿論それは、同時に、やがてその沒落の型に刻まれるであらう基線の一つのあらましを語るものでなければならない。

(2) 對立抗爭のうちに

安定の型の考察の直接の發展として、もし、我國の經濟的地位は低下して行くであらうかと問ふならば、それは沒落の問題の最も初等的な出し方である。吾々は、本編の序論において、大山郁夫氏の言葉をかりて此の問題を提起して置いた。そして吾々は、以上においてしば／＼、我國資本主義にとつての、海外發展の死活的重要性を極言しつゝ、既に此の問題の半ばに答へてゐるのである。

無數の可能性のうちに、二三が際立つて視界に現はれて來る。いま、支那の革命運動が思ひ切つて「右傾」して落ちついたとしやう。潑溂たる支那の資本主義的發達が、日本の商品——生產手段その他——に市場を供し、日本の資本に放資物を與へてもつて優良廉價な鐵、石炭その他の獲得を自由ならしめる。……だが、それほど「右傾」して落ちつく前に、わが日章旗が動き出さぬであらうか？　現に、動き出してゐる。反對に、最も「左傾」して落ちつくとしやう。……だが、さう落ちつく前に、わが日章旗が動き出さぬであらうか？　動き出してゐる。して、日章旗だけが動いてゐるのか？　さうではない！——で、日本資本主義の沒落の型は、概念的に隔離された「日本資本主義」の經濟過程の分析のみによつて論定し得る性質の型ではないのである。世界資本主義の沒落の全畫面を離れて、一國資本主義の沒落の型はなく、世界資本主義の沒落過程は、それの構成部分たる諸國の資本主義——（また社會主義も）——の發展の不定、不均衡、それと

共に生じてます〱尖銳化し行く對立、抗爭、衝突の過程である。現に、英帝國の沒落とは、スラ〱と一直線に、ひとりでに進んでゐる經濟過程ではない。昨年の炭坑夫罷業は何を意味する。此の大帝國が支那に於ける既得權を喪失し行く一幕は、何ケ國の資本主義と社會主義との「共演」を見せてゐるか。また、そも〱英帝國を今日の破目に陷れたところの世界戰爭の大舞臺には何ケ國が登場したか。そして當の英國資本主義の役割は何であつたか。例へば今ま東洋において、一方では米國資本の進出を阻止し、他方では英帝國の失脚を促進するといふ役割を演ずることにより、世界資本主義の沒落過程に重要一楔機たるところの一國資本主義があるとすれば、かゝる一國資本主義は、まさにさうした楔機たることのうちに、やがては、自身の沒落の型をもたねばなるまい。また、恰度、獨逸資本主義が一九〇〇年——一九一四年には顯著な上向線を描きながら、一擧にして世界資本の全安定を破壞する重要楔機であつたやうに、彼もまた似寄りの徑路によつて現エポックの相對的安定破壞の要因であるのかも知れない。

いづれにせよ、二つのことは明かなやうである。一つは、日本資本主義は、現在の安定の型の性質上、最も樂天的な發展方向を假定しても、大衆の生活水準を長期に亘つて向上せしむることはあり得まい、といふこと。そして、これは重要な事柄である。無產階級は、それを、階級鬪爭の一般戰略の一基準たらしめねばならないから。いま一つは、今のところ未だ日本資本主義は、それ自身の沒落を、經濟的地位の下向運動を、開始してはをらない、といふことである。そしてこの事は無產階級の行動綱領に一つの基準を供するものとして、劣らず重要であるであらう。——繰り返して言ふが、資本主義は、一般に、從つてまた一國においても、自動的、機械的に、また一直線に、沒落するものではない。階級と階級、ブルジョア群とブルジョア群との、對立と鬪爭と、その尖銳化が、一定の形をとることによつてのみ沒落し、崩壞する。從つてもし、日本の資本主義は「金融資本の支配の確立」の過程を通じてやがて沒落するのかと問ふ者があれば、吾々は躊躇なく然りと答へるであらう——その確立が實現すると否とは別としても。だがもし、過日の金融恐慌が直ちに我國資本主義の慌ただしき沒落——經濟的地位の急速なる低下——の證左であると說く者があれば、吾々はそれを、沒落の神話化、恐慌の童話化であるとでも言はふと思ふ。神秘主義は、浪漫主義と共に、無產階級最惡の敵である。(一九二七・六・五)

時論としての人口問題

矢內原忠雄

一

五月二十日の都下各新聞は下條內閣統計局長の談として、「昨大正十五年昭和元年中の帝國內地に於ける人口動態の確定數は發表までに今後猶一ケ月餘を要する見込であるが、今日までに調査し得たる概數について見ると出生死亡の差增たる人口の自然增加は實に九十四萬に達し、我國未曾有の大增加であつて、更に屆遲れを加へると昨年一ケ年間の人口自然增加は恐らく百萬を超ゆるであらう、自然增加のもつとも著しかつた年として注目された一昨大正十四年の八十七萬五千に比しても尙六萬五千七百を增してゐるのである、云々」との記事を揭げた。一ケ年の人口增加百萬人！　から殖えては大變だ、之は何とかせねば！と世人はまた今更の如く大きなショックを受けたことであらう。當日の東京朝日新聞は、「當面の急に迫つた人口食糧解決策、今や完全に六千萬を突破せる我が國內地の總人口」といふ標題の下に、その「何とかせねば」の方策についての意見を各方面から集めて居る。外務省の意向としては移民事務の刷新が急務であつた。農林省の意向としては食糧生產額の增加と食糧範圍の擴張、而してその第一については開墾及品種改良の外、特に新領土とも互に聯絡を保つて國民食糧の充實を計るといひ、第二の食糧範圍の擴張に關しては米麥以外の食用作物の改良增產の奬勵と共に水產物畜產物の增產を計るといふことである。商工省の意向としては「產業立國の實際化特に人力工程を多量に需要する精密工業並に加工業を發達せしめて人間消化の增大を期する外更に移民興業のみならず海上興業を隆盛ならしめ人口を海上に吸收して」人口問題解決の一助としようとす

る。人口食糧問題は政友會のお株だとばかりに、前內閣の立案したる人口食糧調査會をば現政友會內閣はその規模を更に擴大して近々開催の運びに至る見込であるが、政府當局の考では「移民産兒制限耕地增加の三者を調和して實行するより外に途はあるまいと思つてゐる」といふことである。朝日新聞は政府側の意見を之れだけ聽いて來てくれた。その上關西遊說中の後藤新平子の「他給自足主義で進め、桃太郎の鬼ヶ島征伐こそこの根本原理を敎へてゐるものではないか」との談話をば、廣島特電として報じて居る。更に「食糧よりも職業問題だ」といふ大內東大敎授の談、「イモを食へ、イモを」といふ武藤內務政務次官の氣焰などを掲げて居る。之等の當局や名士がこの新聞記事に對してどれだけの責任を取られるかは知らぬが、この一日の記事の中に我國人口增加の事實と、その對策に關する各種の見解を殆んど網羅して居ると言つてよい。而して恐らく悉く既に世人の幾度も耳にしたる論議であらう。

人口問題は決して今年の新問題ではない。大正十三年の人口自然增加が七十四萬三千人と發表せられた時も、大正十四年のそれが八十七萬五千人と發表せられた時も、世人はその實數の大なるに驚かされて人口問題の論議が頓にやかましくなつた。殊に大正十四年の人口增加が八十萬臺を突破せることが發表せられて以來、即ち昨年この方、人口問題は火急の問題として一時徹底的に世人に意識せられ、その神經を刺戟した。前內閣も人口食糧調査會の設置を決定した。雜誌といふ雜誌、論客といふ論客にして人口問題を論ぜざるものはない有樣となつた。上に述べた新聞記事の如き議論は既に何回繰返されたことであらう。イモ食は愚か、松の葉を食へば、食糧問題は消滅するとの提唱、「働け、何人も働くを妨ぐるものはない」との蘇峯氏の訓戒（昭和一新論）などから、「人口過剩の根治療法」として資本主義そのものゝ止揚を處方せらるゝ河上博士（人口問題批判）に至るまで、凡そ人間の考へ得べきほどの議論はすべて盡されたであらう。問題そのものが前からの問題であり、議論も亦盡きた樣である。私自身の人口過剩論も拙著植民政策の新基調に收められて公にせられてゐる。それ故此度中央公論記者が私に人口問題論を求められたに對して再三固辭したのであつたが、併し遂に私が負けた。

人口問題は問題として新しいものではない。併しそれは尙問題として殘れるが故にやはり新しい問題だと言へる。それは昨年の問題でありし如く又今年の問題である。甲論乙駁して一年を過ぎた。而して昨年度の人口增加百萬人と聞きて、世人はアレヨ〳〵といふ間に燃え擴がれる火の手を見るが如くに思はな

いだらうか。然り、人口問題の論議は今日尚大なる社會的意義がある。現今社會は深刻なる經濟的惱みを惱んで居る。而してこの惱みをば漠然と人口問題と結び付けて居る。或はこの惱みの中心に人口問題を置いて考へて居る。單に國內的のみならず、又國際的苦悶の中心問題を置いて考へられて居る。それ故に苟くも世の憂を憂うるの士にとりては人口問題は新しからずして而かも新しき問題たらざるを得ない。さう思つて私は又茲に筆を執つた。

二

先づ人口增加の趨勢から初めよう。

我國內地人口は明治六年（一八七三年）に約三千三百萬人、大正九年（一九二〇年）の國勢調査には五千七百九十六萬人、大正十四年（一九二五年）の國勢調査には五千九百七十三萬人であつた。之に大正十五年の增加百萬人を加へると約六千萬人といふことになる。即ち明治六年以來五十四年間に九割の增加であつた。大體六十年にして倍加すべき趨勢である。

右の人口增加の主因たる出生死亡の統計を次に調べて見よう。（第一表）

第一表　內地人口動態統計（第四十五回帝國統計年鑑による）

年次（五ヶ年間平均一年）	出生 數	出生 率（人口一千に付）	死亡 數	死亡 率（同上）	出生超過 數	出生超過 率（同上）
明治七（一八七四）―一一（一八七八）	八七四、七一七人	二五・三	六三七、五六四人	一八・四	二三七、一五三人	六・九
一二―一六	九二五、八七〇	二五・二	六七〇、九九五	一八・三	二五四、八七五	六・九
一七―二一	一、〇五六、二六三	二七・四	八〇七、三一七	二〇・九	二四八、九四五	六・五
二二―二六	一、一六五、三〇四	二八・六	八六二、〇三四	二一・一	三〇三、二七〇	七・五
二七―三一	一、二八八、二七〇	三〇・二	八七五、四七五	二〇・五	四一二、七九五	九・七
三二（一八九九）―三六（一九〇三）	一、四六一、九五一	三二・二	九三一、七五五	二〇・五	五三〇、一九六	一一・七
三七―四一	一、五一三、九四五	三一・二	九九二、三一二	二〇・五	五二〇、六三三	一〇・七
四二―大正二	一、七二九、九二五	三三・七	一、〇五二、七三五	二〇・五	六七七、一九〇	一三・四
三―七	一、八〇三、三九一	三三・六	一、二一五、二五四	二三・〇	五八八、一三七	一〇・六
八―一二	一、九六一、五四七	三四・四	一、三二二、四一一	二三・二	六三九、一三六	一一・二
大正十三年	一、九九八、五二〇	三三・八	一、二五四、九四六	二一・三	七四三、五七四	一二・六
同　十四年	二、〇八六、〇九一	三四・九	一、二一〇、七〇六	二〇・三	八七五、三八五	一四・七
同　十五年	二、一〇〇、七二〇	三四・七	一、一五一、〇七一	一九・二	九四九、六四九	一五・五

（註）大正十五年は前述下條統計局長談による。

之れによれば出生率は漸次向上して明治二七――三一年期に始めて人口千に付三十台に上り、其後若干の動搖ありたるも三十台を割ることなく、大正八――一二年期には三四、四に上つ

た。大正九年の國勢調査には三六・二、それから、漸次下つて十三年には三三・八を示したが翌十四年には三四・九、十五年には三四・七となつた。要するに出生率は大正に入つてより益々向上し、特に近年に於て著しい。而して之が絕頂であるや否や、換言すれば諸外國の例に倣ひて我國出生率も大正九年の頃を峠として既に下り坂に向ふべき趨勢にありや否やは、尙容易に斷じ難いのである。

次に死亡率は大正八——一二年期まで大體に漸增してその期には人口千に付二三・二に達した。大正九年の國勢調査の數字は二五・四であつたが、その後は漸次下り坂の趨勢である。昨年の數字一九・二は明治三十二年人口動態調査開始以來かつて見ざる低率を示せるものであつた。

我國は出生率も高く死亡率も高く、即ち多產多死の國であるが、大體出生率の方が死亡率よりもより高速度に進めるが故に出生超過率も亦高く、殊に最近數年は出生率は著しく向上せるに對し死亡率は寧ろ低下の傾向にあるを以て出生超過率は顯著に高率となり、一昨年（大正十四年）が人口千に付一四・七、昨年一五・五といふ未曾有の高率を示すに至つた。たとひ出生超過率は靜止的であつても、或は多少低下しても、人口の絕對數は尙且つ年々增大し得る。況んや我國近年の如く人口增加の趨勢に加ふるに出生超過率の高率に向ふあるに於ては、年々の人口は飛躍的に增大したのである。

第二表　歐洲人口動態統計抄

年次	出生率（人口一千に付）全歐	西歐	英	獨	伊	死亡率（同上）全歐	西歐	英	獨	伊	出生超過率（同上）全歐	西歐	英	獨	伊
一八四一—五〇	三七・九	三三・七	三二・六	三六・一		三一・〇	二六・六	二二・四	二六・八		六・九	七・一	一〇・二	九・三	
一八五一—六〇	三七・九	三三・四	三四・一	三五・三		三〇・六	二六・二	二二・二	二六・四		七・三	七・二	一二・〇	八・九	
一八六一—七〇	三八・六	三四・一	三五・四	三七・二	（註）三七・五	二九・七	二六・一	二二・五	二六・九	三〇・一	八・九	八・〇	一二・[illegible]	一〇・三	七・四
一八七一—八〇	三八・九	三四・五	三五・五	三九・一	三六・二	二九・六	二五・七	二一・四	二七・一	二五・四	九・三	八・六	一四・一	一二・〇	一〇・八
一八八一—九〇	三八・一	三三・八	三二・五	三六・八	三七・七	二七・五	二四・〇	一九・二	二五・一	二七・三	一〇・六	八・八	一三・五	一一・七	一〇・四
一八九一—一九〇〇	三七・〇	三一・四	二九・九	三六・一	三五・〇	二五・九	二二・一	一八・二	二三・二	二四・二	一一・一	九・三	一一・七	一二・九	一〇・八
一九〇一—一〇			二七・二	三二・九	三二・七			一五・四	一八・七	二一・六			一一・八	一四・二	一一・一
一九二〇			二五・五	二五・九	三一・九			一二・四	一五・一	一八・八			一三・一	一〇・八	一三・一
一九二一			二二・四	二五・三	三〇・四			一二・一	一四・〇	一七・五			一〇・三	一一・三	一二・九
一九二二			二〇・四	二三・八	三〇・二			一二・八	一四・三	一七・七			七・六	八・五	一二・五
一九二三			一九・七	二一・〇	二九・一			一一・六	一三・九	一六・五			八・一	七・一	一二・六
一九二四			一八・九	二〇・四	二八・二			一二・二	一三・三	一六・六			六・七	八・三	一一・六

（註　一八六二—一八七〇年の數字）

以上述べ來りし我國人口增加の趨勢を理解するためには之を

西歐諸國の狀態と比較して見るべきである。歐洲全體、西歐、及び特に英獨伊三國の出生率、死亡率、出生超過率の趨勢は第二表の如くである（ゾムバルト「近代資本主義第三卷」、並にHDS等による。）

まづい表だが之で大體の趨勢がわかる。即ち歐洲諸國の出生率は漸次高くなつて大體一八七〇年代（明治初年）に最高點に達し、それ以來下り坂に向いた。英國では一八七〇年代の三五・五が、獨逸では同じく一八七〇年代の三九・一が、伊太利では一八八〇年代の三七・七がその最高點であり、之等は何れも我國での高率と稱せらるゝ近年の數字（大正十四年の三四・九、十五年の三四・七）よりも尙高くあつたのである。死亡率では英國及伊太利は一八六〇年代、獨逸は七〇年代が最高であり、之れ亦我國死亡率の最高時よりも更に高率であつた。出生超過率は英國に於ては一八七〇年代、獨逸では一九〇〇年代、伊太利は世界大戰後に最高を示し、その率は略ぼ我國近年の數字に近い。明治初年から最近に至る迄の我國人口動態は大略一八四〇年代から十九世紀末二十世紀初頭に至る英獨人口動態に似て居る。人口動態の點では我國は大略二三十年を遲れて英獨の足跡を追つて來て居る樣子に見える。

出生率死亡率從つて出生超過率は主として社會的經濟的事情によりて左右せられる。例へば家族制度の社會にありては出生率は高いであらう。併し乍ら家族制度の興亡其ものが社會の經濟的諸關係によりて左右せらるゝが故に、人口狀態の變動の主因をば社會の經濟的關係に求めることが出來る。十九世紀後半西歐諸國の人口は極めて多産多死、しかも其率は漸次向上して一千八百七、八十年を以て最高に達し、殊に出生率の向上に於て著しかりしが故に出生超過率も顯著に增大して人口の急速なる增加を來たした。（一八〇〇年より一九一〇年に至る間に英國人口は四倍となり獨逸人口は二・六倍となつた）。然るにその後出生率死亡率共に低下し殊に前者に於て甚しきにより、出生超過率も亦近年顯著に低下してしまつた。（たゞ伊太利は然らず、之れ同國に於いて近年人口問題が特に喧しき所以であらう。）之等の人口動態はその社會の資本主義發展の反映として見るべきである。資本主義の興起せる社會は多數の勞働者を要求する。のみならず特に廉價なる勞働の提供を要求する。幼年及び女子の勞働を要求する。之等は社會に對し多産による人口增加を促がすものである。而して勞働の維持費に、即ち勞働者の生活費になるべく多くを支出せざらんとする資本主義的要求は社會の死亡率を高からしむるものに外ならない。勞働者の側より見れば子供を産みても幼年にして既に賃銀を獲來るが故に、之を以て子供

自身の生活費のみならず一家の生計維持の補ひと爲すとが出來る。又勞働者の團結なく生活程度低きが故に多產多死を怪まず幼者の敎育を計らず自己及び家族の生命を消耗するより外に無かつたのである。然るに千八百八九十年代に入りて事情は變化した。資本主義は所謂高度の獨占的段階に達した。機械の使用は生產關係に於て決定的となつた。總資本中不變資本部分(機械原料等)の占むる割合の增加は、可變資本部分即ち勞働人口雇傭に向けらるべき部分の相對的減少を意味する。殊に精緻なる機械の使用には女子幼兒の勞働をば適當なりとしない。資本家も亦勞働者が敎育と營養とを有するとを要求するに至つた。「或程度まで勞働條件を引上ぐることは必ずしも資本家の利益に反するものにあらず」といふ社會政策的經濟學說を生ぜしめた。機械は又獨占を生んだ。獨占は社會の需要する勞働者數を相對的に縮少せしめる。かくの如くして高度の資本主義は社會に對して高率の出生率を要求しなくなつたのである。多產多死を要求しなくなつたのである。而して勞働者の側より見れば幼兒が賃銀を獲來る機會は少なくなり、またその團結の力によりて自己及家族の生活程度の向上、その敎育と營養とを要求するに至つた。こゝに於てか多產多死の現象は勢ひ消滅せざるを得ない。されば英獨の近年に於ける出生超過率の減少は獨占資本主義が自覺せる勞働者人口の顯著なる增加を支持すること能はざるに至れる事實を反映せるものと解することは出來ないであらうか。

ひるがへつて明治初年より近年に至る我國人口の動態も亦同樣の經濟的關係に基いて說明せられる。資本主義的發展の初期に於ては勞働人口の顯著なる增加と廉價なる勞働の提供とが要求せられ、之に對して勞働者團結の微弱があつた。多產多死と出生率增加とを要求する經濟的事情は我國についても十分に見られる。一例を紡績會社について見れば如何に幼年女工が「募集」せられて行くか! 如何に親達は彼等の身賣金と仕送金とに生活費の補充を期待して居るか! 如何に彼等は病にかゝり又病弱の子供を產むか! 細井氏の「女工哀史」を讀みて見よ、多產多死製造の經濟的からくりを共處に發見し得るであらう。國際勞働會議に於て如何に熱心に我國が最低年齡勞働時間等について除外例を要求し來たりしかを思ひ見よ。多產多死は我國策であつたとも言ひ得られるであらう。

我國の資本主義も近年頓に獨占化した。又勞働組合や無產政黨も漸く興起して來た。私は近年の出生率、死亡率、出生超過率が我國現代人口の歷史に於ける最高點を示すものであるや否やを知らないが、恐らく今後遠き將來を待たずして之等は低下の趨勢を廻るものであらう。近年我國の經濟的及び社會的關係

の變遷（家族制度の崩壊など）は右の豫想をして全然獨斷的たるものとは爲さぬであらう。

國民の勞働條件を引上げ生活程度を高むるは多產多死を豫防する所以である。之に反し人口問題の對策として國民に生活程度を下げてイモを食へといひ、又低賃銀に甘んじて働け〳〵といふ議論は國民に多產多死による人口激增を奬勵するものである。論者にして若し人口激增の對策として此事を言ふならば自ら其の言ふ處を知らざるものである。讀者よ、さうではないか。

三

とにかく我國の人口は近年激增の趨勢にある。之に對する食糧の供給を如何にすべきか。所謂人口食糧問題とは要するに之に關する政策論である。

人口增加は食糧需要の增加を意味し、從て穀價騰貴し、從て資本をば食糧生產に向けしめ、かくて食糧の供給を增加する。之が資本主義經濟に於ける食糧供給の過程である。併し乍らこの過程は必ずしも自働的自然的に圓滑に進展しない。既に工業の發達せる社會に於ては農業、殊に耕地の擴張即ち開墾は最も利廻りのわるき事業に屬する。資本主義社會に於ける生產部門の不均衡は農業の比較的不進步なる點に現はれる。しかも食糧增產は社會的に必要なる事業たるが故に國營又は大なる國家的援助を以て遂行せられんとして居る。之に國家的援助を必要とするは食糧增產事業が資本誘引力に乏しきことを示す。換言すれば食糧增產に對する資本主義の相對的無力を意味するものであらう。記憶せよ、農業若くは開墾は新たに社會に植ゑられて將來の發達を期待せらるべき「幼稚產業」にはあらざることを。かくの如く農業開墾には投資を誘ふ魅力乏しきのみならず土地には面積の制限あり、又收穫遞減の法則の作用あり、之等の經濟的及び自然的理由の下に、工業化せる社會の人口增加を國內食糧によりて支持する力は漸次乏しくなる。我國內地にても米の作付反別は明治十六年の二百五十七萬九千町步より大正十四年の百十五萬三千町步に、一反步當產米高は明治二十七年乃至三十一年間の平均一石四斗より大正十四年の一石八斗九升に、一ケ年の產米總高は明治十二年乃至十六年間の平均三千八十七萬四千石より大正十四年の五千九百七十萬三千石に進んだ。人口增加に伴つてこの產米增加はあつたが、しかも米の自給自足の域はとつくに脫して從來米の輸出國たりし我國は日淸戰爭の頃よりその輸入國と轉じたのである。即ち我國の工業國化と出生率著上の傾向と米の輸入國化とは相關聯して日淸戰爭後より始まつたのである。

食糧を外部より求むるに際し先づ着目せらるゝは植民地である。內地に於ける市場の擴張は植民地の主要產業たる農業に對して大なる奬勵を與へる、國家の產業政策の主力も亦此處では農業に對して注がれる。內地食糧問題解決の聲は植民地に於ける農業の補助奬勵を以て一層愛國的政策たるものと思はせる。玆に於てか朝鮮に有名なる產米增殖計畫あり、臺灣にも桃園大圳嘉南大圳の如き大水利工事が政府保護指導の下に敢行せられる所以である。朝鮮米の內地移入は大正三年の百四萬石より大正十三年の四百六十七萬石に、臺灣米のそれは同じく六十二萬石より百八十六萬石に增加し、今後尚益々增加するであらう。但し植民地米生產及內地移入の增加が植民地社會に及ぼす變革の考察を怠つてはならない。朝鮮について言へば產米增殖と共に無產階級の增殖、米の內地移入と共に無產階級化せる鮮人勞働者の內地移入、並に鮮人食糧として米に置換えらるべき滿洲粟及外米の鮮內輸入增加の現象を見る。而して之等は何れも相關聯せる現象にして、個別的に無關係に起れるものではないのである。臺灣にては糖業の關係上朝鮮の如く產米增殖の單一政策を樹てることはあり得ないであらう。併し乍ら內地市場の擴張は大正十二年以來顯著に蓬萊米の作付反別を增加した。之は原料甘蔗の競爭作物たる關係上製糖會社に對しては一大脅威を與へたものである。故に製糖會社近年の努力は自作蔗園の擴張にある。その結果は農民の無產階級化を助長するであらう。而して臺灣米移出增加の空隙を塡補すべく外米輸入增加の傾向を漸く見んとしつつある。かくの如くであるから臺灣米及朝鮮米による內地食糧供給の政策が性急過大なる期待と計畫とを以て實行せらるる時は、爲めに之等植民地社會そのものに社會的變革を惹起しその食糧問題を深刻化するの結果を生じやう。新聞に後藤子爵談として掲げられたる桃太郎鬼ケ島征伐を根本原理とする食糧の他給自足主義とは何を意味せらるゝか私は知らないが、若し植民地を以て鬼ケ島と爲しその寶を搾取することを意味するものとせば、之れ植民地人を犧牲にして吾人の腹を肥やさんとするもの、植民地の統治を根本的にあやまるものである。植民地人といへども何時までも踏みつけられて默つて居るものではないのである。

我國は內地及植民地產米の不足を補ふため年によりて出入はあるけれども一ケ年三四百萬石の外米を輸入する。その供給地は支那、佛領印度支那、シヤム、英領印度、北米合衆國等である。供給地の範圍は必ずしも狭少ではない。關稅政策の如何によりその輸入額を增進することは困難ではないであらう。この點に關してはこゝに議論を行くことにする。

食糧供給についてはそれだけ。次に食糧範圍の擴張について一言しよう。所謂代用食及び雜食の問題である。十九世紀半の大饑饉に至る迄のアイルランド人の人口激增はその常食を小麥より馬鈴薯に轉じたることを有力なる原因とする。簡易廉價なる常食、低き生活程度は子供の維持費を少くし、從つて多産を奬勵する。貧乏人の子澤山である。且つ又イモを食ひ大豆を食ひ松の葉を食へといふことを以て人口問題を解決せんとするものは、人を松毛蟲と爲すものである。社會の進歩は生活程度の向上にあらはれる。進歩向上は人類生活の意義である。人口問題も亦人類社會の問題たる以上、生活程度の向上少くともその維持の要求を以て議論の前提としなければならぬ。我國內地の人口一人當り平均米消費高は明治二十七年乃至三十一年の期間平均一ヶ年九斗六升より大正八年乃至十二年の期間の一石一斗五升にまで向上した。國民をして再び「水呑百姓」にかへらしめんとならば、われはた何をか言はんやである。斯くの如き論者は人口問題を論ずる資格無しと言はねばならない。

四

人口を減少することによりて人口問題の解決に近づかんとする政策は産兒制限と移植民とである。

資本主義が高度に發達するに及び出生率の減少が社會的に要求せられる。之は個人の家庭に對して出生率の減少を促がす。又自覺せる民衆は生活程度の向上少くともその維持を要するが故に、此事情も亦出生率の減少を促がす。家族制度の下に於ては所謂親がかりの若夫婦なるものが多い。併乍ら社會の資本主義化と共に家族制度は崩れ、自己の家庭を自力にて支持する必要を生ずるに至るや、家庭の創設維持費を働き出し得るまで男も女も勞働に從事せざるを得ない。職業婦人の輩出する所以である。かくて結婚年齡は遲れ結婚率は減少し從つて出生率も減少する。而して結婚年齡の向上に伴ひ青年男女の性的關係の清潔を維持する爲めその精力を他に轉ぜしむることを意識的に目的として、スポーツを奬勵する論者も外國には少からぬのである。

所謂産兒制限とは早婚習慣の排斥とは異り、機械的物理的方法を用ふることによりて情慾を滿足しながらその結果を負擔せざらんと欲するものである。斯くの如き方法は隱密の間に社會に普及し、よつて出生率を減少せしめるであらう。併し乍ら國家の政策として産兒制限を採用すべきやについては左の三點を考慮するを要する。第一は右の如き意義に於ける産兒制限は道德的秩序に反しないか。第二は社會生產力を增大せしむることによりて人口問題を打開せんとする積極的努力を回避し、安價

なる消極的姑息的退嬰的なる方法に安を偷むの傾向ではないか。第三には失業を中心とする人口問題の根本的解決策たる效力を有するや否や。之等の點について疑ひある以上進步的國家が人口問題解決の第一策として採用すべきものではないと思はれる。

産兒制限と移殖民とを比較すれば後者を以てより積極的と爲さねばならない。蓋し移殖民は一國人口の排出と同時に、その勞働のより生産的なる使用、社會生産力の發展、生産物の增加を意味するが故である。併乍ら、我國移殖民の成績は之れまで如何であつたか。又今後幾何の見込みがあらうか。內地人の朝鮮居住者約四十萬人、臺灣居住者約十九萬、樺太には十五萬人である。又海外在留者（關東州を含む）は約六十三萬人である。而して每年の海外移民は再渡航者をも含めて一萬五六千人に過ぎない。每年百萬人を增加する人口に對してその緩和の實效知るべきのみ。之を獨逸の海外移民一九〇九―一九一三年の合計十一萬八千人、一九二〇―一九二四年の合計二十四萬二千人、英國の海外移民この兩期に夫々百十四萬五千人、及び百七萬人、伊太利での夫々二百三萬人と八十三萬五千人、に比較するに我國海外移民數は微々たるものである。その理由の一つは我國移民行政の不整備に求められやう。事實、英獨伊諸國に比して我國政府及民間の移民機關は甚しく不十分不熱心であり、移民の保護援助も比較的に乏しかつた。故に移民事務の刷新、移住組合の發達等によりて我國移民を若干增加せしめ得ることは必ずしも不可能ではないであらう。けれども我國移民の不振は更に移住地の閉鎖に基くこと大である。臺灣朝鮮は人口密度は內地より稍々薄いけれども資本主義的には內地人口移入の餘地は乏しい。既耕地には廉價なる勞働の供給が豐富であり、未墾地（東部臺灣の如き）は資本の誘引乏しきが故である。又外國についていへば商租問題の解決せざる限り滿洲は我國人に閉鎖せられたるものであり、米國カナダ濠洲等の邦人移民排斥は勿論、南米諸國ですら無制限に我移民を許容せんとする形勢ではない。原料分配問題と共に移民問題は今や國際間の重大問題となつた。近年の經濟的國際會議は、ローマに於ける國際移民會議を始めとして、移民自由の問題に觸れんと欲して觸るゝ能はざる立ちすくみの狀態にある。移民問題は國際的解決を促してやまない。しかも國家が資本主義的に對立する限り、その解決の幾何を平和的なる國際協調に期待し得るであらうか。移入國の立場に立つ諸國は此問題に觸るゝことをすら許さないではないか。帝國主義下に於けるこの國際的生産力の矛盾不均衡を解決せんとする力は結局戰爭に歸するのではない

か。而して軍閥及び資本家階級が最後の解決を戰爭に求むるは論理上當然なりとしても、民衆の名に於て人口問題に基因する戰爭を是認せんとするの議論をば、私共は最近我論壇に於ても見たのである。太陽四月號及び社會科學四月號に於ける帝國主義の變質に關する高橋龜吉氏の二個の論文之である。

高橋氏は人口問題に基因する戰爭をば國民戰爭と稱して帝國主義戰爭と區別し、帝國主義戰爭は資本家的利益の擁護にして無產階級の反對すべきものであるが、人口戰爭は階級を超越せる國民戰爭であるが故に無產階級の協力を必要とするものゝ如く論ぜられた。併乍ら今日人口問題は孤立せる經濟問題ではない。帝國主義戰爭は商品の販路、原料食糧の供給地、資本の輸出地等の獨占に關聯せる戰爭であるが、資本主義による人口問題の解決策は要するに商品販路原料地獲得による商工業の振興、及び輸出資本が國內に於ける勞働支持資源より脫退せる結果生じたる過剩人口の國外排出に出でない。故に現代に於て帝國主義戰爭を否認しながら、人口問題に基因する戰爭をば國民戰爭として是認せんとするは全く意味を爲さない。之を是認せんとならば資本家的國民經濟が商品及資本の獨占的輸出地、原料品の獨占的供給地を獲得してその獨立を維持せんとする戰爭をも國民戰爭として是認すべきではないか。高橋氏の說は最近の世界大戰の原因をば獨逸の人口增加に求めたる議論を想起せしめる。前揭第二表に示したる如く獨逸の出生超過率は大戰前最高潮に達した。この事實によりて大戰の發生を說明せんとするものである。併乍ら世界大戰を以て帝國主義的戰爭と見ることは恐らく識者の一致せる認識であらう。而してその戰爭の結果は戰時成金的資本家を除いて、一般民衆の甚しき苦痛であつた。富の破壞、生產力の衰頹、社會の退步であつた。戰爭の主たる當事者は戰勝國も戰敗國も一樣に戰爭の被害者であつた。人口問題の解決を戰爭にまでつき進めんとするの論者はこの歷史の體驗を記憶しなければならない。支那動亂に際して我國出兵の擧ある今日、人口問題が國民の名によりて利用せられざらん樣、吾人は特に注意を怠つてはならない。

五

我國は農業的發達の餘地も豐かならず、移植民の前途も限られたりとせば、商工業振興を以て人口問題の解決策とせねばならないとは、多數の人々の議論である。「企業と社會」誌もその意見であつた。蓋し食糧を外國より購入するについては我が工業品を賣らねばならない。又一定面積に人口を支持する經濟力は農業よりも工業に於て遙かに大である。それ故資本主義先進

國に倣ひて、我國經濟も益々商工業化せしむべきであるといふのである。がこの議論は一應尤もであるが、併し乍ら次の諸點を考慮しなければならない。

一、保護關稅と原料獨占の現狀に於て我國商工業が外國の競爭を凌駕して發展するがためには少からぬ困難がある。我國産業の競爭力の中心を低賃銀に求めんとするは今や時代錯誤の要求である。動力費は水力電氣の利用によりて節減せられ得るとしても、原料の多くはその供給を外國に仰がねばならない。人口增加は延いては國內市場の擴大を意味するであらうが、飛躍的に擴大すべき資本主義的生産を國內市場のみにて消化することは不可能である。市場を國外に求むるは益々必要となる。而して南洋支那等の開發はわが市場の擴大を意味するけれども、同時にそは他國市場の擴大でもある。激しき商品販賣戰が戰はれねばならぬ。我國事業の整理經營や技術の改良能率の增進についても餘地は多いであらうが、要するに資本主義が世界的に普及し發達せる今日、一國商工業の發展はその要求が必然的たると共にその困難も亦た必然的である。

二、商工業の高度に發達するに及びその維持し得る勞働人口數も多數となる。獨逸では一八八一年の移民數二十二萬人、一八八二年には二十萬人、その後も每年十萬人內外の移民が國外に出たが、一八九四年以後激減して來た。之は大工業化に伴ふ都市の膨脹及び勞働保險實施の結果國內の人口支持力增加したるが爲めである。商工業發達は人口需要を增加し、國內出生超過率を高め、移民出國を減じ、或は外國移民の入國を促す。併し乍ら資本は蓄積の進むに從ひその內部的構成を變化し、不變資本（機械原料等）の割合は可變資本（賃銀）の割合よりも益益大となる。換言せば機械力應用の進むに從ひ勞働者數の需要は社會總資本に對する關係に於て相對的には減少して行く。社會總資本の蓄積に伴ひ社會の勞働者需要數も總數に於ては增加するも、一定の資本が支持し得べき勞働者數は減少する。されば顯著なる人口增加を支持するには、より顯著なる資本の蓄積を必要とする。之は即ち甚だしく顯著なる商工業の振興を必要とするといふことになる。而してそのことは決して簡單容易ではないのである。

三、商工業の發展は景氣不景氣の循環によつて進行する。恐慌はその必ず經過するを要する試鍊である。不景氣に際しては事業の閉鎖縮少或は操業短縮あり、之によつて多數の失業者半失業者を生ずるのである。本年三四月の交吾人の經驗したる信用恐慌は預金者が銀行破綻のため如何に大なる打擊を受くるかを示した。併し乍ら信用恐慌は又事業界の恐慌と眞に紙一重で

ある。現に台灣銀行の融資拒絶によつて鈴木商店は崩壞したではないか。そこには社員勞働者の失業的狀態が必ず發生して居るであらう。かりに台灣銀行そのものが破綻したりとせば、之によりて資金を供給せらるゝ更に多くの企業が破綻して數團の失業者を社會に投げ出したであらう。十五銀行の破綻は川崎造船所を危境に瀕せしめ、川崎造船所にして閉鎖せんか一萬七千人の職工は一擧にして失業者と化せられるであらう。私は銀行恐慌を以て工業恐慌の原因たりとは見ない。却つて生産界の不均衡を以て銀行恐慌の原因なりと思ふものであるが、ともかく恐慌は失業者を生ずることは確かなる社會的事實である。而して産業の資本主義的發達は恐慌の原因を不可離に内藏して居るが故に、そは又失業者を準備し生産し景氣順環の一環を終る毎に之を社會に放出するものである。勿論景氣が恢復すれば又失業は消滅するであらうが、併乍ら市況の一順環毎に事業の規模は大となり、從つて失業の範圍も大となり深刻となり行く。商工業は多數の人口を支持するけれども、又多數の失業者を一時につくり出す。人口問題の解決策としては大きな穴を有するものと言はねばならない。

一體、今日わが國にて人口問題の惱みとして人々に意識せらるゝ處は食糧の不足であるか職業の不足であるか。現實に食糧の不足に苦しめる人があつても、そは社會に食糧が欠乏せるが故にあらず、食糧を購ふべき資源たる職業の欠乏がその原因たるものである。社會の脅威せられて居るのは食糧の飢饉ではなくして職業の飢饉である。就職難及び失業の脅威である。今日例へば學校卒業生の就職難に關して、どうも人間が多すぎる、人口増加が甚しきに過ぎる等の言說を聞くことがある。併し乍ら昨年二百萬人が生れて百萬人が死したりといへば、よつて生じたる人口増加は乳兒が多數であると見ねばならない。乳兒の増加を以て學校卒業生の就職難の原因と爲すことは勿論出來ない。故に人口増加を以て就職難や失業の原因と爲すは斷じて不可能である。就職難とか失業とかの社會苦の原因は人口増加とは無關係なる資本主義經濟の機構、現代産業の不景氣に求めねばならないのである。從つて又食糧の増加を以て就職失業に關する人口問題を解決せんとするは全く見當違ひである。産兒制限その他出生率の減少を以て之を解決せんとするも同じく全く見當外れである。職業の飢饉に對しては職業を與へねばならない。而して我國現代の社會苦としての人口問題は畢竟職業飢饉の問題ではないか。それ故に人口問題を憂ひ社會を之による行き詰りより救はんが爲めに調査會を設けんとならば、増加し行く人口に對して食糧供給の途を講ずると共に否それよりも更に

緊急事として增加し行く求職者に對して職業供給の道を講じなければならぬ。人口食糧問題調査會は人口食糧職業問題調査會と改むるにあらざれば、人口問題は當面の問題としても、又根本的にも解決の方向にありといふことは出來ない。

大正六七年の頃世界大戰の直後わが國經濟界の繁昌期にありては鑛山工場等の間に職工の爭奪激しく行はれ、學校卒業生も羽根の生えたるが如く賣れ行いた。當時にあつても毎年五六十萬の人口增加があつたが社會は人口問題なるものを生じなかつた。寧ろ勞働の不足に惱やんだのである。然るに現今に至りて人口問題に苦しむ所以は、人口增加が百萬人に近接せるが故ではない、經濟界の狀況一變して久しく不況に陷れるが故に外ならない。人口增加百萬人の聲は不景氣の深刻なる繼積が社會をおびやかす一外貌に外ならない。

かく言へばとて私は食糧問題を以て非現實無根據なる問題なりと爲すものではない。人口增加に對して食糧供給の途を講ずべきは當然なる必要である。併し乍らこの途は失業乃至就職難にあらはれたる最も現實的なる人口問題解決の途でないことを指摘するのみ。

食糧問題及び職業問題は人口問題の二方面である。何れも社會の重要なる問題である。社會にして苟くも發展進歩せんとならば、この問題を解決せざる限り一歩を高むることは出來ない。人口問題はスフィンクスが社會に投じたる謎である。之を解かざれば社會は破滅せしめられる。社會がその生みたる人口を支持すること能はざるに至れば、社會そのものゝ生長が止まる、而して生長の停止は社會にとりては死滅の運命に外ならない。

社會は今人口問題になやむ。その解決策として種々の提案が出された。私共も亦社會と共に此の問題を惱むが故に、之等の提案を徒に冷罵的に批評し去らんとはしない。併乍ら現代資本主義の下に於て之等の提案は幾何の實效ありや否やを檢せざるを得ない。提案そのものが提案者に向つてその實效の保障を挑む。人口問題を問題として社會は資本主義に挑んでゐる、汝は社會發展の進行を助長するものなりや否やと。若し資本主義が人口問題を解決するに無力なることを暴露するとせば、社會進化の槓杆としてのその歷史的使命は既に終焉に近づけりとせなければならない。されば此點に關して今一應人口問題對策として提案せられし諸時論を回顧して見よう。

食糧增產は人口增加に對し絕對に必要である。併乍ら資本主義はこの必要に應じて容易に資本を農業殊に開墾に投ずるや否

や。農林省の食糧問題調査要項中既に國營開墾なる一項を見る。之れ開墾による食糧増産に對し資本家的私企業の無力なることを既に暴露せるものではないか。

代用食の奬勵若くは賃銀低下の勸說は國民に生活程度の低下をすゝめるものに外ならない。之は自然の束縛の下に絕對止むを得ざることであるか。一定の社會制度の拘束の下に生じたる要求であるか。思ふに之れ資本主義が自己の存續の爲めに國民生活程度の低下を提唱し哀願せる聲であらう。換言すれば資本主義自から國民生活程度向上に對するその無力を告白せるものではないか。

產兒制限其他出生率減少の諸政策は國民の生活内容を豐かにする若干の效果はあらう。併乍ら人口增加率の減少は他面には社會生產力の減少を意味する。況んや人口數とは直接の關係なく發生する失業問題の對策としては無效である。要するに產兒制限主張の流行は現代社會がその自ら增殖する人口支持に對する無力を意味するものではないか。

移植民は一面には人口排出、他面には生產增加によりて人口問題に對して有意義である。併乍ら人口の國際的移動が不自由なる現狀は我國移植民の將來に對する一大障害である。かゝる國境閉鎖は商品移動原料供給に關する國境閉鎖と共に、資本主義的國家の對立即ち帝國主義の要求せる政策である。帝國主義は之等の問題の根本的解決策としては戰爭の外を知らない。而して戰爭は人口の殺戮富の破壞に外ならない。かくの如きが帝國主義の人口問題解決（？）策の歸趨である。

商工業の振興はある時は人口增加を需要し又ある時は人口（勞働）減少を要求す。人口を增加せしめて置いて、而して自ら之を失業者と爲す。人口問題解決策としての商工業は矛盾の增大そのものである。この景氣不景氣順環の問題を別としても、商工業は必ずしも常に多數人口を支持するものではない。そは資本家的に經營せらるゝ限り勞賃の低きことを希望する。從て鮮人勞働者の移入多くそれだけ內地勞働市場は過剩となる。又勞賃を低くせんとの資本家的希望は國內市場の購買力を小ならしむるものであり、從て國外に對する商品販路擴張に苦心せざるを得ない。其處には帝國主義的要求と之に對する大なる抵抗とが生れる。資本家的企業は更に利潤率の維持を求むるが故に屢々生產制限を行ふ。之は勞働者の職を奪ひ、且つ國民生活資料の減產を意味する。利潤率維持の資本家的要求は更に資本をば常に必ずしも國內產業に投ぜしめず屢々之を國外に投資する。國外投資は資本家にはより大なる利廻りをもたらしても、それだけ國內に於て支持せらるべき勞働者が支持せられざ

ることゝなるのである。例へば支那に於て工場を設立せんか、利益する資本家は日本人であつても、雇傭せらるゝ勞働者は日本人ではない。かくの如く商工業も資本主義的たる限り人口問題の對策としては幾多の矛盾を內藏して居るのである。

ともかく上述の諸對策が調査研究せられ相並んで實施せらるるならば若干の應急的効果はあるであらう。併し乍ら問題は外形に見はれたる處よりも遙かに深刻である。人口問題に關する社會の惱みは人口の增加とか產業の不振とかいふ表面的の問題に止まらず、「社會組織そのものに關する根本的のなやみである。資本主義社會の提出せる上述の諸對策は何れも結局資本主義の無力を告白するものに外ならない。策そのものが必ずしも無力でない。之を運用せんとする制度が資本主義的たるが故に無力である。社會は生きる。生きて生き行く。而して制度は生命の要求に適應して變遷しなければならない。資本主義制が社會人口を支持しその生產力を發展せしむるに無力となり桎梏となりたるならば、この制度は徐々にか急激にか改廢し止揚せられねばならない。社會そのものゝ生存が之を要求する。人口問題は社會のなやみであるといふのは社會がその生存形式に對して加ふる自己批判のやなみである。私は資本主義の止揚を以ても人口問題の根本的治療策たる効能ありとは思はない。土地が収獲遞減の叫ひを負擔し、人心が自我中心の貪りを主張する以上、人口問題の根治は不可能であらう。人口問題は社會制度の問題よりも更に深刻であらう。併乍ら現代社會は現代の問題を以て問題としなければならぬ。而して苟くも社會が發展し行くべきものならば、人口問題は吾人の意識せると意識せざるとを問はず社會の戶を叩いてその現在制度の改廢を促がしつゝあるのであらう。之を意識しこの爲めに活動するものが眞に社會を愛するの戰士である。(六月五日)

地方分權と農村問題

農學博士　小野武夫

はしがき

政界の一角に地方分權と云ふ聲が聞える、中央政府の政權若干を捥ぎ取つて之を地方自治體に與ふることによつて、農村住民の經濟生活が爲に緩和されると言ふのである。

地方分權を唱へる人は新しくても、地方分權の問題は古い。吾々の住む資本主義社會が今日に至るまで既に六十の年齒を重ねて居るように、吾々の治められて居る中央集權下の自治制度も最早四十年の星霜を積んで居る。私は此の小篇に於て此古くして新しき問題たる地方分權が如何に農民生活に關聯し、又何れの方向に進み行くものであるかを見ようとするのであるが、地方分權の政綱として示されたる個々の題目に就きて詳論しようとするのでは無い。私の試みようとする論辯の主流は日本の分權主體たる地方自治制の現狀を先づ確實に認識する爲に、明治維新に發源する中央集權制度の沿革及び、此中央集權より派生したる地方分權の段層體たる府縣制、郡制、及び町村制の起つた事情を稽へ、同時に此地方分權を近時の社會的大事變たる階級分裂の現象に引き較べて、兩者交渉の諸案を究め、以て眞の地方分權の運用と受益は分權自治區に於ける農民大衆の手によつてなさるべき所以を論明しようと思ふ。

一

普通に云ふ地方分權は政治權力の中央集注と相對して、政權の地方的分散の意義に解せられて居る。中央政府者の抱懷する政治意識や、其の意識より發する政治上の諸作用に對し、地方の自治團體が自ら發案行使する政權の地方的特立が、謂ふ所の

地方分權の概念である。乍去、地方分權は無論地方自治團體により其地方の政權を全く把握せらるゝものでは無い、政權全部の把持は獨立國家の場合にのみ想像せられる。

現在の地方分權は政權の地方的分屬で、中央と地方とが政治權力を分割して地方限り政權の幾分を委ぬるの謂である。語を換へて云へば、地方自治制度を基盤として組み上げられたる中央集權に對し、地方自治團體が若干の地方的立法と其の實施を容諾せられたる制度に過ぎぬ。地方分權にも時代的特色がある。封建治下の地方分權と、郡縣治下の地方分權とは其成因と實體に於て著しい差がある。封建分權は本來の地方分權の上に若干の中央集權的作用を認めたものであるのに反し、郡縣分權は中央集權其物の中より岐れ出でたものである。封建制度に在りては分權は主にして、集權は副であるけれども、郡縣制度の下では集權が主にして、分權は從である。封建分權が草深き田舍から其源を發して居るのに反し、郡縣分權は帝都の巷から流出して居る。前者は多分に土臭く後者には花の都の香がある。今日本國初以來の政治史に一瞥を拂ふならば其間中央集權と地方分權とが或は平衡を得、又は其れを失ふて、時に治まり時に亂れたる跡を見るであらう。夫の大化の改新は建國以來四方に萌生したる地方分權を薙ぎ倒して中央集權を確立したる先例であり、明治維新は大化以後一千年間に醞釀せられたる分權制度を再び前の中央集權に回復したものと觀られ得る。即ち土の文明が崩解して、都會と貨幣の文明が、明治維新後、日本全土を覆ふに至つたのである。左れど花の都の文明も糞土と泥汁が其根を培はずしては、咲き誇る枝頭の花を枯らして仕舞ふ虞があるとて、明治政府が先づ中央集權の根分けを行ひ始め、爾來之を田舍に分植しやうとする朝野の努力が、謂ふ所の地方分權の論議であり運動であるのである。

二

現代日本の農村制度の眞諦に觸れようとするには、其が近接の源流たる明治維新史に溯り、維新革命後如何なる經過を辿りて今日に及べるかを觀ねばならぬ、其れは恰も夫の現代資本主義の間近き源流が明治維新史に在ると同じであつて、其の來し方を知るによりて當面の政治全相が正視せらるゝのである。

明治維新は列藩割據なる封建的地方分權を打壞して新に郡縣的中央集權を確立したものであるが、之より先き、既に德川氏によりて打立てられたる封建制度としての中央集權が維新の招來――新中央集權制度の創立――に對して間接的に寄與するものが如何に多かつたかは、今更絮說する必要は無いが、維新と

共に樹立されたる中央集權は全く舊衣を脱ぎ棄て、新しき形式と内容の下に組み上げられたるものであつた。語を換へて言へば、藩主が地方分權主義もて自領内を統治しつゝ江戸幕府に臣從を誓ふて將軍の總監政治に服從して居たのを一擧にして改め、全國を擧げて新東京政府の中央的統轄に委することになつたのである。然も封建的地方分權は明治二年の版籍奉還によつて全く解體せられず、明治四年まで半死半生の形に於て存續し、同年七月廢藩置縣行はれ、藩知事を東京に永住せしむることゝなつてから、明治政府の集權的威力が始めて地方に徹底するようになつたのである。當時廟堂にありたる太政大臣や參議の國家統一意識が彼等の手足として働く新置の縣令を通して地方の村里に至るまでも達するようになつたのである。封建農民の眼に映ずる「お上」は其れまでは自藩の殿様であつたが、之よりして「お上」とは東京政府であり、又其地在任の縣令たるに至つた。

東京政府が新に集權政治を實施するやうになつてから、地方政治上第一に不便を感ぜられたものは、地方行政區劃たる縣や村の地域の餘りに小さいとであつた。(註一)當時の縣や村が何故に明治新政治家の眼に左程小さく見えたかと云ふに、日本全國を行政地域とする集權國家と、僅に數十、數百方里を管轄地域とする舊藩とでは、上司の政治眼に映ずる視野に廣狹の差があり、隨て其の施さるゝ政治上の規模も甚しく異らざるを得なかつたのである。封建君主たる殿様には戸數僅か五六十に過ぎざる村でも行政地域としては可成りに廣くも大きくも見えたと共に、國初以來自然的に發達し來つた村落を行政單位とすることに於て至大の便宜を見出したものであるが、今や明治新政府は「日本」を統治の目的とすることになつたのであるから、舊藩による縣や村は當時の新政治家には餘りに小さきものと考へられた。新中央政府の官吏は藩政時代の其れよりも威力と才能に於て數等優るものがあるから、官吏一人にしてよく數府倍の地域に亘りて政治し得ると思はれたのである。故に明治四年の廢藩置縣後地方制度の諸方面に改廢が行はれ、小縣を併せて新縣を置き、數村を合せて小區を置き、小區を聯ねて大區を置く等、種々の手入が矢繼早に行はれたのであるが、斯る制度上の更改は新中央集權制度の血液を流通せしむべき大小の血管を田舍地方に準備するものであつた。明治五年には名主庄屋を廢して戸長副戸長を置くことにしたが、此は制度の改造と云はんよりは、寧ろ地方役人の名前の變更である、其頃の政府者(官員)は何れも當時の流行思潮たる舊を厭ふて新を好む輩のみであつたから、「舊習一洗」の序を以て舊村役人たる庄屋名主

の稱へ方をも一擧に廢し、代ふるに戸長の名を以てしたのである。若し當時の政治家が制度の改廢は已むを得ずとしても、せめて名稱丈けなりとも、舊來の儘に之を保存したならば、大正昭和の今日でも德川時代の庄屋や名主が「フロック」を着、山高帽を冠り、赤十字徽章を胸間にぶら下げて、日本村長會議に列席して居るかも知れぬ。其れは恰も今日の英國の地方制度の部分々々が中世「マノール」時代の匂ひを貽すものがあるように、日本の地方人をしてより多く古き日本を偲ばしむる方便を與へたであらう。

村役人の名前が變更せられた上に、大區、小區と云ふ新地方制度が採用されたが、大區は後年の郡の地域と兄たり弟たるものであり、小區は後年に編成せられたる町村の地域に相當するものであつたらうが、何れにしても廢藩置縣後に於ける集權治下の地方制度は内務卿の監督を受くる縣令、縣令の下の大區長、其下の小區長、小區長の下に戸長と云ふように夫々の官員準官員があつて行政の任務に服することになつたのである。此頃の地方役人は皆村方の顏役から採用せられて官吏の待遇を受け、「何々區長申付候事」とか、又は「何村戸長申付候事」とか云ふ奉書に書いた辭令を縣令から交付せられたものである。斯の如く、其頃の村役人は一個の準官吏であつて、集權制下の農村制度としては當然の立て方であつたらうが、上は内務卿より下は戸長に至るまで、官憲政治の空氣甚だ濃厚にして、地方分權としての自治制度は未だ其芽を吹かず、村方の區長も戸長も凡て中央官吏の代辨者たることが特色であつた。注意せねばならぬことは、其頃の準官吏たる村役人は多く德川時代の舊村役人たる庄屋や名主の後身であつた、即ち德川時代の舊人が一朝にして新時代の型に嵌り、明治政府に使はれて地方行政に當ることになつたのである。此點に於ては同じ維新當時の世相でありながら、中央と地方とでは「官員」の素質に於て甚しい違ひがあつた。知識と文字を授けられざるを本則としたる德川時代の農民中、維新後に至り村役人にでも任命せられ得る丈けの才幹を有するものは唯舊庄屋や名主ばかりであつた。此舊時代の農村有識者を除いては維新後の村役人を求むべき方途は全くなかつたから、彼等舊來の有識者は維新と共に村民より推さるる儘に其袴を脱ぎ、チヨン髷を切つて集權政府の農村政治家になつたのである。田舍社會の變動が、中央政機の變革の如く、一夜にして遂げられ得るものでない理由の半面を說いて居る

一旦設置せられたる大區小區の制も實際に之を經驗して見れば、不便の點が多いとあつて廢せられ、明治十一年から郡長が

行政官として新置せられた、中世王朝時代の郡司制度が新なる形に於て復舊せられた譯である。元來明治維新は所謂「王制復古」で、封建制度を中世の太政官制に復したのであるから、維新と共に郡をも縣の下に置くべきであつたのに、却つて大區、小區と云ふ如き過渡的迂路を廻つた時、寧ろ王政復古の原則に背くものであつたとも考へられる。

斯くして其頃に於ける日本の地方制度は漸く整備せられ、縣令の下に郡長が在り、郡長の下に戸長がありて、各々其上司の命令を受けて集權國家の地方行政に當るに至つたが、地方人民に對する集權の認容たる自治制度は未だ起るべくして起り得なかつた。附言すべきは、明治十三年七月太政官布告を以て戸長に檢事の補佐役として犯罪檢擧の權利を認めたこともあるが（註二）此は地方官憲の爪牙として村役人たる戸長を司法警察官の補佐役に利用しようとしたものである。今日、學者によりては地方自治體に警察權を附與し、之をして農村に於ける各種犯罪の檢擧及び社會爭議を取締らしむべしとの說を爲すものがあるが、明治十三年の戸長に司法警察權を附與したる先例は、明治農村法制史の一面としても、興味がある。（註三）

三

新中央政府の内務卿や、縣令の眼が如何に光り輝けばとて、部下の官吏を其手足とするのみにては善政良治の實に副ふことが出來ず、中央集權は唯全國一統の大綱を握るに止り、微細なる地方政治に至ては之を田舍の自治體に委するを可なりとするに至つた。私が前に明治時代の分權制度は中央集權の胎内から流れ出でたと述べたのは、當に此頃に於ける中央政權の地方的分散傾向を指したのである。夫の明治十一年に公布せられたる府縣會規則や、區町村會議法（註四）は明治維新の原則的仕法たる中央集權に對立する地方分權的政治意識が法制化されたものである。專制と集權とを新政の樹立の原則としたる明治官僚が維新後十年にして逸くも地方自治制の必要を認めて其の規則を公布したのは政治が人民の爲の政治であり、地方小區域に關はる政治は其地方人民をして適宜に之を行はしむるを可なりとする思想からであり、即ち專制集權政府の握れる政權の一部を放ち之を地方自治體に委せしめたもので在つて、夫の慶長の昔、德川家康が將軍職宣下と同時に、在々所々の衙族を取り立てゝ村役人に命ぜよと觸出したのと等しく（註五）、川舍の根生え、土着の人民を巧に操縱し甘服せしむることにより、集權政府の治績の始めて顯はるゝことを示したもので居る。

維新後に起りたる地方分權は中央集權より分生し、其性質、

封建分權とは根本的に異るけれども尙且ツ地方分權たることに相違が無かつた。即ち何れの世、何れの時を問はず、一國の社會は地方が文化の源泉であり、農村が都會の礎石たるの事實が、時代を隔てゝ證明されて居るのである。洵に地方は——田舍は——農業なる生產機關の存在所であり、生產機能の據て動く牀床であるから、中央は地方より唯物的に制御せられ、地方の自發的又は受動的仕與によりて中央政府の動脈に新鮮の血が送られる、即ち地方の經濟的優越は往々にして中央政機を左右するとが出來、生命與奪の實權が地方に握られ居ると言はれ得る。封建時代の英雄が征夷大將軍の顯職に就きながら尙ほ地方分權を前來の儘に海の如く、山の如くに大きい形と質に於て殘したのも、今代の政治家が其與へられたる集權を以てすれば、日本の村の隅々までも官憲の光りで抑へ得る地位に在り乍から、尙且つ自治分權の名の下に地方民に媚び、地方民の舁ぐ御輿に乘りて漸くその地位を保ち得る古今の狀情は、地方の中央に對する經濟的支配力と政治牽制力の偉大さを雄辯に語るものである。

地方分權の一形態とも觀らるべき府縣會法や、町村會法が既に明治十一年に布告されたのは、其頃の社會を風靡したる夫の自由黨の民權運動の間接的効果を看過してはならぬ、自由黨員や、其壯士等が絕叫したる「自由」思想の中には人民の國政參與に加ふるに、中央政府の代行者たる地方官の專恣を抑ふべき民本自治機關の促成が含まれて居た。其頃の專制政治から脫却して自由國家の自由人たる爲には中央政府の爪牙たり、代官たる地方官——縣令——郡長——の權能を制御する必要が、民權運動家の鬪爭意識の一部を成して居つたのである。

新府縣制及び郡制は明治二十三年に、市町村制は其前年明治二十二年に夫々法律として公布せられたから、日本の自治分權組織は玆に始めて近代的形態を備ふるに至つたのであるが、其は唯形式上の完備であつて、分權精神の完美として見るべきものでは無かつた。固有日本の文化を弊履の如くに棄てゝ顧みさる當時の政府官僚は諸他の文化制度にも增して固有制度を採用しなければならないにも拘らす、府縣制にしろ、郡制にしろ市町村制にしろ、皆な西洋殊に獨逸の地方制度を其儘移し植えたとのことであるが、其餘りに西洋制度を鵜呑みにしたる結果が郡制の中に郡の多額納稅議員制とも見らるべき大地主議員制が獨逸の制度其儘取り込まれ、町村制度では德川時代の社會事實たる「村」の人格を沒却して政府手製の新町村に全く吸收せしめて仕舞つた。尤も此の郡制中の大地主議員制は其後明治三十二年改正の郡制によつて廢止せられたが、町村制度のみは大正、昭和の今日までも尙ほ存續して地方制度改革論者の標的と

せられて居る。

斯くて、明治時代に於ける日本の地方分權制度は先づ明治十一年に其萌芽を發し、明治二十二、三年度に至りて全く其形を整へたのであるが、創設當時に於ける地方制度の三段層中の郡會は日本の固有法に全く先例無きものであつた。中世以來郡は時に行政區域として、又は唯地理上の稱呼として存在し、行政區としての郡制は郡司制度以來廢滅して居つたのが、明治十一年に再興せられたるに止つて居る。されば、府縣制に於て明治十一年の先例があり、町村制が徳川時代以降明治初年に續いた自治行政の踏襲であつたのに比すれば明治二十三年創定の郡制は西洋味たつぷりの舶來制度であつたと言はれ得る。郡制實施後三十年にして郡自治制の成績擧らずとあつて、大正十年に全く廢止せられた其原因は固より一にして止らないであらふけれども、郡なる一制度に對する地方民の慣習的自覺の伴はなかつたことも成績不良の原因であつたらう。

四

地方が生産機關の存在所であり、生産機能の燃床であり、又生産從事員の住居地であり、而して又此等の生産場たることや、燃床たることや、住居所たることにより、地方が中央に對する經濟的統制力を具へ、中央政府の牽制を行ひ得るものであるからには、地方民は其一旦附與せられたる自治權を、其が本來の特質に則り眞に生産民の機能を培ひ、其生活を幸福ならしむるように運用せられねばならぬ。地方分權と生産農民とが、抱擁合縦する處に、分權企圖の眼目が在り、自治の眞味が求められる。

府縣會にしても、郡會（既に廢止せられて無いが）にしても、町村會にしても、其認められたる分權機能を行使するに當りては、分權主體の構成者たる自治代表員に於て常に其の地域に住む多數農民の生活資源を培ひ、其政治意識を充分に滿足せしむるように努めねばならぬ。然るに、今、明治維新以來行はれ來りたる分權施設の業績――府縣會、郡會の、町村會の――を觀るに、彼等は自治の客體たる被治民を全體一味に括り上げ、一視同仁てふ綱領の下に下層生産民を其下敷にしつゝ、後者の聲と動きには何等の顧慮を拂はず、專ら上層社會の政治意識に即しつゝ所謂「自治の本領」を發揮することに努めて來た。換言すれば、明治年間に於ける分權施設や、分權運動は自治區の人民に社會的隔離なく、上下分裂の起るべきことを前提とせずして行はれたのである。更に詳しく言へば、分權制度を自治化することにより、自治區住民の凡てが分權制度の恵に浴

し、其利得を謳歌するものと觀られて居た。其れは恰も夫の自由民權運動の功成るを告ぐるにより、日本國民全體が行末永く自由の福祉を享くるものと思ひ做され、其頃の自由論者や民權運動者（即ち當年の有産者）の下より後年に至り階級的分裂の誘はるべきことを彼等が意識して居なかつたのと、相似通ひたる思想の流れであるが、最近の社會現象たる資本主義制度が爛熟を告げて其方向を轉換しなければならぬ機運が顯著となり、殊に農村土地資本家たる地主と用益者たる小作人との階級分裂が目前の事實として現はれ來りたる時、古き流れの地方分權運動が果して從來の方角を辿つて行けるものであらふか。

明治初年の民權運動が憲法發布と共に存在の理由を失ひ、却つて當年の民權運動者を一員とする資本家階級の下より新興階級生れ出て、曾ては藩閥を攻擊し自由を高唱したる人々や其の子弟を「農村貴族」として「横暴地主」として其牙城に肉薄し四面楚歌裡に置くに至つたのは時代の波濤に弄ばるゝ不可避の運命と言はねばなるまいが、此の新興階級に屬する人々は此等「農村貴族」により唱へらるゝ地方分權運動をして白眼もて迎へ、餘計の御世話と看做す傾がある。地方分權運動が其熱度を加ふれば加ふる程、新興階級は却て自己の生活環境を狹められ不利と不如意を増すものとの思想を懷くに至つた。現代の國家組織の下に在りては中央集權の行使者が國貨の大部を支持すと稱する資産家階級の代辨者であるように、田舍に於ける地方分權の行使者も亦地方に於ける資産家達の代行者と看做されて居る。斯くして地方社會の經濟的搾取者が同じ自治區の被搾取者を下敷にしつゝ行ふ所の地方分權運動では、如何に其聲は大きく高くとも、大衆自治民に取りては「他人行儀」であり、不徹底の自治たるに過ぎぬのである。農村社會の階級離背が現代の事實である限り、其行はるゝ地方分權運動には必然に近き將來に於て新路が打開せられ、地方自治權を其地域内に住む實際生産員——社會經濟の給源體——の手により運用し且つ其の成果を自ら收むることは自治行政の眼目であり、分權運動の理想でなければならぬ。

五

明治中葉以降三段層を成したる地方自治體中の郡制が廢止せられたる今日では、日本の地方自治は府縣と町村の兩段層となつて居る。明治以來、日本の田舍有志の權勢慾を滿たしむる政治上の舞台としては郡會は洵に手頃のものであつた。町村長の古顔や地主の野心家が政治生活の手ほどきをしたり、又は之を地盤として府縣會、國會と順を追ふて政界に乗り出すには郡會

は恰好の練習場であつた。が、今や此郡制は廢止せられた故に當時の郡會議員たりし人々は郡を地域とする分權政治に參加ずるの機會を奪はれて頗る手持無沙汰の狀態に在る。郡制廢止後、地方の有志は方向を轉じて郡農會長や郡農會議員の選擧を爭ふことになつたが、地方的政治舞台を奪はれたる地方有志の名譽慾を滿足せしむべき場所としては今は唯郡農會あるのみである故に、彼等は近時郡農會の議席を爭ふようになつて來た。

府縣會並に町村會の自治機能と、其自治機關構成分子の社會的本質を考へ、且つ近時農村社會階級の分裂に當面し見る時、夫の某々政黨により唱へられつゝある地租委讓や知事公選は果して如何なる幸福を農民階級の何れに齎らすものであるか。

地租委讓論者は之により地方自治體たる府縣又は町村の財源を鞏固にし、地租の收入によりて其地方限りに適切なる自治施設を爲さうとするのであるが、生產當務者たる實際農民は之により如何程の利益を受くるに至るか、是迄國庫に納めたる地租を地方自治區に納入し、之を其地の財源に滿つる結果、地租納入の義務無き小自作農や小作農が何程此新分權施設の惠澤に浴するに至るかは、細民負擔の問題として觀るよりも、寧ろ之によりて得たる地租收入金を如何に農村一般に散布するか、即ち其財政歲入の使途を如何にするかにより決せらるゝ問題である。若し夫れ知事公選說に至つては、未だ一個の道聽途說たるに止つて、如何なる方法もて之を實行せんとするものであるかを知り得ざる今日、其得失を議するは聊か早計に失するかも知れないが、假りに今の公選論者が其選擧主體を今の府縣會にしようとするものならば公選せられたる知事は一に府縣會議員の意思により選擧せられるものと云はねばならぬ、公選知事が官選知事より人物技倆に於て優越なるや否やは姑く別とするも、府縣會により選擧せられたる知事が府縣會多數黨の傀儡に過ぎぬことは今日東京市を始め地方都市の市長選擧の實際に徵して覗ふことが出來る。然も公選府縣知事が府縣會議員の傀儡たるは尙忍ぶべしとするも、彼等傀儡の操り人は眞個地方の多數民を代表するものではないのである。地方大衆の政治意識を體現する機關としては彼等は旣に社會的に腐朽して居る、彼等は今や地方社會に於ける舊勢力の殘骸たるに過ぎぬ、故に彼等は地方分權の參劃者としては全く時代の置き去り者である。

日本の農村に於ける社會階級の展開は今や太陽の輝くが如くに明なる事實であるが、此社會展開の事實は旣に分權自治區の最低層たる町村會議員の素質の上に現はれて居る。社會階級の變動が社會の下層に始まり、遂に上層に及び之を枯凋せしむるように地方自治機關に於ても階級侵食は下層に始まつて居る。

上記の事實は一昨年施行の町村會議員改選に際し、小作人當選率の激增により示されて居る。

去る大正十四年に行はれたる町村會議員に小作人階級が如何に多く選出せられたかを見れば地方政界の分野の動き方が判るであらう。左表は某中央官廳が當時內密に調査したものであつて、大正十四年一月より同年七月迄に於る成績であるけれども、改選のあつた道府縣の町村總數一萬一千五百十中、九千三百三十一ヶ町村の大多數が改選を了へて居たから、部分的公表の統計ではあるけれども、之によつて農村社會が今や如何に動きつゝあるかを知るには充分に信頼の置ける貴重の資料である。

道府縣名	町村會議員定數總數	小作人側當選者總數	以上の割合%
北海道			
青森	二九四	五七	一九、四
岩手	四三六	九〇	二〇、六
宮城	一、二三二	三二二	二六、一
秋田	一、八一〇	五三〇	二九、三
山形	一六八	三二	一九、〇
福島	四二	三	七、〇
茨城	一、九三六	三五二	一八、二
栃木	四一六	七五	一八、〇
群馬	一、八五〇	三一九	一七、二
埼玉	一、七七〇	一〇五	一七、二
千葉	一、一二八	一八六	一六、五
東京	二六四	四五	一七、〇
神奈川	六八八	八六	一二、五
新潟	一、〇三一	二五七	二四、九
富山	七三五	一六九	二三、〇
石川	四一八	八九	二一、三
福井	四一二	四二	一〇、二
山梨	一、九五六	七二九	三七、三
長野	三、三五九	八八五	二六、三
岐阜	四七二	一〇八	二二、九
靜岡	一、五九六	二四七	一五、五
愛知	一八	一〇	五五、六
三重	一、一四八	二七一	二三、六
滋賀	五六二	九九	一七、六
京都	一、三一二	二五四	一九、四
大阪	一、一八九	二四〇	二〇、二
兵庫	二、五二四	四七六	一八、九
奈良	七八二	一三〇	一六、六
和歌山	一、〇〇六	一八〇	一七、九
鳥取	二四	七	二九、二
島根	八七八	一七二	一九、六
岡山	二、四三一	五五五	二二、八
廣島	一、三一六	一六一	一九、八
山口	六三六	七七	一二、一

德島	—	—	—
香川	—	—	—
愛媛	三六	一六	四四、四
高知	三七〇	一一二	三〇、三
福岡	一、三四二	二九一	二一、七
佐賀	九〇	一五	一六、七
長崎	一、一一四	二二二	一九、九
熊本	一、七二一	三〇三	一七、六
大分	八〇四	一四六	一八、二
宮崎	七〇八	一四一	一九、九
鹿兒島	七〇二	一五五	二二、一
沖繩	—	—	—
計	四二、七三八	九、〇六一	二一、二

見よ、四萬二千七百三十八人の新町村會議員中、九千六十一人、即ち議員數の二十一「パーセント」二分が小作階級より選出せられて、農村自治政治の基礎を築き上げようとして居るでは無いか。竟、先年までは町村會議員と云へば先づ村の顏役の物持と相場が極つて居つたのに、今や智能と活動の外何物も持たない小作人が百人中に二十二人の多數を制するに至つたのであるから、次期の選擧に於ける小作人の實勢力は更に增加するであらう。農村變異の徵候は澟然として居る。

斯くて最低自治階級たる町村會の議員に今や二割以上の小作分子が決議の機會を與へらるるようになつた、彼等新興社會の代表議員は舊社會の代表者のように水肥りには肥つてゐないが、奮發進興の元氣が內に漲つてゐる、其身は瘦薄なれども社會生產の當務者としては實際の勞營に堪え、横斷的大衆同胞の精神的支持を受けて選み出されたものである。彼等の中には五反百姓がある、馬車挽がある、髮床屋がある。が、何れも自治區勞營農民の心を以て心とする眞の意味に於ける選良である。故に今、地方分權の一業目として知事公選が果して實行せらるるとせば、其選擧主體が府縣會であれ、又は複選制による場合であれ、其が此新興社會階級の意圖により公選せられたものであるならば、從來の官選知事よりも、一層地方的にして社會的實情に觸れたものと言はれようけれども、然らざる場合の公選知事ならば、既往にも增して「我等の知事」たる本質から遙に遠いものであらう。

六

明治時代に於ける地方分權は當時の中央集權政府を根城として岐れ出てたる政權の地方的分散である丈け、夫の德川氏が既存嚴在の分權國——藩——の上に封建的操作を以て集權政治を

施したのとは、其の成立の動機順序に於て霄壤の差がある。德川時代の封建制度は云はゞ分權的集權制であり、之を倒して樹てられたる明治新政府は最初より中央集權を原則としたものであるから、其實質は集權的分權制とも云へるものであつた丈け、其れ丈け地方自治體が中央集權政府の拘束を受くる場合が多かつた故に、地方人民は成るべく此の集權政府の拘束力を弛むる爲め、中央集權力に喰ひ込んで、政權分散を行はふとしたのが、即ち明治以後に於ける地方分權運動であつたのであるが、此の分權運動に於ては、其處に必然に、各地方に於ける人民が地域的に團結して一緒に並進することが要求された。然も明治中葉明に於ける日本の社會は未だ階級分裂の徴兆をだに示さず、下層階級は何時までも上層階級に踏まれながら、勞働を棒げて其經濟生活を支持するものと思はれたから、地方人を一團と看做して行はるゝ分權運動の中に內輪揉めのあるべきことを氣附かなかつたのであるが、其後同じ地域內に住む人民中に階級的離背を來し、上下の睨み合が益々甚しからんとする日となつては、在來の地方分權運動は單に舊社會を本陣とする一部人士の業と見られ、隨つて其問題に對する政治的重要性が大衆に認められないことになるのは自然の數である。

明治二十三年に創設せられたる郡制が大正十年に廢止せられて地方自治の三層組織——府縣——郡——町村——の一層が缺如し、今や二層組織に革められて居るが、此郡制を廢止したるに就ての理解は姑く問はずとするも、郡を廢止すると共に、爾他の自治組織の上にも相當の改廢が行はるべきであつたのに、單に郡制丈けをぽつりんと取り除いたから、其處に種々なる制度上の缺陷を暴露するに至つたのである、分權機體の中段丈けを取り去つて上段と下段を其儘依存したから、上段は餘りに高く、下段は上段に結び付き惡いと云ふのが郡制廢止後に於ける農村自治の實狀である。

現在の系統農會は其の創設當時（明治二十七年）に於ける行政組織に倣ふて中央——府縣——郡——町村——農會と云ふように四層制度に組み立てられたのであるが、今や地方制度中の郡制が廢止せられたので、曾て郡に倣ひて設けられ、郡の附儲的地位に在りたる郡農會を維持するの途に窮し、之を廢止すべきか、存續すべきかの論が鬪はれて居るが、之は自治制度の一部的變革が其れを並立的地位に在りたる農業團體に影響し其存立を危くしたる著例である

眞の意味に於ける地方分權は地方人民が地域的に團結すると共に社會的に融和したる自治主體により行使せられて、一方に

は中央集權の政治作用に代位すると共に、他方に於ては夫れの自治階級に於て地方官憲を制御し得るもので無ければならぬ。此見地に立ちて現在自治制を觀察する時、其處に少からぬ制度並に素質上の缺陷の潜むことに氣附くのである。近年の如くに田舍の交通大に開け、鐵道電車は云はずもあれ、自働車、自轉車が縱橫に走る時代となつては、地方自治區の如きも之を擴大して二段組織として充分であらうが、今の如く府縣の下に直に舊町村を自治區として附屬せしむるに就ては尙ほ攷究の餘地が大に在る。今の町村制に代ふるに舊郡制を復活し、郡制の下に今の大字部落を活かして附屬せしめ、以て縣、郡二段の自治區に於て地方民の分權的活動を期するも一法であらう。（註六）

之を要するに、今や日本の農村社會は小作擡頭てふ一大事實を核心とし、異常なる速さを以て轉回しつゝあるから、數十年前に唱へられたる民權運動の連枝なるかに見ゆる地方分權運動は其質に於て、歩みに於て變更せらるべき時代的要求に迫られて居ると共に、分權主體たる自治區を府縣本位にすべき乎又は府縣の下に中自治區を設け、今の町村を之に包含せしむるかして、分權政治を夫々の自治主體に配分して農民大衆の幸福を增すべき要求が地方政界に提示されて居る。而して最近の事實たる町村會に對する小作分子の多數侵入は軈て他日行はるべき府縣會議員選擧にも其の勢力を延ばすことであらう。果して然りとすれば、新しき問題にして然も古き題目たる地方分權諸問題の如きも分權主體の整理をしつゝ今姑く實施を急がず、時代の推移を眺むるが賢明の策ではあるまいか。（完）

附註

（一）明治初年に於ける府縣は舊直轄地又は舊藩を其儘に改稱したから其地域は甚狹かつた、例へば東京には品川縣、小菅縣があり、京都には淀縣、龜岡縣、園部縣、綾部縣があつた。

（二）山縣有朋「維新以來町村沿革」六十四頁參照

（三）横井農學博士は其著「農村制度の改造」五十四頁に於て町村長に警察權を附與すべしとの說を立てられて居るが、同時に又博士は其主宰に係る「農民」紙上に於ても現在の小作爭議は農村警察權によりて之を取締るべしとの說を立てられて居る。

（四）清浦奎吾「明治法制史」百十一頁及百二十七頁參照

（五）德川百箇條參照

（六）郡の代りに郷を置き、郷の下に今の大字を邑として屬せしめ、以て今日の町村制の代りに郷邑制を起し、地方分權の實行主體を此郷に置くべしとは、横井博士が前顯「農村制度の改造」に於て力說せらるゝ處である。

濱口雄幸論

馬場恒吾

政黨首領の行く途には多くの陷穽がある。其陷穽に落ちれば再び浮び上る事は出來ず、それを避けて通れば首領たる地位を踏み外す。過去の政黨首領が政黨首領としては大抵悲慘な末路を遂げた事實が其動かすべからざる證據として殘つてゐる。

其陷穽は黨費を作る義務である。數百萬圓に上る總選擧資金は天から降らず、地から湧かず。そして絕對絕命それを作らねばならぬと云ふ場合、黨首は一身を犧牲にして後暗い事をするか、然らずんば逃出すかの二つの方法しかない。何れを擇ぶにしても其末路を悲慘なる運命に決定する。

濱口雄幸氏が黨首になつた。それを祝すべき乎、同情すべき乎、私は判斷に迷ふ。彼れが黨首として擧げられる前に、彼れの親友は憲政會の領袖株の安達、町田、江木などと云ふ連中に向つて、濱口を殺ろす積りならば黨首にせよ、最少し活かす積りならば、黨首にする事絕對罷りならぬと云ふ強硬な談判をした。それは黨首の末路悲慘と云ふ事を達觀してゞはあるまい。濱口氏は今年の春流感にかゝつた。今年の流感はどの醫者も云ふ如く、後の疲れが容易に治らない。濱口氏の場合もさうであつた。彼れの友人等は一流の醫者に賴んで嚴密な健康診斷をやらした。別に心配する病氣はなんにもない。只流感の疲れが治らないと云ふ事であつた。それで彼れは熱海、鎌倉に靜養してゐたのであつたが、議會中のゴタ〳〵の爲めに、靜養中途にして歸つて來た。今後も三四月の靜養は絕對に必要だと云ふ事であつた。

彼れの友人の談判を受けた三人は意見が一致しなかつた。併し濱口が黨首になる事を絕對に拒絕するならば、矢張若槻に黨首になつて貰うより外に途はないと云ふので、再び若槻氏に向

つて黨首たれと云ふ談判を持ち込んだ。それは臨時議會後の事である。其時分の若槻氏の云つた語に、『自分は新政黨の黨首には絶對にならん、併しさう自分の我儘ばかりは云はれぬ』と云ふ節があつた。其意味を何方に取つてよいかは憲政會領袖にも判らなかつた。或者は黨首になる意志があると了解し、或者は絶對にないものと了解した。そして新政黨の結黨式數日前迄其押問答があつて、結局若槻氏は絶對に辭すると云ふ事になり、濱口氏は二三月靜養してもよいと云ふ條件で黨首になつた。濱口氏が留守の間は憲政會の方は若槻氏が世話をし、政友本黨は床次氏が世話をすると云ふ事になつてゐる。尤も今は憲政會も本黨もなく、一つの立憲民政黨となつてゐるのだけれども、それが充分に融合する迄は、かうした區別が必要なのであらう。

若槻氏は何故黨首として殘る事を拒絶したか。私は若槻氏に直接其事を聞いた事がある。すると氏は、何故黨首にならなかつた。それは判り切つてゐるではないか、今更何故と云ふ質問をするものがあるものかと云ふのであつた。併し私には少しも判り切つてゐなかつた。

私は初め若槻氏は黨の總裁として莫大な金を拵しらへるのを厭がつて逃げたのではないかと疑つた。併しそれは事實でなかつた。其間の事情をよく知つてゐる者は私に云つた。さう疑ふのは若槻に可愛想だ。彼れは黨の總裁であらうが、あるまいが、出來る丈けの心配はすると覺悟を決めてゐると。憲政會に關係のある外の人は、若槻は次ぎの總選擧の費用を拵へる義務がある。それは一度總理大臣になつたからだと云ふ。

總裁を辭しても金を拵しらへる義務が殘るとすれば、總裁を辭した理由は金の問題ではない。然らば若槻氏は何故總裁を辭した乎。此問題に正確なる解釋を求めんとして、私が諸方へ當つて見た。其結果はかうである。若槻氏は初めは必ずしも總裁を辭する積りはなかつた。併し臨時議會と其後に、憲政會内に若槻ではいかぬ。濱口の方がよいと云ふ聲が高まつた。それは黨員から見て、若槻には大した金が出來さうにない。濱口なら出來ると思はれたからである。此空氣を見て取つて、若槻氏は總裁を辭したのである。

かうした期待を懸けられて、濱口氏が民政黨の總裁になつたとすれば、それは彼に採つて大なる犧牲でなければならぬ。何となれば其期待を滿足せしめるには彼れの人物は餘りに純眞であり、彼れの性情は餘りに殊勝であるからだ。

濱口總裁は云つて居る。來年の總選擧は初めての普通選擧だ。それがどう云ふ風に行はれるかは後々の例になる。これはどうしても金なしの選擧を行はねばならぬ。若し腐敗墮落した

選擧の備を作るやうな事があつたら、其罪は子孫に迄も及ぶ。殊に若槻や自分に金を作れと云つたつてそれは無理だと。

吾々は既成政黨の何れもが金なしで選擧に臨んで與れる事を切望する。選擧が金の競爭である間は、政治は有産階級の遊戯に過ぎぬ。そして無産階級は浮ぶ瀬はない。だから濱口氏の理想が實行されんことを希望する。併しそれで彼の率ゆる黨員が滿足するであらうか。若槻氏を捨てゝ、濱口氏を推した黨員は決して金なしの選擧を考へてゐない。其所で濱口氏が如何なる程度迄、金なしの選擧と云ふ立場に頑張り得るかと云ふ事が問題になる。それは彼れの性格の問題である。彼れの政治家としての生ひ立ちから研究する必要がある。

彼れは學生の時から政治家になると決心してゐた。今から三十八年前は京都の第三高等中學校の生徒であつた。土佐人の饒舌に似ず、彼れは極端に無口であつた。友人が『貴樣がそんな無口でどうして演説が出來る。政治家になるのはよせ』と云つて忠告した。併し彼れは一度も政治家になると云う決心を動さなかつた。今では彼れは議會に於ける一流の雄辯家である。只立板に水を流すと云ふ雄辯でなく、其聲に沈痛な底力が籠つて、其莊重さに一種云ふべからざる味のある雄辯である。其云ふ事に無駄口のないのがさうした感じを與へると同時に、聞く者をして、彼れは嘘を云つてゐるのではないと云ふ感じを起さしめる。彼れが民政黨總裁になつた挨拶に田中政友會總裁を訪ねた後で、田中總裁が『濱口君は正直でいゝ人だ』と云つたのは、世人一般が云はんと欲する處を云つて與れたやうな氣がする。

濱口氏は今は雄辯家である。けれども、彼れ自身の自白によると、彼れが大正四年に初めて選擧を爭ふ爲めに、初めての演説を高知でやつた時は實にまづかつたと云ふ。それで自分は演説を稽古しなければならぬと思つて、勉めて地方演説に出掛けた。加藤高明伯、尾崎行雄氏などと一緒に屢々演壇に立つた。二度も喉を破つた。それで漸く今のやうな聲が出るやうになつたのだと。

彼れの流儀はそれである。何日も計畫を立て奮闘努力する。そして努力の結果立派に目的を達すると云ふ風である。

學校に居るとき彼れは書が下手であつた。所ろが一夏、學校の休暇の間に文徴明を一生懸命に習つた。暑中休暇が濟んで、九月に學校に歸つたときは、皆んなが吃驚するほど立派な字を書いたのである。

彼れは默々として勉強した。高等中學ではいつも首席、大學

では今の小野塚喜平次博士と首席を爭つた。同級生としては伊澤多喜男、幣原喜重郎、勝田主計、下岡忠治などの有名な明治二十八年卒業生が居る。

彼れが奮闘努力を以て一つの信條としてゐることは、彼れが大臣になつた後に高知の學生に向つて演説してゐる。曰く『而しながら玆に注意を要する事は、努力奮闘すれば大概の事は出來ると申したけれども、努力奮闘しなければ何事も出來ないと云ふ事である。人間の生活は山又山、第一の手前の低い山を越へてしまつたならば、後は平坦だと思つたら大變な間違ひである。其越へた先きの山は前よりも遙かに高く、其先きの山は尚高い。

又曰く『私は常に申します、人間が世の中に處して進む所の情況と云ふものは、恰もステーションの改札口と同樣であります。東京、大阪邊りの大きなステーションの中の改札口は行列を作つて順々に切符を切る。夫れは却々手間がとれます、面倒であると云つて横合から切符を切りに行かうとして、一度行列を離れて仕舞ふと最早還入れない。即ち落伍者となる。急いでは不可ない。辛棒が第一である』

此强い意志は彼れの容貌にも現はれてゐる。彼れはライオンと云ふ綽名を有つ。それは彼れの顏を形容したものであらう。これには一つの逸話がある。

彼れが京都の學生であつた時分、或學生は日曜に比叡山に登る目的で下宿を出掛けた。すると山の麓に差しかゝつた時、山賊に逢つたと云つて、顏色を變へて歸つて來た。翌日皆んな學校に集つたとき、其學生は昨日の山賊が學校に來てゐると云つて騷ぎ出した。そして其學生の指す所に濱口氏が悠々として散步をしてゐたのである。

これは濱口氏の學友の直話である。髮を蓬々と生やし、筒袖の和服で、比叡山の麓を散步してゐた濱口氏は、其ライオンに似た顏の爲めに山賊と間違へられたのである。併し其恐ろし相な顏に似合はず、彼れは優しい心を有つてゐる。彼れが高知で學生に演説したときに、彼れはかう云つた。

『さう申しますと云ふと、或は濱口と云ふ男は頭が非常に古いと斯う御批評になるかも知れません。宜敷い、古いと云はれる事を以て、私は名譽と心得る。………五十年の生活に於て種種の經驗を私は經て居ります。種々の目に遭つて居りますが、未だ嘗て大廟參拜、御陵參拜の時に私が體驗したが如き、あの樣に敬虔なる嚴肅なる感情と云ふものを自覺した事はないのであります。伊勢大廟に參拜致した時には知らず識らず自分の下腹が据へると云、腰を据へるのであります。此自然の頭が自然

に下ると云ふ事を覺へるのであります。胸中何んとも名狀し難い處の敬虔なる嚴肅なる感情が恰も泉の如く涌き出でる。兩眼は涙を以て潤ふたのであります。初めての經驗であります。續いて京都の桃山御陵に參拜致した時に於ても、全く伊勢大廟と同樣の體驗を得たのであります。自から考へて其何の故であるかと云ふ事を知らない。』

外の人ならば、さう思つてもさう云はなかつたであらう。或はさう思はなくつても、さう云つたであらう。濱口氏の場合は、感極まつて語足らずとさへ思はしめる。彼れがライオンの如き顏に關らず、情に脆いと云はれるのは其爲めである。

かうした性格の人が、現代の政黨首領として『金なしの選擧』と云ふ原則を突つ張り得る乎、否乎、それを吾々は研究せんと思ふ。

憲政會の連中は濱口氏をたのみ甲斐のある首領だと云ふ事に議論が一致してゐる。蓋しさうした感情は世間一般に懷いてゐる所であらう。今年春の議會で、震災手形案の審議が縺れて財界が動搖したとき、世間は濱口が大藏に居たならば、こんなことはあるまいと云つた。濱口氏自身は『それは片岡君(其時の大藏大臣)に氣の毒だ。片岡君は一生懸命に勤めた』のだと云つて居る。併し其所に大藏大臣と云ふ職務には特別な性質が伴つてゐる。大藏大臣と云ふのは銀行と同じく、內容がよいと共に、信用が伴はなければならぬ。如何に內容がよくとも、信用が欠ければ銀行は取付けられる。濱口なら大丈夫だと世間は思ふ。其所に世間が動搖するとしないとの差別が生じて來る。

それは世間が濱口氏に對して抱く信用である。然るに、濱口氏を黨首に推した政黨員が濱口氏を賴み甲斐のある人と云ふのは唯單に彼れが人格に對する信賴の念のみではない。今少しく具體的に云へば、彼れは金を拵らへるだらうと云ふ豫想が潜在意識となつて、此信賴の念を裏付けてゐるのだ。

此期待の裏面には若槻氏と仙石貢氏が仲が惡るくなつたと云ふ事と、濱口氏と仙石氏とは非常に仲がよいといふ事がある。濱口氏が總裁になつたとき或る新聞は仙石氏が『それは可愛い孫の小遣錢位は心配してやるさ』と云つたと報導した。仙石氏は後に此記事を取消した。併し仙石氏が濱口氏を可愛い孫位に思つてゐる事は事實である。だから、政黨員が濱口氏を黨首に推した時、仙石氏の方を眺めて、千兩箱が渡つて來るべき、夢の浮橋を見るやうな顏をしたのも、あながち根據のない期待とは云へぬ。

これは餘昔程しの事である。三菱の豐川良平が生きてゐた

頃、彼れは上原元帥、加藤高明二人と會食した。其時豐川はかう三人でばかり會つても面白くないから、上原、加藤兩名が、他に將來有望と思はれる男を二人づつ一緒に連れて來ぬかと云つた、それで其次ぎの會合のとき、上原は田中義一と誰れか今一人連れて來た。加藤は濱口と伊澤を連れて行つた。其田中と濱口が今は二大政黨の首領として相對峙してゐる所が面白いではないかと、或人が私に話した。

『濱口の朴念人』とよく人は云ふ。併し其朴念人なる彼れは財界の厚き信用を博してゐる。それ故に、彼れにして軍資金を集めやうとすれば、集められない事はない。併しそれをいさぎよしとせずして、彼れは今迄淸貧に甘んじた。彼れが家は雜司ケ谷墓地の曲りくねつた裏通りの中流智識階級の家である。個人として彼れは潔癖を突張つて來た。公人として、即ち政黨首領として、同じ潔癖を突張るであらうか、否乎。若しそれを突張るとき、彼れを黨首に推した政黨員は矢張彼れを頼み甲斐のある首領と云ふであらう乎、否乎。濱口氏は人生の重大な岐路に立つてゐる。そして彼れが何の途を取るかは、彼れ一個の運命を決するのみならず、日本の政治の發展過程に深い關係がある。

日本はまだ封建國家から、民衆國家への過渡期にある。だから政治が理想的に行かないのは無理でもない事情もあるが、併し現在の狀態は餘りに理想に遠ざかつてゐる。或はかうした狀態で立憲政治が果して完成するか否やに關して極端な悲觀さへ起さしめる。政黨首領は何れも何百萬圓かの金を拵しらへる義務を負はされ、其義務を果たさんとするものは綱紀肅正の問題を起し、其義務を免かれんとするものは政黨首領の資格がないと云はれる。それでは政黨首領に推擧する事は其人を人身御供に上げるやうなものである

これは政治に關係するもの、殊に政黨員の心理狀態が間違つてゐる結果に外ならない。政治に志ざす者が代議士になり、大臣とならんとする。そしてそれに依つて立身出世せんとする。其所に名儀と理屈は何んと付けても、彼等は政治を以て自個の目的を達する手段にするのであつて、自個の身を以て國家又は國民の幸福に貢獻せんとするのでない。政治の本質は此國內に住む人々が國家と云ふ生活團體を經營する爲めの共同動作でなければならぬ。それ故に此動作に要する時間に對し相當な給料を取るのは差支ないとしても、政治に關係する事に依つて不當利得を得んとする事は、政治の本質を曲げる事になる。そして代議士になる爲めに幾萬圓かの運動費を費やし、代議士になつ

た後に、何かの利權でそれを埋め合はさんとする處に、此不當利得を得んとする投機が行はれると云つてよい。

然るに其投機に成功するものは少なく、多くは其投機の損失を政黨首領に出さしめんとする。否寧ろ、其投機の資本から初めて首領から搾らんとするのが比々皆然りと云つてよい。代議士が國家から貰う歳費は其勞力に對する報酬として、其金額の多少に關しては議論はあらうが原則としては差支ないとする。併し實情から云へば、歳費は代議士の小遣ひになる。彼等はそれに依つて生活してはゐない。生活費は他の方法で稼がねばならぬ。

其稼ぐ事が地道の方法で、所謂働いて食ふと云ふ原則に從つてゐれば問題は起らない。然るに所謂働いて食つてゐる代議士は其數が極めて稀れであつて、多數は何をしてゐるか分らぬが贅澤な生活をしてゐる。それが即ち彼等をして不當利得を掴む所の搾取階級としての分類に屬さしめる所以である。

人間の社會は働いて食ふと云ふ事を以て原則としなければならぬ。併し日本では『働けど働けどなほ我くらし、樂にならざり、じつと手を見る』と云ふ啄木の詩が愛誦せられる。それと同時に働かんとして働く場所のない失業者の大なる群がある。我民衆は贅澤な政治家を遊ばして食はして置くには餘りに貧困である。政治家の方でも、かうした社會狀態を目前に見て、さうして幾百萬圓かの政治資金を當首に集めさし、それを搾つて運動費と及び生活費に當てんとするのは餘りに蟲がよすぎる。

世界の政治上の常識は空腹の刺激を知らぬものは共に政治を語るに足らずと云ふことになつてゐる。だから既成政黨の首領は選擧に數百萬圓、代議士は數萬圓を拵らへると云ふことを聞いた丈けで、日本の一般民衆はこれは我等の政治にあらずと結論を下してしまう。何となれば多數の人民を住む所に迷はしめ、食物を得るに苦るしましめて、何の已が政治ぞやと云ふ論理は、爭はんと欲して爭ふ餘地がないからである。それ故に既成政黨が將來に生き殘らんと欲するならば、彼等が選擧に際して莫大な政治資金を振り蒔く事は絶對に止めなければならぬ。私は若槻氏が此政治資金を拵しらへる意志がないとか能力がないとか云ふ批評をされるのを聞いたとき、寧ろさうした意志も能力もなき事こそ歡迎すべきではないかと思つた。惡辣な手段で莫大な資金を集める政黨首領には、日本の國民は懲り〱した。さうした政治家のある間は、一般人民は惡政治家の食物になるより外はない。私は濱口新總裁が云ふ所の『金なしの選擧』と云ふモツトーは時代の理想に適つたものだと思ふ。

尤も實際問題として黨首が如何に金なしの選擧を貫徹せんとしても、政界が金を欲しがるもの、社會であつたならば、其の黨首の意見は行はれない。政界は何が故に金を欲しがる。それは政治家自身が搾取に依つて活きんとするブルジョア思想に支配されてゐるからである。

濱口氏は曾つて藏相として制税整理の演說を高知でしたとき、憲政會としては政策の行懸りがある。併し此案を作るときには日本の民狀、經濟、思想に照らして何が最も賢明であるかと云ふ事のみを考へて案を立てた。『無論政黨の主張に斟酌いたしました。然も行懸りといふものには微塵だも捉はれてゐないと云ふ確信を持つてゐることは公然申上げて少しも差支ないと思ひます』と云つた。今は民政黨總裁として、彼れが矢張行懸りに捉はれずに、斷然『金なしの選擧』を實行して貰ひ度い。それは情に脆い彼れとしては可なり困難であらう。併し若しライオンの綽名が無駄でなければ、其心をライオンにして、政治行程に一時代を劃すべきである。

其方法は簡短だ。彼れ自身は政治資金を作る事を絶對に拒絶する事である。代議士其他の黨員をして各自生業を有つて働いて食ふと云ふ原則を守らしめよ。そして食ふ上に金と時間の餘裕があらば、それを政治に貢献せしめよ。彼等をして絶對に搾取の財貨に手を觸れさせないやうにせよ。

さうすれば、其政黨は總選擧に負けて、沒落しはせないかと心配する實際家があるであらう。併し今迄の搾取に生き、搾取を目的とする政黨を活かして置いて、其所に國家の爲めに何の利益がある。政黨が國民の幸福を念とするものならば、玆に飢へて疲れてゐる國民の大なる群衆が存在する事を見よ。普選に際して、此群衆に直面して、既成政黨は尙搾取の金を資本として政治運動を行ふ勇氣があるか。政黨人自から先づ搾取を熄めよ。そして日本をして搾取なき國たらしめよ。それが國民をして幸福ならしめる唯一の途である。

私は濱口氏が『金なしの選擧』と云ふ理想に忠實であらうと信ずる。そして其黨員が下手な小細工をして、總裁の理想を沒却しない事を希望する。

ビックリ三度

善の萬年筆を使ふと
型のよいのにビックリ
書きよいのにビックリ
耐久力のあるのにビックリ

オノト萬年筆　七圓五十錢以上
アテナ萬年筆　三圓五十錢
萬年筆用アテナインキ　三十五錢

送料各十八錢



Y1.80

朝から晩まで

た愉快に活動するには毎朝バレーを御使ひ下さい
僅か三分間で研ぐ剃るつる〳〵綺麗になり、氣分が
明るくなつて若さが身體中に漲ります
一枚の刃が半年もの使用に耐へる

バレー自動研安全剃刀

C型九十九號　一圓八十錢　送料十八錢

其他三圓八十錢・五圓五十錢・十三圓五十錢以上などあります。（カタログ進呈）

賣捌店　著名百貨店洋物雜貨金物店等



"VALET"

東京市日本橋區通三丁目

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・三田・早稲田・丸ビル



三土新藏相と政友會の財政々策

下田將美

一

高橋藏相は豫定の如く去つて三土氏が新たに其跡を襲つた。所謂積極政策の權化として過去の財界に幾多の放漫な足跡を殘した高橋氏に較べれば三土氏は學究的色彩の濃い、兎も角も新進の藏相であるといふ點から見て、古い骨董味を帶びた酒壺が新らしい壺に、代つた位の氣持はする。けれども壺の中の酒までが新酒にかはらうとは思はれない。古き酒は古き革袋に盛る可しといふ言葉があるならば、新らしき壺には新らしき酒を盛る可きが至當であらう。しかし三土氏が盛り來る酒が、依然として所謂傳統的の積極政策の奉侍であることは余りにも明かなことである。壺の新古は問題ではない。高橋氏であらうと、三土氏であらうと必ず同じ道をゆくに相違ない現內閣の財政々策について論評を加へてゆきたいと思ふ。

二

政友會內閣は由來積極政策を標榜して事毎に景氣のいゝ事のみを行つて來てゐた。これを云ひかへて見れば政友會には

非常に資本主義的色彩が濃いと云つても差支へない。これに對して民政黨の方は其名によつても伺はれるやうに、著しく社會改良主義の色調を帶びて、資本家に迎合するといふよりも、寧ろ一般的階級に廣く訴へやうとする傾向が强い。憲政會が天下をとつた時代の施設が一言にして云へば社會政策に主調を置いたのは此故であつて、同時に政友會が天下をとつた今日、所謂產業立國の聲がすべての財政經濟政策の基礎となつてゐるのは當然のことであらう。

明年度豫算の編成の大體方針だけはすでに閣議に於て決定を見たが、歳出概算はなる可く緊縮方針をとること、新規要求は產業立國、自治體の確立その他內閣の政綱となれるものは優先的に認めること、歳出財源となる可き公債の募集額はなる可く增加せしめざる方針をとること等をその骨子として居る。緊縮方針をとるといふことについては今日の經濟界の現狀から見て、たとへ何人が內閣を組織した所で、大に積極政策をとるなどと云ひ得可き筈はない。未曾有の醜體を示した財界大恐慌のあとを受けて、民間の金融界も事業界も整理の徹底を期すべき時に當つて政府亦財行政の整理を根本基調とせねばならぬ位のことはいかに非常識なものと雖も心得て居る所である。政友會が出來る限り歳出の緊縮を計ると唱するのは常識から見た當然の看板である。しかし乍ら緊縮を標榜して立つた憲政會內閣ですらが今年度の豫算には十七億六千萬圓といふ未曾有の膨脹した大豫算を編成して國民經濟上に容易ならぬ大負擔を蒙らせてしまつた。口に緊縮を唱へても實際に於て緊縮した豫算の實を擧げることは容易の業ではない。私は政友會內閣が單に、出來るだけ豫算は緊縮の方針をとるなどと云つたとて、それだけを表面から素直に受け入れることは素より出來ない。問題は實に止むを得ざると稱する政友會の所謂重要政策の範圍や程度如何にかゝつてゐると云つてよい。

政友會が所謂產業立國策として主張して居るものゝ具體案は何であるかと云へば食糧政策上から見た農業振興やら、蠶糸業漁業の改良發達、木材薪炭の自給策燃料調査等の資源の開發。電力製作による工業品の大量生產、關稅に關する原料無稅主義と輸出品に對する戾稅の擴張、工業貿易資金の低資融通、製鐵、機械肥料の保護主義等の工業振興。鐵道の建設改良其他道路港灣の改修並に海運造船の奬勵等の運輸交通機關の整備。日銀保證準備の擴張や金利引下、特殊銀行の改善、外資輸入等の金融政策。電力の統一、等甚だ多岐に亘つて居る。是等の所謂產業立國策なるものは國運の進展を計る上に是非共必要なことであつて政友會はこの大本に從つて單に財政經濟のみならず教育

も外交もあらゆる政策をこれに準ぜしめんとするものであると云はれてゐる。今日の世界の大勢から見て產業が重要なる國策であることは敢て政友會を待つまでもなく明らかなことである。英國を初め歐洲諸國の戰後の政治家は何れも此問題に全力を盡して來てゐる。だから產業立國そのものについては敢て異を唱へることもなければ、又事新らしい主義政綱でもない。たゞ政友會は此美くしい名の產業立國策なるものによつて資本主義に迎合するやうな放漫なる積極政策を行ふの怖れが十分にある點が問題となるのである。產業立國なるものも、こゝに於てか其文字づらだけの解釋をはなれて別の見方をせねばならなくなつて來る。言葉をかへて云へば政友會が明年度の豫算を編成するに當つて、出來る限り緊縮政策をとると標榜しながらも、一面に於て主義政綱に基く重要政策には優先的に新豫算を計上して是非共これを實現させると意氣込んでゐる所に大きな疑問が橫はるのである。若しも現內閣が今日の財界の現狀を正解し、不眞面目な一時的の空景氣煽揚がいかに將來の禍根を深くするかに鑑みて、財行政の眞摯なる緊縮方針に立脚して、その上で適當な產業振興策を實現せんとするものであるならば、私達は悅んでこれを歡迎することと勿論である。雌伏五年の政友會として政權を握り得た今日、その本來の主張である產業策を決行したくもあらうし、又之を行つて差支へないものであるとは異論なき所だからである。けれども若しも現政府が、かうした堅實な基礎に根ざす產業立國策でなく、單に從來行ひ來つたやうな資本主義的の觀念から、產業立國策の名によつて放漫な積極策を行ふ者でありとするならば、其影響や蓋し怖る可きものがあると云はねばならない。恐らくは最初の標榜した豫算緊縮などは單に一時の空言に終つて國を擧げて緊縮方針をとる可き秋に、政府まづ膨大なる浪費振りを示すの惡弊を重ねるに相違ないであらう。國民としては何よりも先づ此點を警戒せねばならない。

明年度の豫算編成に當つて各省の新規要求額と節約額とがいかになるかは今後に待つて見る他はないのではあるが、今日に於て豫想される新規財源には可成りに苦しいものがあることが觀はれる。十四年度の決算に現はれた國庫純剩餘金五億一千萬圓中から昭和元年二年の兩年度豫算充當額三億七千三百五十萬圓と昭和三年度以降の假定計劃充當額一億一千五百十萬圓を差引いたもの、即ち明年度の新規要求に充當される自由財源は約二千萬圓前後となるであらう。之に對して對支問題の進展につれて近時此中から責任支出を行つた額も尠くなく、しかも將來の形勢次第で更に支那事件費の支出高は增加しさうな心配がないではない。昭和元年度に新たに生ずる剩餘金は少くも一億圓

以上に上ることは明かであるが此中二割五分は減債基金に充當されるので新規事業に充當される分はそれだけ減少されることとなる。更に最後に財源となる可き普通歳入の自然增收は果して豫期して居る程の額に達するかどうか。近時の財界の不況の影響は又必ずや此上に現はれて來ずは止まないであらう。これだけの財源の中から昭和二年三年の追加豫算財源を留保し後年の分をも相當に留保すれば事實に於て政府が新規要求をなすべき事業の財源は決して豐かなりとは云ふを得ないであらう。

若し政府が所謂、政友會の主義政綱に基く重要政策なるものを、今日の我經濟力に對比して適當な新規事業だけに止めて置くか、たゞしは新規事業費として計上すべき分に對して、これを償ふに足るだけの財政の節約緊縮を他の費目に斷行するの勇があるならば、明年度の豫算編成は必しも難事ではないに違ひない。然し乍ら政友會內閣に果して節約緊縮を一方に徹底させることが出來得るであらうか。たゞし又所謂重要政策に基く新規事業を、傳統的の放漫な所謂積極主義の傀儡たらしめざるだけの節度ありや否か。私達は甚だこれを怪しいものと見ざるを得ない。積極策と放漫策とのけじめは眞に皮一重である。もしも現內閣が昔ながらの傳統から脫し得ず、資本家に迎合して一時の景氣を悅ぶ風を捨てぬならば、重要政策の遂行は必ずや、實際に於ては不急事業の遂行に推移して、豫算はやがて不健全なる膨脹を來さでは止まないであらう。

三

現政府の税制政策上最も大きな問題となつて居るものは地租委讓である。護憲三派の內閣をして分裂の運命に陷れてしまつたのもこれが爲である。それだけに政友會內閣としてはいやでも應でもこれを實現させなければ世間に對して顏向けのならぬ義理合となつてゐることは申すまでもない。三土新藏相も亦熱心なる地租委讓主義者であるに於ては猶更のことである。

地方の財政が著しく貧弱であつて、自治體の活動の思ふやうにならぬことは久しいものである。此際地租を地方に委讓して新らしい活動の資源を與へやうとする主義については私達は元より異論のない所である。たゞ問題はその財源をいかにするかといふことである。現政府がいかなる方策を結局採用するにいたるかは將來のことであつて今日これを云々することはもとより早計ではあるが傳へらるゝ所によれば財產税の設置も一案として有して居つたやうである。財產税の設置が實行に困難な不公平なものになるとか其他税そのものゝ批判については、隨分の說もあらうけれども、それよりも根本問題として私は地租委

事そのものは良いことであつても、いかなる形に於ても國民に大なる負擔をかけて之を實施するのは間違つて居ると云ひたい。わが國民經濟の不振にして活力を欠いて居る大きな原因の一つは、何と云つても租税負擔の過重にあることは爭はれない。之を各個人の生活の上から云つても、いかに直接、間接兩税の負擔がわれらの肩上に重き石となつて安易を失はせつゝあるか。地方の財源を豐かにすると云ふ主旨は結構ではあるが、これが爲めに一般國民に此上の負擔を蒙らせる新税制度を採らうとするのは間違ひも甚しいものである。

三土新藏相は地租委讓に伴ふ國庫の欠陷を補ふの手段として關税引上を行はふとする意見を持つてゐた人である。藏相として今後果して此意見を實現させやうとするかどうか私の知らぬ所であるが、若し眞實これを行はふとするものであるならばわが財界の將來にとつて容易ならぬ大きな打撃が來るものと覺悟せねばならない。關税の引上は一部の資本家には常に歡迎され、要望される。けれどもそれと同時に國内の消費者は常に負擔の増加となつて來ることは云ふまでもない。しかも余りに保護關税のみに奔る結果は、國際通商の阻害となつて、産業家自身の頭上に重き石となつて再び落下することは現に戰後の歐洲各國が嘗め來つた苦き經驗である。ゼネバに於る國際經濟會議が何故に自由貿易を主張し、相互間の關税障壁の撤廢を力說して其主義を一般的に是認するにいたつたかと云へば、戰後の無意味極まる關税戰が結局産業の利益にならずして、共仆れの悲劇に終ることを痛感した結果に他ならないではないか。私はすでに世界的運動ともなつて來て居る自由主義に反し、一面、直接に國內消費者の打撃となる關税引上によつて地租委讓の穴を埋めやうとする案には到底眞面目に贊同するとを得ないものである。

しからばいかにしたらばよいかと云へば、地租委讓を機會として中央政府より地方に對して從來與へ來つた國庫補助を打切るのを以て最も當を得た策とすべきであらう。元來地租委讓の本願とする所は財的地位を鞏固にして眞に地方自治の實を擧げんとする以外にはない筈である。しかるに一方には依然として中央政府から莫大な補助を仰いで、地租委讓を實施したとて、それが何で地方自治であらう。自治は眞に言葉通り自治ならしむ可きである。若し政府が地租委讓と共に地方への補助を打切りさへしたら委讓によつて失つた財源を取かへし得ると共に、地方亦これによつて眞に自治を確立する一つの道程ともなりうるであらう。案としては恐らくはこれを以て先づ第一に行ふ可きものとせねばならぬのである。

しかるに現政府には敢て之を斷行するの勇氣に欠くる所があ

るやうに思はれる。もしこれを行ひ得ぬとするならば、結局は前に述べたやうな不穩當な代償政策をとるか、然らずんば傳統的の公債政策を以て糊塗せんとする他はなくなつてしまふであらう。政友會の爲めに惜しむべく、國民の爲めに悲しむべき禍根はここに充分にはらんでゐる。

現政府は明年度の豫算編成の方針を定めるに當つて一應は、公債は出來るだけ募集せざることゝいふ項目を加へることを忘れなかつた。けれども事實に於てはすでに内閣成立の當初から憲政會内閣とは著しく異つた公債政策を隨所に於てほのめかして來てゐる。高橋氏が、日銀の非常貸出によつて著しく膨脹した通貨を收縮させる意味に於て公債發行政策を云々した如きもその一つである。とてもかくても政友會にとつては公債增發政策は、拔くことの出來ない傳統的の病でゝもあるかのやうに見える。

すでに此病のある所へ、その標榜する二つの大きな目前の主張、即ち所謂重要なる主義政綱による產業立國策の施設と、地租委讓とを遂行する爲めに、いかにしても豫算の不足を來し、他に適當なる補塡の道がない場合になれば、得たり賢しと得意の公債政策を濫用し易くなるのは寧ろ當然の歸結であるかも知れない。現に高橋氏の如きは辭任する前に、公債の如きは一般政費のために增額することは愼むべきであるが、後代子孫の福祉となる可き國家の事業は公債によつてもいゝわけであつて敢て前内閣の決めた一億五千萬圓の限度に拘泥する必要はないとの意味を洩らして居つたやうである。公債政策が果して子孫の福祉となりうるであらうか。五十一億圓に上る巨大な國債をすでに負つて、利拂だけでも年々二億數千萬圓に上つてをる今日の政府が此上借金を重ねて何の福祉になるであらうか。

云ふまでもなく公債政策は言葉をかへて云へば借金政策である。借金と云つてもこれによつて直ちに生產利益が上り利子の支拂を償つて猶且つ余りあるものであれば敢て排斥するには當らぬものであるが、政友會が從來行ひ來つたものは放漫なる借金である。將來の負擔は敢て顧みずして、たゞ目前に金を手にすることによつて景氣を煽り立てる不健全なるものであつた。その結果は最後に於て國民の負擔となり租稅の過重となる。すでに公債政策の惡弊が一度び現はれゝば、とめどもなく禍の手は擴がるであらう、私は現内閣が政友會なるが故に特に此點を怖れざるを得ない。非募債主義が堅實なる財政々策であることについては恐らくは政友會の人々と雖も誰人も異議のないことであらう。たゞ止むを得ざるが故に、他に適當の財源なきが故にと云ふ口實によつて公債政策へ奔るのである。この口實こそ怖る可きである。さきに五十二議會に於て憲政會内閣が減債基金

法を改正して剰餘金の四分ノ一繰入れを行つた當時、繰入高は猶過少なりとさへ非難した政友會が、今度は逆に憲政會の定めた減債基金増加額すら實行し得ないやうな破目に陷るのではないかとさへ怖れられるのは一に、重要政策の名にかくれた放漫な積極政策が生み出す矛盾である。

所詮堅實なる財政經濟策は今日の場合何を措いても財行政の事理による豫算の緊縮節約以外にはない。政友會の傳統的な放漫政策の如きは最も愼しむ可き重大なる秋である。私は現政府が依然として舊の如き不眞面目な積極策をとるか、但しはこれを改めて堅實な道を進るかの最もよき試金石の一つとして先づ其公債政策のなりゆきをじつと見つめてゐたいと思ふものである。

田中外交の文明史的批判

清澤洌

一　同じ國から三つの抗議

田中內閣が青島に出兵すると、日本は同時に三つの政府から抗議を貰つた。第一は北京政府であり、第二は南京政府であり、第三は漢口政府である。

これ等の政府からの抗議は、いづれも日本の出兵が支那の主權を侵し、國際法に反するものであることを極說してゐる。われ等は當時、同じ事件に對し、同じ國から一緒に三つの抗議を發し得る國に、侵し得べき主權が何處にあるかを思ふて、自から迷はざるを得なかつた。また彼等は盛んに國際法をいふけれども、彼等自身は外國租界の占領といひ、外國領事館の掠奪といひ、關稅の増徵といひ、果して國際法に準據した行動をして居るか。かりに準據して居るとしても、國際法といふものは、一國に三つの正常政府を主張する機關のある國を前提として、出來あがつて居るものであるか。外交的論爭に馴れないわれ等の頭は、完全に迷宮に入るのを如何ともするを得なかつた。

この迷ひはわれ等ばかりではなかつたやうである。今まで幣原外交を謳歌してゐた日本の朝野の意見も、これと反對な方向を辿るやに見える出兵に對しては、たゞそれが在留民保護以外に出でることのないやうに希望するに止まつて、出兵そのものを否定する議論は殆んどなかつたやうである。尤もその後、これに反對する議論も出たが、それは北方軍が戰略的に後退して、南北兩軍が持久戰に入り、濟南その他の在留邦人が、急に危險のないことを知つてからのことである。

支那は謎の國だといふけれども、この謎の國に對するわが國の輿論も確かに謎である。支那における日本人の利益と生命が、內亂のために四六時中、犧牲にされても可なりとの議論は、餘程の寛大なる思想の持主でも出來ないものであり、さらばとてその利益と財產を保護するために、現存する價値の數倍の費用を擲つて（この費用の中には排日による失費をもふくむ）出兵することの賢愚についても、必らず疑ひがあるに違ひない。かうした見地から見れば、日本の對支政策に關する輿論は完全に立往生をしたものといつてい丶。

併しながらこの輿論の立往生から觀取し得る一事は、支那の出兵は理論的には、それが在留民保護である以上、決して批難すべきものではなく、たゞ問題になるのは、これが結局日本に幸ひするかどうかといふ將來に關する政策についてだといふことである。

二　政爭の犧牲になつた外交

議論を進める前に、少し橫道に外れるけれども、日本の外交が無用に、政爭の犧牲になつたことを述べておきたい。

幣原外交については、われ等は根本的に一つの疑問を有するが、それは別な機會に讓るとして、この幣原外交は大體に、わが國朝野の支持を受けてゐた。新聞雜誌は無論として政界においても、大なる反對の聲を聞かずにすぎた。然るにこの外交は、支那問題が益々混雜して、最もデリケートなる時に突然打ち切られて、他の異なる政策が、そこに現はれたのである。

この事は議會政治において、一見不思議でないやうで、しかも實際は極めて不思議な現象である。若槻內閣が采りあげた暗礁は、外交問題でなくて、經濟問題である。即ち問題の焦點として內閣が瓦解したのは、經濟問題なのである。故に新しい內閣において、その財政問題について、政策を一變するは當然のことであるが、しかも實際問題としては最も變化を見たもの、乃至は見るべきものは外交問題に外ならないのである。前內閣において比較的無疵であつた部門が……私がその政策

に賛成してゐるといふ意味ではない……一番急變するといふことは、何としても不合理である。これは二大政黨對立の議會政治に附き纏ふ弊害であつて、小黨分立の國においては却つてこの弊害は少ない。その國においては多くの場合、内閣が改造さるゝのは、信任を失なつた當事者だけであつて、他はそのまゝ居据るのを常とする。たとへばフランスのブリアンが、萬年外相の觀があり、その意見が極端に異なるポアンカレー内閣の下にあつても現に外相であり、またドイツのストレゼマンが同じく國際關係のデリケートなるに顧みて、何代かの首相に歷任して居る如きがそれである。外務省のモノポリーは元より排斥すべきであるけれども、併し外交の連續性（コンチニュイチー）から考へて、この事が、政黨政治の運用に一沫の暗雲を投げかくるものであることは疑へない。

議會政治における外相更迭の理非は何れにしても實際問題として幣原外相は政變の結果退き、田中首相は外相の椅子を提げて現出した。そして新外相は暫らくの後、山東省の邦人を保護する意味から出兵した。問題はこゝから始まる。

三　強硬輿論の沒落

前述した通り日本の出兵は理において、少しも批難さるゝところはない。國際條約により一國民が、他國に居住する權利があり、しかもその居住する國の主權が、その國内に住する外國人の生命財産を保護することが出來なければ、當該國が進出してこれを保護するは當然である。

しかもこの當然な行爲に對して日本國民の多くは必らずしも賛成しなかつたばかりでなく、從來は對外硬の本家のやうに見られた貴族院すらも、自重を唱へてやます、また一時批評を控へた新聞の論調も、戰況やゝ小康を見るや、直ちに撤兵の出來るだけ速やかなるべきを論じ始めたのである。これを過去の時代において、他國の領土に出兵するとさへいへば、國民の輿論が奮激したのに對比すれば、隔世の感あるを禁じ得ない。

これ等の傾向は、も少し長い間の輿論を觀察して來れば、もつと明瞭になる。幣原外交といへば、その別名は讓歩外交といつてもいゝほどのものである。いかなる會議においても、支那に眞先きに讓つたのは日本である。そしてこの結末が、ついに南京事件や、漢口事件に終つたのである。この間支那人が日本に加へた侮辱は、今までの日支交友の間にかつてないほど極端のものであつた。

從來の日本の傳統的精神からいへば、この場合世界で最も憤怒するのは、昂憤性を多分に持つ日本國民でなければならない

筈であつた。しかも實際は、日本國民はこれを怒らなかつたばかりでなく、幣原外交のウオッチフル・ウエーチング主義に大體の贊助を惜まなかつたのである。これは抑々何を語るものであらうか。

同じ事が外の事實についてもいへる。米國は日本にとつて快い國ではない。米國の排日に憤慨して腹を眞一文字にかき切つた無名志士の追慕會は、今なほ行はれてゐる筈である。しかるにこの國に對する敵意は漸次消滅しつゝあるかに見える。たとへば最近米國から青い眼の人形が來た。もしこれを理屈からいふならば、日本人の移民を拒絶しておいて、その國から旅券を持つて多數の人間――實は人形が來る如きは、日本に對する一種の侮辱だともいへる。事實私は、始めからした反動論が起るべきを憂慮したのであつた。然るに實際は、この米國からの使節は、日本朝野の心からの歡迎を受けて、これが答禮をすら企てられてゐる。米國に對するビッタネスが、少なくとも日本人の心の表面から消えつゝあることを證據だてるものではないか。

また一九二二年度に、ワシントン會議が開かるゝや、日本の朝野は非常なショックを受けて、中には堂々と『國難來る』と呼號したものがあつた。然るに今回第二回の軍縮會議を提唱し來るや、日本の朝野は即座に主義として之を受入れた。

これ等の輿論の變化は、そも〳〵何を語るものであらうか。また何に原因するものであらうか。日本人は健忘性なりといつてしまふには事實が餘りに大きすぎる。

四　外交を動かす經濟的要求

一國の輿論の變化といふ如き廣大なる問題を論ずるに當つて、これを一つや二つの原因に歸することは、極めて危險なることである。併しながらこの變化の最も重大なる理由をあげようといふならば、私は日本の生存の必要から出て居ると斷言するに憚からない。

數字を擧ぐるまでもなく日本は工業原料において、食糧において自から立つ能はざる國である。日本が生存するためには、好むと好まざるとに拘はらず、日本の生産物を輸出して、原料を買入るゝの外はない。そしてこれ等のものを輸出するにも、輸入するにも、最上の顧客は支那と米國とである。

紙數に制限があるから、統計は一切拔くが、試みに米國が生糸を買はず、支那が綿布を買はないとせよ、或は又米國が鐵や綿を賣らず、支那が豆粕や鑛類を賣らないとせよ、日本の産業は一溜りもなく崩れ落つるのは極めて明らかな事實である。

米國の排日法制定の當時、日本では對米ボーイコットを計畫したが、先方で眞劍に應戰しなかつたからよかつたもの丶、もし米國でこれに對抗したら、米國の損失は活動フイルムその他極めて第二義的のものに止まるに對し、日本にとつては國家經濟にひゞのいるほどのものばかりであつたのである。

人間は生存問題については、極めて神經過敏である。これ等の事實を統計的に知らないものも、その影響なり、結果なりは、直ちに體驗し得るやうに出來あがつてゐる。そして元來が鋭敏である日本人が、これを感知しないわけはないのである。

この事を頭に入れゝば、日本の外交が、惡くいへば外國に對して不必要なるほどの氣兼ねをし、よくいへば常に自由主義的である理由がよく分ると思ふ。殊に日本が産業を以て立國の基礎とせざるべからざる國情と傾向にあるにおいて、この事はやむを得ない道なのでもある。

過去の歷史を顧みて、この原則以外に出で得る國はない。即ち自國に充分の原料と食糧を有して、これ等を他國から仰ぐ必要のない國は、外交的に常に強く——時には我儘勝手であり、これに反してこれ等のものを外國に依賴する國は常に妥協的、自由主義的である。例へば英國は十九世紀においては、海上權を掌握し、加ふるに世界の市場を壟斷して居つたので、自己の主張を、他國と妥協することなしに、勝手に強要し得た。自己に都合のいゝ主義は、辭書をくると幾らでも製造することが出來た。然るにこの英國も時勢の變遷と共に、海上權を他に分與し、しかも內に顧みて、その食糧の三分の二を輸入せざるを得ざるに至つて、頓に妥協的にならざるを得なくなつた。日本においては尙英國を誤解して居る者が非常に多いやうだが、われ等の知る範圍では、今のところ英國ほど自由主義的な外交に終始してゐる國はないと思ふ。

米國が亦そうである。米國はその國が肥えてゐて、産業があつて、全く自立自足の國である。彼等はその生活のために、毫末も他國と妥協する必要がなかつた。彼等は外國と交涉するに當つて、一つの問題について長く主張さへしてゐれば、自分の方からは何等讓步することなしに、自己の主張が貫徹することを習慣づけられて來た。ジヤクソン大統領時代にフランスとそうであつた。アラバマ事件では英國が兜をぬいだ。日本との交涉も明らかにそうである。始めは學童の隔離問題にすら、ルーズベルト大統領は『決して日本人を歐洲人と區別待遇をせず』と日本政府に一札を入れたのが、二十年後の今日では、日本人を頭から侮辱し、排斥して、なほ滿足しないで居る狀態なのである。

われ等はこれらが善いとか惡いとかといふ議論をして居るのではない。事實を事實として記述してゐるまでゝある。そしてその米國すらも、近時他國との經濟的接觸が頻繁になると同時に、妥協的になるの已むを得ざる狀態にあるに顧みて、經濟的必要がこの國の外交の根本方針を定むる大動力であることを知るべきである。

繰り返していふが、日本の外交はその經濟的必要、生存の必要から、自由主義的、妥協的にならざるを得ない。そしてこの事が戰後、經濟的難境が目立つて來た時に外相になつた幣原氏によつて實行されたことは注目すべきであると思ふ。幣原外交は、われ等から見れば全くの無策外交であつた。しかもこの無策外交は、日本の事情から生れ、かれは單にその事情の指示した通りに動いたに過ぎなかつた。この無策外交が國民の支持を受けたところに重大な意味がある。

五　必要が自由主義を迫る

かうした外交が、必要から生れたものであるにしたところが、これに對して非常な不滿を有するものが出現することも、また容易に想像し得るところである。

それは『經濟』に對する『政治』の反抗である。『實際的利益』に對する『國威』の抗議である。更に大衆を唯一の對手にする政策に對し、地圖の色に執着を有するものゝ不滿である。そしてこの種の人々の代表として、軍人としてかうした思想に養はれて來た田中外相が出で、しかしてこれを後援する者が、軍人及びそのサークルの人であるのは不思議ではないのである。

この人々の第一の特長は如何なる場合にも、國旗が頭を離れない點にある。國旗のあるところのみが、國威の伸張するところであつて、これを條件としてのみ經濟があり、國民の存在がある。一度びこの國威にして汚されんか、何物を犠牲にしても、突進せずんばやまないのである。この事は田中外相が出兵するに當つて、新聞記者に對し排日の如きは少しも意に介せない旨を語つた一事でも知ることが出來る。

この人々の第二の特長は、その口で廣言するところと、その腹で考へることゝは、極めてデリケートな相違があることである。即ち彼等は所謂腹藝なるものに重きをおくのである。そしてこの呼吸は同じ畑で育つて、同じ思想に養はれたものでなければ、よく諒解することが出來ないのである。故に寺内首相は、適法な日本の代表者を通して對支外交をなすことを避けて西原氏を使ひ、また田中首相は山梨大將にある種の使命を授けて、支那に送るのである。

いづれにしても田中外交は、今回は全く何等遮ぎられることなく自由に、その平生の抱負を實行し得ることは明らかである。それはかれ自身首相であり、また外相であり、軍部に對して睨みがきゝ、その上政友會には外交上において、かれを制肘し、批評するやうな有力な外交通が居らないことでも、容易に想像し得る。

かくして彼等のいだく外交政策なるものが、現代において適當なるものであるかどうかゞ、最もよく試みられるわけである。そしてこの結果、われ等は二つの場合を想像し得る。第一の場合は、かれが敢然として、その政策を實行することである。かくすれば當然支那の内政にも干渉すべく、その結果排日は再發するであらう。そしてその積極政策によつて得るところと、排日によつて失ふところとを總決算する時が來らねばならぬ。第二の場合は、かれが四圍の事情と、經濟の要求に强いられて、自からをそれ等と妥協の外なきに至るであらうことである。

而していづれの場合においても、われ等の觀るところに誤りがなければ、軍人流の外交が破綻して、自由主義外交が强く根を生えると思ふ。軍人外交は寺内外交によつて第一に躓き、サイベリアの出兵によつて深い手疵を負ひ、その勢力は最後の一擧を待つて、表面の舞臺より消え去るべき運命にある。それは彼等の政策が試みられる毎に、却つて春雨の後の青草のやうに自由主義的外交が擡頭した事實によつてこれをよく證明して居る。

われ等は必らずしも幣原外交の謳歌者ではない。否、われ等はこれに不滿がある。その缺點として余りに所謂自主獨立の名に囚へられ、かつその根本的思想が、他國を置去りにしても、自己だけが人氣と利益とに居らんとする道德的不純さをあげ得る。これ等についてはこゝに詳説の暇はないが、かうした缺點があるにかゝはらず、その大體の方針が示す自由主義的傾向は、將來の日本の外交が向ふ唯一つの道であらねばならぬと信ずる。

日本はその生存の必要から、自由主義の道を辿る。これが説いて詳かなるを得ざるこの小論に附し得べき結論である。(一九二七・六・五)

再燃した政友會内閣の地租委讓論

中澤辨次郎

一

憲政會内閣に財政緊縮論が附き纏ふて居るやうに、政友會内閣には地租委讓論が附き纏ふて居る。今度も田中義一君を首班とする政友會内閣が出現すると、案の如く忽ち地租委讓論が再燃し出した。言ふ迄もなく地租の地方委讓案は政友會が此處數年來社會に向つて發行してある約束手形の一つである。のみならず此の案は政友會として既に原内閣時代に一度裏書き——財政經濟調査會の答申に基き財源補完の道さへ立てば近い將來に於いて實行すると云ふ——してあるし、亦憲政革三派の護憲内閣時代に於いても稅制整理案決定に當り憲政會と見る所を異にし——憲政會側は地租の二分減を以つて飽く迄も中央集權的稅制案を固持せるに反し、政友會側は地租委讓案を提げて對せる結果、終に黨出身の岡崎農相、小川法相の如きは此の爲に三派内閣より連袂脫退した——結果護憲内閣に大動搖を與ふるに到つたと云ふ曰く附きの案——此の點を逆に解せば此の時も社會的に發行してある約束手形に對して再度裏書きをして居ると見ることが出來る——であるから、今度こそ彼等が之れを實行しない時は、彼等の社會に對する面目は丸潰れになる。と云ふ點から考へても田中内閣に多少の責任感があるなら今度こそ近い將來に於いて實行に着手するであらう。更に亦他面の觀察としては、政友會内閣は農村振興とは「肥料を公平に分配」することである等と言つて、途方もない迷論を臆面もなく喝破(?)して憚らない勇氣を過分に持ち合せて居る宰相を戴く内閣であるから、盲蛇物に恐れない蠻勇がある。從つて其の壽命さへ續いて居る限りに於いて、恐らく地租委讓を實行することであらう。

が氣の毒のことには彼等の言ふ地租委讓は、一切が黨略と政

略の必要以外には何物もないから、言ふ所に財政的整然たる理論的根據がない。社會的に正しい目的意識を持つて居ない。であるから其の實行方法が常にグラ付いて居る。昨日までは財源に就いて關稅增率に依る收入を以つて充てると言つて居るかと思へば、今日は復興費を振替へると言ふし、一部委讓案が出るかと思へば全部委讓案に代ると言ふ狀態である。之等の點から考へても彼等には如何にも定見と言ふものがなさ過ぎる。がそれのみではない。彼等はもつと根本的な考へ方の上に於いて地租委讓とは如何なることを意味するかを知らずに居たのである。記憶のよい讀者は多分御記憶であるやうに、私は嘗つて本誌に地租委讓の意味を概說したことがあつたが、其の中で地租の地方委讓とは「中央集權的政治の弊害を匡正する意味に於いて、稅制上から地方分權制を確立」する所に大きな使命があるのだと論じた所、それ迄一度も政友會として此の點に觸れたことのないものが、俄かに私の論に阿付して地方分權說を唱へ出した。然も彼等は私の說に依つて稅制的地方分權が確立した曉に、政友會の如き、政黨――其の他の既成政黨亦同じ――の將來が何うなつて行くかも深く考へずに追隨して來たのである。彼等の此の猿智惠的輕擧には、私個人として相異つた同情と侮蔑の兩感を交々相催すことを禁じ得ない。

二

言ふ迄もなく地租委讓とは、稅制上から地方分權の第一歩を築くにある。――勿論其の外にも各種の意義はある、例へば都村負擔の均衡を保持せしむること、亂雜なる地方稅制の整理、地方財政の救濟從つて農村疲弊の救濟等がそれであるが、他の半面には多少の弊害も伴はないではない。從つて中には功罪相半するものもあり得る――然るに彼れ政友會は其の內の功果のみを認め、愚かにも地方分權の美名に醉ふて、地方分權の示唆するほんたうの意味を正しく汲み取れずに居る氣の毒な徒黨であるのだ。が此處ではつきり地租委讓及びそれに依つて確立せんとする地方分權――財政的實力の伴ふ――の意味を述べた所で、既に政友會としては相當深い所まで足を踏み込むで居る關係上、今更らその面目に懸けても後戾りも出來まいから、卒直に知らして置かう。一言にして言へば政友會が從つて亦田中內閣が、偶々過つて地租委讓を實行せんとしつゝあるのは、政友會が其の他の既成政黨をも道伴れとして、自ら葬らる可き墓穴の掘り出しを營み初めたと云ふことを意味する。換言すれば將來必ずや取つて代らずには居らない新興階級政黨が、最も容易に既成政黨に代位し得る地盤が地租委讓に依つて地方自治體

の上に建設されるのである。

此の點は政友會の將來に取つて最も大なる惱みであり、同時に既成政黨全體の苦悶である。けれども、整然たる理論的根據も持たず、亦正しい目的意識も持たない彼等の地租委讓論に此のことのあるのは寧ろ當然であると謂はねばならぬ。一國の財政計畫を立てる上に於いて、反對黨に對する黨略的立場が重大視されたり、農村特に地主の上に過分の足場を持つ黨の對內關係から、土地資本主義の忠實なる番兵たる可き役割を果さんとする地主階級の負擔輕減に地租委讓の政略的根據を持つ案が軈がて彼等を自滅に導く楔機と化するのは、如何にも興味ある自然の配劑だと言へる。丁度此の點は、憲政會從つて加藤內閣が嘗つて己れその心にあらずして、新たに形成された社會條件に餘儀なくされ、在野時代に不本意乍ら提唱して來た普通選擧法を朝に立つても實現しなくてはならぬ破目に陷り、涙を呑むで該案を通過せしめた心裡と相似して居る。憲政會內閣が普選實施後に於ける大なる苦悶は、軈がて政友會內閣が地租移讓後に於いて抱かねばならぬ大きな苦悶の種子である。普選を實現した憲政會は、尙將來の日に、多年の歷史を一朝に廢棄して新らしく生れ代らねばならぬ大なる陣痛と、生誕後に於ける——立憲民政黨が豫期した新興階級の支持を得ることが出來ないで——成長の惱みを更らに大にして居るばかりではないか。然し乍ら之れは啻に憲政會や政友本黨の過去及び將來に於ける惱みではない。軈がては地租移讓後必ずや政友會にも見舞はる可き既成政黨特有の惱みである。

目前の黨略にのみ狂奔して居る彼等に此の將來に發生すべき社會的新條件は明かに認めることが出來ないであらう。亦認め得られない所に新興階級の將來に對して、大なる光明が點ぜられる所以である。從つて新興階級政黨の立場から言へば、何もブルジョア政黨である政友會が提唱した地租委讓案であるからと言つて、食はず嫌ひに之れを反對する必要はない。地租委讓の持つ正しい使命が、結局に於いて新興階級の利害に相反して居らない限り、お互ひは此の案を正しく導いて行く雅量を持たねばならぬ。如何に自惚れた所で新興階級政黨には、一擧にして中央政治にその驥足を延ばし得る實力はないのだ。勿論將來の目標が中央の政治機能にあることは言ふ迄もないが、實力の件はない內は、一步退いて否な最も健實なる發展を遂げんとする新興政黨は、先づ地方的勢力の涵養に向つて全力を注ぎ、搖ぎなき地盤建設後、漸次中央政治に向ふ可きである。

然かるに幸のことには、新興階級政黨に未だ實力の具備して居ないのを補完するかの如く、比較的に實行性のある政友內閣

は、無意識的に否な策略に幻惑して——國家社會の將來に於ける觀察眼に錯覺を來して、——此處に地租委讓を實行して與れると言ふことであり、從つて將來に於ける新興政黨の發展を共力して與れると言ふことであるから、新興階級は宜しく之れを善導すべきである。たゞ注意しなければならぬことは、地租委讓の實行方法に於いて、財源の捻出資源が、無產階級の負擔に於いて企らまれる時、若くは有產階級のみの負擔輕減の立場から編み出される時は、其の方法に就いて極力反對すべきである。例へば關稅の增率が一面に於いては產業の保護てふ美名に依つて、結局は無產階級の生活壓迫となる生活必需品の騰貴を招致するが如き政策や、復興資金の繰り替へ其の他に依る公債政策に依つて一國の負債額を高め、それに依つて一部特定地主階級の地租輕減を企らむが如き地租委讓案であるならば、斷々乎として反對しなければならぬ。假りに委讓財源として財產稅を新設することは大いに宜しい。けれども新稅に依る增徵の部分を何れの方法に依るも無產階級の負擔に轉嫁せんとする意圖のある場合は、斷じて許さるべきではない。

斯くの如く私共は地租委讓の具體的方法論に渡れば相當吟味しなければならないが、地租委讓そのことには原則として毫も反對する必要はない。寧ろ進むでそれを促進すべきである。彼の貴族院方面の（主として菅原通敬君）「地租の委讓は國體と相容れない」等と云ふ固陋の見解に依つて之れを反對するが如きは、如何にも僞善者的言動であるから、我々は一笑に付して默殺するに止める。

三

之を要するに政友會内閣の地租委讓論は、もと〳〵黨略と政略の結晶に依つて成り立つて居る以外の、何物でもないから、私共は彼等の唱ふる鳴り物入りの方法には、其の實行に移る場合若くは實行後に於いて恐らく幾多の障碍にブツかるであらうことが想像される。其の障碍も、彼等が土地資本主義——及び一般資本主義の上からも——の番兵たる役割を果さんとする場合に於ける根本的障碍——新興階級に對する反對給付としての——であつて、其の障碍こそは軈がて政友會そのものゝ存在的價値をナミする原動力となるかも知れないのである。

從つて地租委讓問題の發展は、委讓方法に於ける財源補充の問題や、委讓の形式論にあるのではない。政友會として地租委讓が得策なるか否かの問題にブツ付かつた時に於いて、初めて政友會が、最も明確に其の階級的立場をムキ出し、民衆の前に其の正體を暴露する時である。然し黨略に狂奔して彼等が此

の根本問題に觸れる心の餘裕を持ち合せて居なかつた時は、恐らくスラ〳〵と地租委讓は實行されるであらう。十七億の大豫算を運用する上に於いて、地租は高々六千四百萬圓の收入であるに過ぎない。戸棚の隈でも掃除するやうな氣易い氣持で、一寸した行政整理か軍縮を斷行しても、捻出出來る金である。況んや一不良銀行を（實際において）救ひ出す爲に、二億の大金を投げ出し、亦財界救濟に名を借り一部投機者流の失敗の尻拭ひに思ひ切つて五億の金をサラケ出さうとした內閣であるから、土地資本主義の忠實なる番兵としての名目が立つなら、將來は知らず、眼前之れが實現方法に就いて鋭意するに相異はない、（と推定して暫く問題の展開傾向に注目を怠らないで居ることとしやう。（六、五日記）

立憲民政黨の政綱を評す

安部磯雄

立憲民政黨の組織せられたことは全國に大なる反響を與へたやうである。民政黨といふ名は確かに民衆の歡迎を受ける名稱であつて、私共の組織する社會民衆黨なども、最初は其名稱を社會民政黨としようといふ說もあつた位で、此文字は民衆に對して親みを持ち、憲本聯合の政黨に此名を選んだことは大なる成功であつたと思ふ。

次に此政黨の選んだ三大綱領に就いて云へば、其第一は外交の正義化、第二は産業の整調、第三は教育の刷新といふことである。之れに對しても私共は大贊成であつて、確かに政治の主要なる點は此三點に在る。少くとも我々が常に高調しなければならないのは右の三點である。殊に我々の歡迎するのは此三大政綱を比較的詳しく說明してあることであつて、而もそれが極めて具體的で、從來の政黨の如く抽象的な事ばかり並べ立てず、更に小さなことに迄も云ひ及んで居ることである。以上の例に依つても民政黨の特色は十分發揮されて居ると思ふが、大體に於いて私共の立場から批難すべき點は餘りないやうに思ふ。既

成政黨としては、恐らく今日まで斯かる綱領を掲げた政黨はないと云つてよからう。併し猶私共から云はしむれば、立憲民政黨は如何に民政黨と稱しても、未だ十分に民衆の政黨となり切つて居ない。私は今一々民政黨の政綱を批評するに當つて、民政黨なるものが未だ何の位無產政黨と距離があるか、其開きがかなり大なるものがあることを玆で述べて見たい。

最初に外交の正義化といふことに對して觀察を下して見よう。民政黨は先づ支那に對する態度を云々して居るが、其要點は第一に支那の內政に對しては絕對不干涉主義を執つて居り、次に日本と支那との關係に就いては出來る丈け合理的手段に依つて善意を以て進むことを云つて居るが、之れは卽ち具體的な例は擧げて居ないが、支那の治外法權問題、關稅問題などに就いて云つたものだと思はれる。果して然らば民政黨は支那に於ける治外法權の撤廢と關稅決定權に對しては賛成の意見を持つて居るらしい。其次に支那の不法行爲に對しては嚴重に抗議し、責任を問ふと云つて居るが之れも察するに南京事件の如きものを指して居るのであらう。之れ丈け は餘り批評すべき點はなく、寧ろ我々としても異存のない所であるが、問題は次に揭げてある、滿蒙の關係は特殊的の位置に在るから我が利權を擁護し、問題に依りては最後の決意をも辭せずといふことである。之れは滿洲に於て鐵道事業とか、或は石炭採掘事業等に就いて日本が幾多の利權を有して居るから、如何なる事があつても飽く迄之れを擁護しなければならぬといふ意見らしい。之れは私共の大い意見を異にする點である。全體一方に外交の正義化を唱へて、一方に滿洲に於ける利權を飽く迄も擁護するといふことが云へるかどうか。現在の支那に於いて最も重要な問題は、日本と云はず歐米各國が支那內地に於いて利權を獲得して居ることである。資本を支那に貸すことは差支ないが、資本を持つて來て自ら資源の開發に從事するといふことは支那が幼稚なる時代には支那自身の爲めにもよかつたかも知れぬが、今日の如く支那が目醒めて來て自己の權利に就いて考へるやうになつた時代には、各國の態度は自ら變らねばならぬ筈である。外交の正義化といふ意味から云へば、各國は協議の上支那に於いて獲得した利權を當然放棄すべきである。それを放棄するといふことは從來投下した資本を無償で支那に引渡すといふことではなく、相當の報償を得ることは當然であるが、只何時迄も支那に於いて從來の如き利權獲得を續けることは、常に種々の問題を惹起して其度毎に支那政府をして困難な地位に陷らしむるのであるから、或時期に於いて各國が相談の上支那から手を引き、從來の利權は代價に見積つて幾何と定め、之れを支那に對する資本

を貸す形式にして、それに對する利子丈けを各國が取るといふことにすれば好い。日本の所有して居る滿鐵の如きもさうすべきであつて、若し各國がさういふ方針に出るならば、日本は當然贊成すべきである。之れが私共の所謂外交の正義化であつて、一度血を流して取つたものは何んなことがあつても返さないといふことは外交の正義化とは云はれぬ。若し滿洲の利權を、民政黨のやうに、最後の決意を辭せぬとして之を擁護するならば、寧ろ外交の正義化といふが如き文字は用ひぬ方がいゝ。此點無產政黨とは非常に異る所であつて、無產政黨は飽迄も帝國主義に反對する。我々個人の間に於いても掠奪を行ひ、搾取を行ふことに絕對に反對する無產政黨は、國際上に於いても共主義に依つて進むことは當然であり、民政黨と無產政黨との間に意見の距離のあることを示して居る。

第二は產業問題に就いてゞある。これは民政黨が殊に力を入れて主張して居る點であるが、私共が觀て最も共鳴する點も亦此處にあると思ふ。今其箇條書の順序を追へば

第一、產業政策の全般に亘り主として消費者の利益を擁護す

第二、動力及び資源の利用開發に當りても經營者の利益を一般公衆の利益に合致せしめる

(イ)資本に對する利益配當の最高率を定める

(ロ)料金の最高限を認可制に依り制限す

(ハ)電力の普及、及び料金の低下を計る

(ニ)水源地の自治體に報償契約を締結させる

第三、金融制度の根本的改善を行ふ爲め特殊銀行の體系を正し、其機能を發揮せしめ基礎を鞏固ならしめる

第四、日本銀行をして中央銀行たる機能を發揮せしめ、通貨に伸縮性を與へ、預金準備を中央銀行に統一して一般銀行の通貨管理をなす

第五、中產階級、無產階級の利便を圖る爲め庶民銀行、信用組合を整備し、其機能を發揮せしめる

第六、重要產業の保護助成に留意し、製鐵奬勵法、燃料調査會、主要工業助成委員會等の研究に基き系統的に發達せしめる

以上擧げた所を見れば民政黨の主張は頗る立派なものだと云へる。消費者の利益を擁護するといふ第一の點は、從來の政治家の其點に充分氣づいて居なかつた處であつて、之れに對しては私共は無論贊成する者である。第二の動力及び資源の利用開發に關する意見も亦我々の大に贊成する所であるが、乍併其贊成といふことは無論條件付であることを忘れてはならない。それは私共が最後の目的に向つて進む道程の中間的政策としては贊成であるが、それは決して私共の最後の目的ではないことを明

言して置かなければならない。無産政黨の立場から云へば之等の政策は單に應急的性質のものであつて、決して産業問題を徹底的に解決する根本策ではない。何故ならば私共の主張する處は重要産業の社會化といふことであつて、換言すれば重要産業のみならず總ゆる産業を國有とする事にあるからである。例へば利益配當率の制限といふやうなことも、今日のやうな政黨政治の下に於いては幾らでも誤魔化す方法がある。如何に電力を普及せしめ、料金を低下せしめるといつても現在の政黨の力では容易に之れを徹底せしめることは不可能である。若し之れが出來る位ならば總ゆる産業の國有といふことを實行した方が遙かに有利である。何故ならば現在の産業組織の根本的弊害は、其組織それ自體が統一を缺いて居る點にあるのであつて、或意味に於いては産業界には無制限の競爭が行はれ、恰も我國に於ける元龜、天正の時代を現出して居るといつても差支ない狀態であるが、それが爲めに我産業界には如何に大なる浪費が行はれてゐるか知れない位であつて、斯くの如き狀態を改善するがためには到底民政黨の主張する如き政策を以てしては不可能であるからである。故に無産政黨は産業統一の爲めに總ゆる産業の國有を主張するのである。又次に民政黨は特殊銀行及び其他の金融機關に關する改善策を公にして居るが、金融機關の如きは我々の平常主張するが如く最先に國有にすべき筈であつて、殊に先般の經濟界の恐慌に鑑みても、金融機關を個人の營利事業に任すことには絕對に反對せざるを得ない。無産政黨は恐らく如何なる産業よりも、先づ第一に銀行業と保險事業の國有を主張する事に就いては殆ど意見が一致して居ると云つてよい。

最後の教育問題に就いて云へば、民政黨の意見の大意は、第一、優良兒童に中等教育及高等教育を受けることの出來る機會を與へる。第二、詰込主義の教育を打破する。第三、中學入學者と實業學校入學者の差を貧富に依らずして才能の區別に依る事、第四、徒弟、職工、官公署の給仕に再び就學の途を與へること、第五、大學と社會を接近せしめる事、第六、大學及び專門學校をして産業の指導に當らしめること、第七、小學及中學の教師に就學の途を與へる事、等であつて、以上が大體民政黨の教育問題に對する主張であるが、之等を見ても極めて具體的であつて、私共は之れに賛成の意を表する外はない。勿論其一々に就いて云へば多少我々と意見を異にする所もある。併し大體に於いて産業問題に於ける場合と同じく理想に達する道程の中間的方法として之を認めざるを得ない。唯、私共は何故に民政黨がもつと根本的の問題に觸れなかつたかを疑ふ者である。既に政友會あたりでも唱へて居る處であるが、現代の教育

問題の最も重要なるものは劃一的教育の打破である。詰込主義の教育の打破といふが如きは抑々末であつて、現代の教育の弊害は寧ろ劃一教育に在る。教育は其任に當る教育者の考に依つて行はるべきものであると私共は信ずるが、國家として考へて見ても同種類の學校教育があるよりも、種々樣々な教育法が行はれた方が遙かに有利である。斯くすれば其間に自然競爭が行はれるために良き教育法は漸次勢力を得ることになつて劃一教育の弊害は改善されることになるであらう。更に私共が必要と感じることは專門學校以上の學校に於いては全部試驗制度を廢止することである。今日の如く試驗を行ふて卒業證書を與へることは我國の教育を墮落せしめた最大の原因である。學校は單に教育を授ける場所であつて、卒業證書を與へる場所ではない。現在の教育制度を維持すれば大學を卒業した者は必ず社會に於ける特權階級とならう。若し試驗制度を廢止して卒業證書を與へないことにすれば、所謂特權階級なるものがなくなつて、其處に初て實力の競爭が行はれることになる。無產政黨の主張する處も此教育的特權階級を打破する事にあると信ずる。

以上述べた處は單に立憲民政黨の綱領政策を大體批評したに止めたが、私一箇としては、前にも云つた如く、之等の綱領政策に對しては贊意を表する。若し之等の政綱政策が實行されることになれば、それ丈けでも我國は非常に幸福な狀態に進むことが出來ると信ずる。若し今後に於いて民政黨と政友會とが相對立することになり、又來年の總選擧に於いて多少の無產黨議員が選出されることになれば、無產政黨は大體に於いて民政黨を援助することになりはしないかと思ふ。併しながら政綱政策の實行といふことは全く別問題であるから、民政黨が果して之等の進歩的政綱政策を何の程度迄實現し得るゝかゞ今後の注目すべき點である。

英露斷交は何を意味するか

松原一雄

◇

國際間には矛盾が多い、大なる矛盾が尠くない。歐洲が經濟會議を開いたり、關稅の障壁撤廢を叫んだりして、經濟復興に腐心して居るかと思へば、一方には英露の國交斷絕が始まつたり、經濟斷交が行はれんとして居る如き其一つの例である。

五月二十六日英國議會は露國との國交斷絕を討議するに當り、外相チェーンバレンは露國が支那其他に於て或は反英宣傳を行ひ、或は兵器金錢を不穩分子に供給することにより、英國の利益を危殆ならしめたる證據を有する次第を擧げて、露國の反英的活動は外國に於て行はれるのみならず、今や英本國に迄も及んで居ることを述べジノヴィエフ書翰は決して英國に入りたる此種の文書として唯一のものではないことを指摘し、『斯の如き事情の下に英露間國交を維持するは無益である、吾々は我慢が出來る丈け我慢したが最早此れ以上我慢は出來ない。此れ以上の我慢は女々しい我慢である。吾々は他國を誘ふて吾々の道伴れとするつもりではないが、我英國政府としては從來斷えざる紛糾及び危險の源泉となつた露國との外交關係を此の上維持するの責任をとることは出來ない』と云ふて、斷交の必要を力說し、以て政府に對する信任決議を求めた。同時に內務大臣はアルコス・ハウス搜索事件の結果を擧げて、露國の通商代表公館が英國の軍事秘密を探ぐる爲めの間諜事務所として使用せられつゝあつた次第を述べ、外務大臣の演說に唱和した。信任投票に勝利を得た英國政府は直ちに一九二一年の英露通商協定の終了及英露外交關係の斷絕を通告する公文を露國代表者に交付した。右の公文に接した露國政府は其回答に於て英國政府の總ての難詰に對して反駁を試み『自分方には通商協定に違反したる覺えはない、英國政府の難詰は怪しい白色移住者や僞造文書に基くものに過ぎない。露國通商代表が間諜行爲を爲したと云ふが如きは揣摩するほどの價値を認めない。六ケ月の豫告なくして通商協定を廢止するが如きは同協定の明文に背くものである。要するに今回英國が露國に對して斷交の手段に出でたのは、保守黨內閣が對支政策に失敗した其テレ隱しに過ぎない。アルコス・ハウス手入れ事件で失策をした英國內務大臣を其窮地より救はんとする輿論瞞着手段に外ならぬものである。英露斷交の結果國際關係は政治上經濟上愈々混亂狀態に陥るであらう大戰以來歐洲を苦しめて居つた經濟的混沌は愈々甚だしきを加ふるであらう平和は甚大の打擊を被むるであらう』と述べてある。

◇

今回の英露斷交は決して突發したものではない。英國側では此れ迄屢々露國に對して反英宣傳を止めることを要求した、其聽かれない場合には國交の斷絶亦た已むを得ないと露國政府に申送つたこともある（本年二月二十三日の公文）。回顧するに一九二一年の英露通商協定は其効力の條件として露國が直接又は間接に反英宣傳を行ふことなかるべく、殊にアジアに於て、就中インド及びアフガニスタンに於て軍事上、外交上其他の反英的行動又は宣傳を企圖するとなかるべきを冒頭に先づ特筆大書してある。否右の通商協定は英國としては露國の反英宣傳を牽制し防止するを目的としたもので、實に反英宣傳の停止は該協定により英國政府が勞農政府を事實上に承認した交換條件であつた。該協定には一方當事者が右の『條件』に違反する場合には他方當事者は直ちに本協定の義務を免かるる旨の規定がある。『六箇月云々』の文句もあるが、右の場合に適用あるものであらうか。此種解釋上の問題は姑らく措くとして、右協定成立後間もなく英露の間に宣傳問題で論爭を始めた。即ち一九二三年の春カーズン卿はチチエリンに宛てた公文に於て露國の反英宣傳を詰つた。其結果は却て益々露國の反英行動を激甚ならしめたに過ぎなかつた。翌一九二四年の十一月にはチエーンバレン外相も亦露國の宣傳運動に對して抗議する所あつた。これも何等英國に取り有利なる反響を見なかつた。客年英國の大ストライキは露國の聲援否後援に出でるものであるとして、保守黨連中は對露斷交を政府に迫つたとき（客年六月）、上院に於てはバルフオーア卿、下院に於てはチエーンバレン外相、何れも共に、英露の斷交は獨り英露の關係に止まらずして、歐洲一般の經濟界に多大の惡影響を及ぼすべきを說いた。政治的不安は一般の經濟狀態を愈々窮地に陷し入るべきを談り、之を避くるは各國政治家の任務なるべきことを力說した。然るに其チエーンバレン外相は本年二月二十三日に至つては露國の前記通商協定違反を責めた強い抗議文を露國につき付けた。其中にはブハリンが共產黨會合の席上に爲した演說も引用せられてある、『プロレタリヤが世界革命に全力を注ぐの用意がある。』とか、『共產黨が英國のストライキや支那の革命騷ぎに際し前線に現はれた』といふやうな文句が右の演說中に見出さたる。英國外相は前記公文に於て英國輿論の忍耐にも限度があることを暗示し、勞農政府にして通商協定上の義務を守り、反英宣傳を止めなければ、英國政府は外交關係を斷絶するの已むなきに至るであらうと明示してある。右の公文を見てチエーンバレンの對露方針の急變を評

よかつた人は今回の斷交實行により更らに驚かされたであらう

◇

英露斷交は法律上からも、政治上からも、軍事上からも、將た經濟上からも觀察せらるべきものである。法律上から見て今回の斷交は英國政府が露國政府の承認を取消したものとも見るべきであらうか。(因みに英國は一九二四年二月一日マクドナルド内閣のときに露國政府を正式に承認した)。國際法上『政府の承認が取消し得るものであるや否やは議論の餘地がある問題であるが、國交斷絕は政府の承認を取消したと同じ結果になる。即ち國交斷絕とは相手の政府とは將來政府としての交際をしない、否之を相手にして話をしないと云ふ意思表示である。別言すればこれまで相手にして居つた政府を今後は一切相手にしないと云ふことにしたのである。相手にしない、即ち絕交すると云ふことは必ずしも毆ぐり合ふと云ふことではない。國交斷絕其ものは戰爭ではない。英露兩國は未だ戰爭狀態に入つたものではない。しかし絕交したものが出遇へば毆ぐり會ひを初め易いと同じやうに、國交斷絕は戰爭を招き易い傾きを有するは勿論である。英露の兩國は果して其內、戰爭を初めるであらうか。露國當局者は露國に和戰兩樣の準備があることを述べ、右の斷交を以て『兩國開戰の第一步』であると揚言して居るやうに見受けられるが、人民に戰意ありや、國庫に戰費ありやを考ふるとき、英露の開戰は事實上の可能性に於て大に疑問と云はざるを得ない。

◇

それ然り、法律上軍事上の考察に於ては英露の間斷交あるも未だ戰爭なく、今後も差當り戰爭がありそうにも想はれぬと云ふべきであらうが、他の意味に於て、即ち政治上、社會上の考察に於ては果して英露現在の關係否從來の關係は一種の戰爭狀態であると云ふべきものではなからうか。勞農政府は共產主義を旗幟とし世界革命を鼓吹する。ソヴエートは資本主義帝國主義の代表者としての英國に對し既に戰爭を宣言し否戰爭を實行しつつあるものではないであらうか。所謂民族自決主義を標榜して被壓民人の解放を唱道するは英帝國に對する政治的社會的宣戰ではないであらうか。一九二〇年九月バクーに於ける第一回共產黨東洋大會の宣言では明かに英國に對する神聖戰爭を宣言せるものである。古典的意義に於ける戰爭は國家間兵力による爭であるが、ソヴエート式の戰爭は主義を旗幟とし宣傳を武器とする新式の戰爭である。加之間諜とか軍事組織とかも固よ

り右の宣傳戰爭に利用せられつつあるやに傳へられる。ソヴエート側自身之を『戰爭』と稱して居るやうである。又宣傳による戰爭は假令『戰爭』でないにしても、少くも一種の『干涉』である。他國の內政に對する干涉である。隱密の手段により他國の內政に立ち入り、其の政府を顚覆し、政體を變更し、社會組織を變革せんと企つるものである。學者は從來の干涉――兵力を背景とする干涉―即ち公然たる干涉に對し右種の干涉を指して『隱れたる干涉』又は『秘密の干涉』と云ふて居る。兎に角新しい干涉の形式である。國際法學者中ソヴエート露國が從來の國際法に對しても一大革命を起さんとしつつあるを說くものがある。何れにせよ『戰爭』『干涉』『外交』等の文字はソヴエートの爲めに新意義が付せられんとして居る。『外交』にしてもソヴエート政府は政府と第三インターナショナルとの使ひ分けをしやうとして居るが、此の主張は英國の現政府のみならず、前勞働內閣首班マクドナルドすらも首肯しない所である。氏はソヴエート政府の『法律上の承認』を敢行した人であるが、依つて以てソヴエートを懷柔し反英宣傳の鋭鋒を挫かんとした氏の希望は水泡に歸した。此希望は不可能を望むものである。ソヴエートは英國と氷炭相容れざる主義の戰爭に從事するものである。右の主義實行の爲めには、ソヴエートとしてはどうして英國に――其本國と殖民地と勢力範圍とを問はず――手を付けなければならぬ。マクドナルドにして英露兩國は相互に『ハンヅ・オウ』の態度を取るべきことを提唱するも、それはソヴエート露國の關する限り出來ない相談と云はねばならぬ。

◇

英露斷交の經濟的意義に至つては最も複雜である。國交斷絕は事實上兩國の通商を困難ならしめる。英國側では正當なる通商を禁止する意思はないと云ふて居るやうであるが（或は對露封鎖を行ふの意思なきの義か）、露國側では却て英國の此態度を嘲つてゐるやうにも見える。英露の國交斷絕は其經濟斷交を伴ふものとして、之に苦しむものは兩國の內何れであらうか。兩國は何れも、自分の方は苦痛を感ぜぬ、苦むのは相手方であると揚言して居る。しかし議會や操觚界では兩國斷交の影響は獨り兩國のみに止まらずして、歐洲一般にも及ぶべきことが懸念せられて居る。英露の斷交殊に經濟斷交は、他國の之に對する態度如何によりて其重大性に增減がある。他國が果して之に參加するであらうか、參加するとしても何れに追從するであらうか、目下の處疑問である。伊國は最近ベッサラビア問題について反露的態度を明かにした傾向がないでもないが、佛國は果して之に

共鳴するであらうか。ルーマニアとの關係其他大小の原因は佛國をして反露的、従て贊英的ならしめるとしても、獨逸は果して如何にロカルノ條約とベルリン條約との使ひ分けをするであらうか。バルカン諸邦やバルト諸州の向背は如何であらうか。此れ等は事多く將來に屬し、今から豫測を逞しうすることは出來ないが、兎に角歐洲が英露の二大分野に割れて、經濟的に政治的に相爭ふこととなれば、大した騷ぎと云はなければならぬ。假令二大分野を現前しなくとも、勢の迸る所之を阻止しなければ、大混沌狀態に陷らぬとは限らぬ。事玆に至れば東洋も亦飛沫を受けぬとは限らぬ。右の勢は何時何國が之を阻止するであらうか。英露の國交は如何にして回復を見るであらうか。兩國の何れが果して先づ悲鳴を擧げるであらうか。米國が歐洲のことについては例のモンロー主義否超然主義を執るとせば、獨逸、佛蘭西の如き果して調停役が勤まるであらうか。それともソヴエート巨頭連の理想とするところが實現に近づくものであらうか。或は一部英國人士の豫期する如く、彼等巨頭連の壽命には限りがあつて、而かも後繼者を見出すに苦しんで居ることであるから、彼等の理想も其天壽の終ると共に終りを告ぐるものであると、觀測すべきであらうか。此等の大きな問題は此一小論說のよく扱ひ得る所でもなければ、玆に私の考察せんとする所でもない。唯私は、露國の革命を考へんとするものは、佛國革命の史實を回顧することにより、多大の教訓を得るであらうと思惟せられる旨を述べて、筆を擱く次第である。(昭和二年六月上旬)

外交及び外交史研究

松原一雄著

近世の世界史は一面外交史とも云へよう。少くも近世一般世界史を理解して世界公民としての教養を備ふる爲には、近世外交上の諸問題及び其等が如何に處理されたかを識る事は必須の要項である。

本書は外交史研究の一權威たる著者が理論と實際とを結び付けんとする方法を採つて外交諸問題を取扱ひ、第一篇には外交理論上の諸問題、第二篇以下第七篇まではそれ〲國際會議、同盟及協商、近東問題、亞弗利加問題、太平洋問題と極東問題、最近の諸問題と、問題を系統的に配分して各々詳細に解說論評して、外交及外交史學の統合的な概論とせられたものである。隨所に各問題に關係ある重要なる外交文書の本文が挿入され、又豐富なる參考文獻の記載せられたる等、著者が研究の學術的價値は論を俟たず、著書としてもその用意親切の周到なるは此種著作中の基準的なるものと云ふべきであらう。

因に只一つ望蜀の歎を述ぶるを許されるならば、劵末に索引を附錄せられたならば繙讀の便に資する所多大と思ふ。(定價六圓五十錢東京日本橋區通三丁目丸善株式會社)

現代思潮とヒロイズムの交錯

杉森孝次郎

(一) 機械時代のヘロイズム

ヘロイズムは道具時代、農業時代、狩獵時代の特產物だつた。

狩獵は掠奪だ。天然と動物自身が生產した結果を勇氣と腕力と多少の智略を方法として取つてわがものとする。そして消費する。その勇氣と腕力と多少の智略とは個人を分母として、その分母と同數の分子であるか、あるひはそれに近い數の分子であるを常とした。

勤勞は狩獵時代に於ける日かげものだつた。緣の下の力持だつた。險を冒して野獸を殪すだけがヒーローの仕事。斃獸を持ち歸る勞をみづからとるが如きは恥の禁物だつた。それは部下、近所界隈の臆病者の職分だつた。料理も同樣に妻女や臆病男どもの任務だつた。

當時のヘロイズムは勇氣、腕力、多少の智略を個人的規模に於て社會化することを意味するものであつたのだ。その社會化は社會價値化だが、ヒーロー當人の興味は、それを方法として名聲と權力を一身に買ひ求めるにあつた。

農業は、それの方法内に天氣を持ち、それの目的物に生命がある。そして全體の規模は個人的、少數協力的だ。天氣の無賴

伝と生命の不思議とは、空想と神秘と專制と屈從とを刺戟することによつて當時のヘロイズムに反映した。

人間が自然を征服せず、主として自然に征服された當時、暴風、酷熱、大海洋、嶮、峻嶺、深山、幽谷、曠野等々が、人間界の強者をばそれらを氣取る、模倣するかたちに於て、人間界の弱者をばそれらに對する畏拜を強者に對する自分たちの態度に移植するかたちに於て感化することによつて、いかにヘロイズムを助成したかは、極めて有望な研究題目の一であらねばならぬ。

道具時代はヘロイズムに對する仕上げだつた。いはんやまた道具時代に於ては、個人用的武器としての道具の極致的發達もあつた。その武器を使用する技術、即ちいはゆる武藝も、その時代に於ては極致化して一藝術、一信仰とさへなつた。武道には信仰的位置がある。

道具は個人主義を奬勵する。それが造られる過程に於て然り。それが使用される全過程に於て然り。それがその製作者、使用者に與へる利益、名譽に於て然り。

刀工殊に有名なる刀工の場合を想へ。武人殊に有名なる武人の場合を想へ。虎徹と近藤勇とを例として想へ。

手工業は一人の立法及び行政を、器物生產のかたちに於て意味する。かれは先づ構想する。しかるのち、かれはかれ自身の意思によつてかれ自身の手を動かし、その手を動かすことによつて道具を動かし、その道具を動かすことによつて礦材、鐵材、木材の世界の秩序を、その構想を物現するかたちに於て變革する。かれの品性と能力が物的に表現される完全なる一機會がそこに成り立つ。

因果律を超越することはできないが、因果律を支配すること、それを使用することはできる。手工業と道具使用とは、その支配、使用が可能である限りに於て個人的自由を構成する。競爭、優越、名譽の諸本能が個人單位に於て解放される。ヘロイズムがそこに成長する。

以上は機械以前だ。機械時代に入つて事情は全く一變する。

機械は、あらゆる關係に於て集團主義を奬勵する。機械は集團力を待つてはじめて作業する。機械の發達は生活をいよ／＼社會化する。いよ／＼社會化された生活が新基底となつて、機械が必要とする集團力の規模は更に增大する。個人的ヘロイズムはこれに反比例して退縮する。

大砲が發明されては鎭西八郎の強弓長箭は實用を失ふ。

機械は、道具に比して自動的だ。その自動が關する限り、ヘロイズムの成り立つ機會はない。それは機械の功績であつて、

個人の功績ではないからだ。それが科學の功績だとはいへる。しかし、いはゆるヘロイズムにとつて科學は或かたちに於て外在的、超在的な一物だ。科學界のヒーローといふ語は今日なほ不熟だ。

武器と武藝が科學的、機械的、集團的形式を主として取るに至つたといふ時代的一變化は、いはゆるヘロイズムの總般的廢用化を反映する。

一つの新個人主義としてのヘロイズムは、しかしながら、現代を條件として可能だ。集團人、社會人としての資格に於ては、人は機械を自由に使用しうる。その資格においての、自覺に於いての個々人は、道具時代の工匠、名人、ヒーローが道具を自由に使用したやうに、いかなる發達した機械をも自由に使用しうる。

新時代のヒーローは、經濟的生産及び分配の世界における末梢的行動を機會としては成り立たない。科學及び技術が關する限り、その世界に於てはそれは成り立つ。

社會科學の世界、いな廣く人間科學の世界、及び社會經營の世界に於ては、物的科學及び技術の世界に於けると同様に、ヘロイズムの自由と必要が無限だ。

新時代のヘロイズムは社會的使用主義を原則とする。單なる所有主義は、それの經濟的及び政治的各種形に於て、新時代のヘロイズムの鬼門だ。レーニンにも、ガンヂにもその原則の片影は明確に看取される。

善き制度内に於てその制度を最善に行使することは今なほ昔の如くにヘロイズムの一方法だが、惡しき制度を善き制度に變へる行動が殊に新時代のヘロイズムだ。現存の制度に對する誠忠はヘロイズムの第一義ではない。ヘロイズムの第一義は現存の制度が人間性の根本目的にいかに誠忠であるかを問ひ、それを十分にそれに誠忠なものにして持つ決意とその決意の遂果だ。

制度は見えざる機械だ。機械を使用する如くに制度を使用することが、即ち機械に使用されず機械を使用する如くに、制度に使用されず制度を使用することが新ヘロイズムの一要點だ。

新ヘロイズムは、かくして、正しき意味に於ての社會科學、人間科學、したがつて社會學、心理學、倫理學、政治學、經濟學、教育學を條件とする。

知識は力だと、新時代のヒーローは、技術と藝工を豫言するかたちに於てではなく、立法と行政を新綜合するかたちに於て主張する。

機械は獨りで動きだしたものではない。最初からあつたものでもない。自然に形成されたものでもない。機械の原因は科學

及び技術だ。兩者ともに人間を意味する。人は個人として最も眞實であることは生物學的一事實だ。新個人主義としての新ヘロイズムは同胞生類を幹臺とせず、機械をのみ幹臺として高く、總てに幸福を實現する變革だ。その點に於てこれはニーチエと聯想されるヘロイズムから異なる。新ヘロイズムは、すくなくとも人類としての生類が闘する限り、一擧にして愛己主義及び愛他主義だ。他にとつて手段、自己にとつて目的である生活をそれは目的とする。

新ヘロイズムは、科學を武器として自然を掠奪するものだ。新ヘロイズムの臣僕は機械だ。新ヘロイズムは人間に對しては威張らない、敬愛する。

（二）ヒロイズムの復活

藤森成吉

幾何の英雄崇拜が日本に復活し初めてゐるらしい。然し、それには凡そ二種又は三種を數へられやう。

第一は、デモクラシーの沒落過程、もツと詳しく云へば資本主義が帝國主義的段階を取るに伴つて、必然的に與つて來るところの獨裁的專制的傾向、それを人間に具體化する事によつて生じる英雄崇拜心だ。

その最も適切な一例が、最近の新渡戸稻造博士の思想に窺はれる。博士は、私がかねて人として隨分尊敬し、就中最もいい意味での日本の個人主義の體現者として推してゐる人格だ。吉野博士なぞがデモクラチックな思想を持つてゐられる以上に、博士は趣味乃至教養に於けるそれを持つてゐられる人ではないか。その博士が、五月の「文藝春秋」座談會で鶴見祐輔氏その他に對して吐露されてゐる感懐を見ると、明かにファシズムへ行かうとされてゐる事がわかる。單にファシズムを認めるばかりでなく、それに充分同感してゐられるのだ。

具體的にこれを擧げるなら、博士はムツソリニを「ワシント

ン以上の人だと思」ひ、レーニンと彼とを比較して、「レーニンは僕は知らない」が、「確かに現代の二大傾向を代表してゐるもの」で、「ムッソリニの方が餘計わかるやうに感ずる。」「そのムッソリニは、どんな政治的態度を取つてゐる人物であるか？　博士に從へば、「中に入つて見るとひどい事もやつてゐるそうですがね。金持悉く殺されて了ふと云ふやうな、……ムッソリニに反對の代議士を出してゐる所なんと云ふものは、女子供までやつてゐるそうです。有りそうな事ですね。併しながら、それと同時に、一方には津々浦々に到るまで恩典の及んだところもある——。」「その恩惠は、主として施設の敏速、規律、統制と云つた點にある。然しそれは、デモクラシイによつては遂せられないか？　博士によれば、イギリスのやうな國民的訓練の行き屆いてゐる國なら代議政體もいゝ、然し、「僕は所謂デモクラシイに愛想をつかしてゐる。」「それを鶴見氏は補つて、「此の頃のヨオロッパの思想的混亂に、デモクラシイが凡庸政治に陷つて我がまゝになつて來た、ムッソリニのやうな英雄主義か、カアライルのやうな人が出なければ國はよくならぬ、と云ふお感じではないのですか？」と訊き、博士は肯定されて見える。

これは實に興味ある思想的轉變だ。無論博士の心理を解剖すれば、資本の帝國主義的段階と云ふ背景以上（正確には以前）の物がある。それは、「ブシドウ」の著者にふさはしい封建的殘滓だ。即ち博士は、未だに「カアライルかぶれ」なのだ。カアライルの「英雄崇拜論」その他の著作を愛好されてゐた事は、私なぞまだ一高生徒の、從つて博士が當時の校長時代に於ける鮮かな印象だ。これは、單に博士の年少時代の教育の然らしめるところだらうか？　それであつてもいい。それは即ち、博士の血肉を、封建的思想と立憲的（資本主義的）思想と帝國主義的思想とが順次に、或は同時に貫通し浸透してゐることを證據立てる。日本のやうな、封鎖的封建制度が急激に崩れて、然も更に慌しく帝國主義的段階に入つたやうな國では、一個の人格の中に此の三つが含まれてゐる事は、唯物的辨證法によつて當然すぎる事だ。

以上要約すれば、博士のうちにはなほ古い英雄崇拜心が殘存し、それが政治的經濟的現段階と美事に結合して、ここに政治的にはファスシズムを、人間としては「偉人」や「大人物」を要求されてゐるのだ。此の事は、單に博士にとどまらず、殆んど博士の息子ほど若い、完全に一時代新しく、然も博士と若干の相似點を持つ鶴見氏に於いてさへ、明瞭に看取される。「デモクラシイが凡庸政治に陷つて我がまゝになつて來た」の、デモクラシイに幻滅を感じた、のと云ふ意義は、時代批判として見

る時は極めて膚淺だ。その感情と心理の底に横はる時代的基礎を、人はよろしく見とほさなければいけない。

以上で、英雄崇拜心復活の第一種の說明（現象と理由との）は充分すぎるだらう。第二種に來るものは、社會主義運動の實際的狀勢に發する。

前述の新渡戸博士は、ムツソリニとレーニンとを比較してゐられる。又鶴見氏も、「共產黨と議會主義の反對は、ムツソリニの傾向でございますね。それが議會主義ではいけないと云ふので、獨裁主義の傾向が非常に盛んになつて來てゐると云ふ風な感じが、今日本にあるのです。」と云つてゐる。氏の言葉によれば、共產黨とムツソリニ主義とは共に獨裁主義の範疇に屬するかのやうに見える。無論屬しなくはない。尠くとも言葉の上だけでも。——然し、ムツソリニが個人的獨裁なのに對して、ロシアのそれは無產階級獨裁なのだ。後者は全く階級に依歸してゐるのだ。レーニンは、實にその階級の一代表者たるに過ぎない。

然し、同じ階級の中でも前衛の分子がある。これが、始終階級を、黨を、又團體を率ゐてゐるのだ。「指導」と云ふ常用語は、それ自身決して氣もちのいゝ言葉ではない。然しながら、前衛の分子がなくては、又その必死の熱烈な鬪爭がなくては、現實の無產階級運動はあり得ない。自覺者は何より必要だ。そして精銳的自覺者はいつも多數ではない。同時に運動には、又團體には、指揮と統制が不可缺だ。そこに、當然能力と人物を必要とする。此の意味で、或る新しい「ヒロイズム」の觀念が生じる。

然しながら、此の觀念は決して封建的のそれであつてはならない。大衆を、その意志と感情を代表しないところにすでに何の人物があるか？個人はあくまでも階級意志の表現であり、階級は決して個人意志の表現ではない。ある事が出來ないと同時に、あらせてはならない。あらうとする封建的ヒロイズムに呪あれ！又そうでなくとも、たとへばレーニンの如き偉大な人物を見て——その偉大な事を誰か否定出來やう！——英雄崇拜心にも一理があると考へるやうな愚を繰り返してはいけない。偉大を愛せよ。才能を重んぜよ。然もそれはあくまで新しい社會的意味に於いてだ。

第三に文藝上のヒロイズムの復活が來るだらう。

自然主義は、文學史上劃時代的な英雄否定運動だつた。それは、資本主義勃興に伴ふ「民衆の力」の承認と強調に依つてゐる。それが、人道主義や新ローマン派へ來て、再び偉人や天才の賞讃に入つた。これは、一方から云へば、藝術に於ける個性

の確認の必然的現象だつたとも云へやう。だが、「人間凡人主義」が古ければ、「眞勇主義」も古い。現代に、もしかう云つた要求が直接文藝へ反映して來るとすれば、それは實に現社會が革命を必要とし、その革命が意志を必要とする事に依るのだ。詳細は枚數がないから略く。

(三) デモクラシーの馬脚

高畠素之

一

今はむかし、米國が世界大戰に參加しようといふとき、當時の大統領ウイルソンは『世界をデモクラシーのためのヨリ良き棲家』たらしめることを理由に掲げた。何がさて戰爭の口實を、神樣の思召しで片づけようとしてゐた時分だから、彼れによつてなされたこの聲明は甚だしく聯合國民の人氣に投合し、やがてヴエルサイユの王者たる榮冠を與へられたのである。その結果、國際聯盟だ軍備協定だといふやうな提案も承認されたが、かうした形勢を目前にした人々は、誰ひとり大戰後の世界がデモクラシーのために多幸なるべきを疑はなかつた。

然るに事實は豫想を裏切り、年と共に世界はデモクラシーのためのヨリ惡しき棲家たる觀を呈し、今ではむしろ、世界大戰がオートクラシーの出現に貢献したことが立證されるに至つた。ボリシエヰキ・ロシヤとフアスシスチ・イタリヤの存在はそれを有力に物語つてゐるが、これを兩翼の筆頭とする各國とても、左右いづれかの意味で獨裁專制の傾向をくはへ、皮相的にはどうやら戰前の遙か以前の形勢に逆轉した事實さへ認められる。

斯くして時代の人心まで、何かなし壓力的なものに偶像的信賴の對象を求めるやうになり、世界を擧げていはゆる『反動的』な時代色を濃厚にしてゐる。レーニンとムツソリーニを頭

西の大關とし、トルコのケマル、スペインのリヴエラ、ギリシヤのパンガロス、ペルシヤのリザ・カーン、モロツコのアブデル・クリム、メキシコのカリエス、支那の蔣介石等、その他ラテン・アメリカや回教アジヤの諸國には、甚だ多くの偶像的英雄が彼等の國民から支持されてゐるのである。更らに先進國と呼ばれる諸國にあつても、ヒンデンブルグやポアンカレーが、骨董品ながらに國民の偶像崇拜感を滿足せしめ得るといふので第一線に起用され、英國は保守黨政府が組合斷壓法案を提出する、米國は大統領の獨裁權を增加する、日本は上下を擧げて劍劇に蕩醉する、これでは當分、デモクラシーが彼れのためのヨリ良き棲家を發見するだらうとは考へられない。思へばウイルソンもいゝ時に死んだものである。

二

元來デモクラシーは、強者に對する弱者の抗議を巧言令色した理屈である。隨つてそれは、人間の天性を惡と觀念することに出發し、制度上の新工夫を以つて惡の發揮を相互的に牽制することに展開した。例へば立法權に對する國民的參加の過程として見たる選擧法の改正に於いて、新興ブルヂオアが封建貴族の手から政權を移動する詐術として考案した最初の意味は、やがて後身プロレタリアに適用されることとなつて面目を一新し、招かさる客の普選をさへ認容しなければならなかつたのである。

加ふるにデモクラシーは、漏れなき萬人の幸福を約束する意味で、單なる多數意見のみならず少數意見をも反映せしめねばならぬ。それがためには、比例代表制や複合代表制の精神を加味するとか、或は議會を超越したるレフエレンダムやエニシアチヴやリコオルやの直接的方法を採用するとか、いやが上にも政治の機構を複雜ならしめた憾みがおほい。デモクラシーが弱者の武器であるかぎり、換言すれば強者の專制を極度に警戒するかぎり、拙速を尊ぶ政務の運用に支障を來たすのは當然であらう。

斯くして近代の政治はメカニズムの弊害を遺憾なく暴露した。ただそれなりに、適當な政治形態の創造が困難だといふやうな理由から、議會政治を唯一最上のものと思ひこんでゐたのであるが、最初の宣戰布告はムツソリーニによつて發せられた。彼れは先づ目前の小黨分立を破壞する必要上、一黨專制を強行し得るやう目茶苦茶な選擧法改正をなし、議會を單なる形式的な存在たらしめたのである。一方これよりさき、レーニンは獨創的なサヴエート組織によつて一黨の專制を可能ならしめ、形

式的にも議會によらざる政治の可能を立證してゐたが、何づれも閉錐塔の頂點に君臨する獨裁者として彼等の位置を強持した點は共通する。

伊露兩國に於ける如上の實驗は、標示する主義と施行する政策の如何を問はず、政治はかならずしも議會による必要がないことを立證し得た。そこで議會を神聖視する舊來の固定觀念も浮動を免れなくなり、猫も杓子も反動的にこれを輕蔑する流行を助長し、いはゆる議會否定の心理を共通に植ゑつけることへ結果したのである。

三

デモクラシーは更らに他の反面において、專制を修飾する色素として利用されたのも事實である。元々それは、被治者の嫉妬感に胚胎して生れたものであつただけ、政治原則としては全く無用の長物にひとしく、ただ投票權の行使が『自己による自己の支配』を錯覺的に意識せしめることを役立たしめたに過ぎない。

政黨は人民の投票に依據する集團である。その限りにおいて表面上は、人民の一定部分の意志を數學的に反映したものと解し得べく隨つて政黨による政治の運用は、人民彼等の意志が人民彼等を支配する形式となつてゐるが、その實際は、幹部と稱せられる少數の人間の專制によつて萬事が決定されてゐる。これら幹部の意志が、投票に反映した人民の意志とは全く別個の存在なること言ふまでもない。然るに支配される人民の側からいへば、嘗て彼等が表明した意志の間接的な反映だといふ意味から、恰もそれが彼等の意志そのものであるかの如き錯覺に陷り、一方また支配する幹部の側からいへば、巧みにこの心理的錯覺を利用して自己の專制を是正する口實をつくり、兩機相俟つてデモクラシーの歡迎に傾向せしめ、遂にはそれが最高の政治原則であるかに盲信することまで發展したのである。

しかし、デモクラシーは、決して政治原則ではあり得なかつた。政治原則は飽くまで少數支配であつて、當世流行の言葉に從へば獨裁專制のカモフラージュに外ならぬ。即ち自我意識の強烈になつた近代人の網膜に錯覺をおこさせるため、投票といふトリックによつて巧に心理倒錯をなしとげたのである。だが、それもこれも矛盾せる人間性をそのままに反映したと見るを得べく、一方において何者の支配をも欲しない理智を有する反面に、他方において自己以外の何者かの意志を豫定したがる人間は、やがて兩棲動物のデモクラシーを繁昌させる心理的原因を作つたとも言ひ得るであらう。

實際、デモクラシーに對する近代人の渇仰は、それ自身が何か巨大なものに對する崇拜の感情に共通してゐる。例へばウイルソンの參戰聲明であるが、これは直ちにデモクラシーを王座に祭りあげる心理であつて、而もそれが聯合軍の士氣を驚ろくばかり昂揚したとあつては皮肉この上もない。偶像破壞のために要求されたデモクラシーは、斯くの如くにして、いつの間にか新しい偶像となりをはつた。

四

現代の英雄は民衆だといふ言葉は、すでに幾度か聞かされたところの命題である。その本來的な意味は兎にかく、彼等は古き英雄を塵埃の如く蹴とばして悔いなかつた。そして民衆による民衆の支配を確立せんとしたが、すでにその時には民衆が新しい時代の偶像となり、デモクラシーが新しい神として彼等の心理を緊縛してゐた。即ち彼等は、破壞することにおいて偶像をつくり、蹂躙することにおいて神をつくり、無意識ながらに自己以外の何者か强力なる意志を創造して、彼等の英雄崇拜感を不知不識の間に滿足させてゐたのである。

ところが、根が崇拜對象としては極めて不自然なものであるから、いつまで彼等の感情を滿足せしめ得る筈がない。殊にデモクラシー特有の小黨分立と制度上のメカニズムは、あらゆる英雄的なもの丶出現を阻害するやうになつたので、政治は勢ひ沈滯をまぬかれず、いつの間にか『時難にして英雄を憶ふ』ところの心理に傾かしめ、どうやらデモクラシーに對する倦怠が一世を掩はんとするかに見られた。

これに契機を與へたのは世界大戰である。自己の正義を押し賣りするに急だつた交戰國民は、恰もそれが時代の神たる民衆のための犧牲であるかに吹聽してゐたが、しかし斬つた張つたの血腥さい戰爭沙汰は、やがて一切の虛飾を棄てさせずには措かなかつた。即ち卒然として『野性の呼聲』を聽くに至つた彼等は、强者に對する讚美を赤裸の感情において發見したのである。玆においてヒロイズムは、歪められたデモクラシーの形態を採る必要がなくなり、最も純粹に一個人を對象として發揚されたと解し得られる。例へばムソリーニである。彼れはその彈壓政策を强行すればするほど、むしろヒステリツクと思はれるまで彼れの國民の人氣を吸收し得たが、これなどはデモクラシーの凡俗主義を小氣味よく粉碎した點で、英雄崇拜の感情を遺憾なく滿足させたからに外ならぬ。彼れの亞流たる群小英雄にしてもその通り、不思議に永く彼等の政治的命脈を維持し得るのは、彼等の威力そのものによつて物理的壓伏を可能ならしめ

たと見るより、むしろ彼等の威力が國民の心理的要求に投合したと見るのが正しい。

その意味からいふなら、いはゆるヒロイズムの復興も文字どほり『反動』と解すべきではなく、ヨリ抽象的な對象をヨリ具象的な對象に移動しただけ、或は『正動』と解すべきであるかも知れぬ。

(四) 英雄主義の破産に就いて

秋田雨雀

英雄主義？　そんなものが特別に問題になるのかしら？　もつとも私のやうな人間でも短い期間——二十歳から二十二三歳頃まで——英雄主義的な感情に、虜はれたこともあつた位ゐだから、人類が英雄主義的感覺を全く失つてしまふといふことはないものかも知れない。今、私達は英雄主義といへば、その言葉自身に侮蔑の意味を持つてゐるのは、英雄主義が人類の生活でもう役に立たなくなつてゐること、もし假りに昔の英雄主義に似たものがあつても、それはその言葉では言ひ盡せないものになつてゐることを意味するのではないだらうか？

英雄主義とは何かといふと、その言葉が示してゐるやうに英雄的人物の假定、禮崇を是認する思想である。社會的には一つの指導的人物を求むることであり、主觀的には自己をその指導精神の所有者であると自信することである。即ち社會は特別に優秀な人物の出現によつて自己の生活を安全にし、或はそれによつて新しい展開を爲し得るやうに信じ、その選ばれたる人物はそれを爲し得るやうに感ずるのである。この思想は歴史的に見れば、神の觀念の發生にも關係を持つてゐるし、神が人間の性質を帶びたり、人間が神の性質を帶びたりするのもその爲めなのだ。

ある社會が古い指導的勢力を失つた時には英雄が簇出する、所謂「國亂れて忠臣顯る」といふ言葉は、英雄主義の發生をよく說明してゐると思ふ。ソウイエト革命後に「新英雄主義」

といふ言葉の言はれたものもその爲めであらう。英雄主義といふ言葉を用ゐたところに共通な性質を持つてゐることが示されてゐる。反動革命家としてのムツソリニーは英雄主義ならばレーニンもまた英雄主義といへるであらう。たゞ英雄主義といふ言葉では説明し盡されなくなつてゐるのである。ロマン・ローランも英雄主義といふ言葉を立派に用ゐてゐるし、ガンヂーは「聖雄」といふ言葉で呼ばれてゐる、然しその英雄主義は何から發生して何を目的としてゐるかで、その價値が評價されて來るのである。そしてその價値が評價されて來る時には單にその行動だけを切離して「英雄」とか「英雄主義」とかいふ言葉では言ひ盡されなくなつて、その名前は名前として後に取り殘されるのである。私達は「英雄」とか「英雄主義」とかいふ言葉を聞いて感ずる時代錯誤的感覺はそこから生れて來るのである。

オニイルの「毛猿」の主人公は何んなに力が強くて反抗的でも私達の同感を呼ばないのはその爲めである。「毛猿」の主人公が自己を苦しめてゐる社會に反抗して立つたのは當然であるし、またその行爲は英雄主義的だとはいへるかも知れないが、自己を苦しめてゐる社會が一體何物であるかを知らない、結極彼の英雄主義はゴリラの動物的な力の一擊に打倒されてしまふ英雄主義である。オニイルはＩＷＷの經濟的鬪爭の團結力とこの英雄主義とを對稱させてゐるのは英雄主義の位置をよく説明してゐるものだと言ふ。

然し今日人類の持つてゐる遺骸としての英雄主義は決して「毛猿」の主人公によつて示されたやうなものばかりではない。私は寧ろルナルチヤルスキーのドンキホーテに依つて示された英雄主義の方が一層有害無益であると感じてゐるのである。

「毛猿」の主人公は高い聲を出してが鳴りたてるだけだから始末がいゝが、ドンキホーテは正義だとか平和だとかを説教し初めるので始末に終へない。其癖彼には平和とは何んなものか、正義とは何んなものか少しも解つてゐない。一層困ることには解らうともしないことだ。彼の上には人類、國家、社會の荷物がいやといふほど乘つかつてゐる。

無邪氣な英雄主義の形態は「劍劇」なぞの形として舞臺の上に殘つてゐる。劍劇の發生の理由や、その社會的意義が時々話題に上ることがあるが、私は講談趣味の復活といふより他に何等の意味もないものだと信じてゐる。講談英雄主義の特長は遊戯的な點にある。歌舞伎劇の上に傳つてゐた英雄主義も、劍劇の上に表はれてゐる英雄主義も等しく講談英雄主義に過ぎない。この英雄主義は現在の社會に多少の影響があるとしても、

善惡ともに新しい社會の指導的精神に影響を與へるものとは思へない。澤田正二郎君の國定忠次が如何に觀客の喝采を博しても、それは社會的イデオロギーの問題でないことは、この同じ觀客は反動主義の近藤勇に喝采を與へるといふ簡單な事實で證明される。彼等はたゞ一つの動作を讃美する。その動作が何によつて生れてゐるかといふことは問はないのである。中井哲といふ俳優は「劍劇」の俳優として十年間澤田正二郎君と行動を共にして來た人であるが、劍劇俳優の淋しさを數十首の歌で言表はしてゐたのを見て私は深く打たれた。中井君はこんな煩悶を懷いてゐる人とは私は想像もしなかつた、ある時は講談英雄主義の喝采に醉つて得意になつてゐる人のやうにさへ思はれた。中井哲君のこの眞面目な告白は日本人の共通に持つてゐる英雄主義の破産の前觸れのやうな氣持がされる。（一九二七、六、五、）

（五）泥塗れのヒロイズム

石川三四郎

一

現代の世界に横流してゐるヒロイズムに就いて書けと云はれる。ヒロイズムにも種々の型があらう。精神界に於けるヒロイズムもあれば、社會運動上の殉道的ヒロイズムもあれば、又、同じ社會運動上に於ける政治家的成功的ヒロイズムもあらう。けれども、茲に現代の世界に流行してゐるヒロイズムといへば、歐洲大戰後俄かに勃興した二種の大潮流であらうと思ふ。委しく云へば、マルクス主義から生れた双生兒たるボルシエギズムとファスシズムとの兩運動に依つて鼓吹されたる一種のヒロイズムであらう。

二

十九世紀の終末から二十世紀初頭にかけて、歐洲諸國に代議

政治否定論が可なり強力に唱へられた。露國保守主義の權威だつたポビエドノスチエフの如きは別として、西歐の進歩的思想家が代議政治に對する信念を表つて、之に對する救濟策を討究したことは著しい事實である。クロポトキンが『十九世紀の政治史は、代議政治失敗の歴史だ』と論じたことは、私も屢々諸方に紹介した。パリ・コムミユンの一青年闘士であつたエリゼ・ルクリユは當時尙ほ普通選擧論者であつたに係らず、普選實施後の議會政治の醜態を見てからは『議員選擧に投票するは吾々の恥辱だ』とまで唱へるに至つた。ルクリユや、クロポトキンの樣な無政府主義者等が議會否定の革命を提唱するに至つたのは、決して其ユトピヤ的感想や、徒らな奇激愛好から來たのではない。深刻な實驗から來た眞實な告白に過ぎないのである。こうした無政府主義者の議會否定論は、やがて佛國勞働運動の中に浸染して漸く新らしいサンヂカリズムの運動となつて現はれた。社會黨が議會によつてプロレタリアの解放を待望するのは木によつて魚を求めるよりも尙ほ甚だ愚かな事である。勞働者の解放は勞働者自らの直接行動によつて遂げられねばならぬ。といふのがサンヂカリストの主張である。故にサンヂカリストの社會改造手段は徹底的の總同盟罷業である。議會に於ける社會主義は經濟的に全然無力である。經濟的の武力を握つてゐる勞働者は產業上に於て彼等の威力を發揮することに於てのみ、改造運動成功の光明が懸つてゐる。

三

こうしたサンヂカリストの運動に動かされた新思想家ジヨルジ・ソレルは暴動の倫理を說き、行動美を稱揚して、大いにサンヂカリストの活動を讃美した。此ソレルの思想はマルクス派中の革命的分子を動かした。ボルシエギキの如き、フアスシスト中堅分子の如き、即ちそれである。ボルシエギズムはマルクス主義に非ずといふ議論があり、フアスシストと諸國社會黨とが氷炭相容れないのは、其議會無視的行動讃美の點にある。言葉を換へて言へば、ボルシエギズムとフアスシズムとのヒロイズム的傾向が從來のマルクス主義者の忌む處となつてゐるのである。ソレルから見れば、フアスシストの如きは勿論のこと、ボルシエギストも亦、自分の暴動論を惡用したものである。それは、ソレル自ら、ボルシエギズムに同情を寄せながらも尙ほ其自分の希望に相違することを宣明してゐるので能く判る。ソレルは其著『暴動論』の中で、ブルジヨア的武力とプロレタリア的暴動とを區別し、政治的ストライキとサンヂカリスト的ストライキとを全然異なるものと見做してゐる。そしてプロレタリア獨裁

の議論に及んで、マルクスの歷史觀が全然舊式のものであり、ブルジョア思想を脱し得ぬものであると說いてゐる。

四

ソレルはプロレタリアのサンヂカリスト的總同盟罷業を論じて曰く、『プロレタリアは國民中の他の諸團體と別れ、總ゆる社會的關心を鬪爭に集中して自ら團結する。プロレタリアは明確に自己の歷史的使命に屬する光榮を感じ、自己の鬪士的態度のヒロイズムに勇み立つ。』併し、サンヂカリストのプロレタリアは『決して一種の征服を追求しない。其勝利を利用するの計畫なぞは斷じて立てない』と言つてゐる。政治家的ヒロイズムと全然其趣を異にすることは明白である。

目的は手段を選ばず、といふ事が能く言はれる。然るに其『目的は手段を選ばず』が何時しか『手段は目的を選ばず』といふことになる。例へば社會改造運動が起る。其初めは純眞な人道的感情。自由と平等との憧憬から、殉道的精神を懷いて鬪士が現はれる。然るに其運動が漸く優勢になり、其潮流によつて名聲も利益も得られよう、といふ見込みがつくと、今まで嫌つた運動にも或は同情を寄せる樣になり、或は其運動に自ら投じる樣にさへなる。其心は既に最初の改革者の心情とは雲泥の相違がある。そして其運動が國家の權力によつて目的を達成する性質のものであるならば、最初の目的は忘れられて、其權力の略取といふことが最重要の仕事となる。即ち自由解放の手段と見做された權力の掌握といふことが最大急務と見なされて最初の目的たる自由、平等なぞは問ふ所に非ず、といふことになる。

茲に於て、通俗の英雄主義が勃興する。古來の歷史上に現はれた英雄といふ奴は大てい此類の成功者である。彼等の最も秀でてゐる才能、若しくは惡智慧は、人間の弱點、人間の愚かな不能を利用する點にある。そして其最も強く人間を刺激し興奮させる本能は——弱點は——嫉妬心と復讐心とである。ソレルは言つてゐる『嫉妬心は殊に消極的な人間にありがちな感情である。首領株の者の感情は積極的であつて、其嫉妬心は直ちに變じて成功熱と化するものである。そして自己の前進を妨げる人物を押し退ける爲には手段を選ばない。こうした政治に於ては、スポーツ的の配慮以外には何にも無いのである。』彼は今日の社會運動、社會的政黨運動も矢張り是に過ぎぬと言つてゐる。そして此事實は、アテンの古へから、ニユウ・ヨオクの今日に至るまでの一切のデマゴオグ政治家の活動を說明して餘りある、と說く。そして最後に、此政治的指導者の野心から勞働者を救ひ、自由人の誇りを完うせしめるものは、實にプロレタ

リャの總同盟罷業だ。と結論してゐる。

五

然るに露國ボルシェギズムの指導者も、伊太利ファスシズムの指導者も、行動美、暴動の倫理を利用して、そして『プロレタリアの解放』といふ當初の最重要の目的は背後に隱匿して了つた。茲に此兩運動の手品がある。そして此手品こそ世界各國の、殊に日本の野心家が羨望して止まない點なのである。レニンは一九〇五年頃から露國に發達し初めたサンヂカリスト的なソヴエート組織を非難攻擊したに係はらず、一九一七年の革命亂には其勢力の抗すべからざるを看取して之に妥協し、そしてあの戰亂にまぎれて何時の間にか其團體を蹂躙し、自らの獨裁制を建てゝ了つた。レニンの成功は此手品にある。ソヴエート團體を壟斷して其本來の精神を暗に葬むつた點にある。所謂現代の英雄主義を最も能く體現したものである。ムソリニはレニンに比すれば僞善な點が尠ない。其性質に冷酷な暗黑面が尠ない。彼は社會主義の國際運動に力のないことに見切りをつけて、直ちに國粹的な改造運動を起した。其熱血漢であることは彼の閲歷に能く現はれてゐる。ファスシスト運動が各地の勞働團體に支持せられ、其れ無しには到底成立し得なかつたであらうと言はれ、而して之を支持した勞働團體の重要なものが、從來最も革命的であつた點は、深く味ふべきである。伊太利の如く、南北兩地方の分裂甚だしく恰も二對立國の如き情況にあつた國に於てファッショ運動（ファッショは結束の意だといふ）が勢力を得たのは自然の成行と見ることが出來る。そして從來の革命的サンヂカリストが國家的サンヂカリストと成つたことにも相當の意味が覗はれる。併し、ムソリニが從來のプロレタリア革命を棄てゝ忽ち鐵血的のクウデタを行つたのは、主義の人、理想の人としては甚だしい墮落である。そして此點が彼をして所謂英雄的氣魄を最極度に發揮せしめた原因である。

六

議會政治に對する不信任はこうして一方には無政府主義思想に鞏固な論據を與へると同時に、他方に於て獨裁主義者に口實を與へ、そして英雄崇拜熱が世界各國に勃興した。殊に西歐、中歐、諸國に於けるファスシズムの流行を見よ。西班牙のプリモ・デ・リベア、佛國のカステル・ノオやミルラン一派の國民黨、匈牙利のホルチ一派、獨逸に於けるカップ、ヒルトラア、ルウデンドルフ等の一派、米國の暴力團として有名なタ・タラ

ツタヽタランの如き、何れもファスシズムと其傾向を同じうするものである。

併し、こうした暴力行動が讃美されるに至つたに就ては、彼の歐洲大戰爭といふ世界古今未曾有なる大暴力行動が絶大なる感化を與へたことを忘れてはならぬ。若し夫れ、ニイチエの思想が現今の英雄主義に感化を與へたか、といふに、其れは蓋し甚だ間接の關係であつて、其獨逸軍國主義に與へた感化により て歐洲大戰勃發に貢献した位の處に止まるであろう。

議會政治の墮落は暴力讃美論を興し、暴力の讃美は英雄的行動を喚起した。其行動美論は手品師に利用されて泥塗れの獨裁制が建設された。世俗の英雄とは大てい此泥塗れの泥棒君である。此の泥濘的英雄崇拜熱が近時の活動寫眞によつて煽られたものだと唱へる向もあるが、其れも一理である。

殉道のヒロイズム以外に於ては、ヒロイズムは即ち泥棒主義である。他人の功勞か、他人の生産か、或は又、他人の智能を盜む所の泥棒である。一將功成つて萬骨枯るとは既に古人が説破した處である。私はこうしたヒロイズムを卑しむ。

社會時評

吉野作造

團體生活に於ける協動の精神

北越のさる村の未見の一友人から先頃次の樣な手紙を受取つた。

……當村の私共若い者は一つの青年會を作つて居ります。昨年八月總會を開き或る問題につき協議した所、議論二派に分れ容易に圓滿な解決を見ず、議長は遂に討論を打ち切り多數の票決に依て甲說の採用を宣言しました。然る所少數派はこの決定に服せず、或は票決を不當とし又或は問題の性質上多數で決すべきものではないと主張してゐます。之に對して多數派は、青年會は二三少數者の自由に左右する所となるべきものではないと申しました所、二三者の我儘と云つた言葉尻を捉へてその過言を謝罪せよといきまくものあり、紛々擾々の裡に總會は閉會してしまひました。其後兩者の反感は、依然として強く、種々其間に調停を試むるものありしに拘らず、今以て融和の曙光を見ません。之に付て貴下の腹臟なき御意見を承りたいものです。

× × × × ×

右の質問に對しては、事實をよく明にしてゐないから固より適切なる答解は與へ得ぬが、斯うでもあらうかと考へる所を次に列擧して見る。多少の參考たるを得ば幸甚である。

第一に爭となつた問題は如何なる事柄か分らないが、多數で決すべき性質のものでないと云ふ理窟はあるまいと思ふ。多數で決すべき性質のものでないなら始めから總會の議に上せぬがよい。議に上せた以上多數の意見に依てその方向を決するは當然であらう。例へば甲は善人なりや否やとか今年は豐作なりや

否やとか云ふが如き事なら、そは固より多數の意見で決すべきものではない。併し例へば共同に生産したる農產物を如何なる方法で販賣すべきやと云ふ様なことなら、多數で決めるに何の差支もないのである。多數の意にどうしても承服が出來ぬとなら、青年會を脫會するがよく、脫會もせず多數の意見に從はぬと云ふのは、團體生活の根本を解せぬ我儘者と云てい〻。

第二に多數の意見で決議をすると云ふことは差支なしとして、唯その決議が正當に成立する爲には、豫め十分の討論が行はれてゐなければならぬ。少數派にも十分に發言の機會を與へた上でないと、或は手續の不備と云ふことが難ぜられぬとも限らない。青年會などでは之等の點に關し恐らく詳しい規則もなければ定まつた慣行もなからうと思ふが、若し多數派が衆を恃んで反對意見を壓倒し紛々擾々の間に議長をして急遽決を取らしめたとすれば、そは確に失當の誹りを免れない。故にこの點に付ては、多數派も少數派も十分に意見を鬪はしたのか、最後に議長はこの邊で討論を終結すべきを衆議に諮つた上で決を取つたのかを反省して貰ひたいと思ふ。

× × × ×

第三に多數の意見で是非を決するといふことは、少數派の人から視たら甚だ不都合の様に思はれるだらうが、そは大なる誤りである。多數で決するといふことには相當の理由があり、會員は內心は不服でも一應は之に從ふ義務があるのである。成る程多數決と云ふ制度は、百人中の六十人の意見を以てその儘全體の意見とする仕組みである。之に反對であつた四十人も、一旦之が全會の意見だときまつた以上、之を我々の意見でないと云ふことも出來ねば又その責任から脫することも出來ぬ。例へば青年會の問題にしろ、多數できめたことに少數の反對者は後から異議を申立てることは出來ない。そこでその少數者は何故に自分達はその會の一員であるの故を以て自分の心から容認せざる意見に從はねばならないのか、その上又之を自分の意見としてその責任をまで分擔せねばならないのか、馬鹿々々しい話だと感ずるのも無理はない。斯くて遂には我が良心の從ふを欲せざる意見は之を認めないなどと駄々を捏ねることになる。前記青年會の少數派も、之を大に善意に解した所で、精々這んな所であらうかと察せられる。併し乍ら之は近代の生活に於ける多數決の意義を全く沒却した所の議論である。

多數決はその表面の形を淺薄に觀察すれば、多數が少數を壓倒することに相違ない。謂はば少數に對する多數の橫暴を公認することである。併し之はなぜ惡いか。假りに一方が他方を壓倒する丈けの關係としても、少數の橫暴よりも寧ろ多數の橫暴

に多分の道理を許すべきは言ふを待たぬだらう。併し乍らよく考へて見るに、多數決は本來決して多數の横恣を公許する制度ではないのである。そはこゝに所謂多數は決して固定した階級でないからである。

少數に對する所謂多數なるものが、女に對する男とか華士族に對する平民とか云ふと同じ樣に、固定した階級であるとするなら、甲に對する乙の優勢は不可動の運命であつて、其間に毫も道德的要素の作用すべき餘地はない。併し我が多數決の制度に在ては、少くともその本來の精神に於ては、決して斯の如きものではないのである。誰々が甲派で誰々が乙派と始めから運命づけられるのではなく、何れの主張に多分の眞理があるかに依て始めて多數少數の關係が定るのである。之を別の言葉でいへば、會員が皆公共心に富み私利私慾に動く樣なことが無ければ、必ずや彼等は結局最も正しい說に就くに違ひなく、從つて若し玆に甲乙二說あり、甲說の方が多數の贊同者を得たとすれば、そは取りも直さずそれが多分の眞理を有するものと許さる可き客觀的證據と視ることが出來る。尤も多數者の一時の判斷は間違ふこともあり得る。それが間違であつたら、多數は終始誠實なる態度を持續する限り後に必ず思ひ返すに相違ない。之を期待して少數者は、假令一旦負けても、決して意氣沮喪せず所謂捲土重來の勢で、更に奮鬪を續けるのである。そして先きの判斷が謬りであり少數者の意見が實は正しいのであつたといふことであれば、やがて多數少數の關係はひツくり返さるるであらう。されば一旦勝つたからとて多數者に油斷が出來ず、少數者は負けても前途に希望をすてぬ。そこで多數決といふ制度は、一時の解決には間違ふことあるとしても、結局に於ては最も正しきものに最後の勝利を得しむる底の道德的作用を有する社會的制度だと云へるのである。

斯う考へると、現代の生活に於ては何人も多數決の制度は之を尊重して行く義務がある。少數者は自己を壓倒した多數者の說の威力に服するのではない。多數の人の心を捉へたものを優勝者とする「主義」に服するのである。この主義をさへ承認すれば、今は少數意見たる自分達の立場も、やがて多數の良心に打つ突かつてその承認を得、從つてそれが新に優勝の地位を占むることをも期待し得る。勝つた負けたの外形的標識に拘泥すれば、多數決は一方によろこばれ他方に迷惑がらるる制度の樣だけれども、その精神に就て論ずれば、之を尊重せざるべからざる所以に付て兩者決して其の利害を異にするものではない。故に負けたからとて多數の決定に服するを肯んぜぬのは、多數決の意義を解せぬ淺果敢な我儘であるばかりでなく、又實に自

己の立場をも根本的に傷くる無分別の甚しきものである。

× × × ×

第四に多數決の制度が其本來の妙用を發揮する爲には、前にも述べた如く、多數少數の關係をば決して固定せしめざることが必要である。地主と小作人とか、普通市民と部落民とか、内地人と朝鮮人とか、始めから相對立して割據する者の間に於ては、多數少數の關係は始めから固定し、斯く分るる所以につき何の道德的意義もないから、多數決の制度を文字通りに强行するわけには行かぬ。青年會などには本來こんな面倒な關係はない筈だ。共に相依り相扶けて各自の向上發達をはかるが目的だとすれば、多數決の制度は彼等の間にこそ最もよく行はれ得る筈だと思ふ。けれども近來は醜惡なる政治家輩の泥仕合の濁流が山間僻色にもその餘毒を及ぼして居ると云ふから、事に依ると爭の爲に爭を好む不心得な者が居ぬとも限らない。尤も場に依ては二つの根本的に相容れざる階級の分立が確立し、兩者互に强く相爭ふと云ふ不幸な現象の免れぬ處もあらう。斯う云ふ場合なら、始めから一つの青年會に纒つてゐるのが間違ひであつて、先きにも述べた如く、その立場の根本的相違に基いて述に二つなり三つなりの團體に分るべきである。さうした根本的相違の在るに非ずして而も紛々擾々の反目が多年結んで解けずとせば、私は必ずやそこに會員の中に重大な心得違ひをして居る者の少からざるを想像せずには居れぬ、一村の青年會の紛擾の如きは謂はば一家内の兄弟喧嘩の如きものである。相爭ふ者の間には固より相當の理屈もあらう。又急に之を廢め難き事情もあらう。併し外部より見て之れ程見つともない事はないのである。

支那出兵に就て

その意に反して他國に出兵するのは明白に主權の侵害である。併し支那の場合に在ては、條約上の權利として出兵を敢てし得る餘地が全く無いではない。が、さりとて凡ゆる形の出兵が皆是認せらるるのでは固よりない。條約に準據する權利の問題としても、出兵の時期方法範圍に關して幾多の疑義はあるが、政略上の問題としては、殊に支那との最近の友好關係の點より觀て、我が國這次の出兵は兩國有識者の大なる物議の種たることは疑ない。

先方の承諾を得れば構はないが、不幸にして今日の支那には生憎普ねく國民の意思を代表すと觀るべき中央政府がない。北を納得さしたのでは南が承知せず、南に相談してあゝした出兵の敢行に承認を得る見込は全然ない。そこで無斷で勝手に出兵するに至るも已むを得ぬわけであるが、それだけ我國としては、豫めその已む可からざる所以を中外に宣明すべき用意を怠つてはいけない。我れ自身としても何の爲に出兵するのかに就て十二分の省量をつくすの必要があるのである。

出兵の理由として居留民保護を云々するものがある。居留民保護の爲に出兵すると云ふのなら、疾うの昔に長江沿岸にも出兵すべきであつたとの説も成り立ち得る。何故に北方駐在の居留民だけを特に保護せなければならないのか。之に對しては、遅いは何もせぬより增しだと答ふるものもあらう。要するに居留民の生命財産は國家に於て之を保護してやる義務があるとする立場に變りはない。然らば問ふ、我が日本に不祥なる騷亂でも起つた時、隣りの支那や太平洋彼岸の米國などは當然の權利として在留自國民の保護を名とし我國に出兵することが出來るか如何。居留民保護を名とする我國今日の對支出兵の理論的根據を疑はぬものは、同樣の理由で前記假定の場合に於ける支那や米國の出兵をも拒むことは出來ない。

私の考では、支那に在留する外國人は、支那の不幸なる騷亂に際して引續きその地に留る以上、支那人と同樣の惨禍を忍ぶは已むを得ぬと思ふ。支那人にも殺される者もあれば怪我する者もある。獨り日本人だけがそんな目に遇つてはならぬと頑張るはチト蟲がよ過ぎぬか。況んやその爲に本國の出兵を促し以て支那人自身の命賭けの策動を邪魔するに於てをや。

日本の出兵が事實に於て支那人の策動の邪魔になることは一點の疑を容れない。但し北方軍閥が之に依て辛うじて總崩れの見苦しき醜狀から免れたことは是亦疑ない。日本の一部の人達は、張作霖の地位はさう不安でないの、安國軍の後退は豫定の行動だの、又は戰線の整理に依てこゝ暫くは南軍を阻止し得るのと宣傳して居るけれども、是れ皆張作霖の爲にする彼等の陰謀的策動の手前を糊塗する目的に出づるものに過ぎずして、日本の出兵が南北抗爭の眞只中に突進するの形勢を示さなかつたら、今頃張の運命がどうなつて居つたか知れたものでない。日本と衝突することに極度の畏怖を感ずる南方國民軍が、日本の出兵に依て一時鳴りを鎭めた形を呈したのは、何でもない事の樣で、實は日本と支那との將來の關係には極めて重大の關係があるのである。

それなら支那は日本の出兵に對して嚴重に抗議すればいゝの

だ。所が誠に残念な話ではあるが之には支那に重大な弱味がある。彼に外國人の生命財産の安全を保障し得る能のないこと即ち是れである。南京漢口の事件はこの點で全然外國の信用を喪はしめた。それなら適當の機會に一切の外人に一旦支那から退去して貰へばいゝが、之とても途中の安全を保障することが出來ないだらうと思ふ。こゝが支那をして外國出兵の排斥と云ふ當然の權利の主張に就てもその態度を勇敢ならしめ得ぬ一つの理由であると思ふ。

それかと云つて、之に乘じて外國が支那の領内に軍隊をくり込むのは餘りに弱者の立場を無視する者である。而も今や更生の途上に悩んで居る支那の國民運動に世界は多大の同情を寄せて居ると云ふ。然らば少し位の不便は忍んでも、彼等の策動に多少の便宜を與ふべきではあるまいか。私は出來ることなら北方在留の日本人に一概退去を命じ、毫も他を顧慮することなく自由に活動するの便宜を支那人に提供してやつたらとさへ考ふるものである。

尤も引揚げるにしても今すぐと云ふわけには行くまい。早いもあれば遅いのもあろう。そこでその退去脱出の途だけは安全にしておくと云ふ必要がある。具體的にいへば、北京天津と海口とを連絡する一線だけは我國に於て十分の警備を整へると云ふ必要があらうかと考へる。斯く考へると、我國の出兵が青島を第一點とし濟南を經て遠く北京天津と相呼應するのは、全然無用の事でもない様に思はれる。且斯の如きは獨り日本在留民の爲のみならず、又兼て諸外國在留民に取つても一種の福音たるを妨げぬ。斯く云へばとて私は敢て日本の出兵を辯護するのではない。强て考へれば一つの理窟が成り立たぬでもないことを明にしたまでである。而して現に出兵の敢行せられた以上、我々國民としては、その運用をば最低最要の限度に止めしめ、さらでも起り易き支那の排日感情を出來る丈け阻止するの必要あるを思ふので、以上の觀點から國民と共に大に今後を監視せんと欲するのである。

日曜と郵便

「日曜と郵便」――といふ問題は、直接には遞友會あたりから日曜及祭日の集配を休みにしてくれとの要求があるかに聞き及んだことから、その事を社會問題的に考へて頂くこともこの趣旨の一つではありましたが、それと同時に日曜祭日の集配休止といふことから直接どんな影響を受けられるか？――即ち今日の社會生活並に家庭生活において日曜といふものが實際にどんな役目をなしてゐ、又なさなければならないか？――を知りたいと思ひまして諸名士に伺ひましたところ斯く多數の御回答を得、大體において現代社會の意嚮を伺ふを得たのは單り編者の欣幸とするばかりではありません。此問題は單に郵便物に限られた問題ではなく、あらゆる問題に附隨して今後隨所に現はれて來る問題であると信じますから。

御回答を賜はつた諸家の御厚志に對しては深く御禮申上げます。（編者）

◎

下村海南

米をたべパンをかぢるが如く、日常心の糧としてうけ入れられてるものに郵便と新聞とある。

一口に郵便屋といひ新聞屋といふが、此二者は生活必須の糧を供給するものであつて、しかも二者共に歐米先進國のそれに比して遙かに勉強しすぎてる。

新聞の方は配達しすぎてる、餘計に號外まで出してる、朝夕刊二度まで讀者の門口をたづねてる。郵便も同じように配達しすぎてる、田舍へゆけば、一日一回二回といふ配達にさしたる別もないが都會地になると海外の多くは一日三四回の配達なるに對して、日本では朝まだきより夜ふけまで五六回にわたり配達を重ねてる。

上下に延びてゆく都會と左右に延びてゆく都會とはちがふ、縦に延びてギッシリ事務室が前後左右につづいてゐるビルデキングと横にのびて一々玄關だの庭だの建物に持つてる家並とは趣がちがふ、一人當りに革袋で携帶し得べき郵便物數に自らなる制限がある、一回の配達に廻るには廻るだけの路順があり其道程に自らなる限度がある、從つて郵便配達の減回といふ事には先づ何よりも郵便物數の受發といふ上から見て、都會地に付て特に考慮せらるべきものであり、しかもその都會地は東西必ずしも其規を一にしないといふ事は諒とせねばならぬ。

參考一、大正十四年度に於ける大都市の通信力は次の如くであつて

地別	引受物數	配達物數
東京市及近郊	八億二千九百萬	六億八百萬
大阪市及近郊	三億九千八百萬	三億千六百萬

試に九州及北海道の全部と比較して

九州	四億三千二百萬	四億八千九百萬
北海道	一億七千六百萬	一億九千七百萬

大都市の通信力は如何に強く、又引受と配達の比率は大都市と中央とは其比率の相反するものあるが認められる。

都會地の郵便は季節から見れば夏場は自から少ない、凡ての社會の活動が鈍くなつてる、學校は暑中休暇とか官署銀行會社が半休だとか、仕事の方が閑散になれば自から郵便物が少くなる、同じように休日には官署なり銀行會社なり學校なんどは休みになる、既に郵便物數が少くなれば配達も自から減回されるに不思議はない。

都會地から發送する郵便物は減少するが受ける方は隔地から一日二日がかりでくるのが多いから、東京大阪などの大都市では休日に

引受に於て　四、五割減
配達に於て　六、七分減

にはなつてるそうである。

そこで今日本の都會地で全く配達が休みになるといふ事は事實にそぐはない事である、と同時に日曜日に減回される事は當然すぎる、現に各遞信局では各都市の實況に應じて多少の減回を施こしうる事となつてゐる。

參考二、ポストなどから郵便物を取集める方は一日三度乃至五度地は一度、六度乃至九度地は二度以內、十度地は三度以內の減便。又配達の方では三度地は一度、四、五度地は二度以內、六度地は三度以內減便するを得、多くは滿限まで減便してるとの事である。

歐米の事例に徴するに舊教國新教國によりてちがふ、官署會社はおろか全市あげて戸を閉めて仕舞ふ、只教會と藥屋ステーション前の料理屋位が店を開いてるようなところもあれば、休日は平日通り演劇其他遊び場は休業どころかマチネエまでやるところがある、が大體歐米では休日は所謂職業から全然緣を離れて名の如く國民擧げて休日となつてるものが多い。

參考三、外國ニ於ケル休日ノ集配概況

國名	休日ノ集配
獨逸	取集ハ通例午前一回、午後一回行フ

配達ハ午前一回行フ（但クリスマスノ翌日復活祭及五旬節ノ次ノ祭日ニハ行ハス、又價格表記書狀、爲替、小包ハ別配達ノ外行ハス）

倘市外ハ速達ニ限リ配達ス

米國　別配達郵便ノ外行ハス

墺地利　別配達郵便、速達小包又ハ其ノ內容品カ毀損セラレ易キモノニ限リ窓口交付ヲ爲ス

白耳義　取集、配達共一回トス（但新聞紙以外ノ印刷物、商品見本業務用書類、各種書留書狀、集金書、爲替、稅付郵便物及無料郵便物ノ大部分ハ配達セス）

佛蘭西　午前中一回行フ（但書狀、葉書及發行者ノ差出ス新聞紙ニ限ル）又配達セサル遠隔地方住民ハ集配沿道ノ村內又ハ村ニ定メタル一時間中ニ窓口交付ヲ受クルコトヲ得集配人ハ配達途中取集ヲナス

英吉利　取集ハ午前一回行フ

配達ハ書狀類ニ限リ午前一回行フ

伊太利　取集ハ二回行フ

配達ハ午前一回行フ倘無配達地居住者ハ午前九時ヨリ正午迄窓口交付ヲ受クルコトヲ得倘別配達ハ平常ノ通トス

（但日曜カ祭日ノ前日又ハ翌日ナルトキハ平常通トス）

瑞西　取集ハ停車場內ニアル郵便函ヲ除キ遠隔地ハ一回トス

配達ハ別配達以外ノ通常郵便物（死亡通知書ノ外書留ト爲サザル印刷物ヲ除ク）ノミ行フ倘地方ノ狀況ニヨリ配達ヲ休止スル地方ハ朝一時間內窓口交付ヲ爲ス

現時の郵便物受發の實況から推して休日の配達を今直に全然廢せよとか一回に減ぜよといふは事實無理では無からうか。要するに一人が配達する配達區の廣さ配達の道程に自から限度があり、又一人の携帶しうる物數に制限があるとせば、郵便を差出す方で加減してくれぬと、配達の方ばかり急激な減回は時には持ち切れぬ郵便物を運ぶ事になる、長きに過ぎる路順を廻はる事になる、然らずんば翌日に持ち越し翌日の負擔を重くする事になる。

そこで結論として今日配達が東京大阪などで平日の六、七分減であるが、官廳會社事務所宛のものは不在中に配達される譯けでもあり、かた〲引受は約半減されるが配達は減じ歩合が少ない、しかも六度の配達が三回になつてゐるとすれば、配達物數からいへば既により多く減回されてる事になる、しかし三回結構である、將來は二回にまた一回位まで減回しうるようにありたい。これくらゐは多分事實日曜祭日に業を休むものは次第に其種類を增してくる。休日ときめた以上は善く勉め善く遊べで、休日は凡てが心置なくウント休養し、殘る六日にフレッシュな活動をつづけたい、日曜祭日は全然國民の休養日とする習慣を助長したい。政府當局はもとより國民あげて此心持ちでかゝれば、休日の郵便物數は目に見えて減じて來ねばならぬ。又遞信當

局はいつも其實况に應じて休日に於ける現業員の負擔を輕くするにつとめたい、之れは只郵便の取集配達ばかりではない、通信事務だけでもその影響をうける範圍はかなり廣い。

不規則なる日本の社會生活は休日も形式だけが休みでまだ實質は休みになりきつてをらぬ、旣に休日にした以上は國民あげて休養日として、事實無配達一回配達でも差支ないまでに徹底せしめねばならぬ、そこに國民の凡てに通じて眞の休養があり、そこに國民の凡てに通ぜる、ウヰーク、デーのフレッシユた活動がある、問題は郵便現業員の問題たるに止まらぬ、實に國民全般の心身の保健問題である。（二、五、三一）

◎

植原悅二郎

郵便物を取扱ふて居る小役人や、雇傭人の立場からいへば、日曜と祭日には郵便物の配達を休ませて貰ひたいといふ要求は無理ならぬ事である。郵便物の取扱ひに當つてゐる人人は薄給であるし、其仕事はかなり劇務であり、且つ衞生上からいふても思はしからぬ狀態である。それ故に斯る要求の生ずる事は決して無理ならぬ事である。而し文化の進むに從つて交通及び通信の事務は益々頻繁でなければならぬものである。殊に我國民の多數は日曜と祭日とを嚴重に守り能はざる狀態である。日曜と祭日とを嚴守して居る處は我國に於ては未だ官廳と學校と銀行位に過ぎぬ。大會社などでは日曜と祭日とを休業するけれども普通の商賈人は日曜及び祭日に營業してゐる。而已ならず地方の一般の國民には日曜も祭日もない。それ故に多くの勤め人は日曜日に爲替や貯金を取扱はぬ事でさへも尠からず不便を感じてゐる。而して大多數の國民の生活狀態より考ふれば日曜及び祭日に郵便物を取扱はぬなどと云へば非常なる支障を生ずる事と思はれる。

通信事務を取扱ふ從業員の立場から云へば日曜及び祭日に郵便物の配達を休んで貰ひたいといふ事にもなるけれども、國民生活の狀態より考へれば、之れは不可能の事であるといはねばならぬ。交通や通信事務は文明の世の中に於ては一日も停止する事の出來ぬものである、從業員の見地よりすれば、日曜や祭日に休みたいといふものは、單に郵便事務に關係してゐる人のみではあるまい、汽車や電車の運轉をも中止して貰ひたいといふ事にならぬとも限らぬ。また女中や料理人の立場から云へば日曜や祭日には食事や掃除をする事も中止して欲しいといふかも知れぬ。日曜と祭日とが一般に安息日とされて居る歐米諸國に於ては日曜や祭日の食事を二食にして居る。それでも汽車や電車を中止するといふ事は出來ぬ事とされてゐる。而已ならず歐米諸國に於ては日曜や祭日に外出するものが多いから交通機關の任務に當つて居るものは一層劇しく働かねばならぬ。

我國の如く日曜と祭日とがまだ國民生活の全部に徹底的に行はれて居らぬ國に於ては、之等の日に郵便物の配達をせぬといふが如き事は不可能の事と思はれる。然るに汽車や電

車の従業員が日曜祭日に交通機關の運轉を中止して貰ひたいといふ要求のないのに、獨り郵便物の配達を休んで貰ひたいといふ要求を爲すについては何分理由がなければならぬ。郵便物の取扱者が斯る要求を爲すには其れ相當の理由があると思ふ。之れ等の人と雖も通信事務が間斷なく運行される事を欲せぬ譯ではなからう。然るに現在の郵便制度に缺陷がある爲に斯る要求を爲すに至るであらうと思はれる。その主なる理由は現在の三等郵便局制度に基くものではなからうか。特に日曜祭日に郵便の配達を休まなんでも遞信從業員が、心よく劇務に堪へるやうな制度と待遇が整ふて居れば斯る要求は起らぬと思はれる。

◎

上杉愼吉

「日曜と郵便」と云ふ問題を提供せられたるに就て、私が日常の生活に於て、生活を有效にし且つ豐富にするが爲めに、いつもどうにかならぬものか、世間の識者に相談したいと切に感じて居りながら、社會の風習と云ふものは、さうたやすく變へることの出來るものではないから、云て見ても駄目な事と思つて居ることを云ひ出して見て、各方面の人々に何とか考へていただきたいと思ひます。

私は日曜日には凡ての人が一切仕事を休むことにしてはどうかと思ひます。日本の今日の生活では、我々には日曜日と云ふ日は、一番忙がしい日です、訪問客があり、集會があり、講演をさせられ、また聽かされ、最も事が多いのであります。これでは、月曜日からの働く能率が上がりませぬ。私などは一日靜座して專門外の書物でも讀む日がほしいと思ひます、家族と嬉遊する日がほしいと思ひます。しかし、自分だけ日曜日は休むときめて居ても、どうしても、それが實行出來ませぬ、皆んながそれにならなければ、なりませぬ。同感の人が約束して、そんな習慣を造る端緒を開くと云ふやうな工夫は無いものでせうか。

同じやうな問題ですから、ついでに申したいと思ひますが、毎日毎日の時間の割り方を、一般の約束として、どうにかならぬでせうか。例へば今日の日本では朝を訪問時間として居りますが、これには困る人が多いことと思ひます。又例へば、集會と云へば殆んど必らず五時又は六時から始めて、夕食をたべることになつて居ますが、私は夕食は七時か八時として、普通の集會は三四時から七時頃までに終ることにして、歸宅後夕食を取ることにしたら、非常に時間も費用も節約出來ると思ひます、今の樣に一寸何事かを相談する爲めに、六時から集まり、八時九時過ぎまで食事を爲し、それで多くの時間を取るのは、本とうに無駄だと思ひます。右のやうなことで、私などは到底讀書研究の時間が無く、毎朝三時又は四時に起きて朝食までに仕事をすることにして居ますが、これは隨分無理です。

中央公論が、こんな事を社會に向つて相談する機會を與へられたことを謝します。

◎

白柳秀湖

文明の機械は何時までも今日のやうに社會的、公共的のものとして止まるとはないであらう。幾百年か後の社會では、(或はモット早いかも知れぬ。)各人各個にスキーのやうな小さい自動車を持ち、各人各個にラヂオを備へ、電信も、電話も大かたは各人机上の自働機械と改良されるであらう。その時こそ日曜、祭日には社會の全員一人殘らず、その好む所に從つて遊び暮すことが出來るだらう。

併し、さうした機械の進歩が一夜にして行はれたと假想したら何うであらう。勞働者の大多數は其職を失ひ、技手、事務員の殆どすべてが路頭に迷ふことになるだらう。其處で文明が自然の過程を經て徐々にさういふ時代に到達するまで、社會生活上、一日も休止することを許されぬ仕事に從事する人は、日曜、祭日と雖、其仕事を休むことは出來ぬ。お氣の毒であるが之は止むを得まい。

日曜と祭日とだけは郵便物の配達を休ませてくれといふ要求が、遞友會あたりから出て居るといふことが事實でありとすれば、それは飛んでもない間違ひであらうと思ふ。若し日曜と祭日だから配達夫も休むといふならば、電信の技手も、電話の交換手も同じ理由で、日曜と祭日とだけは休ませてくれといふ要求を提出することになるだらう。汽車や電車の運轉手からも必ずその要求が出ることになるだらう。汽船も、ボートも日曜日には岸壁を離れないことになるだらう。大洋を航海して居る汽船も、運轉を休止することになるだらう。病院の醫者も、看護婦も、すべて病床を見棄てて院長と同じやうに郊外散歩に出かけてしまひはせぬか。消防夫も、巡査も、せめて日曜と祭日とだけは休みたいといふことになりはせぬか。同じ理由で日曜と祭日とだけは電燈も、瓦斯も、水道も、供給を停止されてしまふことになりはせぬか。ナニ一日ぐらゐランプでも、蠟燭でも間に合ふと云へば云へる。一日ぐらゐ炭でも、薪でも、間に合ふと云へば云へる。又、一日ぐらゐ汲み置きの水でも間に合ふといへばそれも云へる。

日曜だけは俗務から離れる意味で郵便物はこちらからお斷りしたいぐらゐだといふやうなことを云つて居られる結構な御身分の人が何處かにあるといふことを某社の端書で知つて驚いた次第であるが、さういふ人も、特別に火急を要する用事は……といふ前置きは置忘れるほどにノンキではあるまいから、勞働者側から提起されて居る問題を解決するタシには絶對にならぬ。其處で勞働者側としては社會公衆に訴へるなり、資本主に迫るなりして、代理勤務の制度を確實にし、日曜及び祭日の代日休暇は胡魔化しなしに必ず之を出させるといふことにするより外に、今の社會としては仕方があるまい。今の官廳や、會社は冗員を置くことを恐れる關係から、何のかのと云つて代日休暇を出し惜む。問題は常にそこから起つて居るやうだ。

◎日曜と郵便

内ケ崎作三郎

郵便集配に從事する人々が日曜日に集配事務の休止を希望してゐることが新聞に見ゆる。これは文化的問題としては輕々しく取り扱ふことの出來ぬ重さを有してゐると私は考ふる。

一寸日曜日制度の起源を述べると、猶太に於ては土曜日が安息日となつてゐたのである。然るに耶蘇が金曜日の午後十字架につけられ、日曜日の朝復活したといふ信仰が弟子の間に生じて、日曜日に耶蘇の記念會が催さるれことゝなつた。即ち Lord's Day「主の日」と呼ぶに至つた。その日には禮拜をなし、會食を共にした。猶太教は今でも土曜日を休み、基督教は日曜日を安息日にしてゐる。

我が政府は明治の初年に一六の日を公休日とした。すると一ヶ月に六休日即ち一日、六日、十一日、十六日、廿一日、廿六日あるわけであつた。然るに西洋では日曜日を休むから一ヶ月に四日もしくは五日休めばよい。この方が調法だと思つて、日曜日制度を採用したのである。

さて猶太人が七日に一度の公休日を創めたのは多分バビロンの影響だと考へられる。バビロン人は月を崇拜し、新月、上弦の月、滿月、下弦の月と一ヶ月に四度の祭を行つた。これが七日に一度を休むといふことの濫觴であるらしい。しかし人間もと木石でないから六日働いて一日休むといふことは結構なことである。尤も六日といふことはバビロン人獨特の六進法から割り出されてあるかと思ふが一ヶ月に四五度休むことは生理的にも精神的にも望ましいことである。

いくら働くことが大切でも、折々休養しなければ續くものでない。よく働き、よく遊ぶことは人生の能率を增進する所以である。若し日曜の午前を各宗各派の、もしくは倫理的、精神的の修養の時と定め、午後を遊山とか運動とかに定めることが出來れば人々の健康が著しく增進し、その智慧と信念も向上することであらう。

西洋にては永い經驗から日曜日制度を德として、之を宗教的の神聖なる意義をもたせて維持することに努めてゐるは當然だと思ふ。

英國では特に日曜日制度を尊重し、日曜日は丁度我が國の元日のやうに閑寂なものである。一切の職業に休止せられる。朝刊の新聞も配達されない。郵便も配達されぬ。至つてのんきなものである。また午後四時頃までは互に訪問はしない。社會の調子が馬鹿に落ちついて來るのである。

私は宗教的精神と全く別に考へても日曜日の恩典は之をあらゆる社會に均霑させたいと思ふ。郵便集配人の諸君が之を希望することに大に同情する。速達とか電報とかを除いた一切の郵便物は月曜の朝まで保留して差支はあるまい。

米國では日曜版はべら棒に澤山ある。一日かかつても見切れぬ程である。英國では日曜

新聞といつて日曜にだけ發行するものが段々ふえて來た。しかし日曜新聞は大抵つまらぬものと評價がきまつてゐる。或は英國の或地方で行はれてゐるやうに日曜日は早曉に一回だけ郵便を配達する所もあるやうにしてもよいと思ふ

私は集配人諸君に十分日曜日に休養して貰ひたいことを希望する。

但しこれは集配人諸君と限らず國民的休日として日曜を嚴守する習慣をつくりたいものである。働く計りが能でない。のべつにかせげば發明したり工夫したりする餘裕もなくなる社交も發達しなくなる。

今日我が國の田舍にては矢張一日及び十五日を休日としてゐる所が多い。都會にては商店にては第一第三日曜と、第二、第四日曜とか休日としてゐるやうである。これも思ひ切つて日曜日を悉く公休日とするがよい。

先達、靜岡縣へ旅行した時、地方新聞に面白い記事があつた。それは濱松市の周圍の村々では日曜日を公休日とする習慣がつきはじめたといふことである。或村では日曜日には斷じて田畠に出かけぬ。婦人達は精々針仕事位はやるといふことである。濱松市の工場が日曜日に休むので、自然にその影響が周圍の町村へ及んだのであらう。

私共の周圍の人々を見よ、皆あくせくしてゐる。疲れ切つてゐる。よぼ〱してゐる。活氣がない。面白味がない。哄笑がない。滑稽がない。ユーモアもない。神經質のイライラした顔が多い。これでは新文明の創始も覺束かない。働くと共に遊ばせ、勞すると共に休ませなければならぬ。

日曜日の問題は國民的大懸案である。人道問題である。郵便にのみ限つたことでない。

（五・二五）

◎

小島政二郎

郵便屋さんに休みを與へることと、日曜に配達をしないこととは全然別々に考へるべきことと思ふ。郵便屋さんには、一週間に一度休みを與へるがいゝ。しかし、日曜に配達を休むのは、今の日本の習慣では無理だ。云ふまでもなく、西洋と日本とではウィークデー、ウィークエンドの觀念が餘程違ふ。あちらでは日曜と云ふと、あらゆるものが——つまり社會全體がホリデーだ。だから、郵便もホリデーなのに不思議はない。しかし、日本では社會全體がホリデーでない。郵便だけがホリデーでは、社會と云ふオルガニズムが不便を感じるのは云ふまでもあるまい。

◎

佐藤功一

日曜は安息日である。心身は休養す可く設けられた日である。心身の休養とは肉體的及精神的に刺戟から遠ざかることである。仕事のあひ間に銀座通りを散歩したり活動寫眞を見たり變化の劇しい音樂を聽いたりするやうなことを私は休養とは考へない。それ等が人人を喜はせ一時活氣を與へるのは單に精神の轉換に過ぎないのである。靜所に安坐し、或

は氣樂に横臥し、心に輕く淺いことしか思はぬこと、それこそ眞に安息休養といふ可きである。

日曜には充分に心身を休養し、其週間に於ける活動力を養ふ可きであるから、此日はごく親近の人以外は客をも謝絶し閉ぢ籠つて思ふ存分靜養するか、或は郊外に出て綠の森や遠く開けた野のやうな穩やかな風景に接するといふやうに最も反動の夥い心の轉換法を採り疲勞を感ぜざる限りの筋肉の緩やかな運動をなすべきである。日曜日には刺戟の多い食物すら取つてならぬといふ事が猶太の國から起つた宗教の教旨のどこかにないであらうか。

以上は日曜日の話、次は郵便に就て考へる。

郵便は、これを發信の方から考へれば自身が人を訪問し或は使を派して事を傳達させる其代りを行はせるので、また受信の方から考へれば他の訪問或は使に仍ての傳達を受けると同じことで、廣告郵便でもない限りは先方への返禮返答などをまたそれに仍て代理させねばならぬのである。斯の如き事項は總て安息日である日曜に於てなす可きことではない。

大戰後はどうであるか、私の見た倫敦では日曜には郵便物は全然配達されず、各主驛から地方に向ふ汽車すらも此日は早朝と夜間としか發車せず、商賈は殆ど戸を閉ざして街路は頗るさびしいものであつた。歐洲大陸は英國ほどではないが此國に於ては此事が殆ど總ての地方に於て行はれてゐた。私は日曜日に於ける心身の休養に就ては英國のこの習慣のやうにありたいと思ふ。

一週間に一日位は郵便も新聞も見ずに濟む日が欲しい。若し止むを得ない急な通信を必要とする場合には特殊の料金に仍て取扱て與れる、恰度速達郵便のやうな制度を設ければよい。

世が忙しくなればなるほど一週間に一日位全然心身の安息に充てる日即ち總ての刺戟から遠ざかる日が必要になつて來る。今日の日本は既に其域に達してゐる筈である。近代の日本人に結核病者などの虛弱者の極めて多いのは、一面歐米から忙しい文化を採入れながら他面に於てそれに對する休養法を採入れることを怠つてゐる結果ではないかと思はれてならぬ。忙しい文化の中に生活するにはそれに對する節度を知る事が必要である。日本人が日曜日を本當の安息日としたならば、必ずや今よりも遙かに健康なる國民となる可き筈である。

日曜日に普通の郵便の取扱は廢すべきである。

◎

阿部次郎

拜復、用事が達しませんから日曜にも矢張配達してほしく思ひます、手紙を讀むのがうるさいときには何時でも見ずに置くことが出來ます、配達を遠慮して貰ふには及びません。

從業員の立場には同情しますが代りあつて

休むところで折合つてほしいものです、國費のうちから官僚的乃至政商的無駄使ひを省けば、そのための増員をするぐらゐは何でもなく出來るでせう。

◎

鈴木文史朗

私は日曜だけは郵便と新聞は休みにし度いと思つてゐる。日本人の生活にほんとうの安息日といふものがないことは國民生活の上に一缺陥だと思ふ。一週に一度位ひ郵便と新聞から解放されることは、安息を得る一方法に相違ない。又郵便や新聞の從業員のことも考へてやり度い。至急を要する郵便や特別なものは例外を設けるがいゝ。新聞は日曜だけの新聞があればいゝ。

◎

上司小劍

新聞の夕刊の如く、日曜日だけ休むことにしたらいゝでせう。日曜及祝祭日となると、新年なんか三日ぐらゐ郵便が休みになつて、あとの混雜がいよ／＼はげしからうと思はれます。平常でも日曜と祭日とつゞく時なんぞ、困りはしませんか。電話が一般的に普及しない日本では、特に其懸念があるやうです。

◎

水木京太

基督信者でない大多數の日本人にとつて、日曜日は何等宗教的の意味を持つてゐませんし、週給制が行はれてゐない以上大した差異日ともなつてゐません。たゞ手頃な期間にやつて來る「仕事」の休み日に過ぎないのです。私生活にかゝはりがありません。その日を、公衆の便益を計るべき郵便に休まれて溜るものですか。新聞が夕刊を休むことでもう腹が立つてゐるところです。——現在の狀態では集配人が過勞だといふなら、人を増すか、或はくりまはしをつけて週日に順々に休を與へるやうにしたらいゝでせう。丸の內局みたいな會社相手のところでは、大部分の者を日曜に休ませても構はないでせう。しかしそんな末のことで、やれば出來ることを楯に、郵便全休などといふ一般的な鐵則を立てられては迷惑です。日曜だけは俗務から離れたいと望み、離れてゐられる身分の人は、郵便が來ても讀まなければいゝでせう。それはその人の勝手です。——とにかく公衆一般の事情からでなしに配達人の待遇改善のためにそんな事を實行されるのは御免です。そして新聞の場合でも同じことです。以上。

◎

小泉信三

日曜日に郵便物集配を休むことは賛成です。今はどうか知らないが、吾々のゐた時分（一九一二——三年）の倫敦では、汽車の回數さへ日曜日には減らしたものですが、それも慣れゝば左したる不便を感じませんでした。日曜日に手紙が來なくて寂しいといふ人もあるでせうが、其位の不便は忍んでも好いでせ

う。

◎

新村出

日曜に郵便物の配達を休むといふことは、日曜に電報や汽車電車また商店などを如何するかといふ問題とも一應關連させて考へてみる必要もあり、單獨にそれだけの問題として取扱ふわけにはまゐりますまいし、尚勞働問題などといふ方から論ずる必要もありませうけれども、單に郵便物だけの問題として見ますと、三大節は全く休止し、日曜日と其他の祭日は朝一回限りとして、配達するがはと、受取るがはと双方の得失を調和する位にしては如何でせうか。

◎

杉村楚人冠

ロンドンにゐたとき一番いやだつたのは日曜日に新聞が休み店が休み、郵便が配達度數を減ずることでした。勞働者愛護の意味なら代り合つて休むことにすればいゝので、それでは人が多くなつて金がかゝるといふのは資本家の勝手なよまひごとです。現に日本の新聞は年中無休刊でも、社内の者はちやんと一週に一度休んで居ります。郵便だつて日曜日にやはり、配達してほしいと思ひます。

五月二十六日

◎

賀川豐彦

皆休みたいとすれば誰でも休みたいのだから忙しいとは電報に廻して、あまりにせかないことは一週に一日位休んでも善いと思ふ。一週間に一日郵便が來ないと氣がノンビリする、郵便屋さんも多分ノンビリするだらうと思ふ。出來るなら新聞紙も一週に一日休んで與れると良いと思ふ。人間の疲勞は規則的に休まなければ恢復するものでないし、丁度七日目に一回位休むことが實驗的にも必要であることが認められてゐるから、私は郵便屋さんに日曜に休んで貰ふことに大賛成である。

◎

木村泰賢

一、日曜日には午前一回だけの配達に止むることに致し度く候。

二、特に日曜と手紙書きとを結び付け居らず候。嘗て外國に居た際には日曜午前を手紙書きの時間としたれど、歸國後は實行不可能と相成り候。

三、近頃私は大抵の手紙特に端書は電車にて認むることにして、手紙にとらるゝ時間と煩ひとを省き居り候（この返事も電車にて認め居り候。）

四、手紙を書く程、いやなもの御座なく候。

五、進んで生活の單純化と規律化に關して御考究願ひ上候。

◎

高島米峰

日曜日に、新聞の夕刊が來ないといふことは物足らない。しかし、夕刊といふものゝ出

なかつた時のことを考へれば、我慢の出來ない理窟はない。それと同じやうに、一日に十回以上も配達せられて居た市内の郵便が、三回しか配達せられなくなつた今日、そのために、大した寂しさも不便も感じないことから推して、日曜には、郵便の來ないものだときまつて仕舞へば、それでアキラメがつかうといふもの。

官署學校會社などのやうに、日曜休業のところへ、郵便物を配達したところで、何の役にも立たないといふことを、家庭へも延長させるといふのに、不思議はあるまい。

但、急を要する事件の突發を豫想して、速達便だけは、休まないやうにしなければならない。

◎

矢田挿雲

西洋に居て羨ましく思つたわ郵昼のなつかしい事、反對に日本を稀有く思つたわ日本の郵便局が日曜も休みの無い事でした。郵便局員の激務であることわ充分承知してゐますが交通機關に休みの無いように日曜も休んではしくないのです、個人としてわ代り合つて休んでも機關としてわ不休に運轉すること新聞紙の如く汽車の如くあつてほしいのです、此頃速達が午後三時限りなのですら私等にわドレ程不便でしよう。

◎

小村欣一

配達をする人から見ても配達される方から云つても、せめて日曜丈は郵便から遠ざかりたい感じがします、速達便丈にしてはどうですか。

◎

清澤洌

アメリカから歸つて來た時に、直ぐ『あゝ日本はいゝなと』思つたことが、少なくとも一つはありました。それは日曜にも郵便があることでした。私は日曜に郵便がなかつたら、どんなに淋しいかと思ひます。この事は郵便局關係者を三百六十五日働かせうといふ意味ではありません。この人々は一週間一日の休養は無論必要です。それは人のやり繰りで簡單に出來る筈だと思ひます。

◎

宮田修

手紙と云ふものは新聞雜誌などと共に、必要であつて且つたのしいものである。就中徒然の折などは一しほ郵便物の到着は、云ひ知れぬたのしみになる。然し此頃の樣に郵便物の多くなつた都會生活は、寧ろわづらはしさを覺えることが度々ある。ことに返事を出さなければならぬものの多いのは、閉口此上もない。一週一度位全く此煩しさからのがれる日のあることは、受信人にもよいから配達の人に其要求がありとすれば、少くとも私は賛成する。

◎

高畠素之

私と日曜には絶對に縁のない程の素浪人です。夕刊の不着と、速達の制限と、子供たちの騒々しさとで、初めて今日は日曜であつたかと知るやうな身分ですから、日曜と郵便についても取り立てて感想といふ程のことがありません。原稿など送るとき、日曜だから速達に制限があるときいて、これは不便なことだと時々嘆息を漏らしたりする位ゐが關の山。

◎

澤柳政太郎

一、郵便事務從業員の爲に、日曜の集配は幾分斟酌するのがよいと思ひます。全然集配を廢止するは一般の不便ですが、集配の度數を減じて、從業員の半分とか、三分の一は日曜の執務を見ないことにするのは良いと思ふ。一般の人も多少の不便を忍んでよいと思ふ。

◎

土田杏村

全く郵便物を見ないのはさびしい氣がします。書信、書物、雜誌、新聞と、郵便物をくくつた紐を解くのは（私のところへ配達されるのはいつも紐でくゝつてありますから）一日の生活の中の樂しい事柄の一つです。日曜でもやはり配達して欲しい氣がします。但し配達の回數は平日の通りで無くて宜しいでせう。朝夕二回、又は朝一回でも宜しいでせう。私のところは平日三回配達で日曜は二回ですが、これで不便はありません。

◎

ささきふさ

私は昔から郵便やさんといふものが好きです。何處かへ行つて道で郵便やさんを見かけたりすると、妙に胸がきゆつとつまる氣さへするのです。が、暴雨の日などに「郵便」の聲を聞くと、詫びたい氣持で一杯になります。で私は、日曜にも郵便やさんには遇はしてもらひたいのです。が雨の日にはこちらから取りに行くことにしたらどんなものでせうか。――

フランスでは日曜でも朝一回の配達はあつたと思ひます。四階の窓から中庭の向ふの門衛の部屋をのぞいて、郵便やさんの影を認めると、夢中になつて駈け降りて行つたものでした。それから降誕祭が近づくと、金一封を送つて日頃の勞を謝す習慣だつたと憶えます。日曜は休むにしろ休まないにしろ、此習慣だけは日本でも眞似てよくはないでせうか。

◎

小酒井不木

日曜に店も何もかも休むといふのなら兎も角ですが、やはり私は一回くらゐの配達はありたいと思ひます。外國に居たときも、やむを得ぬとはいひ乍ら、物足らぬ感じがしました。

◎

山田耕作

年柄年中日曜もなく祭日もなく働いてゐる私にとつては「日曜と郵便」といふ題は何ものをもよび起してくれません。然し日曜日一日位郵便の配休があつてもいゝでせう。私のやうな働き亡者はそれによつて日曜のありがた味を知る事が出來るでせうから。

◎

水野廣德

遞友會からの日曜と祭日には郵便の配達を休ませろといふ要求は、從業者の立場より考へて大に同情すべきであると思ひます。併し社會人としては又別に考へるところがあります。元來交通と通信とは早いが賞翫です。年末に屆いた年賀狀の外は、如何なる通信にても早や過ぎて困まるといふことはありますまい。電話が二千圓で賣買せられたり、電信局へ五里もある日本に於ては、郵便は僅に無産者並に僻地農民等の通信の大本であります。

斯くの如く通信施設の尙ほ甚だ不完備なる我國に於て、休日に郵便配達を休止することは、是等の民衆に取りては大なる苦痛であり、大なる不便であります。日曜だけは俗務から離れる意味で郵便配達を御免蒙りたい様な人達は、郵便を配達されても讀まなければ好いのです。書留以外の郵便物は一々受取を出す必要はありません。少くも電話が自由に引ける様になるまでは、休日の郵便配達休止には贊成が出來ません、即ち我國に於ては時機尙早と思ひます。

遞友會要求の理由が從業員の過勞の爲めであるなれば、人員を增加するとか、休日給を支給するとか、適宜の慰藉法を講ずることが、必要でありませう。若し其の財源が無いとなれば郵税の値上げも亦已むを得ますまい、併し又要求の理由が休日遊樂の爲めであるなれば、公共事業從業者たる道德的責任に省みて辛捧を願はなければならん。現に他の公共事業たる電車や汽車は休日だからとて休止は致しません。英國あたりでは日曜には郵便配達を休むが汽車は平日よりも却て餘計に運轉して居ります。素より世人の休む時、世人の遊ぶ時に、公衆の便益の爲に働く人々に對しては社會は大に酬ゆるところが無ければならぬと思ひます。

◎

安成二郎

日曜に郵便が來なくても、月曜に澤山來ればそれもたのしみです。今のところ、私はさう忙しい仕事をしてをらず、出すべき手紙をポケットに入れて二三日忘れてゐたりする位で、受取るのも出すのも、日曜が休みになることは、殊にそれが配達人の休養になることですから、私は異議がありません。私のゐる阿佐ヶ谷は速達便がききませんが、それもあまり不便にも思ひません。郵便の來ないのは寂しいかも知れませんが、すでに夕刊の來ない日曜になつてゐるのですから、この上郵便が來なくなれば、ほんとにのんびりした日曜

をたのしめるでせう。

◎　都河龍

日曜に夕刊が出なくなつてからは、何となく社會から解放された樣なすが〳〵しい氣持になりました。

之と同じ意味で、郵便配達も日曜を休むことになつたら、さぞ、さば〳〵した氣持になれるであらうと思ひます。

◎　澤田謙

僕はいま、日曜のない生活をしてゐる。と言ふと、馬鹿に働らいてゐるやうだが、考へ方によれば、毎日が日曜みたやうなものだ。

忙しくなると、晝夜兼行、十日でも二十日でも、日曜なしに、ブッ通しに働らく。その代りに、暇になると、一週間でも十日でも、ブラリ〳〵と、暢氣な面をおもてにさらしてゐる。

定職がないと、どうもかういふ風になり易い。

さういふ僕には、「日曜と郵便」といはれても、ピツとこない。第一、日曜といふ日がないんだから、夕方になつて夕刊がこなかつたり、郵便の配達度數が少くなつたりするので、はゝあ今日は日曜だつたのだな、と、始めて覺る始末なのだ。

尤も、かういふ生活は、どうもよくないらしい。やつぱり、誰が決めたのか知らないが、一週間に一日は、チヤンと休んだ方が、いゝやうに思ふ。

亡くなつた有島さんは、よく、今日は僕の日曜だから、一つ一緒に展覽會にでも行きませんか、などと、誘つて下さつたものだ。有島さんは、水曜日かなんかを、勝手に、自分の日曜にきめてゐられた。その方が、日曜に休むより、方々が混まなくて、いゝといふことだつた。

僕もいつそ、有島さんの故智を學ばうかな、などとも考へてゐる。

そこで、最後に「日曜と郵便」だが、自分がさう思ふにつけても、郵便屋さん――これは配達する人々ばかりではない、郵便事務をとつてゐるもの全部を含む――だつて、やつぱりさうではないか。一週に一度は、必ず休むやうにした方が、よくはないか。

尤もこれは、「若しできれば」の話だ。それでは世間樣が不便で仕樣がないといふなら、別の話だ。或は、その方が煩はしくなくていいといふ人もあらう。その邊は、ほかの方々が書かれるだらう。僕は僕の思ひついたことだけを卒直に申上げただけだ。

◎　千葉龜雄

日曜の觀念や習慣が、外國と違ふことからも、外國の一切の風習を、日本に採用するわけに行かないので、こゝに多少の喰ひ違ひがあります。何にしても日本人の生活は、きり無しにだらだらですから。次に、郵便物と民衆生活は、衣食住につぐ重要さをも持つて居る、その全部休業は新聞日曜休刊とは、違つた意味でもつと以上に大きな影響を持たぬとも限りません。が、週友會の要求は、その他の條件を含めて、一々尤も以上尤もな要求だと新聞で讀んで居りました。で、將來は兎も角、差しあたり、日曜には、速達や書留のやうな制度と同樣に、特種な制度の下に、本當に必要なもの少數だけを配達する事とし、少

數者が事務に當り、かはり合つて休むやうな事にでもしたら、どんなものかと思ひます。

◎

安部磯雄

日曜に郵便物の配達を全廢することに大贊成です。

◎

今東光

ムツサリニは日曜を休む理由がないといつて廢止して仕舞つた。日曜を安息日として休むのは、實はユダヤ民族の宗教的祭事であつて、たとひクリスト教國でも今日の經濟組織の下にあつては必ずしも勵行するの必要を認めないといふ理由に基くらしい。今日のイタリーは從つて、少くも一ケ月に四日の安息日を利用して、富國强兵の策を施してゐるらしい。

元來、日本人も日曜を休む理由がないと思ふ。日本はクリスト教の信仰の自由を許しただけでよかつた。日曜を休みだしたのは何時頃だつたか一寸思ひ出せないが無意味なことだと思ふ。祭日等も同様である。

その代り一ケ月に一度の公休日があれば好いと思ふ。總別日本人は休み過る。休みたがる民族である。日曜の他に、春秋の祝祭日、それから冬夏の長い休養等、一年の中に本當に働く日は珍らしい。

自分は原稿生活者であるために、特に日曜など無い。從つてメ切日の切迫した日曜などに原稿が出來て、郵送することが出來ないと不便以上のものを感ずる。

郵便物を配達する人が日曜を休ませてくれといふ要求はわかる。しかしこの要求を容れたらどの位の不便と支障を生じてくるかわからない。けれども此の要求を容れないためには、何人も日曜と祭日を休まないことだ。

仕事に關する手紙、葉書、もしくは電報などは、直接生活と交渉してゐるもので、面白くもお可笑しくもない代り、それが前述の如く休み日の連續のために支障を來したら困るのはわかり切つた話だ。しかし仕事以外の手紙は、遠方から來た友の如くに樂しいものだ。それは配達する人自身感じてゐると思ふ。

自分は郵便遞配のことに限らない。近頃の勞働爭議一切に對して、ムツソリニの意見に贊成するものだ。閑職にありながら高額の手當を貰つて休み日のまゝに休養してゐるのを見ると腹が立つ。さうなれば誰しも休みたいのは人情だからだ。さうして一人に休みを與へるなら、萬人に休みを與へなければならない。さうなつたら何も彼も休むだ方が好い。

しかし一層一切休まないことの方が好い。

◎

石濱知行

日曜及び祭日等の一般休日には遞送人も休むのは至當と考へます。たゞ至急の用のために電報と速達郵便（これは二三の都市にのみ行はれてゐる樣ですが、その他の諸都市にも行はれる事を希望し又前提として）のみを存置すれば、用は足りると思ひます。

◎

榎山專太郎

配達夫諸子のことを考へればやはり日曜に休みを與へてやることは宜しからんと存じ申候日曜の無配達何の不都合をも覺へ不申却て大に歡迎いたし候事に候右拜答まで匆々

プロレタリア文藝總評

上司小劍

一

プロレタリアの文藝といふやうなものを、特別に見出さなければならぬ世の中を、痛ましいとも悲しいとも思ふ。さういふものが、特別に在つてはならないと窮屈に考へるのではないけれど。——

プロレタリアの文藝とは何んぞや。階級鬪爭意識に目醒めたる文藝、無産階級の解放に向つて突進する文藝。………なぞと散々言ひふるされたことを繰りかへしてみる必要はない。私のこゝに書かうとするところのものは、そんな問題の解釋でなくて、世に所謂プロレタリア文藝の作家として、たとへ無理にもせよ、さういふ冠を被せられてゐる人たちのもつ作品の批評である。總評である。總評と言つても、時間と紙數とに制限があるので、漏れたものゝ尠なからぬことを斷つておく。

大杉榮が世に在る頃のことだから、もう五六年前になる、或は七年ぐらゐの昔しになるかも知れない。彼れは吃りながら、マドロスパイプを握つたまゝの手を振り〳〵よく言つてゐた。『ままづいね、き君、プロレタリアの作家ちう奴は。………どいつも、こいつも物にならない。………か書くのを止めて、う腕でやるといふほどの奴もゐないし。あ、あれで、うまく行つたら、作家で飯を食つて、をさまらうといふんだから、づうづうしいや。………おおれは文章もまづいし、喋舌(しやべ)ることも、できないから、（と、指で口を、輕く突きつゝ）う腕でやる。………』と、また劇しくマドロスパイプを握つたまゝの手を揮つ

て、パイプの脂が飛び出しさうだつたことがある。

大杉が徹頭徹尾腕でやりとほしたか否かはこゝで言ふまい。筆でやるのも腕でやる一種のうちだと言へばそれまでだが、しかし、私は革命の戰士たるものが、筆や口で、まはりくどく、ノロ〳〵やつてゐても仕方がないと勇んでいつた大杉の言葉に感動したことがあつた。彼れは吃りだつたから、筆よりも戰士としては有効の武器たる口に諦めをつけ、たゞ『腕でやる』と言つてゐたのだ。それはずゐぶん悲壯でもあつた。腕でやる筈の男が、大火事の燒跡をうろ〳〵してゐて、結局腕でやられたのは、何んとも言ひやうがない。しかし、こゝではそれを論ずる場合でない。私が本誌の需めによつて、プロレタリア文藝の總評を草するにあたり、腕でやるべき人たちの書いた小説戲曲……といふやうなことが、とかく頭の中から離れないのも、昔しの大杉の言葉が、どこかにまだこびりついてゐて、祟り（？）をなすためであらうか。

二

これも七八年前のことになる。私は久米正雄氏に頼まれて、其の頃あつた雜誌『人間』の卷頭に、『ひとりごと』と題して、左の一文を草したことがある。

プロレタリアートの藝術とか、ブウルジウアジイの藝術とか、妙な言葉を聞くものだ。

藝術には國境がないと共に、また階級があつてはならぬ。階級の撤廢を說く人が、藝術に階級を築かうとする。變ちやないか。

いゝ藝術は、どこまでもいゝ藝術だ。わるい藝術は、どこまでもわるい藝術だ。

強ひて階級的に言はうとするならば、藝術とは貴族的のものだ。平民的の藝術なんて、そんなものがある筈はない、と言へるのであらう。

階級鬪爭の思想に捉はれて、貴族的といふ言葉をば、藝術の上から無理にも取り去らうとするのは、下世話に言ふ『坊主憎けれや袈裟まで』の類だ。貴族といふ言葉は、わるい言葉でない。總べての人間を皆貴族にする――貴族と卑族との別を無くする――のが、人間生活の向上ではないか。

たとへば、鐵道列車の階級を撤廢するのは結構だが、それは、一等、二等を廢して、總べてを三等にするのではいけない。二等、三等を廢して、總べてを一等にしなければならぬ――それと同じだ。

進歩とは、墮落のことでない。

衆愚の跋扈、歴史の濫用、趣味の低下。………この三つが近世の風潮の齎らした或る主義思想に伴ふ、人類生活の墮落だ、といふ聲は、ずゐぶん久しい前から響いてゐる。さうして、それが屢々事實の上に證據立てられる。

人間生活の墮落は、即ち藝術の墮落となつて現はれる。『藝術は文明から逃げるものと見える。』と言つたクロポトキンの言葉が、痛快に味はれる。

今日の藝術が、ルネエッスサンスの藝術に及びも付かないのは、今更言ふまでもないことであらう。それは藝術といふものが、人生から創造されないで、書齋や畫室から出て來るやうに、近世の文明が築き上げられた爲であることは、これまた言ふを待たない。

科學が進み、文明が開けて、分業といふ一つの科が、藝術にまで入り込んだ。こゝに藝術墮落の端が開けて、職業藝術家がうじよ〳〵と、其の製作を競ふやうになつた。近世の社會制度、經濟組織が、いよいよ彼等職業藝術家の存在を確保するとゝもに、インスピレーションから來ない藝術が、ドンドンと、墮落の一路を辿つて行く。

かくして、活きた製作といふものが、あらゆる藝術家の手から全く引つ込んでしまつた。

プロレタリアートの藝術。………そんなものが、どこにある。プロレタリアートは、其の苦しく虐げられたる生活の爲めに、藝術を味はふことなんぞは、疾くに忘れさせられてゐる。其の忘れさせられたものを、奪ひ還へすの途は、一に社會の△△にある。萬人が總べて貴族になるにある。再び言ふ、藝術は貴族的のものである。

根本の療治を忘れて、藝術のみの墮落を救ふことは出來ぬ。

萬人が皆貴族になり、貴族が總べて藝術家になる。………少し工合のわるい言葉だが、これ以上、今の世では、私に書く自由を許されない。再び言ふ、プロレタリアートの藝術とは、何んだ。

いまから考へると、言ひ過ぎた點もあり、言ひ足りない節もあり、何分まだプロレタリア文藝などといふことが、ごく少數の人々の口の端に上るだけで、一般人はもとより、人生世相をさながらに寫す、ことをもつて、藝術の極致のやうに考へてゐる人たちもプロレタリア文藝といふやうな言葉に對して、一向あッけらかんとしてゐた時代だから、私の言つたことにも隙が

あるのは、私として止むを得ない。しかし、私は今日に於いても、大體において、以上の所說に大變更を加へやうとは思はない。私の思想の骨子は依然としてそこに存する。現に目下進行してゐる或る著書の序に代へて、以上の文章を其のまゝ入れやうと思つてゐるほどだから。

三

私がこゝに、プロレタリア文藝の批評を試むるに當つて、先づ滿腔の同情をもつて諸家の作品に對したことを、特に申し述べておきたい。私は元來藝術屋さんの藝術、小說屋さんの小說、戲曲屋さんの戲曲なんぞが、人生に幾許の價値をもつものか、といふことをば、久しい間疑ひつゞけて來たものゝ一人である。社會の組織が不自然に拘束されて、職業藝術家なるものゝ輩出となり、書齋や畫室から、嘘をひねり出すか、自分の狹い座右の見聞や愚痴を、微に入り細を穿つ式に描いて、自ら得たりとしてゐるやうなものを、鑑賞する氣になれなくなつたのは、つひ近頃のことであるが、少年の頃西鶴を讀んでも、其の麻姑掻痒の筆がいたづらに目まぐるしく動いてゐるのを知つたくらゐで、實は左傳や史記の方が面白かつた。ぞんさいでもあり、空漠でもあるが、私は東洋の古小說として、左傳史記を薬てることが出來なかつた。今でもさうだ。近頃の作家の書いた名篇と呼ばるゝものを讀んでも、あツけらかんとしてゐる私は、大昔しの短かい伯夷傳なぞに感動するのである。小說屋の人情小說や、痴情小說で社會が豐かになる、なぞといふことを聞くと、噴飯を催すのである。

私はまたゾラが好きだ。今頃ゾラでもあるまいと言はれるであらうし、また別だんゾラの全著作を讀破したのではないが、ゾラの晩年の諸作『三都市』や『四福音』は、讀まずとも本を祀つておきたいやうな氣がしてゐる。いはゆる藝術屋さんたちの中には、『ナナ』や『ラツソムムウアル』にうつつをぬかす人があつたやうだが、私はそれよりも晩年の傾向小說、功利文藝に尊敬の念を持つ。西鶴よりも左傳史記に行つた少年の幼稚さが、まだのこつてゐるのかも知れないが、そこに私の信念がある。いや信念といふほどのものでもないか知れない。一度剝いた私の信念は、『なんだベラボウ、藝術なんかばか／＼しい』といふことになるのかも知れない。

死んだ大杉のやうに、『腕だ、腕だ。腕でやる。』と言つてみても、私にはそんな腕はない。實際運動などといふことは、引ツ込み思案の臆病者の私には、聞いたゞけでも手足がブル／＼震へる。やはり書齋に引ツ込んで、たゞむしやくしやしてゐるよ

りはほかないのであらう。文學に沒頭することも、藝術に浸ることも、私には出來ない。生活の資を摂まうとしても、其の力がない。萬人の安樂と餘裕とを希望する未來の社會を胸に描きつゝ、いかにして、主人と奴隷との區別を跡かたもなく絕滅すべきかを知らぬ私が……………其の私がこゝにプロレタリヤ文藝の批評をするのである。作家諸君の屬する分派に就いても、委しく承知しない。たゞ作物に現はれたところによつて、私の判斷を加へることがあるかも知れぬ。

四

前田河廣一郎氏の作品は、ズツト前に『三等船客』を讀んだだけだ。近頃創作的にどれだけの進境があるか知らない。『三等船客』は無產階級の縮圖を、そこに描き出さうとしたものゝ如く見えた。物を觀てゐる眼はよく光つてゐるが、藝術的の煮えが足りなくて、生硬な、ぶつ〳〵のやうなものが咽喉へ引ツかゝつてしやうのなかつたのをおぼえてゐる。

今度この批評を書くにつけて、中央公論社で古本を探してもらつて再讀したが、前に感じたこと以外に、多くの取柄はなかつた。いかにも凝つて書いてゐるらしいところが、却つて目ざはりのやうにも思はれた。けれども物事はよくわかつてゐる。說みは外れてゐない。自然主義初期の作物のやうな氣のするところもあるが、それはやはり文章の生硬な點であつた。煮えたやうでこじれてゐるところだ。しかし自然主義の初期には、これよりももう一つ生硬なものが、名作として通用したのだから、彼是れ言ふにはあたるまい。環境は書けてゐるが、人間が十分に浮び出てゐない。作を通じて現はるゝところのものは作者の人物の善良といふことゝ、刻苦してやまぬ柔軟な力とである。けれどももう少し人間を深く書かなければ、プロレタリアにしろ、ブウルジョアにしろ、小說にはならない。冴えた物の觀方はあつても、抉つたメスの銳さがなければ物にならぬ。

しかし、比較的舊作を通じて、斷案を下されるやうなことは作者も迷惑だと思つて、（こゝまで書いた時）氏の近作『太陽の黑點』を改造の最近號で讀んでみた。やはり環境は可なりに書けてゐるけれど、人間が深く書けてゐない。扱つた世界はどうであらうと、物の觀方に間ちがひなからうと、人間を深く書かない——書けない——といふことは、小說としての致命症ではあるまいか。私は思つた、この人は人間を書かないつもりだらうか、と。

環境がよく書けてゐると言つても、新聞の社會面の郊外雜記以上、どれほどのことがあるか。私は十分作者に好意と同情と

をもちながら讀んで、なほ且つこの作に推服することが出來なかつた。しかし、これからはかういふ小說が手ッとり早く、早わかりがするといふので、大に流行するのかも知れない。プウルジョア美學をプロレタリ美學に變更してみたとて、人間の體內を流るゝ血汐は赤く、天から降る雪は白いと思ふが、世間のこと、將來のことは、果してどうなるのかわからない。詰まらないことを取り立てゝ言ふやうだが、産卵雞のレグホンが、すぐ巢に着いて卵をかへしたといふことも、この作者から聞いた珍らしい話の一つだつた。

私は先頃偶然に、この作者と信州で講演を共にして、大に其の眞摯さ素朴さに感心した。氏の平常を委しく知らないから、ヘッキリしたことは言へないが、いかにもいゝ人であつた。善良が漲つてゐた。酒が好きらしいから、酒の嫌ひな私には附き合へないかも知れないが、かういふ友も一人は欲しいと思つた。フランネルの單衣の着流しで、兵兒帶を後でだらり結んだ氏の姿が、演題に現はれると、聽衆は狂喜したやうに拍手喝采をおくる。わざとらしいとか、衒ふとか何んとか言つて非難すれば、それもさうだと答へ得るが、私はどこまでも、氏の飾らざる風采を眞摯素朴と見てゐたかつた。聽衆もさうであつたらう。多數でもつて、無理にもさうと暗默のうちに議決して、大喝采をおくつてゐたのだ。私は七八歲の頃から、自宅に居ても袴を穿いてゐなければならぬといふやうな家に生れたので、服飾の虛僞矯飾といふことには一ばん反感をもつ。それで一時は袴を廢し、羽織も防寒以外には着ないことにしたのだが、いつの間にかまた煩瑣な矯飾生活の軍門に降つて、袴を穿いたり、モーニングコートを着たりすることになつた。私としては、哀しくも寂しい墮落だ。服裝のことなんぞ末の末だと言へばそれまでだが、しかし身邊に無駄な飾りがあつては、心の飾りがどうしてとれやう。往年ロシヤの虛無黨男女の飾りを撤去した風采を想ひ、いま壇上にフランネル一枚の前田河氏を見た時、私はそれだけで、將に到來せんとする或る時代を考へたのであつたが、氏の風采にくらべて、氏の文章にはどうも無駄な飾りが多い。さうして、深かるべき底の甚だ淺いのを思ふて、一面識を得た早々に苦言を呈したくなつた。氏も或は腕の人か、それとも口の人か。

五

新居格氏の小說を讀むのも、今度が初めてである。『月夜の喫烟』といふ小冊子が寄贈されたまゝ埃りの中にあつたのを取り出して讀んだのだ。と言へば、作者に對して濟まないやうだ

が、私は近頃あまり他人の小說を讀まないことにしてゐる。定評あり定名ある人の作は大抵讀まない。昨年來世間的に評判だつた『嵐』とか『もとの枝へ』とかの作品も讀んでゐない。新居君から『月夜の喫煙』の寄贈を受けた時も、『あゝア、新居君が小說を書いた、讀んでみたいなア。』と思ひながら、多年讀んだ小說のおくびが胸にいつぱいで、つひ〳〵食指が動かなかつた。

新居君とは、久しい前、机を並べて仕事をしたことがあるので、氣心はよく知つてゐる。アナアキズムの研究をしてゐたやうで、私も同樣それに思索を寄せてゐたから、其の道の深入りした話はしたこともなかつたが、何んとなく好いたらしい人だつた。新居君は其の頃今よりも、もツと膨れてゐて、どうかすると、ひどくだるさうに、倦怠した如く見えてゐたので、同じ社の老先輩から、『君は飯を尠く食ひたまへ、今まで四杯食つてたとすれば、三杯に減らし、三杯食つてゐたとすれば、二杯に減らすんだね。さうして君の活力を回復するんだ。』などと言はれてゐた。別に活力がなかつたわけでもないのだが、其の頃新居君は何か深く考へ込んでゐたものであらう。『あなたはお孃さんをどうするつもりですか。』などと突然私に藪から棒の問ひを發したのも、其の頃のことであつた。よく訊いてみると、君には年不相應に大きな娘があつて、私も同樣大きな娘をもつてゐたので、其の處分方の相談ともみるべきものであつた。君の率直さが、この一事でわかる。大阪では君と連れ立つて、松屋町を散步した揚句、寄席へ行つたこともある。

これだけの交渉を頭において、今度初めて氏の小說『月夜の喫煙』を讀んでみると、氏のもつてゐる一部分がハツキリとわかる。ずゐぶん幼稚な感懷も並んでゐるが、棄てがたい情趣の深みといふやうなものもある。總體において素人の書いた小說といふことが、よい意味でよく現はれてゐる。將來の社會においては、萬人が皆これくらゐのものは書く。小說も俳句の如く、床屋でも湯屋でも、手ツとり早く書かれて、專門の職業小說家のなくなるに至る時代を示してゐる。……………とでもいふべき作品が、短く〳〵、いくつも並んでゐる。甚だあツさりとしたものだ。萬人が和樂を得たアナアキズムの時代には、愉快なる勞動の後で、かういふ風の小說が多くの人の手によつて多く書かれることであらう、などとも考へる。もちろん時代が時代だから、君の作のあるものには叛逆の影が漂ふてゐる。しかもそれは極めて淡く、煙のやうだ。君のノンキ（よい意味での）と偉大との吐く息とも見られる。

六

、葉山嘉樹氏の作品は、元氣に怒鳴りつゞけてゐるやうな作品である。かうなるとうまいとか、まづいとかいふことは、全部問題でないやうな氣がする。美學の變更を要求するまでもなく、美學なんぞ叩き潰してかゝつてゐるから痛快だ。氏の出世作『海に生くる人々』を讀んでみても、全部理窟と說明との行列ではあるが、ところ〴〵に言ひ知れぬ鋭い閃きを見せて、其の理窟が、さうした方面の書物を二三冊讀んだものにとつては、至極平凡であり、さうした世の中に目を向けて、多少とも研究を凝らしてゐるものにとつては、一種の染めかへしを見るやうで、もちろん、先人未發の意見なぞは、少しもないが——そんなものゝ滅多にある筈はない——しかし、微妙な手管（?）で人を惹き着けるだけの力はもつてゐるし、其の說明が、必ずしも巧妙をもつて終始してゐるとは言へないが、なかなかうまい言ひ廻はしもある。或る敎科書、或る讀本として、最も有效に、いはゆる無產階級の解放に向つて突進したものでがなあらう。

說明を嫌ひ理窟を厭ふ人情小說が、人間の細かい神經の動きや、滿腹した上の榮耀に餅の皮式痴情やを操りかへし、押し並べて、純藝術品の名でのたくりまはしてゐる一方に、かうも大膽な理窟と說明との行列で、のさばり步き出した愉快さ。それだけで、もうこの作者の存在價値は十分だ。相變らず環境が書けて、人間が描けてゐない憾みはあるが、それも前田河氏の場合ほど目立たないのは、元氣と力とにおいて勝つてゐるためでもあらうし、恐ろしい情景の全部が、殆んどすべて、作者の實驗若しくはそれに近いものから來てゐると思はるゝからでもある。とにかく『それを愛して、それを書いてゐる』ところに、氏の作の力が表はれてゐる。書齋で捏ね上げて、センチンタルの刷毛でなすつたものに比べて、生活の眞を得てゐるところのあるのはもちろんだ。たゞ徒らに咆哮するだけで、筆のこれに及ばない點のあるのはもちろんだが、それらはすべて、末の末だと思はせるところに、この作者の力があり、眞があるのであらう。……と言つても褒め過ぎにはなるまい。若い人だ、花を持たしてやれと言ふのではない。

『海に生くる人々』にしても、——と言つても、實のところ、それ一つ讀んだだけだが、——作者の實驗若しくはそれに近いものから得た部分は、理窟に落ちても、說明になり過ぎても、一點の靈光ある力が、それを緊張させて、蹈んでも押してもぶよ〳〵しないけれど、一步を點じて、作者未見の世界、たとへば船長の家庭などといふ人情小說の境、旣成職業作家の領域とでもいふべきところへ蹈み込むと、ぐツたり力が委へて、さツ

ばりあかん、といふやうなことにもなる。しかし、そこがいゝのだ。忘れても職業藝術家の汚れたる足痕なんぞ踏んでくれるな、と言ひたくなつて來る。

作者が女裝して、酌婦に化けて滔々と理窟を辯じ立てゝゐるやうな場面には、ずゐぶん當てられたが、こゝんところは、どうしてもまだ作者の創造に手ぬかりがあり、表現に至らぬところがある未熟さに歸せざるを得ない。不熟の果物で、青い、青い。しかし其の青さをだん／＼還元して行くと、それが美しい花なのかも知れない。

この作者の仰山な物の書き方には、感心していゝ時と、眉を顰めさせられる時とがある。さうして、船の中のことを書いてゐる時は、極めて立派だが、一旦上陸して陸上のことゝなると、筆力が忽ち衰へる。それで、陸上のことをも、成るだけ船中へ持つて來て説明しやうとする。まるで河童だ。――やはり海に生くる人々だ。

支配階級が皆悪者になつて、被支配階級が悉く善人だ。……といふやうな傾向は、この作者の書くものにもむろんある。それはしかし咎めるに當らないことだ。かういふ風の傾向小説の作者でなくとも、時代道德或は時代常識に盲從した昔しの戲作者だつて、大抵の場合、店子を皆善人にし、大家を皆慾張りにしてゐる。菅原傳授手習鑑の作者なんか、殊にひどい、二十幾歳の時平公をば、鍾馗のやうな老爺にして、五十餘歳の菅公を、水の垂れるやうな若い美男子にしてゐる。無產階級の解放のために戰ふ論客や作家も、皆この常套手段を追ふてゐるのだ。資本家及び其の手先きにだつて善人はゐるだらうし、勞働者にだつて悪黨はあるだらう、しかしそれは資本主義の悪を遂げさせる理由にはならない。悪僧が出たからと言つて、宗教の教義に變更のないのと同様である。この作者のものなんか、むしろ悪を悪とした正直さがある。少くとも配流時代の菅公を美青年にするほどの僞りはしてない。

『わたしは舟のりだ、小說家ではない。書く、なんてとてもむづかしい。』この作者は其の作中にかう書いてゐる。私はたゞこゝのところの意氣を愛するのだ。どうか、わすれても小說屋になつてくれるな、とさう言ひたい。この作者の抱くマルキシズムらしい根本思想に就いて、私には異議がないでもない。しかし、私はこの作者の將來を少し大きな眼で見てゐたい。かへすがへすも、小説屋にはしたくない。私はこの作者とも信州で講演を共にして、彼れの作中にあるのと同じ、元氣な、大きい聲を聞いた。いろ／＼の意味で、最も將來ある人よ、健康であれ。

七

宮島資夫氏の作は『流轉』なんぞに現はれたところを見ても、ガン〱怒鳴り立てる方でなくて、しみ〲語る方だ。それだけに幾分、舊藝術の型を系統的に引いてゐる。環境を書くばかりでなく、人間をも描き得る方だ。其の人間の現はれかたがうまいか、まづいか、それは別として。

二三四年も前のこと、私が或る新聞に、アナアキズムの上から下した藝術觀を述べるとき、この作者はそれを何かの誌上で評して、『全部同意だが、それにしても氏（私のこと）の現在の生活はどうしたといふものだ』と言つた。これに對して私は、ほんとうにぎよつとしたことがある。自分の作や言說に對して、何を言はれようと、『私は一切無頓着で、人は人、自分は自分と、冷靜に構へてゐるのだが、宮島氏のこの言葉にだけは、戰慄をおぼえた。さうして今もなほヘウキヨと、其のまゝ其の折りの戰慄を胸に貯へてる。書いて食つてゐるといふやうなことが恥かしくてならぬまゝに數年の歲月は流れた。まことにどうしやうもない自分である。泥田の中に突つ込んだ足が拔けないで、もがき苦しみながら、死ぬまでさうやつてゐなければならぬ、と思ふと、寂しい。勇氣も力もないのだ。

今こゝにこの作者のものを讀みなほしてみて、私は當年の戰慄が、更らに甚だしく自身の上に襲ひかゝるのをおぼえた。現在の生活に對して慚愧たらざるを得ざるものは、文壇豈に獨り『私』のみならんや、なぞと思つてみても、人は人、自分は自分だ、人が恥知らずだからと言つて、自分の恥知らずが塗り消されるわけではない。

私はこの作者の最近の生活を知らない。しかし、事によつたら私と同じやうな惱みに悶えてゐはしないかと、よけいなおせつかいを考へる。自分のことはともすれば棚の上へあげておいで。

しかしながら、これは或は、プロレタリア文藝家の將來に共通する惱みではあるまいか。くれ〲もさうあつてはならぬ、といふやうなことも考たくなる。初めの出發はどうあらうと、少し根が下りたら、すぐ職業作家に成りますといふやうなことは、現在社會の組織が、ひとりでにさうさせるといふ點もあるが、どうもいやなことだ、恐ろしいことだ。藝術家然と、をさまりかへることの危險。……けれどもそれは何も特にこの作者に就いてばかり言ふのではない

ブルジョアヂィの作家ならば、それが一轉して廣告商賣の資本家にならうと、資本家の番頭にならうと、旣成政黨所屬の代

議士にならうと、貴族院議員にならうと、それはむしろ彼等の眞面目かも知れないが、プロレタリアの作家が職業藝術家に成り濟ますことだけは見てゐられないやうな氣がする。現在の社會をこのままにしておいて、そんなことをいふのは無理かも知れないが。…………

この作者には、しかし、よい意味での藝術家的素質が可なり豐かに恵まれてゐるやうだ。『流轉』を讀んでみても、工場勞働の悲慘が、特に誇張されずに、讀者の胸へ迫るやうに描けてゐる。他のプロレタリア作家のになるとさういふところが、これでもか、これでもか、と出刃庖丁でゝも人の横腹を抉るやうに、そこだけに特別の力を入れる。それもわるいことではないけれど、たとへば新聞紙が震災の慘害を寫眞版で報道するやうに、特に甚だしい部分だけをくり抜いて寫すから、慘害の程度を高めて見せるとともに、四邊の光景をも包含して眺めた實地の有様とはよほど異つたものになる。寫眞だから嘘でないのだが、どうもちがふ。…………さういふことは傾向小説なぞに得てしてあることで、それだけに、藝術的價値として割り引きされるわけだが、この作者のものには、さうした誇張が尠ない、全くないとも言ひ切れないが。……かういふ作者が大成して、別に勞働をもちつつ、職業でなしに、創作をやつて、多くの憧憬者が、樂みに、それを製版し、印刷し、製本するといふやうな理想社會を、私は未來に想望するものである。

八

今野賢三氏のものを、私は一ばんよけい讀んでゐる。氏のものと、靑柳優氏のものとは、何よりも其の立體的表現ともいふべき點が好きなので、中にはだいぶ無理な組み立てがあるのに危なつかしさを感じつゝ、其の創造に惹き付けられて、いまゝでの誰れのものにもなかつた感興を味ふのであつた。この作者の長篇『曉』の第三部『光りに生きる』も、最近に讀んだが、短篇を讀むに比して、ひどく疲れた。どういふものか。それは知らない。平面的の描寫だと疲れないが、立體的の表現になると、それがあまりに長い時、其の道中に疲れるのかも知れない、なぞと、勝手なことを考へる。

『光りに生きる』では、いろ〳〵のものを私は見せられた。――もツとも私はこの三部作の第二部までを讀んでゐないが、――私はこの作者が革命を信ずることにおいて、他のプロレタリア作家に變りはないのを知るとともに、この作者はそれに向つて、進軍ラッパを吹いたり、軍歌のコーラスをやつたりするほどに、はしやいでもゐなければ、それを喜んで、未來の影に

對して踊り歩くといふほどでもなく、じツくり考へて、其のほかになほ何か道はないかと、ひそかに眼を光らす人のやうに思へた。要するに浮ついてはいないのだ。底光りをさせてゐるのだ。それだけに、見やう次第で、くはせもの、嫌疑を受けることがあるかも知れない。他の短篇なんぞではさういふ疑ひも起らなかつたが、この『光に生きる』の『鷗』では、さうした薄い雲がかゝりかける。それだけに懐疑の深みも増して來て、藝術品としての價値を加へるのかも知れない。とにかくこの作者に對しては、未定稿の批評しか書けないやうな氣もして來る。

この作者は、詩人としての要素をも具へてゐるやうだ。立體的表現の一句〱が、自然に詩を成してゐることもある。單なる技巧で舊文壇と太刀打ちの出來る人、疲れ切つた舊文壇をやツ付け得るのは、この人ばかりといふやうにも考へられた。何が書けてゐて何が描けてゐないとかいふやうなことは、この作者の上には殆んど問題にならぬ。スツカリ卒業して、格に入つたといふよりも格を出てゐるのだ。否別に格を立てゝゐるのだ。どうかすると、そこにやゝ輕薄さが見えないでもないが。——

これで、完全に與へられた紙數が盡きた。なほ書くべき人の數はある。藤森成吉氏を逸したことも殘念である。氏の超個人主義には、ずゐぶんまゐつたが、其の近業の作品に對して、思ふところを述べるつもりで、書簡をも貰つたのだが、批評を果たさなかつた。いづれ、またの機會を期する。

舊文壇の藝術からすれば、プロレタリアの作家なんぞ、或は『いづれを見ても山家育ち』であるかも知れない。しかし私はこの一群の焚く火に向つて、襟を正さないではいられない。よしやタバコの吸殻でも火は火である。觸るれば熱い。——私の待ち焦れるのは、この火が天をも焼かんばかりに、紅蓮の焔を立てゝ燃え盛る時である。小さな藝術が何んだ。（完）



當なし行脚

堺利彦

其一——宗吾と眞菰と醬油

（一）迂濶な話

照りもせず曇りもせぬ五月廿九日の朝、私は獨り飄然として京成電車の終點に降りた。體のぐわいがまだどうも充分でないので、こんな氣候の、こんな天氣の時、ほんとに氣樂な小旅行がして見たかつた。それには何處がいゝ。何處でもいゝ。いつそ當なしに出かけよう。と云つて、何か一つ最初の當だけは拵へなくちや足の向けようがない。ぢや一つ佐倉宗吾を尋ねて見よう。あとは氣の向き次第、緣のあり次第といふ事にした。日數は極めないが、厭になるまで、或は金の無くなるまで。

そこで私は先づ第一歩として、成田停留所の前に突立つている私自身を見いだした。二十年前に一度こゝに來た時とは凡で違つた光景が眼前に現出してゐる。何よりも先づ『不動行』の電車がある。然しそれは薄々聞及んで居ないでも無かつたが、その同じ電車に『宗吾行』のあるに驚いた。

迂濶千萬な話だが、私は只、『宗吾神社は成田驛の近くにある ことだけを知つていた。人力車はあるだらうが、あんな物に乘る

のも厭だからブラ〳〵歩かうと考へていた。いづれ寂しい小いさな社だらうが、それでも幾らかの參詣人はあるだらう。一軒くらい茶店もあるだらうから、そこで落ちあつた篤志の參詣人とシミ〴〵した話でもして見たい。私はそんな事を考へていた。

所がどうだらう、電車が十五錢の賃錢で、女、子供、老人、青年、兵隊さんなど、二三十人の參詣者を一まとめにして、廿分置かそこらに續々と運んでいる。右は不動行、左は宗吾行、宗吾さんは不動さんと一對の、或は不動さんに次いでの、遊覽場になつている。私はあきれたまゝで宗吾停留所に着いた。そこまでの途中は心持のいゝ畑や林の景色だつたけれど。

（二）近づきがたい臭氣

停留所に降りて見ると、そこのホームがそのまゝゴチヤ〳〵した茶店や賣店の數々に接續して、先づ宗吾さんの繁昌を思はせる。所謂ゆる俗惡の氣がムツトそのあたりに立てこめている。

いよ〳〵變な氣持で停留所を出た。道の兩側は例のお中食、名物、おみやげ物、紀念畫葉書、甚兵衞蕎麥、おすし親子何んでも出來ますといふ有樣。五六間あるいて右に曲る。兩側の光景は前同斷で、一町ばかり向ふの正面に素晴らしく大きな、玉子色の角柱が二本突立つている。そしてそのズット奥の方に、まだ新らしい大殿堂（後で聞けば、大正十年竣工、總欅、銅葺、二重たるき四方棟、十間四面、工費七十萬圓の大殿堂）が聳え立つている。

門内にはいると、一金千圓、一金五百圓、一金三百圓、更に降つては百圓、五十圓、三十圓といふ、大小無數の廣告石塔があちこちに林立しているのが先づ目につく。木蔭の景色の好い處もあり、本堂以外に何やら寺らしいものなどもあるが、總て近づいて見る氣になれない。『宗吾親子の墓』にさへ失敬した。石の玉垣その外、一面にゑりつけた廣告文字、『神田伯山』『和洋家具商西孝太郎』を初として『待合小づち』『どぜうや飯田』など、迚も近づきがたい臭氣を發散している。

本堂の廻廊にあがつて行くと、正面は格子戸か何かになつて、中は見えない。そしてその前に巨大な賽錢箱が横たへてある。謹んで一錢銅貨を投げ入れて一拜した。丸で賽錢箱をおがむやうだ。然しそれだけではさすがに少し物足りないので、廻廊を少しうろ〳〵して見ると賽錢箱の兩側の處の扉があいていて、そこから本堂の内部がおがめる事になつている。何だか知らんが朱塗の物や金ぴかの物がゴテ〳〵あつてどうも佛壇らしい氣がする。ヘテナ、宗吾さんは一體、神樣なのか、佛樣なのか。參詣者達は柏手を打つのもあり、兩手をすりあわせるのもある。

人々がお札を賣つているので、私も『宗吾靈像』と稱する畫姿を一枚二錢で買つた。

後に門前の案内者に聞けば、元は『宗吾神社』と呼ばれて居たのだけれども、近年、寺の支配になつて、『宗吾靈堂』といふものになつたのだそうな。何しろ神社では繁昌しない。現に當地の不動樣はあの通りの繁昌である。然るに當國第一の名所たる香取神社は如何。その神威の尊嚴に於いては正に伊勢大神宮にも比すべき大神社であるのに、その御繁昌が不動樣の十分一にも當らないといふ有樣である。案内者は斯樣に説明した。これ即ち宗吾神社が宗吾靈堂に變化した所以である。そしてその宗吾靈堂が不動樣と一對の、或はそれに次ぐ所の、或はそれのついでに參詣する所の、一種の名所となりつゝある所以である。

（三）農民運動の先驅

門前に戻つて來ると、二人の案内者が口々に叫んでいる。一人は云ふ。印旛沼、甚兵衞の渡しを一目に見渡す速天閣はこゝから三丁。今一人は云ふ。宗吾さまの舊宅に御參詣になる方には、こゝから自動車が出ます。往復五十錢。

私は先づその速天閣に行つて見た。成るほど、林の中を少し切り開いて、高い塔のような物が拵へてある。不愉快な安普請ではあるが、頂上の眺は如何にも好い。うねうねした印旛沼が目の下に横たわつて、青葉の丘陵がそのまわりに出たり引込んだりしている。あそこの、右の方からズウト突きでた處の、あの松の二三本茂つてる處が、あれが甚兵衞の渡しだと、番人のお婆さんが教へてくれた。それからモット右手の、あそこの谷あいが宗吾さまの舊宅。こちらに見える、あの小高い丘の上が、光然和尚の袈裟掛の松。私はこのお婆さんと何か色々話して見たかつたのだが、どうもその話振に案内者口調が交るので、ツイ話が續けられなくなつた。

そこに兵隊さんが一むれやつて來る。その跡には又、女教員でもあらうかと見える若い女の二人連が來る。お婆さんは相變らず、甚兵衞の渡しや袈裟掛の松を繰返している。その間、私は床の上に尻をおろして、先つき買つて來た小冊子『偉人宗吾』を通讀した。こゝでこうして此の本を讀みながら此の景色に對していると、さすがに少しセンチメンタルな氣持になる、袈裟掛の松も、甚兵衞の渡しの松も、何とも云はれぬほど風情のある枝振に見える。

二十年前、私が一度成田に來たと前に書いたが、それは森近運平君と二人連で、この近在の高田といふ村に演説をしに來た時の事だつた。私は塔の上でその時の事を思ひだした。その

時、私等を招いてくれた村の有志達は、皆な頻りに宗吾の事を誇りとしていた。彼等が新らしい思想に接し、新らしい運動に加はる時、彼等はどうしても思ひを宗吾に寄せずには居られないのであつた。數年前、この地方にも農民運動が起り、農民組合が出來た。その運動者の中には、昔し私等を招いてくれた人達もあると聞いた。最近には勿論、無產黨も組織されて居るだらう。『宗吾靈堂』は如何に俗化しても、この印旛沼の寂びた景色には、いつまでも必ず人の心を動かすに足るものがあるだらう。

衆議院議長星亨撰、貴族院議長蜂須賀茂韶篆額、貴族院議員巖谷修書、『木内宗吾外五氏之碑銘』といふものを讀んで見ると、宗吾を評して『民權家の泰斗』と爲し、『而も千葉縣の如き、特に自由の志氣に富む者多し、抑も宗吾等の遺風餘烈、人心を啓發感孚するの致す所に非ずや』と云つている。この碑銘には明治廿六年の日付があるが若し星君が今日まで生きて居たら『宗吾等の遺風餘烈』が飛んでもない方向に『人心を啓發感孚』してるのに驚くだらう。昔の『義民』が『民權家の泰斗』になり、更にそれが『農民運動の先驅』になつた。

（四）幻滅の伴はない美しさ

午後になつて『宗吾さまの舊宅』を尋ねた。木下間の坂を一つ降りた低い處の、別だん何の變つた處もない、可なり大きな、萓葺の古い百姓家がそれであつた。何となく昔の名主といふ匂ひがしますねと、私の連の人は云つた。椽側には絆天着の職人姿が十人あまり並んで腰かけ、餡パンをかじつたり、正宗の瓶を傾けたりしてゐた。右手の土間にはいると、その直ぐ左手が十疊ばかりの座敷で、そこには四五人の參詣者が上りこんでゐた。壁ぎわに佛壇の樣なものがあつて、その前に小机を置き、そこにお賽錢か何か供へる樣になつて居た。主人らしい人が出て何かいろ〳〵客に話していた。どうしたわけだか、私はそこに上りたくなくなつた。ザット大體の樣子を見たばかりで直ぐ外に出た。連の人も一緒に出た。こんな處でこそシンミリ話を聞いたら好さそうなものだが、何だかそこに、そうした氣持になれない空氣がたゞよつてゐた。こゝは見世物でない。見せ物ではないが、然し見せる積りで見せている。そこに却つて又厭味が感ぜられるのだつたらう。

私の連はぜひ甚兵衛の渡しが見たいと云つた。自働車の運轉手は一人卅錢の割增を要求して或る丘の上の茶店に私等を案内した。マア何と好い景色だらう。私の連は叫んだ。そこは矢張り印旛沼を見晴らした處で、實際私も目のさめる樣な氣がした。甚兵衛の渡しの松は直ぐ右手の間近に見えて、連天閣の上

からとは又よほど違つた面白い景色だつた。あの美しい渡しを渡つて見たい。私の好奇心はムラ〳〵と動いた。然し又考へた。これは景色として見るだけが好いのかも知れない。せめて此の松だけには、幻滅の不快の伴はない、純粋の美しさを殘してやりたい。斯くて私は連の人の促がすまゝ、再び自働車に乘つて宗吾停留場の方に戻つて來た。

成田に來ながら不動樣に御無沙汰するのも何となく義理がわるい。私は歸り道のついでとして不動樣に參詣した。然し不動樣の御繁昌は又格別だ。俗でも惡でも、斯うなると矢張り一種の雄大を感ぜざるを得ぬ。宗吾樣もどうせ繁昌させられるものなら、いつそこゝまで行かせて見たい。私はそんな事を考へながら、とうとう不動樣の信者みたいな顔をして、そこらの安宿に一宿した。

(五) 香取もうで

三十日朝。扨今日は何處へ行く。昨日案内者が不動尊と香取神社を比較した。あれが私の頭に殘つた。それほどの名所なら、一つお尋ね申して見よう。

成田驛から佐原行の汽車に乘る。佐原は利根川の西南岸にある。佐原に着いて驛前に出ると、香取に行くならこれに乘れと乘合自働車が云ふ。脈も應もなし。早速乘る。乘合せは洋服の小紳士が一人と五十前後の老婦人が二人。町を出はづれると坦々たる直線道路、兩側に櫻か何かの並木がある。『マア何といふ結構な參詣道でせう』『自働車には持つてこいですわね』などと婦人達が感嘆する。『全くですね』と私も調子を合せたが、洋服紳士は一言も發しない。彼は孤立した。我々は彼を無視して談話を續けた。

甲婦人はデップリふとつた、まだ中々あぶらぎつた、ガラガラと投げつける樣に物を云ふ人で、中々話が面白い。『えゝえゝもうそんな時にや直ぐにこうして飛出してやるんです。それが一番さ。こうしてる間は、內の事なんぞスッカリ忘れッちまうんですからね。』そんな時とは、どんな時の事か、それはツイ聞きもらした。『だつてそうぢやありませんか。唯がクソ面白くもない。いつまでクヨ〳〵なんぞするもんですか。えゝ〳〵私やこうなの。』氣の强いところも見えるし、サツパリしたところも見える。乙婦人は小い丸髷をキチンと結つた、少しおでこの、溫順らしい人。『そりやアもう、ほんとにそれが好ござんすよ私たんぞ……ですけれどね』と、じわり〳〵。彼女は甲婦人に對して少々姉さんぶりの態度でもあり、稍や御相手を務める形でもある。道は緩かな登り坂になつて兩側には青葉の藪があつ

た。『好いぢやありませんか、この道！』甲婦人が又頻りに感嘆した。乙婦人と私は只だ熱心に贊成した。紳士はいよ〳〵孤立した。

やがて香取神社に着いた。運轉手は我々の往復切符を半分切り取つた。『へエ！小い方を呉れるんだね』と、甲婦人が少しとぼけた樣な顏付で、損んでも行きそうな事を云つた。『小いのは無くしそうで困るわね』と、おでこ婦人がまじめに合槌を打つたのも好かつた。紳士はそんなことに頓着なくズン〳〵獨で先に立つた。

神社は謂ゆる『神々しい』の一語で盡きる。只だ物靜かな杉の木立、古色を帶びたヒワダ葺の社、折々何か聞きなれぬ鳥の聲、霧でもない露でもない只しつとりした朝の空氣。私は神前に一拜してから、神木の大杉の下に立つて『香取まゐり』の案内記を擴げて見た。『鷄がなく吾妻の國の、……矛杉の梢ふく風、音聞けば峯叫びましし、古への稜威おもほゆ』『氷木高知りて嚴めしき、こは經津主の大宮居、瑞垣こめて風薫る』などといふ歌の古調が、今さら不思議に有りがたく思はれた。フト氣がついて見ると、紳士も二婦人も社務所に行つてお札か何か買つている。今度は私が孤立した。

紳士は時計を出して見て、又獨りスタ〳〵と先に立つた。もう外に大して見る處も無さそうですね、そうですねと、二婦人もその跡についた。私は案内記にある『櫻の馬場』や『香雲閣』が少し氣になつたけれど、成るほどそれも大した事はあるまいと、默つて又その跡についた。

歸りの自働車の中も甲婦人の話が矢張り面白かつた。『でも今日中には歸らないと、お目玉を食つて追ん出されたら大變だ！』乙婦人は只だ微笑していた。『運轉手さんの處に逃げたつて、こんな遠方ぢや仕樣がありやしない！』甲婦人は奇怪な言葉を放つて皮肉な笑ひを洩した。運轉手さんには通じなかつたらしい。私の喉からは思はず大きな笑ひ聲が發した。

（六）利根川の水上

自働車は佐原驛に戻つた。紳士は汽車に乘るべくそこに降り、殘る三人はモーターボートの發船所に送られた。何となれば、西の方から來て既に香取を見物した者が、更に川を東に渡つて鹿島を見物するのは自然であり當然である。香取・鹿島は利根の兩岸に於ける一體分身の二大神社である。私の行先は私の意志から獨立して必然的に展開される。

モーターボートの中で出發を待つ間の話が又面白かつた。『ゆうべの宿はほんとに困つちまいました。隣の部屋でボソ〳〵、

クチヤ〳〵、夜つぴて何か喋べり續けてゐぢやありませんか。何も焼くわけぢやないけれど、オホホ、寢られも何もしやしません。』甲婦人の色めいた話ぐせが又始まつた。『でも私はとうとう寢ましたよ。』乙婦人は取なし顏だつた。『それに蚤が居てね。』『えゝ蚤にや困りました。わたし三疋取つた。』『私やどうしてもそれが取れないで。只つた一疋のようだつたけど、あつちでムズムズ、こつちでチク〳〵、じれつたいちや無かつた。』甲婦人は少し誇張氣味で、獨り面白がつていた。『矢張り焼けたんですね』と若し云つたら、彼女は何と答へただろう。

やがて七八人乘合せたモーターボートが大利根川の眞菰の間に浮んでいた。空の青、水の青、眞菰の青、濃淡の青色が相連なつて、悠々漫々、只のびやかな水上の眺めであつた。

漣すらもない、靜かな平らな水の上を、只ボートがギチゴト・ギチゴトと音を立てて進んで行く。進んでも進んでも景色は變らない。何處までも只だ水と眞菰と空とである。悠々、漫漫、茫々、漠々。『マアほんとに好ござんすわねえ。』『わたし氣がセイ〳〵しますわ。』二老婦人が小娘のような感嘆を發した。『わたしモウこの氣持だけで澤山！』甲婦人には多少の新味がある。『お陰で命が延びますよ。』乙婦人はさすがに年寄らしい。私は心の中でそれぞれ兩婦人に贊成した。

水の青と眞菰の青との外、向ふに今一つ、横に長く連なつた土手の青が見える。近處の人らしい乘合の客に聞くと、それが有名な十六島の堤防であつた。十六島といふのは、佐原と對岸の潮來出島との間にある大きな島で、中に十六の農村部落がある。そして近年、その島の周圍全部に堤防を築き、その堤防の處々に水門を設けて船の通路に便しているのだと云ふ。

青い土手の上には、中にある農家の屋根がところ〳〵見えている。一二軒、二三軒、づゝ、藁葺か萱葺の屋根だけがあちこちに見えて、そこには必ず脊の高い樹木が二三本、四五本、六七本も群がり立つている。その景色が如何にも好い。それを眺めていると、土手の內部がそぞろに床しく感じられる。『あの十六島の中を見物するわけに行かないものでせうか。』私は隣席の客に尋ねて見た。『ナニ、今に此の舟があの中を通つて行きますよ。』私は嬉しいなと思つた。

（七）十六島の經濟

暫くして、ボートは眞菰の間を押しわける樣にして、本流から狹い水路に入り、やがて提防の水門を通過した。十六島の景色が我々の眼前に開けた。十六島の道路は即ち水路である。水路に沿うて家がある。家には必ず小舟がある。見わたすかぎ

り、森と家との外は一面の水田だ。水田の區劃も狹い溝で出來ている。その溝には河骨らしい黄色の花が咲いていた。こゝは今丁度田植時で、小舟に牛が乘つて、苗と一緒に運ばれているなど、面白い景色だつた。

『十六島の戸數はどのくらいありますね。』私は誰に問ふともなく問ふて見た。『さうですね、シツカリとは分りませんが』と、土地の人らしいのが引取つて答へてくれた。『一部落百戸以上の處もあり、三十戸くらいしかない處もあるのだから、平均六七十戸と見て十六部落で千戸以上はあるわけですな。先づ人口五六千といふ所でせう。』ずいぶん大きなものだ。それが川の中の島だから驚く。

暫くすると又廣い水面に出た。相變らず眞菰が茂つている。もうこれで十六島を離れたのかと聞いて見ると、ナアニまだ〳〵。こゝは上島と下島の間で、島の中の湖水のような處らしい。水鳥が頻りに魚をあさつている。その名を聞けばモダチョといふ。

十六島には飲用水といふものがない。井戸は幾ら掘つて見ても駄目。人は皆な川水を飲んでいる。こゝには幾許も樹木が無いから、燃料は藁より外にない。藁を堅くたばねて、短く切つて、それを上手に燃すのだそうな。然し米はよく出來る。一反平均六俵以上取れる。『それで年貢は幾らです』と誰かが聞いた『先づ七斗。六斗の處もある。昔は九斗だつたんだが。』『ぢや小作はらくですね。』『えゝ〳〵、らくですとも。地主よりかよつぽどいゝ。』

この人、自分が地主と見えた。もちろん小地主だろう。『こゝでは平均して一戸に百俵は取れるんだから、そりやらくなもんです。だから小作は皆んな飲みまさア。』

『ずいぶん大地主もありますか。』私はソット質問した。『ナーニ、大したものはありませんがね。大きいたつて六百俵、それから三百俵、マアそんなものです。』『一番の大地主はどんな人です。』『それは代々の接骨醫でしてね。「十三枚」と云つちや名高いものです。當主は千葉醫專の卒業だが、ずいぶんやりますよ。患者がいつでも六七十人くらいあるんだから、その方のあがりも隨分ありますア。尤も、安いんですがね。一日の入院料が食費も何もこめて一圓三十錢だからね。』

ボートが又狹い水路の入口に着いた。そこで降りる人もあり。乘る人もあつた。ボートはそれから學校だの寺だののある部落の間を過ぎて行くのだが、狹い水路の兩側は小高い堤になつて居り、その堤に繁つた樹木は水路の上に蔽ひかぶさつて居り、そしてその蘆蔭の水路の上にはところ〳〵小いさな橋が掛

つている。その橋が十二もあつて、一枚板に片ですりといふ『俳畫の樣な』形をしてるので、それが『十二橋』といふ名前になつている。

その一つの橋の袂に、ちよつと人の目を引く奇麗な佳居があつた。キチンと摘みこんだ生垣の中に、石燈籠だの手水鉢だのが恰好よく庭に配置されて、赤いツヽジや紫の草花などが派手やかに見えてゐた。家は瓦葺で、椽側が艶々しく、障子が白かつた。「これは然るべき地主さんのお邸だな」と私が獨語のように云ふと、『ナーニ、地主といふ程ぢやない。見えを飾るんでさ。尤も、幾らか土地を持つてるにや持つてるんだが……』例の小地主君が變にけなしつけた。『安月給で洋服ばかり立派なのもありますからね』と誰かが合槌を打つた。すると今度は例の甲婦人が割りこんで來た。『全くですよ。錦紗の羽織なんか着こんでシャナリ〳〵歩いてるから、何處のお孃樣かと思ふや、何のあなた、裏長家の破れ障子の中にはいつて行くぢやありませんか。そんなのが東京にやずいぶん多いんですからね。馬鹿馬鹿しい。』

小地主君は『私が役場に居た時』と云ふ程だから、いづれ土地に知られた人物だらう。セルの着物、セルの羽織が、帽子と顏と共に隨分よく煤けては居るが、そして羽織の紐の環が取れて、そこをコヨリで縛つたりして居るほど無頓着な態度ではあるが、それにも係はらず彼は猶ほ且つ帶の間から大形の(少し色はわるいが)金時計を引きずりだしたりしていた。そこにも此村の裕福さがほの見えた。この村の米の總産額が十萬俵と稱されてゐるが、實際は八萬俵くらいとして、それの二割だけが自家用に消費され、あと八割といふものは輸出される。だから、米の質は粗惡だけれども、村は大體裕福だといふ話。

猶ほ金時計氏の話を聞くに、今では此村に於いて貧富が餘ほど平均している。といふ意味は彼に取つては、困つた現象としての嘆息話なのである。大正六年頃には、地主の懐都合がずいぶん好かつた。然るにその後、不作が續いたりして、年貢米のキメなんぞ滅茶苦茶になつてしまひ、地主は丸で小作人から宛てがい扶持を受けるといふ有樣になつて來た。そうなつた所に、こゝ二三年豊作が續いたものだから、小作の懐都合は今のところ、地主よりかよつぽど好くなつている。

所が又形勢が變りかけている。今この村で、日傭の賃金は向ふ飯で二圓といふ高さに昇つている。然るに東京あたりの人夫の賃金は自分飯で一圓五十錢かそこらである。そこで出稼人がぞろ〳〵村に戻つて來る。小作の競爭が始りかけた。小作料のせりあげが生じつゝある。これで今年が豐作なら、(大てい豐

作の見込だが）、地主は大いに助かる。恐らく年貢が一斗くらい上るだらう。これが金時計氏の現在に於ける樂天觀である。

『ぢやあ此邊には、まだ小作爭議なんといふものはありませんね。』『えゝありませんとも。組合もありません。然し人氣は惡いですな。』『と云ふと？』『イヤそれは斯うです。小作は私等の處に五等米より外、決して持つて來ない。つまり年貢米には、一番惡い米しか持つて來ない。そこを見ると、腹の中の人氣は矢つ張り惡いのですな。だから地主の米の百俵は、小作の米の八十俵の値打しかないのですぜ、たまりやしない。』

金時計氏が最後の挨拶を發した時、ボートは提防の水門を外に出た。その向ふ岸は即ち有名な潮來の出島だつた。

（八）潮來から鹿嶋まで

眞菰は茂つているがあやめは見えない。こゝはあやめの渡しとさへ呼ばれているのに、そして今は丁度その季節であるのに、若しあの靑々とした茂りの間に、紫の花がちらほらと咲いていたら、それこそどんなにかしほらしいだらう。折々誰かの口からあやめの名が唱へ出されるが、それに和して滿足を與へる樣な土地の人の言葉は聞かれない。『昔はほんとに、この眞菰の中にあやめが咲いたものでせうかね』と、例の甲婦人が遂にハツキリと質問した。『えゝナニ、今でも無い事はありませんよ。えゝ、折々あの中にツイ〳〵とね。』それなら永い水路に何處かで一つくらい見當りそうなものだがと、誰の心も矢張りちよいと不滿な感じだ。

あやめばかりでなく、潮來の岸になぜもつと何か特殊な『水郷』の趣きが見られないかと、もどかしい樣な氣持がする。『姉さどこゆくサツパ舟こいで、潮來二丁目さべに買ひに。』せめて案内記で心を慰める。

それからボートは北利根を渡つて對岸の大船津に着く。鹿島樣の大鳥居が川岸に立つている。上陸すると乘合自動車が厭應なく我々を乘せる。私が便所に行つて來てそれに乘らうとする時、二婦人はもう先きに乘つていて、『負けておきなさいよ、お婆さんとお爺さんだ』と、甲婦人が元氣よく運轉手と談判していた。成るほど私はお爺さんであつた。三人のあとに又一人の洋服紳士、今度は官吏でもあらうかと見えるのが乘りこんだ。

又道のいゝことを讚めてゐる中に鹿島神社に着いた。『神々しい』ことは香取の方が一段上だと思つた。こちらは少し明るい感じだ。昔、高天原で、出雲の大國主を征伐する大將を派遣するといふ評定の時、先づフツヌシの命がそれに推薦された。それが後の香取樣であるが、その時、タケミカツチの命が、『我フ

ウヌシノミコトのみマスラヲにして我はマスラヲならざらんや』と憤慨して自殺したので、遂に二人の命が降された。そのタケミカツチが即ち後の鹿島様であると云ふ。『一體分身』の香取鹿島は、ちよつと十郎五郎の形だ。

（九）鹿嶋山の林の中

どこか小川芋錢君に似た所のある、素撲な小男の案内者に勸められて、四人が睦まじく境内の三笠山（或は鹿島山）を見物した。大木の群がり立つた、果てしの知れぬ林の中は誠に好い氣持だつた。

鎌足公手植の藤、鋒杉の御神木、石器時代の遺物たる鏡石、掘つても掘つても底が知れぬといふ要石などには、『成るほどねえ』『フウーウン』と、二老婦人がのべつに感嘆した。要石の傍らに『苔むした』芭蕉の句碑がある。『枯枝に鴉のとまりけり秋の暮。』案内者はそれを『ウのとまりけり』と訂正して朗吟した。そこから少し離れたあたりで、二叉の立派な赤土の道路が林の中に遠く通じているのを見た。一つは何處とか方面から、一つは水戸方面からの道路で、いづれは高柳淳之助氏の何とか鐵道がこゝに引かれる筈だと云ふ。隱れもない高柳氏の高名が案内者の口に登るのに少しも不思議はない。

この林の中の少し凹んだ部分、『長松老柏競ひ茂』つた處に、『御手洗の池』がある。『清冽掬すべし。』茶店のお婆さんが小びしやくとコップを持つて來て、湧口の清水を汲んで我々に飲ませてくれた。我々は自然その茶店に腰かけた。皆が代り代り池の流れ水で目を洗つた。『サイダのあきびんがありませんか』と乙婦人が云ひだした。何にするのかと思ふと、彼女はこの清水を東京へのミヤゲにするのだつた。

歸りの道々、案内者がこの茶店の歴史を話して聞せた。御維新の際、神佛混交が廢止されて、この社に屬する神宮寺が亡びた時、その地所を誰れにでも呉れてやらうといふ事になつたが、誰も寺の跡なんぞと云つて、貰ひてが無かつた。その時、あの婆さんの亭主がそれを貰つて、田にしたのが、即ちあの一區畫の土地である。（成るほど、今も茶店のうしろに少し田地のあるのが見えていた。）それから夫婦が池の前に茶屋を出して、毎日ヤツト一升の飯を炊いて、半分は自分達が食べ、半分は團子に拵へて鯉の餌にしていた。所が、茶店は段々繁昌して、あの通り奇麗にもなるし、仕入もすつかり揃ふ樣になつた。そして又一方には、二人の娘が成人して、二人とも學校の先生になり、姉の方は同じく學校の先生を婿養子にして、今ではあの一家から三人の先生が學校に通つて、それぞれ月給を取つている。そして

一家の暮しはと云へば、茶屋のあのあがりだけで結構たりると云ふ勢ひだから、何んでも此頃では、一家から毎月百圓づつ郵便局に持つて行くといふ話だ。あの茶店の裏の、田のそばの丘の上に、小ザツパリした新築の家が見えているが、あれが即ちこの仕合せな人々の住居なのだそうな。『成るほどねえ、こんな山の中にそんなウマイ話があるんだからねえ。』と、甲婦人が例の如く感嘆した。

それから私等は、今一つ鹿島の山の面白い生活問題を聞いた。この神社の大宮司職は代々鹿島氏が相續して、先代××氏に及んだが、惜しいことに昨年亡くなつた。まだ息子さんが學校に居て、卒業までに三年ほど掛るので、ぜひそれまで生きて居て貰はねばならぬのであつたが、とう〳〵それが待ち切れないで仆れてしまつた。それで今では餘所から大宮司さんが來て居られるが、こうなつた以上、近い中に息子さんが學校を卒業しても、直ぐに親の跡に直るといふわけには行かない。もつと地位の低い、外の神社を務めて、段々に昇進して來なくてはならない。

『へエー、ちや先代のお亡くなりなすつた時、息子さんが學校を卒業して居なすつたら、そのまゝ御相續が出來たんですか。ちや惜しいわねえ。』甲婦人が大いに同情して殘念がつた。

尤も、その時、先代の弟さんで、天子樣のお側にゐる人があつたので、キツト其人が何とでも都合をつけて、暫らくでもここに來てスケて下さるものと、誰でも皆さう思つていた。所が、そうは行かない。こゝの大宮司は格式こそ高いが月給は安い。先代は年俸二千圓だつた。然るに弟さんは月に四百圓からの收入がある。こゝに來たのぢや暮しが立たない。それで結局今の大宮司さんが二千七百圓で來て居なさる。

『成るほどね、月四百圓の人が年二千圓ぢや引合はないわねえ。』甲婦人はこれにも又切實に同情した。神に近い人々の家にも生活の惱みがある。

（一〇）ほこりくさい晝過の町

私等は再びボートに乘つた。二婦人は東京への歸りを急いでいる。『あなたはまだ〳〵お遊びですか。』『えゝ、ア厭になるまで。』『そりや好いわねえ。』『ぢや、御緣があつたら又何處かで。』私は彼等と別れて潮來に降りた。二老婦人よりは潮來の方に未練があつた。

潮來の今日の名聲が昔の繁昌の片見に過ぎない事は心得ている。心といふ字に咲いている筈の花あやめが、今はもう何處にも見られない事も分つている。それでも潮町の廓には今も『あ

やめ踊』といふのがあつて、『潮來出島のさんさらまこも、アリヤサ、誰が刈るやら薄くなる、ションガイナ』と揃ひの振袖をひるがへすと聞くが、それを直接見ようといふほどの私でもないけれども、それにしても、矢張りまだ何となく、何處かに幾らかの情趣が漏れて、自然に旅客の心を引くだろうといふ氣がしたのであつた。

船から陸にあがると、直ぐ眞前に三階建の旅館が只つた一軒ある。ずいぶん大きくもあり、可なり奇麗でもあるが、それで居て何となく寂しい。二階にあがつて向ふを見晴らすと、例の眞菰と堤防と十六島の家と森とが、只だ青々と如何にも單調におとなしく並んでいて、この旅に出てから初めて少し物悲しい樣な感じがした。直ぐ目の下の川面に、大きな和船が小舟を尻につけて行くのを見て、私はフト、親馬の尻について行く小馬の姿を思ひ浮べた。それから鯉こくと、鯉の刺身と、玉子燒と小鰕の煮しめとで、少々なまくさい一圓のお費を濟ませ、案內記をたよりにして潮來の町をそぞろ歩いた。

稻荷山に登つて見たが『水鄕の縮圖』は只だ一面の青嵐に過ぎず、『甍を並べて』いる筈の遊廓が何處だか分らず、況んや『女郎の寶寢顏』など覗かれもしない。『姑蘇城外の寒山寺』に喩へられた『長勝寺の山門』では、刈桑の目方を計つている夫婦のお百姓を見たばかり。ヤツトの事で『蜃氣樓のやう』な筈の『潮來遊廓』を探しだしたが、『水驛の春』の『竹枝情調』など何處にも見つからず、只ほこりくさい晝過の町が物憂げに横たわり謂ゆる『妓樓娼閣』の三四軒が干からびた樣に立つているのを見た。

然しそれでも老いたる遊子の好奇心は兎にかく幾らか滿足されて、私は再び水上の人となつた。今度の船は霞が浦から來た小蒸汽でそれが横利根を經て佐原に着いた時、銚子行の別の小蒸汽がそこに出發の準備を整へていた。私は船から船に移された。ハツキリ決心のつかない中に、私はいつかもう銚子行の旅客になつていた。

（一一）農村兼漁村の問題

船は又眞菰の間の靜かな水面を降つて行く。昔このあたりは香取の海と呼ばれて、外洋からはいつて來る船々の碇泊處であつたらしい。『大船の、香取の海に、碇下し、何有人か、物不念有らん』といふ柿本人麿の、素朴な、豪宕な、そしてセンチメンタルな歌を案內記に發見する。フツヌシの一族とタケミカツチの一族がこの入海から上陸して、香取と鹿島の兩岸に占居した、その大昔の情勢もしのばれる。私もいささか人麿氣取にな

つて、次第々々に雄大を加へてゆく川幅の夕景色を、感傷的な心持で船の窓から眺めやつた。

乘合の客は十人にも足りない。これでは船も立行くまいと心配する客人もあつた。それの理由を、一般の不景氣に歸せしめる說と、汽車、自轉車、モーターボート、殊には最近に於ける乘合自動車の發達に歸せしめる說と、二說が提出されていた。

一隅には、偶然おちあつたらしい三人の知合が細々（こまぐ）と語りあつていた。『十三枚に賴んでおく人がありますで、それを見舞に行つて來たのですが』といふのが話の始まりらしかつた。この人の常陸辯がどうも私の耳には聞き取りにくかつたが、『十三枚』が十六島の有名な接骨醫である事は今朝既に學んで居たので、話の內容は大體理解された。『あゝあの××の……、あゝそうですか。どんな樣子です。』そう云つたのは洋服を着た品のいゝ人で、如何にも同情ぶかそうに眉をひそめ、あらゆるマジメさを顏面に現はしていた。牧師かなと私は思つた。『イヤそれが先生……』と一方が云ふので、どうも學校の校長さんらしく思はれた。

負傷者は腰から下が全く無感覺になつている。校長さんの眉は極度にひそめられた。『十三枚の先生のお話では』直るには直るだろうが、どうしても八個月くらいかゝる。『所が先生』附添の食費から諸雜費まで入れると、どうしても月に百圓あまりはかゝる。『それは旦那の方で何とかして貰はん事にや』と、校長さんは首を傾けた。『それがこうなんで御座んすよ。』こゝの說明がよく聞き取れなかつたが、『旦那が二百圓出したと云へば大へん聞えはようがすが』實は網の何やらの方から百圓、船の何やらの方から百圓出させたので、『つまり旦那は一文も出さない』わけだと云ふ。

それから負傷の原因の話になつたが、何か漁船漁業に關した事だといふより外、私には分らなかつた。そして『旦那』の無情と冷酷が力說された。この話し手は村の區長か議員、兎にかく口きゝであるらしかつたが、話が熱を帶びて來れば來るほど、いよ〳〵私には聞き取れなかつた。『旦那』と呼ばれるのは、何處かこの近邊の、海岸の農村兼漁村に於ける、地主、船主、網主であるらしい。『三十四戶』云々といふ言葉が幾度も聞えたが、多分それは、この地主に屬する小作の家數だろう。田地は海岸の砂地の事とて、一反平均三俵あまりしか取れないが、年貢はそれで六斗四升。『フーン、安かァないな』と、今一人の話相手が云つた。それから小作の百姓達が此の地主の持山の草を刈つて、小つぴどく叱られた話。又その山の萱を皆な地主の手に刈取つて置くが、それを小作達が買ひに行かないと大へん御機嫌がわるいとい

ふ話。學校の事などで此の區長さんあたりが十圓出す時、あの人に廿圓出さすのは中中の骨折だといふ話。この間も區費を五圓だけ、それも餘ほど遠慮して割りつけたが、何んのかんのと云つて、どうしても素直には出さうとしないといふ話などがあつた。

『まだおかしいのは、或る時女づれが四五人であそこの山に松露取に行つて、山番に見つかつた。足の達者な女共は皆な逃げたが、醫者の奥さんだけが逃げおくれてつかまつた。山番が五圓出せと云つたが、松露取りの事だからお金は持つて居ない。では仕方がない。持つてるだけ出せと云つて、五十錢取りあげた。そんな物は山番のホマチだらうと誰でも思ふのだが、實はそれも旦那が七步山番が三步の割で分ける事に極まつている。』

『あの男に比べると、先代はまだ善かつたですよ。先代も因業ではあつたが、それでも分る所は分つたですからな。』『全く今の人と來ちや、どうにも物が分りませんね。』『それにあの女房が、あれが惡いんですよ。出すものは本當に舌でもキライだから。自分が教員をしたくせに、小作の若い者を教育する事を厭がる。つまり使ひにくくなるといふ、淺はかな考へからだね。』『何と云つても、もう時代が變つてゐるのにねえ。』『さうでがすとも。今の二十代の青年の中にや、地主の旦那さんよりも頭のシッカリしたのが居ますからねえ。今にニエ湯を飲まされまさア。私の本家の爺さんはあの通りの疳癪持なものだから、時時出かけて行つてガンガンやつて來ますがね。』『フム、あゝいふのはウントやるがいゝですよ。爲になりますからね。ヤ、着いた樣だ。』

(一一) 砂山、金持、大和魂

三人が降りて、新らしい客が丁度又三人乘つて來た。水面は漸く暗くなつて來た。そこゝにランプが燈された。十二三のボーイが向ふの荷物の上に腰かけて何か本を讀んでいた。私が便所に行つた歸り道にそれをのぞいて見ると、『少女小説、花の咲く頃』と云ふのだつた。『何んだ、女の子の讀む物ちやないか』と私がいふと、ボーイはニヤ〳〵笑つてゐた。やがて其ボーイが茶を持つて來た。茶は御馳走だつたが、あとで饅頭を貰はされた。

先程から話は三人組に獨占された形だつたが、今度は今一人の男が私を相手にして、新參の連中を尻目にかけ、古參らしくしやべりだした。彼は十餘年前、三十人からの團體で上方見物に行つた話をして、奈良の三笠山の前の宿屋にとまつて、女中に五圓フンパツしてやつたら、關東者の氣前に感心して馬鹿にチヤホヤするので、とう〳〵又五圓フンパツしたなどと大得意だつた。

『ほんとに上方者はケチですからね。』その時、ズット前から默つて煙草ばかり吸つてゐた、三十がらみのおかみさんが話の仲間にはいつて來た。今度は新らしい三人組が話を獨占した。

私は船の窓から常陸側の岸を見てゐる中、黒い森の上に薄白い山の樣な物の横たわつているのを不思議に思つた。フンパツ家はそれを說明してくれた。それは即ち太田の砂山で、向ふの海岸まで一里八町。漠々たる沙の丘だといふ。『ちや、あれが近い中、飛行場になると云ふのですね。人間が空を飛ぶなんて、だん／＼エライ事になりますわね。』と、おかみさんが意外な方面に話題を轉じた。

それどころでない、おかみさんは更にいよ／＼妙な事を云ひだした。『えらくなるは宜しいが、日本もモツト金持になりませんぢやねえ。』『どうも少し辟易した。『然し日本が幾ら金持になつたつて、我々はいつまでも矢張り貧乏なんでせう』とやつて見た。すると、おかみさんは存外わかりが早く、『成るほど。』私が西洋に行つたからつて、金持になれるわけでも無いでせうからね。』『所が、おかみさんは又、『日本は貧乏でも大和魂で行くと云ふんでせうね』と、やりだした。いよ／＼以て辟易せざるを得ぬ。『大和魂も、い〻が、上方者をけなす關東ツ兒の樣なものぢゃ無いか知らん』と私が云ふと、『あなた上方ですか』と彼女は云ふ。『い〻え、そうではない』と云ふと『[illegible] 皆んな我田に水ですわね。』と、おかみさん中々如才がない。

そうこうする中、日はトツプリと暮れて、船は銚子の港に着いた。

（一三）犬ボウと山サ

卅一日朝。銚子で見るものは犬吠崎（いぬぼうざき）の燈台と、山サの醤油工場より外にはないと聞いた。先づ電車で犬吠崎。この發音がイヌボエでなく、イヌボウである事を初めて知つた。燈台の外形を云へば、海岸に突出した岩の塊まりの上に建てられた、白い、丸い、大きな、高い塔に過ぎない。三四人の道連れと共に、許されてその塔の内部を登る。螺旋狀の鐵の階段が九十九段あるといふ。ずいぶん足がくたびれる。いよ／＼登りつめた。もひとつ上の段があつて、そこが火のともれる處らしいが、『これより上、登るべからず』と書きつけてある。そしてそこには燈台の人が登つていて何か作業をやつていた。我々は只だ丸い筒の中に立つていた。『そこまで登らせて貰へませんか』と、上の方に聲をかけて見たが、『こ〻は駄目です。』『ちや、これだけの事なのかなア』と、我々は圓筒の底に立つて周圍の壁をクヨ／＼眺めていた。『そこの戸をあけて外へ出て御覽なさい』と、上の方か

ら敎へてくれた。成るほど、圓筒の壁に開き戸がある。皆は喜んで外の廻廊に出た。果てしのない太平洋の大きな眺めがパット眼前に開けた。何しろ此の燈台は『海拔百七十尺、白色六十三萬燭』の大光力が、『光芒電の如く輝いて遠く五海里の沖合に及ぶ』のだそうだ。霧が深くて光の消される時には、別に霧笛を鳴す設備があるといふ。廻廊の手すりにもたれて眞下を見おろすと、足が自然に震へを帶びて來る。燈台の構ひの外の草原の中を畑にして、いろ〳〵の野菜物の作つてあるのが小いさく見える。ここにも矢張り人間の生活がある。砂地に適するらしい草花が、充分の日光と新鮮の空氣との間に、思ひきり鮮やかな赤い色に咲いているのも目についた。

それから、犬若(いぬわか)の岩に登つて名にしおふ屏風が浦の絶壁を見たり、昔し海鹿(あしか)の群れていたといふ海鹿島(あしかじま)の海水浴場を見たり、謂ゆる『磯めぐり』を荒かたやつて市中に戻つた。次は山サの醬油工場。

銚子は醬油の釀造地として、潮流から生ずる濕度と、空中の濕氣と、水中の石灰分との、三つの『天惠』を持つと云はれてゐる。そこで山サ、ヒゲ田、その外、多くの醬油屋が發達したが、中にも山サが最も優勢で、漸く併呑の勢ひを示している。山サの工場は四つばかりあるが、その中で今、第二工場が模範的と見え、一般に公開されている形である。銚子は水運の中心、漁業の市、遊覽の風景地である共に、實に亦た『醬油の町』である。

私は案内の事務員に連れられて工場内を遊覽した。工場内は靜かで、奇麗で、キチンと整頓している。作業は主として午前中だから、午後の手すきに參觀させるのであつた。先づ大豆を蒸す大釜の並んでいるのを見た。一釜十石づつで、それを一晝夜蒸すのださうだ。次に大豆と小麥のゴミ取り機械を見た。エレヴエーターだの、スクリユウだの、いろ〳〵の機械があり、廻轉式だの、電動式だの、いろ〳〵の遣り方がある。その外、麥を引きわる機械、麴室の設備、食鹽水の鐵管などがあつて、それからいよ〳〵仕込桶といふ段取になる。仕込桶は一個が六七十石入で、それが千五百個以上もある。この仕込桶の素晴らしく大きな奴が、整然として無數に並立しているのを見ると、五尺の小男は全く威壓されてしまふ。

醬油の釀造法は、その根本に於いて徳川時代の其と變りはない。只だ原料の煮方とか、扱ひ方とか、運び方とかに於いて、種々の新機械と新設備が應用されてゐる。そこで蒸汽汽罐があり、發電機があり、電動機があり、エレヴエーターがあり、レールがあり、壓搾空氣の運輸管まである其の間に於いて、豆、

麥、麹の實質は依然たる舊來のモロミを作り出し、而もそれが純然たる舊式の大桶として林立する前に、新舊混合の過渡的光景が、不調和にも見え、滑稽にも見え、亦た大いに面白くも見えている。

『ナニ醤油の釀造は、天保式からまだ幾らも變つては居ません』と案內者は無邪氣に說明した。然し仕込桶は今や漸くセメント製のタンクに進化しつゝある。タンクは今一個百二十石入のが二百個まで出來ている。第三工場の方では、もう總てがタンク式で、桶の姿は全く消えているといふ。

『勞働者の數はどのくらいありますか』と聞くと、山サの今日釀造する總石高が十五萬石で、それに對する勞働者が、釀造工八百人、樽工四百人、その他が三百人、合計約千五百人である。『割合に少いですね』と云ふと、釀造石高は年々增加するが、從業者の人員は增加しない。といふ。つまり機械力が次第に增大して、直接の勞働力の必要が減少するのである。釀造工は主としてモロミかきなどに働らき、その他には幾許も入らないといふ、女工も二百人ぐらいあるが、それは主として麹室に働らいているといふ。機械が段々に人間を驅逐しつゝある。

それからモロミをしぼる『上げ船』場を見た。二百臺からある壓搾機は新式だが、一台九百枚づつのモロミ袋は如何にも舊式に見えた。それから樽詰物と瓶詰物[illegible]い。これも追々、舊式の樽詰から新式の壜詰に進化するのだが、まだ中々だといふ。

次に樽の製造所。それは丁度作業中であつたが、純然たる昔風の樽屋さんだ。その樽屋さん達がアグラをかいて竹の輪を入れている所など、五十年も前に私が田舍で見た光景と少しも變つていない。然し鏡み板を圓く切る事や、それに穴をあける事などは、もちろん機械でやつている。『輪を入れたりする人達の方は、兎にかく自分の手で一ツづつ樽が出來あがつて行くのだから面白味もあるんですが、一分間に何十といふほど、毎日毎日穴ばかりあけている人達は、ずいぶん無趣味なわけですよ』と、案內者は大いにこの、機械の附屬物たる新式勞働者に同情した。

最後に發送部。こゝは全く停車場のプラツトフオームだ。樽詰や瓶詰の包裝した奴が橫づけの貨車に積みこまれて、そのまま銚子停車場に送られる。

これで工場參觀が終り、私は『醤油のお話』といふパンフレツトと、△△△の實業背を貰つて、そこを出た。私はこの工場で、樽工の外、殆んど勞働者を見ず、又その生活や境遇について何の話も聞き得なかつたが、要するにここではまだ勞働運動の芽ばえも無いらしい。山サ萬歲！。

（一四）龜甲萬第一工場門前の場

既に銚子の醬油工場を見た私の頭には、もつと純粹な『醬油の町』たる野田の事を思ひ浮べずには居られなかつた。私の行先が又自然に開けて來た。

銚子から兩國橋行の汽車で船橋まで歸り、七月一日朝、船橋から北總鐵道に乘つて、その終點野田町に降りた。汽車の中は大てい居ねむりばかりで過した。

汽車が野田驛にはいつて行く時、左手の間近に、白い、四角な、大きな建物が見えた。直ぐにこれだなと思つた。驛の前に出ると、野田町全圖と題した、馬鹿に大きな看板が立つている。先づ之に依つて町の大勢がわかる。一番先に目につく樣に書いてあるのは龜甲萬の商標で、その商標のついた第一工場、第二工場、第三工場と、第十七工場までが、地圖の全面のあちこちに散在している。前記の白い建物は即ち十七工場である。成るほど、銚子の山サと野田の龜甲萬、これが醬油界の兩大關だ。

驛前の通りを右に少し行くと、四辻の向ふ角に立派な警察署がある。そこを右に折れて行くと、正に是れ野田町の本通りである。そこの右側に『野田醬油釀造株式會社第一工場』といふ看板が目につく。古ぼけた黑い門があつて、中の樣子も總て古風に見えるが、そこに第一工場たる所以があるのだろう。この工場の裏に『茂木總本家』がある事は、驛前の全圖で既に承知している。『縱覽謝絕』といふ、これも古びた掛札があるので、銚子とは大ぶん樣子が違ふなと思つた。

暫らくその門前に立つて見て居ると、直ぐその側の道ばたに、種物屋さんがテント張の店出しをして居るのが目についた。私はその店の前に近づいて種物屋さんに話しかけた。『僕は此の町の話を聞きたいんだが、醬油の事や何か少し話して吳れませんか。』

そこにアイスクリームの屋台店をかついだお爺さんが通りかかつて、『そんな事なら俺が皆んな知つてる』といふ。『ぢや少し聞かせて吳れませんか。』『あゝ、そりや譯アねえ。だけど俺ア商賣に行くんだから。』『イヤ、暇をつぶさせるだけのお禮はするから。』

爺さんは荷をおろした。『お爺さん、今日は何處だね。』種物屋さんが聞いた。『今日は將軍地藏だ。あそこに會社の職人が集まる。』『成るほど、野田釀造工組合の大會だな。その事は新聞で見ていたが、丁度今日とは誂へ向きだ。』『その大會はもう始まるのですか。』『一時からと云ふのだが、まだ中々だらう。』

その時は丁度十二時頃だつた。お爺さんも私も店のまわりにシヤがみこんだ。お爺さんは野田の醬油の歷史から始めた。何でも今の十一工場の高梨が始まりで、上方から落ちて來た百姓だつたが、と云つた樣な話からやりだしたが、いつの間にかそれが急に飛んで、その高梨家に茂木の本家からお嫁が行つて、もうお子さんが出來て此の三月が初節句だつた、と云つた樣な話まで進んでしまつた。『本家の旦那は五十ばかりの脊のスラリとした人だがね、ウン。それから柏家の旦那は髭のこう、立派にはえた人でね、ツイ今しがた東京に行つたよ。俺ア皆んな旦那方をようく知つてる』と、お爺さん大得意。

その外、お爺さんの前後した話を取りまとめて見ると、茂木七が總本家で、高梨、柏屋、茂木佐、××、××など一族が七家あつて、それが大正十二年に合同して株式會社を作つた。柏屋も茂木だが、本家の七郎右衞門に對する七左衞門で、同じく茂木七になるわけだから、柏屋の屋號で通つているらしい。そして七家の中、一番大きいのが柏屋で、本家の三倍もあり、現に株式會社の社長である。第二は茂木佐、第三は高梨だといふ。然し龜甲萬といふ醬油は元來、××家の作りだしたもので、それを今は會社の看板物にしているが、柏屋の木白、本家の××など、各家の古い銘の入つた醬油も、皆それ〴〵少しづつは賣り出されているそうだ。茂木一族の醬油以外に、キノエネといふ醬油があるが、これは會社から獨立して相當大きくやつている。何しろ大會社を向ふにまわして競爭するのでは大變だろうと思はれるが、存外そうでなく、會社物の半樽五升に對し、こちらは半樽六升で賣出し、地まわり、若しくば濟麥屋向として、見んごと販路を持つているといふ。

お爺さんはそれから、柏屋の所得稅が廿八萬圓である事、又去年柏屋が崎玉の方で、所得稅くらいなものだからと云つて山林を一個所買取つたが、その廣さが一里あるのか五里あるのか誰も知つて居る者がないといふ事、勞働者の數は諸種の職人を合して二千五百人ばかり、その中、女工が二百人ばかりである事、賃金は平均一圓二三十錢だろうといふ事など色々話して、『こんな事は俺より外に知つてる者はありやしない』と斷言した。

自慢屋のお爺さんがアイスクリームの術をかたげて行つてしまつた後、私は種屋さんの店の横手の石に腰を掛けて、更に種屋さんと話しつゞけた。『此の町には、醬油の外、何が出來るんです』と聞いて見ると、『醬油より外、何だつて一つもありやしません。何しろそれで立つてる町ですからね。銀行がショオユウ銀行、商賣のショオに誘なふのユウですけれど、矢つぱり醬

油の銀行でさア。それから芝居がショオユウ劇場、笑ひ遊ぶといふ字です。今は野田劇場と改めましたけれどね。それからまだ菓子屋にショオユウ堂、尙といふ字と友といふ字です。』

そんな話の中に、編笠をかぶつた、紺のもじり袖を着た、顏立のわるくない、中年の女勞働者が店先に來た。種屋の兄さんとは懇意らしく、いろ〳〵世間話をする。『今日はサツパリ自働車が來ないね。何だか寂しい樣だ』と種屋さんが云ふと、『ええ、今日はヒマだ』と編笠の女は落ちついて云ふ。跡で聞いたのだが、この女は町の辻に立つて自働車に合圖をする役で、運送會社に雇はれて居るのださうだ。『自働車が續いて來ると埃りだらけになつて堪らないが、それでもやはりそんな日の方が種も賣れる。今日はサツパリ駄目だ。』種屋さんは嘆息した。如何にも、先程から三錢、一錢、五錢などのお客がチラホラあつたきりだ。

『あのオツカアは何ぞ働らきに來てるのか知らん。』編笠の女が向ふを見ながら云つた。その目の方向を見ると、太つちようのダラシのない女が、今ま第一工場から出て來たらしく、ヨタヨタと歩いている。『イヤ、何か拾ひに來るのだらう。』『掃き溜にでもね。』『そんな事だらう。』

そこに巡査が五六人、白ズボンにゲートルを卷いて署の方からやつて來た。『勞働者があばれるとイケナイと思つて、巡査が出かけるわい。』種屋さんが其のうしろ姿を見送りながら云つた。『あの大きな人は柔道の初段だと云ふぢやないの。』勞働婦人が云つた。見ると圓ぬけて大きな巡査が一人、跡から自轉車で追ひついて來た。

ガラン〳〵と鈴の音が聞えた。第一工場の晝休みが終つて、午後の就業を知らせるのであつた。編笠の勞働婦人も任務に就くべく行つてしまつた。『あれは氣の好い人ですよ』と種屋さんが賞讃した。

勞働者らしいのが十人ばかり皆な自轉車に乘つてやつて來た。大會の會場には、これを眞直ぐに行くのだと聞いたのに、彼等は向ふの辻を左に折れた。『あれも大會に行くのだらうか。』『イヤ、あれは十七工場の人でせう。十七工場は同盟會に關係してないのです。』種屋さんは『勞働總同盟』の事を『同盟會』と呼んでいる。そして彼等は今、十七工場の勞働を終つて、家に歸るのだと説明した。勞働者は自轉車で通ふのが多いらしい。

猶ほ種屋さんの話に依ると、十七工場には機械が多く使用されるので、人手は少ししか入らない。而もそれが素人でいゝ。素人を三個月も慣らせば充分間に合ふ。從つて賃銀も安い。十

七工場では一切、組合員を使用しない。會社では將來、總ての工場をそうする方針である。『實際、同盟會の人は强いんですからな。そしてどうかすると直ぐに東京から應援隊が來たり、要求を入れなきや休むなンてやりますからな。だから會社ぢや、厭がるんです。』それで先月、又爭議が起りかけた時、組合側は六箇條の要求を提出したが、會社はヘネつけて應じなかつた。會社の方ぢや、この不景氣の折柄、十七工場だけでどうにかやつて行けるものだから、氣が强かつたわけだといふ。

『會社と勞働者と爭つた時、町の人達は大體どちらに同情してますね。』私がそう問ふて見ると、種屋さんは『そうですね』と云つたきり、容易に答へなかつた。『どうせ大抵の人には會社の息が掛つてるのでせうからねえ』と云ふと、『マアそうでせうねえ。そりや勞働者に同情するものもあるにやあるでせうが、何と云つても大體、會社の尻につく人が多いでせう。無理もありませんや。』

私はもう立ちあがつた。種屋さんに禮を云つて大會の方へ向はうとした。その時、フト目についたものがある。第一工場の正門の脇、種物店の直ぐそばの處に、小いさな、如何にも小さな、人の出入が餘ほど困難だろうと思はれる潜り門がある。私がジツトそれを見て不審そうにしてゐると、種屋さんは說明してくれた。それは醬油の樽を、橫にしても縱にしても出されないほど、丁度それほど小さい門に拵へたもので、正門を閉めた後、この狹いくぐりより外に、この工場から外に出る道は全くないのだと云ふ。『成るほど、資本家も氣の休まる暇はないわけだな。元氣な奴等は大びらに騷ぐし、おとなしい奴等はこそこそ盜むし。』私は笑ひながら種屋さんと別れた。

（一五）大會、バア、按摩

（もう豫定の紙數を大ぶん超過したから、大はしよりにはしおります。）

組合の大會は將軍地藏の境内で開かれた。社殿の背面の石段の上を議長席にして、その右左に例の組合旗を飾り、議員はその前の地べたに、前はしやがみ、うしろは立つて、半圓形を畫いた。傍への丘や茶店や祠には傍聽人や見物人が山盛りになつていた。高い大きな樹木の枝が丁度よきほどに日光を遮つていた。警察官の警戒のいかめしさもあつたが、女工達が子供を遊ばせたりなどしてゐるといふ柔らかみもあつた。

何だか形ばかりの大會といふ樣子も無いでは無かつたが、それでも對支干涉反對の聲明もあり、可なりな雄辯家の演說もあり、報告、議事、選擧なぞそれぞれ滯りなく、兎にかく彼等は

此の屋外集會に於て、最も露骨な此の町のブルジョア勢力に對抗して、自ら組織し、自ら訓練しつゝあつた。他日この醬油の町が、遂に勞働者の町になる氣遣ひがないとは、アイスクリーム屋のお爺さんと雖も斷言は出來まい。

夕刻、私は驛の直ぐ前の有樂バアでビールを一本傾けた。美しい意氣なおかみさんがいろ〳〵取持をしてくれた。私は銚子の山サを見て來た話もして、こゝの工場も見たいといふ希望を漏した。すると、おかみさんが、『それには直ぐそこの十七工場を御覽になれば宜しいので、私も一度見せて貰ひましたが、タンクのたくさん並んで居るのが、丸で田のあぜを見る樣で御座いました。紹介でも御座いませんと、滅多には參觀をさせない樣で御座いますが、私共には幾らも又手蔓が御座いますから、何なら御紹介いよしませう』と、誠に好都合の話だつた。然し考へて見ると、跡で私の何者であるかが知れて、若しやこの好いおかみさんに迷惑が掛つてはならない。私は曖昧な挨拶をしてそこを出で、直ぐその前の旅館に宿つた。

旅館では按摩さんに腰を　んで貰ひながら、又いろ〳〵の話を聞いた。商誘銀行の頭取が柏家の主人である事。醬油卸問屋の山中長兵衞氏が柏屋の弟である事。野田町長が矢張り茂木氏の一族である事。北總鐵道の株式が大分部、茂木一家の手中にある事など。殊に一つ必ず書きもらしてはならぬ大切な件は、會社の社長以下諸重役が、酒も飲まず、女遊びもせず、何ら目に餘る贅澤もせず、政治界にも手を出さず社交界にも顏を出さず、只だ極めてジミに、毎日會社に出勤しているといふ事である。若しこの話が按摩さんの忠義振でないとするならば、敵國の要心堅固、ずいぶん恐ろしい事實である。

その翌朝（六月二日）、私は遂に十七工場參觀を斷念して、野田から柏、柏から上野の道で東京に歸つて來た。この旅行には尾行君に失敬して、始終ほんとに氣樂な保養をした。（終）

次號からの『當なし行脚』

『當なし行脚』は、一個の好々爺としての堺利彥氏が、飄然當てもなき行脚の旅に出られた見聞記である。田舍漢の目に映じた各地の人情風土記である。堺氏が我國社會運動家の先覺第一人者であることは云ふまでもないことだが、こゝでは堺氏が必ずしも社會運動家であるを要しないのである。たゞ、今では氏の圓熟した思想を背景に、諷刺輕快、犀利洒脫の靈筆を以て在るがまゝの人生と、社會と、人情風俗とを寫して吾等の前に展開せしめらるれば足る。いづこいかなる地に、いかなる姿で、出沒せらるゝかは豫測の限りでない。何を觀、誰と語つて氏の感懷を洩らさるゝか、尙更測り難い。地方の青年、田舍の老媼、いづれ氏の友でないものはない。或時は麥刈る畦に佇み、また或時は木賃宿に浮浪人とその一夜を語り明されるかも知れない。『當なし行脚』は文字通りに當なし行脚である。いつまで行脚を續けらるるものか、それも分ない。氣が向いたら日本全國氏の足跡を普からしめるかも知れない。何は兎もあれ氏の行脚の旅が續けらるゝ限り、得難く、貴重なるこの收穫の記錄は、今後の本誌上を飾つて讀者とその興味を頒つであらう。（編者）

現代矛盾生活の十二小景

佐々木指月

（1）

圍爐裡にかゝつた鐵瓶からは白い湯氣が立つてゐた。窓からは春先の品川の海が見えた。あたりはひつそりとして、圍爐裡の向ふには、こゝの主人、自性菴さんがちよこんと坐つてゐる。

後ろの床の間に掛けてある一軸は、誰の筆蹟か知らないが、行書でもつて、『寒松一色千年別、野老拈花萬國春、』と、名句が書いてある。

『あれは、どなたの御筆蹟ですか？』と、訊ねると、自性菴さんは片手をついて、なかば後ろをふり向いて、

『これは蒼龍窟です。』と、答へられた。

『へえ！』と、わたしは默つた。

この自性菴さんといふ人は、今年はもう、七十五六になると聞いたが、まだ眼鏡もかけないで、新聞ぐらゐは讀むといふ人だ。だが、この人のライフぐらゐ、アブサードなライフはない。わたしの眼から眺めると、とても、それは、理窟にもなんにも合つてはゐない。

この人は二十の年に出家して、その後の五十五六年間といふものは、坐禪ばかりで暮して來た。さうしてこの人の今、摑んでゐるものはなんだといふと、

『おれは大宇宙の中心に端坐して、ぴかつと光つてゐる。』と、いふことだけであるそうだ。たゞしその光つてゐる『おれ』といふものは、元來『おれ』ではなくして、『大宇宙が、この、おれに働きかけて光つてゐるのである。』と、自性菴さんはいはれる。

それだけの事を體驗するために、この人は五十五六年、面壁の工夫を積まれた。さうして、その自覺の心境を他に傳へやうと思ふのだが、いまだにこれを傳へることができずにゐると嘆

かれる。わたくしからいはせると、このくらゐ、アブサードなことはない。

『あなたはなぜ、結婚をなさらなかつたのですか？』と、わたしは訊ねた。かういふ質問を出したものは、自性菴さんの今迄の生涯を通じて、恐らくは、わたし一人であつたらうと思ふ。自性菴さんは顔を赤くした。

その様子が、廿一二の青年のやうであつた。

はゝア。かういふたぐゐの人は、やつぱり、その方が、ディヴェラプしてゐないのだな。さうすると精神の平均は保たれてゐないな。ぴかりと光つたものを摑んだだけでは駄目だなアと、わたしは思つた。

智識ばかり開發しても、情操の發達してゐない人は、その情操の方だけは、原始人のまゝなんだ。だから直ぐ顔色かへる。

わたしは自性菴さんの、情感の移つて行くありさまを、つぶさに拜見してゐた。

『わしの氣に合ふやうなものが、女人のうちにはゐませんでした。』と、自性菴さんは答へた。

この人のライフは、どこ迄もアブサードだ。

この人は、獨りで暮さなければならないやうに生れて來たんだ。したがつて、この人の宗教は、人間には用のないものなのだ。と、わたしは思つた。

（２）

孝吉は居間の片隅で、小さな机をまへにして、べそ〳〵と泣いてゐる。

『どうした？もう十九にもなつて、男のくせに泣くやつがあるか。』わたしは、その孝吉をはげました。

『また、あなた、落第しましてね！』と、わたしの從兄の妻は語つた。

孝吉は、かれのライフの門口の石段につまづいて、悲嘆にくれてゐるのである。

少年の、アーテイフイシアルメモリーを、紙一枚の答案で試みやうとする。試驗といふものが、如何に、リデイキユラスなものであるかは、いふまでもない。

元來、自然界には、試驗といふものはない。それからまた平均點なぞといふものもない。日常の姿で宜しい。ありの儘の存在で宜しいのだ。しかるに、人間のみは、試驗をやる。入學にも、試驗。卒業にも試驗、結婚にも試驗、死ぬにも試驗だ。リデイキユラス！と。いふより外に云ひやうはない。

『去年も落第、今年も落第か。君は勉强しないな！』と、わたしは、その、孝吉を咎めた。

『だつて、ぼくには、もう、勉强はできないんだ。』と、孝吉はいつた。

『どうして？』と、わたしは訊ねた。

五年前に見た時には、赤い顏をして、元氣よく遊んでゐた少年が、五年後の今日は、もう、見る影もなく靑ざめて、目ばかりぴかぴか光らしてゐる。現代の日本の少年のライフは、かうも不見目なものかとわたしは考へた。

『小父さん！』と、孝吉は淚をふいた。『小父さんに話したらわかるか知れないが、あの、救ひと潔めのわからないうちは、ぼくには學問は無意味なんだ。』

『えゝツ？』わたしは意外に感じた。

かれの母のいふところを聞くと、かれは、ヤソ敎に夢中になつて、この二年間、バイブルばかり讀んでゐたのださうである。

かれは、はやくも、思索の迷宮に入り込んでゐたのであつた。導くものもなく、敎ゆるものもない思索の道を、少年の乏しい智識で、あてもなく彷徨つてゆくかれを、わたしは不憫に思つた。

『だが、君。それは急いでも駄目だ。潔めとか救ひとかいふやうなことは、十五年、廿年の歲月を費してさへ、滅多にわかることではないのだ。』と、わたしは、眞心から、かれのために說いた。

『いつか、わかる時が來るだらうと思つて、ぼくも、たゆまず考へてゐるが、毎日の學課には追ひつけなくなつてしまうしあたまが、もう、こんがらかつて、氣でも狂ふかと思つたこともあつたよ。』と、かれは、もはや、よほど心も疲れてゐる。

孝吉のやうな傾向をもつた少年の心が、今のリディキユラスな中學の敎育をうけながら、直ほく、明るく暢びてゆけやうはずはないのだ。

あたゝかい愛の羽がひのその下に、少年のプレイフルなライフを庇つてやることの出來ない日本は、なんと無慙な國ではないか。

東京の往來を歩いて見て、樂しげな顏をしてゐる少年に、わたしはまだ、出逢つたことがない。

（3）

ともかくも、日邊碧桃は詩人である。

しかし、かれは、月給とりである。

かれは髪の毛を長くして、天鵞絨(ビロウド)のチヤキツを着てゐる。しかし、かれは、五人の子供の父親である。

かれは、一家七人の口(くち)を糊(のり)してゆかなければならない。しかし、かれは、詩人であるときめてゐる。

わたしに云はせれば、かれのライフは、カンスピキユアスだ。實に異彩を放つてゐる。たゞし、どちらも、うまく行けばだ。ところが、それが、うまく行かない。それだのに、かれは、どちらをも捨て得ない。だから、わたしは、かれのライフは、ソーリツシだといふのだ。

で、この日邊碧桃(ひなべへきたう)は、よほど前から、玉川べりの、きぬたに近い松林(まつばやし)のなかの、ある百姓家に住んでゐる。

わたしは先日夕方から、かれを訪れた。かれは、一番小さな赤ん坊を、ねんねこ半纒にくるんで、それを背に負(お)ふて、土間の竈(へつつい)で大鍋のなかの豆を煮ながら詩を說いた。聞くのはわたしの役目であつた。

『日本語は、コンスナントが少ないから、この言葉で詩を作るわれ〳〵は惠まれてゐないわけだ。』と、かれはいふ。背中では赤ん坊が、母音(ぼおん)ばかりの聲を振り立てゝしきりに泣いた。

かれの云ふところによると、日本語には、五つのヴアウアルと『ン』を入れて、十のコンスナントがあるばかりで、あとの音は、みんな、カムビネーシヤンださうである。日本のアルフアビトは五十音とは誤(あやま)りで、その實は十五音だと、こんな原始的な國語では、詩の作れるわけがないのだと。だから、かれは、詩を感じても、それを日本語に盛らうとはしないのだといふ。

かれは言葉を持たない詩人である。だから、かれには、文字に書かれた詩もなければ、印刷された詩集もない。しかし、かれは、髪の毛も切らず、天鵞絨(ビロウド)のチヤキツもぬがない。それ故、かれは、をり〳〵は勤め先からも追ひ出される。

しかし、かれは平氣なものだ。僅か十五音の日本語では、かれの詩を盛るに足りないか知れないが、もしパキトに七錢あれば、それでもつてバツトを買つて、その青い烟の上に、詩人日邊碧桃(ひなべへきたう)は、一日のライフを載せた。

豆はそろ〳〵煮えはじめて、榾(ほだ)の、とろ火(び)の、くすぶるなかに、白い泡をこぼしてゐた。かれの細君は、ジヤガタラ藷(いも)のやうに、四人の子供を、からだのまはりに、ぶらさげて歸つてきた。

かれの細君は、まるぽちやで、愛嬌たつぷりの大女(おほをんな)だ。盲縞(めくらじま)の股引に、盲縞(めくらじま)の鯉口(こいくち)を着て、白地に藍の染め分けの手拭を姐(ねえ)さんかぶりにしてゐた。むつちりとした、すてきな腰のあたりには、前掛の赤い紐が結んであつた。この人は、玉川の砂利元(じやりもと)

の娘で、芳紀まさに三十？かよ子さんといはれる。毎日川原へ出て、砂利の採掘をしてゐられる。

『おや、よく入らつしやいました。』わたしには笑顔を見せて、

『どれ、わこに乳ちよオ呑ますべい。張つてるだアから。』と、かよ子さん、夫君には玉川訛りむきだしで。はだけた胸の間から、その天然の、ミルク、バトルを、のこりと出した

かれの背中のねんねこから、すつぽんのやうに首をのばした赤ん坊は、そのバトルに吸ひついた。春の夕べの百姓家の仄暗い榾火の明りに照されて、細君の前に立つた詩人は、かの女の子供の一人としか見えなかつた。

詩人、日邊碧桃よ！吾れまた何をか云はんやだ。

（4）

『どうだね近頃は？』と、わたしは、お光に聲をかけた。たゞし、わたしの目は、夕刊の講談の上に注がれてゐた。

この娘は、今、外から歸つて來たところである。二階座敷は急にお白粉のにほひになつた。

『どうだねツて、なにがさ？』と、お光は、それでも、洒落のつもりだ。

『どうだい？おまへ、お嫁さんにならないか？』と、わたしはお光の顏を見た。

『だれの？』と、お光は、わたしの顏を見る。

『おれのさ！』と、わたしはいつた。

『與太ばつかり飛ばしてら！』と、この娘は四五年まへにくらべると、大分、新しくなつた。

お光は、そこで、お座敷着をぬぎはじめた。疊の上へは撥が落ちる。赤い鹿の子のしごきが落ちる。落花狼藉だ。

ふだん着に着換えてしまふと、小學校の生徒だつた以前のお光の姿に歸つた。たゞ、その顏に塗りたくつたお白粉と、あたまの上の島田だけはどう見ても、アブサードだつた。

『なんだつて小父さん、あたいの顏をそんなに眺めてゐるの？』と、お光はきいた。

『電氣の光がそのお白粉の上にさすと、顏がすこし青く見えすぎるからさ。』と、わたしは答へた。

かの女は、うらめしさうに、わたしの目を見返したり、袖口から襦袢をつまんで引ッ張りだしたりしてゐたが、

『小父さん、あたし、もう、思ひきつて、來月から鑑札を納めるのよ。この頃はねエ、カフエばやりでしよう。さうして女給さんの方が、モダンでしやう。だから藝者は上つたりさア。ことに公園は駄目なのよオ。』と、その聲が沈んでゐる。

『さうだ、藝者は、もう、アンテイクだからなア！』と、わたしが笑ふと、
『アンテイクつてなアに？』と、お光は訊ねた。
『骨董品じみてゐるといふことさ。』と、わたしが說明をしてやると、
『あれねエ！』と、お光はそこのちがひ棚の元祿人形を頤でさして、『ふン！では、うちは、骨董屋ねエ』と、鼻の先で笑つた。
　丁度、その時、下座敷から大姐エさんの聲がした。
『光代さん、今夜は誰が殘るの？』
『みんな殘るのよ。あたいだけさ殘らないのは。』と、お光は、ちよいと、舌を出して、わたしに見せた。
『でも、もう行かないんなら、電話をかけて置かなくつちやアいけなくつてよ、おまへさん。』と、大姐さんは氣をつけた。
『あなた、代りに、かけといてよ。それからねエ、あしたつからはねエ、もう、用事をつけて置いて下さいつて。』と、この娘は、ぬぎすてたお座敷着を疊みながら首をふつた。聲を出すたびに、島田髷はぐら〱動いた。
　なんだ殘るとか殘らないとかいふのは？あゝ、あれかと、氣がつくと、わたしの胸は妙に熱くなつた。わたしは胸になんか、つかえてでもゐるやうな氣もちになつた。わきで聞いてゐてさえ、知り合つてゐるあの女たちが、さうした一夜を今宵もまた送ると思へば、これ程のいやな感じを味はなければならないのに、いくら自分の至眞の情感に目覺めないからとはいへ、あの女たちのライフこそは、全く、イムポシブルだ。たまらないライフである。
『おまひ、殘るのは好きかい？』と、わたしはお光に訊ねた。
『知らなくッてよ。あたいは自前だわよ。』と、この藝者は、えらい、けんまくだ。

(5)

『氣がついて見ると、こんな、うるさいものを、よく、あたまの上へ、のせてゐられるものだと思ふわよ。一日も早く、こんなもの、切つちまいたいと思ふと、あたまが、もう、もん〱してきて、かうしてゐる間も、たまらないわ。』と、云ひながら、光代藝者は鏡に向つて島田をほどいて、ぐる〱卷を、あたまの上へ、こしらへた。
『あなたのためなら髮の毛切つて、モダンガールになりませうかと云ふ都々逸があつたつてなア。』と、わたしが云ふと、わきで聞いてゐた大姐さん――それは以前のお梅ちやんが、『よか

つたねエ！でも、あなた、どこで、そんなことを覺えて來たの？相變らず、方々、ほつつきまはつてゐると見えるのねエ』

と、これは思ひもよらぬ、お小言だ。

『この人のは、でたらめよ。さア、行きませうかね、先生？』

と、お光は、もう、出口の障子を明けてゐる。

もはや十時も過ぎてゐたが、さすがに春の夜の風はやはらく、シネマ歸りの人々にまざつて、わたしたちは吉原へやつて、來た。女を連れて吉原の廓のなかへ來たことは、これが生れてはじめてだ。とても妙な感じである。これこそ本當にアブサードな感じだ。わたしは下を向いて、ひとりで、くす／＼笑つた。

わたしたちは、眞面目な顔をして、並んで寫眞を見て歩いた。さすが牛壇の牛太郎も、あきれかへつて、二人の樣子をながめてゐる。これは、判じ物だと思つたにちがひない。

『え、蒲田の先生！チョツ、チョツ、チョツ、と、お話がございます。如何でございましやう、女優さんのお取卷きといふことにいたしましてゝえゝ、手前どもでは、決して差し支えございません。』と、さすがは牛太郎、これはいゝ見立てだつた。

お光藝者は、そこに堪らず遁げ出してしまつた。あたしは毒でも呑まされたやうに、ふら／＼になつて引き下つた。恐らくは、人間の一番恥とするところのアフェイアを、一段高い壇上にゐて周旋しやうといふのだから、あの牛太郎のライフほど、アブサードなライフは世界中に先づあるまい。

『もし、蒲田の先生！女優衆も、しよツ中、手前どもへは御遊興にお見えになります。』と、牛壇よりのアナウンスマントは、もう聞くに堪えなかつた。わたしたちは、そこを逃げ出して仲之町へ出た。もう、この人間の至純の情感を傷ましむる土の上からは、はやく去りたいと、わたしは思つた。

『外へ出てから、おでんでも食べてやらうか？』と、わたしがいふと、

『さうしましやう。なんだか廓は氣ぜはしくつて、あたいいやだわ。』と、お光藝者も、もう、青い顔をしてゐた。

アムウアと、アムウレットを鬻ぐ街！それは、オピアムデンのやうなものだ。そのなかの夢は美く、そのなかの睡りは樂しいか知れないが、そのオピアムの烟の毒は恐ろしい。だが、その毒に醉はされてゐるものには、恐ろしさはわからない。またその毒に中つたことのないものにも、その、あぶなさはわからない。わたしは身ぶるひしながら、そのワイルドな街を出た。

わたしたちは、暗い横丁にあつた一軒のおでん屋の、のれん

をくつて、その小さなテーブルへ向つて並んだ。すると、おでん屋の、お上さんが、なかく\の愛相もので、

『お嬢さまには何を差し上げましやう？』と、いつた。

光代藝者は、呑みかけてゐたお茶にむせた。

わたしたちは、みんな、クレージイだ。

（6）

下落合に畫室を構えて住んでゐる水村七星が手紙をよこした。

いゝモデルが來てゐるから見に來いといふのである。

雨の日が續くのを苦しんでゐた折とて、一日つぶすつもりで、わたしは朝から出かけた。

茶を入れるから來いとか、酒を呑ませるから來いとか云ふのたらまだしも、いゝモデルを見せるから來いとは、少しばかり、アブサードなインヴイテイシアンだ。

しかし、女の脫衣身も、月の一種として眺め、花の一種として眺めるに於ては、そのために客を招じることも、敢て不思議なことではないが、人心の微妙な働きといふものは、哲學者が理窟の上で考えたやうに、さう、きつぱり、この場合は假感、この場合は實感と、使ひわけることが出來るものではない。假實混雜でなければ人生は面白くない。それだのに、いゝモデルを見せるから來いとは、見る方も、見られる方も、少しばかり心の持ち方を變へてかゝらなければならないわけだ。そこが、アブサードに感じられる所以なんだ。でも、わたしは、朝から出かけた。

かれの畫室へ着くと、かれの細君がわたしを出迎えた。細君は相變らず丸髷で、ずべらな水村七星に取つては、これは勿體ないほどの世話女房だ。

『モデルを見せるといふから來ましたよ』

と、わたしがいふと、

『まア、そんな失禮なことを申し上げたのですか？』と、細君は呆れた。

細君は、モデルを見せるといふことは、失禮だと心得てゐる。失禮にちがひない。女が男に脫衣身を見せるのだからな。しかし、細君の手前もかまはず、仇し女の脫衣身を穴の明く程ながめてゐるその夫は、細君に對しては、失禮どころか無禮千萬な話である。夫婦の情愛を第一にして考へると、畫家のライフなぞといふものは、インクレデブルライフだ。

わたしは、案內もなしで畫室の戸を押して這入つた。なかは、この春のさなかに、火を焚いて、むつとする程の暑さだ。

油の臭ひに繪の具の臭ひ。北向きのスカイライトから、雨の降る日の光がさして、なる程そのなかに、一人のモデルが立つてゐた。

『ヤア、やつてるね！』これは、おきまりの文句だ。

『ここに烟草がある喫ひ給へ。ぼく、今、一寸、ここのところをきめてしまふから』と、かれは、きめてからでなければ、烟草も喫へない男である。畫家としては惡いくせだ。

わたしは椅子にかけ込んで腕組みをして、謹んで、モデル臺の上に立つてゐるその若いモデルを拜見した。

脛の長さは申し分なかつた。膝の恰好もよかつた。右の踵を浮かして、足を少し外に開いてゐるのであるが、モデルは、もう、疲れきつてゐて與へたポーズは頽れてゐた。膝の上から腰のかゝりも無事だつた。胴もあざやかに締つてゐた。だが如何にも、胸のふくらみが足りなかつた。左の手を腰にあてがつて、右の手をのばして、肩からかけた羅の端をつまんでゐる。

『こほツ！』と、モデルは咳をした。

天眞の處女を思はすその顔は、ほてつて赤くなつてゐるが、その黒い目のうちには、云ひ知れぬ恐怖の蔭が宿つてゐた。いづれは貧しい親の子であらうがと、わたしは不憫を感じてしま

つた。

おだいさんは、わたしとは、再従妹に當つてゐる。おだいさんの御良人は、歐洲航路の汽船に乘り込んでゐる高級船員で、年に三度か四度ぐらゐしか、うちへは歸つて來ないのである。

この御良人は、わたしとは至つて仲好しで、わたしが、あちらにゐた折も、船が港へ着くたびに、わたしを誘つて、ホボケンあたりの吞屋でもつて底ぬけ騒ぎをしたものだ。なにしろ港々に細君があつて、港々に子があるといふのだから、この人のライフのエクストロヂナリーなことはいふまでもない。從つておだいさんは、それらのワイヴズのうちの一人なのだ。ただし、おだいさんには子がない。

今日は、わたしは、その、おだいさんの近況を知るために來たわけなのだ。二階の座敷からは六間堀の川水が見える。その川にかゝつてゐる小さな橋も見える。橋の袂には材木屋がある。長い竹が、降りつゞく春雨の空に、高く突き出してゐる。

おだいさんは、いつも若い。見たところでは、まだ廿代としか見えぬ。文化束髮を眞似て、耳かくしに結つてゐるが、額が中高のうまれだから、どうしても、でんぼう風なところは脫すに

よしもない。

　わたしの前には、白い漬物と、青いおしたしと、赤いおさしみが並んで、おだいさんのお酌で、黄色いお酒を吞まされて、洋服を着たお尻の下には、俎板をおてがはれて、わたしは、これから、おだいさんの、庖丁のやうな鋭い舌で、お料理されるわけなのである。

『だからさ、あたしはもう、遠慮もなにもありやしない。思つた通りやることよ。』と、おだいさん大分、酔がのつて来た。大分、お酒もまはつてゐる。片方の手を内ふところに入れて彌生の烟を輪に吐いてゐるが、わたしの眼には、眉毛の痕を青くして、おはぐろの歯を見せて、長い烟管で、黒八の半襟で、立て膝をしてゐる姉御としか見えぬ。耳かくしはこの人には、どこ迄もアプチードだ。おだいさんは、長い目に、ほんのりと色氣をふくんで、

『なぜ、さうしちやア悪いんでしやう？』と、これは、人生の根本的の問題に觸れてゐる。わたしは返事にこまつた。

『やつて見るがいゝさ。悪いか善いかわかるだらう？』とわたしは答へた。

『やつて見てゐるのよ。なんともありはしないわよ。』と、おだいさんは、善悪を超越してゐる。

『それならば、なぜ、わたしに、そんな事を、きくんだ。』と、わたしはきゝ返した。

『でも、世間では悪いッて云ふでしやう？』と、善悪を超越したおだいさんも、世間を超越することは出来なかつた。

『世間はどうでもいゝではないか。』と、わたしはちよッと、氣を引いて見た。

『それも、さうねエ。あたしかまはず、やりますわ。』と、手もつけられない。

『灰になる迄、やるさ。』と、わたしは、けしかけた。

　困つたことには、このおだいさんが、間違つてゐるとは、わたしには思へなかつた。間違つてゐるのは、船員は、船へ、細君を連れて乗つてはいけぬといふ、あの規則だ。

　しかし船員が、われもかれも船へみな、細君を連れて乗つたら、どういふことになるだらう。

　それ故に、水上の人のライフは、陸上の人のそれから考へれは、アノマラスライフだ。エクセントリツクライフだ。

（8）

　おたかさんは、わたしとは、直ぐの從妹に當つてゐる。この人は、一と晩に三人もちがつた御良人を持つが、それでゐて貞

操まことに堅固である。と、云つただけではわからないが、この人は俳優の細君である。だから、その御良人が、一と晩に三つの役をつとめると、おたかさんは、その晩に、三人のちがつた御良人を持つたことになる。おたかさんのライフは、ワンダフルなライフと云へる。

今年も、やつと、春になつたといふ或る宵のこと、わたしは、おたかさんに招かれて、親類中での總見のなかにまざつて、おたかさんの御良人の藝を拜見した。その宵のおたかさんは、大丸髷に赤いてがらで、黑ちりめんの三つ紋の羽織を、のけ衣紋にひつかけて、濃艶無比の奧樣になりすまして、色々と總見の斡旋をしてゐた。

舞台の上の御良人は鎧を着て、兄、平親王將門と、川ッ端で大論判をやつてゐる。負け戰で、領內の村を燒かれる火の粉の雨が、降つてくるそのなかで、摑み合ひの兄弟喧嘩をやつてゐる。

わたしは、おたかさんの顏を見た。

おたかさんは、まッ靑になつて、高土間のうしろの戸にもたれながら、あの人の氣性だから、兄と喧嘩をするのは無理もないが、どうなることだらうと氣をもんでゐるありさまは、はたで見てさへ氣の毒なほどである。

『まあ心配しなくつてもいゝから、お坐りなさい。』と、わたしがいふと、

『あの人、本氣になつて怒つてゐるのじやなくつて？』と、この人は本當に、將門の弟を御良人にしたつもりでゐる。

二番目狂言に出たおたかさんの御良人は、胡麻鹽の老紳士で、洋服にステッキ。奧さんを連れて、大きな男の子をつれて、友人の新築したサンマアホームへやつて來た。

わたしは、おたかさんの顏を見た。

おたかさんは、大いに侮辱されたやうな顏をしてゐる。

『どうです、あなた、あの奧さんの役をやつては？』と、わたしが云ふと、

『おゝいやだ、あの人、年を取ると、あんな風になるんだよ！』と、おたかさんは、御良人の未來を目のまへに見て、すつかり悲觀してしまつてゐる。

三番目の狂言は大變だ。水谷八重子が、お七になつて、雪の降る宵の櫓に昇りつめて、おゝ、この太鼓を打つたなら、あたいの思ひが、戀しや、あの吉三どのの胸にまでひゞくであらうと、あはや太鼓を打たうとすると、おゝッ、ちよいと待ちねエ、とんでもねい眞似をしなさんな。そりやア火の見の櫓の太鼓ーと、頰ッかぶりで、片すね出して、木戸の蔭から出て來た

のが、おたかさんの御良人だ。その御良人は、水谷八重子を擁の上から抱き卸す。

わたしは恐る〱おたかさんの顔を見た。

『あの女優には踊地がありますなア。』と、わたしがいふと、

『あの人、もつと、深切に卸して上げればい〻のに。』と、おたかさんは答へた。

樂屋へ行くと、そとはもう、火事場のあとだ。八百屋お七は白いケープをひつかけて、モダンガールになつてゐた。

わたしたち一同は外へ出た。タキシはそこに待つてゐた。おたかさんの御良人は、目ぐまの墨の殘つたま〻の顔をして、そこから直ぐ名古屋へお立ち。

おたかさんは、手のなかの、鳥を飛ばしたやうな顔で、タキシのあとを見送つた。

俳優の細君も樂ではない。われまた何をか云はんやだ。

（9）

春の夜の龜井戸天神は、絃歌のなかに瞑想のエクスタシーを包んでゐる。池の水は燐火のやうに青く澱んで、それをめぐつて若い女の笑ひ聲がきこえる。

松の樹の蔭に机を置いて、白いひげを胸にたれた老人が、提燈の明りのなかに算木をならべて、ふところ手をして、默してそこに掛けてゐた。

呑めない酒を强ひられて、少しく醉を感じたので、風にあたらうと思つて、ふらりとこの境内へ足を入れたのであつたが、わたしのあとを追ひかけて來た一人の若い女が、

『運勢を、あたい見て貰ふわよ。』と、その易者の机の前に立つた。

易者は、二言三言その若い女に就て訊ねたが、やがて、居ずまひを改めて、手に握つた筮竹を、さら〱と押し揉んで、ぱつとそれを二つに分けた。右の手のを机に置いて、置いたなかから一本をとつて、それを左の小指にかけた。左の手に殘つた竹を、ぱち〱と易者は數えた。

かれはしばらく同じことをくり返してゐたが、次第に並べた算木に近く提燈を動かして、さて、かれは口をひらいた。

『あなたは、お若いにも似ず、今迄に大分苦勞しなすつた。しかし、その苦勞の時節も、もはや解け去つたこととて、しばらくは、この儘、落ち着いてゐなさるがよろしい。』と、その老人は、權威あるもの〻如くに語つた。わたしたちは顔を見合はせた。

『この卦は。』と、老人は言葉を續いだ。『雷水解と申して、水の

なかに滯つてゐた雷氣が、水の上に出たといふ象である。水は流通するもの故に、これは金の力と見る。雷は目に見えぬ力であつて、これは、若い御婦人であれば、願ひ事とでも見ましやうか。その願ひ事も、今迄は金の力のために縛られてゐたが、今はもはや自由の身となつて、これから願ひも遂げられやうといふことに相成つた。なれども如何せん、この雷氣と申すものは、なにかそこに傳はるものがないと、上へ昇ることの出來ないものである。だが只今のところでは、まだその傳はるものがない。それ故にこの御婦人は、自由の身とはなつたが、それで願ひが叶つたといふわけではない。手づるによつて立身をしなければならない。それには、今、しばらく靜にして時の至るを待つた方が宜しい。しかし、時が來れば速に、それに乘ずるといふ覺悟がなければならない。』云ひ切つて老人は、わたしたちの顏を見た。

『當つてるわ。それにちがひないこと。ちよいと、どう思つて？』と、その女は、わたしの顏をのぞいて見た。

見料は、たつた十錢だといふが、女は、わたしに一圓だした。

わたしは、すつかり考へてしまつた。

『そんなに考へちや、あたい、いや！だつて、あの、おちいさん、可愛想だわ。それに、あなた、五十錢玉、もつてなかつたでしやう？』と、この女には、わたしの考へてゐることは、わからなかつた。

『そんなことを心配しなくつてもいゝんだよ。つまり人間に出來ることは、何んと云ふ意味もなく目の前に現はれてゐるものを、什麼、判斷し、また什麼、こちらをそれに當てはめて行くかと云ふことに過ぎないのだ。』と、わたしは、なかば、獨り言のやうに語つた。

『あたい惡かつたわ、そんなに怒つちや、いや。』と、この若い女は、暗いなかで、わたしの顏を、幾度も幾度も、のぞき込む。

つまり、與へられた立ち場から、外を眺めるより外に方法はないのだ。して見ると、內心ばかり見つめてゐた、わたしの今迄のライフは間違つてゐたのだ。

(10)

わが友、志村龍一は、また首になつて、わたしのうちへやつて來た。

『こまつたよ君！來月はまた赤ん坊が産れやうとしてゐるんだからなア！』と、かれは、いつた。

かれはある銀行の事務員をして、百圓内外の月給を貰つてゐたのであるが、つい此間結婚して、もう子供が產れるといふのだ。しかも今日は、もう、かれの首は飛んでゐた。わたしは手を組んだまゝ一言も答へることは出來なかつた。

『結局どうしやうといふのだ？』と、わたしは、かれに訊ねた。

『だつて君、あんまり下らないじやないか。仲間のやつが、あんまり威張るから、ぼくは、さういつたんだ。銀行員なぞといふものは、さう威張るものぢやない。つまり、ぼくらは人の金の番人をしてゐるのだから。さうしてその預つた金を動かさして貰つて、それから上つた利益を分配さして貰つて、生きてゐるんだから、預金者は勿論の事、引き出しに來る人にも、金を借りにくる人にも、少しも大きな顔をして見せるわけのものではないのだ。と、ぼくは、かう云つたんだ。すると、それが君、重役の耳へ把入つたと見えて、その明る日から、ぼくは冷遇され出して、あんまり癪にさはつたから、汗水こぼして働いて得た金を預けにくる勞働者の方が、よつぽど、重役なんかよりは、人間として偉いんだ。人の金の番をしてゐるその好機會を利用して、人の金を動かして、仕事をするなら、ぼくにだつて出來る。しかし、水を掬んで土となし、土を握つて黃金となすといふ根本の働きは、かれら、重役如き人間には出來るものではないんだと、ぼくは、かう云つたんだ。さうしたら、ぼくは首になつたんだ。』と、志村龍一は喋るわ〱、數千言を一と息に喋つた。

『それで結局、どうしやうと云ふのだ？』と、わたしは、また、かれに訊ねた。

『結局ツて、仕方がないから、ぼくは今、外の銀行の口をさがしてゐるんだがね。』と、かれは答へた。

『なぜ、その、水を掬んで土となし、土を握つて黃金となすといふ、根本の働きとかをやらないのだ？』と、わたしはきいた。

『それは、ぼくの體質では出來ないよ。』と、かれは、その、細い手で、すべつこい顔を、なぜてゐる。

『では結局銀行員か？』と、わたしは投げ出すやうに云つた。

『まア、さうだねエ？』と、かれは、しよげてゐる。

『今度、銀行員になつたら、首に鎖を着けて出かけることだなア。』と、わたしは冷笑した。

かれは、むかつ腹を立てた。

『土を握つて黃金となすことは誰にでも出來る。黃金を、その

僮、糞となすことが、むづかしいのだ。』と、わたしは云つた。

かれは、口を尖らして去つた。

ペニイワイズ、パウンドフーリツシ！

(11)

インキユバスといふ美い魔女があつて、人を活きながら死の國に抱き落とす。インキユバスは、つまり女性の睡魔である。

秀子さんは、その睡魔の化身だ。だから秀子さんと顏を向け合はして話してゐると、わたしはまるで、うなされてゞもしてゐるやうな苦しみを感じる。しかし、不思議なことには、この秀子さんには、ちやんとした御良人がある。

春の夜に、うすら淋しい月が出ると、わたしはよく、この秀子さん御夫婦を、ワシントンハイトの御宅へ訪問したものであつたが、今では、青山のあるところにお住ひなので、以前の通り、時々お邪魔をしに出掛ける。

お住ひは純西洋式で、明け暮れのお暮しも純西洋式で、お宅にゐても、御夫婦は滅多に日本語をお話しにならない。尤も、お二人とも、西洋に長年ゐらつしつた方なので、それに不思議はないけれども、なにも、さう日本語を、お憎みにならないでも、好ささうなものだと思ふこともなきにしもあらずだ。

秀子さんは無論斷髮で、一昨夜伺つたときなぞは、銀箔をのべたやうな靴下に、水晶のやうなイヴニングガウンを御召しになつてゐらしつた。このお方は、モダンにも、なんにも、モダン奥樣の未來派だ。

『おきゝなさいよ！あたしこの頃、わるくなつたのよ。』と、無論。これは英語でお話になつたのであるが、こゝでは日本語で書いて置く。『この頃、あたしは新しいダンスを習つてゐるのよ。ある人からさア。その方は。とつても敎へ方が上手なの。あたし感心しちやつたわ。巴里仕込みなんでしやう。今日。あたし三時間も稽古したわよ。へと〱になつちやつたの。』と、いふそのお聲の魅力にかゝつて。わたしは夢に壓しつけられてでもゐるやうに苦しんだ。

御良人の方を見かへると、さもありなんといふやうなお顏をして。にや〱と笑つてゐられる。日本人の目から見たら。アブサードなことこの上もない。莫迦ッ！と、假りに奥さまを怒鳴りつけたところで。御良人がお惡いとは。誰も申すまいと思はれる程である。

インキユバス奥樣は、そろ〱魔性を現はした。大きな黑い目の底に、うす碧い火を燃して、

『あたし、あなたの心のなかを、隅から隅まで。しらべ上げても、

見たいわ。あなた、あたしの顔を見ながら何を考へてゐらつしやるの？あなたの心はとても入り組んでゐるのねエ。あなた、女性に戀されて遁げ出したことがあつて？』と、これは、わたしへの御質問であつた。

『どういたしまして、もし、さういふことがありますれば、決して遁げかくれは致しません。しかし、まだ、さういふ目に合つたことが御座いません。』と、わたしは謙遜して申し上げた。

『さう。おつしやらなくつても、ちやんと證據は上つてゐますよ。あなたが、ノースリヴアから石油船に乗つて遁げやうとしたところを、あたしが助けてあげたのをお忘れになつて？それにしても、一たい、かの女は美人なの？』と、秀子さんは、あられもない濡れ衣をわたしに着せた。

御良人は、わたしの隣に掛けてゐて、くすくす笑つてゐらつしやるばかりである。

光と、愛と、翅の世界に生れ出やうとして、生れ出ることが出來ずにゐる多くのライフは、みんな、活きながら死骸のうちに呻いてゐるライフである。心が目醒めても、からだが睡つてゐたのでは、翅の世界には出られない。それは、うなされてゐるライフである。

獨り、秀子さんのやうなインキユバスが、この夢の國にうまれて、睡つてゐる人のからだをゆり起して、それに神通の翅を與へる。

目醒めたからだを持つてゐるもの同志があつまれば、千人ゐても一人と同じだ。だから心は飛びまはる。われの心も、かれの心も、そこにはない。たゞ一つの心があるのみだ。

だが、日本へ來れば、秀子さんのライフは、アブサードな、モダン奥様のライフである。

（12）

わたしのうちでは、わたしが無宗教で、細君どのは――これでも細君はある――ヤソ宗だ。しかも、ちやきちやきのヤソ教徒で、ちらりと聞いたところによると、なんでも、日曜學校の先生ださうな。道理で日曜には朝からうちにゐないと思つた。尤も晩にもゐない。だから一日ゐないわけなんだ。

さうして、わたしのうちの子供たちは――これでも子供もある――長男は母親と同じヤソ宗で、長女と次女は佛教信者だ。猫だけは、わたしと同じ無宗教信者だ。

この頃は學校が休みなので、子供たちは、日に三度、食事の箸の上げ下ろしに、大宗教戰をおつぱじめる。細君どのは外へ逃げ出し、わたしは二階へ引き上げる。猫どのは台所へ馳け込

む。大變な家庭なんだ。

しかし、信教は絶對に自由だ。わたしの無宗教に對しては細君どのも口を出すことは出來ない。無論、わたしと猫どのも、家族の信ずるヤソ教と佛教に對しては、にやんとも云はない。

しかし、時々、夕刻の食事の仕度で、台所のいそがしい眞最中に、教會の牧師さんがお出になる。すると、細君どのはエプロンをはづして、座敷の方へ行つてしまう。子供たちは、いいことにして外へ遊びに行つてしまう。さあ、かうなると二階の無宗教信者と、流し元の猫どのはみじめだ。いつになつたら、夕飯がたべられるのだか、わからなくなつてくる。しかし、信教は絶對に自由だ。わたしたちは、すき腹を抱へて、時期の來るのを永遠に待つより外に仕方はない。

下からは、お祈りの聲が聞こえる。最初は牧師さんのお祈りで、次には細君どののお祈りだ。

『天にましますわれらの父よ。どうか二階の無宗教信者に、あなたの宗教を與へ給へ。さうして、公園や、吉原や、龜井戸なぞに出入りすることのないやうに、大能の御手を下し給へ。』

『ヤアツー　神よ！』と、牧師さんの氣合が把入る。氣合入りのお祈りは、はじめて聞いた。

『しかし、二階の無宗教信者が、たくさん面白い隨筆を書いて澤山原稿料が把入つて來まするやうに、あなたの大智の御力を加へ給へ。』

『おオ！　父よ！』と、牧師さんの音頭がまた把入つた。音頭なしでは祈れぬものと見える。

『原稿の種をさがしに行くといつて、仲間の文士と、あんまり、呑み食ひをして歩かないやうに、しかし、交際は、どこ迄も廣くして、よりよきチャンスのかれに與へられまするやうに、かれを守り給へ。子供たちは、あまり大飯を喰ひませぬやうに、わたしと猫にも、たまには、牛肉の一きれぐらゐは殘りますやうに！　この、さゝやかなる祈りを、父と子と聖靈の御名によつて、あなたのお耳にまで、きこえ上げ奉ります。エーメン！』

『エーメン！』と、牧師さまも。これはいゝ、祈りだと思つたに違ひない。

わたしはそれを聞き終つて、すつかり感心してしまつた。

文士のライフといふものは、インポシブルなものだと思つた。

――了――

松助閑話【四】

尾上松助（談）
邦枝完二（稿）

○

はい、はい。また蝙蝠安をやりますんで。……いやどうも、年々體が利かなくなるせいか、舞臺にゐても、なかなか骨が折れますよ。それに人様が、何んのかのと仰しやつて下されば下さるだけ、嘘の藝は出來ませんから、やつぱり初役のつもりで、一生懸命に勤めて居ります。いや、やればやるだけ、六ケ敷いのが藝で御座いませう、はい。

○

今でも覺えてゐますが、この狂言が初めて書き下しになつたのは、私が十一の歳の中村座でした。何んでも花見時分だつたと思ひますが、團十郎さんの與三郎、梅幸さんのお富、三十郎さんの多左衛門、それに中鶴さんの安で、大さう當てたもんでしたよ。子供心に、おいらも何うかして、あんな立派な役者になりてえもんだと思ひましてね。親父に話しましたら、大それたことを云ふなつて、叱られましたよ。丁度直ぐの弟が、この狂言があつてぢきに死にましたので、今で忘れやアしません。

○

二度目の書下しの時は、九代目さんがまだ權十郎時分でしたが、この時は縮屋新助とつき混ぜにした、妙な狂言でした。縮屋新助の中へ、赤間源左衛門が出たり、蝙蝠安が出たりしましてね。何んでも永代橋の落ちたことなどが書込んでありましたつけ。芝居は市村座で、作者は河竹さんだつたと思ひます。

芝居をしてゐて、一番六ケ敷いのは、型のない狂言ですよ。型のあるものは、型通りにやれば、曲りなりにも出來ますが、型のない、世話物のやうな芝居は、地の味で見せなけりやアなりませんから、ちつとだつて、意氣を拔くなんて事ア出來やしません。それにお前さん、世話物で大切なのは、自分で喋つてゐねえ時の、量見の持ち樣ですよ。これを忘れたら、芝居は半分過ぎもういけますまい。

○

千代萩で、仁木が引込みの見得を切る時、體を反らせて、揚幕を見込むのが本當の型だといふが、さういふものかいと、お訊ねになつたお人がありました。ですが、これはちつとおかしなお話なんで。……大體何んですよ。揚幕が花道の正面へ附くやうになつたのは、守田さんの新富座からなんで、それまではどこの芝居も、揚幕は、みんな突當りの横手に附いてゐたもんですから、揚幕を見込んで反るといふことになりますと、仁木は體を斜に構へて、横目を使はなけりやならねえんで。……いや、言ひ傳へなんてもなア、何が何んだか、判らねえことがよくありますよ、はい。

○

昔は初日の前日になると、仕切場へ「明日行燈」といふものが出ましてす。これが出ると、愈々明日から芝居があくといふので、芝居町はぱつと景氣が立ちました。——面白いのは、太夫元と金方との都合で、行燈が疾うに出來てゐながら、仕切場へ出すことが出來ずに、五日も十日も初日の延びることがありますんで。……こんな時にやア、下廻りは、毎日仕切場と睨めつこをしながら、いくらでもねえ給金を當てに、なぐさみ事ばかりしてえたもんです。

○

この「明日行燈」が出ると一緒に、木戸藝者といふのが二人、鼠木戸の前の臺へ上つて、讀立といふことをやりましたが、これがまた大さう人氣を呼んだもんですよ。——木戸藝者といふのは、平たく申せば、芝居の太鼓持と云つたやうな者で、どこの座にも二人づつゐました。左樣、市村座には、粂女八、鶴壽といふのが居りましたよ。粂女八は岩井粂若さんの聲色が上手でしてね。鶴壽の方は後に龍生といふ噺家になつて、

つい先年亡くなりましてす。

○

木戸藝者が讀立の着附はと申しますと、今考へると馬鹿氣たお話ですが、紫の着物に、飯茶碗ぐらゐある金絲の紋を附けたり、赤い帶を締めたり、そうかと思ふと、片身だけ裾模樣のある着物を着たりして、隨分とてつもない裝をして居りました。これが大きな卷を持つて、鼠木戸の前の、高い臺の上へ控へるんですから、それアもう、眼に立ちますよ。

○

まづ一人が卷を展げると、一人がそれを卷きながら、代り代りに咽一杯の聲を上げて、大名題から讀み始めます。

「東西——當座彌生狂言の榮——一番目伽羅先代萩第幾幕、相勤めまする役人換名、仁木彈正、尾上菊五郎に御座りまする」

「さてまたこゝに、當時女形の仕手にて政岡を勤めまするは……

……」

「なか、なか〳〵よく讀まれたりな、讀まさせられたりな。これぞ岩井半四郎に御座りまする」

これをすつかり讀んでしまふと、「一番太皷と諸共に、永當永當御見物の程、ひとへに願ひ上げ奉りまする」で結びますが、この調子がまた大時代のものでした。

○

讀立が慇つて、後見が卷を持つて引込むと、これから二人が聲色を遣ひます。木戸前にゐる見物は半分はこれが目的なんですから音羽屋アとか、成田屋アとか、いやもう大そうな騷ぎなんで。……………

「さ、吉例の通り、役者の聲音をつかひやせう。立役、娘形、花車事、老役、二十三通り遣ひ分けるは、この楷下の聲音で御座る」

「して御貴殿は、誰を眞似られるな」

「や、當座の書出し、菊五郎を眞似まする」

「これは一段とよからう。さらば眞似られよ」

そこで二人が、聲色を二三枚づつ遣ひますが、その道の苦勞人だけに、なか〳〵巧いものでした。

「まるで本人が出られたやうだ」

「いや、御貴殿こそその通り」

二人が賞め會つて、聲色が濟むと、見物へ向つて番附を撒きました。人氣の立つた芝居ですと、この番附を拾はうと揉み合

つて、怪我人が出たりしましてす。

○

木戸藝者の衣裳は、みんな立者から出たもんで。……着附を座頭が出せば、羽織は書出しから、帯は立女形から、と云つた具合でした。——芝居があくと、やつぱりその變つた着附で、お客の送り迎へなどしてましたから、相當に身入もあつたでせうが、我々同樣、いつもぴい〱風車の暮しでしたよ。

○

新富座時分に、先代の守田さんが、この木戸藝者の讀立をやつて見やうなんて仰しやいましたが、その當時はもう二人類を揃へることが出來ないんで、お止めになつたことがありました。

○

大阪で名人と云はれた、先代多見藏さんの息子さんの市川市藏さんが、初めて下つて來て、守田座で天竺德兵衛を出したことがありました。この時、花道の突當りで（俗に吉野といふ。花道の上にあるが故なり）見物してゐた。細川樣のお侍が二人、花道へ飛降りて舞台へ駈け上ると、その中のお一人が、「不孝者め」と云ひながら、いきなり市藏さんに斬付けたもんです。幸に市藏さんは、あづちがちよいと切れただけで、何んともありませんでしたが、こんなことは、後にも前にもねえことなんで、大そうな騒ぎになりました。何んでもそのお侍は醉つてなすつたさうですが、大道具の又公といふのが、ちつとばかり腕が出來るといふんで付板を持つて向つたために、頭を切られるし、留場の男は、本藏もどきに、後ろから抱き留めやうとしたために、横つ腹を切られて死にました。何んでも二日目か三日目あたりの出來事でしたよ。ですが、こんなことがあつたので、市藏さんの人氣は、大したものになりました。

○

この市藏といふお人は、上方の人らしくない、江戸ッ子氣のお人でして、江戸へ乘込んだ日に、柿色袷を着た儘、天ぷらの立食をしたといふ話が殘つてゐます。お上さんは淺草のすしやといふ人入屋の娘でしたが、市藏さんと別れてから、藝者に出ました。堀の小今と云つて、大そう賣れたもんですよ。

○

今戸のお宅で、强盜に殺されてお亡くになりになつた權之助さんは、太鬚さんといふ仇名があつたくらゐ、丁髷の太いお方でしたが、柔和な、山良之助のやうなお人でした。この方の御養子の、八代目の權之助さんは、常陸の龍ケ崎のお人で、芝の新堀に河原崎座が移つた時に、そこの座元になられました。

○

「河内山」の書おろしは、丁度この河原崎座の、二度目の狂言の時だつたと思ひます。夜嵐お絹の毒殺一件で入牢してゐた璃鶴さんが、佃から出て來て、市川權十郎の名で返り咲した芝居です。團十郎さんの河内山に、權十郎さんは櫻井新之丞で出てゐましてすが、池の端の場で、我が身の上のあてゼリフが、大そうな評判を取りましたよ。

「いやもう魚と水とてまじはつた、こなた衆はいふに及ばず、いづれも樣にもこの世では、もう會はれぬと思ひまして、死んだ心で三年あまり、長煩らひの大病も、いづれも樣のおかげやら、また河内山の丹精で、漸く病氣全快いたし、生き還つたら出世魚、今度はすつぱり荒磯に、洗ひかへたる上からは、相かはらさき市川と、身に餘つたる兩名を、一つにつけしは人豆に、花さく櫻井新之丞、いのちがあればこのやうに、皆さんのお顏を拜し、實に淚がこぼれるほど、こんな喜ばしいことは御座りませぬ」

○

書おろしの「河内山」には、入谷の寮といふものがありませんでしたから、三千歳にしろ、直侍にしろ、まるつきり役になつちやあゐませんでした。入谷の寮が出來たのは、たしか明治十四年だと思ひますが、新富座で、五代目の直侍と、半四郎さんの三千歳で、大當りを取つた時からです。あんまの丈賀は、梅五郎の名で私が勤めましてです。この狂言が濟んでから間もなく、私ア名題に昇つて、松助を名乘るやうになりました。

○

四代目菊五郎におなりなすつた梅幸さんは、大阪から實川延若さんを養子にお迎へなすつて、そのお人に梅幸を讓りましたが、ぢきに破談になりました。間違ひないために、あとの梅幸さんを、延若梅幸と呼んでましたよ。――梅幸さんがお亡くなりなすつた晩に、お上さんも死んで、一つ家から、同じ日に二つ葬式の出たのを覺えてゐます。

○

初代のしろかさんと、今の宗十郎のお祖父さんと訥升さんとが、狂言堂左交などといふお作者と一緒に、千葉の新宿へ遊びに行つたことがありました。藝者を連れてくほどのこともあるめえといふんで、先ふへ行つてから、瞽女坊を呼び上げてやらせましたが、この時、その瞽女の語つたのが「所は青山百人町よ、鈴木主水といふ侍は、女房子のある身でありながら……」といふ、あの鈴木主水だつたさうで……そこで訥升さんが、早速しろかさんと相談の上、左交さんに筆を執つて貰つたのが、「隅田川對高賀紋」ださうです。何んでも左交さんは、鏡山の狂言となでまぜにして、まとめ上げたとか聞きました。

○

上方では、昔から御家人といふものが見物に解りませんでしたから、鈴木主水は浪人になつてゐます。ですがどうも、あれは御家人でねえと、面白味が出ませんやうで。………

○

御家人には、まつたく芝居でやる通りの、凄いお人が隨分ありました。私共の若い時分、よく芝居へおいでになつた方で、本所の割下水にお宅のあつた、山田萬之進といふ人がありましたがね、何が職業だと云やア、朝から晩まで、博打をしてゐるのが商賣なんで。……お大名やお旗本の役割部屋を廻つては、勝負勝負で日を暮してるんですから堪りません。何んでも、劍術もよくお出來なすつたさうですが、博打の方にかけても、大さうな腕がおあんなすつたとかで、小粒を腹卷へ一杯入れては、「みんな、何んでも好きな物を買ひねえ」なんて、豪勢な奢りをして下すつたことがありましたよ。おまけに三十三四で、眼に險はありましたが、水の垂れるやうな男前でしたから、堀の藝者などにも、隨分持てたもんでした。唐傘張や、楊枝削りの内職をして貯めたわけぢやアなし、これがみんな、博打で儲ける金なんですから、よく切れたのも道理です。――このお人が御維新當時に、女の事から、向島で人を殺したといふ話を、よつぽど經つてから聞きましたが、相手のお侍は、袈裟がけといふ奴で、唯一刀にやられてたさうです。割下水のお宅には、土鍋一つなかつたんで。……その筈ですよ。家でおまんまを食べたことたんさア、一度だつてありやアしませんでしたらうからねえ、もし。

○

何が氣味が悪いと云つて、私共が若い時分に旅をして廻つた、あの時分の、田舎の芝居の樂屋風呂くらゐ、薄氣味の悪いものはありませんでしたよ。今時でも街道を遠く離れますと、隨分ひどい所があるやうですが、ひどいといつても、今と昔とでは、てんからわけが違ひます。電燈やランプはおろか、糸心一本ついてるんぢやありません。爪立つて這入つてくやうな、ぬら〳〵した流しの棚、一本燈心の螢火のやうなやつが、ぼんやり載せてあるばかりなんです。何しろお素人衆の這入る湯屋と違つて、脂や白粉だらけの役者達が、のべつに這入るんですから、それでなくつてさへ汚れますよ。この樂屋風呂が、大抵二人一緒にやア這入れねえ五右衛門風呂で、おまけに少し雨でも降らうもんなら、雨漏りはする、なめくじは落ちる、流しは滑るといふていたらくなんで。……唯でさへ、ぞつとすることがよくありました。

○

御維新前のことですから、左様さ、何んでも二十一二の時分でしたらう。上州の或る芝居での出來事ですが。……かぶってから、夜中の八つ頃でした。（その時は大分御難で、宿も取れずに、樂屋へ寝泊りしてゐましたが）ふいと晝間表（仕切場）へ預けておいた羽織が氣になりましたので、表へ行かうと思ひながら、奈落を脱けて來ますと、鶴千代君の衣裳をつけた儘の子役が、たつた一人、正面を切つて座つてるぢやアありませんか。その時は別に「千代萩」を出した譯でもねえんですから、びつくりしたのなんのつて、直ぐに取つて返して、夜具を被つて顫へてましたよ。

○

それといふのも、その朝口番から、こんな話を聞いてたからなんで。……同じ土地の或るお寺の坊さんが、旅稼ぎに來た子役に惚れて、その子役が、愈々江戸へ歸るといふ千秋樂の晩に、奈落で、鶴千代君をしてゐた子役を抱いた儘、無理心中をしたと申すので。……おまけにその坊さんは、男で通してゐましたが、實は女だつたといふ、飛んだ凄味が付いてましたんでね。――あの時ア、まつたく歯の根が合ひませんでしたよ。

○

唯今では、芝居が賣切れになると、大入といふものを出しますが、昔は賣切れても、唯頭取が、賣切れになりましたと、知らせて歩くだけでした。第一、賣切れるなんて事ァ、滅多にありゃァしませんでしたよ。その代り、四十日の芝居を、六十日打つことはありましたが、これだつて八分も這入りやァ大したもんなんで。……

○

總ざらひ（現今の舞臺稽古の意也）には、仕切場から蕎麥の切手が出ましてす。名題役者には五枚、相中あたりが二枚、子役が一枚といふ勘定でした。それにしても、蕎麥が一つ十六文の時分ですから、百円したところで、いくらのものでもありゃアしません。

○

もとは、何かと云ふと、すぐに蕎麥でした。下廻りでも、女なんかから音羽屋ァなんて聲が掛ると、「おい蕎麥を奢んな」に極つてゐました。こいつが、いい女にでも賞めて貰つたんですと、奢り榮えもしましたが、ひどい、平家蟹のやうな女なんかだつた日には、大抵搭胸を突いてしまひます。ところが、下廻りに聲を掛けてくれやうなんて女は、十人が十人、この平家蟹に極つてるんですから叶ひませんよ。よく、ぷん／＼怒りながら、蕎麥を奢つたことがありましたつけ。

○

大入袋が出なかつた代りに、景氣が續くと、當り振舞といふものがありました。これはどこでも三階でやりますが、最中の皮のやうな物で拵らへた盃の中へ、一杯に大入といふ字を書いたのを、正面の黑木へ澤山積み上げて、その前に太夫元が坐りますと、左右には、座頭から順に役者が列んで、お膳が出るといふ順序です。このお酌は、中通りと子役とが勤めました。

○

この當り振舞には、大入と書いた團子提灯を銘名にくれたものですが、これを持つて吉原へ繰込むといふのが、また一つの見得になつてゐました。團子提灯が、十も二十も女郎屋の二階へ揃ふと、どこそこの當り振舞が來てゐるといふんで、女郎屋でも、縁喜がいゝと云つて歡んだもんですよ。この時の遊びの金は、みんな太夫元や立者の懷中から出して貰ひましたが、最負のお客なんぞで、景氣付けに、引張つてつて下さるお人ちょ

くあつたもんです。

○

五月には、三階で曾我祭といふのをやりました。これは丁度今の稲荷祭のやうなものでしたが、かういふことは、みんな中通りの仕事になつてましてす。つまり體のいゝ花會で、中通りの役者なんて者は、「こんなことをしちやア錢を集めてゐたんで。……

○

清元の鳥羽繪に「いでや捕へてとゝくにへ」といふ文句がありますが、これは葺屋町に居た見世物の元締で、友九郎といふお人のことを云つたものだそうです。つまり、捕へて友九郎に賣らうといふので。……根が葺屋でして、羽二重上を考へついた人ですから、芝居道では恩人です。このお人が、五年のうちに三度火事を出しました。御承知の通り、昔は自火を出すと所拂になりますから。その度毎に直ぐに隣の町内へ越して行つて、丁度三度所を代えたと申します。何んでも四度目に、同じ町内から火事が出た時には、今度こそおれぢやアねえぞと云つて、町内中を振れ廻つたさうですが、五度目に近所から出た火事には、今までの罪ほろぼしだといふので、自分の家の物は、塵ッ端一つ出さずに、燒いてしまひました。昔は、こんな變つたお人が、よくあつたものですよ。

○

永喜の三津五郎さんのお弟子の、三津右衛門といふ方は、三枚目の名人と云はれた人でしたが、このお人が、或る時三津五郎さんの養子の簑助さんをつかまへて、「若旦那、お前さんくらゐ下手な人は、芝居中にありますまい。ちつと大阪へでも行つて修行して來たら何うです。あなたが一ばしの役者になれたら私ア首を上げますぜ」と毒突きました。こいつが胸に堪えたんでせう。簑助さんは、三津五郎さんが亡くなると、直ぐに上方へ修行に行つて、すつかり藝を仕上げて歸る早々、四代目の三津五郎を續ぎました。この時三津五郎さんは、三津右衛門さんに對つて、「お前おれが役者になれたら、首をくれると云つたが、覺えてゐるか」と云つたさうですが、三津右衛門さんは「覺えてゐねえで何うするもんですか。けふから立派に、役者稼業を首になります」と云ふと、その儘役者をよして、一生を居酒屋の亭主で送つてしまひました。

○

はじめ黑天鵞絨だつた伴内の着附を、三代目菊五郎さんの勘平の時に、やまと柿染の着附に改めてしまつたのは、この三津右衛門さんだと申します。

○

お旗本のご次男で、阿部長八郎といふお人がありました。劍術は使へるし、清元は巧いし、それに第一背が高くつて、素晴らしくいい男振りでした。このお人が道樂の擧句、五代目のおくり（用心棒を兼ねた男衆）になりましたが、何しろ男前が立派なので、みんなびつくりしましたよ。それにしても、阿部長八郎ぢや呼名が大業過ぎるつてんで、唯の長八といふことになつたんですが、どうも私共とは身分が違ふだけに、初めのうちは、取ッ付きにくくつて困りました。この人は後に眼が惡くなつたのが因で、間もなく亡くなりましてす。

○

小金井の小次郎といふ親分が、八丈島から歸つて來ると間もなく、小金井で芝居を興行したことがありました。左樣、その時分五十ぐらゐでしたらうかね。丈の大きい、少し間伸びのしたやうな顏付で、どつから見ても、關東一の俠客だとは思へませんでしたよ。島から連れて來たといふお上さんも見ましたが、この人も大きな女で、まつすぐに坐つて、髮の毛が疊の上へ一尺も引摺つてゐました。

○

幾歳の時でしたかね。私が横濱の芝居をしまつて、歸りに川崎の宿屋の二階で休んでゐますと、おもてを新門の頭が通るといふんで大騷ぎでした。たぶん慶喜樣が、京都へおいでなすつた時でしたらう。――私も直ぐに、二階から降りてつて見ましたが、新門の頭は、襟に新門、背中に丸に作の字を染めた絆纏を着て、大小を差してゐました。その後ろに、ざつと二百人からの仕事師が、旅裝束で附いてゐましたが、これをみんな連れて、京都へ上つたんだから、豪儀な威勢でしたよ。ところがおかしい事にや、その仕事師といふのが、實は半分から僞物なんで、……ひよいと見ると、松井源水の獨樂廻しの中僧だの、凧繪を書く芳信なんて男だのが、みんないなせな裝をして、その連中に這入つてるんですから、びつくりしましたよ。あとで聞いた話ですが、初めて京都へ行くんだといふんで、男振りの

いい、江戸ッ子らしいのばかりを集めたんださうです……ですから、ちつたア僞物がゐても、構はなかつたのかも知れません。

○

その時分、新門の住居といふのは、左様、今の花屋敷あたりの所でしたかね。何んでも崖ッ淵の上に建つてゐました。御存じでせうが、その當時奥山には、雷門と二天門の二つしかなかつたのを、田圃へ出るのに不便だといふんで、新門は、自分の家の裏へ、門を一つ拵らへたんで。……辰五郎の家へ、新らしい門が出來た。あすこは新門だ。これが始まりで、誰いふとなく、新門と呼ぶやうになつたのだと申します。

○

これも淺草のお話ですが、堀田原に、加納屋の安五郎さんといふ香具師の親方がおいででした。方々の緣日などへ出て、弘法様のお灸を賣つたりして、弘法安で通つてゐました。なかなかの顔役で、芝居へもよく遊びに來ては、立者に、小父さん小父さんと呼ばれてゐたんです。下廻りが、女のことなんぞでしくじると、幾日でも自分とこへ居候をさせといて、親方へ詫びてやるのを、樂しみにしてゐました。隨分赦せないことでも、加納屋さんが口を聽いたとなれば、まづ十が十詫が叶つたもんです。

○

よく赤羽の水天宮様や、虎の門の琴平様の緣日などへ行くと、この加納屋さんが、今、旅から着いたばかりだといふやうに、行李や弘法様の行衣を傍へ置いた儘、すつかり田舎言葉を使つて、お灸と藥を賣つてゐました。それアもう、どう見たつて、山から來た行者の通りでしたよ。芝居へ始終行つてますから、顔馴染の子役なんかが通ると、直ぐに呼び留めて、「さてお立會、この子は猿若町の子役ぢやが、ひどい病身で弱り切つてゐたのを、私の藥を飲んだばかりに、斯様な丈夫になりました。何んとあらたかなものではありませんか」などとやります。お客はこれに釣られて、買ふ氣になるんですが、さて緣日が濟んでしまふと、翌る日は意氣な親方に早變りして、子分の二三人と、芝居へ來たりしました。「お前きのふは御苦勞だつたな」さう云つて、昨日の子役に、天保一枚ぐらゐやつてゐました。

○

先代三津五郎さんのお葬式は、九月の初めでしたから暑い盛りでしたが、猿若町から芝の月界院まで、みんな裃姿で歩きました。丁度銀座の道幅を擴げてゐた時で、道の兩側へ、一生懸命で煉瓦を敷いてる最中でしたよ。

○

お葬式で思ひ出したが、先代のしうかさんのお葬式には、葬ひが濟むと、女が寄つてたかつて、輿を壞して持つて行つてしまひました。何んでも墓場へも、樒や箒を手當り放第に投り込んだんで、穴堀りが大さう儲けたさうです。――今ぢや御贔屓の方も悧巧になつたんでせうが、こんな人氣は、見たくも見られますまい。

○

もとは繪を描くお方には、隨分風變りなお人がありました。藥屋へよく遊びにおいでなすつた、國周さんなんて方は、見るから貧相で、私共同樣、いつも貧乏を通してましたが、それでも一向苦にするやうなことはなく、ちつとでもどこかから畫料が這入れば直ぐに大盡のやうな氣になつて、遊んでしまひました。その代り、いざ仕事に掛ると、誰が訪ねて行つても、口も聞かないくらゐ一生懸命な方でした。

○

風變りと云へば私の若い時分に、團十郎婆さんといふ渾名を取つたお婆さんがゐましたが、贔屓のお客の多いなかでも、こんな風變りなお婆さんは、ちよいとありませんでしたよ。何んでも八丁堀の組頭のお上さんだとかで、大の團十郎さん贔屓でしたが、八代目さんが上方で亡くなられてから、權十郎さんを九代目にしたいと云つて、これがまた大騷ぎでした。繪師の芳幾さんに賴んで、自分と權十郎さんの二人立を描いて貰ひましてね。それに春文さんが、何か句を書いて、方々の權十郎さん贔屓に配りましてす。――面白いのは、このお婆さん、描いて貰つた繪は大さう氣に入つたんですが、禮をしたいにも錢がないといふので、芳幾さんには、自分の着てゐた藍辨慶の絆纏を一枚、春文さんには、着物を一枚贈つたもんです。文久時分のことでしたが、芝居道ぢやア大評判でしたよ。

やつぱりこの時分あつたお話ですが、江戸の湯屋には、それまで何處にも「褌桶」といふ物が、一つづつ置いてありました。これは尾籠のお話ですが、お職人などの獨り者が、湯へ來たついでに、この流しで、褌を洗濯して行かうといふんで。……ところが本鄕の或る湯屋で、午時分町火消が、この桶へ自分の褌を漬けた儘、湯槽の中につかつて、いい心持に小唄かなんか唄つてゐたもんです。ところへ這入つて來たのは、加賀樣お抱えのおでこでしたが、自分も褌を洗はうと思つて飛込んで來たんですから、前のが漬けてあるのを構はず流しへあけて、さつさと自分のを洗ひ始めたんで。……これが兩方共、氣の早い火消ですから堪りません。二言三言言會ひをしてゐるうちに、喧嘩になつて、間もなく兩方へ加勢が出來るといふ騷ぎ。しまひにはこれがもとで、加賀鳶と町火消との間に、大騷動が持上りました。――江戸の湯屋に「褌桶」が亡くなつたのは、この喧嘩があつてから直ぐでしたよ。

○

市村座の芝居茶屋に三田屋といふのがありましたが、ここの女中のお初といふのが、芝居町にゐた岡田さんといふお醫者さんに可愛がられてゐました。ところがこの岡田さんが、實は女房上總を股にかけた大泥棒だつたので、……丸めた頭に百日鬘を冠つて、だんびらを引拔いて廻つてゐたと判つた時にやア、芝居中が仰天しましたよ。――岡田さんは、時々田舍へ行くと云つて家を明けたさうですが、歸つて來ると、大さうな贅澤をして、金を湯水のやうに遣つたんで。……お手先の方でも、町醫者があんな贅澤をするといふなア、どうも怪しいといふんで、直ぐに手を廻してお調べになりました。三田屋でも一同が自身番で調べられた上、「岡田といふ醫者がお前の家へ來たら、直ぐに知らせてくれ」と云ふ、嚴しいお達しを受けました。――これが丁度花時分のことでしたが、夏場過ぎる時分になつた或る日のこと、岡田さんは、野袴に草鞋がけといふいでたちで、三田屋に現れたもんです。お達しを受けてゐますから。三田屋ぢあア一同びつくりしましたが、何しろ永いお華客のことですから、自身番へ知らせるなんて阿漕なことは、出來やしません。あわててお初が大略を話して、裏口から落しました。――ですが仕方のねえもんで、やつぱりその秋に、どこか高輪の方で、お町方の手で御用になつたさうです。

○

私がまだ歌舞伎座に出てゐた時分の事ですが、京橋の或る足

袋屋の中僧さんで、大そう私を贔屓にして下さるお人がありました。これは何でも、あすこの立見で、私の蜂久太を御覽なすつてから、急に好きにおなりになすつたんださうですが、あんまり御贔屓が過ぎて、飛んだことになりましたんで。——と申しますのは、或る晩のこと、私が芝居から歸つて床に入りますと、妻の戸をこぢ開けて入つて來る人があるんです。私は人様に恨みを受けるやうな覺えはありませんから、これはてつきり押込みだと思ひまして、早速家の者を、築地警察へやつといて、二階から物干へ逃げてしまひました。——ところが、あとで判つた話ですが、このお人が足袋屋の中僧さんなんで、どうかして私に會つて見たいといふんで、毎日芝居の往き歸りを、待合せておいでなすつたさうですが、折悪しく會へないところから、その晩、私の歸りを待つて、とうとう家へ、這入つて來ておしまひなすつたんださうです。それでも何んでも、お巡査さんは、役儀のおもてとあつて、そのお人を、警察へしよッ引いてつてしまひました。ですが、聞いて見れば勿體ねえくらゐなもんで、その儘にしといちや冥利が盡きますから、夜中でしたが、直ぐに後から出掛けてつて、貰ひ下げをして來ましてす。いや、御贔屓といふもなア有難えもんだと、その時ばかりは、知らず識らずに涙がこぼれましたよ。（完）

完ニ附記。——松助翁の談話は未だ縷々として盡くるところを知らずと雖も、餘り長日月に亙りて貴重なる誌面を占領なすは、他の筆者に對しても鳥滸の沙汰なると同時に、讀者諸彦の漸く倦怠されんも測られず。汐は引き時、花火は消え際の譬へもあれば、まづこの邊にて筆を洗ふこととは爲せり。他日殘餘の藝談と共に一本を成す時あらば、あらためて愛讀をたまへと云爾。（五月六日）

太郎とB・V・D

——もだんでかめろん其三——

谷譲次

1

なんとか何太郎といふんだらうが、この「太郎」がめりけん人にかゝると、Taro と鼻を拔けて「テヤロ」としか聞えない。しかし、テヤロではあんまり可哀さうだといふので、必要な程度の尊敬をこめて「テロ」と呼ぶことにしてゐた一人の「太郎」があつた。

すでに「太郎」である以上、その品物(スペシメン)は日本人を父母とする長男でなければならないとは誰しも一應は疑ふところで、單にその疑念を一掃するために、この「太郎」も日本人であつた。長男か何うかそんなことはテロ自身も知らなかつたらうし、よしんば訊いてみたところで、彼はその、糸のやうに器用に吐き出す唾と一しよに、

『What you care! I don't give it a damn.』とでも答へたことであらう。

これほど、この國——亞米利加にゐる日本人はあめりかのことをこの國といつてる——に古いがために、すつかり日本人らしくなくなつてゐる日本人テロであつた。いや、亞米利加に長くゐるがために、かへつて大いに日本人々々々してゐたと言つたはうがいゝかも知れないが、そんなことは何方でも差閊へない。この話をおしまひまで讀めば自然に判ることの一つだから——。

世界の熔鑛爐、弗のお城下、自由の——お金がなければ不自由の——都市、摩天樓の呑吐する仕事(ビジネス)の陽炎でマンハッタンの

空が濛濛と掻き曇り、鐵筋コンクリートにJAZZの感情が通つて、建物の中腹に夕月がぶらさがり、女の頬の描黒子に細卷きのベンスン・ヘッヂス——金で略字を入れたりして女が吸ふ煙草——のけむりが棚引いて、肉色の靴下を穿いた脚を無數の視線が追つかけると、Bウエイに灯がはいつてブルヅクリンの空で汽笛が轉がる。とにかく、紐育だ。

屋根瓦製造株式會社の勸誘販賣人が、プリンス・オヴ・ノウホヤアのやうにめかし込んで、それが、大監督に「發見」されて世界の公衆に「呈供」されたばかりの花形映畫女優みたいに着飾つた——と言ふと莫迦に澤山着物を着てゐるやうに聞こえるが、事實は正反對で、出來るだけ薄いものを出來るだけすくなく纏つて——鼎の頭と靴の踵を高くしたgalすなはち裏街四つ角ワインシュタイン爺いの經營にかゝる安料理屋(ハッシュ・ジョイント)の女給、その名はギヴミイ・ルムシング孃と手に手をとつて、「何かしら着てゐる裸か踊り」の劇場をさして、こつこつ、こつこつこつこつ、歩道に足並みを揃へれば、あとから、絨毯工場の計算係が第三街の下宿の娘を守護して、これがともに禮裝で、二杯のチョコレイト・パアッフエのためにそこのファウンテンの扉を押す。カフス扣鈕會社の社長は女秘書と自動車を驅つて「路傍の家」へ急ぎ、銀行家は運轉手を芝居の裏口へやつて女優を掴まへさせ、その銀行の給仕は十仙百貨店(テンセンツ・ストア)の賣子と腕を組んで巨彈連發超特作を見るべく切符賣口の前に何時間も立つくさうといふ、何はさておき、生産の餘剰を持てあまして、生存競爭どころか凄まじい享樂競爭に火花を散らしてゐる、も一度、とにかく紐育だ。

一たい亞米利加は女よりも男のはうが遙かに頭數が多いが、ことに紐育ではその差が甚だしい。また、これを概念的に、都會の大きさと其の都會に居住する男子の青壯年獨身者の數とは級數的に比例するものだといふことは、あへて統計を俟たなくても考へ得られるものだから、此の紐育の街に、あらゆる國籍と人種を通じて、じつに夥しい獨身者の大軍がうようよしてゐると言つても、それはたゞ人間が多勢集つてゐるから、從つて獨身の人も多くゐるわけだなどといふ自明の理以外に、そこに何かしら經濟的若しくは社會的理由の潜在を暗示するものがなければならない。が、この特別の理由も、紐育といふ一個の社會生活を、登り詰めた資本主義制度の峠に咲き亂れてゐる花として——美化するのではない、修辭上象徴すれば、すぐにわかる。花は中央に一本の雌蘂があつて、數多の雄蘂がぐるりを取り卷いてゐる。自然はわりに親切で、色んな機會に人間に教へやうとしてゐるものだ。つまり紐育は、今日の資本主義社會生活の

組織がもたらした花であつて、男の數よりも女の數がお話にならない程酷いのも先づ仕方がないといふことになる。

近代資本主義は一番强く都會を打つて、都會人の生活を機械化しつゝゐる。さうして最も自然に、個人の小さな意企や便宜なぞは無視され易い。で、都會に獨身者の多いことは經濟的に觀察しても立派に說明のつくことだが、それが自ら選んだ獨身者であらうと、運命によるものであらうと、紐育にはことに獨身の男が多いのだ。獨身者の數で近代都市の大きな深さが代表的に測定出來るとすれば、もう一度そして最後に、とにかく紐育である。

亞米利加でこんなことを言ふ。

桑港は支那人町、羅府は日本人町、ミネアポリスは獨逸人町。市俄古は「?」の町――牛と豚の町――、デトロイトは佛蘭西人の町――その名が既に佛蘭西語から來てゐて、この市の開拓者はキャデラック將軍といふ佛蘭西人で、いまだにそこのジエフアスン街の河岸に、加奈陀から渡來した將軍が土人(インデアン)と一戰に及んで難なく上陸したといふ地點に松の木が生えてゐる―――、ボストンが英吉利人の町で、紐育は猶太人の町。

それほど猶太人が多いといふことも、やがては、善良な市民性に對する小さな反逆者であるところの獨身無責任階級を生ずるに到つた最大の所以かも知れないが、わが太郎は、前にも明言したとほりれつきとした日本人で、そして――これも序でに明言したいのだが――運命による獨身者であつた。言ひ換へれば、すべての女が「ヘロウ!テロ!」と微笑して、かれの頭を撫でて通り過ぎて行つた。たゞそれだけだつた。そこでテロは、淋しいたましひの寄合世帶の紐育においても、一ばん淋しい、一番間違つて取り扱はれて來たたましひの一つになつてゐた。何う間違つて取扱はれて來たかといへば、これも、この話をおしまひまで讀めば判ることの一つであらう。

まづ第一に、テロは日本人にしても、背の低い組だつた。そもそもの間違ひは、こゝに其の端を發してゐると言はれなければならない。

テロは中西部の商業大學(ビジネスカレヂ)を卒業して、下町の白人の建築事務所に雇はれてゐたのだ。これはいゝ。

だから紐育中の職業婦人が執務時間に鏡を見ない日はあつても、テロが事務所で自分の身長よりも高い椅子に這ひ上らない日はなかつた。これは大いにいゝ。

で、毎朝八時に、テロは上町の横町から第五街へ出て、その角で二階付乘合自働車をつかまへて、一本路の第五街を眞直ぐに下町へ下ることにしてゐた。これもいゝ。

が、さう何かもいゝんぢや話にならない。こゝに一ついゝと言へばいゝ、悪いといへば大層よくない問題が起つたのである。

はなしは、この問題から始まる。

問題は心臓の問題であつた。と言つても心臓病ではない。テロは、ほかの部分は何うでも、心臓だけはことのほか丈夫だつた。ぢやあ問題にならないぢやないかと言ふかも知れないが、心臓といつたのは、實はその三角形のハアトのことで――戀なのだ、早く言へば。

テロは戀に落ちたのだつた。から來なくつちやあうそだ。

――で、くどいやうだが、テロは戀に落ちた。

2

珈琲とハモネグス――鹽豚と雞卵（ハム・エンド・エグス）――の朝飯の味覺を舌の上にころがしながら、テロは高い精神（ハイ・スピリツト）でカアテス夫人の下宿を出ると、石と鐵の立體角度だけを吹いて通る無色透明の風のなかを、出勤の人の行列に加はつて、第五街の辻まで行つて立ち停まる。さうすると、左手の通りの上（かみ）から、綠色の小丘が動き出したやうな二階つきの市街乘合自動車が來るのだが、毎朝網戸を排して前外廊（フロント・ポウチ）へ踏み出す時間がきまつてゐるし、カアテス夫人の家から第五街までの步數もテロにとつては一定してゐるから、彼が其處へ現はれた時は、すなはち二階つき市街乘合自動車が一つむかうの角を搖ぎ出して來るところで、この二つの現象は毎朝必ず時間的に結びついて、その間毫も差異を來すことはなかつた。

勤人が仕事の能率よりも時間それ自身に縛られることは日本もあめりかも同じで、特にテロのやうに運命による獨身者の場合においては、ほかに生活がないのだから、嫌でも應でも規則正しくなる。その結果として、テロは、午前七時四十八分に步道へ降り立つて、二百三步で第五街の角へ行きついて、七時五十二分にそこを通過するバスをつかまへることに、これも運命によつてされてゐた。

第五街もかう上町（アプ・タオン）だと兩側に並んでゐるのは400と其の隨喜者の邸宅だけで、亞米利加にだつて歷史はあるぞと言ひたげに、人巧によつて古びた煉瓦建ての同じやうな棟々が、何處までもどこまでも續いてゐた。朝の七時や八時は氷配達夫と牛乳屋が通り過ぎたばかりで、このブルジョワの町にはまだ眠つてゐる家のはうが多かつた。ゆうべ社交引見（レセプション）でもあつたのだらう。大玄關から往來まで棒縞の日除（オウニング）が張り渡されて、そいつが夜露に濡れてはためいてゐる家もあつた。或る邸の前には大型な自動

車が二臺も三臺も停まつて、泊りがけの客が歸らうとしてゐることを語つてゐた。自動車と通行人のほか——通行人のはうは大眼に見られて——通ることを許されない此の純粋の散歩街には、夜と晝のけじめのはつきりしない空氣が淀んで、何時でも雨のあとのやうにじいんとしてゐた。朝つぱらから舞踏のレコードが聞こえて來たりして、夜のつゞきの惡ふざけの會を思はせることもあつた。

こゝでテロはバスを待つて上手(かみて)を見る。

すると、毎朝同じバスが、ちよつと停まつた車道わきの小溝から車輪を拔いて、いま一つ向うの四角を離れてくるところなのだ。かあき色の制服を着た驚鼻の車掌が、車の動搖でよろめきながら二階で乘車賃を集めてゐる。芝居の觀客のやうにみんな同じにこつちを向いて座つてゐる人々が、一せいに左右に小さく肩を振つてゐるのが、小人形(マリオネット)をお盆へ載せてゆすぶつてるやうだが、テロの眼は、この時早くも、その野分の草みたいなバスの二階の客のあひだに、黑ずんだ燕脂色の帽子を求めて、そしてそれを、遠くから發見して安心するのが常だつた。

黑つぽい燕脂色の帽子——その帽子の下に彼女がゐる。

テロはぼうつとなつて、近づくバスの二階を凝視めてゐると、間もなくテロの眼界が鈍いろになつて、頭とすれすれにバスが停車する。頭の上で車掌の鈴がする。

「あならん——！」

百二十丁目ならワン・ハンドレッド・トウエンテイスの筈なのがアナラン・トウエネスとしか聞こえないし、百八十丁目はアナラン・エイリイスとしか響かない。けだしあならんがワン・ハンドレッドなのであらう。

このアナランにはつとして、テロは其短い脚を上手に使つてバスの二階へ昇るのだが、これは出勤バスとでもいふべく、降つても照つても毎朝乘る人がきまつてゐるので、めいめいの座席も自然と一定してゐた。そこで、テロの定席といふのが左側の中程で、その黑つぽい燕脂色の帽子の女の恰度すぐうしろに當つてゐたのである。

文字通り十年一日の如くテロは下町の建築事務所へ通つてゐた。が、その女は何時からともなく朝のバスに出現して、必ず黑ずんだ燕脂色の帽子をかぶつて、テロの前に据わり出したのだ。はつきりした記憶はないが、何でも朝のバスで女と顏が合ふやうになつてから、これで一年位ゐ經つたやうにテロは思つてゐる。

テロが乘り込む時は、女は既に儼然と前面を見つめてすわつてゐるし、テロが下りても女はまだ乘つて行くので昇降の際、

下の歩道からちらと見あげるほか、テロはかつて女の顔を正面から見たことはなかつたが、その代り、バスの二階に揺られてゐるあひだぢう、あらゆる機會に背後と左右から視線を送るので、女の耳朶の赤いことも、その先に黒曜石の耳輪がちらちらしてゐることも、頬にすこしそばかすがあることも、下口唇が些さか前へ突き出てゐることも、帽子と服がしぢう黒つぽい燕脂色であることも、首のうしろに生毛のやうなものがうつすらと生えてゐることも、絶えず俯向き加減に前方を白眼んでゐることも、そして、何よりも、女が非凡なほどきりりとした顔立ちをしてゐることを、テロは疾うの昔に承知してゐた。

不必要に浪漫的なわけではないが、「一眼惚れ（ラブ・アト・ファウスト・サイト）」といふやつで、可哀さうなテロは、女がはじめてこのバスの二階に上つて來て彼のまへの空席に腰を下ろした瞬間から、黒つぽい燕脂色の帽子と、そのかげのそばかすとに完全に魅縛されることになつたのである。

物語これより佳境に入る。

同車の女に思ひを寄せるなどといふと、テロが如何にも不良――こゝは亞米利加だから日本人テロはさしづめ不良外人である――のやうに聞こえるが、これはテロのために一言辯じておかなければならない。成程、テロはその女を戀した。その女のために初めて生甲斐のある世の中を發見したやうな氣がして、その女のためになら何時でも死ねると思ふほど、テロはその女を戀した。しかし、その女は常はその女で、テロ自身その女をこの女にしようなどといふ大それた――と少くともテロは感じた――野望を起したことはなかつた。この際、テロがすこしでも能動的であるべく、彼はあまりに多くの苦い經驗を持ち過ぎてゐたのだ。女の尠い亞米利加で女と名のつく代物を獵るためには、幾多の白人の男を競爭者に廻さなければならなかつたし、それでも、何うかすると、東洋人であるが故に相手にされない場合が多かつた。この點は、いはゆる歸朝者の懺悔話と大分違ふかも知れないが、いくら違つてもこのはうが事實に近いんだから致方ない。が、相手にされないと言つたところで、それは單に人種の相異から來てゐることで、何も東洋人が西洋人に劣つてゐる證據にはならない。むこうが相手にしないと同じ程度に、こつちも相手にしないんだから、言はゞお互ひさまだ。

――といふふうに諦めてしまへば好かつたので、それが出來ないところにわがテロの悩みがあつた。で、テロはその何處の何者とも知れない女を戀し、敬ひ、かげながら守護し、さうして彼女との同棲をさへひそかに空想した――おゝ、そこには何と

美しい芝生を持つたバンガロウがあり、なんと樂しい湯沸しの小唄があつたことよ——といふ次第だつた。が、朝のバスには、相變らずテロの眼の前に、黑つぽい臙脂色の帽子——その臙脂色が段々褪せて往くのがテロにはこの上なく悲しかつたが——が眞直、まへを見てゐて、黑耀石の耳輪がふるへて、そばかすに春の陽が照つたり秋風が吹いたり、生毛に埃りがくつついてゐたりするばかりで、女はテロに只一筋の視線をも與へたことはなかつたし、テロも、默つて据わつてゐるほか、何一つ女の注意を惹くやうなことをしようとはしなかつた。單に、人一倍お洒落だつたテロが、一そうおしやれになつたくらゐが進展といへば進展だつた。

テロと女とのまはりに、灰色の大きな紐育が生きてゐた。

3

女の職はかうもあらうかと思はれる程の容さに客は透み切つてゐたが、地上には小さな旋風が煙草の吸殼、夕刊のきれ端なぞを卷き上げたり、まき落としたりしてゐる朝だつた。遙か下町に仕事(ビジネス)の音がし始めて、長いながいペンとインキと帳簿の日がテロのまへに橫たはつてゐた。が、女に——といふよりも女の背ろ姿に會ふことを唯一の樂しみにして、この朝もテロのこころは輕かつた。

しかし、いつものやうに調子を取つてバスの二階へ駈け上つたテロを、女と一しよに失望が待つてゐた。その失望は、テロの頭の中ですぐに嫉妬に早變りした。女に今朝はじめて同伴があつたのである。若い、身綺麗な男——勿論女とおなじ亞米利加人の——が、馴れ馴れしさうに肩を並べて、何かしきりに話しかけて居た。よほど親しい間柄とみえて、女が嬉しさうに笑つてゐる横顏が見えた。

氣の毒なテロは、顏色を紫いろにしてうろたへた。惡いところへ來たと思つた。見てはならないものを見たやうな氣がした。で、咄嗟にほかの席を探して見たが、毎朝の乘客が決まつてゐるので、彼の何時もの座席以外に、空いてゐる椅子は一つもなかつた。仕方がないから、テロは非常な勇氣をもつて、その、女の直ぐうしろの自分の席についた。

聞くまいとしても前の話聲が聞こえてくる。

『エドナ、』男が言つてゐた。『お前、顏色が惡いよ。何處か氣分がわるいんぢやないかい。』

『いゝえ何でもないわ。』

『さうかい。なら、いゝけど、なんなら今日は休んだら何うだい。』

『あら、何うして?』
『何うしてつて、氣分が惡いやうだからさ。』
『だつて、あたし、何ともないつて言つてるぢやありませんか。ほんとに何でもないのよ。』
『無理しちやいけないぜ、無理をしちやあ。』
『えゝ。』
『ねえ、エドナ。』
『なあに?』
『お前、どう思ふ?』
『何よ。』
『何つて例のことさ。』
『さうね。』
『ねえ、エドナ、どう思ふ!』
『あたしはいゝと思ふわ。』
といふやうな二人だけの世界の消息が、テロの耳へ飛び込んでくる。テロはひとりで赧くなつた。

自分のほかに女の健康なぞを心配したり、女の意見を尊重したりする男のあるといふことがテロには既にちよつと信じられなかつた。と同時に、よく考へてみると、女にとつて自分は何でもない――テロは太陽が光りをおさめたやうに感じて、はゝあ、これが失戀だなと思つた。

女の名がエドナであることだけはテロにも判つた。それで、この智識をせめてもの收穫にして、テロは次ぎの四つ角で、樂しさうに談笑してゐる二人を殘して、よろよろしながらバスを降りたのだつた。

下りてみると、自分が何のために生きてゐるのかさへ、テロにはわからなくなつた。で、下町の建築事務所の仕事なぞは地獄へ行けと心のなかでたんかを切つて、カアテス夫人の下宿へ歸つて寢台へ潜り込んでしまつた。出て行つたテロが直ぐ引つ返して來て、何も言はずに寢たので、必要以上に親切なカアテス夫人が心配して二階の寢室へ上つて來て、いろんなことを言つたけれども、テロに吸鳴られて驚いて降りて行つた。

何日かの陰暗な生活が、テロの身邊と心中につゞいた。閉め切つてブラインドを下ろしてゐたからテロの部屋には夜も晝もなかつたし、その闇黑が頭蓋骨を通して、テロの腦髓にも染みこんでゐた。カアテス夫人も觀念して、三度の食事を運んでくるほか、もう上つて來ようとはしなかつた。だから、テロは思ふ存分失戀の甘辛さを享樂することが出來たわけである。POOH!

下町の建築事務所からは[illegible]のやうに[illegible]されかゝつて、[illegible]

を明白にするやうにと促して來たが、そんな狀態が五日も續いたら、何のために悲んでゐたのかテロじしん判然しなくなつて、やはり自分は下町の建築事務所へ出て行くのが至當のやうに思へて來た。

で、五日目の朝、テロは始めて窓のブラインドを上げて、窓を開いて、日光と空氣に突入を許可した。そして、その光線の中で、久しぶりに鏡を見た。

時の古今、洋の東西を問はず、失戀は人をうす汚なくする。いまのテロが恰度それだつた。

髮がくしやくしやになつて、髯がぼうぼう伸びて、顏ぢう垢だらけになつて、小さな薄黑いテロが出來上つてゐた。テロはつくづく情なくなつて、眼に痛いやうな紺碧の空に恐れを抱いて、おなかが空いたやうな、病後の人のやうなはかない虛脫を勞りながら、その朝、出勤の身仕度にとりかゝつた。

意地の惡い運命が、もう一度テロを弄び出したのは、何を隱さう、この朝——多くの朝のなかで——からのことである。

話の筋が、こゝで暫らく洗濯のこと——唐突にも——へ移つて行く。これがテロの人生に重大な位置を主張してゐるのだから、この際どうも仕ようがない。

裏町を步いてゐると、いやに繁つた街路樹の葉かげに、うすよごれた二階づくりの煉瓦のしもた家が並んで、その一軒は必ずPRESS WHILE U WAIT なんかといふ看板を揭げたアルメニア人の洋服屋で、その地下室がまた奇妙に支那人の洗濯屋といふことにきまつてゐる。リイ・ウオング洗濯店、チング・リング・ロンドリイ——手で洗ひます——などといふ字が大きく出てゐて、炬燵でおむつを乾すやうな、今川燒のやうな溫つぽい臭氣を、店の天井と同じ高さの往來の石疊の上へ漂はせてゐる。たいがい肥つたあばた面のリイ・ウオンやチン・リンが控へてゐて、洗濯物を持つて行くと、ぷうんとして、

『おうらい、』

と丸めて、うしろの籠へ抛りこんで、『ユウ・ゲッテイ・ユア・ウオシ・ウオシ・フライデイ——サアベ？』

なんて旭（ピジャン）をやつて濟ましてゐる。これぞ全世界に有名な支那人の洗濯事業である。

亞米利加の社會の受持（ファンクション）は大概人種か國籍によつてきまつてゐる。

すなはち、英吉利人の執事（バトラア）、蘇國人の酒番（バアテンダア）、愛蘭土人の警官、獨逸人の肉屋、スカンヂネヴイア女の女中、佛蘭西人の料理人、黑人の小使（ポウタア）、ジプシイの占ひとこそ泥、猶太人の古着古物と俳優——但しこの兩者間に何らの關係なし——、伊太利人の八百

屋、希臘人の料理店、露西亞人の皿洗ひ、アルメニア人の洋服屋、支那人の洗濯屋、さうして日本人の書生(スクウル・ボウイ)――これは家庭内の雜用を足しながら學校へ通はせて貰ふんだから、まづ日本人が一番小利口(スマアト)だといふことになる。

で、支那人の洗濯屋だが、支那人は何ういふものか、洗濯物へ依賴者の頭字をつけて覺えにすることをしないで、圓だの三角だの四角だの其の他雜多な眼じるしを、それも墨黑々となすりつけるので、二三軒違つた支那洗濯屋へ出すと、襯衣の襟のあたりに不可思議な象形の羅列が出來上つて、國事探偵の暗合文みたいになつてしまふ。なもんだから、暗合の嫌ひな人は支那洗濯と聞いたばかりでことごとく怖毛をふるつてゐる。この點リイ・チン氏に忠告してやりたい

加ふるに家庭の洗濯は洗濯婆さんの手から電氣機械へ移り、それがまた多くはそとの洗濯會社へ出るやうになつて、都會に、大資本を擁する洗濯會社が續々成立したので、このところ支那人の洗濯業はあまり振はない。

完全洗濯會社(パアフエクシヨン・ロンドリイ)といふのが、下町の建築事務所のさきにあつて、テロの洗濯物を月曜日に持つて行つて、金曜日には綺麗に仕上げて屆けてゐた。

人生は約束によつて運轉する。

失戀の境を拔けて、テロがいよいよ出勤を決心したのが、その洗濯物の屆いて來る金曜日のことだつた。こゝに洗濯物を通して、テロと完全洗濯會社とのあひだに、奇しき緣がつながることゝはなつたのである。

洗濯物はBVD――袖なしの肌着(アンダウエア)――だつた。

4

洗濯に關してこんな話がある。

Soap-boxing――石鹼の空箱の上に立つて演說するところから來た言葉で、社會主義者なぞの街上宣傳を意味する。もつとも今ではフオウドなんかを停めて、その上から怒鳴ることにしてゐるが、やつぱり石鹼箱(ソウプ・ボックス)と呼んでゐる――なんかの時に、左傾の人がよく使用する挿話である。

ある男があつて、こいつが怠け者で始終ぶらぶらして、細君が他人のすゝぎ洗濯なぞをしてとるお金で、辛うじて生計を立てゝゐた。ところが、考へてみるとあんまり非道いといふので、細君が訴狀を陳述して、裁判所へ離婚訴訟を提起した。その言分を聞いてみると、重々尤もである。夫は働く能力と機會があるにもかゝはらず何もしないで、妻をして自分を養はしめてゐたのだから、細君の願ひの趣きは直ちに聞き屆けられて、

裁判長が二人のあひだの赤繩をぷつりと斷ち切つて與れた。で、すつかり離婚の手續きを經つて、細君のはうはそれで濟んだが、夫は、ながらく婦人に苦痛を與へて、その勞力を略奪（エキスプロイト）し、これを侮辱してゐたといふ廉で、罪科赦し難しとあり、裁判長はその男に何年かの下獄を宣告した。そこで男は、まづ糊口の心配だけはないといふので大いに喜び、すぐさま服役して刑期を滿たした。さうして出獄のゝち、ふと洗濯屋を開業したのだが、妙なものでこれが當つて、たちまち其の町で一と言つて二と下らない大洗濯屋になりすました。すると或る日のこと、この大洗濯屋の前を通りかゝつたのが往年の裁判長閣下である。見ると、どこかで會つた記憶のある顏が硝子戸のなかに納まつてゐる。はてな、とよく考へてみると、何時か自分が離婚させて、おまけに監獄へぶち込んでやつたあの男といふことを思ひ出したので、さては彼奴め、前科を隱してこんなところへ來て働いてゐるものとみえる、一つ樣子を見て一層向後を戒め、次第によつては雇主へ注意してやらうとなかへ這入つて行くと、裁判長が驚いたことには、當時の被告たるこの男こそ洗濯屋の主人で、今は一大資本家といふことが判つた。彼は實に何百何十といふ女に洗濯させてゐるのだつた。裁判長は早速彼を紳士として取扱ひ、對等といふよりも一段上に据えて、その成功を祝ひ、世の子弟達の參考のために奮鬪談と商賣の秘訣を恐る恐る訊いた――といふことである。

といふのが、この話の全部だが、「終りにのぞみ」と社會主義の鬪士は大聲を發して結論をつけるのだ。「終りにのぞみ一言での裁判長閣下に伺ひたいんでありますが、閣下は、男が一人の女に洗濯させて、もつて生活してゐることを罪惡と認め、これを投獄されたが、何故いま何百何十の女に洗濯させて生活してゐる男に、その何百何十倍の罪を宣してこれを獄につながないのでありますか、――ヒアヒア――何が故に彼を成功者として自ら尊敬し、かつまた人に尊敬を強ふるのでありますか。一人の女の勞力を略奪（エキスプロイト）することが罪で、多勢の女の勞力を略奪（エキスプロイト）することは美徳であり、完成であるとは、これ何ぞや――拍手――私どもは敢て言ひます。成程その男は以前は一家庭の罪人であつたかも知れないが、いまはじつに社會的の大罪人であると！」――ふうれい！

そんなやうなことになるから、洗濯だつて決して馬鹿にはならない。

が、なんのために今こゝへこの話を持ち出したかといふと、亞米利加では、女の幸福を念頭に置かない男は男としての資格がないので――文明人はますますかうなるだらう、なるべきで

あらう——、また一面から言へば女の利權が國法によつてかくも立派に保護されてゐて、自然女が威張つてゐるやうに見えることを指摘したかつたまでゝテロといへども、黒つぽい燕脂色の帽子の女の幸福を念頭に置く點では決して誰にも負けないつもりのものではあるが、あはれ、それが、失戀の淵に沈んでゐたところ、完全洗濯會社（パアフエクション ロンドリイ）の洗濯物によつて俄かに局面が打開されるに到つたことへ、これからこの引つ掛りをつけて持つて行く氣でゐるのだ。•

で、女の瞬はかうもあらうかと思はれる程の蒼さに空は透み切つてゐたが、地上には小さな旋風が煙草の吸殼、夕刊のきれはしなぞを卷き上げたり、まき落としたりしてゐる朝だつた。遙か下町に仕事（ビジネス）の音がしはじめて、今日からはまた、長い長いペンとインキと帳簿の日が、テロのまへに横たはつてゐた。

五日目のこの朝、テロはたうとう下町の建築事務所へ出勤することに決心して、一通り顔を剃つたり爪の垢をほじつたりしたのち、直ぐに着更へに取りかゝつた。がこゝにはたと當惑したと云ふのは、下着や襯衣は全部よごれきつてゐるけれども、いま完全洗濯から綺麗なのが屆いて來たからいゝとしても、その洗濯物のBVDにそつくり釦鈕がついてゐないことを思ひ出したテロは、多くの都會獨身者がさうであるやうに身ぎれいな男だつたし、それに紳士のやうに手まめだつたから、肌着や襯衣の釦鈕の脱れたのや、ほころびなどは凡て自分で針を持つて直すことにしてゐたが、今朝は時間がないので急がなければ間に合はなかつた。テロは、カアテス夫人が室外の廊下へ置いて行つた完全洗濯の紙包みを取りこんで、あわてゝ針と絲を出して、まだ包みを解かないうちに、寢台に腰をかけて、針に絲を通すといふ、世の中で最も厄介な企業の一つに着手した。テロが何度舌打ちをしたことか、そして牧師さんに聞かれて困るやうな言葉を幾度口にしたことか、それはこゝでは一々數へ立てないことにする。

『ジイジヤス・クライスト！』

『デイム・イツト！』

『オウ！　ヘル！』

『ガツデイム！』

その他色んなことを低聲に叫んだ。かういふ呪ひ（スウエア）は一切活字にしないことになつてゐるけれど、日本の假名なら意味がはつきりしないから差しつかへあるまい。

針と絲とを兩手にさんざ苦悶し活躍した揚句、つひにテロは針を寢臺の上へ落してしまつた。ベツドに針があつては大變だから、彼は狂氣のやうに其の一本の針を探りあてるのに又何分

かを殺した。だんだん時間が迫つて來て、悶悶々々してゐては例のバスを逃がしてしまふ――失戀しても矢つ張りテロは、黑つぼい燕脂色の帽子を忘れ得なかつたとみえる――やつきになつた末、針を發見して、それに絲を通すことに成功して、テロは片手に扣鈕を摑みながら、完全洗濯の包みをほどいて、ぼたんのとれてゐる筈のBVDを引き出した。

ところが、紐育にも時として不思議は起る。BVDにはちやあんと新しい扣鈕がついてゐた。

洗濯屋が扣鈕をつけたり、切れたところを直したりして寄こすことは絕對にあり得ない。個人的にそんな溫情を見せるべく、洗濯會社はあまりにも一機械であり過ぎるのだ。が、事實は事實として、扣鈕のとれてゐたBVDに確かに扣鈕がついてゐるのである。

變だなあ――と思つたのはあとのことで、テロは其の時、助かつたといふ心もちで一ぱいだつた。大急ぎでBVDの中に飛びこんで――BVDとは袖無し半袴の肌着のことだ――上から洋服を着て、帽子を摑んで驅け出した。おかげで、ポウチに出たのは七時五十分だつたけれど、やつとのことで例のバスを捕まへることが出來た。

女の――エドナの、黑つぼい燕脂色の帽子がテロの前にふるへ出した。

その日一日、テロは事務所でBVDと扣鈕のことを考へて暮らした。しかし、感謝は感謝としても、どこで誰が、何うしてあのBVDにぼたんをつけて呉れたのか、それがテロには謎だつた。長い間の亞米利加生活で、人に顧みられない自分じしんに慣れ切つてゐるテロにとつては、かうした小さな親切も大きく響くのだつた。テロは始めて女性の心もちと手の觸れた物を膚につけて、夕方下宿の部屋に歸つた時は、手放しで泣きたいくらゐだつた。未知の誰か――完全洗濯工場の洗濯婦の一人に相違ない――が自分のためにこんな細かいことにまで氣をつけてくれる。かう思ふとテロは、その女工の幸福のためになら何をしてもいゝといふやうな氣がした。テロは其の晩おそくまで其の女を想像してみた。すると、それが何時の間にか黑ずんだ燕脂色の帽子をかぶつて現れてくる――テロはBVDの扣鈕を撫でて、貧しい語彙のなかゝら、あらゆる愛の言葉を探し出して獨語を言つたりした。

で、次ぎの月曜日に完全洗濯へ洗濯物を出す時に、品名を印刷して印しをつけた紙片（スリップ）のはしに、テロがかう書いてやつたのは、單純に感謝を表明するためにほかならなかつた。

『僕はひとり者で不自由です。僕のBVDに扣鈕をつけてくれ

た人に感謝します。ほんとに有難う。』

さうして、いつとはなしにBVDのことは忘れて、毎朝のバスで、黑つぽい燕脂色の帽子のエドナを見詰めるために、テロは再び生き出した。

だから、その週の金曜日に完全洗濯が返つて來た時も、テロは何の氣もなく、たゞ一應品數を檢べるべく其の鳶色の包紙を解いたのである。すると、またもやテロの驚きにまで、BVDの扣鈕はつけられ、寢卷の綻びは叮嚀に縫つてあつた。品物とひき合はせるために、品名を印刷して夫々しるしをつけた紙きれが付いつてゐる。その下段の餘白に、鉛筆のあとが走つてゐた。

『お禮を仰言られてはかへつて恐れ入ります。わたくしもひとりで淋しうございます。どうぞいろいろ直させて下さいまし。エドナより。』

5

さて、テロが何んな叫聲をあげ――その叫聲のために階下でカアテス夫人が持つてゐた洋杯を落とし――テロがどんなに勇躍し、飛翔し、亂舞し、ダンスし――じつさいテロは手近の椅子を抱へて「てぃら、らつらあ、らあら」とワン・ステップを踏んだ――かは、ことごとしく言ふ必要もあるまい。テロは生れて始めて生き甲斐のある世界を發見して、エドナ――黑つぽい燕脂色の帽子の女のためには何をしてもいゝやうな氣を取り戻すことが出來た。したがつてテロは、もう一度戀のテロであつた。

黑つぽい燕脂色の帽子の女は、テロが下町の建築事務所の近邊で、バスを下りたのちも、ずつと乘りつづけて行くのだから、そしてその先に完全洗濯會社があるのだからこのエドナこそは、誰がなんといつても完全洗濯會社のエドナ、自分のBVDに扣鈕をつけてくれるエドナに相違なかつた。あの美しくて冒し難いエドナが、自分のためにかうした細かい心づかいを見せてくれるのだ。かう思ふだけでテロは、喜悅のために呼吸が停止しさうな氣がした。ながらく運命によつてゐまんすを否定されてゐたテロが、ひそかに思慕する女と小說的な交渉を持ち始めたのである。人の砂漠紐育を背景とする日本人テロの心事に想到したとき、何人も一掬の泪なきを得ないであらう。BAH!

翌る朝もテロは、第五街の綠色二階付市街乘合自動車でエドナ――といふよりも、もつと正確に、黑つぽい燕脂色の帽子と其の下のそばかすとを、滿ち足りたこゝろをもつて眺めてゐた。『エドナさん、あなたが何度扣鈕をつけて下さるBVDの主は私ですよ。これからも何分どうぞ宜しく……』

こんなふうな文句を、テロはいろいろに頭の中で組み建てゝは壞し、作つては破つてゐた。今にも口に出やうとするのを呑み込んで置くのに相當の苦心をしなければならなかつた。いきなり背後からそつと肩でも突ついて斯う囁いたらエドナは何んなに驚くだらう。きつと、えゝ、まへまへから存じてをります。知つてゐればこそあんな失禮なことをさせて戴いたのでございます。あたくし、勝手なことをして若しやお氣にさわりはしないかと隨分心配致しましたけれど、でも――なんかと答へるだらう。とテロこそ勝手なことを考へてゐると、例の、

『あならん――。』

である。車掌の胴間聲だ。降りる人を降ろし、乘る人を乘せて、バスはまた動き出す。

俺はこの女と、こんなにも物語的――洗濯物のロウマンスは近代都市においては充分物語的であり得る――な關係にあるのだ、かういふこゝろで、同車の人々の顏を見廻すことがテロの好物の一つになつた。おゝ、なんとかれらの顏、同じ人種に屬する美しい人を普段から輕蔑してゐる黄色人に奪られて知らずにぽかんとしてゐる彼らの顏が、おゝ何と愚鈍に、そして、自分が如何にも、拔目なく、わけてもエドナと自分とが、なんとうまくやつてるやうに思はれて仕やうがなかつたことよ。甘い祕密を持つてゐるだけでも、二人の戀――テロによれば、これはもう二人の戀であつた――は十二分に報ひられてゐるのだつた。

ピストルのやうな恰好をした、光つたニツケル製の現金器を突きつけて、車掌が乘車賃を集めに來る。テロは、現金器の穴へ十仙(ダイム)を押し込めながら、いつになく威勢よく、餘計な口を利いて笑つたりした。女は相變らずつんとして身動きもしない。耳輪の黑耀石に風が當つてちんちろ、ちんちろと微かに音を立てゝゐるやうだ。それがテロには悲しかつた。が、つぎの瞬間、エドナのたしなみと、その要心深さに感心して、テロはすぐに、人が見たら氣味わるく思ふであらう埒もない獨り笑ひを引つこめなければならなかつた。

テロの洗濯物は下宿の女將のカアテスといふ名で完全洗濯會社(パアフエクシヨン・ロンドリイ)へ行つてゐるのだから、エドナが、そのBVDの主人が日本人であらうといふことなどは思ひ及ばないところで、テロも敢てそれを闡明しようとはしなかつた。品名紙のをはりのはしで月曜と金曜日とに短い戀文を遣り取りしてゐる分には、お互が何であらうと、それはお互にとつて樂しいミステリイであるばかりだつた。エドナのこの小さな冒險心を察して、テロは自分のことについては何一つ言はずに、只せつせと洗濯物と一しよ

に思ひのたけを書き送つてゐた。

細胥の空の下で、この二つの淋しいたましひのあひだに珍妙な洗濯物の文通がつゞいた。

月曜日。汚れ物に挾んだ紙きれにテロが名文を綴る。

『この大きな都會で獨りで暮してゐると、ときどき麵麭や花瓶を相手に話をしたくなります。それは全く耐へ切れない心の重荷です。私には親も兄弟も何もないのです。だから洗濯物をそとへ出すのです。扣鈕をつけたり、ほころびを縫つたりして下さるのはあなただけです。私がどんなに感謝してゐるか、あなたには想像もつきますまい。ひとりの人間をこんなに喜ばせるのは、ほんとにいゝことです。きつとあなたは優しい方だと思ふ。私にはあなたといふ人がちやんと眼に見えます。何處で會つても、あなたさへ許して下されば、私はあなたを指すことが出來るでせう。しかし、あなたの考へてゐらつしやる私と、ほんとうの私とのあひだには何んな大きな差があることか、それは私が一番よく知つてゐます――T・C』

Tがテロで、Cはカアテスといふ變名だつた。

なか三日おいて、必ず女から返事が來た。

『金曜日。あなたはそれでも幸福ですわ。麵麭や花瓶――きつと美しい美しい花瓶でせうね――とおはなしをなさることが出來るんですもの。わたくしは何一つ話相手がございません。眞黒な壁と木の床――敷物のない――とがあるばかりでございます。けれど、あなたに奥様がおありになることは、あたくしちやんと知つてをります。奥様がおありになつても洗濯はおさせにならないんでございませう。手が荒れるからつて――ほんとに何て親切な旦那様でせう。あたくし、さう思ふと、いつでも奥さまつて方が羨ましくてなりません。きつとそれはそれは綺麗な方でせうね。でも、あたくしは默つて扣鈕をつけたり切れたところを直したりするだけで、滿足してゐるつもりでございます。何時までも、えゝ、いつまでも何時までも、どうぞね――エドナより。』

『月曜日。誤解なさらないで下さい。僕はじつさい獨り者なのです。結婚してゐれば何しに洗濯物をそとへ出したりしませう？どうぞ考へてみて下さい。そして私を信じて下さい。それから、この前の襯衣には上から二つ目に桃色の貝扣鈕がついてゐましたね。ほんとに有難う。あれにそうつと接吻してもいゝでせうか――事實ひとりぼつちのT・Cより』

『金曜日。結婚なされば、もう洗濯物をお出しにならないんですつて？では、どうぞどうぞ當分結婚なさらないで下さいまし。さうすれば、遠くからでもあたくしお身のまはりをご注意

することが出來ますから。ね、お願ひですから、もう暫らくあたしに面倒見さして頂戴。あたし、「誰かをお母さんにしたく」（アイ・ウオント・マザア・サムバディ）て仕やうがないんですの。御迷惑さま——エドナ。

二伸。靴下をつゞくつて一しよに入れて置きましたから黑いのを穿いてから茶色のをはいてね。ではまた。あ、それから、今日は何だか寒くなりさうですから、お風邪をひかないやうに、ね。』

『月曜日。靴下のこと有難う。茶色のに小指のところに穴が出來ましたから、ちよつとやつといて下さい。毎日あなたのことばかし考へてくらしてゐます。僕、あなたの帽子の色を知つてゐます。當てゝみませうか。それから耳輪も。誰が買つたのです？　これも知つてゐますよ。あてゝみませうか。T・C。』

『金曜日。あたしの帽子の色はきつとあなたのお嫌ひな色だらうと思つて、あたしゆうべ隨分泣きました。一晩ぢう泣きながら眠つたら、今朝お部屋の窓に紫いろの花が咲きました。あなた、紫お好き？　エドナ。』

『月曜日。むらさきも好きですけれど、私は今日お送りするハンケチの色が一番好きです。黑つぽい燕脂色！　一昨日買つたんですよ。T・C。』

『金曜日。男の方は白いハンケチを用ふものです。あれはあたしが戴いて置きます。かはりにいゝのを一枚入れましたから、大事にしなくちや嫌よ——エドナ。』

そのあひだもテロは、毎朝バスの二階でエドナの黑つぽい燕脂色の帽子を背ろからばかり眺めて、默つて据わつてゐた。勿論エドナはテロなぞに一瞥をも呉れやうとはしなかつた。しかし、安價いBVDやパジヤマはさかんに釦鈕がとれたり、ほころびが切れたり——場合によつてはテロが取つたり切つたり——したので、テロもエドナも充分幸福であり得た。

二人はすつかりいゝ氣もちに馴れ親しんだ。

6

たうとうテロがエドナに贈物をした。

話はこゝから急轉直下する。

何がいゝだらうと色々考へた末、完全洗濯會社氣付エドナ樣としてチヨコレイトを一箱送つたのだつたが、それが屆いたと思ふ頃、洗濯會社からカアテス夫人の下宿のテロの許へ電話がかゝつて來た。いよいよエドナだ、今日こそはあの黑つぽい燕脂色の帽子の聲が聞けるといふので、テロが、それこそ黑つぽい燕脂色の顏をして電話口に驅けつけると、

『もしもし（ヘロウ・ヘロウ）。』

といふ女の聲がした。來たな、と思つて落着からうと努力してゐると、

『こちらは完全洗濯。わたくしはね、洗濯婦の取締りをしてをりますマリオン・ステルマンと申す者でございますが——。』

『はあ。』

と氣拔けのしたテロの耳へ、マリオン・ステルマンががんがんがんがん呶鳴つたところによると、完全洗濯會社は女工達に對する監督が非常に嚴重で、會社へ當てゝ男から賜り物なぞをされてはその女が大いに迷惑する。いまあなたの小包みが届いたから一先づエドナへ渡しはしたが、そのためにエドナは支配人の部屋へ呼びつけられて叱られてゐる最中である。毎度御贔屓に預つて有難いが、以後からいふことはよして戴きたい、とのことだつた。

テロはびつくりした。飛んだことをしたと思つた。あのやさしいエドナが、洗濯屋のおやぢに叱られてゐる光景を思ひ浮かべると、テロはぢつとしてゐられなかつた。因は自分から起つたことだし、第一、あの社會主義の辻說法に出る獰猛な洗濯屋が、そもそも何の權利をもつて、自分とエドナとの間へ割り込んで來るのか。これは實に許して置けない暴逆、冒瀆のきはみである、といふので、テロはカアテス夫人方の玄關から——頭のはうを先にして——タキシへ飛びこむが早いか、一路下町の完全洗濯會社へ駈けつけた。

しばらく應接室で待つてゐると、やがて、

『わたくしがマリオン・ステルマンでございます。』

と言つて這入つて來た黑人の大女があつた。四十あまりの、眞黑な猛烈な顏の所有主だつた、テロを見て烏渡以外なふうだつたが二人の間に直ぐにこんな會話が始つた。

マ『失禮ですが、あなたはエドナの何ですか。』

テ『戀人のつもりです。まだ正式に會つたことはありませんが。』

マ『とにかく、あゝいふことをされては、私としても、また會社としても非常に迷惑致します。以後あんなことはなさらないで下さい。』

テ『お詫びします。つひその、エドナの住處が判らなかつたものですから——。』

マ『あなたは戀人の住處を御存じないのですか。それから、ついでにちよつと伺ひますが、あなたは非島人（フィリピノ）ですか。』

テ『いゝえ、私は日本人です。エドナの住處は知りません。今ちよつと會はして下さい。』

マ『執務時間中の面會は何方にも一さいお斷りしてをります。

どうぞあしからず。』

テ『しかし、直接會つて謝罪したいのです。エドナは言はゞ私のために叱られたのですから。あれには少しも悪いところはありません。』

マ『それはそれで、もう濟んでゐるのですから、宜うございませう。それよりも、あなたはエドナを御存じですか。』

テ『えゝえゝ。勿論知つてゐますとも、黒つぽい臙脂色の帽子――エドナの家は何處でせう？』

マ『今夜七時に私の家まで來るやうに言つて置きませう。そこでおあひ下さい。とにかく今はお斷りします。お歸り下さい。』

そこでテロは、マリオンから、マリオンの家の所在を聞いて、今夜七時にそこで會ふやうにと、くれぐれもエドナへの傳言を賴んだ。

七時になつた――話は早いはうがいゝ。

それまでにすつかり磨きをかけたわがテロは、西洋人のいはゆる日本の Miai にでも行くやうな氣もちでホアテス夫人の家を出た。

第五街を向う側へ一二丁横町へ切れたところにマリオンの家があつた。玄關に立つて案内を乞はうとすると、扉が半開きになつて、中から女の泣聲が洩れてゐた。なんとなく猶豫すべき場合でないやうな氣がして、テロはつゝと這入りこんだ。啜り泣きの聞こえてゐるのは、玄關から直ぐ左手の客間（パアラア）のやうだつた。

エドナがゐる、泣いてゐる、と思ふとテロは、一刻も我慢がならなかつた。で、いきなり戸（ドア）をあけて、小さなテロがまるで22號の彈丸のやうに飛びこんで行つた。そして直立して思はず、『失禮！』

と言つてしまつた。さう言はなければならない光景が、そこに展開されてゐたのだ。

妙なことには、泣いてゐるのは黒人女のマリオン・ステルマンだつた。來てゐる筈のエドナの影なぞは何處にもなかつた。おや、これは變だな、エドナは何うしたんだらうと思ひながら、テロは戸の內側に立つてもぢもぢしてゐた。

マリオンの前に一人の白人の男が威猛高に突つ立つてゐた。

『さう强情を張つても仕樣がないだらう。會社もお前を信用すればこそ監督にして置いたのだ。そのお前がこんなことをして一たい何うするつもりだ？え？泣いてばかりゐたんぢや話が判らないぢやないか。なんだかこの一月ばかり盛んに洗濯物が失くなるといふ投書が來るので、會社ではそれとなく注意してゐたのだ。』

『わたしではありません！洗濯物を盗んだのは私ではありません！わたしはたゞ――。』

とマリオンは、兩手に持つた針と絲とを男に示して、泪に濡れた黒い顏を上げた。誰かの面倒を見たくてたまらない中年すぎた女の迷執的本能が、マリオンの顏に大きく書かれてゐた。男は、針も絲も泪も一しよに無視した。

『誰がそんな手に乘るもんか。洗濯屋は扣鈕をつけたり綻びを直したりする要はすこしもないんだ。假りにその必要があつたとしたら、會社は係りを置いて仕事を命ずる。お前が勝手にお客樣の洗濯物を自宅へ持つて歸つてそんなことをする必要はない。俺は今日、泥棒するやつを見張つてゐたんだ。そこへお前が怪しい包みを持つて出るのを見たから、かうやつてあとから來てみると、案の條、洗濯物を包んで來てゐる。何うだ、恐れ入つたらう！もういくらしらばくれても駄目だぞ。太いやつだ。大體お前はこの頃どうもそはそはしてゐる。こんな帽子なんか被りやがつて。なんだらう、これも洗濯物を賣つた金で買つたんだらう？』

マリオンは默つてうなだれてゐた。膝から床の上へ、先日洗濯に出したテロのＢＶＤがだらりと下つてゐた。テロの靴下もそこらに散らばつてゐた。男が指さした帽子は、色こそ黒ずんだ臙脂だつたが、バスのエドナのとは似もつかない哀れに旧式なボンネットだつた。そばの机の上に今朝テロが贈つたチョコレイトの箱が飾物のやうに置かれてあつた。

誰か男のために主婦の役をつとめたくて仕やうのなかつたこの黒人の四十女は、テロと同じ、或ひはテロ以上のさびしさから、よくある名のエドナといふ變名であの頼りない文通を始めたが、けさの贈物で急に相手の男が見たくなつて、自分もつひ顏を出してしまつたのだらう。しかし、晝間、洗濯會社で會つて日本人といふことが判つたくせに、夜あらためて自分の家へテロを呼んだくらゐだから、マリオンのはうがつき進んでゐたに相違ない。だからお互ひの曝露によつて痛手を受けたのはマリオンで、テロは其の場でさつぱりしてしまつた。思へばテロもあやういところを助かつたものである。

『それは私の洗濯物ですよ。私が特別に頼んで直してゐて貰つたのです。』

かう言つてテロが部屋を出たとき、まつ黒なマリオンは、黒い涙をさんさんとテロのＢＶＤのうへにこぼしてゐた。

ほん物のエドナの瞳はからもあらうかと思はれる程の蒼さに、翠朝の空は透み切つて、地上には小さな旋風が煙草の吸ひからや夕刊のきれ端などを卷き上げたり落としたりしてゐ

た。はるか下町に仕事の音がしはじめて、長いながいペンとインキと帳簿の日がテロの前に横たはつてゐた。しかし、テロのこゝろはもうぼんやりと軽かつた。

口笛を吹きながらバスの二階へ上つて行くと、エドナが何時かの同伴の男と話して、笑つてゐた。

『兄さん、あたしから思ふわ。あのね――。』と言つてゐるのが聞こえた。夫婦でないことが判つても、テロはべつに寂しくもなかつた。が、晴やかな微笑を禁じることは出來なかつた。ゆうべ以來、エドナはテロの手の屆かない遠いところへ行つてしまつて、それがテロのこゝろに何よりも大きな安心になつてゐた。

『BVDてのは、襯衣のことだとばかり思つてゐたらありあ君Being Very Disappointed の略だね。』

テロがこんな洒落を發見したのはこの朝である。

バスに揺れる黒つぽい臙脂色の帽子を、うしろから眺めながら考へついたのだ。

――をはり――

新刊紹介書について

本誌の新刊紹介を希望せらるゝ向は、中央公論社内「中央公論新刊紹介係」（婦人公論への希望は「婦人公論新刊紹介係」）と明瞭に表記相成度、個人に宛て御送附無之樣願上候。

特に個人へ献本せられんとするものは、相成るべくは個人の私宅へ宛て御送附被下候て、新刊紹介書と献本と、中央公論への希望と婦人公論への希望とを明確になし下され度、そのいづれをも希望せらる方は、そのいづれもへ一部づつ御送附願上候

中央公論編輯部

北滿放浪雜話

里村欣三

(一) 雲

雲は、放浪者にとりて、詩である。魂の躍動であり、情緒の韻律である。またあるひは、神秘な默示である。

雲、雲、雲、私達はいかにそれを仰いで、泣き、笑ひ、悲しみ、嘆いたことであらうか。放浪者は友を持たない。また語るべき隣人をもたない。更に愛すべきものすらもたない。そして常に孤獨である。無言である。――

がひこの悲しむべき、哀むべき地上行者の上には、常に無限の青空がおほいかぶさつてゐるではないか。そこには雲がある。雲こそはわれわれの兄弟であり、同志であり、また愛すべき隣人である。

われわれが、悲しみの餘りに泣き倒れてゐる時、情け深い雲は、どうしてもわれわれを見捨てては行かないのである。

『若者よ、悲しい時は酒が一番よい。町へ下つて行つて、鱈腹のんで、醉つて御覧んよ!』

彼は悲しげに眼をしばたゝいて、青草の上に、閊える吾をかう慰めるのである。

われわれが、小高い丘の上に佇んで、暮れて行く地平線を、涙をためた眸で凝つと眺めてゐると、雲の奴は何處からか流れて來て

『うん、さうだつた!お前の母親(おふくろ)はこんな姿をしてゐたツけな!見ろよ、かうか、いやもつと肩が張つてゐたツけ? 見ろよ。………』

孤獨者(コドクもの)の雲は、ふわふわした體を色々にくねりまげて、[illegible]せ

るのであつた。『泣くな、泣くなよ。もう日が暮れるではないか、さあ歸つて寢なよ！もうおッつけ俺れも歸つちまうからな。』しんみりとした眼付で凝視めた儘、雲はわれわれが丘を降りるまでは動かうとしないのである。

『腹が減つた！そりや不可ねえ。が、若者よ！いつまでそこに寢轉んでゐたとて同じことだ。さあ元氣を出した、出した。村へ這入つて見ろ、握飯の一つも惠んで呉れる情け深いお婆さんがねえとも限らねえからなア』

寢轉んだ若者の傍に、いつの間か雲がそろりと忍びよつて、親しげにかう口を切るのである。『さあ、そんなに自暴を起すもんではねえ。起きて行きねえよ。なア、若者よ、神樣がちつと見てゐらあしやる、そんなに何時までもお前ばかりを苦しめては置きはなさるまいッて！』

若者は不精々々に起き上つて、村へ這入つて行く。と、雲の言ふ通りである。人間はめつたに腹を減らして死ぬるもんではない。おまけに草取の仕事を見付けでもしやうものなら、早速、雲の野郎、朝早くから葡萄園の上に出張つてにこにこと待つてゐるのである。『お早やう！』

汗をだくだく流して、根限り働いてゐると、『おい、おい、ちつと位憩んでもいゝよ。その葡萄棚は低いから腰が痛いたらう』と、かうおせつかいまで燒いて呉れる。そして自分も汗をだくだく流しながら、太陽に照された儘、ちつと動かないでゐるのだ。實に愛すべき世話好きである。

『給金は少ないし、內儀さんはケチだし、仕事は樂でなし、親父はやかましいし、ちえ一層のこと逃げ出して終え』と、われわれはよく思案することがある。さう云ふ時には、いつでもわれわれはシャベルの柄に肱をついて、先づ雲に相談を持ちかけるのである。

『兄弟！景氣のいゝ町はないか？』

すると決斷力の早い雲は、われわれが煙草を一本を喫ひ盡くさないうちに、何んとか決定して呉れるのである。『ぐすぐすしないで俺について來るがいゝ。』と言つて呉れることもあるし『見ろ！野面は木枯と雪だ、うかうか飛び出すと、野垂れるぜ！』と云つて思ひ止らして呉れることもある、前のやうに言つて呉れれば、われわれは早速に、棒片を片手に振り廻して、得意の小唄を鼻唄まじりに口ずさみながら雲と共に流れて行くのである。町はどこにあるかも、どんな仕事が待つてゐるかも、われわれは一切を知らない。雲が萬事を心得てゐるのだ！が、たつたひとつわれわれは女が美しくて、酒は旨くあれ！と祕密に念じ

てゐるのだ。これだけは如何に心易い雲にも訊いてみることは出來ない。何故ッて、そんなことを訊かうものなら、忠告づきの雲のことだ『お前が貧乏して、流浪してゐるのはその女と酒のためだよ』とぐらゐの小言を聞かすであらうから、このことだけは秘密にして相談しないのだ。だからわれわれは一切のことを雲に任かしてゐても、ただ一つ任かしてゐないそのことに苦勞するのだ。『女よ！美しくあれ、酒よ、旨くあれ』と、——ねえ。

然しながら放浪者は流浪する、そのことが全部でない。彼等には實に熾烈な理想主義が、流轉から流轉に穢れほころびた着物に包まれてゐるのだ。よりよき生活を求め、より意義ある職業を追つて、旅から旅に流轉するのだ。が、人世はつひに放浪者に安住の地を與へない！旅から旅へ、彼等は無限に雲を憧がれて行くのである。涯てしなき流浪！人の世が、人間に安住を與へないものである限り、流浪の若者は永遠に、ひとつの宿場の灯（ともし）に心をとどめないであらう。

人よ、人よ！放浪者の見窶らしき姿に、侮蔑を含む勿れ。またひとりの乙女と永遠（とは）を誓ふことの出來ない移氣を咎むること勿れ。

放浪者こそは、實に美しき安住の地と永遠の戀人を、この實利主義の世界に描く。たゞひとりの理想家であるから——。

(二) 露西亞女

女の裳裾を惡戯者が、注意深く、靜かに息を殺してしづしづと持ち上げるやうに、曉の闇が曠原の彼方で、靜かに引き剝がされてゐる。——雪解時の濕ッぽい朝ぼらけである。

私はもうよほど前から、黄色ぽい胡粉で色化粧された停車場（スタンツィア）の前を行つたり戻つたりして、やたらに咳唾を、癖きをかけたやうなコンクリートの上に吐き散らしてゐた。日本では春だといふのにこゝでは冬なのだ。まだそこらに忍んでゐる闇の中から、冷こい風が吹いて來て、廣場の枯木を、荒ぽくもみ立てるではないか。その度にひ、ひ、ひゆと悲鳴をあげるのだ。苦力どもはまだお客がないので安心して風當りのない、停車場の隅ッとに洋車（ヤンチヤア）を引づり込んで、ぐつすり居眠つてゐる。——彼奴を起したところで、また空になつてこの停車場に乘客が集つたところで、言葉は通じる譯でなし、仕事の口が見付かる譯でもなし、泌々と迫つて來るのは不甲斐のない不安なのだ。えゝ儘よ、兎に角歩いてみよう。停車場では昨夜汽車で着いた時から厄介になつてゐるので、もうあの冷たい板の腰掛は一晩で飽々してゐるところだ。

流石街は奇麗なものだ。露西亜の帝政時代の東洋根據地なのだから。――が、しかしまあ何んて車道はあんなに凸凹の小石を、しかも叮嚀に植えたもんだらう。あれでは轍が痛むだらう、と口笛を鳴して唯だ一つ暁の街を飛ばして行く馬車の主に同情したもんだ。

どこをどう通つて、どう來たのか知らない。私は淸澄な朝、急がし氣に馬鈴薯や玉葱を手籠に拾ひ込んだり、ソバカスだらけの女が黒い布で頭を包んで、頻に聲高かく支那商人と押問答したり、パンを抱えて雀のやうに饒舌くつて歸つて行く女の群を、見たり、眺めたり、凝視めたり、振り返つたりして、うつとりとこの騒がしい市場(バザル)の光景に對してゐたのである。恐らくハルビン中のおかみさん連がこゝに集るであらう、すれば待伏せて口說けば實際、手間暇(てまひま)いらずだがなあ――と獨身者らしい空想を恣まにしてゐたのである。そして輕快に、快活に、無限に饒舌くりながら太根や人參を選り分ける女達を、美しいものに思つてゐた。

『お前は何時までそこに立つてゐるのだ』――と、からでも言ふのであらう、小ましやくれた支那人の小僧が、私の傍へやつて來て何か早口に喋つてのけた。無論それが私に通じる譯がない。きよとんとして小僧の、齒糞に黄ばんだ出齒の間から早口に、疳高く、流れるやうに飛び出して來る次の雄辯に耳を傾けてゐたのである。と、太根や玉葱を入れたバスケットを抱え込んだ女達がぐるりと私を取卷いて了つた。

『支那人(キタースキー)か？日本人(ヤポンスキー)か？』とでも囁き合つてゐるのだらう。黒や白で頭髮を卷いた女が、靑い目や茶色の眼をぐるぐると瞬近所の女達に振り撒きながら、或は頷き、或はかぶりを振つてゐるのである。小僧の野郎は觀客を得た俳優のやうに乘氣になつて、手振り足踏みで、やがて露骨な調子でからかひ始めたのである。女連はキア、キア、キアと騒いで、小僧の言葉が杜絶える度に拍手すら送るのである。小僧の野郎愉快でたまらないと云つた調子で、唾液を呑み込み呑みこみ次から次へと雄辯に何を言つてゐるのか流れるやうに、疊み込むやうに、まくし立てゝ行くのである。私は呆然と、この怪奇な小僧を眺めてゐたのである。と、一際、小僧の奴が笑ひ轉げるやうに叫んだかと思ふと、私の大切なところを出し拔けに掴んだのである。女連の間には、笑の嵐がどつとあげられて、或る者は玉葱を籠から轉してまで、大きな腰をゆたぶつて笑ひ轉げてゐるのだ。私はその時、小僧の雄辯の全部がはつきり了解できた。顏を赭めて畜生！と、思つたが、もう小僧の野郎はそこにゐなかつた。笑ひやまない淫蕩なおかみさん連が、腰を振り、手をあげてそこ

に苦悶してゐるだけであつた。と、ひとりの黒い布を頭に卷きつけて、引きづるやうな黒のガウンを纏つた、脊の低い、が、樽のやうに肥えた婆さんが女達を突き轉がしながら圍障を破つて、私の前に現はれたものだ。そしてまた鋭く曲つた鼻面を、私の顏の前に突き出して、何やら譯の解らないこと饒舌り出した。——一體全體、今日はどうした日なんだ。私は腹立しいやうな氣持で、物騷な鼻を眺め、それから滅茶苦茶な隣を見た。と、これはまたどうだい！皺に畳まれた細い眼は、愁はしげに曇り、眼尻の皺の線には一滴の涙がひきのばされてゐるではないか？おやおや、若しや眼でも惡かつたのではないか、見誤りではなかつたかと、もう一遍見直さうと思つて顏を上げると、婆さんは下を向いて、虱でも取るやうな格好で、たぶたぶのガウンの脇腹に手をつッ込んで何か頻りに探つてゐたので、つひに、眼尻の涙が眼病のそれかどうかをその時すぐには極めることが出來なかつた。婆さんはガウンの中から何か摑つて取り出すと、すぐにそれを右の手に持ち替へて、胸に兩掌を當てゝ眼を瞑つた。皺に壓し出されて、涙の粒が、皺ばんだ兩頬に流れた。胸の掌を解くと、一方の手で兩胸を一方づつ人差指で押して、最後に額ひを押えて、默想するやうな格好をした。おやおや！と、私は思つた。婆さんは私の驚きには一切おかまひなしに、敬虔なお祈を濟ますと、早速私の眼の前に、トンツル(支那銅貨)をつきつけるのだ。私はそれには参つてしまつた。どういふ譯なのだか、謎が解けないだけに面喰つてしまつたのだ。愁を含んだ眼が、悲しげに瞬いて『それ、それ、何故とらないのだ！』と、無理矢理におしつけるのだ。『乞食ではないのだ！』と、言はふとするが、その感情だけで、表すべき言葉がない。とうとうそれを握らされてしまつた。婆さんは私にトンツル一枚握らすと、胸を張り、腰をゆたぶつて、孤兒院に臨んだ富豪の未亡人よろしく、さつさと何處へか行つてしまつた。やれやれ飛んでもない目に逢つたものだと、私は汗を掌で拭き拭き、そこを立去つて、まだ一間と來ないうちに、女の兒の呼び聲を聞いた。はッと思つて振り向くと、縮れ髪の眼の青い女の兒が、鷄卵を一つ突き出してゐるのだ。私はもう狂ほしくなつた『畜生！馬鹿にしやあがッて』私はぷんと横を向くと、大股で歩き出したものだ。が、女の兒は何處までも纏はるやうについて來て、鷄卵を五月蝿く突きつけるのだ。『よし！』いきなり鷄卵を取り上げると、吃驚して眼玉をくるくる動かしてゐる女の兒の前に、ぴしやッとたゝきつけた。彼女は縮髪を抱えると、くるりと尻を廻して一散に駈け出した。泣き喚めきながら縺ふやうに驅けて行く赤い着物の女の兒の前に、母親が前屈み

に手を擴げてゐた。その心持靑ざめた頰が私を睨んでゐた。もつと近くで眺めたならば薄い口唇が聲も出ない程震へてゐたであらう——。が、しかし幾ら情け深い心であつたにしろ、私の姿が如何に穢苦しいものであつたにしろ、そのひとり合點には、恐れ入らずにはゐられなかつた。『畜生！忌々しい女郎どもだ！』——と。

露西亞女ぐらゐ感情を、露骨に、率直に、思つた儘感じた儘をさらけ出してはばからぬものはない。だから日によつて、露西亞女は、美しくも、醜くも、可憐にも、面憎くも見える。まことにもつてお天氣者である。——

これはずつと後の話であるが、私がハルピンから東部線に乘つて一面坡（イーメンパ）へ行く車中であつた。私の座席と向かひ合つて、ひとりの美しい娘が乘合してゐた。斷髮の肌の白い女で、東洋人に見るやうな黑瞳（くろめ）を柔かく伏せて、頻りに小說か何かを讀み耽つてゐた。私は細い襟頸を眺め、金魚の鰭のやうに動く口唇を見守り、水色の長い靴下に透いて感ぜられる柔かくふくやかな脛の線を凝視めて、恍惚として居ればよかつたのだが、餘り露骨に若い娘を凝視めてゐては、と柄にもなく恥ぢてさあらぬ體で安煙草を喫かし出したものだ。娘がちらつとこちらを睨んだ時にすぐ煙草を揉み消せば、目的地までこの美形を恣にしてゐられたものに、氣の付かないとは云へ全く愚かな失敗で、やたらに煙草を喫かしたものだ。娘は始め二三度手で煙を拂ふやうな格好をしてゐたが、もう我慢がならないと云つたやうな調子で、手荒く書物を閉ぢると同時に、すつと立ち上つて、叫んだ。

『何んて不作法だ！我慢がならない！』と、金魚の鰭のやうに見えた口唇が、變りもするもんだ、憎さげにとがつて嚙みつくやうに見えた。黑眼勝ちの潤んだ眼は、おゝ、惡婆の眼のやうに眼窩の奧深くで呪はしい光りを放つてゐるではないか！　手早く毛布を疊み、古ぼけたトランクを片手に提げると娘は、どうにもかうにも腹が立つて仕方がないと云つた身振りで、その席から出て行つた。

『何んて高慢ちきな、まるで女王のやうな振舞ひであらう！』

が、その高慢さはいゝとして、何んとあの古ぼけたトランクは、見窶らしい對照であつたか！

が、兎にも角にも煙草一本喫ふのにも『喫煙さしていただけ（ラズルシーチエ・ムニエ・）ませうか？（ザクリーチエ）』と、大の男をひざまづかせる露西亞の令嬢（バリシーナヤ）のとがつた鼻面は凄いもんである。

私は物置きのやうなイワン・イワノウイッチの一部屋を借りて住んでゐた。仕事がまだ見付からない時であつたので、毎日

赤ン坊を抱いたり、あやしたりしてお主婦(スバルガ)さんの氣持を損じないやうにつとめてゐた。だから月が越えて十日もなるのに催促がましいことを言はずに、快よく毎度の食事はして呉れてゐたのだが、私は或る日すツかりお主婦(スバルガ)さんの氣持を損じて了つたのだ。それは何んでもないことなのだ。——

私がニョルカを抱いて、公園のベンチに腰をかけてゐた時、お主婦さんが私と子供を見付けてにこにこと近づいて來た。市場の歸りであつたのであらう。腕に大きな籠をぶら下げてゐたから。——

『まあ、まあ、おとなしく抱かれて！』さう云ひながら子供の赤い頬ペタを、口唇を鳴らしながら頻りにつゝいてあやし始めた。その時、私はほんに何氣なく

『お主婦さんは共産主義者(コンミユニスト)ですか』と訊いたもんだ。さあ、お主婦さんは怒るまいことか『見ろ、見ろ！(ポスモトリチエ ポスモトリーチエ)』と、ニコライ皇帝の像が彫つてある指輪をはめた指をつきつけながら『共産主義？そんな素性のいやしいもんではない！』と、吼えるやうにつゝかゝつて來るのだ。そしてぷんぷんしながら、子供を奪ひ取て家へ歸つて行つた。その晩、私は冷えたスウプの切れたうどんをすくひ上げながら『もう十日になる。部屋代と食費を入れて貰はなければ！』と、手ひどい催促を受けたのである。何んと現金な露西亜女であることよ！帝政時代の金貨を指輪にくつつけてまでも、素性を誇らなければならない露西亜女は不愍なものだ。が、異國の地に素足で流浪しながらもまだしかく素性を鼻にかける露西亜人は偉大なものだ。

おゝレーニンよ！お身の國の鼻の赤いお主婦さんは、『共産主義者は、素性のいやしい成り上り者だ』と、云ふよ。

(三) 呉海と美女

呉海(ウーヘイ)は苦力である。精悍な鋭い眼と鼻柱をもつた好漢で、眞夏の灼熱下に双肌を脱いで、辮髪をきりりと卷いた頭を振りたてながらテツシヤウで土砂をすくひ上げる光景は、實に素晴らしいもんだ。道行く人々は、しばし立止つてその流汗淋漓たる赤銅色の筋肉の躍動に恍惚(うつとり)とするのである。人間の逞しい力量が最高潮(クライマツクス)に達した時は、實に最高の美である。最高の快感である。

人々はその美に衝たれて、その快感に陶酔を強ひられずにはゐないのだ！が、その次の瞬間に、彼等はその悲しき社會的見得が、かう呟くのを聞くのである。

「うむ、俺は紳士だ、俺は紳士だ。苦力の勞働を眺めるなんて

恥かしいことだ！』と、そして憤然きはまる見得を切つて、痩せた胸を張り、黒檀の細身のステッキを振り廻しながら立ち去るのである。『何に、世の中で一番下等な、賤しい勞働さア』とねえ。

これについて面白い挿話(エピソード)がある。

北滿の夏は殊に烈しい熱さである。それが日本の夏とは違つて、乾燥し切つた大地の上に太陽が刺し貫くやうな白熱を投げるのだ。その眞下で勞働するのは、實に嘔血して悶絶するやうな惱ましさを感じる。——

俺達はその頃、好漢呉海と共に、テニスコートをつくつてゐた。その炎天下に、土を運び、水をふり、石灰を撒き、ロールをひき、汗だらだらで働いてゐたもんだ。

好漢呉海は例によつて、双肌をぬいでその赤銅色の半裸體を炎天下の日光に曝して、先頭をうけたまはつて活動してゐた。彼は實際に支那勞働者に見られない勤勉な男であつた。

われわれが働いてゐるテニスコートは、日本のある商會の宿舍の敷地内にあつた。その敷地内には宿舍と可なり隔つてずつと奥まつたところに、まだ二棟の倉庫があつた。その倉庫のまわりには鳳仙花が血のやうに咲き亂れてゐた。多分倉庫番の娘の手に丹精されたものに違ひなかつた。倉庫番のおやぢが實に醜い、あばた面であつたにかゝはらず、その娘は美しかつた。薄紅色(とき)の頬は、水色の掛子(クワーツ)とよく調和して、切の長い眼尻の線と白い歯並が、笑つた時には微妙な交錯を見せて、あでやかな牡丹のやうな感じを抱かせる娘であつた。

娘は朝夕かならず庭に出て、鳳仙花に水をやつてゐた。水を撒き終へると必ずそこに佇んで、呉海を凝視めるのだつた。それを知つたのが俺であつた。

『おい見ろ！(ニイヤ・カンカン)』俺は娘の夢みるやうな瞳を感じると、汗の流れる呉海の軀をつツついてそれと知らせるのだが、彼が振り向く瞬間に、ぷいと娘は横に向いて了ふのだつた。そして再びこちらを見ようとはせずに、冷たい足取でよちよちと家の中へ歸つて行くのだつた。家の中へ這入つたが最後、娘の顔は朝夕二度より外決して見られることがない。はかない樂しみである。

『おい、あの娘はお前に惚れてゐるぞ！』

『そんなことがあるものか！』

『だつて、あの眼はたゞの眼ぢやないよ』

『そんなことはない。私は苦力だもの』

『苦力であらうが、大人であらうが、戀といふ病にはおかまひなしさ』

『日本と支那とは違ふ！』

呉海は膝を組みあはして、悲しげにうつむいた。彼の息が『金、金、金』と喘いでゐるやうに思はれた。それでも呉海の眼の色が日毎に輝いて來た。それで彼の感じが鋭くなると共に、娘の視線とよくカチ合ふようになつた。が、娘の視線はカチ合つたが最後、隼のやうに呉海の視線を避けて、憎い程黑い髮の辷り落ちた掛衣(クワーツ)の背を、冷たく、素早くひらりと翻して、よちよちと呉海の燃ゆるやうな視線の前を歩み去るのである。心憎いまでに落着いた娘よ！

ある日であつた。消魂しい啼聲をあげたかと思ふと、いきなり雄鷄が飛び出して來た。轉げるやうに駈けて行く鷄の後を、門口でこれも飛だして來た娘が當惑さうに見つめてゐた。纒足の小さな踵では鷄の後も追つかけられないのだらう。と、これを眺めてゐたのが呉海である。テッショウを抛り投げて、卷いた辮髮がばらりと日光に一閃したかと見る間に、韋駄天の如く走り出て、鷄の行手に赤銅色の大手を擴げたものだ。――

鷄はとうとう呉海に、倉庫の隅におひつめられて生け取られた。娘は呉海の手から鷄を受け取ると『謝々(セセ)』と、一口輕く言つた儘、鷄を羽交ひ絞(はがひじめ)にして生きたままを無雜作にひつさげて、桃色の袴子(クーツ)のはり切つた臀を、くるりと彼に振り向けたものだ。――

何んといふ慘忍な、しかも冷たい美女の姿であつたか！

我が呉海は啞然と、無雜作に鷄をぶらさげて行く慘忍な美女を見送つてゐた。

『おい、どうした？』われわれは聲をかけた。あまりに素氣ない娘の素振であつたので、われわれは呉海をひやかす氣になれなかつた。が、呉海はどう云ふ感情をもつてゐたのか、快活にあ、は、は、とばかりに哄笑したものだ。

が、翌日、われわれは二つの驚異に接したのである。それは呉海が仕事に來なくなつたことゝ、鳳仙花に水を注ぐのが、あの娘でなくて、あばた面の親父であつたからである。われわれはどんなに親父を憎くんだことか！ われわれはそこで淫猥限りない歌を、石のロールを曳きながら、聲のかぎりに唄ひ出したもんだ。

親父は困り抜いた顏を、こちらに向けて泣くやうに眼を瞬いてゐた。が、われわれは娘を出さない限りこの淫蕩な歌を怒鳴りたてることをやめないぞと、云つた調子で怒鳴りつゞけた。

晝頃であつた。親父とその母親が、われわれの歌に、迷惑この上もないと云つたやうな顏を見合つて、門口に彳んでゐるのを見た。

われわれはこの卑猥な歌詞に、耳を澄ましてゐる娘を描き、また門口に佇んでゐる兩親を眺めて痛快がつた。

來る日も來る日もわれわれは怒鳴つた。

娘の房子(フワンズ)は死人の家のやうにひつそりとして、水を貰はない鳳仙花は炎天の下に萎んでゐた。が、もうテニスコートも仕上あがる頃になつて、われわれは次のやうな話を聞いたのである。

それは呉海が鷄を捕へた日、彼は娘の眼の色に確信を抱いて、その夜忍んで行つたのだ。無論、一言もなく彼は肱鐵ものであつた。呉海は狂氣のやうになつて

『では何故、あんな眼をして呉れたのか!』と迫つた。

『いや、私はあんたのいい軀にはうつとりしたけれど、苦力のお前さんに變んな眼をした覺えはない』と、かう娘に手ひどく突離されたのだつた。

その翌日から、われわれは娘をもまたその呉海をも見ることが出來なかつたのだ。

(四) トウニヤ

トウニヤは美しい女である。が、レースを透して來る朝の光でよくよく注意して見ると、額にも紅を塗つた頰のあたりにも、小皺がよつて白粉の表面がケバ立つてゐるのを知つた。だから少くとも歳は三十を二つも三つも越えてゐたか知れない。それを思ふと寂しかつた。けれども彼女は仲々の愛嬌者で、おせじの旨い女であつた。私が賤しい苦力であることを知つてゐても『お前さんの家はいゝんだが、金を費ひ過ぎてそんなに身を落してゐるのだらう。』と言つたり、私が血の出るやうな工面をして作つた新らしいルパシカを着込んだりして行くと『ひやあ、素晴しいもんだ。』と、買値より三倍も多く見積つて呉れるのだ。何にもかにも知つてゐる癖に!と思つて『何に八十錢ほどだよ』と言ふと『いやそれにしてもよくうつるよ!色男。』とかうなのだ。俺でなくたつて彼女に惚れる者は山ほどにあらあ。

彼女は俺が二日も遊びに行かなかつたら、入口に突立つてゐて仕事から歸つて來る俺をすぐさまひつ捉へて『何故來ないのだ何故來ないのだ!』と、すごい權幕で怒るのだ。そして怒つたかと思ふと、すぐ自分の部屋(コームナタ)に引きずり込んでベットの上に座らせると、今晩お出で、今晩お出でと接吻の數ほど囁くのだ。盜賊をやつても行かずにゐられねえ、と云ふもんだ。それにそれに他の女共が口唇を鳴らし手を叩いて『愛妻(ゼエナア)の思ひ者よ!』と、かうなんだ。『さうかなア』とも自惚れらあなあ。自惚れ

たつて俺の罪ぢあ無え、彼奴等の商賣が旨いんだ！相憎と彼女の家と、俺の間借してゐる小屋とは脊中合せになつてゐるんだ。だから彼女が彼女の家の入口に突立つてゐると、その傍の路次を潜ぐる俺は必ずひつ摑まへられる。金のない時は實際に悲しくなつて來る。泣きたい氣持で、『今晩は不可い、金がないんだもの』と言ふのだ。が、女は『嘘（ネブラブダリ）、嘘（ネブラブダリ）、嘘（ネブラブダリ）……』と、金髪の赤いリボンで卷いた若々しい頭を、やんちやに振り廻はすだけで、綠色の眼は決して『金なんかいゝから入らしやい』とは言つて呉れないのである。が、私のチエナアはかうやつて、貧乏な男に人知れぬ苦勞を與へはするけれど、仲々感心な女なのである。私が時たまに一緒になにか喰はふと云つても『私はいらないけれど、お前が要（いる）んだつたら注文してあげるよ！私にはお主婦が喰はしてくれるんだからねエ』と云つて感心な氣質をも見せるし、また『ボーイなんかには金をやることはないよ』と、さつさとおきまりだけの金をお主婦さんのポケットに突込むで來るのだ。だから、だから生れて二十何年女緣の薄かつた俺だものちつとやそつと熱くなつて、また餞ハルピンに居堪らないやうな失敗を演じたとてさうさう愛憎を盡かす程のことではないではないか。友よ、主人よ！

さうだ俺が始めてトウニヤを識つたのは、あの北滿名代の蒙古風が吹きすさんで、街も煙突も人も馬車も一切が、濛々たる黃塵の中に、ぼんやりとしてゐ、途中は男も女も鋭く頬に吹きつける砂の痛みをよけるためにも、また眼や鼻や耳や口にぢやりぢやりと遠慮會釋もなく潜り込む黃塵を避けるために、薄いヴェールをすツぽりと頭からかぶり水中眼鏡をかけてこの暴虐無謀な風砂に戸惑つてゐる時であつた。その時は仕事を探して街をぶらついてゐる時だつたので、この突然の風塵に、何の用意もなかつたので俺の困り方といつたらなかつた。眼も口も開いてゐられないのだ。それに何千メートルの空には赭土色の霧が濛々と煙り渦卷いてゐ、洋館の角から街の通りは縱横無盡に、突風が砂を捲きたてゝゐるので、行くも歸るもならない羽目にあつた。俺は無我無中である家の軒先に頭を抱いてかゞんだものだ。

この蒙古風と云ふ奴は東にさへ吹けば砂塵を濛々と渦卷かせる。そして何の豫告もなしにいきなり殺到して來るのだから始末にならない。洗濯物は赭土色に染まり、女の油ツこい髪は、支那人でも日本人でも金髪そのものに砂を着色して了ふ。髪を洗つてもとの黑髪に歸るには五袋の洗粉とタンク一杯の水を湯にして流がさなければならない。家の中はどんなにドアを密閉してゐてもどこからくぐつて忍び込むか、パンも水桶も神棚も

書籍も砂をかぶり、デッキはもとより机も椅子も砂だらけで座ることもどうすることも出來ないやうな有樣なのだ。俺は、その砂塵の中で眼を閉ぎ、口を結んで、頬を抱いたまゝ、とある家の軒先にかゞんでゐたのだ。何の思念もない。呪はしい風がおさまることと、脊がざりつき、頬がぴりぴり痛むことを感じてゐただけだ。倉庫の軒下であつたか、商店のショウウインドの前であつたか、それは解らなかつた。

と、人の足音で、ふと薄眼をあけてみると、そこに白の靴下に柔かく豐かなフクロ脛を包んだ、奇麗な足が、踵の高い靴を揃えて立ち留つてゐるではないか。はつと思つて顔を上げると黑のヴエールに白い面を蒼白くさせた女が、にこッと微笑んだのだ。『日本人（ヤポンスキー）？』さう小聲で呟いた。『然うだ（ダア・ダア）……』思はず叫び反したものだ俺は。何故ツてこんな美形に微笑みかけられたことは生れて始めてのことなんだから。と、女は俺が面を上げた顔付を突嗟に眺めて、乞食でないと見極めたものか、

『そんなところでは大變だ。うちへ這入つて遊んで行かない』

と、なごやかに持ちかけて來たのだ。

『…………』俺は少からず驚いた。遊んで行かないかと云ふぐらゐだから淫賣であらうと突嗟に考へたのだ。『あんな美しいのが、さうか。令孃かと思つたのに——』俺はごくりと砂唾をのみかへして『淫賣にしろ西洋人だから二圓や三圓では濟まないであらうツて』と、突嗟にも返答が出來ない體たらくだつた。

『ねえ、さあ這入らない。まアこの砂！』と女は輕い愕きの聲を發して、白い指先で帽子の鍔をぱちぱちと、思案に餘つて戶惑つてゐる男の心を唆かすのだ。こりや弱い男にとつてたまらない仕草だ！

『ねえ——』と、女が三度の口を開くと同時に俺は俺は、懐には十圓ある、今日これを使ひ果しても明日、早速仕事にありつけば大丈夫な譯だ——と、『よし！』われながら決然と承諾したものだ。女と俺は一塊に抱き合つて、すらりと風埃りの隙を見て、家の中へ飛び込んだ。女が三人砂埃りの机を圍んで、砂だらけの手でトランプを引いてゐたが、飛んで來た俺を目蒐けて六つの眼がパッと焰えついて來たものだ。同輩が砂の街から喰え込んだ客に對する職業的な嫉妬の瞬間的な燃燒であらうが、あの眼は嫌なものだ。しかし異國人であつたセイで彼等の好奇心を唆つたのか、それとも砂にまびれた俺に心から同情して吳れたのか、ブラシュを持ち出し、手拭ひを出し、外套を脫がし、上衣をはいで砂をはたき、ブラッシュをかけて吳れるのだつた。『見なさい、見なさい』女達は面白さうに鏡を持ち出して來て見せるのだ。何んといふ顏だ。鼻の兩脇きとその穴の汚れ

た見苦しさ！　眼のまつげから口のあたりの產毛に砂塊りがむらむらとたかつて、顏全體は安い鍍金の肌のやうに鈍重な色に塗り潰されてゐるのだ！　まア、これが俺の顏か？　それにしても、一體さつきの女はどこへ行つたのだらう。俺をすつぽらかして、お客の始末を同輩にまかし切りにして置くなんて？

俺がさう不平に考へてゐるところへ女がすつかり、顏の砂を洗ひ落して、白粉まで塗つて瀟洒な姿を見せたのである。

『まあ、何んて露助は勝手なものか、自分だけお先きへさつさと身繕ひをされるんだ』俺は考へた日本の女は少くともかう云ふ質ではなかつた。と――

『さあ、こちらへお出なさい』と、女は俺の腕をとつて、また同輩の方へ向かつて、有難う（スパシーバ）、有難う（スパシーバ）を繰返してゐた。

洗面所へつれて來ると、いきなり俺の頭にさあざあと湯を流しかけて、そして眞鵝の泡のやうに石鹼の泡をもみ立てゝ、自分は袖をめくつて一生懸命に俺の頭を洗つて臭れるのだ。俺はたゞ瀬戸の洗面台にひつつかまつて眼さへ瞑つてゐれば文句はない譯だ。頭がすむと今度はシャツを脫がせて身體の洗濯だ！何んて何んて露西亞女は親切であることか。感心なものだ。彼奴等は、若し亭主を持てば、母親が子供を洗つてやるやうに親切な愛情を籠めて、頭を洗ひ　手を洗つてやるだらう。俺はうつとりと女の柔かな手に身體を拭せながら、そんな空想に耽つてゐたものだ。

『それ、まア奇麗になつたこと！……』と、いきなり口唇に××××××來たものだ。俺は口唇を與へながら薄眼をあけると、金髮の美女の白い腕の中に、窮屈さうに苦笑してゐる俺が、またその前にゐるではないか！鏡よ！俺は幸福だよ。

かくてかくて俺は女の幸福に醉ひ痴れたのだ。

『女の愛を怖れよ、その幸福の毒を恐れよ！』と、イワン、ツルゲネーフの言葉が切々と思ひ浮ぶ時分には俺の腦は借金と不義理を、背負ひ込むだけ背負ひ込んでゐたものだ。が、ちつともそれを悲しむ心はない。拂へない借金は返せる道理がないし、犯かした不義理はもう取りかへしがつかないのだから、そんなことを思つてみるのは野暮といふもんだ。

愛するトウニヤよ！　お前はお前の血の出る公休日には誰れと活動寫眞館に行つてゐるか？だがお前は苦力などにその幸福を與へるなよ、月給を五十圓もとつてゐる紳士であつたら、お前は感心に客に仕末をさせる女だから永遠に樂しみを惠ぐんでやることが出來るであらう。



家の靈

里見弴

×

こゝろ長閑に隨筆の類を作るのは、誠に樂しい仕事だが、與へられた標題と締切とを前にすると、同じことでもさうこゝろ長閑にはなれない。だから私は、平生さういふ仕事は一切お斷りしてゐるのだけれど、今度はどうしたはずみか、ついうつか

家

り引受けて了つた。今更どうしようもなく、ほんの責ふさげだけに書く。

×

人の拵へたものには、必ずその拵へた人の心持が籠るか現れるかする。仕事にかゝる時に、誰しもさうなげやりな氣持でゐる筈のない家などは、尙更建てた人の氣性どほり、精神どほりなものが出來あがる。陰氣陽氣はもとよりのこと、性の善惡さへも現はれる。人のいゝ家がある。惡相の家がある。金をかけて下司ばつて見えたり、簡粗でも淸雅の趣を備へたりするのは理の當然と云はなければならない。この別れ目が、築造に與つた請負人とか大工とかの心によるよりも、實際には釘一本うち

込みもしない持主の心によつて定るところが面白い。細に云へば、工匠の心も無論現れはするが、これは大體からの見方、云ひ方である。

×

更に氣をつけて見ると、住みてによつてもだいぶ家の相は變つて來る。變り得ない場合もあるが、實際には何等の改築をも加へないのに、屋内の感じが一變して了ふ場合も決して少くはない。

居は人の志を移す、と云ふが、人もまた居の相を變ぜしむる力をもつてゐる。あたり前の話で、衣食住の他の二つ、――つまりもの丶食ひやうを見ても、着物の着方を見ても、その人となりはほゞ疑ふことが出來るくらゐなのだから、まして住は、がかいから云つてもなかで一番大きい。

×

つい先達のこと、上の子供たち二人と二階の屋根にあがつて、その大棟のまんなかから南へ向けて放つた舊い小便の跡を發見した。建て丶半年たつかたゝない銅には、一條の流域はもとより、點々たる餘滴まで、色うつくしい綠靑をふかせて、それが他のどんな筒先から洩れたものでもないといふことを瞭然と物語つてゐた。大方職人の仕業だらうと思ひながら、子供たちを顧て、これなんの跡だか知つてるか、と戯れたところ、二人顔を見合せて、怪しく笑ひ出した。君たちだな？　私はさう云つてから、すぐ續けて、家にはちやんと靈があるんだから、その頭のてつぺんから、額にタラ〳〵と小便をかけたりしちあ勿態ないではないか。ばちがあたつて、ちんぽこの先が曲つて了ふぞ、と云つた。無論笑ひ顔で、叱るといふほどの氣持で云つたのではないのだが、その、家には靈がある、といふ一語は、子供たちの胸へも、なんとなくヅシンと響いたらしく、忽ち噤んで、ひどく恐縮の色を浮べてゐた。成人の後この言葉を思ひ出す日があるかどうか。

×

三十一歳と三十九歳とに、私は二軒家を建てた。その時々の私の心は、おのづとそこに映つてゐると思ふ。

尤も今度は、妻の注文にまかせて、自分にはさう欲してゐない洋風の建築にしたが、その、妻の望みにまかせたといふところにも、私の心の反映はある。別棟に四疊半の仕事部屋を、これこそ自分の心のまゝに建てたいと思つてゐるが、今のところ

金の都合がつかないので、一人胸のうちに、何度となく建てゝは崩し、建てゝは崩しゝてゐる。

×

忠實や親切がだん〲世の中から薄れ去らうとしてゐるやうに、常々私には感じられてゐるのだが、前の時と今度とを比べると工を託した人々の心に、一層その證左を見ることが明かだつたのは年もいかないくせに普請など好な私にとつては、却つていい薬になるのかも知れない。人と抗爭することが嫌ひで、而も晏如として他のなすに任せても置けない中途半端から、時々私は心に憤りを藏するやうなはめにも陷らなければならなかつた。金錢の絡る人との交渉が多い故に、普請にも少々懲りた態はないでもないが、然しなんと云つても、これは樂しい仕事だ。何から何まで悉く自分一人で出來るものだつたら、或は私は小説さへも擲つかも知れない。

×

衣食住に對する關心が薄いといふことは、その人の、事業に對する熱情に覆ひ盡されてゐる場合だけに立派な意味をなすので、それ自身として少しも自慢になる話ではない。無論それに費される金高の問題ではなく、ただ〲心の現れを云ふのだか。

繪で見れば仙人も着物は着てゐるし、人食人でも腰の周りには何かしらぶらさげてゐる。早く云へば、家も又表情の如きものだ。內容即表現だ。

病室兼仕事場

山川　均

○

山川均氏が一萬數千圓を投じて宏壯な大邸宅を建てたといふ大々的な記事が某新聞に現はれると、一番にかけつけたのが、この問題の大邸宅を建てた大丞さんといふ棟梁であつた。自分の建てた家のことが新聞に出てゐると聞きつけ、名棟梁としての肖像くらいはむろん出てゐると思ひこみ、早速鎌倉の町までその朝の新聞を買ひにやつた棟梁さんは、請負金額の數倍の値うちのある家を建てゝみせる自分の腕前については、生憎記者

先生が書き落としてゐたことを發見したので、非常な失望と不滿を感じたのであつた。『この次にはぜひ私のことを出して頂きたいものです、何しろこれだけの廣告をするには、とても千圓ぢや追つ附きませんからな。』棟梁さんは三度ばかり繰返してこう言つた。

それに引きかへ私の方は、料金一千圓の値うちのある大々的なる廣告の利目で、忽ちにしてこの家の持主に成りすました。大邸宅だけ貰つたのでは、定めし困るだらうといふ行屆いた親切から、拔かりのない記者先生は、一萬數千圓の邸宅にふさはしい暮しをするようにと、八百圓の月收まで添へて異れたのである。尤も鎌倉通信には、山川氏の月々の收入は千八百圓とあつたそうだが、これは多分編輯局で要求過大と認められ、一千圓の削減を蒙つたものらしい。それにしても千八百圓の月收から、本人に無斷で一千圓も頭をはねるのは、聊か亂暴と思はぬでもないが、たゞの八百圓にしても結構だから、大邸宅と共に遠慮なく頂戴しておくことにする。

お蔭で村の信用も高まつてくるし、その朝から御用聞の愛嬌もよくなつた。先づこのあんばいなら、一旦緩急あらば月末のお拂ひに一ヶ月くらいのモラトリアムを布告しても、あへて信用の動搖する氣遣ひはあるまいと思ふ。

○

一國の歲出の三割四割を軍事費が占領してをれば、その國は軍國主義の國だといふことになる。或る社會層の人々は、その收入のうちのどれだけを、どのような必要に振り向けてゐるかと云ふことは、統計の上ではほゞ平均の數字で出てくるが、一人一人について見ると大變な相異があり、この振り當ての相異は、やがてその人々の生活の特色になつてくる。月々の收入の大部分で、酒屋のお拂ひをする人もある。私のところでは、酒屋の勘定が一錢もない代りに、酒呑が酒を呑むほど藥を呑む。暖い日曜日に、子供をつれて花見にでも出掛けようといふようなことは、私のところでは先づ五年に一度もない。芝居を觀ることも音樂會を聽くことも、子供に活動寫眞を見せたこともない。外に出るといへば、親子三人が注射のために東京のお醫者に通ふこと、よくよく天氣がよくて身體の具合のいゝ時には、その足で銀座の松坂屋の六階で犬の仔を見物して歸るくらゐが關の山である。被服の費用も最低限度ですむ。私は震災後の二年間關西に移住してゐた間に、三足の下駄を買ふたゞけだつた。この方面では、私の生活は極めて安上がりで、多くの人の場合に收入の可なりの部分を取る家の外の費用は殆んど掛らない。

しかし家の外の費用が掛らぬ代りに、收入の大部分を家に費やすことになる。

衣食住の三つのうちで、何が一番大切か？これは馬鹿々々しい問である。しかし衣食住の必要が、ほゞ滿たされて居り、さて、その上で幾らかの餘裕を生じたとした場合には、衣食住のうちのどの費目にこれを振り向けるかと云へば、私の場合には、家に振り向けるにちがひない。一日のうちの大部分を、住家以外の廣い世界の活動に送つてゐる人々には、家は主として寢るための家であるが、私の場合には、家は病室であり、仕事場であり、或る意味では世界の大部分と云つてもよい。家は直接に身體に影響するし、直接に仕事の分量に影響する。そこで二人ともが、一年の大部分を寢床の上で過ごすようになつてからは、私のところでは、家賃が生活費の三分の一を占めるのがお極まりとなり、時としては生活費の半分を取ることもある。

○

と云つて住家に對する私の要求は、さほど過大なものではない。第一の條件は日當である。貸家を探す時には、一番に日當が問題になる。私の健康には、寒さが第一の强敵だが、日本の家には殆んど防寒や保溫の設備がない。室内を七十度の溫度を保てといふやうなことは、病氣の惡るい時はいつも醫者から言ひ附けられるのだが、がたぴしの借家で寒中に室内を七十度に溫ためるには、二つも三つもの火鉢に一杯に火を入れても追つ附かぬ。この點では、世界ぢうで一番よい氣候のうちで暮してゐるつもりの日本人が、ことによると一番寒い目をしてゐるのかも知れぬ。

その次には、別々の病室兼仕事場が二つと、子供のゐどころとして獨立した一室のあることだが、この條件はなか〲六ケ敷しい。それこそ『宏壯な大邸宅』なら兎も角、私共に手の屆く程度の家賃の家では、あらゆる善いことは唯だ一室に集中せられてゐる。部室の廣さでも採光と日當でも、用材でも、または床の間やナゲシと名づける埃溜めに均しい無益な裝飾でも、たゞ一部室をなるべく立派にし、多かれ少なかれ其他の室はその犧牲になつてゐる。これが謂ゆる座敷であつて、一家の君主の玉座であり、來客を請ずる應接室でもある。その次には茶の間があつて、これは數段、等格が下がるといふあんばいになつてゐる。一家が一小王國で、專制君主のしろしめす家族では、なるほどこれが適當な間取りであるが、男も女も成人も子供も、大體において同格の友人つき合ひをし、しかもその内に二人までが年ぢう病人生活をし——病氣もする同等の權利を持ち

―二人とも終日、生活のための仕事をしなければならぬ私のところでは、かういふ間取りの家はどれほど立派で「宏莊」でも、家としての私共の要求を滿たして吳れぬ。

第一、座敷などといふ特別に立派な特等席が、私の生活には全るきり必要がない。家のうちの特に立派な部分をお客に見せる必要も全然ない。特に一室だけを、廣くして置く必要もない、日本流の座敷でなくとも、家族が集まつて即ち一家團欒して――ラヂオを聽いたり、ピアノを彈いたり、蓄音機をならしたりする文化的な廣間も、まづ私の生活には必要がない。夕飯の後で、家族が集つてくつろいで樂しむことは、決して惡いことではな時間を取られることは考へものである。それで私のところでいが、仕事に一番必要な夜のは、仕事の邪魔をされぬため、子供は小さな頃から、日が暮れると直ぐ寢かせることにし、十一になつた今日でも、八時には必ず寢るので、いつかも初めて月夜の光景を見て、非常に不思議がつたことがある。近頃は、文化人の家庭は子供中心といふことになつてゐるさうだが、子供のために親の時間を犧牲にしてしまつても忽ち困るから、そこは『折衷主義』で折々は子供の權利の方を犧牲にすることもある。今日まで子供の權利を大に犧牲にして來てゐるもう一つの罪跡は、鳴り物禁止である。私のところでは、太鼓とか笛とかラツパとか、いやしくも鳴り物と名のつくおもちやは、子供がどんなに欲しがつても、一切持たさせたことがない。鳴り物は仕事の邪魔になる。つまり家のうちの安寧秩序を紊亂するからである―各人が自由に病氣をし、各人が自由に仕事をし、勝手な時に寢、勝手な時に仕事をし、それが互いに他人の迷惑にもならず、他人からも妨げられないといふことが、仕事と病氣をするために活きてゐる私共の生活の必要なのであるが、それには何と云つても、家の構造が先づ第一の條件になつてくる。

○

ところがこれだけの條件は、安い家賃では――相當に高い家賃でも――なか〳〵滿たされない。病室兼仕事場――子供の場合は遊び場――となる三つの同じほど良い部室のある家と云つたら、よほど大きな家でない限りは見附からない。

その上、震災後に關西に移住して以來は、どうした物の間違ひからか、私の身邊には或る筋の目が光つてゐる。これが家を借るために非常な妨げになる。折角思はしい家を見附けて前金まで拂つておくと、直ぐそのあとから、いやに目附きの惡るい人間が往つて、幾らで貸した、どういふ手續きで貸したかなどと、分かりきつたことをほぢくつて聞く、おまけに、貸すのは

自由だが、あまりにお爲めになるまいなどと附け加へる。それで大抵、急に『先約のあることを家內が知らなかつた』か何かで、甚だお氣の毒だがといふことになる。ひどいのになると、大家さんとこの怪しい目附きの人とが肝膽相照らし合ひ、正面からは家賃の引上げ、搦め手からは貸家搜しの邪魔と來る。こうなると家賃が高い安いなどとは云つてゐられない。先づ良さそうな家でさへあれば、いくら家賃は割高でも、最初の貸し手から借りるといふことになる。

こうした內外の『情勢』の結果として、近頃では、家賃が生活費の三分の一どころなら有難い方で、大家さんへの奉仕が生活費の半分を占めることが珍しくない。その上、厄介な本棚をもつて、一年に何回もの引越し騷ぎをさせられる。關西の二ケ年間にも四回の引越しをし、震災後の四年間には、都合八回の引越しをした。

○

震災前には、住宅難の個人的な解決策として、ある親戚の厚意で大森にほゞ私の要求に應じた家を建てゝ貰ひ、銀行利子くらいの安い家賃を拂つてゐた。この家には二年ばかり住まつたが、地震で潰ぶれてしまつた。大森では、やはり鎌倉あたりの海邊に家を借りて折々轉地の必要が起るので、今度はその必要のない鎌倉に、前と同じ方法でこしらへて貰つたのが、この『宏莊な大邸宅』なのである。『新聞の寫眞で見ると、北海道の牧舍見たいで、目の保養にはなりさうもないが、うまい苺があると聞いては目の保養に行かずばなるまい。』親友のAはかういつて來た。B君は『遠方から見て、小學校が建つたのかと思ひました』と云つたが、××社のYさんは內部を御從覽のあとで、『小さな部室が並んでゐて、學校の寄宿舍のようですな』と云つた。小學校はまだよいが、一萬數千圓の大邸宅を北海道の牧場の番小屋に見違へられたのでは、第一『大家さん』も默つてゐまいと思ふ。

尤もこの家が妙な殺風景な家だといふ範圍では、私自身の生活の特殊な要求が、少なくとも七〇%ばかりは取入れられてゐる。しかし終りの三〇%では、私以外の人に貸ることも貸すこともできる若しもの場合の餘地が殘してある。『御親切ついでに、一萬數千圓で買ひ手の世話がして貰へると、そのうちでもう一軒家を建てゝ、そつくり貴方に差し上げてもよい。』この家を建てた親切な親戚の老人は、こう云つてくれる。一萬數千圓で買ふ人はないか―

子供達の巣

徳田秋聲

私は幼少のをり維新の瓦解の後を受けた時代に貧しく育つれせいか、或ひは末子に産れたせいか、或ひは又た東京へ飛出して來て、衣食して行くことにばかり焦心つて、長いあいだ下宿屋の飯を食つて一日も落着いて生活を樂しむといふ氣分になれなかつたせいか、兎角家といふ觀念に乏しかつたが、しかし多勢の子供を引連れて五六年前に住みなれた今の家から、遽かに立退きを迫られた時には、さすがに悲哀を感じてしまつた。しかし其が反對に、友人の好意よつて、自分の所有に歸した時に、これから先き生長して行く子供達のために、この家が何んなに手狹で古びてゐるかと云ふことを、年一年まざ〳〵と見せつけられて、少しは自由に手足を伸ばして起伏のできるやうにしなければならない必要に迫られつゝあることが、可なり私の氣持を苛立せたものである。しかも私は精神的にも唯物的にも安定を得ることが出來ないとほり——又た得ようとも思つてゐないし、生きてゐる以上、得られる筈のものだとも思はないが——居といふことに思ひを凝らしはじめると、どこに其を求めていゝかに迷ふのである。結局どこでもいい譯だが、一と頃は新しい郊外の住宅地へでも移つて、長いあひだ溜り〳〵して來た生活の滓や垢を、外部からだけでも洗ひ落さうと思つたこともあつたけれども、私の無精がつい又ここに舊居の増築と云ふことに落着かせてしまつたのである。

私にも色々希望もないことはないけれど、原稿料で好い家を建てるのも氣かしい譯だし、また思ひどうりのものが建てられる譯もないので、大體の間取りだけを示して、或請負師に全部委かしてしまつたのである。勿論持合せの金といつても、少し好い建築なら、私の六疊の書齋一つ作ることもできないくらゐの額たので遣りだす技にはずいぶん不安を感じたけれど、そんな事をいつてゐた日には何時たつても取りかゝる時期がないので、切めて子供達の生活氣分だけでも明るくして、落ついて勉强してもらひたひと思つて、去年の秋、遽に思ひたつて、ばた〳〵と遣つけてしまつたのである。大變意に充たぬし下目山なものが出來てしまつたわけだが、比較的手丈夫には作つてくれた。たゞ普請といふものが、それが何んなに安價なものであるにしても、取りかゝつてみると、完成までにづゐぶん氣骨

の折れる、厭な仕事だといふことを熟々感じさせられたので、二度とこんな面倒なことは遣りたくないと思つたのである。電氣の設備にしろ、水道や瓦斯の引込みにしろ、その他些細の點で、大工や職工は、少し此方がぬかつてゐると、何をするか分らないと云ふことに氣づいて、自身現場へ出張して、がみ／＼やらなくちやならなかつたことは、私としては非常な苦痛だつたのである。結局現代の――或は昔しからか――人間がいかに相互に無責任で橫着になつてゐるかを、家の建築で尤も顯著に感じさせられた譯だが、まだしも前金を持逃げされたり、中途で居直つたりされなかつたゞけが見つけものだと思つてゐる。勿論他の建築を知らないから、私の場合などは寧ろ幸福なものかも知れない。

家

私は今家や庭について、何等趣味的な好尚をもつてゐないが、本當のところ今少し氣分の落着きどころとしての感じの好い書齋の一つくらゐはほしいと思つてゐるけれど、しかしそんなものがあつたところで、反つて子供達を增長させるばかりなので、仕事のできる程度で滿足しなければならない。

で、家も家だが、それよりも私は木石の方がいくらか趣味を感じられるので、妻の存世中二度ばかり植木屋を入れたこともあつたが、勿論粗雜極まるもので、むしろ自分の任意に木を植えておいた方がよかつたと思ふのである。から云ふいたづらも今はすつかり興味が亡せてしまつてゐる。そんな事に心を勞する隙に、好い作品をうみだすことに專念したいと希つてゐる。

私の新居と裏の廢屋との床の下に、此の頃大きな野良犬が三匹ばかり潛りこんでゐて、夜になるとのそ／＼出て來ては庭を荒らしたり、厭な悲鳴を擧げたりして私の夢を驚かせる。しかしそれを逐出すのすらが、なか／＼困難である。私は家を廣くしたゝめに少しは暢びりした氣分になれたことは事實だが、それと同時に却つて生活の複雜混亂を來したことも爭はれない。

私と家

村山知義

一時私は建築に心を奪はれてゐた。何を見ても建築の事しか考へなかつた。構成派の究局は建築だと思つた。建築家を世にも羨ましいものと思つた。私はとうとう借金をして奇妙な家を建てた。が、愈々、經濟がたたなくなつて去年の暮、現在の

家へ引つ越した。此處は普通の借家建で、一軒長屋で家賃が二十七圓で三間しかない。ここに私は六ケ月住んでゐるが萬事非常によろしい。窓から眺めるとトタン屋根が瓦屋根に劣らずに勢力を張つてゐるので、來ようとしてゐる夏の熱の反射を思はせるが、窓が北向きなのでしのぎよいかも知れないと安心してゐる。

私はこの窓の下に机を据えて私が生れてから今迄のうちに住んで來た種々の家達の事を思ひ出す。

私の生れた家は神田明神の下の大きなドッしりとした古い建築だ。此處で祖父が醫者を開業してゐた。家は庭や廊下で隔てられて四つの部分に分れてゐた。一つは診察室、藥局、待合室、書生部屋などを含む營業用の一廓であり、そこから五十米突程の長さの、妙に傾斜のついた廊下でつながつてゐる中央の一廓が、祖父の一家族と、私の父母の一家族との住んでゐる部分であり、今の長い廊下の途中から、變な押入れの戸みたいなものを開けると行くことの出來る一群の部屋が「おはなれ」と云つて、叔父の一家の住む所であり、建物全體の一番奥にある「お二階」がもう一人の叔父の部分であつた。杉戸、へつつい、藏、行燈、いたちの現はれる池、何か物を動かせばぞろぞろと油蟲の這ひ出す台所、拔毛の落ちてゐる女中部屋、この家に私は五つの年迄居た。

その次に大軍醫である父が日露戰爭中に勤めてゐた三浦半島の走水要塞の家がくる。私が住んだ一番殺伐な家である。家は山の中腹にある。急傾斜なひどく高い石段が下の漁村と私の家とをつないでゐた。中途でとまつてしまつたケーブルカーである。家の眞上には十に餘る隱見砲台が、精鋭な大砲を擁してゐた。すぐ右手には觀音崎の砲台が氣味惡く海の中に乘り出してゐた。家のちよつと下の所に大きなお寺と瀧があつた。海には軍艦が動き廻つてゐた。サーチライトが毎夜神經質に暗い空をつんざいてゐた。私の家の中は蛇に占領されてゐた。一間近い青大將が、階子段の中途にも、湯殿にも、蚊帳の上にも、庭にもゐた。父は二階で長い軍刀を振り廻して劍舞をした。正午になると高い石の階段を、岡持をさげた兵曹長が上つて來て、ABCの浮んだソップを恭々しく差し出した。或夜サーチライトが漁船を敵艦と見誤まつて、電信を戰慄させた。山の上の隱見砲台が口を開いて、實彈をグウン、グウンと吐き出した。そして私の家の障子はビリビリに破れて閾からはづれて落ちた。

その次の年に私は沼津に行つた。父はそこで醫者を開業しようとした。その準備時代を私達は裏の方の町の、暗い、格子の嵌つた女郎屋見たいな家ですごした。この家の事を私は一番覺

えてゐない。たゞ、一年中日のさゝない小さな中庭があつて、そこで私は一杯生えてゐる苔にひどく便利を感じながら、當時大流行の箱庭を造つたことだけを覺えてゐる。その箱庭は必ず戰爭の實況であつた。火災や砲彈の爆發を現はすための赤い綿や黒い綿が玩具屋には安く用意してあつた。

愈々父は沼津の目拔の場所に開業した。此處は藝妓町で、打つて變つた明るい廣々とした料理屋風の家であつた。戰爭が濟んで世の中は浮れてゐた。私は小學生生活にはいつた。苔は生えてゐなかつた。日向で私は青寫眞を燒いて遊んだ。黒い紙の上へ白い線で拔いてある畫題は旅順口の閉塞、得利寺の大會戰であつた。二階が病室になつてゐた。そのはづれの部屋の前をふと通り過ぎて私は唸り聲を聞いた。覗くと中で父は五十位ゐの老人の腹へ指程の太さのゴム管を通してドス赤い液を取つてゐた。ガラスの器の中にはもう二升程の惡液がたたえられてゐた。

營業は成功して父は病院を建てた。この家を私はまだ殆んど手に取るやうに覺えてゐる。父が死ぬ迄五年間私達はそこに住んでゐた。トタンとペンキと大屋石との安建築ではあつたが、長さ半町程のその大きさの故に、私の友達や敎師や近所の人達は私を尊敬した。この家のお陰で、私は弱蟲のくせに暴君として振舞ひ得た。

門をはいると玄關が二つに分れてゐた。一つは病院のであり、一つは住居のであつた。私は住居の方の玄關の柱の陰から、私のひそかに戀してゐた同級生が藥を貰ひにくる姿を、勿體ないものとして眺めた。私達は車夫部屋で初めて演劇を演じた。乞食が毎日のやうに台所に姿を現はした。實驗用の兎やモルモットや鷄が中庭に飼つてあつた。その中庭を越えて病室から蓄音機が響いて來た。看護婦室に行くことを嚴禁された。凡そ病院の方の建物を私は嫉妬した。行くと肩をしかめて追ひ出されるからであつた。しかもそこの部屋部屋には見知らぬ世界がそれぞれ開けてゐると思はれたからであつた。

この家で多くの人が死に、私の父もまた死んだ。私の家は沒落し、我儘を云ふことの出來る少年時代は過ぎ去つた。私達はまだ祖父母の住んでゐる東京に近い大森に越すことになつた。私達は最早收入の道を失つたので僅かばかりの利子で生活することとなつた。父は病院を建てるためにした借金をやつと返し終つた所で死んでしまつたのである。

母は私を失望させまいとして、大森は田園で、そこで私達は小さなさつぱりした家にたつた四人で住むのだと云つた。（百人近い大家族からたつた四人！）そこで私は夢を描いた。小さ

な丘の上のバンガロー、木の柵と眞白な羊の群。

所が愈々汽車にのつて行つて見ると、それはドブを隔てて鐵道線路のあるたつた三間の傾きかかつた古い家であつた。私は悲嘆し、祖母も悲嘆した。そこで母は決心して山の手に小さなしかし日當りのいい家を建てた。

しかし家運は愈々傾き、私達は日暮里の低い暗いジメジメした所に引越した。家の前は貧民窟であつた。家の隣りにアトリエがあつた。私はその垣根の根元に棄てゝあるチューブのかすを拾つて溜めた。私は始めてそれで油繪といふものを描いた。

たうとう私達は目白に越した。五棟並んで、投げ棄てたやうに建てられた二軒長屋である。私の受驗時代にふさはしい樣な家であつた。

蠟燭の消える前のやうに、私と母は跳ね返つて、落合に地面を借りてバンガローを建てた。傾斜地、赤瓦の屋根、白い窓。サルヴエーション。ハンタースの「此處であなた方の理想が實現する。」といふ立札である。しかし建築としてはまづい建築である。なつてゐない。

また一軒そのすぐ前に小さいのを建てた。これは小さくて無駄がない處でちよつと評判になつた。たつた九坪の空間があらゆる角度で切つてあつた。家が私の望を解放した。私は獨逸に行つた。既に經濟はマイナスである。マイナスは益々大きくなつた。獨逸で私は大ホテル、大ブルジョアの家から段段沒落して、たうとう屋根裏に迄到つた。私はあらゆる形式の家を見て、建築病にとりつかれだ。苔と貝殼と岩の間からの滲んでゐるバロックのカペルレから科學を表象したアインシュタインの塔迄。

私は歸つて來て三角の家を建てた。母が泣かむばかりにして借りて來た金でである。寢てゐると露き出しの太い梁がまつしぐらに落ちて來さうである。地震の時には三角の頂上がこんにやくのやうに揺れた。此處で私は妻をめとり、子をつくつた。妻は不精で家をよごした。暗い部屋は當時の私の表象であつた。大きな借金を背負つて私はこの家と一緒に過去と絕緣し、同時に建築とも緣が切れた。

もし去年であつたなら私は建築について實に多くの齊くべきことを持つてゐたらう。しかし「現段階」と建築との何といふ緣の遠さよ？

さて私がもう一遍新しい意識の上で、建築に對する意欲を取り返せるのはいつか？

家を四五軒

近松秋江

「中央公論」では、近頃、僕のところへは、二段ものゝ寄書きくらゐしか頼みに來なくなつた。——といつても「改造」では凡てが二段ぐみであるし「中央公論」にも一段ものゝ小説を書かねばならぬ、大なる義務があるのだが、延引してゐる次第である。

新築のことについて書けとのことであつたが、三月號の「新潮」にも、一寸そんなことについて、氣に向いたものを書いた。あれ以上に、もう、こんな詰らない家を建てたからとて、改まつて御披露申すほどのことでもない。尤も私自身にとつては、これでも精一杯であるが、先日も後藤新平子の御家を拜見さして頂いて、その立派なるに驚いた。微々たる小説家が四室か五室の小家を、些かな借金をして建てたりしたことが、「中央公論」の如き第一流の雜誌の掲載資料になるといふことは、いかゞなものか。勿論鴨長明の九尺四間の方丈や、西行の吉野の幽棲の庵などが、攝政關白の豪宅よりも意義があるとすれば、強ち僕の陋屋の記も無意味でないかも知れぬが、私にはどうも、あんまり好い氣になつて吹聽出來ない。私が、これから先き二十年も生きて、今日の後藤子爵と同じ年齡まで生存へても、あんな立派な豪宅を經營することは望めないことだとすると、もう家を建てるのもその意味では、厭になる次第だが、私はこゝに假りに參萬圓の金が有るとしても、それを以つて一つの家を建てたくない。小さい家でも可いから、私の理想をいへば、熱海か何處か冬暖かい土地にも一つ欲しいし、富士山麓の湖畔といつたやうな夏凉しい土地にも山莊が欲しい。それから京都の北山あたりにも欲しい。尚ほその上に神戸の東郊住吉か灘あたりにも一軒ほしいものだと思つてゐる。こんな空想を悉く實現することは不可能にしても、あと、もう二ケ處くらゐには小さい家が欲しいと思つてゐる。私は街頭の活動家でないから菊池寛氏の如く自動車はあんまり必要でないが、落着く家が欲しい。

三月號の「新潮」にも既に書いたことで、又々重ねて繰返す、ことでもないが、私の家は菊池寛氏の自動車一台ほどの家である。が大工に拂つたのがそれだけで、井戸や植木屋や仕事師に拂つた金を合計にすると、やつぱり七千圓くらゐになつてゐる。タカが七千圓の金とは情けない。しかし吾々分際でもそれ

だけの家を造るに全部借金とは更に情けない次第である。ところが住んで見ると、あんまり大きな家も入らぬものだ。家ばかり大きくたつて、致方がない。これは大變な實例を申すやうであるが、あんまり大きな家を前後の思慮もなく建てゝ、主人が歿後に賣り物に出すといふやうなのは、あんまり感心せぬ。近い頃新聞に書いてあつた、故村井吉兵衛氏の山茶花の局の御殿だとか、山本虎大盃の千駄ヶ谷の邸宅だとか、熱海にある内田信也氏の別莊が建てゝ間もなく根津嘉一郎氏に賣られたとかいつたやうなのは、私分際の四室五室のバラツク普請とは異つてゐるとしても、建てゝ間もなく人手に賣り渡されるといふのは、味氣ない心地がする。その點になると、私の陋屋など、自分の死んだ後で、家内子供の女どもが、小體にも世を住み佗びるにも氣の張らぬ程度のものである

おゝ、まだ〳〵好い實際の例である。死んだ政友會の岩崎勳氏の品川の御殿、横田千之助氏の青山の邸宅。政治家の住宅は又吾々小說家の住居とは段ちがひであらうが、主人の歿後、一週忌も過ぎぬに、遺族が他に移轉するといふやうなのは、死んだ佛も浮ばれない。私は、甚だ負け惜みのやうであるが、自分の死後直ちに賣却しなければならぬやうな家は建てようとも思はぬ。

その話をしたら、中央公論の社長の麻田さんは、私の心を賞めて下すつた。麻田さんは、いふ。

家の内にゐて、おうい―と聲を掛けて、誰れかにすぐ聽える程度の大きさの家が便利である、と。

私もさう思つた。私の家には呼鈴も何にも設備がない。おうい―と、私が怒鳴つて女どもを呼ぶのだ。ところが、いかに小さい家でも、襖や、壁が出來てみると、なか〳〵おうい―と呼んだくらゐでは聽きとれないことがあるので、これでもまだ大き過ぎるかと思つてゐる。玄關にも呼鈴など取付けぬつもりであつたところ、やつぱり來訪者が、玄關の外で御免下さいと呼んでも、裏の井戸端で女中が洗濯してゐるところへは聞えないので、玄關にも呼鈴を取付けた。廊下の曲り角に電燈など餘計なものと思つてゐたところ、やつぱり夜間便所に行く時に暗くつてならぬ。そんな次第で此の家でも大きいと思つてゐる。

それから、この機會に、事序で誠に失禮であるが、私が微力を以つて陋屋を造つたのを殊勝なりとして紫檀の書棚を祝つて下すつた方々の芳名を記錄して深謝する次第である。それは私の陋屋などには過分な品である。

德富蘇峯氏、麻田駒之助氏、佐藤義亮氏、同義夫氏、山本實彥氏、菊池寛氏、德田秋聲氏、正宗白鳥氏、上司小劍氏、中村武羅夫氏、長田幹彥氏、吉井勇氏、加藤武雄氏、細田源吉氏、三上於菟吉氏、島田賢平氏、池田孝次郎氏、平井程一氏、近藤英男氏、森詳忠造氏、

「艶道通鑑」覺え書

本間久雄

私は、この程から增穗殘口の『艶道通鑑』を異常な興味を持つて讀んでゐる。

『艶道通鑑』は、正徳五年の出版で、神祇、釋教、雜、無常の戀を六卷にわけて書いたものである。西澤一鳳の『傳奇作書』にこの書を評して「昔より歷々の戀知りの情を書き、當世の薄情を誹り、いとおもしろき書なり」と云つてあり、又俳人一茶なども、旅行のつれ〴〵には必ずこの書を携へたと傳へられてゐるのを見ても、徳川後半期には、この書が、相當に愛讀されてゐたことがわかる。この書ばかりではない、その『七部集』が、平賀源内の『風來六々部集』のヒントとなつたと云はれてゐるところを見ると、殘口といふ人の感化や影響も相當に大きかつたことも想像される。

寛政年間の編述にかゝる『諸家人物誌』によると、殘口は國學者の中に編入され「名は最中姓は源增穗大和と稱す。豐後の人京に到つて某王の府に仕ふ。國學を好み博通を以て稱せらる。享保二年九月歿す。歲六十三」とある。大川茂雄南茂樹二氏共編の『國學者傳記集成』には殘口の生地を大和とし、京都近衞家に仕ふとしてある。尙、この『傳記集成』に引用してある『ぬなは草紙』といふものによると、殘口はもと日蓮宗の僧で後神道に這入つた人だといふことである。この『ぬなは草紙』は、佛徒の手になつたものか、大體において殘口のことを嘲弄的にいつてゐる。

「近年上方にて名高き增穗大和、號レ殘口、是等は一向、國史、格式の沙汰へはいたらず、大方は、熊澤次郎八が、集義和書外書などより、出ぬきて、これを神道と云ひかへ、名目をめづらしくして、神代卷も、字義故實には、ひとつも、かゝらはず、たゞに佛法を打やぶる風流講釋なり。」

『ぬなは草紙』はかう云つてゐるが、しかしこれは或る程度まで當つてゐるらしい。『艶道通鑑』の神祇の戀などを見ても、決して字義や故實にはかゝづらつてはゐない。安政五年に出た新山下只軒居士といふ人の『艶道通鑑批評』と題する一書は、個々、殘口の字義や故實や格式に無頓着なことを嘲笑したものであるが、殘口は故意とさういふことにはかゝはらなかつたであらう。『ぬなは草紙』は更につゞけて云ふ。大阪あたりでは、血氣の者多く殘口の說を面白がつて、佛敎を輕んじ、俄かに佛壇を川に流し、座敷の眞中に鳥居を立て、たがひに命號をつけて神のやうに心得、木綿襁に臂をいからせて、皆、神道家ぶり、その結果、父がなくなつて、殘された母親が、近所となりの信心者を集めて念佛講の仕度にいそがしい折柄など「なすこが祓給へ、濟め給へに、心おかれて、志も空しく、さても生き甲斐なき世とかこつ類多し」といふことゝなつた。「よしや佛法は、あしきものにもせよ、しみこみたる老人、今更、いかにして改めんや。志をやしなはさるは不孝これより甚だしきはない。「この流儀、はやるにつけて、京にても、身上ともかくもする町人など、弟子になりて力を加ふ。しかし、この門に入るものは、とくと、論語素讀のゆくものなし。垂加などとは大きに格段おとれり。殘口も心には、下化衆生と心得てなすにもせよ。是等は神學者とも神道者とも名づけがたし。佛法叱といふものか。惣じく坊主落ちは、かならずつよく佛法を罵るものなり。」

『ぬなは草紙』は上のやうに云つてゐる。いふ迄もなく、惡意のある嘲弄的文辭であるが、同時に、殘口の說が、いかに當時一般の衆俗にひろく用ゐられてゐたかを知るべきである。

殘口は佛敎を斥けたが、たゞに佛敎ばかりではなく、儒敎をも斥けた。斥けたといふと語弊があるかも知れない。彼れは神道を本として儒佛二敎のよいところを取つて、打つてこれを一丸となしたからである。彼れの斥けたのは、たゞ徒らに儒佛二敎をのみ尊んで、日本古來の神の道を顧みないことを斥けたに過ぎない。彼れはその當時の人々が儒佛を主として神道を斥け物にしてゐることを歎いて次のやうに云つてゐる。

「日本に神道者といふ者はなき筈なり。仔細は、日の本の人の道は、皆神の道なり。生るゝより死ぬるまで作事することすべて神道なることぞ我が國の風俗なればなり。神の天なり。神の地なり。神の國なり。我身また神の子なり。動くも、はたらくも倒るゝも轉ぶもなべて神の境界ぞ。然るに。日本の風俗ならぬ形の者ありて、或は道服を着し唐めけるすかたなる者あ

るはいぶかしき故、彼れはもろこしの儒者風のものと、日本の民の外側に置くときの撰び言葉なり。又、頭を丸め、方袍とて長袖の黒衣着たれば、是をふしんして、あれは天竺人といふ心に佛者とて、これ又、和國の掟にあらざるより外側に置く撰びなり。然るに此國に、唐流を食み、天竺風を敬ふよりして、人皆、日本の風俗のやうに覺え、神道は、我が形儀と知らざるより、たまく我が國の身操なる者をめづらしく覺えて、あれは神道者といふに至りては笑ふに絶えたること笑止千萬とは これらの事ぞ。」(『異理和理合鏡』殘口七部集の中)

それほど、彼れは純粹の日本人――神の子としての純粹の日本人の立場から、日本人としての努むべきさまぐの道を說いたのである。

『神道通鑑』の中の戀愛論や男女論の如き、云ふまでもなくその一つである。

この書に描かれた事柄は、神の戀、佛徒の戀との他さまぐの種類の戀であるが、概括して二つの部分から成ると云つてよい。一つは、かくあるべき戀愛、かくあるべき男女關係の主張であり、他の一つはその主張の立場に立つた、當時の戀愛や、當時の男女關係に對する批難であり批評である。

殘口に取つては、男女關係――夫婦關係は、一切の道德の根元であつた。「およそ人の道のおこりは夫婦よりぞはじまる。」彼れはこれを說明して云ふ。

「今世に拜み敬ふ神佛は、父母ありて生れ出させたまふなれば、始成の佛、有覺の神と申奉る。すれば男女夫婦の情をはなれたまふ事なし。易の序の卦の傳に云ふ。天地有りて后男女あり。男女ありて夫婦ありと。其后、神も聖人も出たまふ事ぞ。男女の形出來るまでは、造化の妙にして、交合の術は人の作業になれば、人道立ての佛法神道老孔莊列なり。しからば、夫婦ぞ世の根源としれたるぞ。」(卷の一)

又、殘口は、特に、夫婦と子供との關係を考へて次のやうに云つてゐる。

「取詮、人の道の根元は夫婦父子に如くはなし。戀の誠より妻をむかへたがひのまこと通ひて、子をもうけなんに、其外の道あるべからず。世をすくひ民を敎ふる子をもうくれば、天下の寶となり、人をそこね、國をまどはす子を持てば、四海のわざはひなり。そのはじまり閨の中の交りよりなれり。人道一世の急務このことにあり」(卷の三)

しかるに、世人はこのことを考へないで「出合がしらに、おのれが情の動きにまかせ、風雨雷霆甲子庚申をもきらはず、よ

ろこびいかりの心をまゝにして強ひて交り」又は、月のさはり、懐姙その他當然謹むべき場合を謹まないで交るから、或ひは癲病の子が生れたり、驚風顚癇の症を持つた子が生れたり、或ひは鉠脣、或ひは片輪などの子が生れたりする。

「しかるに病子を生じて、看養にくるしみ性悪の世悴を持ちて、修羅のたねをまくことは、おのれが羽風にうごく鳴子に、心さはぐ村すゞめ同前。病子を生じて神に訴へ、佛に祈るは、竹の子の疵を竹に成りて癒さんとするの心なり。不調子をこしらへて、公にことはり勘當するなんどは、曲蘗を麻の中へ移し植るものにして勞して功なきことぞかし。根本を見ずして、末におさまることを求むるぞ愚痴の上の愚なる。人道にそむき天理にかなはず、よく〳〵かんがへて、辨へ給へかし。」（巻の三）

かやうに、夫婦は、すべての根元であるから、夫婦がもし和しないことがあつては、道はあり得ない。「道なければ誠なく、誠なければ世界は立た」ないのである。夫婦の仲は、誠が大切であるが、その基は「和」である。和がなければ、夫婦の關係は虚僞である。そしてこの「和」を基として、その和に亂れないやうに「禮」を以て調整してゆくところに、眞の夫婦關係がある。わが國は神代の昔しから、「和」と「禮」とを調和することを理想として來た。しかし、「禮」を過重する支那式の道徳が這入つて來てからは、「禮」にかゝはつて「和」を忘れるやうになつた。尤も支那でも、昔は和を尊んで禮を行つたものである。『禮記』にも禮勝つときは則ち離れ、樂勝つときは則ち流るとあつて、禮の勝つとは、和の本がないから離れるのであり、樂の勝つとは、禮の節がないので流れるのだといつてゐる。「和を以て禮を行ひ、禮を以て和を節して、暫くもはなれざるぞ道の中」といふべきである。しかるに、支那では、いつの程よりか「禮」を尊んで、根本の「和」を等閑に附して了つたのを、わが國では、それをそのまゝ受けついで、その誤つた考へを以て男女關係を律しようとしてゐる。

「今の世のありさま、上邊の禮ばかりにかゝりて、かつて和らぎの道なし。根本の夫婦むつましからざるより、父子調はず、君臣平かならず、兄弟あはず、それを無理に禮を以て節するほど、節高になつて、いよ〳〵離れ〳〵になることを辨へざること、あさましからずや。これ久しく禮に習つて、和に本づくことを忘れ、たま〳〵親和あるものを見ては、禽獸の思ひをなすに至るは、禮に泥むの偏僻にして、慮なき淺識なり。」（巻の一）

殘口は、以上のことを、古來の文學上、傳統上のさま〴〵の

例について說明してゐる。その一つ二つを舉げて見よう

昔し、大和の國に「八千代をこめし玉椿、かはらぬ色を頼み」ながら年久しき夫婦の者があつた。しかし不思議なことに、この男、夜は來るが晝は見えない。

かういふ傳說を捉へて來て、殘口はこれを次のやうに批評してゐる。

年久しき夫婦の者といふからには、五年も七年も、もはや親兄弟も知つてゐる筈で、忍び男とも見えない。それにもかゝはらず晝は來ないで夜ばかり來るといふのは、怪しからぬ事だ。女にしても、一體、士農工商、月毎の營みがあつて親を養ひ、妻子をはぐくむのが當り前であるのに、この女は、さういふ點に無關心で、夜ばかり來る男を迎へるのも不心得だ。

世間にはかういふ批難もあるかも知れない。しかしそんな批難に頓着しないところが「神代の直なる」ところである。我身を養はれ、その人の御蔭で、衣食するからその人を大切にしなければならぬといふのは義理づくめの間柄である。「たゞ一度も心をゆるして、一夜の枕も二世かけてと思ふ情」には、微塵も外の欲はない。其の人の心が變らないで、通つて來ることばかり嬉しくて、年月の立つのも覺えないのである。そこに夫婦の誠もあり、眞心もある。貴賤のへだてなく「たがひのいとしかはゆさが、心からのまこと」である。

殘口は、かういふ立場から、轉じて、後の世の結婚を痛罵していふ。

「しかるに、今時、入聟にゆくものは、恩のためにつかはるる者の如く、肩身をすぼめ、聲高には物も得いはず、敷金持つて來る女房は、夫を尻に敷くから、家鳴するほどの高笑しても、離れにおそるゝ氣色もなし。非情の金銀が威勢をふるひて、すべて人情のまことなし。下さまに至りては、算用して見て女房持つは、世帯の損なりとて追出し、女房は夫につぶやきて、己養ふことがならずば隙たもれと、口强にわめくこれ互ひに衣食住の欲にからめられて、陰陽の誠を知らず。ともに飢ゑ、ともに寒へても情の誠はなれざるぞ夫婦とは云はめ。」(卷の一)

味ふべきである。

かやうに殘口は「誠」を以て男女關係の根本としたのであるがこの「誠」を基礎として結ばれる男女關係は客觀的に見ると「天道」であつて、神の定めるところで人間業ではないと考へた。このことを殺れは卷の一で次のやうな面白い例で說明してゐる。

釋の淨藏は、十三の歳に、すでに日本第三の驗者といはれて、法の驗を、唐まで傳へた人であつた。十五の歳回國して出雲の國に至り杵舂の社に參籠したが、折しも、十月の始めで諸神が出雲に集つて、日本國中の男女の結びを取謀つて居らるゝ時であつた。彼れは、面白いことに思つて耳を傾けてゐた。そして「其國の神達、我が氏子々々の才能年齡の給はせ給ひて、一人々々女に男に究めさせ給ふ。」のをいと有がたく思つてゐた。すると、山城の國と聞えたのでさては我が古郷の緣組だ。知つた人のでもあらうかと心をすまして聞いてゐると、平の中興が娘はどうだらう、いや、それは丁度、淨藏に嫁はせるがよい、などいふ神々の聲が聞えた。これは怪しからん。「われ、本師の跡をふみ、濟度の願をこそ思ひ立ちしに穢らはし」とつぶやきながら、彼れは早々に下向して、都に歸つて來た。折ふし大內から召れて、供奉のつとめに二三日宿直したが、八歳ばかりの小女が淨藏を見て目も離さず、しかも愛情のうつりてしほらしさ、いはんかたなく、茶の通をするとて、淨藏の呑んだ殘りをいたゞいて呑んだ。「その體祝の盃すなる顏さし」であつた。彼れはこれこそ出雲の神の示現であらうと思ひ、修行の邪魔と、懷中から小刀を取出し、小女を取つて伏せ、さし殺して內裏を逃げ去つた。それから二十年。彼れは勤修を勵み、驗術神變天下に並びのない名僧となつた。上にも、いよ／＼彼れを崇め給ひ、どうか妻をめあはせて、聖の種をつがせようと、內裏に召されて、夜夜のお伽人、臥具のあげおろしに、色よき女を數多つけおかれた。その中に、とりわけて朝夕の宮仕の念比なのがあつて、「いつしかいとをしみ深く」なり、二人の子まで儲けることゝなつた。ある時「小夜の寢冷めに、肌にさはり給ふに、女の乳の下に、大なる瘢あり。これはいかにと尋ね給へば、少き時、修行者に殺されしと承りしといふにぞ、さては、他生の緣なりと知りて、いよ／＼まめやか」になつた。

すなはち夫婦は他生の緣であり、又、神業である。夫婦の誠や情愛は、その夫婦には先天的に定められた宿世の約束である。それであるからこそ結婚は、人類の根本的な重要事である。殘口はから解釋してゐる。そこに彼れの神道家としての結婚哲學がある。

殘口は、又、男女關係は、男女相互の自由選擇すなはち戀愛の自由であるべきだと考へた。男女相互が、眞にまことを傾けつくして、いとほしむためには、相互の蟠りのない戀心から出發しなければならないと考へた。それは親權の濫用とか外的な壓迫などから、無理に結びつけるものであつてはならない。殘

くまでも、自然に、素直に、若芽がおのづから伸びるやうに、お互ひの間に培はれた戀でなくてはならない

殘口のかういふ考へは、上に述べた彼れの結婚觀から云ふと當然なことである。彼れは、戀愛の自由といふことの例として卷の三で次のやうな物語を擧げてゐる。

常陸の國に鹽燒文正といふ正直者があつた。その娘は、糸竹に妙に、和歌の道に心をよせ、品形もなだらかに、情の心深く生ひ育つた。主人の大宮司から嫁に所望されたが、娘はうけ入れない。次には國司からたつてと所望されたが、それも肯んじない。母は恨んで「國の守の下知をそむきては、いかなるうきめにか、父母も行はれん。それを用ゐざるは、子にあらで宿世の敵にやなんど、おどしつすかしても」用ゐない。とかくするうち、京都からうかれて來た商人に靡いたので、あたり隣りも內々のものも、淺間しいことに沙汰し合つた。しかし文正は、「主の仰せを背き、國の守の下知を聞かで、行衞なき旅人に思ひ付けんも、此世ならぬ緣ならめ。一生身をまかする男也。心にあはぬものに添ひて何にかせん。兎もあれ角もあれ、娘が心次第ぞ」と云つて世の取沙汰などを聞かないふりをしてゐた。ところが、この商人といふのは、二位の中將といふやんごとなき御方で、後、都にかへられ文正の娘もその奧方となり末々繁昌することゝなつた。

殘口は、この物語を評して曰く

「文正は片田舍の野夫なり。道も情もわきまへ知るべきにあらねど、本性の正直、天心に叶ひて、思ひの外の幸にあへり。一生添ふ男なれば、氏にも祿にもよるべからず。娘が心にまかせなんと云ひし一言、今時にして云はゞ勢虛なりとぞいふべき。猿がしこき物識どもの調成して工む事は、一たびは見事に埒明けども、末のとぐることなし。誠の心よりなることは、打見はよからねど、後の榮へつよし。かゝる賤しき物語ながら、世の鏡なるによりて、誠をこのむものは捨ずして今に用ゐ來れり。」

こゝにも殘口の態度を窺ふことが出來る。

誠さへあれば、その關係は自由であつてよい。たゞし、自由と云つても、朝三暮四、戀の相手を取りかへる所謂自由戀愛とはおのづから別である。誠は天道である。天道にかなつた夫婦はいふ迄もなく一夫一婦である。たゞ殘口の一夫一婦論の普通の一夫一婦論と異なるところは普通のそれが、常に形式上の制限と束縛とを伴うてゐるに對して、何等の形式的束縛なく、自然に、素直に、天心爛漫に、それを實現するといふことである。それは人の爲す業ではなくて、神の定めた天[illegible]からであ

る。戀はこの天理に外ならない。「戀せずば人の心はなからましを據所として、彼處の娘をそゝのかし、爰の下女を誑すを戀と思ふは役體なし」と彼れ自ら云つてゐる通り、彼れは所謂自由戀愛を決してまことの戀愛とは考へてゐない。それどころか、本當の戀は、永久にかはるものではない。

「人目の關に形はとめられても、心は君が住むかたにかよふ。思ひにこがるゝむねを、不二の煙の絶えせぬによそへ、溺るゝ戀の此身をば、大井の深き淵になぞらへ、世を恨み、人をかこつ涙は、かはきやらぬ沖の石と比べてなんど、亂るゝたけはおぼろげの情にはあらず、身は岩打波とくだけよ。花に命は塵芥と髷に束を落しつけ、底からしみつく思はくなれば、末にかはるなんどといふ淺はかはなし。」(卷の三)

殘口は上のやうに云つてゐる。

すべては「誠」である。戀の道ばかりは「氏にも素姓にもよらず思ひ逢ひたる誠」を本とすべきである。男女の道は、始めにも述べたやうに一切の道徳の始源であるから、男女の道は、そのものですでに社會的價値を持つてゐるものであるから、決して私すべきではない。飽くまでも天理に基き、男女相互の自然的牽引を主として、「和」を專らとすべきである。

かやうな立場に立つた殘口は、前にも一言したところではあるが、我國近世の結婚制度が、とかく「和」を基としないで、徒らに「禮」になづみ、その結果、結婚が單なる形式に墮して了つたことを歎き、併せて、その形式的な結婚、虚僞の結婚の弊害を指摘してゐる。曰く

「聟が鼻かけやら娶が片目やらたがひに知らで、仲人嚊が僞八百に枯木に餅花咲かせて、何間口の家何貫目の銀と聞くより、熊手性からしがみつき、髭づかみにさらいよれば、結び杓の盃より、心は八島の外にながめて、上邊ばかりの高砂仕舞、千秋樂には苦をかさね、萬歲樂には命を縮む。相生の別別颯々と去ばかりなる心ながら、金につながれ、家にくゝられて鼻閉の夫婦、夫は妻をにくみ、婦は夫をいやがりて、夏衣の單ならで、中綿に針をつゝみ、夜々蝎と床入する心。妻が死なば、生暇かなるを野送りして、戻り足に便よき茶屋に立より、七々の忌日も魚喰ながら弔らふ。さて又、妻は、夫の死を持ちかね、はやとこずれの出るより、あの世の人と高ぐくりして後の夫の才覺。或ひは後家立てしても、手代にもつれ、又は坊主をたらして、穢らはしき名を世上に流すこと、目に觸れ、耳に聞いて、幾千萬人か。」(卷の三)

これ皆禮にかゝはりて、和を知らざる近代の婚禮のあさまし

さである。そして、かういふ浅ましさの源をたゞせばすべて「無理づくめの婚禮」から起つてゐる。「仔細らしく媒妁の禮」の過ぎたところから起つてゐる。而も、世間一般の人は、この禍源については思ひをめぐらさないで、たゞその結果についてばかりとかくの是非を試みてゐる。そして、「わが身をかれにまかせ、彼方をこなたにうけてみて、眞から可愛、實から惜くてこそ比翼連理のかたらひ」であることを忘れ、外聞とか義理とかいふことにのみかゝづらつて、親和といふことを等閑に附してゐる。だから、たとひ、いかに嚴格な形式を以て束縛しようとしても、結局無駄に終るのである。

「和より出でたる夫婦なれば、夫の下知を違ふことなし。姑に孝あつて、貞の道をそむかず。かの無理ずくめの女は、夫を思はず、それを法を以ていさめ、義を以て教へても、元に和なければ、いよ／＼内心は逆ざかり姑につかへず、世の見聞ばかりに順ふ風俗はすれども、心の中は、日に幾度か姑を呪ふやら。これでも上邊さへしたがへば、世間向よしとすましおく夫の心ぞうたてけれ。」（同上）

形式的結婚を斥けていかにも肯綮に中る。丁度、吾々の今日の結婚制度そのものを痛罵してゐるやうにも思はれるではないか。

姦通とか心中とかいふ、普通道徳の立場から見て最も批難さるべきことについても殘口はその「誠」の觀から一種の異つた考へを持つてゐる。袈裟御前の貞節と遠藤盛遠の情熱との物語を述べたのちに、當時の姦通沙汰に及び言をなして曰く、

「今世に他の妻を犯して掟にあひ、又は、首の代に金銀を立て、所帶を失ふものあまたあり。その始め誠の戀の心ざしなく、うはかぶきのそゝりより、互ひに移氣出でたるなれば、あらはるゝより肝消えて、足手の置所なきほど狼狽はあはれむべし。始めより道ならぬ事と思慮を改めば、何に迷ふべきぞ。又、改められぬ心決定せば、よしは骨を刻まれ、肉をそがるるとも、何をかなしまん。善惡ともに思ひきはめなきものは、すべて人に似たる猿ぞかし。」（卷の四）

いかにも面白く、皮肉に云つてゐるではないか。殘口の戀が、前にも一言した通り、いかに近代の所謂自由戀愛といふ輕佻浮薄なものと異なるかは、これによつても肯かれる。

心中の如きも、また「誠」のあらはれである。

「およそ恩のために死するものは、義の道を踏んで、誠の道に出づる也。情のために死する者は、誠の道よりまことに出づる道也。その味よく／＼思ひはからうべし。泰山より重き

命を、鴻毛より輕く捨つること、大かたにてなるべきわざにあらず。心に感じ動くところあつて、その誠といふもの見えされば、重き事また泰山を百合せてかけあいなきもの也。その誠の重さに比べて、一泰山の命は鴻毛よりも輕ければ、捨て安くなるなり。さるにより、世の諺にも、恩の主より情の主といへり。いかに給分をくれ扶持し置くとても、其恩は世なみ人なみの事にして强ひて誇ることにはあらず。足手を運び、身を働く事は、其恩のために使はるゝ也。只、心に感じて命を捨つるものは情ぞかし。」(卷の四)

男女關係において、命を捨てるのも、この心の情に外ならない。上世中古は、命を鴻毛の輕きに比して情のために死んだものも數多くある。しかし近年、むしろ妓女の中に、命を捨てるものもあるが、素人には餘りない。これは素人には「無理づくめの婚禮」が多いからで、妓女には、却つて「あまたかはす枕の内に、誠をさだめて亂せる心を貞に思ひ改むる」からである。この意味で心中は强ち難ずべきではない。「脇目よりは狂亂のやうに笑ひ罵れども、死を輕んずる所、いさぎよく哀れ」である。これを笑ひ罵るともがらは、「どうぞならば、死んでみや、」(卷の五)――殘口は、情のために命をおとす男女のために、かやうに萬丈の氣焔を擧げてゐる。

增穗殘口の『艶道通鑑』の大凡は上に述べた簡單な紹介でも、略々推測されるであらう。さてこの書の價値はどこにあるか。以下覺え書き式にその二三を書きとめて見る。

一、西鶴や近松の戀愛觀に理論的根據を與へたこと。西鶴の死んだのは元祿六年であるから『艶道通鑑』の出た年からは略二十餘年前であるが、近松の心中物は何れも元祿から正德、享保にかけて作られたものであるから、殘口の『艶道通鑑』は近松のこれらの傑作と時を同じうして公けにされたものである。西鶴や近松がその當時一般に讀まれ、殊に、近松の心中物は、市井の間に多くの模倣者を出したほどであるから、餘程大きな感化であつたに相違ない。殘口はこれら西鶴や、近松の高調された戀愛に、理論的根據を與へて、西鶴や、近松と共に一種の戀愛至上主義の風潮を湧きおこしたのである。そしてこの戀愛至上主義こそは、實にわが國の男女兩性史上に特筆さるべきものなのである。

二、當時の儒者たちの婦人輕視の思想に反對して、男女對等の思想を高調力說したこと。殘口『七部集』の中の『常世草』に曰く

「女は五の障りと立てゝ、佛は地獄の乘興問屋のやうに言ひなし、儒は三從の掟にして、世上に宿なきものとす。しかれ

ば女たる者は、佛法を聞ては恨めしく、儒をならいてはあぢきなく、天竺のことには耳をふさぎ、支那のことには身ぶるひする筈なり。我が神國には、諾冊の二ばしらと双べて、大小高下も、陰陽同じくうやまふにて知るべし。」と。

殘口が戀愛至上を說いたのも、戀愛の「まこと」を說いたのも、女性を男性とならべて同等に視じたこの女性尊重の思想を根柢として始めてその意圖を理解することが出來る。そして、かういふ女性尊重の思想は、當時にあつては全く珍らしい。

その頃の學者は、例へば貝原益軒の『家道訓』（正德元年）には「婦女は、うまれつき陰柔にして智なく、多くは姦邪なり。正道に從ひがたし。奴僕はならはし卑しくして、義理にうつりがたし。もとに愚にして道をさとしがたし。」など云ひ、中村惕齋の『比賣鑑』（貞享四年）には「尙書に曰く、牝雞の晨するはこれ家の盡くるなりと。牝鷄は鷄の牝鳥なり晨するとは晨を告ぐるなり。牝鷄は鳴く物にあらず、もし鳴く事あらば由々しき怪みなり。家必ず盡き亡ぶべし。萬の事、女の差出づるは家の禍なる事かくの如し」など云つてゐる。これらはただアト・ランドムに拔き出したのに過ぎないが、いかに當時の學者たちが、差別的に女性を取扱つて、それを蔑視してゐたかゞわかる。この時に當つて增穗殘口のやうに大膽な差別撤廢の立場――男女對等の立場に立つた人を見るのは、兩性史上の一稀の驚異である。そしてこの男女對等の立場に立つて、精神的戀愛を高調した點から見て、『エロス』の著者エミル・ルカの口吻を借りるならば、殘口によつて、始めて我國に、正しき意味の「精神的戀愛の誕生」を認め得ると云つてもよいであらう。

第三に、戀愛とそこから生れる新しい人類――小供のことを考察してあること。我國では、子の親に對する義務を說くことは昔からあつたが、親の子に對する義務を說くことは甚だ少なかつた。同じく益軒の著書と云はれる『女大學』などを見ても女性の夫に對する義務や舅姑に對するつとめについてはずゐぶん嚴格に說いてあるが、不思議なことには、女性が最も多く關心すべき筈の子供のことについては、たゞの一行も說いてゐない。それを殘口が、而も戀愛と連關して、よりよき子供を產むために、戀愛を中心とした結婚の必要を說いたのは、まさに戀愛と優生學との關係を論じたエレン・ケイやサリイビイなどの近代の學說を連想させるものであつて、わが國の男女兩性史上たしかに特筆すべきことであらう。

『艶道通鑑』を、これらの意味で男女關係を最も正しく解釋した古典的寶典の一つであると私は考へる。

うぶすな考

新村出

人の世に尊きものは
土の香ぞ、國の御魂ぞ。
僞(いつはり)の市(まち)に住へば
産土(うぶすな)の神に離(さか)りて
養(やしなひ)をかきたる人も、
埴安(はにやす)の鄕(さと)の土より
生(はえ)ぬきのなれに呼ばれて
本然(ほんねん)の命(いのち)にかへる。

（上田敏詩集）

言葉のあらはす意味ばかりでなく、その音聲のひゞき又にほひ又あぢはひといふものがあつて、この音味とも名づけて

よい所のものが、意味と相待つて人々に言ひしれぬ佳い感じをよびおこすことがある。わたくしの感情で、その意味とその音味とを兼ねそなへてゐると感ずるものに、ウブスナといふ言葉がある。

ウブスナといふ語が文字の上にあらはれて來たのは平安朝以來のことであるけれども、この語の出來たのは太古のことであつて、今もなほ殘るウブといふ語及びその熟語の一聯をはじめ、ウブと濁らないで清んで發音される所のウヒといふ語及びその熟語の一聯、さてまた別音であらはれてゐる所のウム並びにその活用形、すべてウブスナのウブと同根であることは、人々の容易に心づくところであらう。ウヒには、初の漢字が當てられ、ウムには産や生の漢字が當てられてゐる。このウムといふ語のウは至つて輕い音であるから、次の音に併呑されて省かれてしまひ單にムともなることは容易なはずである。從つて古語のウムスといふ語、即ちウムといふ根語にサシス等の語尾が附いてウムシ又ウムスなどの活用形が新に發生した場合に、ムシ又ムスなどの省略形が出來たことも、亦容易に考へられることであらう。草や蘚についてクサムスといひコケムスなどといふムス、昆蟲類についてその生物をムシといふのも、要するに發生出生の意義に外ならぬのである。蒸發のムスといふ語もそれらと關連して起つたものと見てよからうと思ふ。男兒をムスコと稱し、女兒をムスメと唱へるそれらのムスもやはりウムスの略形のムスで、生男と生女との義たることは、亦古來よりの定說であり、且つこれを印歐語における類例と參照していよいよ確かだと信ぜしめるのである。例へば梵語のヂャータといふ語の如き、ウマレタルといふ過去分詞の形であるが、出生とか生物とかの意義にもなると共に、ムスコの意義にもなる。語根はヂャンであるが、それがヂャ又ヂャーの形容詞になつて、日本語のウムス又ウムシなどの義をあらはし、ヂャーチといふ名詞になつてウマレすなはち出生の意や、モトすなはち本源の意を示す外、ヂャーミとなつて同胞すなはち兄弟あるひは姉妹の意をあらはす。ヂャーニ又ヂャーヤとなつて妻のことにもなる。日本語のヲミナのヲミは、假名遣こそ違へ、或はウミの變形かも知れないし、メといふ女又は妻をさす語の如きも、或はその略音形かも知れないと思はれる。但しこれは所勁で

なくて能動である。ウマレたる者ではなくしてウム物といふ意とすべきである。話がすこし外れたが、要するに日本のムスコは梵語のヂャータと同じく所生といふ義と解すべきので、英語のソン（子息）や拉丁語のスヌス（子息）も同じく所生の義から起つたのである

されぱウブスナといふ語もこれをウブスとナとの二語に切りはなしてウブスはウムスミの略形のムスと同じく出生といふ意がその語の本體となつてゐると見てよからう。梵語のジャーナ（出生）が本源の意や本居の意をあらはしてゐるのと正に符節を合はしてをる。ナは地また土の義であることは、地震の古語をナヰといふそのナである。地震は元ナヰフル又ナヰユルといふ文句であらはされ、ナヰは土居また地居の意、雲居田居宮居などの意と同じで、語根はナである。横に或る廣がりの地をヌともノ（野）ともいひ、地下に入るをネ（根）といふのは、多分その轉語だとわたくしは思ふが、古語に土をニといふのは確かにナの轉音と見なすべきである。かういふ工合に解釋すると、ウブスは生の意であり產の意であり、ナは地の意であり土の意であるから、ウブスナは生地產土の意義とすべき筈である。以上は古來多くの國學諸家の說くところを潤飾したに過ぎないが、これまではナをネ（根）と說き或はニハ（場）と解した學者があつた、それは差支へないとして、ウブスナをウブとスナとに切りはなして、そのスナを砂と解したのは、いはゆる語源俗解(フオルクスエチモロギー)の一例であつて、甚しきに至つては、或る神社の砂を靈驗ある物として尊重するといふやうな迷信をもひきおこしたことがあつた。ともかくもウブスナは產(ウブ)ス土(ナ)と解すべきであつて、スといふ音は語根ウブ（ウム）の活用語尾だとせねばならぬ。

ウブスナが文字の上にあらはれたので最も古いのは三代實錄卷九清和天皇貞觀六年十月十五日の條に、讚岐國梶州天川の宇夫志奈神等に從五位下を授けられたと出てゐるウブシナの神の場合であらう。この一例だけしかウブシナとはなく、他はみなウブスナとなつてゐるが、例の一六〇三慶長八年の長崎吉利支丹版の日葡辭典によると、西國すなはち彼の教徒のいはゆるシモ（下）の地方に於ては、ウブスナをウブシナといつたとあるから、三代實錄のウブシナは或は讚岐の方言

であつて、九州のみならず四國の地方にも古くさう言つたとみえるのである。日葡辭典にはウブカミ又はウブノカミといふ語と、ウブスナ及び方言ウブシナといふ語とを掲げ、ウブカミ又はウブノカミは異教徒が守護のアンジヨ（天使（エンジエル））の如くに尊崇する出生（ナシメント）の神であると釋し、ウブスナは人が生れた所の土地の神であると註した。再言すれば前者を葡語ナシメント佛語ネイツサンスの神、生誕の神となし、後者を生誕の土地の神となしたが、慶長時代なほ二者の間に果してさういふ區別の存したものか如何。當代もし區別があつたとすれば、その場合のウブノカミは本稿中もつと後に述べんとするムスブの神のこと、すなはち古典のムスビの神のことで、出生發生の靈妙そのことをさす所の産靈神のことに違ひない。但し日葡辭書にはムスブの神の名は出てゐない。而して同書には、(更にウブといふ語をプリンシピオ或はナシメント、原理あるひは出生といふ譯を施こし、この語は單語としては使はれず、ウブ風（カゼ）・ウブ髮・ウブ狩（カリ）・ウブ聲・ウブ着・ウブ衣（ギヌ）・ウブ女（メ）・ウブ毛・ウブ屋・ウブ湯の如く熟語として用ゐるばかりだと若干の例を擧げた。然しウブといふ獨立の形容詞は揭げてない。又オボコなどいふ名稱も錄してない。

　ウブシナは伊勢でもさう稱したとみえて、安濃郡に産品村といふ村名があつて、平忠盛誕生の地といひつたへてをる由五鈴遺響等にみえ、神祇志料には産科村と出てゐる。さればウブシナは必ずしも九州四國にも限らず近畿地方にも存したと見える。シとスとの轉換の古例として注意するに足ると思ふが、奥州地方等の如きは、一般的に廣くシス轉換が行はれてゐるのは姑く別問題としておかねばならぬことは勿論である。

　次に延喜式卷九の神名帳を見ると、尾張國葉栗郡の十座に宇夫須神社といふのがある。この神社については鎌倉末期に書かれた塵袋といふ隨筆の卷二地儀に産須那と題する一節に、古逸の尾張風土記らしい本を引いて左の重要なる記事がある。原文の片假名を主文だけ平假名に書きかへて次に引用する。

　ウブスナとはいかなる義ぞ。

尾州葉栗郡若栗郷に宇夫須那神社と云ふ社あり。廬入姫誕生産屋之地なり。故に以て號爲社と云ふ。廬入姫命の宮は景行天皇の御宇の人也。是をみるにはムマレタル地を云べき歟とおぼゆ。みはけしの神います今の世にはひとへにムマレタル所にオハスル神をウブスナとは云ふめり。但し日本記には本居とかきてウフスナとよめり。必ず神の心ならねども本トアリシ所をば云爾へり。推古天皇の御時阿曇のむらじ阿部臣が申したる辭に葛城の縣はもとのやつかれがウブスナと云へり。これにいつしか神の心ありと見えたれ。

著者の意は、單にウブスナといつてウブスナの神の意に用ゐる貫例になつてゐるのを辨じたのである。後世天文年中にこの塵袋を增補した塵添埃嚢鈔巻十三（版本）には、本居(ウブスナ)の事と題して「當時は所生の所の神を云か」と述べ「或は本居(ウブスナ)と書き或は産生(ウブスナ)と書き又宇夫須那(ウブスナ)とも書也」とつけくはへ、前記の尾州葉栗郡の神社のことを風土記に云ふと新に補つた。かくて「所生(シヨシヤウ)の處をウブスナと云也」と解したのは正しい

日本書紀巻二十二推古天皇三十一年十月、大臣蘇我馬子の上奏の語中に、葛城縣者元臣之本居也云々といふ文句があり、古來この本居の文字をウブスナと訓してをる。釋紀の訓には見えないが、廣橋伯爵家舊藏本にして今東洋文庫保管の岩崎男爵家藏本の古鈔本にもやはりさう傍訓してあるから中古以來さう訓讀したものと考へてよからう。續日本紀巻三十三にも光仁天皇の寶龜五年八月の條にも、外國の五位已上にして身本居に亡する者は自今以後云々といふ勅令が出てゐるし、續日本後紀巻三にも仁明天皇の承和元年六月の條に、大和國人三十五人が本居を改めて左京に貫附した由が見える。三代實錄巻六には淸和天皇の貞觀四年二月、河内國人三人の本居を改めて同じく左京職に隸したことが出てゐる。此種の京都又は郡部への移住轉籍のことは同書巻九貞觀六年八月に、山城河内播磨近江美濃の人のそれぞれ本居を改めたことが六件みえる。この外にも三代實錄には本居移貫の例がみえるが一々こゝにあげない。これらの本居もむろんウブスナとも訓んだのであらうが、後世それをモトヲリと訓むやうになつたものと察せられる。ウブスナといふ語が神といふ語を略しても

主として人の産土神をさすやうになつてしまつてから、本居をモトヲリといふやうに新しい訓が出來て段々その訓語が通用語になつたものではないかと思はれる。

宣長翁の『家のむかし物語』と題する、寛政十年に書いた本が全集卷四に收めてある。その中に「本居といふ氏の事」と標する一章がある。今抄出するとかうである。

本居といふこと件の系圖に本居縣判官建郷主よりはじめて見えたり。建郷主は鎌倉の北條が世の間の人なりけむ。さて本居といふはもと地名なるべけれど、かの建郷主はいづれの國の人とも見えざれば、その地名も何れの國とも知がたきを。……又内宮の舊記の中に、嘉吉元年十一月二十六日北方上分日記……「三十文もとうりのさくのぜう、はたけねんぐ云々。」モトウリ（モトヲリ）も同郡（伊勢安濃郡）のうちの村の名にぞ有けん。又かの郡（安濃郡）に産品村といふあり。日本紀に本居をウブスナと訓ること所々にあるは、いづくにまれ、人の生れたる地の事なるが、此の産品村、かのモトウリによしありげにおぼゆ。

宣長翁の意をはかるに、元と本居をウブシナとよんでゐたのを、「又は寧ろウブシナに本居の文字を當てゝあつたのをと云ふ方がよからうが、」その本居の文字をば後にモトヲリとよみ、更にモトウリ（モトーリ）と發音するやうになつたので、それらの二つの地名は同一だとみるのであらう。畢竟モトヲリは新語でウブスナやウブシナが古語であらうと私は考へる。なほ翁は宗祇の廻國雜記にみえる加賀のモトヲリ、陰德太平記にみえる九州の本告（本居）その他本折といふ地名、安房平群郡の木織村等をも對照した。本居といふ熟字は、谷川士淸が日本書紀通證卷二十七に於て一例を採つた如く支那の書にあつたのに據つたのであらう。谷川氏は搜神記に本居廣信縣修里人と出てゐるのを抄したが、なほ多くの例が存するのであらうと思ふ。通證には本居のウブスナは生土なりと釋してあること前後の學者の所說と大差ない。

平治物語卷三、賴朝遣流の章にも、「越鳥南枝に巣をかけ胡馬北風に嘶けるも生土を思ふ故ぞかし。……生をかへて後ま

でも生土は忘れぬ習なるが……」とあるが、こゝの生土もウブスナと訓んでもよいであらうか。前後の文句の口調から推すとむしろシヤウドとかセイドとか音によむ方が當つてゐるのかも知れない。

南北朝以後本居の文字はしば〳〵文書や記錄に見えるらしい。それはウブスナともモトヲリとも兩樣によまれたものと考へてよからうが、神社に關しては專らウブスナとよんだものであらうと思ふ。諸神記卷の中、至德元年九月の八所御靈、天文八年七月の粟川口天王、それらの條下に本居とある文字はウブスナとよむべきであらう。走衆故實といふ本によると、天文五年十一月二十八日若君樣（將軍義輝の幼時）御うぶすな參云々の文句がある。これは天文の塵添壒囊抄の本居（ウブスナ）の解釋によくあたつてゐる。その來歷の古いことは既に前述のとほりである。

ウブスナの神を單にウブの神とも云つたことと見えるが、今昔物語卷三十、大和國人得人娘語第六のうちに左の物語が載つてゐる。その中の產神はウブの神とよむのであらう。即ち後世のウブスナの神のことであらう。貞觀の讃岐のウブシナ神、延喜の尾張のウブスナ神社の例から考へると今昔物語のもやはりウブスナとよんでも差支あるまい。文句はかうである。

其れが七歲邊にて產れたりければ產神に御（おは）すとて二月の初午の日稻荷へ參らむとて大和より京に上て其の日步（かち）にて稻荷に詣でたりけるに、

後世の事であるが、續類從にも收めてある歌林四季物語卷一、春の部に、「當社はことにこの御國の一の宮井にておはして、みかどの御うぶすなの御神なれば」とあるのは賀茂神社をさすもので、たゞの四季物語正月二十一日の條に、「賤の女もあげまきもうぶすなの神に仕うまつり何事にかはのみ心え奉れば神の御かほのほどもゑみをふくませ給はむと」とあるのも、京都のことである。足利時代以來の通俗字書たる節用集にもウブスナの語を採錄せるものには、產宮の文字をあててある。壇の字をさうよませた大槻本の如き特例もあるし、天文の運步色葉集の如く產社とあてゝあるのも見える。德川時

代に入つてから元祿期には槇島照武の合類大節用集に、生社とも産宮とも宛て、又生沙の如き俗字をも記載してあるが、同時に本居といふ由緒正しい文字をも舉げ、本朝の俗に産地之神を謂ひてウブスナといふと註した。同時期に出た貝原好古の和爾雅には生土神と標して其下に、倭俗に我が産土に在るの神を稱していふ、其の神地に産するの義なりと釋してをる。また産湊とも稱すと附加へ、さてウブスナの神と氏神とを混同すべからずと注意した。同じく元祿の神道名目類聚抄卷四には、産社ならびに産神を標出し、出生せし本土の神を云ふと說いたのは良いが、スナを砂と解し梅宮神社の砂を安産の守りとする由を述べて深秘の義ありなど記るした。この種の說は神道家や國學者には甚だ多い。梅宮の砂のことは、縣居雜錄のうち「本居」と題した一節にも舉げてある。縣居雜錄補抄の方には、「うぶすな」と題して、「本居也是れをウブスナと傍訓せり、後世の俗說なるべけれど猶古語かもしらねば引けり、後々は神のみうへにのみいふことのやうに成行て、たゞ産土をさしてうぶすなといひし事みあたらず」となし、氏神との混同を指摘してをる。このウブスナとウヂガミとの混同は、夙に、俗間にひろまつてゐたが、又識者には既に古くから注意したところであること前述の如くである。このことは既に正德期の廣益俗說辯正編卷四にも辯じてある。

宣長の著か答問錄の一本によると、國々の一鄕一村に生土神として齋祀るに祭神のたしかならぬが多し（天神山王山神の類）とて祭神のたしかならぬために淫祀となすは不可なりとなし、由來はたゞさまほしき事なれど、この事は今にとは知られぬ事のみなりと諦らめ、仰ぎ尊むべき事なりと贊してをる。平田篤胤およびその徒に至つて、ウブスナに關する考說は漸く進んで來た。玉襷の卷五に、每朝神拜詞記の十六に拜當所鎭守詞として「此邑を總守りたまふ産土大神のみまへを愼み敬ひ云々」といふ文句を記るし、その條下にウブスナ神に關する詳論を試みた。産土神と氏神との混同は、上代に於て國々の國造などが其の領する處に祖神を祭れるが多ければ、その氏祖の神がやがて産土神なるも多かりし故に氏神と産土神との混同されるやうになつたのだと論じた。かくて元祿期に出でた眞野時綱の神階編の所說を引いてそれに贊

同した。眞野氏の說は左の如くである。

其の國その土地の靈の御德は各々異にして人物動植みな其の神氣を得て產生する故に地宜方物各々性を異にす。產土の神はこれ土地の靈なるが、大八洲に各自の國魂の神あり。一國には國魂をいひ一處には產土の神と稱す。地勢方角に從ひて其の靈異なるが故に方隅不產の物あり。人また容貌言語志氣の不同あり。是みな土地の神靈の寓する所あるが故なり。……是を以て漢土にも、人生れて其土に依りて性を命ずるは、本土に報ゆる謂なり。其は左傳隱公八年の傳に、因生以賜性、胙之土而命之氏とある是なり。

漢土に於ける產土信仰に關する研究はわたくしの未だ試みざる所であるからそれは他日にゆづるが、眞野氏の考說は產土神に關する研究として頗る進んだものと思はれる。篤胤は「世の諺に人の性質の事につきて產土がらなど云ふめるは右の說にかなへり」と云つたが「ウブスナがら」といふ俚諺は甚だ面白い。藤井氏の諺語大辭典には見かけないが、今日もなほ何處にか殘る俚諺であるか如何。

六人部是香の產須那社古傳抄といふ一冊の刊本があるが、安政四年八月の著で明治六年の出版である。その書に云く、

產須那と稱すは爲產根といふ事なるを、根と那とは親しき通音にて產須那とは稱るにて、萬物を生產せしむるの根本神と申す義なり。然るを產砂の義なりとて近世の學者の產土の字を塡きつるは大きなる誤なり。

とあるが、六人部氏の說にては產靈の概念と產土概念とが混同されてゐるやうに思ふ。氏は更に進んで「かゝれば產須那神は生產の根元顯世の守護沒後の使令に到るまで悉く闕掌り給はずといふ事無し」と說いた。同氏が本書を敷演した別著に、產須那社古傳抄廣義といふものがある。卷一のうちにウブスナの厚義を解析し、宣長の古事記傳に產靈神を說ける所と同樣な說を述べ、ウブスナとは萬物を出かす根本といふ意で、那は根といふ義、少彥名神を少彥根神ともいふと同じだ、その根とは草木の根と同じであつて、氏子地に生ずる萬物の根元といふ義だと考へた。母といふ祝詞のタラチネといふの

も身體を「足ラシ根」といふ意味であるが、ウブスナも恰もそれに準じて悟るべしと云うてをる。かうなると產靈產土といふ考は、希臘のガー・メーテール、獨逸のムッテルエルデ、英語のマザー・アースと似てくる。希臘語には別にメートロポリスだのマートロポリスだのといふ成語があるが、これらは丁度わが國のウブスナといふ意味にも該當するやうである。獨語のスタムジッツとかゲブルツオルトとかいふ解釋が、これらの希臘語に當てられてゐるが、わが國の枕詞をつけたアラガネの土といふ文句の如きも、タラチネの母といふ文句と連想して、詮じつめてゆくと、やつぱりガー・メーテル即ち母土の意味と接近してくる。

ウブスナ即ち出生の土地に關せずに、出生そのことを神格化した考にムスビ又ムスブの神がある。語源的に說明すれば、ムスビはウムスビであつて、ウムス（ウブス）に靈妙といふ意味のヒ（ビ）が附いて出來た語である。古事記には高御產巣日神と神產巣日神と二神の名があらはれてゐるが、その產巣日（ムスビ）を日本書紀の方では產靈と書き、一書にはそれを武須毘と音釋した。古語拾遺にも古語として武須比といふ假名を使つた。姓氏錄には牟須比と出てをり、延喜式の出雲國造神賀詞及び新年祭の祇詞には頭をムスビとよませてある。以上いづれも神名として出てゐるのであるが、便宜上單にムスビといふ語だけを摘出しておいた。語原に關する考は宣長翁の古事記傳卷三に精しい。產巣（ムス）は生（ムス）すなはち牟須にて物の成出るを云ふとあつて、產の字をこゝには正訓としてム（ウム）の語にあて、巣は語尾スの假名であり、書記には產の字をムスの二音にあてゝゐるだけのちがひ、次に靈の字はビといふ音すなはち靈異をあらはす語である、さればムスビとは凡て物を生成（ナ）すことの靈異（クシビ）なる神靈をいふとある、かういふのが、宣長の說の要旨である。翁はこの外にも何ムスビといふ神名は多く見えてゐることを指摘したが、私は一々こゝには列擧しない。古來この語は重要な意義があり又廣く行はれてゐたのであらうが、和名抄卷一神靈部のうちに產靈といふ文字を標記し、日本紀私記を引いてこれをムスビノカミと註した。萬葉集のうちにはコケムスといふ文句のムスに生の字をあてた場合が七八つ見える。生をオフといふのも語源的にいふ

と、やはりウブ（ウム）と音聲上の一致がみとめられる。萬葉には草武左受とか草牟須とかいふやうな文句がある。これも生の字にあたることは言ふまでもない。新撰字鏡卷一火部に五穀を炊ぐことを可志久と訓し又宇牟須と註した。このウムスはムスであつて穀物を蒸すことに違ひない。同部中別に他の文字に牟須また火太久と訓したものもある。ウムスとも略してムスとも言うたと見える。卷十一示部には宇牟須比馬豆利といふ祭祀の名稱が載つてゐる。このウムスビマツリは即ちムスビの神の祭であらう。されば延喜ころまではウムスともムスとも兩方の語が並び行はれ、轉音のウブス、地方音のウブシ、共に存したものと考へてよからう。

このムスビといふ語は、俗間に於ては自然結ビといふ意味と連想されてくる筈であるから、三代實錄には天高結神といふ名もあらはれて居る次第である。この神名は書記通釋に三代實錄から引用されてゐるが、原本の出所をわたくしは未だつきとめてゐない。それはともかくも平安朝中期以後の歌集や物語を見ると、ムスブの神といふ名がしばしばあらはれてくる。戀愛關係によくこの神名がひきあひに出るのは元よりあたりまへの話だ。産靈が結合の意に轉訛するやうになつたのは、語源俗解の適例である。しかし識者はムスブの神の眞義は知つてゐたのである。清輔の奥儀抄卷五に、「むすぶの神はうぶの神也産靈とかけり」とことわつてゐる。順德院の八雲御抄卷三下異名部の神名のところに「わかむすびの神」の註に「樣々物生たる神也」とみえ、「むすぶの神」の註に「うぶの神也」とある。さはれ普通は結緣の神と考へてゐた。尤もその中には歌の言葉のあやも多かつたにちがひない。十六夜日記の十月十九日の條に、美濃の平野といふ地を過ぎて墨俣川を渡る前に、

ひるつかた過ぎ行く道に目に立つ社あり。人にとへばむすぶの神ときこゆるといへば、

まもれたゞちぎりむすぶの神ならばとけぬうらみに我まよはさで、

飛鳥井雅世や堯孝法印の永享四年富士見記行にもむすぶの町屋ど申所にて詠じた歌が各一首見えてゐる。一條兼良の藤河

記にもこの地の結ぶの神に因む歌が出てゐる。かういふ交通の衝に當る地名や神名は古く文獻に散見するが、その他の地方のも風土誌をあさり傳説をさぐつたら尙若干の例が見つかるにちがひないと期待される。

ムスといふ語については前述の諸書の外にも參考すべきものが多々ある。狩谷氏の箋注倭名抄卷一天地部神靈類と共に同卷人倫部男女類の娘の字下の箋注、岡本氏の難波江卷一上むすこむすめの條にムスビの神ムスブの神のことがある。遡つては伊勢氏の貞丈雜記刊本卷十六ウブスナの條と共に卷二十ムスコの條、山岡氏の類聚名物考卷十八神祇部九産靈神の條、いづれも有用である。これらを本居氏の記傳等の所說とあはせて考究すれば要領を得るに足り、いづれも殆ど同一の說に歸着してゐる。たゞ堀秀成の神名考（明治十九年成）の卷一には、記傳の說の大要を叙した後に、この說は誤つてゐるわけではないが、ムスを生ムといふ義の生スと解するのは第二の義であつて第一の義はムスビ（締）の意である、ムスビは二神の奇異なる功德を以て萬物の元素を締び結ふ御德を稱へたもので、其の締べる萬物はムスビの力の凝れる極に至りて其の締びたる中より發生するものあるを生ス（ムス）とはいふなりといふぐあひに說いた。かういふ哲理をもつて說くのは古言の解釋上まちがひである。締結のムスビ・ムスブはむしろスベ・スブといふ統合の義が原始で、ムはその語頭に附いたものと解すべきであらう。産靈のムスビ・ムスブはムスが本體でビは日の語からくる所の靈異の義だと解する方が自然であるから、堀氏の考はとることができない。

さて上來述べたところを要約すると、ウブスナは人の生れあわせた土地をさし、産土とも譯すべく又本居の文字を充てたこともあつた。後世はウブスナの神のことだけを略して單にウブスナと稱し、その本語のうちに神といふ語義を攝取してしまつた。萬物の發生あるひは生成の神秘を象徵した所のウムスビ（ウブスビ）、それを略した形のムスビは産靈の文字をあてるのが最もふさはしい。一方は一定の地域の土地になづんでウブスナと云ひ、他方は一般の生そのことの不可思議を象どつてムスビと云ふ。ウブスとムス（ウムス）とが本體であつて一方に土地の意のナ、他方に神靈の意のビ（日）が

加はつてゐるだけの相違であるが、ムスビは抽象的な概念となり、ウブスナは具體的に人々の生れあはせたそれぞれの土地に即して稱した。從つて抽象化して、父天に對する母土ムツテルエルデの概念はなかつた。乾父に對する坤母といふやうな思想はなかつた。アラガネのツチといふ枕詞のついた成語がもし萬有の根據たる土といふ意味であつたら面白いのであるが、古來よりのアラガネの語釋に對してわたくしは疑念を懷く。又タラチネのツチといふ新しい結合がゆるされたらば面白からうが、あひにくさういふ成語もない。ともかくもウブスナといふ語が個々の生土について云はれ、一般に萬物を生成する土について云はれなかつたのは、物足りなかつた。根の國とか母の國とかいふ文句が古典に見えるが、それはちがふ。次には、ウブスナが誤解されて産砂の義となつて神社の砂のことになつたとおなじく、ムスビが男女の結合と連想されて結ぶの神が出來たりしたのは、共に民俗語釋の適例として興味がある。然し獨逸の詩などに母土をうたつてウブスナを禮讃したやうな佳句はわが國にはみえない。「五月、この月や天が地に與ふる接吻なり、さてこそ地は今しも天の花嫁となりやがてはその慈母となるなれ」とムツテルエルデを頌した文句の如きは求めえられない。

弘法大師の般若心經秘鍵の頌のうちに、三界如客舍一心是本居といふ句がある。一心是本居、まことに是れ金言である。が、一家是本居ともいひうるであらう。ペスタロッチの語にも、家庭生活にこそ徳行のまことの母土は保たれるとあるやうに、ウブスナまうで、宮まゐり、この習慣古俗を保守しまたは再興して本居をなつかしむ美風を養成し家庭を堅壘として徳行の源とならしめたいものである。

道芝の上吹く風よ
農人(のうにん)の寢覺に通ふ
微かなる土のおとづれ

なつかしき母の聲音か
黄さがり草の香高く
松脂のにほひもまじる
地の胸の乳房のかをり
蘇門答剌の香も及ばじ。

（上田敏詩集）

演藝時評

正宗白鳥

「日本戲曲集」について

昨年發表された戲曲のうちから、一人について一つづゝ、代表的なものを撰んで出版された、文藝家協會編纂の「日本戲曲集」を手にして、私は、まづ歷史物——過去の世相を材料としたものを通讀した。舞臺上の効果は兎に角、讀み物としては概して面白かつた。現代日本の脚本も以前に比べて進步したことは否まれない。文學としての批判に堪へ、味はひ得られるやうにもなつてゐる。しかもこの集中の歷史物の多くは、旣に大劇場に於て上演されてゐるのである。

文學者の新作でも、歷史物なら相應に歡迎され、現代物は疎んぜられるのが、現今の劇界の實狀なのだが、それは、現代物の方に歷史物よりも、戲曲的價値が乏しいためではない。多くの大劇場に確固たる地位を占めて、都會の芝居好きに愛玩されてゐる歌舞伎俳優なるものが、現代物の演出には不適當で、歷史物なら、習ひ覺えた舊い型式に從つて、どうにか演じこなし得られるのに因るのである。

しかし、よく考へて見ると不思議な現象だ。多數の見物を相手にしてゐる俳優が、過去の世相を主題とした戲曲の演出にのみ力を注いで、俳優自身と見物とが日常接觸してゐる現代の人間と世相とを舞臺に現はし得ないといふことは、甚だ奇怪である。歷史劇と云つても、過去の世界に於て現代を見ればこそ、藝術的價値が存するので、德川時代の時代物など

は、大まかな材料だけを昔に借りて、當代の理想感情世相を描いたのに過ぎないのだ。この頃の歴史物にも、過去の事相に於て現代を見、あるひは自己を見やうとする作者の態度が、可成り鮮明になつてゐるやうである。しかし、それ等の新作の史劇も舊俳優が演ずると、在來の歴史物とさしたる相違がなくなるやうに思はれる。作者の思想感情が舊套を脱却してゐればゐるほど、俳優と作者との距離が遠ざかつて、現今の歌舞伎俳優はその作者の新作を取扱ひかねる譯である。

兎に角、月々休む間もなく開場されて、無數の觀覽者を吸收してゐる首都の大劇場に、優秀な現代物の現はれないのは不思議である。見物も俳優も熱心にさういふものを求めようとしないのが不思議である。現代物は芝居らしくないと思つてゐるのなら、現今の日本の俳優や見物の演劇觀は、他の藝術に對する時とは違つた一種特別なものである。……德川時代の俳優は、元祿の昔の、坂田藤十郎や中村七三郎などから、末期の市川小團次に至るまで、兎に角時代の寫實を試みてゐたと云つてもいゝのに、今日の歌舞伎系統の俳優は、昔の影ばかり追つてゐて、現代の實相は舞台に現はし得ないのであるか。そして、それを遺憾とはしないのであるか。

「日本戯曲集」の卷頭に收められてゐる池田大伍氏の「男達ばやり」は、左團次一座によつて演ぜられて好評を博したさうであるが、これは、舊幕時代の市井の風俗を寫したものである。舊俳優の謂ふところの世話物は、いつまで經つても舊幕時代の世相劇であつて、歌舞伎役者中最も新味に富んでゐる筈の左團次一座でも、「男達ばやり」が、過去を題材とした喜劇であるがために、成功したのであらう。……舊俳優の趣味性から判斷して、今日の社會は、實質が非藝術で、舞台に取入れるには、過去の社會ほどの價値を有つてゐないのであらうか。歐洲近代劇を演じこなし、南北の世話物に新演出を試み得る左團次でさへ、大正昭和の社會劇は演じ難いのであらうか。

戯曲として、「男達ばやり」や、岡本綺堂氏の「風鈴蕎麥屋」には、多少舊套を脱した取扱ひ方が見られないこともないが、概して、新作の歴史物は、作者が上手になればなるほど、在來の舊劇に接近するやうである。以上の二新作について

も、人物の種類、人物の風格、舞台上の運び、いろ〳〵な臺詞の調子、ことに、江戸風の洒落と辭句の連發などが、默阿彌の世話物の延長のやうに思はれる。默阿彌は型によつて世相を寫してゐたが、今日の新作もその默阿彌型を離れないものが、舊俳優の手を掛け易いものとなるのではあるまいか。

小山内氏の「吉田御殿」長田秀雄氏の「石が物言ふ時」岡榮一郎氏の「大名」には、默阿彌型とは違つたある思想が寓されてゐるが、この三つの作風は、纏めて分類していゝほどに、何處か類似してゐる。理窟劇の一種である。

山本有三氏の「嘉門と七郎右衛門」と、眞山青果氏の「小判十一兩」とは、それ〴〵に完成した藝術品である。あまりに演劇的に固まり過ぎてゐるが、專門の戲曲家としての面目を見ることが出來る。素人が容易に近づき難い域に達してゐる。

「小判十一兩」を讀んで、西鶴の短篇の手法が戲曲に試みられてゐるやうな感じがしたがあとで氣がつくと、「西鶴諸國ばなし」といふ割注があつたので、さては、さうであつたのかと、作家に對する敬意を減じたが、今、材料の出所である「諸國咄」中の「大晦日は合はぬ算用」の一章を讀むと、この簡單な昔ばなしから、一篇の戲曲を捻出した作者の眼識、當時の世相と人間の性情とを合せ描いた作者の手腕の凡庸でないことを感ぜざるを得なかつた。この一篇には厚味がある。たゞ筋を運んでゐるところはない。一つとして無駄がない。あまり無駄がなさ過ぎるために演じにくゝはないかと思はれるほどである。

ところで、この作家が、「雲右衛門」のやうな現代物に筆を執ると、くどくつて、新派劇くさくて、俗惡になるはのどう云ふ譯であらう?。上演用にはいやでもさうしなければならぬのであらうか。

「空氣饅頭」について

ロマショーフといふロシヤの新作家の新社會寫劇「空氣饅頭」を、翻譯者昇曙夢氏から寄贈されたので讀んだ。流行の一圓本並みに細字に組んであるので、視力の衰へてゐる老眼には讀みづらかつた。分量澤山で代價を廉くして、書物を一般に普及させるには、かういふ組方が必要なのであらうが、さうなると、老人は次第に新刊書が讀めなくなるだらう。若い者も肝心な内容を味ふ前に、視神經を疲らせるであらう。文明のお蔭で燈火が明るくなると、文明の力で活字が小さくなつた。……かういふ細字で詰込まれた者を讀むと、東洋流の縱書きよりも西洋流の横書きの方が、視力を疲らせる度合の少いことが感ぜられる。

私は、この「ロシア革命以來唯一の傑作」と云はれる長篇戯曲「空氣饅頭」を大切な自分の目を虐待しながら、休む間もなく讀終つたが、讀終つて目を瞑つて考へると、苦勞して讀んだ甲斐があつたのであつた。「日本戯曲全集」の戯曲十數篇を讀むに勝つた感じがした。

一面の社會相、一群の男女の人間性が、鮮明にそこに開展されてゐる。態度は稍々通俗的で、底の深い感じはしないが、ある主義の宣傳劇見たいな臭味は全くない。私は、ここにロシアの世相を見るとゝもに、現代の日本の世相をも見ることが出來る。先頃の經濟界混亂の光景も、内面的に見て描寫したら、かういふ戯曲が出來上るだらうと思はれた。……「空氣饅頭」とはパンのやうな菓子で、中は空氣で膨むやうになつてゐるので、作者がそれによつて、見掛けだけ大きくて中實のない新興成金の富を諷したのださうだが、さういふ理窟によつてこね上げられた作品では決してない。いろ〳〵な人間が慾で動いてゐる有樣が、さながらに描かれてゐて、日本のプロレタリア文學のやうなコセ〳〵したものではない。カイゼルの「朝から夜中まで」に比べても、わざとらしくないところが氣持がいゝ。主要な人物たるイカサマ會社の營業部長のラークの如き、首尾を通じて活躍してゐる。口にすることもキビ〳〵してゐる。才氣のある悪黨の彼れが、他の悪黨アブルイドロフに一杯喰はせていゝ氣になつてゐると、後でその男に寢室を襲はれ、裸のまゝ窓から拋出されるところなど、映

畫模樣であるが、そのあたりの自他の會話や動作が面白く運んで、新味のある演劇になつてゐる。女優リークによつて、私はロシアの新しい女の面目を想像した。「一體あたし達は何者でせう。屑か、流れか、泡味のやうなものではないでせうか。それだのに何を苦しんで、二六時中何處に行つても、金金つて大騷ぎするんでせう？」。生きやうと、殺さうと、擲らうと、そんなことはどうでもいゝぢやありませんか、與へて、そして取る！それが人生の目的ですわ」と、氣燄を吐いてゐるが、これが、自からこの一篇の戲曲裡の世相の批評になつてゐる。そして、ラークが彼女に「ところで藝術は？」と訊くと、「商品よ。たゞの取引よ」と、明晰に答へてゐる。

こんな風に私は感心したものゝ、この、戲曲を非常の傑作とは思はない。人間に對する諷刺として、それ程深味のあるものとは思はない。ゴーゴリの「檢察官」ほどにも、作者の獨創の人間觀察があるのでもない。

「毛猿」について

アメリカから、思切つた新しい藝術が現はれるのではあるまいかと、私はかねて思つてゐた。在來の傳統的藝術趣味から脱却した嶄らしい樣式、新らしい感覺の藝術は將來アメリカに於て現はれるのではないかと、私は空想してゐた。ユウヂン・オニールは、現在に於てアメリカ第一の劇作家だらうである。私は海上生活を題材とした彼れの小篇戲曲二三を讀んで、同じ筋肉勞働者、第三階級の人々を描いても、在來のロシアの作者の者とは心の動きが違ひ、作者のペン先きから落ちる墨の色も違つてゐると思つた。題材が一つは波濤千里の海上を背景とし、他は、果てなき廣野を背景にしてゐるためから、自から感じの相違を我々の空想裡に起させるばかりでなく、愚ろかしい、半醒半醉の夢心地のトボケたところが、ロシア物にはどれにでも流れてゐさうに思はれる。「空氣饅頭」の如き寫實的社會劇にでも、飄逸たる夢心地の臭跡を留めてゐる。「宗教なんか、鬼にでも喰はしてしまへ」などと、若い女優に云はせてゐるほどに、宗教的神秘なん

かを滅却してゐながら、「それが有る如く」だけではないところの風韻が漂つてゐるから面白い。ところが、オニールのには、渺茫たる大洋に身を浮べながら、神秘感が無いのだ。あつてもそれは月並だ。

そこを、私は面白いと思つてゐる。歐洲藝術の原泉たる古代の希臘文明は、當時の他の古代民族のそれに比べると著るしく現實的であつたさうだ。ホーマーの詩によつて推知される如く、彼等は、明快で、感傷的氣分に乏しく、無用の文飾を嫌つてゐた。「海は鹽つからい水」だと唄つたやうなのがホーマーの詩風であつた。

ホイツトマンやブライアンなどの詩には、さういふ新しい意氣はないか。「プレアリー（大平原）はおれの寢床だ」と、單純に唄つた詩を昔讀んだことがある。オニールなどのやうな態度から新しい現實の、男性的直截な、明快な、感傷的氣分に乏しい、歐洲文藝の通人趣味を脱したものが現はれないものかと、私は空想してゐた。

しかし、私は、今度「毛猿」を觀て、この作者も、歐洲の表現派などにかぶれたのか、いやにひねくつたものを書きだしたことを感じた。ヤンクといふ中心人物は、原始的野性を具へて、物質文明の世界、窮極するところなき虚飾の巷にあばれてゐるのは、面白いが、この男も、云ふことと爲すことがひどく感傷的である。幕から幕を追つてゐるうちに、感傷的に小理窟ばかり云つてゐるので、私は彼れに對して同感を失つてしまつた。野性の人間と云ふよりも、いけ好かない痴者といふ感じがした。これは、ヤンクに扮した俳優が、築地型の、舌足らずの怒號をのみ、終始同じ調子で續け、棚づけにしたやうな同じ表情で、空間を見つめてゐるために、さう感ぜられたのかも知れない。尤も、作者の演出上の指定を讀むと「この場面は……自然主義的であつてはならない」と書いてある。また、「彼等自身は、ネエアンダアタアル人（非常に知力の劣つた種族）の姿が想像されるやうに」と書いてあるが、しかし、「このヤンクは、先天的に低能な人間としては、ひどく理窟を云ふ。日本の雜誌に散見するプロレタリア文學者の社會觀に劣らぬやうな社會觀を述べつゞけてゐる。だから、脚本を讀まないで、たゞ芝居だけ見てゐたら、教養はなくつても頭腦は賢明な勞働者の人生苦を、作者は書いたの

で、俳優が痴者らしく演じてゐるに過ぎないのではないかと疑はれるくらゐである。作者がどう指定してゐようとも、この脚本全體は、先天的低能な人間としてヤンクその他の火夫を現はさないで、あたりまへの勞働者階級と資本家階級との對立を現はしたものとして演出して差支えないばかりでなく、少くも、日本の築地小劇場の演出としては、その方が適切で、効果が多いに違ひない。マクベスを凡人化して新味を出し得られるとすると、ヤンクをも普通人化して演じてもいゝのである。ヤンク一味を、「覺醒なきプロレタリアート」として、その運命を悲觀的に作者は見てゐるのかも知れないが、現代の日本では、彼等の所説の如きは、「覺醒したプロレタリア」の考へとして、「棉の種」以上に、一部の青年や社會科學者に感心されるに違ひない。痴者どころではない。

「知力もなきもの」の破滅の悲哀が舞臺に現れはてゐるか否かは別として、この芝居は、築地小劇場には、「マクベス」や「法成寺物語」などよりも適してゐる。「心座」のフランス物などとは違つて、序幕から終りまで退屈しないで觀てゐられた。

いつも何かと難癖をつけるものゝ、私はこの小劇場が好きである。

「心座」見物

午后六時過ぎから十時過ぎまで、帝國ホテルの演藝場で「心座」といふ新劇團の所演を觀た。現在の劇界に相變らず勢力を揮つてゐる歌舞伎系統の芝居にはつねに飽足らない思ひをしてゐる私は、新劇に對しては、餘程好意を寄せて、何等か新藝術の萌芽をそこに見つけようと努めてゐるのだが、今回の「心座」には全く失望した。こんな退屈な芝居は、嘗て見たことがないと私は斷言する。この斷言はすこしも誇張した言葉ではない。私は、この座の創立事情について何等知るところもないし、この座の俳優や演出者や、經營者、その他について、一抹の惡感も、好惡の感も持つてゐない。強いて云へ

は、「スカートをはいたネロ」の作者村山知義氏の「勇ましき主婦」を去秋新劇協會第一回興行の際に見て、その奇才に感心してゐるので、今度のにも、多少奇拔なところがあるのであらうと、豫期してゐたゞけで、開幕前の私の態度は白紙のやうに純白であつた。ところが、第一部のルノルマンの「時は夢なり」の序幕が開いてからは、この座は何のためにこんな芝居をやつてゐるのであらうかと、勞力の空費と時間の空費が惜まれるばかりであつた。私は、何十年の間に、無數の退屈な芝居、詰らない芝居を觀て來た譯だが、今度の退屈は、在來の退屈とは退屈の種類が違ふ。パンフレットを買つて讀むと、關係者の立派な抱負がところ〴〵に述べられてゐるが、その抱負は實際の舞臺に何の關係もない空言に過ぎないと、私には思はれた。

私などは歐米の本場の演劇は、一度も觀たことがないが、それだからと云つて、ルノルマンのこの戯曲の如き神秘的深味のある作品は、かういふ風に演ずるのだと云はれては承知出來ない。我々もさうお目出たく馬鹿にされる譯に行かなくなつた。どこの世界に、沒感情で、たゞ脚本を素讀するだけの芝居があらうか。素讀でもそこに何かの技巧があればまだいゝ。たゞ覺束なくトボ〴〵と翻譯語を口に出して云つてゐるに過ぎない。だから、いくら心を凝らし耳を留めて聞いてゐても、原作の影も形も目の前に浮んで來ない。それで、舞臺の臺詞は、私をして原作を思浮べさせる邪魔ばかりしてゐるやうな感じがした。無學者に「辨慶がな。——ぎなたを持つて……」と讀まれるのを聞くと、折角の辨慶武勇傳も、何が何のことやら分らなくなるのと同様である。築地小劇場では、いくら技藝が幼稚でも、何かを舞臺に現はさんとしてゐる氣持が、觀客たる我々の心に映るのである。この「心座」では何も感ぜられない。

舞臺裝置にも俳優の扮裝にも、奇を弄しないで、簡單に自然らしくしてゐるのはいゝが、それが、底の知れない人生宇宙の實相を暗示するには、外形の變つた裝置扮飾が障害になることを顧慮したゝめと云ふよりも、手輕に安易に處置をつけたに過ぎぬとしか思へない。……第一、こんな難物を演じてゐながら、俳優がその表現に惱んで焦慮してゐる樣が、少

しも見られないのは、私には不思議である。無論、作意をすつかり理解し、役柄を充分に呑込んだ上で安易平靜な態度を持してゐるのなら、結構至極で、大に敬意を表していゝのだが、この一座のは、私の目にさうは思へない。盲目蛇におぢずと云つたやうにノホホンで收まつてゐるやうに感ぜられた。

前に云つた如く、私はかういふ新劇團に對しては、その成功を希望するだけの好意を持つてゐるのであるが、これでは存在の意味を成さないと思ふ。もつと、演じ易いものから手を掛けて他日の大成を期したらどうだらう。それに、傑れた演出監督者を招聘して、その指揮を仰ぐことにしたらどうだらう。名作でも漫然と演じただけでは、時間と勞力の空費に過ぎないではないか。當日は滿員で、私など定刻に悠然と出掛けたものは、やうやく補助席に入られたのだが、その滿員は、新劇に對する世間の興味からではないらしい。切符を賣付けることばかり先に考へないで內容に心を傾けたらどうだらうと私は考へた。

村山知義氏の「スカアトをはいたネロ」にも、私は失望した。ちよつと變つた思付といふこと以外に、何物もない。三つのスカートが出て來て、カザリン二世の過現未を唄ふのは、奇拔と云へば奇拔だが、それつきりで、それが首尾一貫して何の劇的力を持つてゐるのではない。スカートを三つ出すのもくどい。後の場面が斷片的に女ネロの生活を現はし、それに、非軍國主義見たいな作者の主觀を配してゐるのだが、それ等が、充實した背景をもつた上の暗示ではなくつて、斷片的と云ふのが文字通りに斷片的なので、素通りの、斷片的なのだ。軍人が氣味の惡い唸聲や、舌足らずの苦聲を立てるのは「海戰」以來の築地型であるが、戰爭の惱みを、あんな非藝術な惡聲で表現するのは、スカートを踊らせたりするほどの洒落つ氣のある才人には似合はしからぬことである。この作者の劇才は將來あるひは大成するかも知れないが、それには、外形の奇拔さ以外に、內面の豐富を心掛けなければなるまい。互ひに戰爭を止めて相愛し合はふといふ最後の言葉に、見物は大に拍手してゐたが、それ等萬人受けの言葉がところ〴〵に挿入されてゐるだけで、一篇の戲曲に、それ等の

言葉を生動させるほどの壓力を持つてゐなければ、何にもならない。……青年作家北村小松氏の作品を二度目に見て失望した私は、村山知義氏の作品をも二度目に見て失望しなければならなかつた。二度や三度で見飽きのしないやうな新味をもつた新作家は、まだ現はれてゐないのである。

演劇でも何でも、藝術の道は困難である。「心座」を觀たゝめの私の獲物は、さういふ感じであつた。

歌舞伎座の六月

五月の本郷座の「新宿夜話」と「正雪の二代目」は、非常に評判がよかつたやうだ。が、私はそれを見落した。それで、新刊の脚本集を取寄せて、そこに收められてゐる「新宿夜話」だけを一讀した

岡本綺堂氏は、劇場作家としては、現代の第一人者である。今年上半期に東京の大劇場で上演された戯曲を、作家別にすると、默阿彌が相變かはらず第一位を占めてゐるが、それに次ぐのは綺堂物であることを、私は新聞紙上の統計によつて知つた。新作戯曲は月刊雜誌には限りなく現はれて、その中には新味を含んだのも多少はあるらしく思はれるのに、劇場當事者には顧みられないで、明治以來の演劇は、默阿彌から綺堂氏へ續いてゐるやうな感じがする。氏は年少の頃櫻痴居士の教へを受けた人らしいが、默阿彌の劇作術の骨法は自から氏に傳つてゐるやうに思はれる。默阿彌門下の傳統的作者は何の爲すところもなくして廢滅して、新代の息のいくらが籠つた江戸狂言は、綺堂氏によつて、昭和の劇場に蟠踞してゐるのである。三百年の傳統を有つてゐる芝居愛好者と俳優によつて形つくられてゐる演劇の社會を打破して、截然として面目を改めさせることは、まづ當分出來ないことのやうに思はれる。默阿彌と綺堂。――私は新代の舞臺藝術の變化の遲々としてゐるのをもどかしく感じる。

「新宿夜話」は、綺堂作中の變つた小品であるが、讀んだゞけではさして面白くなかつた。舞臺では、俳優の妙技によつ

て、詩趣が漂つて、理窟めいた累ゐなしに、見物の情緒をそゝつたのであらうと察せられる。田山花袋氏の小說に、「再び草の野に」といふのがあるが、この戯曲は、「再び繁華の巷に」と題していゝもので、人世の榮枯盛衰に對する感傷的な氣持は、手易く人の心に起るものである。……今六月號の演藝畫報を見ると、松居松翁氏は、この「新宿夜話」などの觀劇感を述べて、「若い見物が心からこの二つの狂言を享樂してゐる。……工場の中の人らしくて相應の敎養ある人々などの話を聞いてゐると、綺堂先生の作劇術といふものに可成りの理解をもつてゐたには感心した。思ふにこれからの社會では、かういふ階級の人々が、芝居の見物の中堅になるのではあるまいか。而して、綺堂先生の戯曲と左團次一派の演技とに共鳴して行く彼等は、つねにこの芝居のやうな明快な生活を享樂せんとする人々であらう。……古い見巧者も、奥さんも、おかみさんも藝者も、女學生も、金持も、稍々敎養ある靑年職工も、あるひは學生だちでも、愉快に笑つて、泣いて舞臺の優人に同情してゐる。……これでこそ希臘劇以來の演劇の能事を盡せりの感がある」と、極度の讃辭を呈してゐられる。そんな名演劇を見落したのは、返す〴〵も口惜しい譯であるが、讀んだゞけの印象によると、「新宿夜話」に現はされてゐる程度の榮枯盛衰の世相に對する感傷的詩趣は、詩としては初步のものである。前後に、說明者たる人物を置いて、中に昔の影を挿むのは詩に於ても小說に於ても、昔からの有振れた趣向で、ここには、綺堂氏の作劇術に、新たなる理解を見物に要求するやうなところはない。「この芝居のやうな明快な生活」といふ評語も私には合點が行かない。卑近な感傷的情緒はこの芝居によつて、見物の心に起るかも知れないが、それは催眠歌のやうなもので、「明快なる生活」の享樂とは云へないのではあるまいか。

私は今まで幾つか觀た綺堂物では、「小栗栖の長兵衛」や、「虛無僧」などが面白かつたと思つてゐる。それから、私は、綺堂作中の人物では、大立物の左團次よりも、むしろ松蔦の方が、一層綺堂形の面目を現はしてゐると思つてゐる。

今月の歌舞伎座には、その綺堂氏の新作「水野十郎左衛門」をはじめ、松莚戯曲十種の一つの、岡鬼太郎氏作「今様薩摩

歌」と、松翁氏の喜劇「大磯小磯」が並べられ、それに、仁左衛門の特意の「沼津」が加へられてゐる。芝居愛好者の觀劇慾をそゝる用意に於て、興行者の頭はよく働いてゐると云つていゝ。單なる觀劇のためなら、私は、かう並べられた題目によつて何の感じも起されず、誘惑をも受けないであるが、演劇時評といふ役目を念頭に置いて見ると、歌舞伎座が、私に劇評の好題目を提供するために、こんな狂言の並べ方をしたのではないかと思はれるくらゐである。

「われ〳〵は近頃特に繁く歌舞伎劇滅亡論を文學家諸公や、それに雷同する文學フアンから承つてゐる。而して、將來の若い人々は、すべて歌舞伎劇に後を見せてゐるのかと思つてゐたが」と、松翁氏が云つてゐるが、私なども、氏の所謂「文學家諸公」の一人として、かねて、將來の演劇を歌舞伎系統外に求めてゐた。岡本岡松居の諸氏の新作が、年少新進の劇作家や劇評家や、一部の若い演劇愛好者などには問題にされないほどに古物あつかひされてゐることを知つてゐるのみならず、さういふ空氣が濃厚になつて、大劇場の見物席にも彌蔓することを熱望してゐるのである。イプセンでもストリンドベリーでも、チエホフでも、あるひは獨逸の表現派でも、最早古いと云はれてゐるやうな今日、かの三氏の如き舊作家の作品を、研鑽鑑賞の好題目と見做すのは、私の頭の古さを證明されるやうでもあるが、見應へのある清新なる演劇の殆んど見つからない今日、私自身、演劇の前途について確固たる信念を持せず、亡羊の歎に惱んでゐる今日、せめて古いながらも完成してゐる彼等三氏の藝術を一顧しようと考へたのだ。……これは、芝居についてばかりではない。他の人生の事についても、私は時々さう思つてゐる。

「スカートをはいたネロ」の新らしさは、私をして新味の渇仰者たらしめる力を有つてゐなかつた。

「水野十郎左衛門」は、先頃本郷座で、中車や吉右衛門によつて演ぜられた例の「湯殿の長兵衛」の後日譚見たいなもので、暴横の水野も、ここでは、男性的意氣と人情味を兼具へた立者となつてゐるのである。島村民藏氏の謂ふところの男性的の力の籠つた舞臺藝術家左團次には、役柄が嵌まつてゐる譯である。綺堂氏と左團次とによつて作上げられた人物に

は、かういふ型の人物が甚だ多いやうで、今度も別に異つた感じは得られなかつた。

以前の「鳥邊山心中」や「皿屋敷」などよりも、整つた破綻のない演劇を現出してゐるが、お芝居（假名でなくつて楷書で書いた）といふものは、かういふものだと云ふことを、敎へられてゐるやうなものであつた。綺堂型演劇敎科書を讀んでゐる感じがした。序幕の我慢會の酒宴に侍してゐる料理茶屋の娘は、その座へ闖入した長兵衛の子分極樂十三と相思の間であることが暗示されてあつて、武張つた本筋の色取りになつてゐる。作劇の法則としてかういふ色取りは必要なのであらうが、それは皮相な色取りたるに止まつて、かういふ戀があるために、極樂十三その人の心性行動にどんな影響があつたかと疑はれた。強いて云へば、序幕で、怨の一太刀を報いようとしたのが、戀中の彼女に抱留められたために思留つたと見るのが作者の用意を忖度することになるのであらうか。彼女は詰めの幕でも、たゞ舞臺の運びをよくするための留女として役立つた。この幕では、二人の間にちよつとした痴話があるが、そこにも老練な作家の作劇術を、取つて付けたやうに敎示されるに過ぎなかつた。序幕では憎惡のあらはれであつた酒盃が、大詰では和解のあらはれとして用ひられることにも、私は法則を見た。小山田の如きも、水野をして水野たらしめるための道具たるに留つてゐる。型の如く巧みに筋が運ばれて、彼れは舞臺に出沒してゐる。猿之助はその扮してゐる小山田の個性を活躍させんと努めてゐたが、序幕で悲壯な決心を顏にあらはして立去るところ以外、脚本の性質上どうしようもないのではないかと思はれた。二幕目の橋上で船中を見下して、手易く見つけられて、水野の着かへの紋附を貰つて投身して、つひに捕へられるまで、全然水野劇の筋をつくるための人間になつてゐる。日本舊劇の法則はかう云つたもので、綺堂氏もその法則を踏襲してゐるのであらうが、これでは、小山田はお芝居の人間で、自我のある本當の人間とは思はれない。……本當の小山田があの時代に生きてゐたとしたら、水野の紋服をつけて投身して、水野に英雄的最後を遂げさせるために歸京したのではあるまい。人間は宿命の傀儡であらうが、芝居の筋立の傀儡ではあるまい。小山田彌市は、放浪の艱苦に堪へなかつたのであらう

し、橋上に立つて、舊友の氣樂らしい船遊びを見下して、羨ましくも懐かしくも思つたのであらうし、人間の弱い心から知らず識らず死地に引摺り込まれたのであらうが、さういふところは、猿之助の小山田に鮮明に現はれてもゐないし、暗示されてもゐなかつた。左團次の水野は、星影土左衛門的英雄型を脱却してゐて、スツキリした現代向き英雄になつてゐて、島村氏のやうな東西の戯曲に通じてゐる人にも、男性的藝術美を認められる所以で、私なども、見てゐて悪い感じはしないが、陰影のない一本調子の藝風その物が、男性的藝術として認められる根據でないかと疑はれないではない。幸四郎の扮する空つぽの英雄に比べると、緊張してゐるところが、左團次の身上で、英雄涙あり英雄にも悩みがあるといふ人間性は、彼れの所演に於て、私はまだ見たことがない。しかし、この一座の舞臺がよく統一されてゐることは、今度の一番目を見てもよく感ぜられた。

二幕目の「大川船遊びの場」は、橋上にいろ〲の男女が夕涼をしてゐる有様が、江戸の風俗を描いた錦繪寫しなので、面白かつた。大詰の墓地は、光線の色合が黄葉と調和して、しめやかな秋の感じを漂はせてゐた。「白野辨十郎」の大詰の寺院の境内が、かういふ感じを傳へたのを、私は思出した。

「湯殿の長兵衛」以後の水野の生涯を見終つた私の心には、型の如き劇作術以外に、強く印象された何物もなかつた。無論この戯曲によつて、岡本氏の作品全部を推測しようとするのではない。

岡鬼太郎氏の「今様薩摩歌」は、見てゐるうち、いくらか私の心に喰入つたところがあつた。上演された氏の作品は、去年の春演舞場で「鼠小僧」劇を觀たゞけである。そして、その新作は、江戸藝術について造詣深き永井荷風氏によつて、江戸狂言の模範として推讃されてゐたが、私は、舊劇の常套的作法をそこに見たゞけであつた。鼠小僧に對する新解釋は取つて附けたやうなもので、作品全體を生き〲と動かしてゐるのではなかつた。ところ〲に小手先の器用さが見られるに過ぎなかつた。

私は、「薩摩歌」を見たり、「大磯小磯」を見たりしながら、鬼太郎氏や松翁氏の過去と現在。――劇評家としてあるいは人としての二氏を思浮べてゐた。批評の筆を執つたり理窟を云つたりしないで、默々として創作を續けて來た綺堂氏と、他の二氏との生涯を考へた。田舍生れで、東京の山の手で下宿生活をしてゐた私は、昔鬼太郎氏が何かで揶揄してゐたやうな、「下宿屋で生卵を飯にかけてうまがつて食べてゐるやうな、田舍出の書生つぽに江戸の芝居の味が分るものか」と云ふ、その書生つぽの一人であつた。それでも、柄にない劇評を二三年やつてゐたが、舊劇に對して盲目滅法な批評をしながら、時々鬼太郎氏の穿つた批評にはひそかに感心して、蒙を開かれてゐたのであつた。その後、過渡期の社會相に對する氏の皮肉な批評をも面白く思つてゐた。しかし、「下宿で生卵を飯にかけて、うまがつて食べる」やうな奴といふのが、田舍出の野暮な書生つぽを嘲ふ言葉として適切であつたのは、我々が若かつた時代のことで、今日の青年に向つてはそんな警句は響かなくなつてゐる。水野劇の舞臺を色取つてゐる大川の凉み船や百本杭が、昭和の今日では、見物の江戸情調をそゝる力を失つてゐるのと同樣である。

鬼太郎氏は「劇通」である。芝居道の古老である。時代の新しくなつた今日では、氏の昔の警句も皮肉も彈力を失つてゐる譯であるが、私は氏は單に「劇通」といふ言葉で呼切れない眼光と才氣とを持つてゐる人だと思つてゐる。昔讀んだ氏の劇評には、幸堂とか竹の屋とか云ふ「劇通」とは違つた眼の鋭さがあつた。三木竹二、杉贋阿彌のやうな人々の忠實にして微細に渉つた劇評によつて、私は舊劇美を教示されたのであつたが、しかし、舊套を脱した見方、直ちに物の心核を見ると云つた才氣は、私は鬼太郎氏のをり〳〵の劇評に於て見てゐたのであつた。

私は久しく氏の劇評その他の文章に目を觸れてゐないが、昔讀んだものを思出すと、あゝいふ奇才のあつた「劇通」界の非凡人は、どんなに時代が變つても、その才能を沒却される筈はないと思はれないではない。「スカートをはいたネロ」くらゐな新作なら、雜作なく書けさうな人と思はれる。思想や主義や知識は普通人も求めて得られるものであるが、直ち

に物の心核を見ると云つた才氣は、學んで得られるものではない。

「薩摩歌」は、綺堂氏がある材料を樂々と劇に仕立てゝゐるのに反して、骨が折れてゐるやうである。苦澁の跡がそこに見られた。しかし、源五兵衞の身體には水野よりも血が通つてゐる。舞臺の彼れの心臟は鼓動してゐる。これは題材の相違によるばかりではあるまい。去年の新作「鼠小僧」でも、あるひは綺堂氏の「鳥邊山」や「皿屋敷」でも、作中人物の心理の取扱ひが取つて付けたやうで、說明的効果しか現はれてゐなかつたが、ここには作者の說明を待たないで、心の動きが自から現はれてゐる。

源五兵衞の薩摩武士氣質と、壓え切れない戀の發作を現はすための「菱川宅の場」には、形式と技巧に於て歌舞伎劇のマンネリズムが見られるのだが、この作者はそのマンネリズムを飛越えて主人公を活躍させてゐる。隣りの新內などを聞かせて人物の心の說明をするのは歌舞伎劇の特色で、默阿彌などは巧みにそれを用ひてゐて、見物もそこを喜ぶのであるが、本來かういふ劇作術は、作品を膚淺に墮せしめるものである。作劇術として難路を避けたずるいやり方なのである。岡氏も、源五兵衞の人となりを現はすための方法に惱んで、この舊套に就いたことが察せられる。しかし、說明の場が單たる說明たるに止まらなかつたのは、左團次も身を入れて演じたゝめでもあらう。この源五兵衞はもつと無骨な粗暴な人間らしく扮せられてゐたら役柄に一層よく嵌まることゝ思はれるが、左團次は、以前よりも頰がむくれて、力の表現に不適當な顏立になつてゐるにかゝはらず、以前よりも身體に品位が添つて來て、無骨粗暴の趣きは自から無くなつてゐる。

「裏手二階の場」には、おまんの心の說明があるのも、老練な綺堂氏などなら、かう二場續きで、男女それ〴〵の心理說明なんかしなかつたであらうが、この素人臭いところに、私は多少の面白味を感じた。作者は意識してゐないのかも知れないが、おまんの親達が、つねに姑息な解決に安んじて、若い者の熱情を他所にしてゐるのが面白い。母親が父親に對して娘を庇ふとか、二階へ來て娘に意見するとか、大詰の破滅までに親達が何等かの形で影を現はすとかするのが、在來

の劇作法の採る道なので、この頃の新しがりの青年劇作家でさへ、大詰までの人物の拾收を氣にするのである。しかし、こゝでは、若い者の熱情が親達を抛つ散らかしてゐるのが面白い。舞臺を見てゐるうちに、私は何となく、その皮肉な感じを感じたのだ。

大詰で、左團次が猿之助の三五郎に心中を打明けるところは、面倒くさい技巧を用ひないで、ツケ〳〵と言放つのが、この俳優にふさはしい。

批評が長くなり過ぎたから、「新女形としての松蔦」についての感想は他日に讓る。

めづらしく、最後まで熱心に見物して外へ出ると、劇場歸りの人達が、大切喜劇の「大磯小磯」の惡口を、云つてゐるのが、あちらからもこちらからも聞えて來た。作者松翁氏が本郷座の感想錄に云つてゐたやうな「古い見巧者も、奥さんも、おかみさんも、藝者も、女學生も、金持も、青年職工も、學生たちも、愉快に笑つて、泣いて、舞臺の優人に同情してゐる」といふ、希臘劇以來の演劇の能事は、綺堂氏の作には盡くされてゐたかも知れないが、遺憾にも、松翁氏の作はさういふ感動を、今日の見物に與へなかつた譯である。しかし、私は、「大磯小磯」を一概に嘲笑しやうとは思はない。綺堂氏鬼太郎氏とは自から異なつた人さま〴〵の面目をそこに見て、興味を感じてゐる。これば喜劇と銘を打つには、內容が甚だ貧弱であるが、松翁氏が新を求めて、突飛な作を臆面なく書放したのは面白い。それから、臺詞に最新の現代語を用ひたために、舊劇に浸つてゐる見物から馬鹿にされたつて、それは、恐るゝに足らないのである。曾我兄弟に現代語を用ひさせるのが不都合なら、彼等に德川時代の劇場語を用ひさせるのも不都合なのだ。……たゞ、松翁氏が現代語を藝術的に使用したか否かが問題になるだけなのだ。彼等兄弟を舊幕道德で理想化して、敵討の標本とした在來の取扱ひ方を離れて、現代の目で取扱ふのも、寧ろ藝術の世界を廣くする譯である。松翁氏の崇拜してゐるシェークスピアでも、「トロイラスとクレシダ」に於ては、トロイの英雄や美人を卑小化し俗人化し滑稽化してゐる。松翁氏たるもの、何ぞ、歌舞

伎座の低級な見物の嘲笑くらゐにへこむ必要あらんや。

中幕「沼津」に於ては、私は仁左衛門の老を歎じた。我童の重兵衛は熱情の皆無なのを歯痒く思つた。秀調のおよねはいゝとして、この三人が三人三様の不調和を舞臺に露出してゐるのを見て、左團次一座がよくもあしくも統一して一つの藝の世界をつくつてゐるのに思及んだ（六月三日）

「演舞場」の六月

六月の帝劇の出し物は「お富と與三郎」で、全曲の通しと稱して、書卸し以來あまり上演されなかつた二三の場面をも採用してゐるさうだ。「河内山」の通しなどが企てられたのと同樣で、脚本の缺乏が察せられる。私は「浮名横櫛」は全部通讀したことがあつたが「見染め」と「源氏店」の二場を除いたら、他は愚劣及びがたく、しかも、それが長々と續いてゐるに呆れた。かの二場だけが切離されて上演されて來た譯である。

「演舞場」では、「厄年」といふ新作の二番目物が上演されてゐるが、こんなものを平氣でやる氣になれば、脚本の缺乏なんか苦になりやすまい。谷崎潤一郎氏は、菊五郎を以つて當代の藝術家の第一人者であると激賞してゐたが、今度の二番目を觀ると、菊五郎といふ役者は、よく芝居なんかわからない男ではないかとさへ思はれた。これが興行者から強いられて、止むを得ずやつてゐるのなら、まだしも諒とする。俳優を職業としてゐる上は、自儘なことばかり出來ないに極つてゐる。涙を呑んで自分の好まない芝居もやらなければなるまい。しかし、自分の方から進んでこんな芝居をやりたがつたとすると、その芝居に對する考への淺薄さが、一通りや二通りではないのである。惡黨になつて威張ることに快感を覺えてゐるのかも知れないが、金を盗んだり人を殺したりの惡黨行爲をすら〳〵とやつて通拔けてゐるだけなのだ。强みも力もなければ、凄味も滑稽味もない。菊五郎も默阿彌物などの惡黨にはたび〳〵扮してゐるのだが、こんな手應へのない惡黨は在來の

芝居の世界にも、かつて存在しなかつたことを感じないのであるか。四幕も長々と續いてゐるのに、あのなかで、人間の影でも浮んでゐるのは、彥三郎の坊主ぐらゐなものだ。多賀之丞の莫連女も、あり振れた型の如き役だが、それにしても、口にし甲斐のある變つた臺詞一つ與へられてゐないのには呆れる。改名後最初の役として氣の毒な感じがする。……こんな芝居をも、滿場の見物が喜んでゐるのなら、脚本は無用である。出鱈目に舞臺を飾つて、菊五郎とか何とか云ふ役者達が出て、手當り次第に何かやつてゐればいゝ譯なのだ。脚本も無用であるし、藝の工夫に頭をいためるのも無用である。

「妹脊山」では、吉右衞門の鱶七に、古名優の面影を見た。私は、ふと梅玉歌右衞門の舞臺繪を連想した。（これには考證的根據がないので、私の妄想に過ぎないだらう）宗十郎のお三輪は、純な田舍娘といふよりも廢頽した女らしかつたが、しかし所演に歌舞伎味は持つてゐる。私は訥升時代のこの役者は好きだつたので、すがれ行く彼れを見て、昔の女形の盛衰に思ひを寄せた。

終りに云ふ。「谷崎氏によつて、劇壇の第一人者として名譽ある極印を捺された菊五郎たるもの、すべからく反省すべし」と。（六月四日）

荷風隨筆

永井荷風

上野

震災以後上野公園も次第に舊觀を改めつゝある。山王臺東側の崖に繁つてゐた樹木の悉く燒き拂はれた後、崖も亦道路の取ひろげに削り去られ、セメントを以て固められたので、廣小路のこなたから眺望する時公園入口の趣は前日とは全く異るやうになつた。池の端仲町の池に臨んだ裏通も亦柳の並木の一株も殘らず燒かれてしまつた後、池と道路との間に在つた溝渠は埋められて、新に廣い道路が開通せられた。この溝渠には或は月見橋或は雪見橋など呼ばれた小橋が架せられてゐたのであるが、それ等舊時の光景は今は纔に小林清親の風景版畫に於てのみ之を見るものとなつた。

清親の池の端を描いた版畫は、雪に埋れた枯葦の間から湖心遙に一點の花かとも見える辨財天の赤き祠を望むところ、一人の藝者が箱屋を伴ひ吹雪に傘をつぼめながら、柳のかげなる石橋を渡つて行く景である。此の板畫の印行せられたのは明治十二三年の頃であらう。當時池之端數寄屋町の藝者は新柳の二橋と頡頏して其品致を下さなかつた。されば此の時代に在つて上野の風景を記述した詩文雜著のたぐひにして數寄屋町の妓院に說及ばないものは殆ど無い。清親の風景板畫に、雪中の池之端を描いて之に妓を配合せしめたのも亦時代の好尚を示したものと云ふべきであらう。上野の始めて公園地となされたのは、看雨隱士なる人の著した「東京地理沿革誌」に從へば明治六年である。明治十年に至つて始て內國勸業博覽會が此の公園に開催せられた。當時上野なる新公園の狀況を記述するもの、箕作秋坪の戲著「小西湖佳話」にまさ

るものはあるまい。

箕作秋萍は蘭學の大家である。舊幕府の時開成所の教官となり又外國奉行の通譯官となり兩度歐洲に渡航した事がある。維新の後私塾を開いて生徒を教授し、東京學士會員に推擧せられ、ついで東京教育博物館長および東京圖書館長に任ぜられ、明治十九年十二月三日享年六十三歳で歿した。

秋萍は舊幕府の時より成島柳北と親しかつたので、その戲著小西湖佳話は柳北の編輯する花月新誌の第四十四號から其の誌上に連載せられた。秋萍は佳話の初にまづ「公園の勝概」を記して「忍ケ岡ハ其ノ東北ニ亘リ、一山皆櫻樹ニシテ矗矗タル松杉ハ翠ヲ交ヘ、不忍池ハ其ノ西南ヲ匝リテ、滿湖悉ク芙蓉ニシテ裊々タル楊柳ハ緑ヲ罩メタリ。雲山烟水、實ニ雙美ノ地ヲ占メ、雪花風月、優ニ四時ノ勝ヲ鍾(アツ)ム。是ヲ東京上野ノ公園トナス。其ノ勝景ハ既ニ多ク得ル事難シ。況ヤ此ノ盛都紅塵ノ中ニ在ツテ、此ノ秀靈ノ境ヲ具フ。所謂(イハユル)錦上更ニ花ヲ加フル者、蓋シ亦絶エテ無クシテ僅ニ有ル者ナリ。(略)近歳官此ノ山水ノ一區ヲ修メ以テ公園トナス。周方數里。車馬ノ者モ往キ、杖履ノ者モ往ク。民俗ニ之ヲ樂ンデ其ノ大ナルヲ知ラズ。京中都人士行樂ノ地、實ニ此ヲ以テ最第一トナス。」

上野の櫻は都下の櫻花の中最も早く花をさかすものと云はれてゐる。飛鳥山隅田堤御殿山等の櫻は皆上野につぐものである。之を小西湖佳話について見るに「東台ノ一山處トシテ櫻樹ナラザルハ無シ。其ノ單瓣淡紅ニシテ彼岸櫻ト稱スル者最モ多シ。古又嘗テ吉野山ノ種ヲ移植スト云フ。毎歳立春ノ後五六旬ヲ開花ノ候トナス。」と言つてゐる。そして櫻花滿開の時の光景を叙しては、「若シ夫レ盛花爛熳ノ候ニハ則チ全山彌ヨ望メバ、恰是一團ノ紅雲ナリ。春風駘蕩、芳花繽紛トシテ、紅霧崖ヲ擁シ、觀音ノ臺ハ正ニ雲外ニ懸レリ。彩霞波ヲ掩フテ不忍ノ湖ハ頓ニ水色ヲ變ズ。都人士女堵ヲ傾ケ袂ヲ連ネ、黄塵一簇、雲集群遊ス。車馬ハ旁午シ、綺羅ハ絡繹タリ。數騎衢ヲ駢ベ鞍上ニ相話シテ行ク者ハ洋客ナリ。龍蹄砂ヲ蹴ツテ高蓋四輪、飄リ去ル者ハ華族ナリ。女兒一群、紅紫隊ヲ成ス者ハ歌舞教師ノ女弟子ヲ率ルナリ。雅人ハ則チ紅袖翠

鬢ヲ拉シ、三五先後シテ伴ヲ爲シ、貴客ハ則チ婦人侍女ヲ携ヘ、一歩ニ歩相隨フ。官員ハ則チ黒帽銀笻。書生ハ則チ短衣高屐、兵隊ハ則チ洋服濶歩シ、文人ハ則チ瓢酒ニシテ逍遙ス。茶肆ノ婢女、冶裝妖飾、媚ヲ衒ヒ客ヲ呼ブ。而シテ樹下ニ氈牀ヲ設ケ、花間ニ氈席ヲ展ベ、酒ヲ煖メ盃ヲ侑ム。遊人嘔唖歌吹シ、遲々タル春日興ヲ追ヒ歡ヲ盡シテ、惟夕照ノ西ニ沒シ鐘聲ノ暮ヲ報ズルヲ恨ムノミ。」と言つてゐる。櫻花は上野の山内のみならず、其の隣接せる谷中の諸寺院をはじめ根津權現の社内にも古來都人の眺め賞した名木が多くある。齋藤月岑の「東都歲事記」に擧ぐる所のものを見れば、谷中日暮里の養福寺、經王寺、大行寺、長久院、西光寺等には枝垂櫻があり、根津の社内、谷中天王寺、同所の瑞林寺には八重櫻があつた。

一昨年の春わたくしは森春濤の墓を掃ひに日暮里の經王寺に赴いた時、その門内に一樹の老櫻の、幹は半より折れ腐つてゐながら猶全く枯死せず、細い若枝の先に花をつけてゐるのを見た。また今年の春には谷中瑞林寺に杉本樗園の墓を尋ねた時、門内の櫻は既に散つてゐるが、門外に並んで數株の老櫻は恰も花の盛であつたのみならず、わたくしは其の幹の太さより想像して是或は江戸時代の遺物ではあるまいかと暫く佇立んで其の梢を瞻望した。是日又大行寺の門前を通り過ぎて、わたくしは偶然東都歲事記に記載せられた垂絲櫻の今猶すこやかであることをも知つたのである。

櫻花の種類は甚多い。其中に就いてわたくしは、枝垂櫻を推して第一とする。およそ花木の中、其の天然の樹姿の人工的に美麗なるもの、枝垂櫻と木蘭とに若くものは無いからである。

谷中天王寺は明治七年以後東京市の墓地となつた事は說くに及ぶまい。墓地本道の左右に繁茂してゐた古松老杉も今は大方枯死し、櫻樹も亦古人の詩賦中に見るが如きものは既に大抵烏有となつたやうである。

根津權現の櫻も今はどうなつたであらうか。わたくしは久しく此地を過ぎたことがないので、社頭の花の猶在るや否やを審にしない。

根津權現の社頭には慶應四年より明治二十一年まで凡そ二十一年の間遊里の在つたことは今猶人の話柄に上る所である。小西湖佳話に曰く、「湖北ノ地、忍ケ岡向ケ岡、東西相對ス。其ノ間一帶ノ平坦ヲ成ス。中ニ花柳ノ一郭アリ。根津ト曰フ。地ハ神祠ニ因テ名ヲ得タリ。祠ハ即チ根津神社ナリ。祠宇壯麗。祠邊一區ノ地、之ヲ曙ノ里ト稱シ、林泉ノ勝ニ名アリ。丘陵苑池、樹石花草、巧ニ景致ヲ成ス。而シテ園中櫻樹躑躅最モ多ク、亦自ラ遊觀行樂ノ一地タリ。祠前ノ通衢。八重垣町、須賀町。是ヲ狹邪ノ叢トナス。此ノ地ノ狹邪ハ天保以前曾テ一タビ之ヲ開ク。未ダ幾クナラズシテ官新令ヲ下シ、命ジテ之ヲ撤シ去ル。安政中北里災ニ罹リ一時假館ヲ此ニ設ク。明治ノ初年ニ至リ、官復タ許シテ之ヲ與ス。爾來今ニ至ツテ、日ニ昌ンニ月ニ盛ンナリ。家家娉婷ヲ貯へ、戸戸嫺娜ヲ養フ。紅樓翠閣。一族ノ暖烟ヲ屯ス。妓院ノ數今七八十戸ニ下ラズト云フ。」

わたしは先年坊間の一書肆に於て「總歌餘譚」と題した一冊の寫本を獲たことがある。作者は「若城松子雁戯稿」となせるのみで何人なるやを詳にしない。然しこの書は明治十年西南戰爭が平定した後凱旋の兵士が除隊の命を待つ間一時谷中邊の寺院に宿泊してゐた事を記述し、それより根津駒込あたりの街の狀況を說くこと頗精細である。是亦好箇の明治風俗史料たることを失はない。殊に根津遊廓の事に關しては當時の文書にして其沿革を細說したものが割合に少いので、わたくしは其長文なるを厭はず「總歌餘譚」の一節をこゝに摘錄する事とした。徒に拙稿の紙數を增して賣文の錢を貪らむがためではない。わたくしは此のたびの草稿に於ては、明治年間の東京を說くに際して、寡聞の及ぶかぎり成るべく當時の人の文を引用し之に因つて其時代の世相を窺ひ知らしめむ事を欲してゐるのである。

松子雁の總歌餘譚に曰く「コヽニ根津ノ新花街ハ方今第四區六小區中ノ地ニ屬シテ、三面ハ渾テ本郷駒籠谷中ノ阜臺ヲ負ヒ、南ノ一方劣ニ蓮池ヲ抱ク。尤モ僻陬ノ一小廓ナリ。莫約根津ト稱スル地壽ハ東西二丁ニ充ダズ南北陂下三丁餘。之ヲ七箇町ニ分割ス。則チ日ク七軒町、日ク宮永町、日ク片町等ハ倶ニ皆廓外ニシテ舊來ノ商坊ナリ。日ク藍染町、日ク清

水町、曰ク八重垣町等ハ貪廓内ニシテ再興以來ノ新巷ナリ。爾シテ花街ハ其ノ三分ノ一ニ居ル。昔日ハ即チ根津權現ノ社內ニシテ而モ久古ノ柳巷ナリ。卒ニ天保ノ改革に當ツテ永ク廢斥セラル。然レドモ猶有緣ノ地タルヲモツテ、吉原回祿ノ災ニ罹ル每ニ、權ク爰ニ假肆ヲ設ケテ一時ノ榮ヲ取ルヿ也最數回ナリ。其ノ後慶應年間ニ至ツテ、松葉屋某ナル者魁主トナリ、遂ニ舊府ノ許可ヲ禀クルヤ、同志厕與ニ助ケテ以テ稍ク二三ノ樓ヲ營ム。其ノ創立ノ妓樓トイフモノハ則チ曰ク松葉屋、曰ク大黑屋、曰ク小川屋（今東樓ニ革ム）曰ク吉田屋（後ニ滅却ス現在ノ吉田屋ハ自ラ異ル）曰ク金邑屋（後ニ岩村樓ニ革メ又吉野屋ニ革ム）此ノ他局店ハ曰ク三福長屋、曰ク惠比壽長屋等三四戶アリ。徒コレニ過ギズ。然ルニ皐制ノ餘澤僻隅ニ澆浩シ維新以降漸次ソノ繁昌ヲ得タルトコロ、乍チニシテ島原ノ妓樓廢止セラレテ那ノ遺道ノ地ニ轉ジ、新古互ニ其ノ榮擧ヲ競フニオヨンデ、好聲一時ニ騰々タルヿヲ得タリ。（略）。現在大樓ト稱スル者今其ノ二三ヲ玆ニ敘スレバ、即チ曰ク松葉樓（俚俗大松葉ト稱ス即創立松葉屋是也）曰ク甲子樓（即創立大黑屋是ナリ）曰ク八幡樓、曰ク常盤樓、曰ク姿樓、曰ク三木樓等、維們最モ群ヲ出ヅ。漸次之ニ序グ者、則チ曰ク大磯屋、曰ク勝松葉、曰ク湊屋、曰ク林屋、曰ク新常磐屋、曰ク吉野屋、曰ク伊住屋、曰ク武藏屋、曰ク新丸屋、曰ク吉田屋等、極メテ美ナリ。自餘或ハ小店ト稱シ、或ハ五軒ト號ケ、或ハ局ト呼ブ者ノ若キハ曾テ算フルニ遑アラズ。（略）且ツ又茶屋ハ曰ク梅本、家滿喜、岩村等大ニ優ル。自餘大和屋、若松、桝三河ト曰フモノ僉創立ノ舊家ナリト雖亦杳ニ之ニ劣レリ。將又券番暖簾等ノ藝妓ニ於テハ、先ヅ小梅、才藏、松吉、梅吉、房吉、增吉、鈴八、小勝、小蝶、小德們、凡ソ四十有餘名アリ。其他ハ當所ノ糟粕ヲ嘗ムル者、酒店魚商ヲ首トシテ浴樓髮頭肆ニ造ルマデ殆ド一千餘戶ニ及ベリ。總テ這地ノ隆盛ナル反テ舊趾ノ南濱新驛ヲ羞シムベキ景勢ナリ。然リト雖其ノ諸ヲ吉原ニ比較スレバ縱ヘ大樓ト謂フ可キモ亦カノ半籬ニモ及ブ可カラズ。其ノ餘ハ推シテ量ル可キナリ矣。」

根津の遊里は斯くの如く一時繁榮を極めたが明治廿一年六月三十日を限りとして取拂はれ、深川洲崎の埋立地に移轉を命ぜられた。「娼家の跡は商舖又は下宿屋の如きものとなつたが、獨り八幡樓の跡のみ其の庭園の向ケ岡の阻崖に面して頗

幽邃であつた故が、娼樓の建物をも其のまゝに之を溫泉旅館となして營業をなすやうになつた。

當時都下の溫泉旅館と稱するものは旅客の宿泊する逆旅ではなくして、都人の來つて酒宴を張り或は蕩子の欲に藝妓矢場女を拉し來る處で、市中繁華の街を離れて稍幽靜なる地區には必溫泉場なるものが在つた。即ち深川仲町には某樓があり、駒込追分には草津溫泉があり、根岸には志保原、伊香保の二亭があり、入谷には松源があり、向島秋葉神社內には有馬溫泉があり、水神には八百松あり、木母寺には植半があつた。明治七年に刊行せられた東京新繁昌記中に其の著者服部撫松は都下の溫泉場を論じて、「輓近又處々ニ溫泉場ヲ開クモノアリ各諸州有名ノ喧池ヲ以テ之ニ名ヅク。曰ク伊豆七湯、曰ク有馬溫泉、曰ク何、曰ク何ト。蓋シ其ノ溫泉或ハ湯花ヲ汲ミ來ツテ之ヲ湯中ニ和スト云フ。(略) 方今深川ノ仲街ニ開ク者ヲ以テ巨擘トナス。(略) 俳優澤村氏新戲場ヲ開カントシテ未ダ成ラズ。故ニ溫泉場ヲ開イテ以テ仲街ノ衰勢ヲ挽回セント欲スル也。建築ノ風一妓樓ノ如ク、樓ニ接シテ數箇ノ小茶店アリ各酒肴ヲ辨ジ、且ツ紋妓ヲ蓄フ。亦花街ノ茶店ニ異ラズ。此樓モトヨリ浴ス可ク又醉フ可ク又能ク睡ル可シ。凡ソ人間ノ快樂ヤ浴醉睡ノ三字ニ如クハ無シ。一樓ニシテ三快ヲ驚グ者ハ亦新繁昌中ノ一洗舊湯ナリ。」と言つてゐる。

春の家おぼろの小說當世書生氣質第十四回には明治十八九年頃の大學生が矢場女を携へて本郷駒込の草津溫泉に浴せんとする時の光景が記述せられてゐる。是亦當時の風俗を覗ふ一端となるであらう。其の文に曰く、「草津とし云へば、臭氣も名も高き、其本元の藥湯を、こゝにうつしてみつや町に、人のしたりたる溫泉あり。夏は納涼、秋は菊見遊山をかねる出養生、客あし繁き宿ながら、時しも十月中旬の事とて、團子坂の造菊も、まだ開園にはならざる程ゆゑ、この溫泉も靜かにして浴場は例の如く込合へども皆湯錢並の客人のみ、座敷に通るは最稀なり。五六人の女辨手を束ねて、ぼんやり客俟の誰彼時、たちまちガラ／＼ッとひきこみしは、二人乘の人力車、根津の廓からの流丸ならずば、權君御持參の高帽子、と女中はてん／＼に浮立つゝ、貯蓄のイラッシャイを惜氣もなく異口一齊さらけだして、急ぎいでむかへて一應吃驚、男は紀

然たる山だし書生。」云々。

根津の娼樓八幡屋跡の溫泉旅館は明治三十年頃には紫明館と稱してゐた。その頃わたくしは押川春浪井上唖々の二亡友と外神田の妓を拉して一夜紫明館に飮んだことを覺えてゐる。四五輪の人力車を連ねて大きな玄關口へ乘付け宿の女中に出迎へられた時の光景は當世書生氣質中の叙事と多く異る所がなかつたであらう。根津より不忍池の北端に出る陋巷は即ち宮永町である。電車線路のいまだ布設せられなかつた頃、わたくしは此のあたりの裏町の光景に興味を覺えて之を拙作の小說「歡樂」と云ふもの丶中に記述したことがあつた。其の文はこ丶に錄する必要がない。

明治四十二三年の頃鷗外先生は學生時代のむかしを追回せられて、ヴイタセクスアリス及び雁と題する小說二種を草せられた。「雁」の篇中に現れ來る人物と其背景とは明治十五六年代のものであらう。先生の大學を卒業せられたのは明治十七年であつたので、即ち春の家主人の當世書生氣質に描き出されたものと時代を同じくしてゐるわけである。小說「雁」の一篇は一大學生が日暮不忍池に浮んでゐる雁に石を投じて之を殺し、夜になるのを待ち池に入つて雁を捕へて逃走する事件と、主人公の親友が學業の卒はるを待たずして獨逸に留學する談話とを以て局を結んでゐる

今日不忍池の周圍は肩摩轂擊の巷となつたので、散步の書生が薄暮池上に睡る水禽を捕へることなどは殆ど事實でないやうな思ひがする。然し當時に在つては、不忍池の根津から本郷に面するあたりは殊にさびしく通行の人も途絕え勝ちであつた。こ丶に「雁」の叙景文を摘錄すれば、「其頃は根津に通ずる小溝から、今三人の立つてゐる汀まで一面に葦が茂つてゐた。其葦の枯葉が池の中心に向つて次第に疎になつて、只枯蓮の襤褸のやうな葉、海綿のやうな房が碁布せられ、葉や房の莖は、種々の高さに折れて、それが鋭角に撑へて、景物に荒涼な趣を添へてゐる。此の Bitume の色の莖の間を縫つて、黑ずんだ上に鈍い反射を見せてゐる水の面を、十羽ばかりの雁が緩やかに往來してゐる。中には、停止して動かぬものもある。」

此の景は池之端七軒町から茅町に到るあたりの汀から池を見たものであらう。作者は此の景を叙するに先立つて、作中の人物が福地櫻痴と末造氏との門前を過ぎることを語つてゐる。櫻癡居士の邸は下谷茅町三丁目十六番地に在つたのだ。當時居士は東京日々新聞の紙上に其の所謂「我曹」の政論を揭げて一代の指導者たらむとしてゐたのである。又狹斜の巷に在つては池の端の御前の名を以て迎へられてゐた。居士が茅町の邸は其後主人の木挽町合引橋に移居した後まで永く其の儘に殘つてゐたので、わたくしも能く之を見覺えてゐる。家は輕快なる二階づくりで其の門墻も亦極めていかめしからざるところ、われ〳〵の目には富商の隱宅か或は旗亭かとも思はれた位で、今日の紳士が好んで築造する邸宅とは全く趣を異にしたものであつた。

茅町の岸は本郷向ヶ岡の丘阜を背にし東に面して不忍池と上野の全景を眺望する勝概の地である。然しわたくしの知人にして曾てこの地に卜居した者の言ふ所によれば土地陰濕にして夏は蚊多く冬は湖上に東北の風を遮るものがないので寒氣甚しくして殆ど住むに堪へないと云ふことである。

不忍池の周圍は明治十六七年の頃に埋立てられて競馬場となつた。一說にそれは明治十八年と云ふ。わたくしは未之を詳にしない。中根淑の香亭雅談を見るに、「今歲ノ春都下ノ貴紳相議シテ、湖ヲ環ツテ鬪馬ノ場ヲ作ル。工ヲ發シ混沌ヲ鑿ル。而シテ舊時ノ風致全ク索矣タリ。」と言つてゐる。雅談の成つた年は其の序によつて按ずれば癸未暮春（明治十六年）である。而して其の卷尾につけられた依田學海の跋を見れば明治十九年二月としてある。

香亭雅談には又江戶時代の文人にして不忍池畔に居を卜したものゝ名を擧げて下の如くに言つてゐる。「古ヨリ都下ノ勝地ヲ言フ者、必先ヅ指ヲ小西湖ニ屈スルハ、其ノ山水ノ觀アルヲ以テナリ。服南郭、屋代輪池、濟水泊泊、梁星巖、深川永機等、皆一タビ跡ヲ湖上ニ寄ス。爾來文人韻士ノ之ニ居ル者、鮮シトナサズ。」

服部南郭の不忍池畔に住んだのは其文集によつて按ずるに享保初年の頃で、幾くもなくして本郷に移り又芝に移つた。

南郭文集初編卷の四に「即事二首、篠池作」なるものを載せてゐる。其の一に曰く、「一臥茅堂篠水陰。長裾休曳此蕭森。連城抱璞多時泣。通邑傳書百歲心。向暮林烏無數黑。歷年江樹自然深。人情湖海空迢遞。客迹天涯奈滯淫。」

屋代輪池は幕府の右筆にして有名なる考證家屋代太郎である。清水泊洦は和學者村田春海の門人清水濱臣で、此二人はいづれも大田南畝と時を同じくした人であるが、わたくしは未だ是二家の不忍池畔に居た時の年代を調べる遑がない。俳諧師永機の事も亦寡識の及ばざる所である。

詩人梁川星巖の不忍池畔に居つたのは天保十年の夏より冬に至る間のことで、其家酒舍立兆なるものゝ家に寓してゐたのである。是の事は既に拙著「下谷叢話」の中に記述してある。

香亭雅談には言はれてゐないが、服部南郭の門人宮瀨劉龍門も明和安永の頃不忍池のほとりに居をトした詩人である。大田南畝が壯時劉龍門について詩を學んだこともわたくしは既に之を葷齋漫筆なる拙稿の中に記述した。

南郭龍門の二家は不忍池の文字の雅致なきを避けて、其の作中には之を「篠池」と書してゐる。星巖及び其社中の詩人は「蓮塘」と書し、又杭州の西湖に擬して「小西湖」と呼んだ。星巖が不忍池十詠の中蓮塘を賦して、「天公調玉粉。裝飾小西湖」と言つてゐるが如きは其一例である。

維新の後星巖の門人横山湖山が既に其姓を小野氏と改め、近江の郷里より上京して不忍池畔に一樓を構へて新に詩社を開いた。是明治五年壬申の夏である。湖山は維新の際國家に功勞があつて官吏に舉げられたが暫時にして之を辭し、そが新居雜咏の作に其師星巖が風流の志を繼ぐべき事を述べて、「蓮塘欲繼梁翁集。也是吾家消暑灣。」となした。然し湖山は幾くもなくして其居を神田五軒町に移した。

明治年間池塘に居をトした名士にして、わたくしの傳聞する所の者を擧ぐれば、既に述べた福地櫻痴、小野湖山の他には箕作秋坪と篆刻家中野敬所との二人があるのみである。

わたくしは甚散漫ながら以上の如く明治年間の上野公園について見聞する所を述べた。

明治時代の都人は寛永寺の燒跡なる上野公園を以て春花秋月四時の風光を賞する勝地となし、或時はこゝに外國の貴賓を迎へて之を接待し、又折ある毎に勸業博覽會及其他の公會をここに開催すること今日に至るも變る所がない。公園は之がために年と共に俗了し、昭和の今日に及んで、われ〳〵の目に見るものは病樹の亂立する間に朽ちかゝつた舊時の堂宇と取殘された博覽會の建築物が在るばかりである。わたくしをして言はしむれば東京市現時の形勢より考へて、上野の公園地は既に狹隘に過ぐる憾みがある。現時園内に在る建築物は帝室博物館と動物園との二ツを除いて、其他のものは諸學校の校舍と共に悉く之を園外の地に撤去し、猶又谷中一帶の地を公園に編入し舊來の寺院墓地は之を存置し、市民の居宅は之を取拂つたならば稍規模の大なる公園となす事ができるであらう。

明治三十年頃までは日暮里から道灌山のあたりの阻塞は公園にあらざるも猶公園に等しき閑地であつた。

上野公園地丘陵の東麓に汽車鐵道の停車場が設けられたのは明治十四年である。停車場及び鐵道線路の敷地となつた處は、維新前には火除地と稱した閑地で、また下寺と呼ぶ寛永寺の末院が堂舍を連ねてゐた。此處に停車場を設けて東北鐵道の發着點となしたのは上野公園の風趣を損ふ最大の原因であつた。上野停車場及倉庫の如きは其の創設の當初水利の便ある秋葉ケ原のあたりを卜して經營せられべきものであつた。然し新都萬事の經營既に成つた後、之を云々するは病の早く膏肓に入つた後治療の法を講ぜむとするが如きものであらう。東京の都市は王政復古の後恰六十年の星霜を閲しながら、猶防火衞生の如き必須の設備をすら完成することが出來ずにゐる。都市のことを論ずるに臨んで公園の如き閑地の體裁について多く言を費すは迂遠の甚しいものであらう。

文藝時評

透谷。樗牛。また今日の我々の文學

佐藤春夫

この一文は正宗白鳥氏が前號の僕の疑問に對して答へられた懇切な高教に對する僕の再度の疑問である。

正宗氏が先日僕や谷崎潤一郎や菊池寛や及び氏自身の批評の態度がテキパキした簡單なものであると指摘し、島崎藤村の岩野泡鳴を評した一句を引合に出したのに對して、『懐疑的な態度のみ深刻で又批評は結論のないのを尊し』と氏が思つてゐるのかと僕は疑つたのに向つて氏の答は甚だ簡單明瞭で、また『極めて平凡で日常世人がよくいつてゐるとを文學に應用していつたまでで、』すなはち『「あの人があゝいふことをしたのも、いろ／＼な混入つた事情があつてあゝなのだから、そこを見てやらないで、一概にケナすのは可哀相だ」といふ程度のものであつた』さうである。さうして『あまりにテキパキと簡單に片付けてしまふ批評ばかりが目についたので、』もつと考へなほして見ることも必要だといふので『他人に注意するばかりでなく、自分をも戒め』られたつもりであつたといふことである。これは甘黨だといふ客に對して甘黨ならといふので駄菓子を馳走にされた程度の張合拔けがしないではない。テキパキと物をいふことが必ずしも優れた批評でないといふことの文字通りな意味なら、それは分り過ぎる程分つたことである。テキパキものをいふうちにも愚劣な批評もあれば、またその斷定のなかに千古の鐵案を含んだものもあり得る。僕は千古の鐵案を含んだ決然たる批評を喜ぶものである。僕の批評にそれだけの値打ちがあるかどうかは殘念ながら自分では分らないし、また自づから別問題である

が、しかし僕の批評が動機になつて正宗氏にそのやうな分り切つた馬鹿々々しいやうなことを考へさせたとすると、これは正宗氏の目には僕の批評そのものがまるで淺薄至極に見えたからだらうと、私かに汗顔の至りである。それで正宗氏は僕の如き態度で批評をするよりも、前時代にも高山樗牛などといふ批評家があつて『「文明の批評家」論は（？）彼の評論中、最も有名なもので明治の作家に批評精神（？）の欠けてゐることを罵倒したもの』（この意味多少不明ながら判讀する）があるのだからテキパキものを片附けるよりも同じ問題に關する前代の代表的論文でも讀んで見て『樗牛が間違つてゐるならゐるでそこを指摘したなら、』僕の所論にも幾らか深味が出來たらうと、から親切に教を垂れられた。

また正宗氏は僕が透谷や獨歩に文明批評のあつたことを述べたのに對しては『透谷の如きは彼の存在中に、最も高踏的な作家とされてゐた』といふ歴史的事實を述べ、その透谷には『人生に相渉るとは何の謂ぞや』といふ論文があつて、これは山路愛山が『山陽論の冒頭に「文士文を作るなほ英雄劍を振ふが如し、爲すところあらんが爲めなり。爲すところなく人生に相渉るところなくして文を作るこれ空の空なるのみ」といふ意味の文句があつて當時の高踏派であつた、「文學界」一派に當てこすつたものらしかつた。つまり今の批評家の用語で云ふと時代思想を閑却してゐるとか階級意識を忘れてゐるとかいふのと同じことなのだ』といはれ、また、

『兎に角、透谷自身は、いまの所謂ブルヂョア文學者に比較しても比較にならないほどに、實社會を蔑視してゐたのであつた。當人さへさう云つて人生を閑却するのをむしろ誇つてゐるのを、佐藤君が、いやお前の作品には文明批評がある。人生批評がある、時代批評があるといふのなら、そこをもつと突込んで、作者自身が意識しなくつても、その作品のなかには、文明批評などの要素が自ら潜んでゐることを證明しなければなるまい。テキパキと簡單に片附けるは取扱ひ方があまりに淺いと云はれないことはない。』

と正宗氏は一應かういつてから更に『私は佐藤君が、透谷などにも文明批評的要素があつたといふこと其事には敢へて

反對しない。彼れが實社會を蔑視したところに、はじめて、外國の文學觀やある文學に接した新日本の文學青年の實相を覗ふことが出來る。透谷の作には明治二十代の文學青年の夢が唄はれてゐる。何時の世の青年の心とも相通じてゐたながら、二十年代の氣持は明かに漂つてゐる。……』と解說してゐられるところなど誠に手をとつて敎へんばかりの親切に對しては、僕は後輩として一應感謝を表白しなければならぬ義務を感ずる。

しかしながら、透谷の文明批評的要素などについてこのやうなまるで無意味な解說をまで施さなければ深刻な批評でないといふことになると、僕は深刻な批評の煩に堪えないことを痛感したことも事實である。更に正宗氏が『人生に相渉るとは何んの謂ぞや』の結語『あゝ文士何すれぞ局促として人生に相渉ることをこれ求めん』の句を盾にとつて、また透谷が當時最も高踏的な作家とされたといふ事實を見て、透谷が人生を閑却することを寧ろ誇つてゐる云々とテキパキと簡單に片附けた取扱ひ方には、まつたくのところ僕は少しばかり啞然たらざるを得ないのである。僕、年來讀書を好まず、從つて甚だ無學なりといへども樗牛の全集を讀んだこともあり、また透谷の文章をも今日始めて讀むのではない。僕が偶々透谷の名を文明批評的要素を持つた先人として數へ上げたのも實は先日改造社版による「透谷集」を繙讀した折から得た感想が自からそこに首を出したに過ぎなかつた。僕はさうして、透谷の文明批評的要素などについては何等解說の必要がないくらゐ痛切にこれを看取したのである。彼の所謂內部生命的理想主義は明治廿年代に對してそれ自身が一つの文明批評であつたのである。當時の功利萬能的社會及び餘りに外面的な寫實をのみことゝする文學に對して透谷が持出したところの批判及び透谷が要求したところの文學は僕の目には誠に正鵠を得た一つの立派な文明批評であることを思はせる。否、文明批評として以外には殆んど何ものをも感じさせないくらゐである。僕は廿歲ぐらゐの時に曾つて[illegible]版の透谷集を手にとつたことがあつたけれども、當時の僕には廿年前の青年透谷の夢は少しも相通ずるものがなかつた。僕は殆んど風馬牛の氣持ちを以つてあの尨大な假綴の冊子を投げ出したものだつた。正宗氏は『何時の世の青年の心とも相通じな

から、』といはれてゐるけれども同じ明治も四十年代の青年なる僕の心には透谷の夢は相通ずるものではなかつた。青年は夢を歌ふことを好む。しかしながら青年の夢は各々の時代によつてその内容を異にしてゐる。青年の夢はいつも必ずしも透谷のそれとは同じものではない。それは恰も文明批評の題目がいつも必ずしも對社會的ではないと同じく。階級思想に目覺めよと叫ぶことが文明批評の題目であることもある。藝術至上主義を高調することが一代の文明批評である場合もある。ヂョーヂ・ムーアはある時期において極端な藝術至上主義者である。しかもその時代に彼がその立場によつて書いた作品の中には英國のその時代に對する手酷い文明批評を眞向ふから振りかざしてゐる。オスカー・ワイルドはその著作に於いて第三流の作家であり、その態度に於いて餘りに輕佻なる才子ではある。しかも彼の藝術至上主義の中には當時の英國に對する一つの文明批評的態度を含んでゐることを認めなければならぬ。ムーアもワイルドも彼が藝術至上主義者であるといふ自信と文明批評家であるといふ自覺とは毫も矛盾するものではなかつた。シャルル、ボオドレエルに就ても同じ事が言へる。透谷は『あゝ文士、何んすれぞ局促して人生に相渉るをこれ求めん』と揚言した。しかも彼がこの場合に用ひた人生とは彼自身も言ふが如く山路愛山の用ひた言葉をそつくりそのまま、人生に相渉るの意味は功利的に役立つといふ程の意味に解するのが當然で、內面生活を高調する透谷が功利的文學者愛山に對して投げかけた反語的皮肉としてのみこの一語は意味があるのである。もつと廣義に於いては透谷が人生を閑却してゐなかつたことは『本より文學の事業たることは釋義といふ利刀を假り來らずとも分明なることにして、文學が人生に涉るものなることは何人といへ共之を疑はぬなるべし。』（改造社版二〇九頁）の一句によつても明かであるし、また彼が所謂高踏派を以て自任しなかつたことは『「高踏派」といふ名稱は、何人に加へられたる者なるか、吾人之を知る能はず、然るに例の口善惡なき京童等は高踏派とは足の無き仙人の事なり、足の無き仙人とは「文學界」の連中であらうなど言散らして、矢鱈に仙人よばはりせられんは、餘り嬉しき事にあらず……』（二一四頁）また、『兎に角吾人に對して「事業を輕しむ」といふ[illegible]

〔二二六頁〕とも明言してゐる。その批評の題目を見ても、例へば「德川時代平民的理想」「德川時代平民的虛無思想」或は「明治文學の管見」四項目の如き、就中その「政治上の變遷」の如き彼は一個の自覺した文明批評家として文明批評を試みてゐるのを見るのである。僕は正宗氏が「兎に角、透谷自身は、いまの所謂ブルヂョア文學者に比較してさへ、比較にならないほどに、實社會を蔑視するのを自己の文學の本領としてゐたのであつた。當人さへさう云つて人生を閑却する事をむしろ誇つてゐるのを」といふのを聞いて啞然たらざるを得ないのは、かういふ理由によつてゞある。いつたい、どんな讀み方を試みたならば透谷を正宗氏のいふやうに讀むことが出來るのであらう。

それにしても難しいのは深刻なる批評なるものである。深刻なる批評といふものは無理にも一旦事實を曲げて見て、つまり自から自覺して人生と社會とに對して文明批評を試みてゐる一人の批評家に對してさへ『實社會を蔑視するのを自己の文學の本領としてゐた』などと誣ひた上で更に、しかし『お前の作品に文明批評がある、人生批評がある。時代批評がある』と突込んで(?)いはなければ批評が淺いといふことになると、深刻なる批評の一面には先づ第一に間違つた觀察を含まなければならぬといふ眞に奇妙な前提を必要とするらしい。吁。深刻なる批評もまた難い哉。しかし僕は『テキパキと簡單に片附ける取扱ひ方が餘りに淺いといはれないことはない』最も適切な一例を、いま目のあたり正宗氏自身の事實によつて見せらるゝことによつて正宗氏の僕に與へられた注意をも一應充分腹に入れることが出來ると同時に、聰明なる正宗氏が『自分をも戒めたつもりである』といはれたのも成るほどなあ、と合點するのである。

しかし僕は透谷が當時最も高踏的な文士と認められたといふ事實の理由をも諒解出來ないではない。さうして當時の如き時代にあつては透谷の如く高踏的であることがそれ自身一つの文明批評的態度であつた一事をこそ閑却する事は出來まい。明治維新の實行的、行動的時代の餘波を受けて志ある青年の一部は功利的事業をのみ事業と感じ、また江戸時代の泰平の夢を續けた一部の文學者は形態の完美と社會相の表面的正確とを描破することを唯一の文學的世界と心得た時代に、

人間には別に内面生命なるものの存在することを高調しようとしたことは眞に有意味な態度であつたからである。透谷が時代に向つて要求したところのものは各自の個人に向つてその個人的生命に目覺めよ――功利的世界の外に人間別に天地あることを知れとの警告であつたと言直すことも出來るかと思ふ。さうして、それが透谷の文明批評の立場であつた。これ位のことは、したりげに解說するまでもなく透谷を讀むほどの人は誰しも氣づくだらう。

「太陽」誌上に於いて片上伸氏が『文學に於ける文明批評』といふ題で透谷や獨步がその作品發表の當時にあつて高踏的であるといふことが、必ずしも透谷や獨步の作品に文明批評がないといふことの證明にはならないことを述べ『透谷や獨步の文學が文明批評を含んでゐるかゐないかは彼等の文學が高踏的であつたか否かによつて決定せられるのではないのである。彼等の文學が、その當時の社會生活の趨向乃至指標に對して、何等か直接の發言を含んでゐるか否かによつて必ずしも文明批評の有無を決するわけには行かない。透谷や獨步の文學に、社會生活に於ける新しい組織と統一とに對する要求が含まれてをり、新しい道德理想の中心を求める聲が響いてゐるといへるなら、それは今日から見て幼稚單純な主觀的なものに過ぎなかつたとしても、彼等の文學は多少の文明批評的要素を含むものとして認められなければならぬ。……』と說かれたのは盡し得た論である。僕は獨步透谷の兩家の名前を引合に出したまでゝ、別にそれほど深入りをしなかつたがために、正宗氏から簡單で淺薄と思はれたものと見えるけれども、若し透谷や獨步を一個の評題にするとすれば、なるほど片上氏ぐらゐの解說を必要としたかも知れない。それはとにかくとして片上氏は更に文學に於ける文明批評そのものを自家の見地から解說してゐられる。僕も文明批評そのものについては別に一項を設けようと思ふからこゝでは片上氏の見解に對する批評は省略するが、片上氏は最後に、彼の解說に從つて、『この意味で透谷や獨步に文明批評の要素があるといふのは否定出來ない。またこの意味で、現代の日本の文學に、文明批評がないといふことは、プロレタリヤ文學の運動を無視しないかぎり、言へなからう。またそれと同じ意味で、日本現代文學を、自然主義文學以後の支配的勢力

を有する文學に限つて言ふ場合には、そこに文明批評的要素の乏しいことも事實である」と論を結んでゐる。僕が今日の文壇に文明批評的要素の乏しいことをいつた時には日本現代文學をどの程度に解釋したか、またプロレタリヤ文學の運動を僕がどれだけ無視しなかつたかはすでに讀者の知つてゐられる通りである。だから僕は片上氏のこの結論に對して僕とその見解の方向を一にする人が別にあるのを知ることが出來こそすれ、別に片上氏には應答すべき何ものもない。――ただ正宗氏が片上氏の文藝評論にも僕の文明批評有無說に觸れてゐるところがあると折角注意をして下さつたので、僕はかういふ同じ問題に關して同時代の令名ある批評家の說をも參考して見たのである。

更に僕は正宗氏の注意に從つて『同じ問題に關する前代の代表的論文』も一讀したのである。樗牛の著作は十五六年前に一讀した覺えがあるのだけれども、身邊に備へてゐなかつたからわざ〳〵一本を購ふて讀みかへした。「文藝批評家としての文學者」の一文はもとよりその外「文藝評論」の中の大半の諸文章を讀み耽つて殆んど明け易き夜は白らみ。さうして僕はこの前代の批評家の言葉の中に傾聽すべき言葉を尠なからず見出し得た。これまた先輩正宗氏の御注意の賜物である。しかし正宗氏は『樗牛は間違つてゐるならゐるでそれを指摘したなら』僕の所論に一層深味が出來たらうといはれるけれども、僕は樗牛の言說を讀んでも、樗牛が間違つてゐるとも自分が間違つてゐるとも一向感じなかつた。從つてまた自分の言葉を今になつて訂正しなければならぬ必要をも認めない。樗牛は樗牛の立場に從つてその當時の作家たちに臨み、僕は僕の立場に從つてこの時代の作家に對するのである。博學な樗牛は外國の諸名作諸名家を引例してそれに對して我國の作家に反省を求めようとして呼びかけてゐるのである。僕は必ずしも外國の諸名家と諸名作とを擧げるのではない。今日我國の作家がその個人的心理の描寫解剖に於いて、また現象としての世界の觀察の正確に於いて、或はその所謂心境的情感に於いて必ずしも幼稚ではないのに、それに比べて文明批評的一面に於いて幼稚であると感じ、このやうな歪んだ發達を遂げた我國の同時代の文學について、僕の觀るところ感ずるところに從つて立言したのである。しかも樗牛

と僕とは偶々同じやうな題目に觸れたのである。樗牛は假りに身邊に多少はこれを認めないではなかつたにしても、外國の諸大家を顧み、わけてもニイチエの事業を見るに及んで、我國の作家が文明批評的精神に乏しきの結果社會に訴へる力の甚だ微弱なることを歎いてゐるのである。樗牛が文明批評がないと叫んだ時代の文藝界の中に一獨歩一透谷あることを僕がいふために、何も樗牛のこの立言を覆さなければならない道理はない。それよりもむしろ、樗牛がいはんとした精神の中にむしろ僕に同感を感じさせるものを僕は發見し、またこれを發見し得たことを喜ぶ。試みに樗牛の言葉を引かう。『彼等（文學者を指す）の多くは耳あれども國民の聲を聽く能はず、目あれども時勢の風潮を見る能はず、一代の民衆が空しく光明に憧れて暗中に煩悶する所のものを捉へて、「見よ、爾等の理想玆に在り」と呼ぶ能はざる也』また『吾人嘗て我邦の文學者に向つては時代の精神に觸接せよと說きしことありき。而して彼等は即ち同音にして言へらく、「願はくは所謂時代の精神の何物なるかを說示せよ」と。ああ何ぞ其の厚顏にして愧ぢざるの甚しきや。文學者を以て自ら任ぜる彼等に向て却て文學者の覺悟を說く。既に是れ百步のハンデキヤツプ也。而して彼等自ら慚づる所以を知らず、尙且つ斯かる奇問を發す。若し吾人にして是の如きもの即ち時代の精神と說示せば、厚顏なる彼等恐らくは更に問はむ、「然らば如何にしてそれを描くべき乎」と。嗚呼彼等は吾人に向て「文學者と爲るの方法如何」と問はずば已まざらむとする也。吾人豈恨み無きを得むや。』といふが如き、その冷嘲を僕は作家としての自分自身が、これを耳に痛く聽くやうな氣心がする。今日かくの如き感じを懷くものが僕一人であつたならば僕のためには恥であるが、文壇のためには幸せである。樗牛は文界全體の傾向について一の警告を與へたのである。その當時の文界なるものは、內面生活を强調するの故に透谷等を高踏派と稱して仙人扱ひし、また獨步が好んで生死や靈肉などの問題を考へ或は彼の描寫があまりに素朴で簡單で彼の話柄があまりに所謂波瀾に乏しいがために、これは高踏派といふよりも寧ろ書生ツぽの素人藝扱ひにされた時代を稱して、樗牛がその時代そのものをまたその時代の文學者の一般傾向を文明批評に乏しいと評して警告した事實は、僕の所論と何

の低偏するところもないのである。そればかりか樗牛は、別に『「文學界」の諸君子に寄する書』といふ一文に於いてはすでに透谷なき後であるとはいへ當時高踏派として冷笑されたこの一派の人々に對しては、その過度な厭世悲傷の態度を難ずるうちにも、『物質と因果を以て一切を處理せんとする今日の學風の大勢に背いて、超然一意、靈界の幽趣を樂み、美術の神韻を歌ふものあるは、まことに明治文壇の異彩ならずとせむや』と稱してともかくもまづ理解と贊辭とを惜まなかつたのである。また時に「國民の友」記者の立論を贊成する場合にも『常に一種功利眼を以て文學を觀るもの、其言往々偏僻に流るるを免れずと雖も』といふ斷り書きを加へてゐるのを見ても、樗牛が「文學界」一派――當時にあつては決して文壇の主流ではなかつた「文學界」一派に對する同情をも知ることが出來るのである。ただ樗牛は「文學界」一派の人人の高踏が、一般時代の風潮に對してどれだけの意味があつたかをはつきりとつきとめてゐなかつたやうな氣がするのは樗牛のために殘念である。しかも彼自ら一個の文明批評家を以て自任しまた我々もそれを當然認めなければならない樗牛が、『「今戸心中」と情死』の筆者である彼が、「處女の純潔を論ず」及び「桂川を評して情死に及ぶ」の筆者なる透谷、樗牛が明治廿九年に述べたのと殆んど同じやうなことを廿五六年にすでに語つてゐるところの透谷を、樗牛自身と同じやうに一個の文明批評家として適確に認めることをしなかつたのは燈台下暗しの譏りを受けるかも知れない。僕は高山樗牛の先驅を北村透谷に見るとさへいひたいのである。それにしても樗牛が「文明批評家としての文學者」を論ずる場合、その時代の主なる風潮を眼目にして立言したのは、必ずしも不當ではない。恰も僕が今日の文壇を論じて例へば武者小路實篤氏の思想の一面などには、やや文明批評的要素或は態度なきにしもあらざるを考へても、これを論ずることよりも寧ろ一般に文明批評的要素の乏しいことの方に議論の焦點をおくのが事の輕重の上から當然であると考へたが如きものである。

それにしても正宗氏は、『透谷獨歩程度の文明批評なら、どんな時代の作家にでも含まれてゐると、私は、そこに疑ひを起す餘地のないくらゐに信じてゐる』といはれる。正宗氏はすでに信じて疑ひを起す餘地がないといふ。僕は疑つた上

でそれを無いと感じてゐる。僕の感じを以つて正宗氏の信念を打ち壊すことはまつたく困難で不可能なことである。たとへこれを試みても結局それは水掛論に終らうといふものである。ただ知りたいと思ふことは正宗氏は文明批評といふ語をどういふ意味に使はれるか。またある時代には個人主義的であることがそれ自身文明批評的であり、ある時代にはまた別の文明批評があり得るものであることを正宗氏も認められるか。また時代を反映するといふことを文明批評といふものと同じであるか。どのやうな關係があるものなのか。何にしても『透谷には時代の惱みを惱んだ。我々も今日の時代の惱みを惱んでゐるではないか』とだけではテキパキと簡單に片附け過ぎる批評ではあるまいか。『疑ひを起す餘地もないくらゐ』といはれるのを、實におしつけがましいけれどそこのところをどうにか一つ疑つて見て考へて頂くことも、僕の所論に一層深味が出ると同時に正宗氏の所論にも深味が出て、氏が『さう早く片附けてしまふ前に、もつと考へ直して見ることも必要であると私は思つたのであつた。他人に注意するばかりでなく、自分をも戒めたつもりである』といはれるのはこゝらあたりのことではないだらうか。實際樗牛や透谷について、殊に透谷について少々獨斷的ではないかと思はれるやうな高教を垂れられるよりも、今日の作家が、その主なるものが、どういふ風にどういふ作品で、どういふ點に文明批評を獨歩透谷程度には持つてゐるかといふ點を、疑ふ餘地もなくとだけではなくもつと親切に示してもらふことの方が、僕としては有りがたかつた。透谷を解說するよりも、むしろこの方が論題の眼目であるからである。

文明批評及び信念ある文學

『古今東西の文藝史上動かすべからざるの一個の事實は「大なる文學は大なる人物と等しく最も能く時代の精神を代表せるものなり」と云ふこと是也。所謂時代の精神を代表する事を翻して、直に世俗の好尚を迎合するの意に解せば、恐らくは語弊あらむ。唯能く當代國民の感情及欲求に最も明確なる發聲を與へ其の愉悅する所の前途に最も具象の畫影を附

し、「見よ爾等の理想茲に在り」と告ぐるものあらば如何。目見る能はず、耳聽く能はず、口はた言ふ能はず、唯其の胸中の悶々を擁して空しく闇中に模捉せる一代民衆の胸は、猶ほ一絲響きて萬管是れに和するが如く、翕然として是に趨かむ。是の如きは所謂時代の聲たり。』

これは三十四年に「文明批評と文學者」を書いた樗牛が、その二年前にものした「時代の精神と大文學」といふ一文の起筆を抄出したものである。これが僕の目に觸れる限りに於いては、樗牛が文明批評といふ言葉を解説したと思へる文字の中で、最もまとまつた且つ要領を得た一句である。即ち、前時代の有名な批評家が同じ題目についていつた言葉である。

『文學に於ける文明批評は、社會生活の組織に注目し關心するところから發生する。生活を個的にのみ考へて、その個と組織との關係に於いて考へたり感じたりする興味の動かないところには、文明批評は在り得ない。文明批評とは、要するに組織の動きに對する心がかりでさる。在來の社會組織の中心が移動して、新らしい道德理想が求められるか、社會組織が固定して、而かも特殊の個々人がその固定してゐる社會組織と反撥するか。いづれにしても、組織の動きに對する心がかりが衷心の聲となつて發せられるところに、文明批評が行はれる。』

これはわれ〳〵と同時代の批評家片上伸氏の言葉である。

僕はこの前時代と同時代との二人の批評家が文明批評なるものに與へたそれ〳〵の見解をそれ〳〵に諒解することが出來る。前者には自づから一時代を指導するといふ氣慨が含まれてゐるのに對して、後者には必ずしもそのやうな英雄崇拜的氣慨があるやうには見えない。これも亦明治卅年代と昭和初年との自づからなる氣運の相異を無意識に現はしてゐると見られないことはない。すなはち自づからなる時代の反映であらう。片上氏は更に「文學に於ける文明批評」の後に「チエーホフの手紙」といふ一文を添へて片上氏の文明批評觀を一層明かにしてゐる。

そこに引用せられたチエーホフの手紙（「太陽」六月號二五二頁參照）は、またチエーホフの文藝觀を知る上においても手

輕るでしかも暗示的なもので、また僕がすでに、前々月號のこの批評文に於て簡單に述べた意識ある文學、信念ある文學、壯年者の文學などの言葉にも相當に關係があるのを感ずるからこの機會に煩鎖をも顧みずこゝにこの大要をつけ加へて置かうと思ふ。それがまた片上氏の文明批評觀を見る上にも必要な一段階でもあるから。

一八九二年にチエーホフは一友人に手紙を寄せた。その手紙におけるチエーホフによれば、傑れた作者、永遠不朽といはれる人々の著作の魅力は、一つの共通な極く重要な一特徴に存するもので、その一特徴とは『彼等は何所かへ行く。さうして我々をその方へ呼ぶ』。つまり彼等は何かの目的、意識を持つてゐるのだが、それを人々は單に智力によつて看取するのではなく、全存在を以つて感じ得るのである。この大作家のそれ〴〵の目的たるや徒らにこの世に現はれて人の心を騷がせるものではなく、ヘムレツトの父の亡靈がヘムレツトに現はれたるが如く一定の目的意識があるものである。しかしその目的は作者の才能によつて違つてゐるもので、或ひは手近に、『即ち農奴解放とか、祖國の解放とか、政治とか、美とか、或は單に酒とか』といふ風のものでもあり得る」し、または作者の才能によつてその目的は遠い所に『即ち神とか、死後の生活とか、人類の幸福とか、その他さまざま』にある。就中傑出してゐるものは『現實的で人生をあるがまゝに書く。しかしながら、あたかも甘汁に浸されてゐるやうにその一行々々が、目的の意識に浸されてゐるので、そこに描かれたあるがまゝの人生の外にあるべき人生をも感じさせる』これが讀むものを魅惑するのである。『ところが我々はどうだ？われ〳〵はあるがまゝの人生を描く、そしてそれ以上は、うんともすんとも言へないのだ』

僕はチエーホフの手紙を僕の流儀にだけしか讀んでゐないかも知れぬ。それにして意識ある文學、信念ある文學を求めてゐるところの僕にとつては、チエーホフのこの手紙は實に實に欣快である。『われ〳〵はあるがまゝの人生を描く、さうしてそれ以上はうんともすんともいへないのだ』といつたときのチエーホフを僕が、現象としてのみ描く文學は我國の文壇に發達してゐることを認めながらもそこに不滿を感ずる僕の意見（本誌前々號）と相似てゐると、解釋しては間違ひで

あらうか。また『就中傑れてゐるものは現實的で、人生をあるがまゝに描く。しかしながら、……（中略）そこに描かれたあるがまゝの人生の外に、あるべき人生をも感じさせる』といふ言葉を聞くとき、クロポトキンが『彼は徹頭徹尾現實主義の方法で描いた。しかも彼はその方法で一つの理想主義を表現出來るといふ手本を立派に示してゐる』とかういつてゴーゴリを批評した一句を思出させる。

　ところで片上氏はこのチエーホフの手紙を次のやうに讀んでゐる。――『……チエーホフのいはゆる「何所へか行く。そうしてわれ〳〵をその方へ呼ぶ。」ものは、――「智力によつてゞはなく、全存在を以て、何か目的があると感ぜられる」ところのものは、即ち社會生活に於ける組織と統一とに對する要求であり、道德理想の中心を求める心である。即ちいはゆる文學に於ける文明批評にほかならない。』と片上氏はかういふ。チエーホフが、手近に農奴解放とか、祖國の解放とか、政治とか、美とか、單に酒とか、或は遠いところに神とか、死後の生活とか、人類の幸福とか、その他さま〴〵とかう數へ上げてゐるそれらの澤山にあり得る目的を片上氏はたつた一つにひつくるめて或は拔き出して、チエーホフの所謂『智力によつてゞはなく、全存在を以て何か目的があると感ぜらるゝもの』といふのを片上氏は『社會生活に於ける組織と統一とに對する要求であり、道德理想の中心を求める心である』と修正或は要約して了つてゐる。それが果してチエーホフのいはんとした眞意であるかどうかは暫らく問ふの必要はない。なぜかとなればわれ〳〵はこゝでチエーホフについて論ずるのではなく片山氏の文明批評觀を見ようとするのだからである。さうして、それは無產階級文學の先達的擁護者としての片上氏が自己の文藝批評乃至文明批評の立場を明瞭にしたものとして、僕はこれを承認することが出來る。氏らしい見解だからである。しかし僕自身としては、片上氏のこの要約或は推論に基くよりも、却つてチエーホフの言葉に還元して味はふ方が理解し易く、また味はひ深く思はれるのである。それといふのも一八八〇年代のチエーホフと同じく、僕も亦「イワノフ」の主人公イワノフのやうな階級に屬してゐるからであるかも知れない。さうして僕はプロレタリ

ヤ文學がわれ〳〵の社會と文學とに演ずべき役目の決して輕いものでないことは前號に於いて不完全ながら述べた。しかしながら僕はプロレタリヤ文學そのものが民衆の聲の甚だ注目すべきものであり、また今日の青年の心を捉へてゐる主要な題目の中の輕んずべからざるもの丶第一であることを知つてはゐるけれども、だからしてこれが卽ちやがて文明批評そのものであるかどうか。そのすべてゞあるかどうかを僕は知らないのである。これらの現象の上に向つてもう一度考へ直すところに文明批評があり得るかも知れないと思ふのである。卽ち僕のいはんとするところは民衆の聲、時代の叫びそのものがいつもそつくり文明批評そのものであるかどうかを疑ふのである。但、同時にプロレタリヤ文學者が、彼等自身を文明批評家として（その名によつて自稱するかどうかは別として）自任し、彼等が今日の民衆であり同時に明日の使徒豫言者であると自から信ずるであらうことは疑はない。たゞ疑ふところのものは自分自身についてゞある。テキパキと簡單に物をきめて了ふといはれるこの僕が、かくの如く重大な問題に對し然も自分自身の問題に關してどうしてかくテキパキときめてしまへないのであらうか。かくの如き僕に比べれば正宗白鳥氏の如きは自からもいはれる通り甚だテキパキと、『獨歩透谷程度の文明批評なら』『疑ひを起す餘地のないくらゐ』『どんな時代の作家にでも』あることを信じてゐられる。僕は今もいふ通りこの程度のことをさへ正宗氏のやうに鵜呑みに信ずることは出來ない。さうしてこの僕が意識ある文學、信念ある文學を求めるのだからして若しこれを骨稽と呼ぶ人があつたならば骨稽に相違ない。僕はしかし、この時代の一文學者として一の告白を試みることによつて、多少は時代に觸れ或は時代を語ることが出來るであらうかと考へるから敢てこの骨稽を忍ぶのである。

若し『透谷は時代の悩みを悩んだ。しかしわれ〳〵も今日の時代の悩みを悩んでゐるではないか』といふ程度であるならば、僕も亦時代の悩みを悩んでゐないことはない。戯談をいつていゝならば、米の二十錢の時代にはすべての民衆に米の二十錢の時代の悩みを悩み、米の五拾錢の時代にはその時代の悩みを悩み、さうしてそれについての感慨を漏らし不平を

いひ、またその生活振りの上に自からなる對應の策を講ずるではあらう。しかしながらそれだからといつて、あらゆる人々が悉く文明批評的要素を持つてゐるといへるだらうか。否、それは單に時代に影響せられ、或は時代を反映してゐるといふ事實にしか過ぎない。一つの時代に於けるその社會の最も重大な病的現象を先づ感知することは、これは必ずしも文明批評家でなくともこれをなすことが出來る。それがすべての人々に與へてゐる結果を具さに觀察することも亦必ずしも文明批評家的でない藝術家もこれをなすことが出來る。ただ最後にその結果に對應してこの世情から、尠くとも更に一歩を高めるであらうところの機案を見出すこと、或は見出さんとする熱情を發揮するところに自から文明批評は生ずるのである。文明批評家が單にただの理想家でもなくまた感傷的な正義家でもない所以のものは、彼が理想家であつて同時に現實家であり得るところに存在する。否、彼の理想が現實の中心に最も深く刺入つてゐるところにその意義を發見する。さうして文明批評家なるものが、豫言者の如くであり、哲人の如きであり、詩人の如くであり、しかも同時にその他の別の何ものかとして自から文明批評家といはれる所以は、彼が現實に即し、今日といふ平面的斷面に甚だ密接に接觸してゐるところにある。永遠といふ理想的立體が今日といふ平面を貫いて通過してゐるその核心的一點を、彼が確實に把握し得てそこに彼の先活の立脚地を据ようとするところにある。さうして一代の民衆がその文明批評家の立脚地を目指してその同じ場所に彼等自身の生活の立脚地を置くことを喜ぶところに、成功した偉大な文明批評家がある。民衆が一人の大文明批評家の指示によつてその赴くべきところを知る場合もかなり澤山今までにあつたが、また民衆そのものが揉合ひ押合ひながらより一歩高いところに彼等自身の力で、即ち彼等自身がそれ〳〵に文明批評家的一役を持つた一團となつて犇き進んで行くやうな場合をも僕は想像するに難くない。さうして或は今日の時代は後者のやうな時代であるかも分らぬ。

　文明批評はそこに自から社會に向つて、功利的な効果を齎すではあらうが、文明批評そのものは時代によつて必ずしも功利的な題目にのみ目を向けない場合もある。また文明批評家的熱情を抱いてゐる人がその性格に從つて文明批評的熱情

の下に非功利的な題目に彼の焦點を見出すやうな場合も考へ得る。人により、或は時代により文明批評が内面生活に向つて呼びかけられてゐる場合、再び、いひかへれば文明批評が批評の中に人生批評的要素を多分に含んでゐるやうな場合、それは外面的な文明批評即ち社會批評的要素を多分に含んでゐるものの如くには、外面的に具體的にその効果は目に見えないかも知れない。それにしても傑れた文明批評といふものは一面に於ては深い人生批評を含み同時に一面に於ては剴切なる社會批評を含んでゐなければならない。事實またすべての傑れた文明批評は社會批評から人生に呼びかけるか、或は人生批評から社會に呼びかけるか、その入口は異つてゐても、その相貫くところは一つである。僕がいふ意味は深い人生批評に觸れないまた同時に剴切な社會批評を抱かないで善き文明批評はあり得ないといふのである。

僕はすべての人々が必ずしも立派な文明批評家になり得るだらうとは思はないし、また一個の文明批評家の見識が不幸にも時代の民衆の核心に觸れ得ないやうな場合をも考へ得る。即ちすべての批評に於て然るが如く、文明批評にも亦成功しない場合があるのである。その成否はしかし問ふところではない。ただすべてこの人々が、わけてもわれ〳〵文學者ともあるべきものが、文明批評家的熱情を持たないこと、持たうとしないことは確かに間違ひである。僕はこの點に於て楷牛に贊同する。さうして文學者が單に生活を個的にのみ考へすぎて各個が何によつてどんな組織を築いてゐるか、その組織が如何なる中心へ移動しつゝあるか、移動すべきであるかについては、餘りに注目し考案しないやうな場合には文明批評なるものは發生し得ないといふ見地に對しては、また片上氏に贊成する。さうして藝術家たるものは、描かれたあるがまゝの人生のほかに當然あるべき人生をも感じさせる筈のものであり、しかもそれは現實的で人生をあるがまゝに描いてゐるうちに自からあだかも甘汁に浸されてゐるやうにその一行一行が、作者の滲み出る意圖によつて浸され滴りを垂れてゐるべきだといふ論については、僕はチエーホフに、またクロポトキンに贊成する。さうして、そのやうな文學が自からにして生れるためには、作者は何ものかの信念を抱かなければならないだらう、といふのが僕の蛇足的な意見である。

我等に信念を與へよ。その信念とは何んであるか。その信念からして先づ敎へてくれ。——かういふ時に僕は、すでに前項に於て僕が引用したあの樗牛の『……嗚呼彼等は吾人に向て「文學者と爲るの法如何」と問はずむば已まざらむとする也。云々』の熱罵を僕自身の胸に聞くのである。

たしかに歴史は繰り返すのである。繰り返へされる現象に對して、批評家はまた同じやうな評語を下すのである。歴史ゝ繰り返す限り批評家が評語を繰り返へしても、何の不可もない。たゞ適切なる時機において、金の彫りものゝ中に嵌められた銀の林檎の如く、機に適ふた言葉が言はれたかどうかだけが問題なのである。さうして僕は樗牛が『文明批評家としての文學者』を論じた明治卅四年前後の時代は、一面に於て今日のわれ〳〵の時代と甚だ似通ふたところのあることをも感ずる者である。この點については項を新たにして說かう。

全集本流行餘話

——今日の新聞紙に驚く——

僕がこの時評を始めた當初に全集本の流行について、評論の題目を見出したことを覺えてゐるが、その後三四ケ月の中にこの流行は更にます〳〵絕頂に達した。恐らくはもうおしまひかと思ふが。さうしてその間に僕の三四ケ月前に豫め警告したと全く同じやうな問題が、單に僕の危惧のみに終らずに、事實に於て實現された。

初めのうちはそれ〳〵に自他の利益のために、同じやうな計畫を避合つてゐた出版者が、後にはその計畫の題目に窮した末に偶々同じやうな計畫に落付き、中にはまた明かに他人のものから暗示を得て同じものを企てたものもあり、或は偶然か故意か殆んど相似たものゝ出版を、殆んど相前後して發表し、その結果は最も激烈な廣告戰となり、この激烈な廣告は僕が最初の時に、その一例を示したやうな、己れの利益のために多少のコヂツケをまた暗に他の出版社の計畫を嗤ふが

如き程度のものではなくなつて了つて、明かにもつと露骨なさうして單にわれわれの如き神經質な人間のみではなく一般社會の標準から見ても忌はしいと感ぜられるばかりのあくどい廣告戰の應酬が行はれるに至つた。

アルス對興文社及び文藝春秋社の廣告戰の如きはその最たるもので、われ〳〵局外者の目にはたゞその當事者達の平常を見ることによつて僅かに臆測するぐらゐの程度で、その事件の眞相は明かにし得べくもなく、從つて是非曲直を斷定しることも出來ないけれども、また假りに出來るとしてもこの際誤解を避けるために僕は明言することを憚るけれども、この激烈といふもその度を超えた廣告戰には時の文部大臣の名前と言葉とを引張り出し、それが眞であるの僞であるのといふことの黑白を法廷によつて爭はうとするとさへ聞く。

出版事業は營利の事業なりと雖も、他の一般の營利事業よりももつと何等かの理想を含んだものであり、從つてその廣告の如きも射利のためには如何なる手段と言葉とをも擇ばないといふやうな陋習を募らせるやうなことをなくしたいと僕はすでに希望したことは、僕の讀者も記憶してゐられることと思ふ。同時にまた出版事業や著作の事業がやうやく社會化せんとすると共に、文藝の社會にも亦さま〴〵に多方面の煩はしい係累が出來——即ちせち辛い一般社會の法則が、今までは割合にのんきであつた著作家や出版者の社會にも現はれて來て、また文學界の名家がその名によつて一般社會事業に、また一般社會の名家がその名によつて文藝界に現はれたりすることによつて、われ〳〵文學者の社會の生活が複雜化して來るに相違ないことをも僕が指摘して置いたが、このやうな適切過ぎるやうな一例がこれ程早く目の前へむき出しにされやうとは考へ得なかつた。それにしてもわれ〳〵が事件の眞相をまつたく知り得ないことは少なからず遺憾である。

事件の眞相を知り得ないといふのは、われわれはあの兩出版の關係者がそれ〳〵に自分たちの立場を或は正直に或は不正直に、一頁大二頁大の紙面へ、或は半ば宣傳をかねて、或はまつたく宣傳を主として、書きたててゐることによつて、われ〳〵はこの兩出版事業の間に何かのわだかまりがあるに違ひないことだけは知り得たけれども、しかし肝腎の眞相に至つて寸毫もこれを知る術はないのである。僕は正直なところ、今日の新聞紙なるものについてこの事以來今更らながら

餘程疑ひを抱くやうになつた。百萬を以て數へる各新聞に、各々數回に亘つて行はれたあの廣告戰の眞相は、少しも社會的な出來事でないといふのか。諸君の新聞の廣告といふものは、それ程社會的に、社會の耳目を聳立たせることに効果が少ないと新聞當事者が自ら卑下して信じてゐるのであらうか。それともこのやうな問題は一向所謂ニュース・ヴァリユウを持たぬといふのであるか。一人の有名な老文學者が、一人の若い多情の情人を持つたといふことについてさへ屢々ニュース・ヴァリユウを發見する新聞當事者が、その一老文學者と相讓らないやうな名聲を持つた二人の小說家、それに當代第一流の詩人と第一流の畫家と、即ちこの四人の現代代表的な藝術家と、更に又加ふるに一國の文部大臣が關與してゐるといふ問題について、少しもニュース・ヴァリユウがないといふならば、今日の天下どのやうな事件にニュース・ヴァリユウがあるのかといひたいくらゐである。僕には新聞當事者達のニュース・ヴァリユウの標準について甚だ疑ひを持つ。幾百萬の世人が、その無上に大きい些か突飛な廣告に屢々接して怪しみの目を見開きながら、しかも事件の眞相については少しもこれを明かにし得る機會がない。新聞紙は公衆に向つて疑問を與へておいたけれども何の報道をも與へなかつた。我々は批判をまで求めるのではない、批判の材料としての報道を求めるのである。社會の木鐸といふことは一體何を意味するのだらう。ニュース・ヴァリユウの標準について疑ひを持つた僕は、更に社會の木鐸たる新聞の使命についてその疑ひを延長したいやうな氣がする。說をなすものがあつて、各新聞社がそれらの大廣告主に對する遠慮のためにその報道を控へてゐるのだといふ。果してさうであるか。もし然うであるとすれば、何んといふ愼み深い美德を持つた新聞紙よ！

一圓本と新聞のことをいへば、一圓本の流行そのものについても、どの新聞の評論にもそれが題目になつたことは殆んどないやうである。いや、東京朝日新聞の社說に一度これを論じたものがあつたさうだけれども、僕はそれを讀む機會を失つた。そうしてそれを讀んだといふ人の僕に傳へたところにして間違ひなかつたならば、それはただ頻出する一圓本の流行ももう澤山だ。――そのやうな單なる流行は一つの輕薄現象に過ぎないのだから早く去つて、誠實な落付きのある讀書の社會になればいゝといふぐらゐの意味合のものであつたといふ。これがどうもこの題目に加へられた唯一の社會批評

であつたらしい。しかし試に僕は尋ねたい。

諸種の一圓本の中でその最も成功したものは確實に四十萬を超えてゐることをわれ／＼は知つてゐる。これは何の懸引きもない事實である。またその他の全集本にしても二十五萬（？）ぐらゐと思へる讀者を贏ち得た。前者は世界文學の代表的なものを集めたし、後者は現代日本文學の代表的なものを集めたのである。四十萬の購讀者を持つこの全集本は、これを我國の全人口に比べて、二百人に一人の割合で行亘つてゐることを知つたならば、これを單に一流行とのみ呼び棄てることは出來ないし、若しまた單に一流行であるとすれば、何んと驚くべき流行ではないか。二百人に一冊といふけれども、我國全人口の中には、植民地の民や幼少者をも含み、また書物といふものは一冊によつて幾人の人にでも讀まれるものだといふことを考へたならば、二百人に一冊行渉るこの書物は、實際に於てはもつと高い率によつて國民の間に讀まれてゐるものと考へ得る。それとも大多數の購讀者は讀まずにただこれを飾つておくだらうとしたならば、われ／＼は單にその富の程度に驚いてもいゝ。——彼等は全く無用なものを虛榮心のために買ふ餘裕を持つのだから。しかしながら恐らく大部分の購讀者は讀むのであらう。しかも彼等の讀むところのものは世界古今の第一流の文學書のみなのである。（これは序でだけれどもこのやうな時代に、別に大衆文藝或は通俗小說といふ特種の文藝樣式或は種目は、殆んど無意味にも感ぜられる。）ともあれ、國民がかくまで普及的に大多數に文藝の書物を讀むといふことは、おそらく世界のどこの國のどこの時代のレコードにもあり得ないのではないかと思ふ。さうして今日の我國は世界の軍國といふよりも、世界の美術國といふよりも、むしろ世界の文藝國と呼ぶ方が眞實であるかも知れぬやうな氣がする。文藝亡國か、文藝立國か。それらの一圓本の功罪については今僕はこれを論じやうとはしない。ただこのやうな恐らく世界的とも見るべき事實に對して、我國にある新聞紙のどれもがその事實を取上げて少しも問題としないのを見るとき、僕はその理由を知るに苦しく苦しむのである。もし新聞當事者が成功した全集本の購買者が四十萬に及んだといふ單なる事實を知らないのだとすると、僕はその耳目の迂遠なのに驚かざるを得ないし、若しまたその事實を知つて別にその間に何の問題をも見出さないのだとすると、僕は彼等の心の耳目の甚しい迂遠に更に驚かざるを得ないのである。今日の新聞紙に於て心得難いものはただ廣告面と社會面とばかりには止らなかつたと見える。

婦人

◆夏季特輯◆「男の知ら

今夏流行批判會

久米正雄　岡本一平　栗島すみ子
早見君子　三宅やす子　島中雄作

■注意の散慢な兒童……青木誠四郎
■寢間着改良案……柳原燁子
■婦人辯護士歡迎……片山哲
■日本女性の過去未來……沖野岩三郎
■男の食物女の食物……秋山徳藏
■家庭生活と時間豫算……片岡重助
■有産婦人と家庭分權……下村海南
■映畫の女性に及した影響……森岩雄

■惡魔の懺悔……生田葵
■獄中の知人から……吉野作造
■酷たらしき母よ……高山櫻子
■青葉の頃の眼病とその食物……市川清
■尾上菊五郎……水木京太
■銀座のモダンガアル評……佐々木指月
■外交官夫人と帶留……吉原とり
■私の腦細胞……武林文子

母と娘

■今の心もち……鏑木照
■母と娘……小金井素子
■わが影……中條葭江
■過渡期の母娘……赤松明子
■こども……西川文子
■ママ……嘉治璃瑠子

女と嘘

■自分のこと丈で……宇野千代
■正直者の嘘……加藤籌子
■嘘、嘘、嘘……平林たい子
■まあ夏子さん……小林きよ
■私の嘘……杉浦翠子
■嘘の二形態……堺眞柄

■長篇 顯現……谷崎潤一郎
■短篇 不思議な花……中河與一
■短篇 何處かへ……佐々木房
■長篇 去年の雪今いづこ……佐藤春夫

(振替東京
中央公論
東京丸の内ビル

公論

ぬ領分號　◆特價壹圓◆

三　四　番（
論社發兌
チング七七六區

■長篇　夜曲ホ長調……久米正雄
■短篇　七時半……室生犀星
■短篇　夾竹桃の花……若杉鳥子
■長篇　愚人の唄……正宗白鳥

■女形の世界

■迷ひ氣……中村福助
■轉び方……阪東秀調
■人形遊び……市川松蔦
■傳法肌……河合武雄

■無冠の女王……古莊國雄
■脊話……三篇
■心臓問答……一松美利
■廣告の世の中……岡本一平
■當世主婦氣質……水島爾保布
■黑い繪具……原阿佐緒

■花占ひの夏……河井醉茗
■冷藏庫なしの食品貯藏法……中澤美代子
■洋樂講座……野村光一
■美容講座……ミスユタカ
■手輕に出來る夏の飲み物……婦人記者
■食卓の公開……五十五氏

騙り御用心

■隣室の氣配……K子
■大島から來た男……しのぶ
■松さんおつり……嘉津
■味のない鰹節……ぬい子
■騙された白狐……作子

婦人の聲

■夫婦言葉遣ひ對等論……市川房枝
■婦人宿泊所の設立を……竹中繁子
■女中の貞操を保護せよ……塚本はま子
■婦人の更衣室が欲しい……周田松枝
■寧ろヒステリーを禮讃せよ……金子しげり
■余計な性意識を捨てよ……鷹野つぎ
■若き同性への警告……山田わか
■無料産院を設立せよ……山内美那
■斬捨御免式横暴を如何せん……永井郁子
■女の藝術家生活に就て……岡本かの子
■不合理な教育の差別待遇……井上秀子

禁煙を志して未で禁煙せざるは何故か

永年の喫煙家も忽ち禁煙家となれる

簡易な禁煙方法を知らぬからだ

驚くべき『カロット』の効力

煙草が如何に體に害を及ぼすかは百も承知の事であるから別に此處にくどくどと書立る必要もない。

而し煙草をやめて損をしたと云ふ人はないが、煙草を廢めた爲體重が増し長生をしたと云ふ事は儘耳にする事實である。

しかし煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が茲に面白い一つの禁煙方法がある。『カロット』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、適量の朝鮮人參の精氣を含んで居るから、根氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は輕い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない。殊に口中の惡臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但しこれは眞劍に煙草をやめようとする人でなければお勸め出來ない。何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗してこの効力に驚いてゐるのでもわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病、消化不良その他禁煙したら屹度治り肥つて來ると感じてゐる方は是非之の『カロット』を試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

((中央公論夏季特別號創作))

小説 やどり蟹……永井荷風

小説 冬と手紙と……芥川龍之介

小説 紋付……瀧井孝作

小説 「よしや逆さに」……宇野千代

小説 新築工事……正宗白鳥

小説 和む……徳田秋聲



やどり蟹

永井荷風

はしがき

左にかゝぐる小說は、去年初夏のころ「貸間の女」と題して初の一章を或月刊雜誌に載せしことありしが、われながら讀み返すに堪へざるばかりの拙さに恥ぢて、そのまゝ草稿を篋底にかくし、人にも示す事なかりしを。今年六月のはじめ、恰も大掃除といふ日、適(たまたま)中央公論社の島中氏訪ひ來りて、そこら家の内といはず外といはず反古紙筆の鞘なんど、椎の落葉と共に取り散したる物の中より、ふと此草稿を見つけ出し、わが止むるのをも聽かで奪ひ去りしかば、今はいかにともせんすべなく、せめては命題なりとも新にせんとて舊名のこゝろを取りてやどり蟹とはなせしかど、草稿の第十回のをはりより十一回のはじめにかけて、紙およそ數葉ほどちぎれて失せしあたり、感興既に消え去りし今となりては俄に補ふこともなりがたくて、そのまゝになし置きしは、まことに心苦しきかぎりなれば、一筆こゝにその次第を書き添ふることゝなしぬ。昭和二年仲夏作者識。

一

貸二階の一間に月ぎめの妾を置いた其の家の格子戸外を、旦那の永島は靴音をしのばせながら行きつ戻りつしてゐた。二月も早や盡きやうとする雨もよひの夜はもうかれこれ十時頃。震災後バラック建の貸家がつゞいてゐる愛宕下の唯ある横町はしんとして人通がないのを幸、永島は稍々安心して、妾の家から四五軒離れた路のはうに太い電信柱の立つてゐるのを小楯に、外套のかくしから煙草を出して火をつけながら、既に雨戸はしまつてゐる二階の窓と、其下はまだ雨戸の引いてない格子戸のあたりをそつと窺つてゐた。

永島は妾の菊子が今夜はいかにおそくならうとも寝ずに自分の來るのを待つてゐるにちがひないと思つてゐる。明日は二月の二十八日なので、今夜は菊子が月ぎめの〇〇を貰ふべき其の晩に當つてゐるからである。然し永島は思へば三年の間、大地震の前の年から今日が日まで月々滞りなく渡してやつた〇〇の手當をいよ〳〵この月のこの日から素直には渡してやるまいと腹をきめて居るので、既に此の二月の初めからばつたり姿を見せなかつたばかりか、今夜も此のまゝ引返してしまはうかとも思つて、雨もよひの夜をもいとはず先刻からこの横町を行きつ戻りつしてゐるわけである。

最初、大地震の前年、永島が始めて菊子を見たのは麹町の唯ある待合の廊下であつた。永島は帳場から掛けてくれた藝者の來るのを待つ間女中を相手に飲んでゐた。夏の夜もまだ宵の口のことで客の出入も少く座敷の襖を明け放したまゝになつてゐたので永島は涼風の流れて來る廊下を何心なく振返つた時、チラと見た女の様子が藝者とは思はれなかつたので、「今通つたのは何だ。」と女中にきくと、「×××のお客様」との返事に、永島は唯其の場の座興からいろ〳〵と其女のことを聞きたゞした。女中のはなしでは折々男の客に連れられて來るのだとばかり、住所も名前も身分も更にわかりはしなかつた。然しその身なりと、又待合へ連れられて來るところから考へて、いづれは人の妾か、さらずば何かさう云ふ風な

女である事は問はずと明である。兎角する中に藝者が來たので其夜はそれなり、あつさり遊んで待合を出た。それから二三個月たつて、涼しい秋の日の眞晝間、永島は再び同じ待合の湯殿へ通ふ廊下でばつたり彼の女と顔を見合した。日のぱつちりした鼻筋の通つた、身丈のすらりとした好い女である。その時には此の前の丸髷とはちがつて流行の耳かくしに結ひ極く荒い縞セルの單衣に絽縮緬の夏羽織を引掛けた姿はどうやら活動寫眞の女優かとも思はれたので、永島は雜誌や繪葉書で見覺えた女優の寫眞を一心に思返して見たが然し差當りその女らしい者には思當ることができなかつた。

また一月ばかりもたつた或日のことである。永島は突然思ひがけもなく其女の住所から身元までを知り得た。

四谷荒木町の藝者家町を通り抜けて、同じ町内のはづれにあつた自分の家へと永島は外出先から歸つて行く途中である。通り過る横町の唯有る借家からガラリと格子戸をあけて出た女の姿。ふと見れば、髪も衣服も一月前に麹町の待合の廊下で見た忘れもせぬ其女であつた。女の方では何やら急いで電車通の方へと行きかゝる折柄、摺れちがつた永島の様子には氣がつかないらしいので、永島は其場の好奇心からそつと女の後をつけた。

永島は普及社と云ふ廣告取扱店の支配人で、日の暮れない中に家へ歸つて來ることなぞは殆どないのであるが、今日は角筈邊まで用事で出た歸り道、四谷邊では夕飯を食るやうな處もないので、自分の家の近いがまゝ珍らしく明い中に歸りかけたわけである。

女の後について永島は再び元の電車通へ出る。女は市ケ谷まはりの電車に乘つたので、永島もすぐ其後から人込にまぎれて同じ車に乘り込み、此の女は今日も大方富士見町へ行くのにちがひない。さうだとすれば電車は此のまゝ乘換はなしだと思ひの外、女は市ケ谷見附外で乘りかへ、飯田橋から更に早稻田行へ乘換へる間もなく江戸川端で降りた。そして中の橋を渡り竹早町を通り抜けて小日向水道町の唯ある門構の屋敷にはいつた。澁塗の板塀を環し玄關前までは樂に車の曳込めるほどの閑地があるので屋敷らしくは見えるものゝ、門の柱は丸太で支へられ、瓦の落ちた玄關の屋根は危く傾い

て、見るからに汚らしい平家建の古家である。玄關前には檜が一本立枯れしてゐるのを秋の西日が赤々と猶更無殘に照りつけてゐる。永島はびつくりして門の柱に打ちつけた表札を見直した。永島は既によく此の古家を知つてゐたのみならず、表札に書いてある松濱千太郎の何者たるかをも亦よく知つてゐたからである。松濱千太郎と云ふのは以前蠣殼町を徊徘して乞食相場をやつてゐた男で、現在は女房の瀧子といふ看護婦上りの年は四十あまりの女に結婚の媒介、…………、………………なぞをさせてゐる。玄關の傾いた此のだゝツぴろい、廢屋同樣の古屋敷が松濱夫婦の××××營業の取引所になつてゐるのである。永島は既に此の古家に來たことがある。

「何だ。この家へ出入する女か。」と永島は覺えず心の中に呟いた。「それなら大抵相場は知れてゐる。何も後をつけて來るにも及ばない。」とは云ふものゝ、大抵相場が知れてゐるとなれば、事の甚容易である事が知れてゐるだけ、其場の好奇心に驅られて、永島は既に案内を知つた玄關先に音づれた。

内では早くも人の來る足音を聞きつけてゐたものと見えて、聲に應じて看護婦上りのかみさんが上框の障子をあけ、「まア、お珍しいこと。さアどうぞ。」と永島を八疊の客間に導いた。

中央に唐木の机。その上に瀬戸物の灰皿。半年程前の講談倶樂部や娛樂世界が二三冊と婦人畫報の綴合せたのが一冊。床の間には山の手邊の小待合によく見られるやうな花鳥の新畫。その下には草花が土器鉢のまゝで置いてある。永島はおかみだ茶を運んで來やうとするのをも待ちかねて、其儘に引留め、「おかみさん。素敵なやつが來てゐるぢやないか。今門のところで一寸見たんだが、素敵だな。…………………。」

「さア、何て言ひますか。家へはまだ二三度來たばかりですし、それに鳥渡コレがいゝもんだからお高くとまつてゐますからね。」

「さうかも知れない。然しあれなら…………。…………。…………。」
「かしこまりました。」と立つて行つたかみさんは軈て立ち戻つて來て、「月々きまつて世話して下さる方でなくつちや困ると言ふんですよ。それなら…………いゝと言ふんですが……。」
「さうか。然しおかみさん。おれは實のところを言ふとあの女を知つてゐる。富士見町の待合へ來たのを見たことがあるんだよ。」
「さうでせう。大分方々へ××するやうですから。」
「月々思召といふのはどの位だ。○○○か。どうだらう。○○○ぢやいけまいか。」
「……でも少し玉がいゝと○○○○がまづ通り相場ですもの。永島さん。それぢや斯うなさい。今夜はほんの烏渡……といふことにして○○○……、此次から………○○○と云ふことになさい。お氣に召さなかつたらそれつ切にしてしまへば能うございます。御旅行なすつたとか何とかその時はわたしがいゝやうに言ひますよ。」
「ぢやア○○○。それからこゝの家の……にするんだ。その中からぢやいけないか。」
「……承知させるんですから、女の方からは○○○は取れませんからさ。あなた。○○わたしに下さい。」
「ぢや、○○○○。」と永島は………机の上に重ねる。
「どうも。」とかみさんは輕く頭を下げたが其場ですぐには手に取らず、其のまゝ立つて行つてすぐに女を座敷へ連れて來た。
「さア、奥さん。どうぞ此方へゐらッしやいまし。」とかみさんはいやに改つた調子で、唐机の前なる座布團を裏返にして座を薦めたが、女は腰をかゞめ首を垂れて襖際に坐ると共に、いかにも行儀よく兩手をついてお辭儀をしたまゝ顔を上げない。

「さア、奥さん。こちらへ。」とかみさんは重て席をすゝめた後、こゝに始て机の上なる〇〇〇×手に取つて、女のそばへ行き、わざとらしく小聲で、「それではお渡しします。これはわたくしが頂戴して置きます。お後で御禮を仰有ツといて下さい。」其儘女を殘してかみさんは座敷を出て行き、時刻を計つて番茶の入れ代へたのを持つて來ると、今度は急に馴々しく「旦那。…………。…………。汚いところですけれど靜ですから、御ゆるりなすつていらつしやい。」と云つて…………行つた。

秋の日はもうたつぷり暮れて、雨漏(あまもり)の痕(あと)のきたならしい天井から十燭位の小さな電燈が穴だらけの障子××××××××を照してゐる。

一時間ばかりの間、薄暗いこの三疊の間で二人は次のやうな會話を取りかはした。

「名は何ていふんだ。」

「菊子。」

「苗字だよ。」

「小村ツて云ひます。」

「ほんとうか。」

「嘘(うそ)をついたつて仕樣がありませんわ。あなた。ちよい／＼こゝの家へゐらツしやいますの

「滅多に來ない。お前はこゝのおかみさんと懇意か。」

「いゝえ。つい此の間紹介されましたの。」

「僕は或處でお前を見たことがあるよ。びつくりしちやあいけない。もう斯うなつたら何も彼も話をしやう。實のところ、僕はどうかして逢ひたいと思つてゐたんだよ。富士見町の待合で見掛けた事があるんだ。好い女だと思つた。」

「あら。さうですか。わるい事はできないものね。」
「まだ〳〵不思議なことがあるんだ。今日は餘程巡り合せの好い日なんだ。お前の家は四谷の荒木町だらう。さつき通りがゝりに何の氣なしにお前の出かけるところを見たんだ。」
「あら。それであなた。跡をつけていらつしつたの。」
「まア、そんなやうなものだ。これから時々逢はうよ。一週間に一度でも二度でもいゝから。…………………。こゝの家は、これぢやあんまり…………。…………だからな。」
「ほんとうね。わたしそれが一番こわいのよ。」
「まだ一度も××××××ないのか。」
「あら。ひどい事を仰有るのね。かう見えてもこんな家へ出入するのは、つい此頃のことですもの。」
「ぢや今までは、どこかの奥さまか。」
「お嫁にも行きましたし。お妾さんにもなりましたし。それアいろ〳〵でしたわ。」
「ちかにお前の家へ行つちやいけないのか。」
「いらしつても構ひません。ですけれど今の家はお父ツアさんの家ですからね。學校へ行く弟もゐますしねえ。」
「それぢや、×××逢ふことにしよう。富士見町はどうだ。」
「さうねえ。」
「富士見町がいけなければ牛込で知つてゐる家がある。明後日の晩都合はどうだ。よければ、何處かで待合はさう。神樂坂の田原屋といふ珈琲屋。知つてゐるなら、そこにしよう。六時から七時の間に待ち合はすとしよう。」
「えゝ。」

永島はそれから折々牛込の××に菊子をつれて行つた。然しそれも度重るに從つて面倒でもあり、又兎角する中永島は菊子の兩親にも逢つて話をした事もあつたので、遂に一軒別に家を持たせることにしたのであつた。

その翌年大地震の起つた前の日まで別に變つたはなしはない。

二

九月朔日の大地震の日、永島は京橋五郎兵衛町の廣告取扱店普及舍の店で日々の事務を執つてゐた。その日の午後にはまだ類燒の恐れはなかつたもの丶萬一を慮つて重要書類の始末をして一まづ四谷の自宅へ立歸り、それから神田神保町に家を持たせて置いた菊子を尋ねに出掛けたが、神田邊一帶は火の手早く飯田橋から向へは一歩も行くことができなかつたので、空しく引返した歸道、四谷荒木町の實家をたづねて見ると菊子の生死は猶わからず。七十に近い老父と六十あまりの老母とが菊子のことよりも寧ろ房州へ避暑に行つてゐる悴の安否を氣遣つておろ／＼してゐるところであつた。悴は早稻田大學の學生で、老父母は此の悴の學業を卒つて世に出るのをたのみに老後の日を送つてゐるのである。老父は以前芝金房町邊に西洋家具の細工場を持つてゐて、職人も十二三人は絕えず使つてゐたし、愛宕下に妾をも圍つてゐたこともあつたが、貿易相場に手を出して失敗した揚句細工場から過つて火を出す。その後はいろ／＼の事に手を出したが損をするばかり。遂に財産差押の處分を受けた。それに加へて法學士になつたばかりの長男が腸ちぶすに罹つて急に死ぬ。既に或處へ片付いてゐた菊子は其家の………したとて離緣になる。老父は遂に現在住んでゐる四谷荒木町の借家へ引込み二階の明間を人に貸して家賃の助けにするやうな身になつたのである。

永島は菊子の避難した先をさがすたよりにもと、老父母の親戚の中で火災に遭はないらしい所を聞いて見たが一軒は澁谷、一軒は下谷とやらで、火を免れたものはないらしい。永島は次の日から毎日車駐ぎに辨當を携へ、それ／＼知人の

避難先をたづねて見舞ひに歩く途中丸の内日比谷をはじめ芝や上野の公園など避難民の雑踏する場所は必立寄つて隈なくさがして見たが遂に菊子の姿を見なかつた。五日目の朝になつて、早稲田に通學してゐるといふ弟がそつと永島の家へたづねて來て昨夜おそく姉の菊子が歸つて來た由を告げた。早速荒木町なる老父の家へ行つて見ると、菊子は地震前と同じやうに髪もきれいに浴衣もさつぱりしたのを着てゐたばかりか、顔や手の先まで少しも日にやけてゐないのが何よりも先に目立つて見えた。

「今までどこに居た。」と永島がきくと「玉川の双子へ逃げて行きました。表の自働車屋の旦那が自働車に乘せて、おかみさんの親類が玉川にゐるからつて、其處まで連れて行つてくれたんです。電車がないので歸りたくつても歸ることが出來なかつたのですよ。」

「さうか。それならいゝが、死んだのかと思つて皆心配してゐた。」

「どうもすみません。」

その日は他に大勢避難した人達もゐた處から、永島はゆつくり話もできず當座の小遣として參拾圓ばかりを渡して歸つた。何しろその時には東京市全體の經濟界がどうなることやらわけがわからず、銀行では一口一人について百圓より以上の支拂はしない。火災保險の會社は保險金を支拂はないと云ふやうな場合なので菊子に與へた其の時の參拾圓は永島の身に取つては平素の千圓位にも當つてゐた。四五日過ぎるとどうやら處々電車が運轉しはじめたので永島は日頃の憂さ晴らしに菊子をつれて何處か夕飯でも食ひに行かうと再びその家をたづねると午後に買物をしに出たまゝまだ歸つて來ないと云ふことであつた。

四谷の表通は麹町の方から新宿のはづれまで見渡すかぎり、今以て家具を滿載した自働車や荷車や人力車の引きつゞいてゐる間を燒出された人々は手に〳〵荷物を携へて押合ひながら歩いてゐるので、立迷ふ砂埃に息もつけぬほどである。

永島は京橋五郎兵衛町の燒跡の始末やら、麻布六本木へ引移つた臨時の營業所の事務やら何やらで、身體が二つあつても足りないばかりのいそがしさに其後はかれこれ一箇月ばかりの間はおちおち菊子とはなしをする暇(いとま)はなかつた。する中社會の秩序も追々に復舊して來て、×××が放火をするとか井戸へ毒を投ずるとか云ふ噂も立消となり、家毎に人を出しての夜廻りも定局の火の番に代り、湯屋も平常のやうに營業するやうになると、一時は書聞も戸を閉めてゐた四谷牛込白山邊の××は公然と客を迎へるやうになつた。都下の新聞の有力なものは既に日々發行をするやうになつてゐたので、永島の廣告取扱所の景氣も日を追ふに從つてどうやら見直せるやうになつた。

永島は或晩菊子をつれて神樂坂の田原屋といふ珈琲店へ夕飯を食ひに出かけた。食事をすましたら……………………芝である。

「丁度去年の今時分だつたな。始めてお前とこゝで飯をくつてそれから田毎へ行つたのは。」

「ほんとうにさうでしたわね。」

「小石川の松濤はどうしたらう。此の騷ぎでもやつぱり……………やつてゐるのかしら。」

「さア。どうでせう。あれから一度も行きませんから。」

「あの古家ぢやアつぶれたかも知れない。風が吹いても危いやうだつたからな。それはさうと今夜はどこへ行かう。去年行つた田毎にしようか。」

「えゝ。何處(どこ)でもいゝわ。ですけれど、ネエ、あなた。………何だか氣がおちつかなくつて、いやだわね。あなた。先視たやうに早く家をさがして頂戴よ。おとつツァんと一緒にゐると何となく氣がふさぐから、わたしほんとに四谷の家には居たくないのよ。」

「然し今度家を持つには臺所道具から買はなくツちやならないからな。箪笥や何かも皆燒いてしまつたんだらう。」

「わたし、もう、着物も簞笥も何にもほしくはないわ。一軒家を借りなくつてもいゝのよ。下宿でも貸間でも結構だわ。ネエ、あなた。貸間でわたし經濟に自炊してやるわ。」

田毎といふ××に上つてからも菊子は頻に間借りをしたいことばかり言ひつゞけてゐた。永島は今夜にかぎつて菊子がどう云ふわけで此の樣に一ツ事ばかり執ねく言續てるのか其の意を得なかつた。平生菊子は普通の女のやうに着物や半襟など凡て何事によらず煩く物をねだつた事のない女であつた。その代り極めて我儘で、男の方から機嫌を取つてやつても、どうかすると碌々返事さへしない事がある。然し金をほしがらないのと物をねだらないのが何よりの一德だと永島はこれ程には菊子の我儘な事を咎めずにゐたのである。それが今夜にかぎつていつまでも貸間のことを言出して止まない。この事の意外よりも永島が其夜一層意外に思つた事は菊子の樣子であつた。まる一年の間菊子は…………………………永島に對して見せたことは唯の一度もなかつたのである。最初小石川小日向水道町の周旋屋で逢つた時から、菊子は身體が丈夫でないから…………………………………………と云ふやうな事を問はれもせぬのに申譯らしく言つてゐた。永島は年も既に五十に達してゐたので、若い時のやうにそれほど濃艶な戀の狂樂を欲してゐるわけではない。唯家へ歸つては大勢兒供がゐたりしてゆつくり晩酌をするわけにも行かず。と云つて、さう足繁く…………暇もない。と云ふやうな事から菊子に家一軒を持せてやつたわけである。それ故今の所東京の市街が殆半は焦土になつた慘狀を目にしては、さすがに妾宅を構るやうな浮いた氣にはなれなかつたのであるが、然し菊子がその後逢ふ度毎に懇願して止まないところから、遂に已むを得ず麻布六本木の假營業所の近傍に貸間をさがして住はせ、それから現在の愛宕下に引移らせたのは去年の暮のことであつた。

永島は土曜日とか日曜日とかを擇んで菊子の貸間へ出掛けてゐたが、兎角する中菊子の樣子について不審に思はれることが二三度に及んだ。其一は永島の來るのを待つてゐべき筈の日に買物に出た歸道電車が停電したとやらで小一時間ば

かも永島を待ちあぐませた事があつた。其二はいつも鏡臺の側に置いてある紙屑籠の中に兩切の卷煙草スターの空箱が押込んであつた事である。菊子は酒は飲める方であるが煙草は呑めない女である。其三は夜も既に十時過永島はネクタイを結直して歸りかけてゐた時裏通の酒屋から呼出の電話が掛かつたとて小僧が菊子を呼びに來た。菊子は寢亂れた姿を手早くコートで覆ひ隱くして足袋もはかずに駈出して行つた。其のわけをきけば仕立物を頼んでやつた家から寸法が間違つてゐたからとて急いで聞直しに寄越したとの事。猶その他に怪しいと思へば限りなく怪しまれるし、又氣に留めずにゐればそれで濟むやうな些細なことが日を經るに從つて次第に多くなつた。

然しこの疑惑は程もなくしてすつかり明瞭になるべき時が來た。永島の知人で銀行貸付係をしてゐる竹原といふ矢張五十年輩の男がある。商賣上の用談を兼ねて永島は六本木の大和田といふ鰻屋に竹原をつれて行つた。その時の雜談に震災後世の中が一層險惡になつた。それと共に男女の關係が又一層淫卑になつたやうに思はれるのは、配偶者を失つた者の多くなつたばかりでなく、震災の當時の罹災者の家族が男女混居して幾日も露天の生活をしてゐた事なども其原因であらうと言つて、竹原はその一例として地方の親戚の倅で上京して……………ゐる一青年のことを話し出した。

「神田の下宿にゐたんですがな。地震の時近處にゐる知らない人の×をつれて玉川の方へ逃げて行つて、あの騒ぎの最中わたしの處へ金を寄越せと言つて來たことがあるのです。いやはや呆れて手のつけられない奴です。その後も今もつて×……………らしい樣子ですがな。仕舞には何か間違ひでも起つてはわしも國元の親達に對して氣の毒でもあり又監督が行屆かないやうに思はれるのもいやだと實は非常に心配して居るのです。」

永島は何だか擽られるやうな妙な心持がして「どう云ふ女だか御存じですか。」ときいた。

「イヤよくは存じません。玉川から寄越した使の男にきいて見た時はもう三十近いいゝ女だと云ふことです。藝者上りちやない。女優か何かであらうと云ふはなしですがな。それも人のはなしでよくはわからないのです。」

永島はその夜菊子をたづねて竹原の甥だといふ男のことを詰問した。すると菊子は何とか辯解するかと思ひの外、「すみません。これからきつとしませんから、ネエあなた。」とわけもなく簡單にあやまつてしまつた。あやまられては撲つたり蹴たりするわけにも行かない。永島はその場はその儘にして歸つたが、然しその後に至つても菊子の様子の不審な事は以前と一向變りがないので、永島は菊子が新に……こしらへたのでなければ、以前から同時に……持つてゐたのかも知れない。それで竹原のことは手早く未練氣なく思切つてしまつたのに相違ないと云ふやうに考へはじめた。

三

菊子は朝九時過に起きて顔を洗ふと座敷の掃除もせず、すぐと髪を七三に結直し白粉をべた〳〵塗りつけて、牛込通寺町邊の横町にこれも荒物屋の二階を借りてゐる宮田登米子といふ女をたづねた。年は同じく二十七八にもなるらしいのを、けば〳〵しい唐縮緬の襦袢と帶とに自分ばかり巧に年を隱しおほせたつもりらしく、髪は鉢割れの耳かくしに結つてゐる。色は白いが皮膚のあらい大きな女である。

「あら。丁度よかつたわ、今日あたりお尋ねしようと思つてゐたのよ。巴町までついでがあるから……。」

「あらさう。そんなら直ぐわたしの家までいらつしやいよ。はなしは道々でもいゝのよ。」

「何のはなし。わたしはお午から行けばいいんだからさ。まだ外は寒いわねえ。」

「登米子さん。あなた。何か食べないこと。おごるわ。わたし朝の御飯をたべずに出て來たんだからさ。」

「もうぢき十一時。」と腕時計を見て、「支那料理ならすぐ向側にあるのよ。窓から呼べばすぐ持てくるからさうなさいよ。」

「さう。あすこの家。便利ねえ。」と菊子は檐先に緣楊軒といふペンキ塗の看板を出した家を見下しながら、「支那人が掃いてゐるわ。何と云つて呼ぶの。」

「わたしが呼んで上げるわよ。菊子さんあなた。何がすき。シューマイにワンタンが一番うまいのよ。それでよくつて。」と登米子は念を押して、店先の往來を掃いてゐる支那人をチンさんチンさんと大きな聲で呼び、「シューマイにワンタンだよ。二人前。すぐだよ。」

「よろしい。」と返事をして支那人はのそり／＼と店口の硝子戸をあけて内にはいる。

「登米子さん。この邊によささうな貸間を知らないこと。わたし今のところ引移さうかと思つてゐるのよ。」

「どうして。便利でいゝ場所ぢやないの。下の人達もいゝし、第一出這入が目につかなくつてさ。」

「それアさうだけれど……實はコレがもう駄目さうなのよ。先月はたつた一度月はじめに來たつきり今月はとう／＼お金もくれないのよ。だから、もつと間代の安いところへ越さうと思ふのさ。」

「今のところはいくらなの。」

「賄つきで四拾五圓拂つてるわ。電燈代だの何だの入れるとまづ五拾圓だわねえ。」

「わたしの處は自炊だから間代だけ拾圓拂へばいゝんだけれど、食料を入れたらやつぱりその位はかゝることよ。ナニ心配しないだつて大丈夫よ。菊子さんの容色なら百や弐百出す人はいくらもあるわよ。あなた。虎の門の中島つて云ふ媒介所を知つてゐて。小石川の松濱より餘程正直だわ。女の方からは手數料を取らないし……こゝに廣告が出てゐるわ。これよ。」と登米子は机の下に突込んであつた東京日々新聞を把つて廣告の出てゐる所を示した。

「隨分澤山出てゐるのねえ。求妻、某會社重役年齢四十五。子供無シ。月收數百圓。二十四五迄美人を望む……。」と菊子は新聞紙を顔の方に近け眉根に皺を寄せて讀む。

「菊子さん。あなた。まるで近眼見たやうな眼付をして讀むぢやあないの。」

「さうよ。近眼ですもの。隨分強いのよ。」

「アラ。ちつとも氣がつかなかつたわ。何故眼鏡をかけないの。」

「何故つて。顏がいかつくなつて似合はないんですもの。ぢき眼がいたくなるから、すこし新聞や雜誌なんぞ滅多に讀みやアしないわ。活動も好きな方ぢやないわ。」

「宮田さん。御馳走が來ましたよ。」と二階の下から荒物屋の女房が誂へた支那飯の來たことを知らせる。

二人とも暫くは物をも言はず丼の中に箸を突込んでゐる最中。「ヤア。どうも御馳走さまですな。」と洋服の男が梯子段から油でテラ／＼輝らせた頭を見せた。

「上村さん。もう一足早く來ればいゝのにさ。」

「ウム殘念だつたな。」

「それアあたしの方で言ふことだわ。上村さん。たまには奢つてもいゝぢやないの。この間の御禮にさ。」

「登米子さんにあつちや敵はない。」と上村は外套と中折帽とを床の間の側に置いて胡座をかきながら、「菊子さん。暫くお目にかゝりませんでしたな。」

「これからお店ですか。」

「イヤ、今日は休みの番です。何處か郊外散歩にでも出掛けたいと思つてゐるんですがね。相手がないんでね。」

「この頃大森の×××はやかましいツて。ほんとうでせうか。」

「那邊はいつでも賭博がはやりますからね、それで八釜しいんでせう。」と言ひながら上村は二人の女が支那蕎麥を食ふのを見てはかけもゐられないと見えて、鏡臺の方に居ざり寄つて其の上に置かれたクリトムを把つて顏に塗つけ、頤のあたりへ出來たニキビを潰しはじめる。年はまだ三十を越したばかりであらう。明治大學を中途でよした後、一時市內の××××××を勤めてゐた事があるので、其の經歷から、今は白木屋呉服店に雇はれ掏摸や萬引の見張番をしてゐるので、

る。登米子がまだ白木屋の賣兒をしてゐた時分出來合つて一時同棲してゐたこともあつたが、その中に女の方には金まはりのいゝ旦那が出來る。男の方も金のある……其の家へ這入り込んだので、互に相談づくでいさこさ無しに別れた。然し登米子は萬が一どう云ふ災難から……されないとも限らない身の上を省み、さういふ場合には元××であつた上村を利用しようといふ考があり、上村の方でも四十を越した……、……登米子を利用して其の友達の女に近寄り、……、……コミツシヨンを取らうといふ考もあるので、別ればなしをした後も互に往來を絶さずにゐるわけである。

菊子と登米子とが支那飯を食べてしまふまで、おとなしく素茶と煙草をのんでゐた上村は、やがて二人に相談をしかけた。以前上村が書生に住込んでゐた犬塚といふ政友會所屬の辯護士がある。其の辯護士が多年主人も同様に敬ひ奉つてゐる某縣の多額納税者がある。(其の名は秘密にしろといふ言付けだから爰では明かされないと上村は言譯をした。)其多額納税者が出京すると、犬塚辯護士は細君とも〲在京中の……をさがして差上ぐる事になつてゐるが、然し每年のことなので、藝者や女優や……ほもう珍しくない。と云つてあまり素性の知れない者でも困る。そこで相應に人馴れてゐて而も愛嬌のある……、此の間から其の詮索を依頼されてゐる。

「すこしむづかしい注文なんだがね。誰か適當なものはないかな、○の方はお構ひなし。何しろ多額納税者だからね。」

「媒介所へ出入する女ぢや大抵高が知れてゐるからね。」と登米子は自分のことは棚に上げて、「全くむづかしい御注文ねえ。年も若くなくツちやいけないんでせう。」

「年はさう若くなくつてもいゝんだらう。作りやうでどうにでも胡麻化せる。それよりか、品が好くつてそれで人馴れてゐるといふのが一番むづかしいんだ。……、……。」

「そんなら菊子さんがいゝぢやないの。ねえ。菊子さん。」

「あら。わたしは駄目よ。二三年前ならいゝかも知れないけれど、もう駄目よ。いくら塗つてももう駄目だわ。」
「いやそんな事はない。菊子さんなら、きつとパツスするよ。實は初めツからさうとは思つてゐたんだけれど、僕の口からは言ひにくかつたからね。菊子さん、どうです。一ツやつて見て下さいな。僕を助けると思つて。ねえ。いゝでせう。犬塚さんが下見をする事になつて居るんだから。今夜僕と一緒に犬塚先生の家まで行つて下さいな。萬が一パツスしなくつても、それだけのお禮はきつとする人だから、無駄足をする氣遣はありませんよ。兎に角行つて見て下さいな。ねえ。いゝでせう。よければ僕は電話で時間の打合をして來るから。」と上村は早くも帽子を手にして立ち掛けた。
「上村さん。まア待つて頂戴よ。もうすこし考へてから返事するわよ。」
「菊子さんにも似合はない。往生際がわるいよ。」
「だつて、向の人はおぢいさんでせう。」
「直接に見たわけぢや無いから。然しまア若い方ぢや無いね。」
「年を取つたお客にや、どうかすると凄いのが居るからねえ。わたし何だか恐しいわ。」
「會見した上で、どうしてもいやなものなら斷るまでの事です。兎に角犬塚先生の所まで行つて下さればそれで僕の責任は濟むんだから。話はそれからの事にして下さい。ねえ。菊子さん。兎に角會見だけして下さいよ。」
上村はそのまゝ自働電話を掛けにと外へ出て行つて暫くして還つて來た。そして今日の夕方五時から六時までの間に京橋皆川ビルデング地下室の西洋料理へ出向いて貰ひたい。若し其時間に都合がわるければ大森の自宅まで今夜おそくなつても差支はないからと云ふ犬塚辯護士の返事を傳へた。
「アラ。とう／＼行くことになつちまつたの。仕様がないわねえ。」と口ではいかにも困つたやうに言ひながら、菊子はさして當惑した様子もせず、「ヂヤ、わたし此れから家へ歸つて仕度をするわ。昨日からまだお湯にも行かないんだから。」

「菊子さん。では、午後四時におむかひに行きます。」

「えゝ。いゝわ。」と菊子は大きな天鵞絨の襟卷を取つて、「登米子さん。それぢや又その中あそびに來るわ。その時話をするわ。ねえ。さよなら。」

「さよなら。」

其日の夕方、上村は約束の時間よりわざと氣をきかせて二三十分おくれて、愛宕下の貸間に菊子を迎ひに行つた。すると菊子は既に髮も變つた形に結直し白粉も一層濃くつけ、羽織の紐をつけ替へてゐるところであつた。そして不斷着の小袖やら長襦袢やら何やらが八疊の座敷一ぱいにちらかつて居るのを、菊子は別に片寄せやうともせず、上村の上つて來るのを見ると、ばかにはしやいだ調子で、

「わたしの方はちやんと西洋時間よ。えらいでせう。わたし歸りに赤坂の美容院へ行つて一圓おごつて來たのよ。この方が若く見えるでせう。」

菊子の樣子は全く其日の晝前とは見違へるやうになつてゐたので、上村は却てそらぐ\しい御世辭を言ふことも出來ず膽をつぶしたやうに菊子の顏を眺めた。事實上村には此時の菊子の心持がわからなかつたのである。半日前には上村から强ひられて餘儀なく承知したのが、今では自分の方から進んで乘り氣になつてゐるらしく見えるのが上村には不思議に思はれたのである。

これは恐らく菊子自身にもわからぬことであらう。菊子は……………………………………………却て此方からかち………………………。………………………………………………………かつて見るやうな大膽な所があつた。…………………………。………………………………………………………………………………………………。……妙な癖があつた。菊子が今日の晝前とは全く打つて變つた樣子になつたのも、つまり此[illegible]明の性癖か

らで、一旦覺悟をきめたとなると、其後は捨身になつて、…………………………心持になつて來るのである。自分からわざと自分の感情に對して復讐をして見やうと企てるのである。菊子はかうなると、段々調子に乘つて來て果は自分ながら之を制して行くことが出來なくなるのである。

其夜上村に案内せられて菊子は京橋際の西洋料理屋に行き犬塚辯護士とやら云ふ紳士に引き會はされて食事をすると、勸められる酒には幾分醉つても來る。これと共に犬塚辯護士と云ふ四十年輩の紳士が食事をしてゐる中に…………
…………見て取るや否や、菊子は日頃の癖として其儘知らぬ振をしてゐる氣にはなれない。………
………、……………………

犬塚は中肉中丈、年は四十二三の男ざかり。モーニングコートの新しいのに替り地のチョッキ。はでな襟飾にダイヤモンドのピンをさし、頭髪は綺麗に後へ掻き上げ鼈甲縁の鼻眼鏡をかけ指にはダイヤモンドと黒い石の指環を二ツもはめてゐる樣子。いやに物優しく上品ぶつたやうな物の云振り。折々襟飾を直したり、ハンケチで目鏡を拭いたりする手つき。一體の樣子が菊子の目にはいやに色男ぶつてゐるやうで氣障に見えた。菊子はさう思ふと揶揄つてやりたいやうな氣がしてならないのであつた。

食事がすむと犬塚は暫く喫烟室に席を移してボーイに葉卷の箱を持つて來させ、上村にも一本取つてやつた。そして夜もまだ八時になつたばかりだから菊子さんを送りながら銀座通を歩いて烏森から官線の電車に乘らうと言出した。上村はついて行つた方がよいのか、或は一人先へ立去つた方がよいのか、西洋料理屋の門口を出た時、一寸其身の進退に惑つたので、一歩二歩とおくれながら次第々々に遠ざかるやうな方法を取つたが、忽横町の角に來ると、町を横斷する自働車に歩行を堰止められて三人は又一所になつた。その時犬塚は始めて上村を顧みて「今日はいろ／＼御苦勞だつた。明日いつでもいいから事務所へ來てくれ。」と言つたので、上村はそれを機會に忽人込みの中に其姿をかくしてしまつた。

銀座通は震災の後漸く半年あまりを過ぎたばかりの頃なので、焼崩れた建物の壁や礎がまだ其儘に屹立してゐる間々に、低い二階建の假普請をした商舗は思ひ〳〵に其店口だけをペンキで塗り立てたり或はセメント細工の装飾を施したりして體裁をつくり、内には臨時の商品をごた〳〵陳列してゐる有様、博覽會の賣店を見るに異らない。表通はそれでも此等の商舗の燈火と露店のあかりとで、凹凸になつた敷石道のすみ〴〵まで明く照されてゐたが、左右の横町から裏通へかけては焼け砕かれた電柱や枯れた樹木もまだ其のまゝになつた焼原で、星の降るやうな夜の空がいかにも物凄く打仰がれる闇のかなたには、外濠を通過る電車と自働車の灯の遥に見透される所もあつた。散歩の人出はかなり賑であるのに空の端れを走る風の音と共に、折々手に取るやうに汽船の笛の聞えるのは、築地の邊がまだ一帶に原になつてゐる故であらう。

菊子はわざとならず犬塚の方へ寄添ひ、「わたし夜になつて銀座へ來ましたのは今夜が始てゞすの。いつになつたら先見たやうになるんだかわかりませんわねえ。」

「何しろ十時過になると追剝が出たとか、カッフェの女給が××されたとか云ふはなしですからね。銀座にかぎらず當分は用心した方がいゝですよ。」

「全くですわね。横町へつれられて行つたらほんとに何をされても仕様がありませんわね。」

「さう云ふ場合になつたら女は一體どう云ふ心持になるものでせう。仕様がないとあきらめてしまふんですか知ら。」

「地震の時わたしのお友達でさう云ふこわい目に逢つた人がありましたのよ。わたし、後ではなしを聞いたんですけれど、もうどうしても駄目だとなつたら、女の方から覺悟をきめて掛ると、男の方つて云ふものは案外亂暴をしないものですつてね。ほんとうでせうか。」

「それア然うかも知れませんな。僕も經驗がないから、一ッ菊子さんを口説いて見ませうかね、はゝゝゝは。菊子さんあなたはきつと經驗があるにちがひない。男がだまつて居る筈がないからね。」

「あら、わたし、そんなにだらしのないやうに見えますの。」

「イヤだらしが無いと云ふわけぢやない。それとは別の意味で。何といつたらいゝでせうかな。まア一口に言へば色ッぽいんですね。容貌のいゝわるいは別の事にして、僕は今まで女優や藝者にも菊子さんくらゐ男を引付ける力を持つてゐる女には、全く逢つたことがない。お世辭でも何でもない。全くさうだから仕様がない。菊子さん、あなた。隨分いろ〳〵な人から惚れられて困つた事があるでせうなア。」

「それア、女ですから、無いことも有りませむ、もつと若い時分には……。」

「あなたの方では別に惚れさせようとも何とも思はなくつても、あなたに逢へば、男の方からきつと迷つて來ますよ。始めて逢つても始めてのやうな氣がしない。妙に親しみのある心持がしますからね。日本の女には全く珍しいですよ。」

尾張町の四辻はいつか通り過ぎて新橋の近くへ來た。橋の此方には竹矢來が立てゝあつて夜通し人夫が橋の工事を急いでゐる最中、電車は左手の假橋を渡り通行の人と車とは右手の細い假橋を渡るので、その邊の道路は猛火に燒け崩された後、車の轍で殆ど歩けぬほどに掘り返されてゐる。犬塚は先を爭つて假橋を渡らうとする自働車や自轉車の混雜に、おのづから菊子の手を取つて其の儘假橋を渡らずに河に沿うて土橋の方へと行きかけると、片側町の建物はまだ破壞されたままになつてゐるので、あたりは俄に暗く物寂しくなつたやうに思はれた。

「菊子さん。それでは。」と突然犬塚は立留つて、「先刻おたのみした一件ですね。兎に角明日丸ビルの事務所に來て下さい。これからわたしの宅へ御案內しますから。それから。是は失禮ですがね。先刻は上村が居ましたから遠慮してゐたんですが、どうかお納め下さい。後のことはいづれ又その時ゆつくり御相談をしませう。」犬塚は既に用意してあつたらしい西洋紙の封筒を外套のかくしから取出して、辭退する菊子の手に渡した。そして土橋を渡つてから菊子が電車に乘るのを見送つて犬塚は烏森の停車場へいそいだ。

四

次の日菊子は前の晩に約束した時刻を計つて丸の内ビルデングの四階に犬塚法律事務所と書いてある戸口をさがした。靜に戸を明けて入ると盆栽を載せた丸テーブルを前にして四十あまりの丸髷に結つた婦人が長椅子に腰をかけて所在なげに朝日グラフの寫眞を見てゐたので、菊子は輕く腰をかゞめながら一寸言葉を掛けかねた樣子に、丸髷の女はすぐに察したらしく、「さア。どうぞ。」と長椅子から立つて愛嬌よく菊子を迎へると共に、「あなた。お見えになりましたよ。」と衝立で仕切りをした奥の方へ知らせた。

衝立の彼方では水道の水音がしてゐたが婦人の聲を聞くと共に、タホルで手を拭きながら犬塚は胴衣のまゝで立現れ、わざとらしいまでに元氣好く、

「昨夜はさぞ御迷惑でしたらう。此れはわたしの家内です。」

菊子は何と云つてよいのかわからぬのでシールの外套の紐を解きながら、「昨晩はどうも失禮をいたしました。」

「あなた。其のまゝ召して居らつしやいまし。椅子は寒う御在ますから。」と丸髷はやがて菊子が椅子に坐るのを待つて、

「いい形に出來てゐますのね。」と半は良人の方へ話しかけるやうにして菊子の髪から化粧の仕方をほめる。

細君は小づくりの撫肩で下ぶくれの圓顔。若い時は美人であつたらしいが今では小皺と雀斑だらけ。どう見ても良人より年下とは見受けられない。菊子は昨日上村の話で、犬塚さんの奥さんはもと神戸の福原遊廓の娼妓であつた事を聞知つてゐたので、お茶だの煙草だのといろ／＼如才なくされても別にありがたいとも思はず又自分の身を省みて恥しいと思ふやうな氣にもならなかつたので、やがて打連れて東京驛から電車に乗る時にも菊子は細君の爲すがまゝに乗車券まで買はせて濟ましてゐた。時節は櫻の蕾の大分目につき始めた彼岸近く、大森の屋敷へ着いても日はまだ暮れなかつたので、細君

が夕餉の仕度をする間、菊子は犬塚に案内せられて座敷から庭までを見歩かせられた。犬塚は座敷や庭の様子から其生活の豊である事をそれとなく菊子に示して安心させやうといふつもりらしく、十疊の客間にかゝつてゐる東郷大將の額と山縣元帥の書幅については小學校の教師が生徒に聞かせるやうな說明をさへした。

菊子はそんな事よりも最初上村から話のあつた多額納稅者とやら云ふお客はどんな男なのであらう。そしてどの座敷に來てゐるのであらうと追々日が暮れかゝつてくるにつれて最初の覺悟には似ず何となく空恐しくなり、昨夜犬塚から貰つた〇〇〇〇はまだ封筒のまゝ帶の間に入れてあるのを幸、それを返して、いつそ今の中斷つて歸らうかとも思ひ出した。緣側から犬塚と共に庭に下りて見ると、屋敷は二階建になつてゐて、二階にはもう灯がついてゐた。菊子はいきなり、

「お客樣は二階に居らつしやるの。」

「いゝえ。まだ。八時頃にお出でになる筈だから。」と犬塚はそれとなく菊子の顏色を窺ひながら、「ゆつくり夕飯をたべてからでいゝですよ。萬事家内が承知してゐますからね。決して强制するやうな氣遣はありません。大丈夫ですよ。」

此の場合になると、無暗に安心しろと言はれるだけ菊子は猶更氣味の悪い心持がしたが其時女中が客間の電燈をつけて、緣側に手をつき夕餉の仕度のできた事を告げた。夕餉は八疊の茶の間に置かれた紫檀のチヤブ臺の上に並べられ、菊子は犬塚夫婦と共に箸を乘つたが、やがて茶棚の上の置時計が八時を打つたかと思ふと、誂へたやうに自働車の響が聞えて、女中の知らせを待たず犬塚夫婦は出迎に席を立つ。そして世辭笑をする細君の聲が一際高く聞える中に一同二階へ上る足音がした。ひとり茶の間に取殘されて、パツフで顏を撫でゝゐた菊子を、いよ〳〵細君が連れに來たのはそれから半時間ばかりもたつてからの事であつた。

「菊子さん。わたしの鏡臺をお使ひなさい。かまひませんよ。」と言つて細君はまづ自分の居間に菊子をつれて行き頭髮や化粧の手傳までした上に用簞笥の中から高さうな香水の壜まで取出して振掛けてやつた後、「菊子さん。…………

……。」と教へ、それから靜に二階へつれて行つた。

二階は八疊敷位かと思はれるほどで、さして廣くはない。床の間を後に、着物も羽織も蚊絣（かがすり）の大島をきた五分刈の白髮頭、年は六十以上とも思はれる赭顔（あからがほ）のでつぷりした紳士がウイスキーに葡萄酒の壜を載せた盆を前にして胡坐をかいてゐると、犬塚はずつと引下つて緣側に立てた障子際に行儀よく坐つてゐる。細君が兩手をついて何とも言はず丁寧に辭儀をするので、菊子もその通り手をついてゐると、犬塚は何事も知らぬ顔に、

「その後御健康はずつとお宜しいやうですな。今日なぞは御血色も見違るやうです。」

「さうかな。」と老紳士も菊子の方へはわざと心を留めぬやうな風で、「ぶら／＼してゐれば差支はない。何しろ年も年だから、さう慾張つてもいかんやうだ。」

「今でも一時おわるかつた時のやうに、脱腸の帶はお締めになつておゐでゝすか。」

「これは止すわけにはいかむやうだ。冬はよいが暑くなると、誠に厄介なものでな。」

「さうで御在ませうな。」

聞いてゐる菊子は曾て其の父親が脱腸を患つて久しく皮帶をしめてゐた事を思出して、此の老紳士も同じ病人だと心付き可笑しいやうな妙な心持がした。それと共に菊子はまた自分とは甚しく年のちがつてゐる男の事から、……………………………、自然と思浮べないわけには行かなかつた。

これは菊子がその頃齒の療治に通つてゐた秋山さんと云ふ齒醫者であつた。その時分菊子の父親は芝兼房町の表通に西洋家具店を營み、細工場まで持つてゐてなか／＼贅澤に暮してゐた。妾が二人もあつていづれも店の近くに圍はれてゐた處から、菊子は髮結や洗湯なぞも同じなのでいつともなく父の妾と懇意になり、縁日で物を買つて貰つたり活動寫眞を見

せてもらつたりしてゐた。それと共に店の男や細工場の職人等とも菊子は×××冗談を言つたり口喧嘩をしたりしてゐたので、物心のつかぬ中から菊子は男を恐れる念がなく、從つて世間普通の娘よりも早くからませてゐた。幽霽者の秋山は藝者家に成長した半玉なぞよりも一層××に見える菊子の様子に魂を奪はれ、氣長に段々と手馴けたのであるが、やがて二三年の後菊子がいよ〳〵他へ結婚すると云ふ時、白髮頭の秋山は淚をこぼして別を惜しんだ其様子が、菊子の目には今だに思出しても可笑しくなるほど滑稽に見られた。そんな事を思合せると、現在犬塚辯護士の家の二階に夫婦の者を家來同様に豪然として坐つてゐる老紳士も菊子の目にはいつか秋山と同じやうに滑稽に見えるやうになつて來た。

五

百圓足らずの月給で、午前の九時から夕方五時に閉店する刻限まで狹からぬデパートメントストワーの內を見廻つて歩くのが役目なので、上村は其の日も一日人込の中をぶら〳〵しながら硝子窓に映る月影に閉店の時刻の近づくのを心待に待つてゐる折柄、金釦の給仕が駈けて來て、「上村さん。面會のお客様がありますよ。三號の休憩室にお居でゝすよ。」と知らせた。

行つて見ると、犬塚辯護士の夫人政子である。

「ツイ存じませんで、どうも失禮をいたしました。今日はお買物でゐらつしやいますか。」

「えゝ。もうそろ〳〵夏の仕度をしなくつちやなりませんしね。」

「急に暑くなりました。此間中は雨ばかり降つて寒いくらゐでしたが……。」

「おひけは五時頃ですか。」

「はい。もう一時間ばかりで歸れます。」

「ぢや別においそがしい處ぢや無いでせう。すこし御聞申したいことがあるんですよ。それでわざ〳〵お呼びたてしたんですよ。」

立つてゐた細君は上村の顏を見ながら再び椅子に坐つて、「あの弼子さんの事……あなたはどう思ひます。わたしはどうも家の人とをかしいと思ふんだけれど。」

「さあ。どうと云つて、どうも困りましたな。わたしは何にも知りませんが、そんな事はないだらうと思ひますが……。」

「あなた。ほんとうに知らないのなら、探つて見て下さいな。默つて居ては家の人の爲によくない事なんだから。」

「さうです。」

「それが藝者だとか女優だとかいふのなら、家の人が何をしやうとわたしは默つて知らない顏をして居ますがね。あの人はあなたも知つてる通り今ではまア。云はゞ宇佐美さんの××××見たやうな者でせう。自分がお世話をして置きながら、陰へ廻つて横取りをしたなぞといふ事が知れた日には全く申譯の立たないことになりますからね。」

「はい。全くです。」

「だから、わたしは心配するんですよ。燒餅を燒くんぢやありませんよ。」

「はい。はい。」と上村は叱られてゐるやうに頻に頭を下げてゐる。もと〳〵上村は長らく犬塚の家に書生をしてゐたので、政子の性質は勿論の事、犬塚の細君になつた來歷まで皆知りぬいてゐる。始め神戸福原遊廓の娼妓であつた政子は西洋人の××になつて金をため、若い男をこしらへて東京へ來た後麹町平川町邊に素人下宿をしてゐたが、その中辯護士の犬塚と心安くなつて以前の男を振捨て、素人下宿屋の造作やら敷金やらをそつくり犬塚にみついで一家を構へさせ法律事務所の札を掛けさせるやうにしたのだといふ話で。それがため十年あまりの今日になつても犬塚は收入の一切を一時細君に見せた上、入用のものは其折々細君の手から出して貰ふことになつてゐる。

「上村さん。あなたの事だから如才はなからうけれどわたしから頼まれた事は内所にして置いて下さいよ。内の人にも、あの女の人にも、よござんすか。」
「えゝ。それは大丈夫です。」
「ぢやア頼みましたよ。お忙しいところをお氣の毒でしたねえ。上村さん。これは少しばかりだけれど、歸りに一盃おやんなさい。まア遠慮しないでも。御禮は又御禮でするからさ。」
「さうですか。どうも。」と上村は五圓札を受取り、「もうお歸りですか。それではお下駄を事務所の方へ廻しませう。出口は混雜してゐますから。」
政子を送り出すと間もなく店の閉まる時間になる。上村は五圓札を貰つた志に對してまさか其まゝにもして置けないやうな氣がしたので、それとなく樣子を窺ひにと愛宕町の貸間に菊子を尋ることにした。
新道へ入るとそよ吹く夕風に燒香の匂が頻と鼻について、湯から歸つて來る近所の女の襟白粉と素足の白さが、まだ暮れきらぬ初夏の黄昏に浮立つて見える。其邊の格子戸では若い女が天氣つゞきの砂ほこりに頻と水をまいてゐる所もあれば、二階の窓に干した洗濯物を取入れてゐる所もあつた。これがいづれも人の姿か何ぞのやうに艶しく見えてならなかつたので、上村は貸家つゞきの軒並に二階の窓を見上げながら歩いて行く中、丁度折から菊子が白い腕を高くのばして簾を捲き上げてゐるのを見た。往來から聲をかけてい〻のやら惡いのやら樣子がわからないので、帽子を取りながら、だまつて立止つてゐると、
「アラ、上村さんぢやないの。お上んなさいよ。」と二階から聲が掛かる。
「かまひませんか。」
「かまはないワ。お上んなさいッたら。」といつも叱るやうな、ぞんざいな調子に、上村は格子戸をあけて、階下の人の

取次をも待たず、上框(あがりかまち)の三疊からすぐに二階へ上つた。濡れたタホルと化粧道具が窓の上に置いてあつて、菊子は今方湯から歸つて來たばかり、これから化粧に取りかゝらうとする所であつた。

「御免なさい。」と言つて雨服を拔いで鏡に向ふ。

「あなた。瘦せてゐるやうで、なか〳〵肥つてゐるんですね。」

「着瘦せがするのよ。割合に肥つてゐるでせう。」

「實にすてきですな。」

「何がさ。いやな人ねえ。そこに御菓子があるからお上んなさい。」

「ありがたう。」

「上村さん。わたし、あなたの來るのを知つてゐたのよ。今日か明日あたり、きつと入(いら)らツしやるだらうと思つてゐたのよ。」

「さうですか。」

『わたしの事で犬塚さんの奥さんが大變燒餅を燒いてゐるんですツてね。それで、上村さんがきつと賴まれて樣子を見に來るだらうツて。犬塚さんがさう言つてゐたわ。」

「僕も大方そんな事だらうと思つてゐたんですよ。然し奥さんに向つてそんな事を言つた日にや猶の事騷ぎが大きくなるばかりだから、何にも知らない顏をして、へイ畏りました。内々樣子を探つて參りますと、お辭儀ばかりしてゐた、其の御かげで實は今日五圓頂戴したわけですョ。」

「アラ隨分人がわるいのねえ。」

「人が悪いと云つて。あの場合頂戴しないわけには行きません。内々で探つて來いと仰有るものを、まさか僕の方から、」

そんな事は無駄だ。探らなくつてもわかり切つてゐるとは言へませむからね。いくら商賣人でも女は女だ。證據を見ない中は半信半疑で、まさかと思つてゐるらしいですね。僕も實ははつきりとは分らないんですがね、………、………………。………。」

「…………、いゝぢやないの。五圓の御禮に言づけられたら大變だわ。」

「菊子さん。冗談言つちやいかんです。御禮なら、とうに先生の方から貰つてゐますからね。」

「アラ抜目のない人ね。」

「だから、菊子さん、あなたから二重取りをするわけにも行かないから、御心配御無用ですよ。その代り………

……………。………………。……………………。

……………………。まアお聞かせなさいよ。始めて僕が紹介した晩、銀座を歩きましたね。途中で僕が先に失敬をしましたね。そこで、何處か…………と云ふ順序ぢやなかつたですか。」

「それぢや、まるで映畫小說だわ。然し、あの晩はわたし全くそんな事になるんぢやないかと思つて氣味がわるかつたのよ。始の中はちよいと唯からかつて見るつもりだつたのよ。いやに好い男ぶつてゐるから、此方でもおぼし召があるやうに見せ掛けたんだわ。わたしの悪い癖だわ。あの晩、時間は丁度いゝし、きつと口說かれるだらうと思つたのよ。さうしたら……………途中から逃げてしまふつもりだつたのよ。」

「菊子さん位わからない女は全く無いね。……………………………

……………………………、全くわからない。」

「わたしにも自分で自分がわからないのよ。さう云ふ事は其の時のはづみだもの。あの翌日大森へ行つたのよ。奥さんが御飯の仕度をしてゐる間、わたしと先生とお庭を歩いたのよ。その時別にわたしの方からきゝもしないのに、犬塚先生ツ

たら、獨りで申譯らしく、菊子さんは何と思つてゐるか知れないが、僕は女を人に取持つて、それでどう斯うしやうと云ふやうな破廉恥な男ぢやない。今にわかるから誤解してくれるなツて仰有るのよ。だから私の方でも、私だつて心の底までこんな汚れた女ぢやないのよ。境遇の然らしむる處だからつて、さう言つたのよ。さうすると始ツから僕はあなたを信用してゐるから、あなたも僕を信じて下さいツて、…………。それが第一卷の終りと云つたやうなわけなのよ。」

「菊子さん。それから先はたゞぢや聞かれませんね。何かお奢んなさい。」

「アラ。あなたが聞かせろツて云ふから話をしたんぢやないの。わたしの方ぢや話賃を取る氣なのよ。」

「さつきの五圓があるから、どうならうと今日はえばつたもんだ。もう斯うなつたら、もつと…………聞きませう。」

其時往來から「小村さん。電話ですよ。」と呼ぶ聲。日頃呼出しの電話を頼まれてゐる表通の酒屋から小僧が知らせに來たのである。

「はい。御苦勞さま。」と菊子は上村を置去りに二階をかけ下りた。

外はもう暗くなつてゐる。上村は長居をすべき時でないと知つてゐるので、菊子が半帶の解けかゝつたのを後手に締直しながら歸つて來るのを待つて、帽子を把り、「菊子さん、ぢや又其中お邪魔に來ます。」

「わたしも出かけるのよ。そこまで一緒に行きませう。わたし實は家を借りたのよ。手附はやつて置いたのに、電話でやい〳〵言つて來るから、此れから敷金を置いて來ようと思ふのよ。上村さん、あなた、何なら一緒に來て下さいよ。つい、其處。虎の門よ。晩翠軒の横町だから。」

「さうですか。ぢや一緒に行きませう。」

「こゝの二階は先の旦那の時借りたんだから、いろいろ都合のわるい事があるのよ。それに下の人が區役所へ出る人で馬鹿に堅いのよ。ちがつた男の人がたづねて來ると其のたんびに妙な顏をして聞くから困ッちまふのよ。その隣のおかみさんの妹は女優か何かしてゐるのにさ………。」

しやべりながら菊子はメレンスの單衣の上に靑い絽縮緬の夏羽織を引掛け、鏡臺の引出しに仕舞つてあつた金を封筒のまゝ帶の間へ押込み「さあ、行きませう。お待ち遠ふさま。」と飛び上るやうにして天井から下つてゐる電燈を消した。」

六

「おい。政子、何もさうやかましい事を言はないだつていゝぢやないか。妾の一人ぐらゐ圍つたからつて、每晩とまるわけぢやなし、お前にさへ不自由をさせなければ少しは大目に見て置くもんだ。お前がどうしてもいけないと言ふなら乃公もやけだ。どうしても止さない。さう思つてくれ。」と言捨てゝ立ちかけた犬塚の樣子が日頃に似ずあまりに强硬であつたので、さすがの政子も呆れたやうに夫の顏を見詰めたまゝ默つてしまつた。庭の垣を越して朝の中から聞える鄰家のピアノや蓄音機、子供の騷ぐ聲なぞが今日は日曜日であることを知らせてゐる。

犬塚は朝餉のチャブ臺から立上ると共に「洋服を出して貰はうよ。」

「洋服でも日本服でも勝手に召しておいでなさい。」と政子は橫を向いて煙管で引寄せた新聞の上に目をそそいでゐるので、犬塚はフンと鼻先で笑つて緣側から次の居間へ聲ざはりも荒々しく立つて行つた。政子は獨言のやうに、

「あんな碌でもない淫賣に。あきれて物が言へない。」

すると、犬塚の方でも洋服を着ながら、わざとらしく「午には歸れないかも知れないからな。御飯の仕度はいらない。」と言つたが無論返事は聞えない。

犬塚は却てそれを幸に逃げ出すやうに家を飛び出して、梅雨晴の日影がもう眞夏のやうに照りつけてゐるにも係らず停車場へ急いだ。菊子が赤坂新町の貸家へ引越しをするのは今日の日曜日といふ手筈になつてゐたからである。日曜日は犬塚にとつては非常に都合のわるい日であるが、さう事がきまつてゐる上からは、否が應でも何か口實を設けて家を出やうと最初から決心してゐたので、萬一政子の出様が非常に手厳しければそれに應じて横面の一ツも張りなぐつてやらう。もし又事によつて話がいよ〳〵紛擾を極めるやうになつたらそれは却て此方の望む所だ。犬塚は色香の失せきつた女房にはもう飽々してゐるのみか、年々に嫉妬が烈しくなるのと、又その度々に初の事を言出して恩に着せられるのに閉口してゐるので、これから先一生涯こんな婆さんに愚圖々々云はれて、それが爲ゆつくり外で酒も呑めないのかと思ふと自然氣のふさいでしまふ事もあつた。犬塚は最初政子が自分のために使ひすてた其貯金およそ五千圓ばかり、それをば今日耳をそろへて返濟して綺麗に別れる事ができるものなら、どんな切ない思をしても其金を才覺しやう。十年前の五千圓は大金であつたが今では時勢につれて金位も低くなつてゐる上に自分の身も相應の地位ができ既に昔の貧書生ではない。かう云ふ矢先、犬塚は偶然菊子を手に入れてからます〳〵政子がいやになつて、間がよくば家内の風波をわざと煽り立てた後斷乎たる處置を取らうと度胸をきめてゐるので、赤坂へ家を借りさせた一件すら犬塚は女房の責め詰るがまゝ別に隱さうともしなかつたのであつた。

電車に乘ると日曜日のことで車はいつもよりすいてゐたが、その代り夫婦連だか何だかわからぬが兎に角男女の二人づれが多く見受けられた。その中には世間に顏の知れた活動の女優もあれば濱島田に結つた藝者もゐた。犬塚はこの年月京濱間を通ふ此電車の往還に女優まがひの流行を追つた當世風の若い女を見ると、その度毎にいつも〳〵丸髷より外には結つた事のない政子の樣子が一際色氣なく見られてならなかつた。或時犬塚は政子に向つて、ハイカラがいやならせめて銀杏返しにでも結つて見たらばと注文して見たことがある。すると政子は銀杏返なぞに結ふと待合の女中のやうに見えるか

らいやだと言つたが、その實は娼妓をしてゐた時分重い島田に結通してゐた爲め中剃の禿が大きくなつて今では銀杏返には結はれないことがわつかたので犬塚は寧しろ氣の毒だと思つた事があつたが、それも既に四五年前の話である。

髪や着物の流行に後れてゐる事はさて措き犬塚の最も困つてゐるのは、政子がもと〳〵關西の貧家に生長したところから、家事の持ち方が爪に火をともさぬばかり、あまりに吝嗇なことであつた。夏になつても氷で冷したものが家には無いと云ふ風なので、犬塚はもすこし時勢に應じて衣食住の贅澤がして見たいと思つても我慢してゐるより外はない。それやこれやの不便と不滿足とが菊子の當世風な姿と×××な生活とによつて一時に補ひ滿されるやうな氣がしたのである。

烏森の停車場から實用タキシイとかいふ賃錢の安い自働車を雇つて赤坂新町三丁目の番地を目當に馳けつけると、場所は氷川の方へよつたゴミ〳〵した街で、震災の時丁度此邊が燒どまりであつたと見え、廣い下水に沿うた人家の中には危く傾れさうになつたまゝ殘つてゐる古家が時節柄人の目を牽いた。

犬塚はさういふ古家の中で小商ひをしてゐるのを見つけて番地を問ひ、米屋と自轉車屋の間の露地を入つてすぐにそれと覺しい新築の貸家へ尋當つたが、然し雨戸が立てゝあつて貸家札もまだ貼つたまゝになつてゐる。引越の車は大方今頃は其途中に在るのだらうとは思ひながら、犬塚は電車の中で若い女を見るにつけ引越のとばかり考へつゞけてゐた其反動で、どうやら期待のはづれたやうな心持がすると共に菊子に對して何となく疑惑の念を生じた。兎に角雨戸のしまつてゐる家の前に立つてゐるわけにも行かないので露地を出て引越の車のやつて來さうに思はれる道を選んで歩き〳〵とう〳〵虎の門まで來てしまつた。こゝでやゝ暫くの間立止つてゐたが引越の荷車らしいものは一臺も通らない。時計を見ると午前十一時過ぎである。已むを得ず又歩き出して櫻川町を斜に通り拔けると直に菊子が二階借をしてゐる家の横町である。犬塚は其横町へ曲るまで、引越の車に行當りはしないかと思ひ〳〵遂に格子戸の前へ來てしまつた。其時殆ど出合頭に格子戸を明けたのは寢亂れた髪に手拭地の浴衣を着た菊子で、手には石鹸の箱を持つてゐる樣子、言はずと今方起きて湯へ行くと

ころらしい。

「おい、引越しはどうしたんだ。」と犬塚は覺えず聲を高くして菊子の顔を睨んだ。その權幕に對して菊子は即座に起る反抗心から相手をびつくりさせるやうな出放題の嘘言をついて見た。

「電報が來たのよ。アノ宇佐美さんから。」

宇佐美といふのは最初犬塚の家で××××××群馬縣下の金持である。其地で銀行を經營してゐる傍手廣く高利の金を東京方面の諸債師をそへ貸付けてゐる。犬塚はその方の事務を擔任してゐるので、丸ビルの事務所も大森の邸宅も表面は犬塚の名義になつてゐるが、其の實は皆宇佐美の物である。宇佐美の名を聞いて犬塚は菊子の想像した通りびつくりして「いつ東京へ御出になつたんだ。」

「東京ぢやあないのよ。日光から電報が來たのよ。わたし、いやだから行かれないつて云ふ返事を出しといたわ。」

「さうか。をかしいな。」

「をかしな御爺さんね。」と菊子は寄添つて犬塚の手を握り、「まアお上んなさいよ。もう仕度はしてあるのよ。先に神田で使つてゐた老婆が手つだひに來る筈なのよ。」二階へ上ると簞笥や鏡臺はまだ其儘になつてゐたが、押入の戸があいてゐて幾足とも知れぬ汚れた白足袋が赤いメレンスの細帶で縛つてあり、大きな風呂敷包も二つほど梯子の下口まで出してあつた。それを見て犬塚はすぐに機嫌を直し、

「これだけなら、わけはない。いつでも引越せる。然し折角電報が來たのに行かなかつたら惡いだらう。」

「かまはないわ。宇佐美さんは別に私の××××××といふわけぢやあないんだもの。さうでせう。唯東京へ來た時呼ばれるだけぢやあないの。それもあなたが是非ツて云ふから仕方なしに行くんぢやないの。あの人、實にさつぱりしてゐるから大丈夫よ。心配しないだつて、…………………。」

菊子はもと〳〵根もない虚言をついたので宇佐美についての話は早く避けやうとしてゐる。犬塚は又相手の心を測りかねて其顔を眺めたがら巻煙草を銜へてゐたが、暫くして、

「…………事が知れたら、知れたでいゝさ。其の時は打明けてあやまつてしまふまでのことだ。それよりか難物なのは家の婢だよ。今日は日曜日だらう。事務所が休みだから出掛けやうとすると何だの彼だのと馬鹿に手古づらせやあがつた。あんまり愚圖々々云やあがつたら構ふことはない。追出してしまふ。」

今度は菊子が默つて犬塚の顔を見てゐる。

「その時はお前、僕の細君になつてくれるね。僕はお前の決心次第で全く斷然たる處置を取るつもりでゐるんだ。」

「わたし見たやうなもの、とても役に立ちやしない事よ。今の奥様は評判の働き手ぢやないの。比べものにはならないことよ。」

「お前、何かと云ふといやに逃げるやうな水臭いことばかり云ふぢやないか。僕では不滿足だと云ふのかい。それなら遠慮なくその譯を言つてくれた方がいゝ。」

「わたし、別に不滿足だとも何とも言やしませんよ。わたしは今の奥さんを追出して其跡釜に坐らうなんて、そんな量見はないんですよ。それだから、奥さんにはなれないと言つただけぢやありませんか。」

「それならいゝけれど、お前の云ふことは何となく水臭いやうに聞えていけないよ。」

「どうせ、さうでせう。わたしなんか、物の言ひやうもわからない女ですから。」と菊子はもう腹が立つて堪まらないと云ふやうに突と座を立つた。

「おい。どうしたんだ。何をそんなに腹を立てるんだ。妙な女だな。」と犬塚はまだ能く菊子の性質を知らないので、不審さうに其の顔を見上げた。

「妙な女ですよ。氣ちがひなんでせう。」と菊子は立つたまゝ男を尻目に睨んで、「引越しなんか、もう止しませうよ。敷金さへお返しゝたら、それでいゝんでせう。」

「おい。おい、菊子。何をお前、誤解してゐるんだ。」

「お金さへ返せばそれでいゝのよ。わたしの氣がすむのよ。」と菊子は犬塚がびつくりして引止めるのを振拂つて下へ行かうとした。その時、「奥さん、どうも晩くなりまして濟みませむ。」と云ひながら上つて來たのは菊子が震災前神田の妾宅で使つてゐた老婆である。菊子は今度赤坂へ家を持つに付いて、手紙でこの老婆を呼寄せ引越の事のみならず都合が好くば以前のやうに使ひたいと思つてゐるのである。年は五十ばかり、田舍に生れた者らしく丈は低いが肩の怒つた、顔の角ばつた丈夫さうな女である。一年あまりも使はれてゐたので、老婆は菊子と犬塚との樣子を一目見てすぐに悟つたらしく、丁寧に犬塚の方へ辭儀をした後、「奥さまお一人で、さぞ御困りでしたらう。もつと早く伺はうと思ひましたら、あいにくと家の用がごた／＼してゐましたので。ほんとに申譯が御在ませんねえ。日が長い時ですから今からでも間に合ひますよ。お饒舌りをしてゐる暇に片附けませう。」挨拶をすますと共に襷をかけて働きはじめる老婆の樣子に、菊子も犬塚も忘れたやうにけろりと機嫌を直した。そして荷づくりのことは老婆にまかせて二人は午飯を食べにと電車通の洋食屋へ出かける。其の行掛に車屋を頼んで寄越す事にした。

七

臺所道具の足りないものも大方買ひ揃へ、家の内も追々片付くやうになると、入梅はとうに明けて、彼れこれする中八月も殘り少く大地震の一年目が日に日に近くなつた。世間一體わけもなく恐怖に包まれ風の音にもびつくりして臆病な者は戸外へ飛び出さうとする程なので、九月朔日の當日には學校を始め會社や銀行も休業し酒屋八百屋などもあきなひを休んだ。

「奥さん。御飯が出來ましたから、何ならおむすびでも拵へて置きませうか。まさかの用心に。」と老婆は臺所で膳拵をしながら茶の間で髪を結直してゐる菊子へ話しかけた。

「あら、もうそんな時間なの。」と菊子は解いた髪を片手に押えながら老婢の身近に馳寄つて、「今日は大丈夫か知ら。氣のせいだか何だかグラ／＼するやうな氣がするよ。」

「地震はもうこり／＼しました。今の中早く御飯を上つてお置きあそばせ。」

「ばァや、お前も一緒にたべておしまひ。お腹さへできてゐれば、どこへだつて逃げ出せるから。」

菊子は束ねた髪のまゝ臺所の板の間へ老婢と差向ひに坐つて午飯の箸を取りながら、互に一年前の話をしはじめた。地震の起つた前の晩、その頃の旦那であつた永島が歸つた後……。…………………………

…………、翌日も午近くに眼をさまして××××便所へと降りかけた時俄然として家の壁土や屋根の瓦が恐しい響で落ちかゝつて來たのである。

「奥さん。あの竹原さんにお目にかゝりましたよ。つい二三日前お使に出た時お目にかゝりましたのよ。」と老婢は菊子の樣子を窺ふやうに一寸その顔を見た。

「さうかい。何かはなしをしたのかい。」

「いゝえ。もう忘れておゐでのやうでしたからお呼び申してもわるいと思ひましてね。それに、奥さん。お連れの方がおゐでゝしたから。」

「竹さんのお連なら男の人ぢやないだらう。」

「へい。藝者のやうで御在ましたよ。」

「ぢや此の近邊にお馴染ができたんだらう。あの人には誰でも烏渡引ッかゝるよ。」

老婢は臺の上の皿小鉢を洗ひはじめた。菊子は其日の半日世間は氣のせいか何處ともなく物靜な上に旦那の犬塚は來ずいつも遊びに來る友達も今日にかぎつて申合せたやうに姿を見せないので、已むを得ず晝寢に時間をつぶして見たが殘暑の日はまだ容易に暮れきらない。菊子は目をさますと何處へ行くと云ふ當もないのに化粧もそこ〳〵にして溜池の電車通へ出て見た。そして歩きながら赤坂へ家を持つてからまだ一度も四谷の實家を訪はなかつた事を思出し四谷見附で電車の乘替をする時手土産の西洋菓子を買つた。荒木町の藝者屋町を通拔けて父の家の格子戸を明けたが家の内はしんとしてゐて格子戸につけた鈴の音の鳴り響くにも係らず上框の障子をあけるものもないので、菊子は何と云ふわけもなく少時土間に佇んで、見るともなく土間の中を見ると、下駄箱の前に何やら薦で荷造りをした大きな物が置いてあつて、結び付けた木の札に北海道函館〇〇町〇〇番地小村正次郎行と書いてあるのが目についた。正次郎といふのは菊子の弟である。今年の春早稻田大學を卒業する筈であつたから此の荷物の樣子を見ると、首尾よく卒業して早くも職業に就いたのに相違ない。正次郎は學校の成績はいつも優等で、煙草も酒も飮まず友達に誘はれても決してカツフヱーなどへは行かなかつたので、菊子は日頃その身を省みる度に兩親よりも却て正次郎の事を烟たく思つてゐた。兩親はじめ親戚の者は一人殘らず菊子の身の上はどうならうと自分の勝手にするがよいと云ふやうに當らず觸らずに棄てゝ置きながら、弟の正次郎が風邪でも引いた時には母親はきまつてお百度を踏む程の騷ぎに菊子はいつか兩親や弟に對して何ともつかず反感をも抱くやうになつてゐた。

土間の上の荷物を見ると、菊子はまだ判然とはわからぬけれど、若しさうであつたら兩親の自慢ばなしや正次郎の得意な樣子はたいしたものであらうと思ひつくと、急に堪えられないやうな心持がして此儘格子戸から引返さうとした。然し其の時は既に遲く父と正次郎の二人が何やら兩手に買物の包を提げ面白さうに語り合ひながら歸つて來るのに出遇つてしまつた。父は新しい單衣の上に夏羽織を重ね弟は新しい背廣に新しい帽子をかぶり新しい靴をはいて杖まで携へた樣子。

今まで汚れた制服ばかり着てゐた時とはちがつて早くも立派な紳士になりすましてゐる。
「お菊。丁度いゝ所だつた。」と父がまづ呼びかけた。其聲さへいつもとちがつて元氣づいてゐる。
「いくら呼んでも誰も出て來ないぢやないの。歸らうかと思つたのよ。」
「アラちつとも知らなかつた。お前いつ來たんだよ。」と上框の障子を明けたのは母親であつた。
「さつきから隨分呼んだのよ、だまつて上るのもわるいと思つてさ。」と菊子は言ひながら父や弟と共に家へ上つた。
上框の三疊から六疊の茶の間まで荷づくりした家具が壁際に置いてあつて、見れば八疊の座敷の床の間にはもう掛物もなく花瓶も置いてない有様に菊子はさすがに驚いて唯きよろ／＼家中を見廻すばかりである。
「いろ／＼取込んでゐたので、まだ知らせなかつたのだが實は急に函館へ引越す事になつたんだ。」とやがて父が話をしはじめた。其の要領は正次郎が今度北海道の或物産會社に雇はれることになり當分函館に永住する見込がついたので、それを機會に父もとう／＼急に東京の家を引拂はうといふ事になつた。父はもと横濱の貿易商の家に生れ若い時分函館へ渡つて事業を企てた事もあつた。東京にゐれば破産の宣告を受けた後いつまで經つても債權者につきまとはれて居なければならない。それ等の事から父は急に何といふ譯もなく急に函館へ行つて老後の餘生を送りたいといふ考になつた。
「あつちには昔取引をした店もあるし、その時分世話をしてやつた者もあるから、正次郎の厄介にならなくつても乃公は乃公だけで何とか一ツ發展して見ようと思つてゐるんだ。東京にゐてもこの始末ぢや全く仕樣がないからな。」
菊子は不意の事件に實は少からず驚いたのであるが、わざと平氣な調子を粧ひ、「立つのはいつなの。明日明後日……。」
「明後日夜行で立たうと思つてゐるんだがね……。」
「さう。」菊子は父の返答を聞くと共にもう居ても立つてもゐられぬほど腹が立つて來て、自分が半年近くも無沙汰をしてゐた事なぞはすつかり忘れてしまひ唯々兩親や弟までがかうまで自分を疎外にするのかと思ふと聲まで顫へて來さうにな

るのをやつと制しながら、「今日來なかつたらお目にかゝれなかつたのね。それでもまアよかつたわ。ぢや、左樣なら。いろ〱御用があるんでせうから、わたしはこれで歸ります。」

臺所で煮物をしてゐた母親と二階へ上つて何か用をしてゐた弟とが父と共に菊子を引留めて一緒に晩飯をたべて行けと言つたけれど菊子は據所のない用事があるからと振拂ふやうにして外へ出てしまつた。日はもうたつぷりと暮れ果ててゐたが、此の夜は震災の記念日で四谷の花柳界も表向は休業してゐるところから横町は間の拔けたやうに寂としてゐるばかりか、電車通へ出てもいつものやうな夜店の賑ひもなく津の守坂の彼方から士官學校の喇叭の響のみが際立つて耳元近く聞えて來る。

菊子は初め四谷の實家を尋ねようと思ひ立つた時には心の中では久振母親に逢つたら先第一に赤坂へ家を一軒借りて女中まで使つてゐることを自慢らしく話して聞かせ、それから次には着てゐる金紗小紋の單衣や絽縮緬の帶または此の間やつと犬塚を責めて買つて貰つたダイヤの指環なぞを見せつけるつもりであつた。ところが其の豫想がすつかりはづれてしまつた今となつては、途中で土産物など買つた事までがいかにも馬鹿々々しく思ひなされ、菊子は何か侮辱でもされたやうな氣になつて、一人でぷり〱腹を立てながら、もう何處へも寄道をして見る元氣もなく驀然に家へ歸つて來た。

「ばあや。御飯をおくれ。お腹がすいてたまらない。」

茶の間の窓に肱をついて居睡をしてゐた老婢は生欠伸を嚙みしめながら、「あら、召し上つてゐらつしたんぢや無いんですか。困りましたね。」

菊子は一時にむかッ腹を立て、「何が困るんだよ。御飯を焚くのはお前の役目ぢやないか。馬鹿にするのも好加減にするがいゝよ。」

「あら。どうなすつたんです。奥さん。」

「どうもしやしないよ。外へ行つてたべて來るから、もういゝ。」と菊子は解きかけた帶留をしめ直す。

「何もそんなにお怒んなさる事アありませんよ。いつだつてお出掛けになると、外で上つておいでなさる癖に。お午のでよければ譯はありません。お膳ごしらへをしませう。」

老婢はわざとらしく落ちつき拂つて長火鉢の鐵瓶を卸しながら「おや〳〵火種がなくなつた。」

「それ御覽な。旦那でもお出になつたらどうするんだ。お茶も上げられないぢやないか。ほんとに好い年をして。劬つてやればいゝ氣になつて人を馬鹿にする……。」

腹立まぎれに勝手な憎まれ口をきゝながら菊子は格子戸をも手荒く明けはなちにして出て行つた。然し近所のカッフエーや蕎麥屋へも鳥渡這入りにくいので菊子はジャミ麵麭と林檎とを買つて小紋縮緬の單衣の袂に入れながら、街を一まはりして歸つて見ると、先刻明け放ちにして行つた格子戸は其のまゝになつてゐて、老婢は眞岡木綿の新しい浴衣に着かへ帶も締直して小風呂敷を傍に置きながら、菊子の歸つて來るのを待ち兼ねたといふ風で、

「奥さん。すみませんがお暇をいたゞきます。わたくしにはとても御機嫌がとれ切れませんから。」

菊子は意外の事にびつくりして立ちすくんだ。心の中では謝罪つて引留めたいと思ひながら何と言つていゝやら其の言葉が出て來ない。老婢は辯舌頗流暢に、

「お役に立たないのをいつまでも御厄介になつて居ちやほんとに御迷惑でせうから。それぢや奥さん。どうも長々お世話になりました。いづれ悴をよこしますから荷物は御迷惑でも二三日おあづかりなすつて下さい。」と言ひながら憎らしいほどおち付き拂つて勝手口から出て行つてしまつた。

菊子は口惜さのあまり眼には一ぱい涙をためて老婆の出て行く後姿を睨みつけたばかり。もう何ともしやうがない。突然ガタリと勝手口の外で物音がした。毎晩のやうに近處の犬が餌をあさりに芥箱の蓋を明ける物音である。それと氣がつ

いて菊子はほつと胸を撫で下したもの丶急に今夜は家の内には自分の外は誰も居ないのだと思ふとわけもなく氣味がわるくなつて來て、あはてて簾筒へ錠をかけた後表の入口から家中の雨戸をしめはじめた。最後に二階へ上つて窓の戸を繰出さうとして菊子は戸袋の口で、したゝか指先を傷め、「おゝいたい。」と叫びながら擦りむいた處を脣めやうとする拍子に入齒を落した。

入齒は前齒二本であるが、既に三四年も前から具合がわるくなつてゐて、堅いものをかんだり又はあまり大きな聲で突然笑ひ出したりするとはづれて落ちることが度々であつた。それ故菊子は入齒の拔け落ちた事にはさほど驚きもしなかつたが、其の齒を拾はうとしても見當らないのにほと〳〵途法に暮れてしまつた。入齒は窓から戸外へ落ちたものらしい。窓の外は隣家との狹間になつてゐて掃除屋の外通るものはないので、菊子は其の狹間には何處から入るのやらまだ知らなかつたのである。時計を見るとまだ八時になつたばかりであるが不斷から近隣のものとはあまり心やすくしてゐないので、今夜突然落した入齒をさがしてくれと賴むわけにも行かない。又今から急に齒醫者へ行つて入齒をして貰ふにしても、今のところ掛りつけの齒醫者がなく、それに又今夜は留守番がないので着物を盜まれはしまいかと、それも氣がゝりである。つく〳〵途法に暮れながら、ふと鏡臺の鏡に映つてゐる自分の顏を見ると、俄に十か十五も年をとつたやうで、自分とは思はれない程顏ちがひがしてゐる。情ない氣がするばかりか、どうやら其身の行末が思ひやられるやうな恐しい氣がして長く鏡の面を見てはゐられない位であつた。菊子は電燈を消して家の中を眞暗にして夜具の中に顏をかくして寢てしまつたが、三十分ばかりもたつかたゝない中急に起き上つて、寢衣にした浴衣の上に夏羽織を引掛けて勝手口から外へ出た。

外はまだ宵の口にかはらず賑である。菊子は十五六の小娘の時分、其人の爲に……………彼の秋山と云ふ白髮の齒科醫をたづねる事に決心して、溜池の表通にある自動車屋から自動車に乘つた。然し菊子はもう七八年も齒醫者にかゝつたことはないので、かの秋山が從前通り震災後も木挽町一丁目に居るかどうか、それすら確にはわからなかつたのであるが、何しろ今夜この時間に急に入齒を作つて貰はうといふには、どうしても以前から知つてゐる醫者の許に行くより外

に仕様がない。菊子は日頃自分ながら容貌はわるくないと思つてゐるだけ猶更前齒の拔落ちた所を見せたくない。人に見られるのが思へば思ふほど何より辛い氣がした所から、ふと秋山の事を思出すと共にむかしの厭はしい關係を今では却ていい事にして、是非にも今夜中即座に齒を入れさしてしまはうと決心したのであつた。

八

齒醫者の秋山はもう六十を越した老人である。既に財産もでき地面や家作も持つてゐたので、震災にあつたのを機會に一時中野へ屋敷を買つて引越してゐたのであるが、その後追々市中が賑かになつて來るのを見て、以前家作のあつた處には早速バラツクの貸家を建て、また本宅の跡にはこれも臨時にペンキ塗の家を建て舊のやうに齒科治療の看板を掛けた。然し自分はもう年をとつて患者に接するのが面倒なところから、以前助手に使つてゐた兒島といふ醫師に治療所の建物と新に買揃へた機械一切を貸し治療代の半分を自分の所得にしてゐたのであつた。

秋山はその日丁度市中へ用たしに出て來た歸途木挽町の治療所へ立寄り助手兒島の夫婦と會計の帳簿をひろげて何やかやと損益のはなしに時を移し、いつか九時を打つ柱時計の音に驚いて、「ぢや、兒島君、區役所の方は君に頼んで置くから、いゝやうにやつて置いてくれたまへ。」と言殘した事を言ひ添へながら編上靴を片足はきかけた。丁度その時、表の硝子戸をがらりと明けて「先生はいらつしやいますか。療治をしていたゞきたいんですが。」と袖口で口をかくしながら言つたのは菊子である。

秋山は肥滿した老體を折れるやうにして編上靴の紐を結びはじめる。兒島は東北訛の發音に濁聲をひねつて、「わたくしが先生ですが……。」

然し菊子は助手のいふことには構はぬといふ風で、秋山の顏を見ながら「わたくし……おわかりになりませんか。」

「あのあなたは……。」

「菊子ですよ。ほゝゝゝ。兼房町に居りました……。」

「これはどうも。これはどうも失禮をしました。まア、あなた。御無事で……。」秋山はさらでも赤らんだ顔を眞つ赤にして殆んど言ふ所を知らぬほど狼狽したらしかつたが、然し之を見てゐた助手兒島は、地震後の時節柄今でも到るところに見聞せられる邂逅の挨拶と思つたものか、別に二人の樣子を怪しむ風もなく相變らず薄髭をひねりながら其場に突立つてゐる。

「菊子さん。さアこちらへ。」と秋山は漸く氣を鎭め、はいたばかりの靴をぬいで患者の待合室へ菊子を案内した。助手の細君がやがて茶を持つて來る。

菊子は何のかのと其後久しぶりの挨拶に時間をとるよりも、兎に角今夜中に入齒を入れてさへ貰へばいゝと思ふので、かう云ふ場合は噓言も一時の方便だと口から出まかせに、菊子は今朝一番の汽車で大阪へ行くつもりで仕度をした。それは先月から大阪へ會社の用で出張してゐる良人が何やら急病に罹つたといふ電報が來たので。急いで仕度をしてゐる矢先入齒がこわれてしまつて、どうする事も出來ない。男とちがつて女の身になれば何ぼ何でも前齒の二本も抜けた顔を、良人ばかりか、始めて逢ふ良人の友達には見せたくない。今朝から二三軒近所の齒醫者へ行つて見たけれど、折惡く震災紀念日でいづれも休業してゐるので困りきつた擧句先生の事を思出して、御迷惑だとは思ひながら療治をおたのみ申しに來たと菊子は自分ながらよくもかう噓言がつけると思ふほどべらべら饒舌りつゞけた。

「さうですか。それはさぞお困りでしたらう。」と秋山は煙にまかれた樣子。「兎に角、それでは鳥渡拜見しませう。」

「こんな時間に伺ひまして、ほんとに濟みませんですわねえ。」菊子は安堵すると共に俄かに自分の姿に氣がついたものか、絽縮緬の夏羽織を深く引合せて浴衣の襟元から膝のあたりを隱した。

「菊子さん。ぢやこちらへ。」と秋山は椅子から立つて菊子を隣の治療室へ案内して回轉椅子へ腰をかけさせた。

秋山が先刻助手の兒島と話をしてゐた時、兒島は今夜おそくも麹町の親戚の許へ用談に行くやうな事を話つてゐたの

で、今俄に菊子の療治をたのむのも氣の毒だと思ふし、又自分とは何をいふにも十年前に關係のあつた事など思返すと、今夜のところはどうも逃げられない場合とあきらめる外はない。久しく患者の治療をした事がないので一層面倒な氣はするもゝの秋山は已む事を得ず手づから菊子の入齒をつくりはじめた。入齒は元より今夜だけ體裁をつくらふべき臨時のものであるが、それでも相應に手間がかゝる。玄關の柱時計は早くも十時を打つた。兒島は妻をつれて出て行つたなりまだ歸つて來ないらしく家の内は物音なく寂としてゐる上に、近所一帶も震災後まだ空地の多いせいか、町中とは思はれないほど靜で、築地の橋を渡る電車の響ばかりが耳立つて聞える。

菊子は治療椅子の上に腰をかけてゐるが、椅子はグット後へ反つてゐるので、兩脚を踏臺の上に踏みのばした身體は、殆ど仰向きに臥かされたのも同じことで其の眼は天井と硝子窓の片隅を見得るばかり。欠伸の出掛るのをやつと嚙込める時分になると頸と腰とが大分痛くなつて來るが、仰向けにされた身體はどうとも動すことが出來ない。菊子は窓の外に釣つた糸瓜の棚から糸瓜が二ツ下つてゐるのと、夜風が時々糸瓜の白い仇花を吹落すのを、せめて眼の遣り場にしてゐたが、する中に踏台の上に踏み延した足の踵をしたゝか蚊に刺された。初は我慢してゐたが、又つゞいて足の小指をさゝれたのにたまりかねて、菊子は身を悶へながら足先を動かすたび〳〵……………………

……………………氣遣はれてならぬ程になつたものゝ、さて胸の上に白い布をかけられ治療椅子の上に載せられてゐる身は療治の濟んでしまふまでは起き上るわけにも行かず獨りひそかに氣をもむより仕樣がない。兎角する中秋山はやつと入齒の座を削り了つた、先刻からアルコールランプの火勢に顏をあふれてゐる暑さにほつと息をつく折しも涼しい夜風がさつと一吹窗から吹き入つたのに、秋山は何心もなく窗の方へと眼を向けると、……………………

……………………。……………………、……………………

……………………、……………………、……………………、

菊子は其時分まだ栄

色の袴をはいて折々歯の療治に來た…………………………………………當時の光景である。

秋山はもと〳〵名望のあつた蘭方醫の家に生れ、明治廿年頃には早く米國に留學し歯科醫學を修めて歸朝したので今では同業者の間には古老の一人として尊敬されてゐる。人品も賤しからず性質も極めて恬淡であるが酒と女には目がないので、これまで度々新聞なぞに醜行を發かれた事があるが、それさへさして氣には留めず、既に六十も半越してゐながら今もつて遊びに行く。遊びに行けば…………………………………………無理な注文をする。實はこの夜も助手の兒島と用談をすましてから、その歸途にはつい此頃に假普請をした××××××へ一人こつそり立寄つて見るつもりのところ。突然菊子の來訪を受け入歯の細工に時間をとられて、折角の計畫もどうやら空しくなりかけ、内心大きにやきもきしてゐるのであつた。

「具合はどうです。今夜はほんの間に合せですからな。大坂からお歸りになつてからゆつくり直しませう。」と秋山は手づから含嗽のコップを菊子にすゝめて白い布を取り除いた。その時にはもうかれこれ十一時近くであつた。

菊子は治療椅子の腕木についた兩手に少し力を入れて起き上りながら、「こんなに晩く御無理を願ひまして、ほんとに濟みません。」

「唯今、お住居はどちらです。」

「赤坂に居ります。」

「定めし、もう御子さんが御ありなさるでせう。お樂しみですな。」

「ほしいと思ひますけれど、まだ一人も出來ません。」

「さうですか。いや、それも結構です。お子さんが出來ると女の方はどうしても老けますからな。失禮ですが、おいくつにおなりでしたな。」

「もう、ちき三十で御在ますよ。もう駄目で御在ますよ。」

「お若く見えますな。どう見ても二十三四にしかお見えになりません。」

　秋山は菊子の姿からどうしても目をはなす事ができないと云ふやうに、眼鏡越しに髪から爪先まで見上たり見下したりしてゐたが、やがて菊子が、「先生。それでは又その中に……。」と腰をかゞめたのに、秋山はわれを忘れて菊子の手を取らぬばかり進み寄つた。

「菊子さん。自働車をさう言ひませう。もう大分おそいやうですから。イヤ、どうせ、ついでゝす。震災から中野へ引移してゐるんですから。お差支がなければ御宅の御近所まで御送りします。お差支がなければ。」

　秋山は助手の兒島夫婦のまだ歸つて來ないのを幸に電話で近所のタクシーを呼寄せ、もぢ〳〵してゐる菊子を勸めてとう〳〵車に載せた。

九

　震災一週年の當日には丸ビルの事務所も休みなので、旦那の犬塚は細君の手前を憚りその日は妾宅へは來ないことになつてゐた。それ故菊子は夜も既に一時を過ぎてゐたけれど犬塚の事は全く心に留めず、唯留守の中物を盗まれはせぬかとそればかり心配しながら勝手口の雨戸を明け、急いで茶の間へ進み入らうとすると、火のない長火鉢の前に思ひもかけぬ旦那の犬塚が胡坐をかいてゐるのにびつくりしてアラ、と叫ぶ聲さへも出ず、明けかけた障子へつかまつたまゝ立ちすくんでしまつた

　犬塚の方もだまつたまゝで、あまりの腹立しさに何一言怒鳴りつける言葉さへ出ず、危く飛掛らむばかり居合腰になつて唯菊子の顔を睨みつけてゐるばかりであつた。

犬塚は菊子が寢床から飛起きて齒醫者へ出掛けると間もなく、入れちがひに來たのであつた。然るに表の格子戸はまだ宵の口なのにいつもとちがつて雨戸が締つてゐるのを見て、まづ不審な氣を起し、それから、幾度戸を叩いて見ても返事がないのに腹を立てながら勝手口へ廻つて雨戸を引明け家の内へ入つて見ると電燈がついてゐるばかりで菊子も老婢も居ないのに暫くは呆氣に取られてゐたが、やがて二階の六疊に敷延べてあつた布團と蹴返したやうになつた搔卷と投出したやうになつてゐる枕のさま。それから菊子が四谷の家へ着て行つた金紗の單衣に羽二重の下袴やら何やらが疊みもせずに簞笥の前に散亂してゐた有樣を仔細に見て、犬塚はてつきり斯うだと考へてしまつた――菊子は自分の來ない日を窺つて、老婢を使に出し……………………大方電車通のあたりまで出て行つたのであらう。拔ぎすてゝある着物と敷きツばなしにしてある布團の樣子なぞから推測するに、菊子は此のまゝ夜中歸つて來ないと云ふ筈はない。待つてゐたらその中には歸つて來るにちがひない。歸つて來たらひどい目に逢はして白狀させてやらなければ承知ができない……。

「菊子。立つてゐずと、こゝへ坐れ。」と犬塚は火箸を取つて疊を叩き、「殺しやしないから坐れ。」

この劍幕に菊子の方でも覺悟をしたものか「はい」と言つて、素直に犬塚の前へ坐つた。

「綺麗に白狀してしまへ。貴樣はどこへ行つて何をして來やがつた。」

「わたし何にもしやしません。お醫者さまへ行きました。」

「馬鹿言へ。貴樣……………………。」

「いゝえ。わたし齒醫者へ行つたんです。」

「うそをつくな。白狀してしまへ。おとなしく白狀すれば勘辨してやる……。」

「だつて、さうぢやないんですもの。」

「きつとさうでないのか。それなら貴樣、潔白だといふ證據を見せろ。」

「そんな證據……。」

「見せられなければ乃公が見てやる…………。」と犬塚は中腰に立ちかけたので、菊子は……………………………、

「あなた。そんな馬鹿な………。」

「何が馬鹿だ……。」言ひさま犬塚は強く菊子の肩を突いた。

……………………………………………………「……」……………………………

……………、………………………………。

菊子は口惜しさにいつまでも身を顫しながら泣聲になつて、「さア、あなた。撲つなり殺すなり勝手にして下さい。あなた一人が男ぢやないんですからね。」

「事がわかれば、それでいゝんだ。お前なんぞ撲つて見たつて仕様がない。」

犬塚は一時その場の腹癒(はらいせ)さへしてしまへば、それでもう氣がすんだのだと云ふ風で、長火鉢の前に坐り直つて、莨を啣へながら髮の分け目を撫で直してゐる。この樣子に少し張合拔けがして、菊子は思出したやうにつと立つて厠に行き、がたぴしと襖障子へ當り散して、又もとの茶の間へ立戻つて來たが、さて二人とも口をきく機會がない。菊子は再び立つて二階へ上りかけた。

「老婢は一體どこへ行つたんだね。今夜は歸つて來ないのかね。」犬塚はやつと話題を見付け出して殊更穩な調子で問ひかけたが、菊子は聞えない風でかまはず梯子を上る。

「おい。さういつまでも怒るなヨ。…………。夜が明けてしまふ。」

それでも菊子は猶返事をせず。犬塚が立つて梯子段の下まで行つた時には菊子はもう上りきつて、しかも出入口の障子をぴしやりと閉めた。

「仕様のない奴だ。」と後からのそ〱上つて行つた犬塚は菊子の手を取つて、「おい、もう好加減にしろよ。」

「あなたこそ好加減になさい。」と取られた手を軽く振拂つて、…………………………………………顔をかくしてしまつた。

「おれの××はどこにあるんだ。」

「わたしは汚い女ですよ。…………………………。」

「さういつまでも怒るなといふのに。お前もあんまりしつッこいよ。」

菊子は返事も身動きもしない。犬塚は何とかして機嫌を取つてやりたくも取りやうがないので、枕元に坐つたまゝ、暫く様子を見てゐたが、菊子は別に泣いてゐるのでもなく、唯飽くまで情ない振りを仕通さうとしてゐるらしいので、犬塚もとうとう我慢がしきれなくなつて、菊子が顔を蔽ひかくしてゐる××を突然に剝ぎのけ

「おい。一寸起きてくれ。貴様。それほどおれがいやなら。もうよさう。よした方がいゝだらう。」

「さうですか。わかりました。」

「何がわかつたんだ。」

「何も彼もわかりましたよ。ぢや、わたし夜が明けたら荷ごしらへをして出て行きます。」

「うむ。お前の方からさつぱり切り出してくれりア、それに越した事はない。その代り先月買つてやつたダイヤの指環は返して貰ひたいね。こゝへ家を持たしてからまだ半年にもならないんだからな。何ぼおれが甘く出来てゐてもさう〱馬鹿にはされたくないからな。お前の姿顔ならそんな指環くらゐ誰にだつて買つて貰へるだらう。おれはしみつたれの壺

久地なしだ。」と犬塚は掌を差出して、「さア返してくれ。」

菊子はあまりの事にあきれ返つてしばらくは男の顔を見詰めたまゝ何とも言ふことができなかつた。菊子は……………………………………………………………、……………………………。…………………、……………………………………、………………………………………………………。……………………………………………………………然し一度立派に買つてやつた物を後から文句をつけて取返して行かうといふやうな卑怯な冷酷な男にはまだ一人も出會つたことがなかつた。と思へば、今まで曾つて覺えた事のない口惜しさと腹立しさとに菊子は殆ど夢が夢中で藥指にはめた指環を拔取つて男の顏へ打付けると共に！！しがみついて聲を呑んで泣き沈んだ。

犬塚はバタリと後の障子へ當つて疊の上に轉げ落ちた指環を拾ひ取つて梯子段を降りたが、もう斯うなつてはさすがに氣まづくなつて長居をするわけにも行かないので、まだ洋服を着換へずにゐたのを幸ひ、靴の紐も結ばずに外へ出た。夜はしん／＼と深け渡つてゐる最中で、芥箱のかげに鳴く蟋蟀の聲と、桐畑の大溝を流れる下水の音が物さびしく聞えて露を含んだ風が身にしみるばかり。牛乳や新聞の配達人もまだ通らず、いづこを見ても起きてゐる自働車屋はないらしいので、犬塚は行く當もなく歩きながらヅボンのかくしに入れた指環を出して藥指に嵌めてみたが堅くて嵌まらないので小指に差換へたが、さて今となつて見れば一時の行きちがひとは云ひながら、此れ程までにしてやらずとも、何とか外にしやうがあつたかも知れない。今の中立戻つて指環は返してやらうかとも思ひ、又斯うなつた曉には、唯さへ強情な負けぬ氣の女のこと、指環を返したとて素直に心好く普通の取扱をする氣遣はない。わるくすると指環は返し損になつてしまはないとも限らない。まあ二三日たつて樣子を見てからにした方がよい……いろ／＼に考へながら歩いて行く中客を送つた歸りと覺しい一輛の自働車に行當つた。犬塚は片手を上げて呼び留め、

「おい。牛込まで行け。」

「はい。牛込はどの邊で御座います。」

一神樂坂。毘沙門の横町だ。」

十

その夜は泣寢入に寢入つてしまつた翌朝、菊子は目をさますが否や第一に指環のことを思返して今更の如く片手の指を揃へて見て言ひ知れぬ淋しさを覺えた。

菊子は實のところダイヤモンドの指環を取られたのが、着物よりも髮の物よりも何よりも惜しかつたのである。あの場合、指環を返せと言はれた時、菊子はハツと思ふと共に腹の底を見すかされはせまいかと意地になつて、わざと何の惜し氣もなく拔き棄てゝしまつたのであるが、今になつて見れば何故あの時、こればかりはいやだと言つて、いつものやうに子供らしく駄々を捏ねなかつたのであらう。どうせ別れるなら此の指環だけはあなたの形見にしたいからとか何とか口馴れた殺文句を言はなかつたのであらうと、いろ／＼に思返せば返すほど殘念でならない。然しいかほど殘念に思つても一度取上げられた指環の戻つて來やう筈はない。犬塚はあの指環を細君にやらなければ誰か外の女に贈るにちがひないと思へば、菊子は昨夜よりも一層口惜しさが増して來て、此の返報にはどんな事をしてやらうかと齒ぎしりをした。

もうちき正午になるのかも知れない。家の外には近所の者が洗濯をする水の音やら、御用聞、物賣の聲なぞが聞え、表通りは自働車の通過ぎる響が頻繁になつて來たが、菊子はまだ寢床から起きやうともせず、犬塚への腹癒せをいろ／＼に考へた末、取上げられたダイヤモンドよりも一倍大きなものを嵌めてこれ見よがしに見せつけてやるのが一番痛快だと思ひ定めた。

仕度もそこ／＼に家中の雨戸はしめたまゝにして、菊子は簞笥の鍵を帶の間に收め直しながらふいと家を飛出し、まづ

何かの相談にと、牛込赤城の横町に間借りをしてゐる宮田といふ女をたづねやうと電車に乗つたが、ふと宮田は以前犬塚の家の書生であつた上村とは今だに………ないらしい事を思出し、途中から道を轉じて小日向水道町の松濱と云ふ結婚媒介所の主婦をたづねる事にした。もし主婦が留守であつたら、すぐに富士見町の白ふじと云ふ××へ廻つて其の家の主婦に相談をしよう。震災前竹原といふ………………いつとなく其の主婦とも懇意になり、………………………………………あつたのだ。相談相手の誰彼を、それからそれと考へながら歩く中案外早く水道端へ出た。見れば震災後もつひ此間まで立つてゐた古ぼけた澁塗の塀重門はとう〳〵腐つてしまつたものと見えて引ちがひの戸をつけた普通の新しい門になり、其の表札も陶器で松濱寓としてある。松濱の主婦は若い時分には看護婦を表面の營業にして、その實は、此の社會の隱語にいふマッサージとやらを得意にして金を蓄め、六七年前から結婚媒介所を開いて、新聞の案内欄には絶えず、「親切本位絶體秘密、迅速に何事の御相談にも應じます。」と云ふやうな廣告を出してゐる。

主婦は菊子を迎へて、「まアお珍しいこと。ちらかつてゐますけれど、家中でこゝが一番凉しいんですよ。」とわざと心やすく茶の間らしい一間の緣側へ座布團を敷いて、庇の簾を捲き上げた。

「おばさん。今日は少し折入つて御賴みしたい事があるのよ。」

菊子はどうしても今日中に參百圓なくてはならない事があるので、萬一出來なければ其の中の幾分でもよいから貸して貰ひたい。またをばさんの知つてゐる人で金を貸すものがあるなら世話をしてくれるやうにと賴んだ。菊子は犬塚の取上げて行つた指環の代價は參百圓であつたので、まづその參百圓をこゝの家で周旋して貰へたなら、それに昨夜秋山から貰つた懷中の〇圓をも加へて、早速今日の日の暮れない中に指環が買ひたいと無暗に急いでゐる。主婦はしづかに菊子の樣子を見やりながら、

「よう御座んす。その位の事なら、どうにか出來ない事もないでせうよ。此頃は景氣も一帶にわるい方ぢやないからね。月に〇〇〇位出さうといふお客はざらにあるんだからね。然しさういふお客は時節柄半ズボンをはいてゐる土木の御連中だからね、それさへ承知の上なら、今はさう云つちや何だけれど…………。」

「おばさん。ほんとにお願しますわ。是非とも無くツちやならない事があるんだから……わたしもう、ほんとに擇り好(よりこの)みなんぞしちやゐられないんだから。」

その時この家の主人松濱千太郎と云ふ五十年配の男が外から歸つて來た。出來合ひらしい鼠地の古ぼけた背廣に、年齡(とし)には不釣合なほど華美(はで)なネキタイをしてゐるのは大方他から貰つた進物か何かであらう。頬骨の出た眼の鋭い顔立と共に、身體(からだ)も小づくりで痩せてはゐるがどことなく頑丈なので、いかにも拔け目のない敏捷な男のやうに見える。菊子とは既に知り合ひの間と見えて、

「しばらくです。どうなすつたかと思つてゐました。」

「つい。御無沙汰をいたしました。」

主婦は千太郎が背廣の上衣だけをぬいで坐るのを待ち、「菊子さんが參百圓、急に入り用だと仰有るんだけれど、………………………。あなた。電話をかけて聞いて見てくださいな。」

「うむ。さう。」と頷付きながら千太郎は何か仔細あり氣に菊子の樣子を見てゐたが、「實はわたしの方にもいゝ話があるんだ。これは菊子さんのお姿を拜したんで急に思ひ出したことなんだが、一層その方がよかアないかと思ふんだがね。」

「一體それアどんなはなしなの。」

「おとゝひ築地で西島のかみさんに逢つて頼まれたはなしなんだがね。………………………といふお客が多いんで、西島のかみさんは××や××の×××に似てゐる女をさがして、………………大分儲けたと云ふはなしな

んだ。お客の方ぢや寫眞で見てゐるばかり實物は見たことがないんだから、顔立が鳥渡寫眞に似てさへゐれば…………………………。」

千太郎は膝を進めて菊子の樣子なり顔立なり目下××××××××××××××で評判の高いなにがしに瓜二つであるから、もし菊子が承知とあれば今すぐにも先方へ紹介をしやう。首尾好く行くことは言はずと知れてゐるから金子はこゝで先に立替へて置いてもよいと、折革包を引寄せ××の繪端書を幾枚も取出した中から一枚を差出して、「これだ。まア御覽なさい。菊子さんそつくりでせう。どうです。不思議ぢやありませんか。はゝゝゝ。」千太郎は笑ひながら猶…………………と、××の××の現住所、兩親、經歷なぞ既に調査してある書類を取出して菊子に讀み聞かせた。

十一

菊子は望み通りの指環を買つた。そして飽くまで犬塚への面當に、赤坂の妾宅をも引拂つてしまつたものゝ、速急の場合、荷物のやり處に困つて松濱の家へあづけ、その身は呼ばれるがまゝに急いで築地の西島といふ家へ行つたが、するとこゝには三四人も…………あるばかりか、晝夜客の出入があまりに烈しい樣子に、菊子は内心危險だと感じたけれど、何を云ふにも松濱には借金の義理があり、又現在は次から次へと話を持込まれるので、貸間をさがしたいにも其の暇がなく、それなり泊り込むつもりもなく、うか〳〵と五六日泊つてしまつた。その間に聞くともなく樣子を聞いて見れば、西島と云ふ家は二十年以來濱町から淺草向島邊諸處方々で日陰の商賣をしつゞけて來たものだといふ事がわかつたので、菊子は膽をつぶし今夜かぎり翌日は何と言はれても逃げ出さなくてはならないと決心した。その夜の十時頃、其の筋の檢擧に遭つて所轄の警察署に拘留せられた。

十二

合資會社普及舍といふ廣告取扱所の支配人永島は同業の知人二三名と五郎兵衛町なる店の近くのカツフエーで食事をしながら、

「あの女は震災前から知つてゐるんだ。震災で一時麻布の六本木へ事務所を移した時分、〇〇やつて愛宕下の貸間に置いといた事もあるんだが……とう〳〵やられたな。」

「寫眞で見てもなか〳〵美人ぢやあないか。」

「一寸見せたまへ。」と他の一人が新聞を取つて記事の間に摺込んだ菊子の寫眞を見る。記事は菊子と其の連累者一同の逮捕せられた事件である。

「××も××も變つた事はありアしない。警察はどういふわけで、××の方は寛大にして××ばかり取締らうとするんだらう。××がだん〳〵廢つて××が流行り、××が下火になつて××が流行り出すのは時代の趨勢で仕方がない。徹底的に××を一掃しやうと言つても到底一掃し得られるものぢやないぜ。」

「それだから、何も根本的に××を一掃するつもりで檢擧するわけでもないだらう。」

「それなら檢擧せずとも放任しておいたつて差支はないだらう。さほど目に立つて社會の風俗を亂さないかぎり、××に對するのと同じ程度に、相應の取締をしてゐたら、それでよさゝうなものだ。僕は別に××の肩を持つわけぢやないが、現代の世相を觀るに風敎に害をなすものは××よりも寧ろ他の方面に多いのだ。××の害なんぞは實際言ふに足らむよ。」

「それは君の言ふ通り。官吏議員なんかの收賄なぞに比較したら××の弊害などは微々たるものさ。然しさうかと云つて××を罰せずに置くといふ事は行政上出來ない事ぢやないか。××の檢擧はこれを根絶するために行ふのぢやアない。まだ

××になりきらず、墮落の中途に彷徨してゐる女を恐怖せしめ、反省せしめるために行ふものとすれば大に有効だらう。一人を罰してそれに似寄つた五人を救ふことができれば策の得たるものぢやないか。」

「懲罰が他人への見せしめにするものなら、現代の禁令よりも江戸時代のむかしの方が遙にいゝぜ。××は逮捕して吉原へ送つて二年でも三年でも公娼にさせた方が遙に見せしめになる。日本橋へ晒し者にするもよからう。滿洲とかブラヂルとか遠い植民地へ流し者にするのも一策だらう。」

「イヤつまる處何事も習慣だよ。××××××××と見るのは因襲に過ぎない。」

「それは暴論だ。」

「暴論ではない。道德は時代につれて變つて行くものだからな。今日では教育も學問も才藝も、要するに金で賣買する商品も同じ事になつてしまつたんだからな。…………技藝家が技藝を售り文士が文章を售るのと少しもかはりは無い。其の弊害から論じても、さういふ×に接近する者は既に成人した男か或は老人だらう。小學校の子供にくだらん雜誌なんぞを賣りつけるよりもましだ。人の子を賊するよりも罪は輕い。この頃の藝人や役者を見たまへ。下手ッ糞な藝を恥とも思はずれい〳〵しく切符を押賣してあるくではないか。それに比べたら白粉に年の皺をかくして柳のかげに立ちすくむ辻君の方がまだしも恥と云ふ事を知つてゐる。」

「とう〳〵辻君のはなしになつた。辻君のたへぬ流の思ひ川かね。」

「この間ある處で面白い辻君の唄をおそはつたよ。之は富本の紅葉傘時雨振袖と云ふ淨瑠璃の中にあるんださうだ。その唄は『辻君とゆふべ〳〵の仇枕、闇がうれしうて月夜がにくい。さつても塗つた下駄の歯も、かけながしなる戀なれば、……………枕さへ、馴染かさねて暮六ツの時分も丁度吉田町、つい手拭も鼻の先、其の約束で今朝はやう、來さんす筈ぢやないかいなと、唄はんしやんした一節に、しみ〳〵はまる井の堀の、外は馴染と切通し、肌と肌とは鮫が橋、釆女が

原のたつことも、顏見りやいつか直助と、氣も知りながらあんまりな、むごい仕方と夕化粧、落る涙もわる紙が口說の中や直すらむ。」といふのさ。」

「はゝゝゝ。」

笑ひながら一人が時計を見たので、それを機會にいづれも食卓を立つて帽子を取つた。



冬と手紙と

芥川龍之介

一 冬

僕は重い外套にアストラカンの帽をかぶり、市ケ谷の刑務所へ歩いて行つた。僕の從兄は四五日前にそこの刑務所にはひつてゐた。僕は從兄を慰める親戚總代に外ならなかつた。が、僕の氣もちの中には刑務所に對する好奇心もまじつてゐることは確かだつた。

二月に近い往來は賣出しの旗などの殘つてゐたものの、どこの町全體も冬枯れてゐた。僕は坂を登りながら、僕自身も肉體的にしみじみ疲れてゐることを感じた。僕の叔父は去年の十一月に喉頭癌の爲に故人になつてゐた。それから僕の遠縁の少年はこの正月に家出してゐた。それから——しかし從兄の收監は僕には何よりも打擊だつた。僕は從兄の弟と一しよに最も僕には縁の遠い交渉を重ねなければなら

なかつた。のみならずそれ等の事件にからまる親戚同志の感情上の問題は東京に生まれた人々以外に通じ悪いこだわりを生じ勝ちだつた。僕は從兄と面會した上、兎も角どこかに一週間でも靜養したいと思はずにはゐられなかつた。……

市ケ谷の刑務所は草の枯れた、高い土手をめぐらしてゐた。のみならずどこか中世紀じみた門には太い木の格子戸の向うに、霜に焦げた檜などのある、砂利を敷いた庭を透かしてゐた。僕はこの門の前に立ち、長い半白の髯を垂らした、好人物らしい看守に名刺を渡した。それから餘り門と離れてゐない、庇に厚い苔の乾いた面會人控室へつれて行つて貰つた。そこにはもう僕の外にも薄縁りを張つた腰かけの上に何人も腰をおろしてゐた。しかし一番目立つたのは黑縮緬の羽織をひつかけ、何か雜誌を讀んでゐる三十四五の女だつた。

妙に無愛想な一人の看守は時々かう云ふ控室へ來、少しも抑揚のない聲に丁度面會の順に當つた人々の番號を呼び上げて行つた。が、僕はいつまで待つても、容易に番號を呼ばれなかつた。いつまで待つても――僕の刑務所の門をくぐつたのは彼是十時になりかかつてゐた。けれども僕の腕時計はもう一時十分前だつた。

僕は勿論腹も減りはじめた。しかしそれよりもやり切れなかつたのは全然火の氣と云ふもののない控室の中の寒さだつた。僕は絶えず足踏みをしながら、苛々する心もちを抑へてゐた。が、大勢の面會人は誰も存外平氣らしかつた。殊に丹前を二枚重ねた、博奕打ちらしい男などは新聞一つ讀まうともせず、ゆつくり蜜柑ばかり食ひつづけてゐた。

しかし大勢の面會人も看守の呼び出しに來る度にだんだん數を減らして行つた。僕はとうとう控室の前へ出、砂利を敷いた庭を歩きはじめた。そこには冬らしい日の光も當つてゐるのに違ひなかつた。けれどもいつか立ち出した風も僕の顏へ薄い塵を吹きつけて來るのに違ひなかつた。僕は自然と依怙地になり、兎に角四時になるまでは控室へはひるまいと決心した。

僕は生憎四時になつても、まだ呼び出して貰はれなかつた。のみならず僕よりも後に來た人々もいつか呼び出しに遇つ

たと見え、大抵はもうゐなくなつてゐた。僕はとうとう控室へはひり、博奕打ちらしい男にお時宜をした上、僕の場合を相談した。が、彼はにこりともせず、浪花節語りに近い聲にかう云ふ返事をしただけだつた。

「一日に一人しか會はせませんからね。お前さんの前に誰か會つてゐるんでせう。」

勿論かう云ふ彼の言葉は僕を不安にしたのに違ひなかつた。僕は又番號を呼びに來た看守に一體從兄に面會することは出來るかどうか尋ねることにした。しかし看守は僕の言葉に全然返事をしなかつた上、僕の顏も見ずに歩いて行つてしまつた。同時に又博奕打ちらしい男も二三人の面會人と一しよに看守のあとについて行つてしまつた。僕は土間のまん中に立ち、機械的に卷煙草に火をつけたりした。が、時間の移るにつれ、だんだん無愛想な看守に對する憎しみの深まるのを感じ出した。（僕はこの侮辱を受けた時に急に不快にならないことをいつも不思議に思つてゐる。）

看守はもう一度呼出しに來たのは彼是五時になりかかつてゐた。僕は又アストラカンの帽をとつた上、看守に同じことを問ひかけようとした。すると看守は横を向いたまま、僕の言葉を聞かないうちにさつさと向うへ行つてしまつた。「餘りと言へば餘り」とは實際かう云ふ瞬間の僕の感情に違ひなかつた。僕は卷煙草の吸ひさしを投げつけ、控室の向うにある刑務所の玄關へ歩いて行つた。

玄關の石段を登つた左には和服を着た人も何人か硝子窓の向うに事務を執つてゐた。僕はその硝子窓をあけ、黒い紬の紋つきを着た男に出來るだけ靜かに話しかけた。が、顏色の變つてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。

「僕はTの面會人です。Tには面會は出來ないんですか？」

「番號を呼びに來るのを待つて下さい。」

「僕は十時頃から待つてゐます。」

「そのうちに呼びに來るでせう。」

「呼びに來なければ待つてゐるんですか？　日が暮れても待つてゐるんですか？」

「まあ、兎に角待つて下さい。兎に角待つた上にして下さい。」

相手は僕のあばれでもするのを心配してゐるらしかつた。僕は腹の立つてゐる中にもちよつとこの男に同情した。「こつちは親戚總代になつてゐれば、向うは刑務所總代になつてゐる、」――そんな可笑しさも感じないのではなかつた。

「もう五時過ぎになつてゐます。面會だけは出來るやうに取り計つて下さい。」

僕はかう言ひ捨てたなり、ひとまづ控室へ歸ることにした。もう暮れかかつた控室の中にはあの丸髷の女が一人、今度は雜誌を膝の上に伏せ、ちやんと顏を起してゐた。まともに見た彼女の顏はどこかゴシックの彫刻らしかつた。僕はこの女の前に坐り、未だに刑務所全體に對する弱者の反感を感じてゐた。

僕のやつと呼び出されたのは彼是六時になりかかつてゐた。僕は今度は目のくりくりした、機敏らしい看守に案内され、やつと面會室の中にはひることになつた。面會室は室と云ふものの、精々二三尺四方ぐらゐだつた。のみならず僕のはひつた外にもペンキ塗りの戸の幾つも並んでゐるのは共同便所にそつくりだつた。面會室の正面にこれも狹い廊下越しに半月形の窓が一つあり、面會人はこの窓の向うに顏を顯はす仕組みになつてゐた。

從兄はこの窓の向うに、――光の乏しい硝子窓の向うに圓まると肥つた顏を出した。しかし存外變つてゐないことは幾分か僕を力丈夫にした。僕等は感傷主義を交へずに手短かに用事を話し合つた。が、僕の右隣りには兄に會ひに來たらしい十六七の女が一人とめどなしに泣き聲を洩らしてゐた。僕は從兄と話しながら、この右隣りの泣き聲に氣をとめない訣には行かなかつた。

「今度のことは全然冤罪ですから、どうか皆さんにさう言つて下さい。」

從兄は切り口上にかう言つたりした。僕は從兄を見つめたまま、この言葉には何とも答へなかつた。しかし何とも答へ

なかつたことはそれ自身僕に息苦しさを與へない訣には行かなかつた。現に僕の左隣りには斑らに頭の禿げた老人が一人やはり半月形の窓越しに息子らしい男にかう言つてゐた。

「會はずにひとりでゐる時にはいろいろのことを思ひ出すのだが、どうも會ふとなると忘れてしまつてな。」

僕は面會室の外へ出た時、何か從兄にすまなかつたやうに感じた。が、それは僕等同志の連帶責任であるやうにも感じた。僕は又看守に案内され、寒さの身にしみる刑務所の廊下を大股に玄關へ歩いて行つた。

或山の手の從兄の家には僕の血を分けた從姉が一人僕を待ち暮らしてゐる筈だつた。僕はごみごみした町の中をやつと四谷見附の停留所へ出、滿員の電車に乘ることにした。「會はずにひとりゐる時には」と言つた、妙に力のない老人の言葉は未だに僕の耳に殘つてゐた。それは女の泣き聲よりも一層僕には人間的だつた。僕は吊り革につかまつたまゝ、夕明りの中に電燈をともした麹町の家々を眺め、今更のやうに「人さまざま」と云ふ言葉を思ひ出さずにはゐられなかつた。

三十分ばかりたつた後、僕は從兄の家の前に立ち、コンクリイトの壁についたベルの鈕へ指をやつてゐた。かすかに傳はつて來るベルの音は玄關の硝子戸の中に電燈をともした。それから年をとつた女中が一人細目に硝子戸をあけて見た後、「おや……」何とか間投詞を洩らし、すぐに僕を往來に向つた二階の部屋へ案内した。僕はそこのテエブルの上へ外套や帽子を投げ出した時、一時に今まで忘れてゐた疲れを感じずにはゐられなかつた。女中は瓦斯暖爐に火をともし、僕一人を部屋の中に殘して行つた。多少の蒐集癖を持つてゐた從兄はこの部屋の壁にも二三枚の油畫や水彩畫をかゝげてゐた。僕はぼんやりそれら等の畫を見比べ、今更のやうに有爲轉變などと云ふ昔の言葉を思ひ出してゐた。

そこへ前後してはひつて來たのは從姉や從兄の弟だつた。從姉も僕の豫期したよりもずつと落ち着いてゐるらしかつた。僕は出來るだけ正確に彼等に從兄の傳言を話し、今度の處置を相談し出した。從姉は格別積極的にどうしようと云ふ氣も持ち合せなかつた。のみならず話の相間にもアストラカンの帽をとり上げ、こんなことを僕に話しかけたりした。

「妙な帽子ね。日本で出來るもんぢやないでせう？」
「これ？　これはロシア人のかぶる帽子さ。」
しかし從兄の弟は從兄以上の「仕事師」だけにいろいろの障害を見越してゐた。
「何しろこの間も兄貴の友だちなどは××新聞の社會部の記者に名刺を持たせてよこすんです。その名刺には口止め料金のうち半金は自腹を切つて置いたから、殘金を渡してくれと書いてあるんです。それもこつちで檢べて見れば、その新聞記者に話したのは兄貴の友だち自身なんですからね。勿論半金などを渡したんぢやない。唯殘金をとらせによこしてゐるんです。その又新聞記者も新聞記者ですし、………」
「僕も兎に角新聞記者ですよ。耳の痛いことは御免蒙りますかね。」
僕は僕自身を引き立てる爲にも常談を言はずにはゐられなかつた。が、從弟の弟は酒氣を帶びた目を血走らせたまま、演說でもしてゐるやうに話しつづけた。それは實際常談さへうつかり言はれないのに違ひなかつた。
「おまけに豫審判事を怒らせる爲にわざと判事をつかまへては兄貴を辯護する手合ひもあるんですからね。」
「それはあなたからでも話して頂けば、………」
「いや、勿論さう言つてゐるんです。御厚意は重々感謝しますけれども、判事の感情を害すると、反つて御厚意に背きますからと頭を下げて賴んでゐるんです。」
從姉は瓦斯暖爐の前に坐つたまま、アストラカンの帽をおもちやにしてゐた。僕は正直に白狀すれば、從兄の弟と話しながら、この帽のことばかり氣にしてゐた。火の中でも落されてはたまらない。――そんなことも時々考へてゐた。この帽は僕の友だちのベルリンのユダヤ人町を探がした上、偶然モスクワへ足を伸ばした時、やつと手に入れることの出來たものだつた。

「さう言つても駄目ですかね?」

「駄目どころぢやありません。僕は君たちの爲を思つて骨を折つてゐてやるのに失敬なことを言ふなと來るんですから。」

「成程それぢやどうすることも出來ない、」

「どうすることも出來ません。法律上の問題には勿論、道德上の問題にもならないんですからね。兎に角外見は友人の爲に時間や手數をつぶしてゐる、しかし事實は友人の爲に陷し穽を堀る手傳ひをしてゐる、――あたしもずゐぶん奮鬪主義ですが、ああ云ふやつににかかつては手も足も出すことは出來ません。」

かう云ふ僕等の話の中に俄かに僕等を驚かしたのは「T君萬歲」と云ふ聲だつた。僕は片手に窓かけを擧げ、窓越しに往來へ目を落した。狹い往來には人々が大勢道幅一ぱいに集つてゐた。のみならず××町靑年團と書いた提灯が幾つも動いてゐた。僕は從姉たちと顏を見合せ、ふと從兄には××靑年團々長と云ふ肩書もあつたのを思ひ出した。

「お禮を言ひに出なくつちやいけないでせうね」

從姉はやつと「たまらない」と云ふ顏をし、僕等二人を見比べるやうにした。

「何、わたしが行つて來ます。」

從兄の弟は無造作にさつさと部屋を後ろにして行つた。僕は彼の奮鬪主義に或羨しさを感じながら、從姉の顏を見ないやうに壁の上の畫などを眺めたりした。しかし何も言はずにゐることはそれ自身僕には苦しかつた。と云つて何か言つた爲に二人とも感傷的になつてしまふことはなほ更僕には苦しかつた。僕は默つて卷煙草に火をつけ、壁にかかげた畫の一枚に、――從兄自身の肖像畫に遠近法の狂ひなどを見つけてゐた。

「こつちは萬歲どころぢやありはしない。そんなことを言つたつて仕かたはないけれども……」

從姉は妙に空ぞらしい聲にとうとう僕に話しかけた。

「町内ではまだ知らずにゐるのかしら？」

「ええ、………でも一體どうしたんでせう？」

「何が？」

「Tのことよ。お父さんのこと。」

「それはTさんの身になつて見れば、いろいろ事情もあつたらうしさ。」

「さうでせうか？」

僕はいつか苛立たしさを感じ、従姉に後ろを向けたまま、窓の前へ歩いて行つた。窓の下の人々は不相變萬歳の聲を擧げてゐた。それは又「萬歳、萬歳」と三度繰り返して唱へるものだつた。従兄の弟は玄關の前へ出、手ん手に提灯をさし上げた大勢の人々にお時宜をしてゐた。のみならず彼の左右には小さい従兄の娘たちも二人、彼に手をひかれたまま、時時取つてつけたやうにちよつとお下げの頭を下げたりしてゐた。………

それからもう何年かたつた、或寒さの厳しい夜、僕は従兄の家の茶の間に近頃始めた薄荷パイプを啣へ、従姉と差し向ひに話してゐた。初七日を越した家の中は氣味の悪いほどもの靜かであつた。従兄の白木の位牌の前には燈心が一本火を澄ましてゐた。その又位牌を据ゑた机の前には娘たちが二人夜着をかぶつてゐた。僕はめつきり年をとつた従姉の顔を眺めながら、ふとあの僕を苦しめた一日の出來事を思ひ出した。しかし僕の口に出したのはかう云ふ當り前の言葉だけだつた。

「薄荷パイプを吸つてゐると、餘計寒さも身にしみるやうだね。」

「さうよ、あたしも手足が冷えてね。」

従姉は餘り氣のないやうに長火鉢の炭などを直してゐた。………（昭和二・六・四）

二　手紙

僕は今この溫泉宿に滯在してゐます。避暑する氣もちもないではありません。しかしまだその外にゆつくり讀んだり書いたりしたい氣もちもあることは確かです。ここは旅行案内の廣告によれば、神經衰弱に善いとか云ふことです。そのせゐか狂人も二人ばかりゐます。一人は二十七八の女です。この女は何も口を利かずに手風琴ばかり彈いてゐます。が、身なりはちやんとしてゐますから、どこか相當な家の奥さんでせう。のみならず二三度見かけた所ではどこかちよつと混血兒じみた、輪廓の正しい顏をしてゐます。もう一人の狂人は赤あかと額の禿げ上つた四十前後の男です。この男は確か左の腕に松葉の入れ墨をしてゐる所を見ると、まだ狂人にならない前には何か意氣な商賣でもしてゐたものかも知れません。僕は勿論この男とは度たび風呂の中でも一しよになります。K君は（これはここに滯在してゐる或大學の學生です。）この男の入れ墨を指さし、いきなり「君の細君の名はお松さんだね」と言つたものです。するとこの男は湯に浸つたまま、子供のやうに赤い顏をしました。……

K君は僕よりも十も若い人です。おまけに同じ宿のM子さん親子と可也懇意にしてゐる人です。M子さんは昔風に言へば、若衆顏（わかしゆがほ）をしてゐるとでも言ふのでせう。僕はM子さんの女學校時代にお下げに白い後ろ鉢卷をした上、薙刀を習つたと云ふことを聞き、定めしそれは牛若丸か何かに似てゐたことだらうと思ひました。尤もこのM子さん親子にはS君もやはり交際してゐます。S君はK君の友だちです。唯K君と違ふのは、——僕はいつも小說などを讀むと、二人の男性を差別する爲に一人を肥つた男にすれば、一人を瘦せた男にするのをちよつと滑稽に思つてゐます。それから又一人を豪放な男にすれば、一人を纖弱な男にするのにもやはり頰笑まずにはゐられません。現にK君やS君は二人とも肥つてはゐな

いのです。のみならず二人とも傷き易い神經を持つて生まれてゐるのです。が、K君はS君のやうに容易に弱みを見せません。實際又弱みを見せない修業を積まうともしてゐるらしいのです。

K君、S君、M子さん親子、――僕のつき合つてゐるのはこれだけです。尤もつき合ひと言つたにしろ、唯一しよに散歩したり話したりする外はありません。何しろここには溫泉宿の外に（それもたつた二軒だけです。）カッフエ一つないのです。僕はかう云ふ寂しさを少しも不足には思つてゐません。しかしK君やS君は時々「我等の都會に對する鄕愁」と云ふものを感じてゐます。M子さん親子も、――M子さん親子の場合は複雜です。M子さん親子は貴族主義者です。從つてかう云ふ山の中に滿足してゐる訣はありません。しかしその不滿の中に滿足を感じてゐるのです。少くとも彼是一月だけの滿足を感じてゐるのです。

僕の部居は二階の隅にあります。僕はこの部屋の隅の机に向かひ、午前だけはちやんと勉强します。午後はトタン屋根に日が當るものですから、その烈しい火照りだけでも到底本などは讀めません。では何をするかと言へば、K君やS君に來て貰つてトランプや將棊に閑をつぶしたり、組み立て細工の木枕をして（これはここの名產です。）晝寢をしたりするだけです。五六日前の午後のことです。僕はやはり木枕をしたまま、厚い洋紙の表紙をかけた「大久保武藏鐙」を讀んでゐました。するとそこへ襖をあけていきなり顏を出したのは下の部屋にゐるM子さんです。僕はちよつと狼狽し、莫迦々々しいほどちやんと坐り直しました。

「あら、皆さんはいらつしやいませんの？」

「ええ。けふは誰も。……まあ、どうかおはひりなさい。」

M子さんは襖をあけたまま、僕の部屋の椽先に佇みました。

「この部屋はお暑うございますわね。」

逆光線になつたM子さんの姿は耳だけ眞赤に透いて見えます。僕は何か義務に近いものを感じ、M子さんの隣に立つことにしました。

「あなたのお部屋は涼しいでせう。」

「ええ、……でも手風琴の音ばかりして。」

「ああ、あの氣違ひの部屋の向うでしたね。」

僕等はこんな話をしながら、暫く椽先に佇んでゐました。西日を受けたトタン屋根は波がたにぎらぎらかがやいてゐます。そこへ庭の葉櫻の枝から毛蟲が一匹轉げ落ちました。毛蟲は薄いトタン屋根の上にかすかな音を立てたと思ふと、二三度體をうねらせたぎり、すぐにぐつたり死んでしまひました。それは實に呆つ氣ない死です。同時にまた實に世話の紅い死です。——

「フライ鍋の中へでも落ちたやうですね。」

「あたしは毛蟲は大嫌ひ。」

「僕は手でもつまめますがね。」

「Sさんもそんなことを言つていらつしやいました。」

M子さんは眞面目に僕の顔を見ました。

「S君もね。」

僕の返事はM子さんには氣乘りのしないやうに聞えたのでせう。（僕は實はM子さんに、——と云ふよりもM子さんと云ふ少女の心理に興味を持つてゐたのですか。）M子さんは幾分か拗ねたやうにかう言つて手すりを離れました。

「ぢや又後ほど。」

M子さんの歸つて行つた後、僕は又木枕をしながら、「大久保武藏鐙」を讀みつづけました。が、活字を追ふ間に時々あの毛蟲のことを思ひ出しました。……

僕の散歩に出かけるのはいつも大抵は夕飯前です。かう云ふ時にはM子さん親子をはじめ、K君やS君も一しよに出るのです。その又散歩する場所もこの村の前後二三町の松林より外にはありません。これは毛蟲の落ちるのを見た時よりも或は前の出來事でせう。僕等はやはりはしやぎながら、松林の中を歩いてゐました。僕等は？——尤もM子さんのお母さんだけは例外です。この奥さんは年よりは少くとも十位はふけて見えるのでせう。僕はM子さんの一家のことは何も知らないものの一人です。しかしいつか讀んだ新聞記事によれば、この奥さんはM子さんやM子さんの兄さんを産んだ人ではない筈です。M子さんの兄さんはどこかの入學試驗に落第した爲にお父さんのピストルで自殺しました。僕の記憶を信じるとすれば、新聞は皆兄さんの自殺したのもこの後妻に來た奥さんに責任のあるやうに書いてゐました。この奥さんの年をとつてゐるのも或はそんな爲ではないでせうか？　僕はまだ五十を越してゐないのに髮の白い奥さんを見る度にどうもそんなことを考へ易いのです。しかし僕等四人だけは兎に角しやべりつづけにしやべつてゐました。するとM子さんは何を見たのか、「あら、いや」と言つてK君の腕を抑へました。

「何です？　僕は蛇でも出たのかと思つた。」

それは實際何でもない、唯乾いた山砂の上に細かい蟻が何匹も半死半生の赤蜂を引きずつて行かうとしてゐたのです。赤蜂は仰けになつたなり、時々裂けかかつた翅を鳴らし、蟻の群を逐ひ拂つてゐます。が、蟻の群は蹴散らされたと思ふと、すぐに又赤蜂の翅や脚にすがりついてしまふのです。僕等はそこに立ちどまり、暫くこの赤蜂のあがいてゐるのを眺めてゐました。現にM子さんも始めに似合はず、妙に眞劍な顏をしたまま、やはりK君の側に立つてゐたのです。

「時々劍を出しますわね。」

「蜂の劍は鉤のやうに曲つてゐるものですね。」

僕は誰も默つてゐるものですから、M子さんとこんな話をしてゐました。

「さあ、行きませう。あたしはこんなものを見るのは大嫌ひ。」

M子さんのお母さんは誰よりも先きに歩き出しました。僕等も歩き出したのは勿論です。松林に路をあましたまま、ひつそりと高い草を伸ばしてゐました。僕等の話し聲はこの松林の中に存外高い反響を起しました。殊にK君の笑ひ聲は――――K君はS君やM子さんにK君の妹さんのことを話してゐました。この田舍にゐる妹さんは女學校を卒業したばかりらしいのです。が、何でも夫になる人は煙草ものまなければ酒ものまない、品行方正の紳士でなければならないと言つてゐると云ふことです。

「僕等は皆落第ですね？」

S君は僕にかう言ひました。が、僕の目にはいぢらしい位、妙にてれ切つた顔をしてゐました。

「煙草ものまなければ酒ものまないなんて、……つまり兄貴へ當てつけてゐるんだね。」

K君も咄嗟につけ加へました。僕は善い加減な返事をしながら、だんだんこの散歩を苦にし出しました。從つて突然M子さんの「もう歸りませう」と言つた時にはほつとひと息ついたものです。M子さんは晴れ々々した顔をしたまま、僕等の何とも言はないうちにくるりと足を返しました。が、溫泉宿へ歸る途中はM子さんのお母さんとばかり話してゐました。僕等は勿論前と同じ松林の中を歩いて行つたのです。けれどもあの赤蜂はもうどこかへ行つてゐました。

それから半月ばかりたつた後です。僕はどんより曇つてゐるせゐか、何をする氣もなかつたものですから、池のある庭へおりて行きました。するとM子さんのお母さんが一人船底椅子に腰をおろし、東京の新聞を讀んでゐました。M子さんはけふはK君やS君と溫泉宿の後ろにあるY山へ登りに行つた筈です。この奥さんは僕を見ると、老眼鏡をはづして挨拶

しました。

「こちらの椅子をさし上げませうか」

「いいえ、これで結構です。」

僕は丁度そこにあつた、古い籐椅子にかけることにしました。

「昨晩はお休みになれなかつたでせう?」

「いいえ、……何かあつたのですか?」

「あの氣の違つた男の方がいきなり廊下へ駈け出したりなすつたものですから。」

「そんなことがあつたんですか?」

「ええ、どこかの銀行の取りつけ騒ぎを新聞でお讀みなすつたのが始まりなんですつて。」

僕はあの松葉の入れ墨をした氣違ひの一生を想像しました。それから、――笑はれても仕かたはありません、僕の弟の持つてゐる株券のことなどを思ひ出しました。

「Sさんなどはこぼしていらつしやいましたよ。……」

M子さんのお母さんはいつか僕に婉曲にS君のことを尋ね出しました。が、僕はどう云ふ返事にも「でせう」だの「と思ひます」だのとつけ加へました。(僕はいつも一人の人をその人としてだけしか考へられません。家族とか財産とか社會的地位とか云ふことには自然と冷淡になつてゐるのです。おまけに一番惡いことはその人としてだけ考へる時でもいつか僕自身に似てゐる點だけその人の中から引き出した上、勝手に好惡を定めてゐるのです。)のみならずこの奥さんの氣もちに、――S君の身もとを調べる氣もちに或可笑しさを感じました。

「Sさんは神經質でいらつしやるでせう?」

「ええ、まあ神經質と云ふのでせう。」

「人ずれはちつともしていらつしやいませんね。」

「それは何しろ坊ちやんですから、……しかしもう一通りのことは心得てゐると思ひますが。」

僕はかう云ふ話の中にふと池の水際に澤蟹の這つてゐるのを見つけました。しかもその澤蟹はもう一匹の澤蟹を、――甲羅の半ば碎けかかつたもう一匹の澤蟹をじりじり引きずつて行く所なのです。僕はいつかクロポトキンの相互扶助論の中にあつた蟹の話を思ひ出しました。クロポトキンの教へる所によれば、いつも蟹は怪我をした仲間を扶けて行つてやると云ふことです。しかし又或動物學者の實例を觀察した所によれば、それはいつも怪我をした仲間を食ふ爲にやつてゐると云ふことです。僕はだんだん石菖のかげに二匹の澤蟹の隱れるのを見ながら、M子さんのお母さんと話してゐましたが、いつか僕等の話に全然興味を失つてゐました。

「みんなの歸つて來るのは夕がたでせう？」

僕はかう言つて立ち上りました。同時に又M子さんのお母さんの顏に或表情を感じました。それはちよつとした驚きと一しよに何か本能的な憎しみを閃かせてゐる表情です。けれどもこの奥さんはすぐにもの靜かに返事をしました。

「ええ、M子もそんなことを申してをりました。」

僕は僕の部屋へ歸つて來ると、又椽先の手すりにつかまり、松林の上に盛り上つたY山の頂を眺めました。山の頂は岩むらの上に薄い日の光をなすつてゐます。僕はかう云ふ景色を見ながら、ふと僕等人間を憐みたい氣もちを感じました。

………

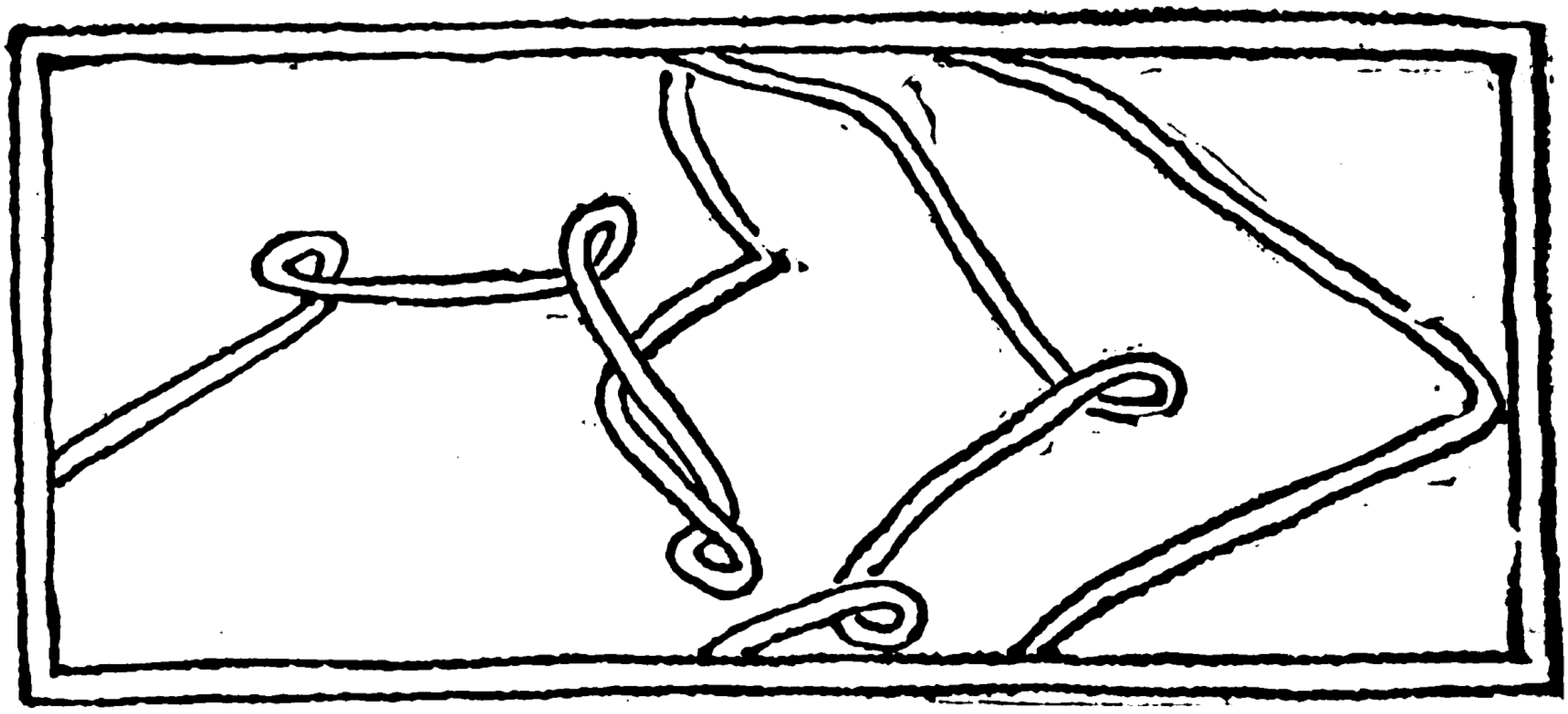
M子さん親子はS君と一しよに二三日前に東京へ歸りました。K君は何でもこの溫泉宿へ妹さんの來るのを待ち合せた上、（それは多分僕の歸るのよりも一週間ばかり遲れるでせう。）歸り仕度をするとか云ふことです。僕はK君と二人だけに

なつた時に幾分か寛ぎを感じました。尤もＫ君を劬りたい氣もちの反つてＫ君にこたへることを惧れてゐるのに違ひありません。が、兎に角Ｋ君と一しよに比較的氣樂に暮らしてゐます。現にゆうべも風呂にはひりながら、一時間もセザアル・フランクを論じてゐました。

僕は今僕の部屋にこの手紙を書いてゐます。ここはもう初秋にはひつてゐます。僕はけさ目を醒ました時、僕の部屋の障子の上に小さいＹ山や松林の逆さまに映つてゐるのを見つけました。それは勿論戸の節穴からさして來る光の爲だつたのです。しかし僕は腹ばひになり、一本の卷煙草をふかしながら、この妙に澄み渡つた、小さい初秋の風景にいつにない靜かさを感じました。…………

ではさやうなら。東京ももう朝晩は大分凌ぎよくなつてゐるでせう。どうかお子さんたちにもよろしく言つて下さい。

(昭和二・六・七)



紋付

瀧井孝作

田舍の父は私共に手紙で、母の十七回忌と祖母の十三回忌と次の母の七回忌の法事をいとなむから歸れ、亦、嫁ト顔合致度ゼヒ同道ニテと私共の女房にあひたがつて、さう云つてきた。女房は七月初產して八九十日目位の赤坊と共で、田舍の山阪三十餘里乘合自働車でゆさぶられて行くことは何うかと思はれたから女房はことわつた。私は大阪の叔母と共に法事に歸省することにした。

昨年妹の絹の家出以來、父はひとりぼつちで、今年七十の老人だ。父は不自由ゆゑ私にあへば、私共に家に戻れと云ふかも分らぬ。私は是を云はれると弱ると思つた。田舍に引込むと仕事は榮えないし、しかし老人の安堵の行くやうに何うしたらよいか、この歸省につけて思ふのであつた。

……最初長男の私の方が郷里を早くとび出して行つてしまつたことから、父は行

末妹の絹にかゝるつもりで師範學校などに入れた。絹が學校を卒業して教員になつた年の秋、私共の繼母は流行感冒で死んだ。私は母の葬式に歸省したら、父は心細がつて私の再び家を出ることを引止めたが、私の志(こゝろざし)の動かないのを見拔いた父は、「では往けョ。俺は隱居して絹に別家を名乘らせ、俺は絹にかゝるで」と云つた。父とかく諒解の上、妹に父をあづけて私は再び家を出た。

それから齡ごろの絹に色々緣談も持込れたけれど、父は聟を取ると云つて緣談はおくれ、絹の二十四の冬、同じ教員のFをもらふことになつた。Fは新規持合所帶の考へで當分の宿のつもりで宅にきたが、父は聟をいれたつもりで待遇した。Fは、家の跡繼ぎは長男のある以上將來無事に納らぬから、今の中に財產などしつかりキマりのつかぬことには聟の張合がないと云つた言分があつて、父の方は元々隱居の財產は讓る考へであつたが、僅か半年たゝぬ聟に任せることは未だ不安心で着く樣子を見ると云つた工合であつた。兩方落付かず折合が面白く行かない始末まで、絹は私の方に手紙でさう訴へて來た。私は何か口だせば理屈ばる父は戾つて家を立てよと云ふに極つて居るから何もえう言へなかつた。絹は本大阪の叔父に訴へ、叔父は家のキマりをつけること說きに出かけたけれど、父は叔父を無愛相に待遇し金錢のことゝ云へば顏色かへる工合であつたから、叔父は若夫婦に向いて「父をあてにせず緣あれば仲よくしてくれ、つらいこともあらうが亦よき日もくるわいな」位云つて歸れてきた由。絹はそれから姙娠したが父はやはり頑固で若夫婦につらくあたつた。近所で見かねた蒲田の叔父叔母は兎も角自分の宅に絹をつれてきて分娩させた。父はこんな次第で初孫が生れても何一つ祝ひもしなかつたらしい。Fは夏期休暇に大阪に出て、田舍生活も面白くないか何かで大阪で教員の就職口を見つけて、大阪に移つてしまつた。

絹は聟と別れよと父に云はれ、ヨシエを生んだ絹は今日父のみにつくことは無理であつた。赤兒は蒲田にあづけて學校に出るもに通ひ／＼したけれど落付ぬし、直ぐあとの兒を姙娠つたし、ヨシエを連れて今は良人の所に行く方本當と思は

れ、覺悟きめて父に無斷で、十一月大阪に出て、良人のFと世帶を持つたのであつた。

今年の春絹の二遍目のお産の手傳ひに蒲田の叔母は大阪に出て、長女のヨシエを蒲田で育てると云つて連れて戻つた。父はこの叔母に様子は聽いた筈だが、昨年の家出以來絹夫婦と、父は音信不通にして居るのであつた……。

私は、父と妹との和解を念つた。兎も角父は一人で何んな工合であるか、こんどの歸省で父の生活を見たい。見れば私自身の立場も分ると思はれる。

私は宅につき、父の悠くりした晩酌の膳の傍で、郷里の新聞をひろげ疊に手をかつて體を支へひどい勞れを覺えた。乘合自動車に一日揺られてきて體が綿のやうであつた。父は私の携へてきた赤坊の寫眞を持上げ電氣のあかりに出し

「えらく肥えた顔付ぢや、寫眞見たらかはえいから、大事に育てヨ」と云つた。

私は二階の四疊半の寢床に休んだ。肩に重たい布團は瓦の如く固かつた。階下で父と大阪の叔母(兄妹)は話しつゞけた。

「年寄つてこんな重い布團きて笑止な人やな、お前も今はちつとは溜つたさうなが慾ばらずに、こんなふとんは止めてナもつと綿のよい輕い夜具を拵へなはい、ゆうべは仙造の内で布團をのべてくれて休んだが、仙造は柔らかい布團を拵へるとるゼナ」

「それで仙造の嫁は」と未だ見ぬ父は尋ねた。

「おれんは、それは落付いた奥ゆかしい所のある、それは奥ゆかしいえい子だすが」

「仙造は何にも親に相談せんのが俺や氣にくはんわい」

父は駄々子の如に不服を云つた。

次の日私は二階で盆栽とあたりを眺めて居た。中庭の松は屋根の上の高さに伸びた。内は變つてなかつた。手が行屆かぬので廣間など何か燥くさい氣がされた。父は、疊の上げてある二階の廣間で障子貼りをやつた。私はひつぱり合ふてそ

の貼り殘りを手傳つた。久々で戻り障子貼の用などいやであつたが父と共にかうして居るとへんに安心を覺えた。私は傍で使れる安心できる父だと思つた。

三日目は法事の日であつた。父と私と手傳ひにきた從兄とで、廣間など「煤掃」の如に午前中掃除にかゝつた。柱、長押、縁側に雜巾かけ、疊を入れるやら屏風を持出すやら、私は「前以て人を雇つてさせておけばよい」と不平を洩したら、父は「おみたちはくると云つても何時くるかわからんなかい」と答へた。大阪の叔母は昨日から台所の膳棚など拭き父には「お前一人分だけ出いといて、平常いらん物はしまつたら、棚もかう汚なくはならんやろ、さうしなアれ」と云つたのであつた。

法事には寺の坊さん三人、親戚の者五六人集つた。御經のあと二階で精進料理など出て皆々飮み合つた。まあ簡素につとめたわけであつた。

晩に内輪の者は奥の室でくつろいだ。ヨシエをつれた薄田の叔母は「ヨシエは、歩ンよがお上手しるぜな、歩ンよして見せなはい、コレ」と、小さいヨシエにのぞきこんでさうすゝめた。子供は、たち上り歩き初めの足取で、目の前をすこし歩くと、大人は囃したてた。ヨシエは倘ほ立つて歩いた。「この頃やつと二尺さしに屆く脊たけ」と云はれて歩き廻つても邪魔にはならず、にぎやかで、皆々に面白がられて、一人人氣者であつた。

「その袷は、宅らで送つたきものやらう、よく似合ふわ」と、大阪の叔母が見ていつた。今日の法事は、ヨシエは淡いふじ色の紋服をきせられた。私は、妹の絹がヨシエを生んだ時大阪からはこんな紋付など祝はれたのだと思つた。

ヨシエはさんじ立止つて草臥れて、ぐるりのどの膝元に寄らうかと見廻した。すこし目の不自由な薄田は寺の坊主に似た面持に微笑を一杯に湛え

「どれ〳〵、こゝにこい」と、さういつて待受けた。私共の父はまた
「ヨシエ、祖父さまに抱れヨ」と、自分の孫を引寄せると云つた意識で呼んだ。
「うちのぢいの方えいゾ、おみの祖父さまはダチカスカイ……」
「ヨシエはぢいの時がよからずも、なあ」
叔母と薄田とに云はれ、一寸迷つて居た子供は薄田の方に行つた。
父は、孫に厭らはれ、苦わらひをうかべた。他で見て氣の毒であつた。「ヨシエの尿ばゝ一遍始末してもくれん」と云はれる程だから仕方はない。
却つて薄田は、宅でヨシエが生れるとすぐ、絹の乳の出方がたりなかつたから薄田は母の乳の代りにする物など面倒な世話もした。絹が内所で大阪に向け立つた時道中心元ないからと薄田はあとで父に怨まれる覺悟で大阪まで附添つて絹とヨシエを送り屆けた。この春叔母がお產の手傳に大阪に行つた時、幼兒二人抱へる絹の上も思遣られ亦ヨシエにはあひたくて自分らで育てるからぜヒ連れて戻れと叔母に云つたわけであつた。先程、薄田は傍のヨシエに「お酒」と云つて自分の膳の杯からくすり指の端に一寸つけては甜めさせたが、こんな工合に育てたのであつた。
「やはり孫はかはえゝことい」と父は云つて、また
「絹は云ふことをきかんで、俺の云ふ通りすれば、俺も何でもしてくれるけど、なあ」とふ云のであつた。
私は、ヨシエの耳朶の下におできのはれ上つたのを認めて叔母に云つた。
「險呑な所におできがあるナ、早く治さんと」
「さうよ、××醫者へつれて行つたけど、泣いて〳〵見せんのぢやあ」
子供は元氣よくて自づと治るであらうが、私共は小兒の扱ひ方に神經質の方だが是は呑氣な方だと思つた。

こんな風に四五日滞在した。父は私共に家に戻れと云ふ話持出す振はなかつた。私の外で何うやら身を立て居る事を認めた故であつた。私は大阪の叔母と共で四五日居れ、女氣のない父一人の宅ではむさ苦しくて一日も堪えられぬと思はれ、父に向いて、守でも茶呑友達でも洗濯人でもよい、一人きてもらつたら如何とすゝめた。

「うん、よい人があれば、きてもらつてもえゝ」

「その方がよい」

で、私は親戚へも女中の世話などをたのみこんでおいた。そして大阪の叔母と共に再び生家を立つたのであつた。

私は父におりおりの手紙出す代りに日々の新聞を封じてやるのであつた。これが途絶えると父は催促した。「拙者は脚氣で本月中休んで居そちら皆無事で何寄目出度そして先月より下女頼居ゆえ勝手は官敷がまだ脚氣がなほりさうもないから困て居ゆえ新聞をなりたけ早く送附下さい目方は六枚で四十目ゆえ二十目で五厘二十目ごとに五厘づつに付右様承知で切手を用ひなさい六枚で一錢以上は無用に付其つもりではつて下さい宜敷頼　一月十三日」

夏になつて、父は暑中見舞の返事をくれた。「十九日出のはがき見た皆まめなのが何寄だ當地も極不景氣で宅では仕事がないをさいはいに内の屋根を悉皆亞船板にふきかへして仕舞た人夫も頼まず屋根葺もたのまず自分で四月七日より今月十五日迄にやうやく仕舞つたそして此頃はくたびれあそんで居る此下半期になつたら景氣がなほるかと思ふ先はあついから大事にしなさい七月二十日」私は此端書を持上げてふき出した。七十の老人一人で百日ほど屋根葺にかゝつて居る圖が思はれた。さうして妹の絹と父と未だ和解のついてない、是は一寸淋しく思はれた。

大阪で姉は再び数月づとめに出たのであつた。乳呑兒を毎朝子守にあづけて學校に出るのであつた。良人の方は野食し

て何かやりだしたい口吻であつた。此夫婦の世話をよく見る大阪の叔父は「若いうちに働いて貯めんことには」と夫婦つとめに出ることに賛成を云つたのであつた。

大阪の叔父は、絹と父との音信不通の仲を何うにかして纒めたがつた。叔父は私共へきて「君方もあの老人に何時迄も働かせるといふ事はよくないと思ふで……絹らは此頃五十圓位月々殘る勘定やで、何うやろ、君の方と絹の方と毎月十圓づつ共出して老人に仕送りしたら、老人もいくらか持つてあるやろで足せて用舍のこと氣樂にやれると僕は思ふで……」と云つた。絹夫婦は叔父からさう云へば承諾する筈とのことであつた。私は、貯金などなかつたけれど働けばゆとりはつくわけで、不服はなく叔父の詞に承諾した。叔父は滿足して戻つたのであつた。

其後、叔父は亦こんな話した。

「絹が學校で何か式の時紋付がいる云うた、絹は紋付の着物を國においてきてあるでこれを取寄せたい云うて、奈良の兄樣から國の方へ手紙をやつてもらつたらどうかと俺に相談した、俺は君に傳へようと云うといたけど君にはあふ時がなかつたし君の所に話に行くひまにと思うて、俺は高山の方に直ぐ手紙をやつたよ」と、そして先日キメた兩方から仕送りのことも手紙に書いてやつたと傳へた。

私は、何時迄も働きたい父の氣象だから仕送りは簡單に受取ると云はないかも分らぬ、こんなにも思はれ、ほつておいたけれど、父が承知すれば絹夫婦と父と折合はつく故、宜しいと思つた。

其後、又叔父の宅で叔父は私に「老人は相かはらず頑固やで」と云つて、父の手紙を見せた。叔母も傍で。

「絹の紋付を簞笥にしまうておいたかて、しよむないやろけどなあ」とこぼすのであつた。私は手紙を披いた。

拜復時節變目に御座候處貴殿皆々御壯健之由奉大賀候小生も無事に有之候間御休神可被下候御依賴之おもむき承知致候得共昨年薄田妹出張之節咄おき候とほり藤田は拙者宅へむこと云ことでありましたが其後りゑんとなりましたに付娘を

さそひ出し被に〲拙者よじゆな事一方ならず共上なんの諸さい手紙も來らずたゞ物衣類の事のみ申越候位聞入がたくゆゑ被に貴殿へ相すまぬお此段御断申候又兩人共相談の上藤田が竹内の姓をなのり被下ば何なり共聞入致升さもなくば拙者不自由に付國に戻り拙者宅へ歸るよう貴殿何卒〲御はなし可被下候且又國に戻らず共大阪に居ても竹内の姓なれば萬ぞくでき升から左樣御承知可被候也　十一月八日

この手紙から父の立場は思ひやられた。長男が外へ出たから代りに妹に家を立てさせると云つて居たわけで、妹が嫁に行けば家が立たぬ之は世間へも工合がわるいのであつた。大阪の叔父は父と同樣昔氣質で話の筋目は立てる方だが一寸氣輕に若い者の味方して、つまづいた形であつた。

妹の絹はよばれて來た。いつもの好人物の妹は、七月私はこゝで見てからけふだがやゝ老けて見えた。絹は父の手紙の話聞いて、未だ中直りできぬわけだから一寸淋しい面持であつた。私は、父の老ひても屈せず頑張つて居る氣力との生活力は心づよく有難く思はれたから、さう云つて妹を慰めたであつた。妹は大阪で都會生活の與みに融けるたちでもないが只子供と良人と共々と云ふ所に心やりはあるらしかつた。夕飯を共にして私は叔父と飲合つたのだが、叔父はいくらかフキゲンに振舞ふのであつた。

正月、私共の女房は妹の宅に行き、絹の拵へたと云ふ新しい紋付を見てきてはなしゝた。
「黒の綸子の江戸褄と云ふのでしよネ、まあ普通のですね、五十圓餘かゝつたんですつて。〇〇さんの奥さんのお拵へになつた紋付は百圓餘りで、裾前の上前も下前も模樣が異つて色がそれは美しいの、あれから見れば お絹さん のは略式ですわ」と云ふのであつた。

私共の父は、紋付のこと故一層筋目立て云つて國から屆けなかつたから、絹はよぎなくよけいに拵へたわけであつた。

（昭和二年六月）



『よしや逆さに』

宇野千代

（三）

死んだやうに動かない。男はそうつと體をひいた。その隙間から何か冷い恐しいものが這ひ上る。これで、はあ、何も彼もお了ひになつて了うたのじや。了うたのじや。不思議にもしらじらとさえ返つた瑞子のあたまの中をその冷い恐しいものがつつぬけて通る。それだのに、とろとろと瞼がおちて、

「如何おした？　如何おした？」

と心から氣遣はしさうな男の聲さへうつろうつろに聞えて耳へは屆かない。白白と雨戸の隙間から明けて來た。三本も四本も白い棒になつて明けて來た。その襖の灰靑され？　川瀨の音がはつきりと聞える。あの灰靑さはあれは川岸の菖蒲（しやうぶ）の色が映

つたのかも知れない。はて、このまゝ氣でも狂ふのではなからうか。…………、去年かおとゞしか、まだ女學校にゐたころであつた。親類の兒のあや子とこの川ぶちへ遊びに來て、丁度二つか三つ咲いてゐた白い菖蒲を折る積りで流れに下駄をとられたことがあつた。そのときの潮の速さまで、ふつと眼に映つて來て、ふいとそれを、まるで獨りごとのやうに、

「あややんに遣るんでの、」

「如何おした？　如何おした？」

「白いのが咲いてての、あややんの下駄が流れてての、竹で追うておうて驅けつての、」

　連想の絲を追うて出任せに口走ると、ふいに氣が立つて來た。くそ、やぶれかぶれじや。ほんに氣狂ひじや。はやじきに夜が明けるちうのに、この顏がどう見られて宜かろ。恥しうもなんともないぞ。…………………、朝になつたら明日になつたらこのうそ寒いへだたりのどこまで擴がつて行くものやらも知らず、如何してこんなことになつたのかさへも知らない心許なさ。その心許なさを拂ふやうに、何か空をつかむやうに、手をあげてぐいと蒲團をはねのけた。

「先生おはぎを上げますちうても貰うてはいけん。おはぎ一つでもいけん。あんこ一つでもいけん。」

　思ひきり惡たれて恥知らずな、勝鬨を上げるやうな歡喜さへこみ上げて、それはあの、敎員の監督のやうなことをして居るとしとつた主席訓導の口眞似なのであつたが、ばた〳〵と兩足を動かし乍ら、それを大聲にわめき立てた。「賄賂じや。賄賂じや。」

「大丈夫じやけ、何でもないのじやけ、」

さぐりに搔きよせたかと思ふと、またもう一度机へそれを戻し乍ら、壁際に吊してあつた袴を穿き、何となくあはてふためいて、表の雨戸をあけたけれども、そこには宵の中にわれとわが履物を隱し忘れてかげも見えない。それが前の日には母屋の娘のまゝごとにでもつかつたであらうれんげの花と染つ切れの散らばつてゐる莚の下から、その下からでも見えたのか、思はず、つつかけた片足の、音を立てゝ地面へ轉がつたかと思ふと、そのまゝばた〳〵と驅け出した。茶園をぬけ土橋を渡つて、その足音が遠ざかる。あとはしいんと風もない。はゝ、逃げる氣なのじや、逃げたのじや。ふいにぼろぼろと涙が流れて來た。しつかりせとらんにや、大人しうせで、大人しうせて、とわれとわが手で搔い抱くやうに袖を合せ乍ら、瑞子は長い間みじろぎもしなかつた。蒲團から頰から、うす甘く涙が口の中へ流れて來た。ごろ〳〵と一つ車の音が聽える。すぐ川ぶちの徑を瓜か胡瓜の種下しに、雨も上つてこの夜明けから沖の田甫へ行くらしい。青々と皮をむいて、野面のはてから明けて來る。小學校の庭にある高い梢に日があたる。それから、小使のお爺さんが麻裏草履をひき摺り乍ら、教員室になつてゐる二階へ鐘を撞きに來る。――すると、あゝ、毎日と同じやうな明るみへ朝の中へこの體をさらさなければならないけれど、心からそれを信じたくないやうに、思はず顏をおほうて眼を閉ぢると、

「みい、みい坊、」

はゞかり氣な男の聲が、續けて引戸に手をかけた。宵のうちにあの男が棧を下してあきはしない。た、かた、執念く、

「みい坊、みい坊、」

はつとして隱れよう暇もなく、がらがらと今度は表の雨戸があいた。

「あゝ、叔父さま、」

鐵砲袖の寢卷のまゝ、せか〳〵と上つて來た。…………。その一）…………を何の苦もな

く輕々と引摺り乍ら、けれども不安な硬ばるやうな見馴れない笑顔になり、
「汝あ、汝あ、」
と、何となく大きな深い呼吸をして、「氣をしやんとせんにやあいけんぞ。しやんとねや。心配はないけえの、はや、叔父さまが來たんじやけえの、ねや？」
はゝ、叔父さまは、儂が氣でも違うたのかと思うてぞ。――いまは小さな惡魔でもある。瑞子は何となくしつかりと蒲團の襟を押へ乍ら、その中から、隠れん坊をする子供のやうに、ばあ、と聲でもかけさうな、大きな甘へるやうな眼をあいて、叔父の笑顔に答へ乍ら、氣も顚倒してゐるのは自分よりもこの叔父のやうに思はれて、それが可笑しいやうな悲しいやうな、そんな氣持は知らないけれど、いまの自分の有樣は、われにもなく昔馴染の情人を裏切りでもした女のやうな、たとへようもない恥しさであつた。
「俺あ、度膽を抜かれたぞ。あん外道奴が虎さあを呼びに行つたげなで、夜も明けんのに虎さあがござつての、はは、はは、」
とそれが癖の、聲ばかりで笑つては、「どうりや、熱ども、出んか。」
ぴくりと肩を顫はせた。いま觸れるか觸れぬのにずうんと足の爪先にまでしみるやうなこの叔父の手の生ぬるさは、不思議にも叔父の手のそれではなく、あの雨の中の堤の上で、白い二つの吸盤のやうにわが體を抱いた男の逞しい手であつた。うとうとと眼を閉ぢると、…………、…………
…………。だが、何も彼も戻つては來ないのだ。はや、汽車へでも乘つて行つて了うたやら、それとも虎さあの家の緣側で、氣楽に茶でも啜り乍ら、いまがいままで過ごした夜を笑ひの種にしてゐるやら。
「躬はない。ないが、如何しやな、しやんと起きられるらうね。さう言へば爪木先生はどうなさた。」

「お戻りさつたのじや、ゆんべは、」

「何でお戻りさつたのじや、あん女郎、人の娘のとりもちをせて、汝はええ男んとこいども行つつらう。誰じやちうて知らん者あないぞ、こないだもここの婆さの知り人が何か探しもんがあつてこの台所へ來とみたら、あの織り機のかげに何やら、ひよんなもんが落ちとつたげなぞ、」

ぎくりとして眼を伏せた。さてはあの手紙を拾はれでもしたことか、いやそんな筈はないぞ、つひ昨日もこの袂の中に、

――「そんとなもんを落しといて、裏の婆さの話しでは、どうもこの裏の納屋へ男さが來るらしいちうことぢや。俺あはあ、とうから氣がついとつたのじや、あんとな女郎と一つとこに居つちやあ、汝のためにも碌つとうなこたあ、なかつたのじや。同じこの座敷に寢とつて、汝あ、毎晩のことじやのに八木先生がどこいお行きるのか分らさつたのじやのかや？…………………………………………」。

ばああと顔が赧くなつた。後を閉めない雨戸の間から水のやうに朝が流れ込み、その中に洗はれてこの叔父から聽く桃子の情事はそのまま自分のであつたやうな、やにつこくつつ突いて居る叔父の氣持さへ自分へのあてつけに思はれて、言ひようもなく面伏せなのに、何といけ洒洒と、そしてじりじりとその恥しさに堪へあらがひ、にこりともせずその叔父の顔を見詰めると、次第に心が坐つて來た。

「儂は叔父さま、八木先生にとりもちをせて貰うたのではないぞ。」

「そいじや、如何せて、ひよつこりござつたのじや。」

「ひとりでひよつこりござつたのじや、三味線屋の戻りに堤でひよつこり逢うたのじや、」

「ひよつこり逢うて、あん外道奴、どうせてここまでつけて來たのじや、」

「――女さに、嫌られてや、顏がわりうて往なれん、どうせても往なれんちうて、」

「往なれんちうて、ほう、うまいおどしをかけやがつた。そいで汝あ、」

と、ふいに喜びに馳られたやうに叫び出し、「汝あ、氣狂ひになつた眞似をせたのじやねや、」

「うん、眞似をせたのじや、」

「おお、おお、そいで眞似をせたのじやねや？氣狂ひではどうもならんちうて、みい、汝あ、何ちううまいことを遣つたのじや、どんとな昔の智慧者でもよう思ひつかんぞ、あは、あは、あは、あんな外道奴、この小娘に欺されて逃げよつたのじやな、――そいじや、どうもせんのじやねや？ねや？」

「うん、どうもせやせんのじや、」

「うふ、う、」

と喜びに堪へぬ笑ひを上げ、「ええ齢をせやがつて、阿呆奴が、人の娘にわるさをせかけて一杯ひつかか……。みい、汝が若し氣が違うたんなら、あん外道奴がさう言ふのじや、あの八幡にござる汝の乳母も世話をしてやつたとよ。その廣島の縣病院とやらへ入れて遣るとよ。何じや縣病院が何じや。うふ、う、村長さまが何じや、ええ齢をせやあがつて、」

とめどもなく罵る叔父の聲が、次第に悲しみを帶びてきこえて來る。思ひもかけずこの嘘が叔父に與へた喜びに、瑞子は身顫ひした。

「俺あ言つて來るぞ、虎めにも言うて來るぞ、うふ、う、」

ばたばたと馳け出した。じいんとめくるめく許りの靜かさであつた。　（完）



新築工事

正宗白鳥

私の家では、數日前に二人の地主へ地代を納めた。指を折つて數へるまでもなく、私達が大磯のこの家に住むやうになつてから、滿六年に達したのである。東京に空屋がなかつたゝめに、據ろなくこんな土地に落着くやうになつたので、自から好んで永住の地として此處を撰んだのではなかつた。

私は、學校出業後間もなく、讀賣新聞に入社した時に、自分の心の中では、短くて二年、長くとも五年と、勤續年限を極めてかゝつて、それ以上新聞記者なんかを勤めようとは思つてゐなかつたのだが、知らず〳〵七年間も同じ社に籍を置いてゐた。若しも社の方から解雇されなかつたなら、いつまでも記者生活を續けてゐたかも知れなかつた。住居だつて同じことだ。小說業の爲めを思ふと、たび〳〵住居を轉じて、違つた土地を見た方が、材料が豐富になつて、氣持も變つて、製作上都合

がいゝ譯ではあるし、子供の學校の都合などを考へる必要のない、夫婦きりの身輕な生活をしてゐる私達は、毎月轉居しても差支えないやうな境遇にゐるのであるが、ボロ家でも借家でなくつて自分の所有となつてゐると、さう長く締切つて他所へ行く氣にもなれないし、手輕に賣飛ばす譯にも行かない。それで、一つ所にこびりついてぐづら／＼六年もの日を送ることになつたのであつた。……これは私の素質が人並以上に因循姑息であるためばかりでなくつて、大抵の人間の生活がさうなのであらう。職業についても、家庭についても、絶えず飽足りない思ひをしながら、きつぱりした改革を試みないで、ぐづら／＼して日を送るのが、世上一般の習ひであらうと思はれる。

「××さんはなぜあゝ煮切らないのだらう。別れる氣なら、口で云ふばかりでなしに、早く別れたらよささうなものだ。傍で見てゐても齒痒くてならない」と、他人の身の上についてなら、事もなげに云つてゐられるが、自分の身に密接な關係を有つた事では、一時間早く朝寢の床から離れるのさへ、水際立つた決斷力を見せるのが六ケ敷のである。

先日も、山下橋の袂で××といふ知人に、十年振りで出會つたので、

「この頃はどこに勤めてゐる？」と訊ねると、

「相變らずだ」と、彼れは、昔ながらの鐡顔に苦笑を浮べて答へた。ところ／＼剝げてゐる古ぼけた折鞄を彼れは抱へてゐた。

「ぢや、やはり××の會社か」

私は、往年その會社に對して滿腔の不平を洩らすのを例としてゐた彼れが、その後出世もしてゐないらしいのに、相變らずそこに勤めてゐることを確かめたが、それは普通人の常道で、境遇に順應して生きて行くやうに人間は出來てゐるのである。不平を抱き愚痴をこぼし／＼生きて行くのが、多數者の運命であるやうに、私は近年ます／＼感じるやうになつてゐる。

「こんな思ひをして生きてゐるよりは死んだ方がましだ」と、一生に一度や二度思はない人間は少いのであらうが、さて思切つて、自分で自分の命を斷つほどに決斷力に富んだ人間は極めて稀れなのだ。そして、お互ひに、一寸さきは闇の世で、何が何やら分らないのに、ぐづら／＼生きてゐて、しかも人類は、やがて山をも野をも喰ひ盡さんばかりのすさまじい勢ひで繁殖しつゝあるのである。

私は、大磯在住六年の間に、最も痛切に感じたことは、隣近所の家庭によく子供の生れるといふ事實である。あんなに家族を殖してどうして生活が立つて行くのかと、他所目にも氣遣はれるほどである。こんな平凡な事實に今更らしく氣づくやうになつたのは、私も寄る年波で、子供のない家庭の淋しさを暗々裏に感じてゐるためなのかも知れない。

四十代の過半を湘南の海岸で過した私は、職業關係以外の知人との交渉は次第に疎遠になつたが、さういふ境遇にも馴れると、それに堪へてゐられるのである。却つて煩はしい思ひを免れてゐるだけでも氣樂なやうであつた。これで、體力が旺盛で、喰ひ氣や色氣が強かつたなら、こんな隱遁的閑居に安んじてはゐられないであらうが、昔から體量十一貫を超過したことのない私は、肉體の慾望に於ては極度の節制を試みなければ生命を持續されないやうに運命づけられてゐる。「食細く色薄く」といふことは、自から私の實生活の上では信仰個條になつてゐる。私を食道樂で美食をあさる人間のやうに云つたものがあつたが、私の食道樂は自分の胃の腑に適する食物を撰擇するだけの意味のそれで、それ以上の何でもないのだ。

さうまで節制して、細々と壽命を保つてゐても詰らないやうに思はれるが、鰻や天麩羅を飽食して腹の皮を破つて死んでも悔ひないほどに、私の食慾は強烈ではないのだ。口舌の趣味が、私をして有頂天にならせたことは滅多になかつたのである。それは、人間として幸福なことではないに極つてゐる。

「ここを二階建てになさるといゝんですよ。」と、地主の一人が先日私の家へ來て勸めた。その人は家運が傾いてゐるの

で、所有の地所や家屋を整理しようとした、私の借りてゐる地所も、早く賣りたがつてゐる。この地所が他人の手に移つて立退きを迫られたら困ると、私達は脅かされて、安ければ買つてもいゝと、たびく賣買の話が動いて、それが大事件ででもあるやうに、近所の人達は取沙汰してゐた。「今買つてお置きになると、お得ですよ。世間の景氣がよくなつたら屹度價が上ります」と、わざく勸めに來て與れたものもあつた。「家が建つてる上に、地主が二人で境界を爭つてるやうな面倒なところは、誰れも買ふものはありません。お宅樣でもこんな地所をお買ひになるよりも、更地(さらち)をお求めになつて御新築になつた方がお得です」と、忠告して、適當な地所を紹介しやうと云つて與れるものもあつた。

だけど、私達は煮切らなかつた。あゝ云はれゝばさうかと思ひ、かう云はれゝばそれもさうかと思ひ、何時までも極りがつかなかつた。そして、詰るところは、私達にはこんな家はどうならうと關はないので、熱心に事を極めようとはしなかつた。ことに、私は地所の話や家屋の話には、針で突いたほどの興味もなかつた。聞いてゐると、生欠伸が出た。この古い家を崩して二階建てにしたり、隣りの空地を買つて、そこへこの家を移したりすることに、何の意味があるのであらうかと、そんなことを眞顏で勸告してゐる人の心理狀態を私は奇怪に思つてゐた。

が、妻は、近所の噂に注意を拂つて、その耳に觸れたことを、私にも知らせた。

ある日、隣家の少年が松露を取つて來て、私の家へ頒けて與れたが、その時、その少年が、「おらの家の椿をこの庭へ持つて來て植ゑて上げようか」と云つたので、私の妻は怪しんで、隣りの空地はどうかなるのかと訊返した。

「家を建てるんだ」と少年は答へた。

僅か三四十坪の地所でも、そこを空けて置くよりは、小さな二階家でも建てゝ、夏場の避暑客に貸すことにしたいものだと、かねて隣家の主婦は云つてゐたのだが、女の腕一つで四五人の子供を育てゝゐる彼女には、そんな資力のあらう筈はなかつた。

妻は怪んでゐたが、隣りの狭苦しい空地にぴつたり家が建てられたなら、私の家の眺めが遮ぎられるし、騒々しくもなるし、煙などが直接に座敷の方へ吹込んで来る恐れもあるので、さういふことなら、いつそ此方でその空地をも、この頃の問題の地所と合せて買受けることにしたらいゝだらうと考へて、隣りの主婦が庭先に顔出した時に、引留めて、いろ〳〵に事情を訊ねた。

主婦の話によると、ある未亡人が淋しい獨り身の隠居所として、二室か三室の小さやかな家を建てるために、空地の一部を貸して呉れと申込んでゐるのだが、主婦はその人に貸すよりも、どうかして自分の家を建てようとしてゐるのであつた。

「都合によつたら、私の方へ賣つて頂きたいと思つてるんですけれど……」と、妻が水を向けると、主婦の心は動いた。苦しい算段をして家を建てたりなんかするよりは、いゝ買手のある時に賣拂いた方が得策だらうと思つたらしかつた。

「此方の地所の方を極めて、今夜にも改めてお話しませう」

妻はさう云つて、煮切らないまゝで打ちやつてある話を極めるために、その晩地主の家へ出掛けて行つた。其家では老夫婦や若夫婦の間が背中合せになつてゐるので、人々の云ふことがチグハグで、乗込んで話の纏められないやうなところがあつた。それで、妻は歸つて来ると、その足で直ぐに隣家の主婦を訪ねて、さづきの話をもう二三日待つて呉れと頼んだ。

「わたくしの方からお伺ひしようと思つて居りました。……さつきあなた様で買つてやらうと仰有つたから、二三軒知合ひのものを訪ねて相談いたしました。子供のためにも自分の家を建てた方がいいと、皆んなが云つて呉れますので、……

……」と、主婦は意外な返事をした。一時纏つた金の入ることの誘惑を、主婦は斥けたのであつた。

主婦の新築計劃は近所の人々を感動させた。そして財源をどうするのであらうかと、みんなに注目されてゐたが、間もなく、風雨に腐蝕された昔ながらの小屋は取壊されて、地ならしがはじまつた。

二三年前から近村の棟梁の家へ年季を入れてゐた長男と次男とが、戻つて來て、家中總出で元氣のいゝ工事がはじめられてゐた。

「他所の大工さんに頼んで、暇な時にポツ〳〵建てゝ貰はふと思つてゐましたら、松造がそれを聞いて飛込んで來て、何故おらに建てさせないと、泣いて怒るんで御座いますよ」と、主婦は悦しさうに云つた。

東京の富家に奉公してゐる長女が、何ヶ月分かの給金を提供した。松造の親方は不用な材木を貸與した。たゞ、八十を過ぎた目も暗くなつてゐる老婆だけは、「松造がはじめて家を建てるんだから、祝つておやり」と說かれても、かねて秘藏してゐる財布の紐を解かなかつた。

私達が此處に移つて來た當時は、まだたゞの子供であつた松藏に、建築工事が出來るのか知らんと危ぶまれたが、覗いて見ると、柱が立つて棟木が渡されて、屋根も壁も、家の形をして出來上つた。鋸の音も鉋の音も元氣よく聞えた。兄弟が口すさむ唄もをり〳〵私達の耳に入つた。しかし、大工の社會に身を浸してまだ日數の乏しい彼等は、勞働唄にもまだ洗錬を缺いでゐた。

「わたしもお前も枯すゝき……」と、兄が間延びのした眠つたさうな口調で唄ふと、弟は、

「娘十八……」を、胴間聲で唄つた。

朝早くから、晩にはあたりが薄暗くなるまで、彼等は働き續けてゐた。

「早く建てゝ祖母(おばあ)さんを安心させて上げなければ……」と、主婦は殊勝らしく云つてゐた。

新築中寢場所のないこの家族は、子供の多い隣りの家に寄寓してゐたのであつた。

「身に藝を覺えとくのは有難いもんですね。あの子供でもちやんと家を建てるんだから」と、妻は感心してゐた。

「娘を嫁にやるにも、ちやんとした家から出してやる方が肩身が廣いからね」

「おちつちも、休みの日に遊びに來るのに張合ひがあるでな」

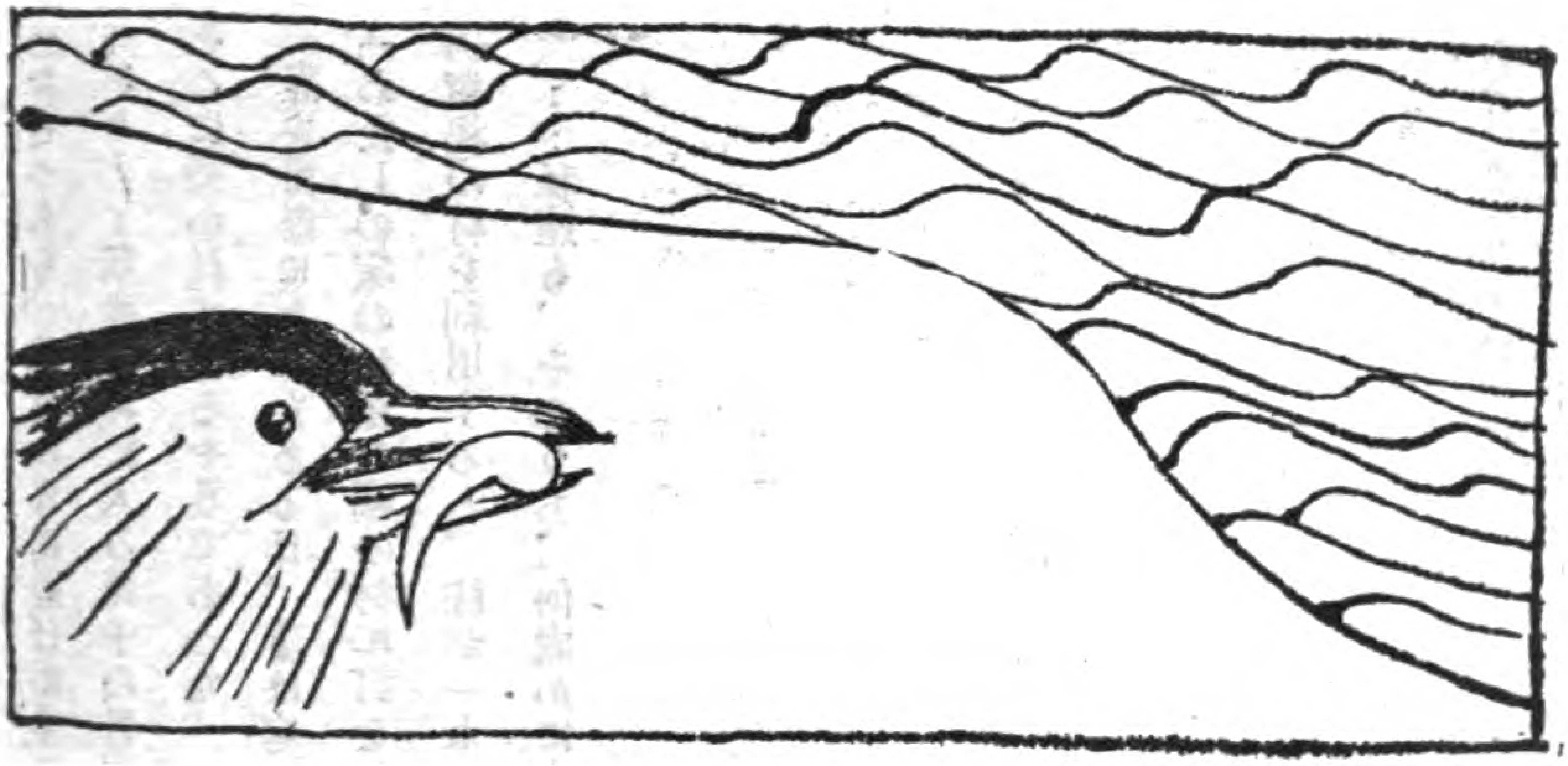
をり〳〵私達の耳に入る母子の言葉は、みんな希望の光を放つてゐた。祖母をはじめ一家族數人の永遠の安住の境地がそこに築かれてゐるやうであつた。

落成間際になつたある日、妻は庭木戸の外から其方を見て來て、

「わたしの家の垣根の端の材に釘を打つて、木戸を拵へるらしいんですよ」と、意外な發見をしたやうに云つた。

「垣根の材を利用すると、柱が一本倹約になる譯だね」と、私は應へた。

……私達も、そのうち、何處かに自分の老後の住居を新築するかも知れないが………（六月十二日）



和む

徳田秋聲

一

忙しい雨がしと〳〵降つてゐた。

彼はその時次ぎの六疊に取り出した机の前に坐つて、差迫つた創作のことに思ひ耽りながら煙草をふかしてゐた。海岸のその家は初めからひどく彼女の氣に入つてゐたけれど、彼はこゝへ來た第一夜から、餘り樂しい氣持にはなれなかつた。況して新しい戀愛事件がこゝで初まつたり、それに引續いて思ひもうけぬ深刻な心と心とのどん底まで淩け出しての觸れ合ひが、絶えず脫れがたない桎梏となつて、彼の心を絞めつけてゐたりしたので、尙更この家が憂欝なものになつてゐた。彼は今度も東京で彼女と逢つて、こゝへ來るまでに、愛の氣分の釀せる郊外の或る家に一兩

日足を止めてその日〳〵の仕事をしたくらゐであつた。いくら愛する女との同棲でも、自身の生活にふさはしい各種の條件の、貧しいながらに具はつた自分の書齋に比べて、彼女だけの生活雰圍氣しかもたないその家に落着くことのできないのは、言ふまでもなかつた。ホテルか旅館なら、まだ其でも好かつた。彼女が彼の創作氣分を劬はるために優しい注意を拂つて、新鮮な魚類を愛する彼の食膳を賑はすために、自身肴屋の冷藏庫を見に行つたり、つひ近くの八百屋へ野菜の仕込みに行つたりするのも、若いもの同士の樂しい世帶氣分とはちがつて、年取つた彼に取つては寧ろ憂鬱な氣持の負擔となるばかりであつた。

「今日は養神亭で晩飯を食はうかな。」彼は時々言ひだした。

ホテルにも日本料理はあつたけれど、何となし外で食ふ米の飯を想像させるやうなものであつた。

「さう。それでも可いけれど、詰らないぢやないの。食べに行くお金で、新しいお肴を買つたら何う？」

「さうね。」

「でも先生の氣分次第で、行くなら行つても可ござんすわ。」

彼は値段も聞かずに彼女の買つて來る鯛の頭やぴち〳〵跳ねる海老魚や鱸のやうなものが、惜氣もなくこて〳〵並べられるのを見ると、不斷の食事としては少し贅澤だと感じるほどの世帶氣がありながら、外へ出て食べる金を惜しいとは思はなかつた。それはちやうど、必要な下駄を買ふのに思ひ切が惡くて、草履穿きで自動車で乘り出す彼女の生活氣分と似たやうなものであつた。

しかし彼は此頃起つた彼女の戀愛事件に繫かつて、彼女のために尤も不利益な、新聞記事が出たとき、彼の輕率から尤も苛酷な批評を彼女に下したことになつた結果、彼女の死活問題に彼自身直面しなければならなかつた。それには簡短に說明しがたい彼自身の心機や、事實の錯誤もあつたが、兎に角彼女の生活は極度に虐げられ脅かされた。彼は今まで愛し育

てて來た彼女が、そんな風に彼の脚下に蹂躙られようとは思はなかつた。彼はその記事を一瞥したとき、過つて殺人罪を犯したものゝやうな憂愁に囚はれた。さうした彼の行爲が、何んな風に人々の目に映つたかは、説明するまでもなかつた。若し事情が死を許さないとすれば、彼は彼女を愛することによつて、彼女と彼自身とを救ふより外に道がなかつた。いかに双方が悶がき苦しんでも、生活がぴたり行かない二人の事情から、ふら／＼と彷徨ひ出た彼女の哀れな靈が、蒼白め切つて彼の懐ろへ返つて來たのも寧ろ當然であつた。彼女は虐げられた自己を公衆に表白するだけのものを書き殘さないうちは、或ひはむざ／＼死ねなかつたかも知れなかつたが、しかし或ひは死んだかも知れなかつた。海岸の家を飛出して、彼の許へとやつて來た彼女の化粧袋のなかに、劇藥の小壜の用意されてあつたのも其の頃のことであつた。

二

その日彼女は朝から頭が痛いと言つて、一度あげた蒲團を又た戸棚から下ろして、彼に遠慮しい／＼七つになる長女を傍に寢かしながら、讀みさしの本を讀んでゐた。低級な新聞記事のために、ちよつと外出しても、卑俗な一般民衆から何かと理由のない嘲罵の聲を浴びせられたりするので、うつかり東京の町も歩けないやうな、たとへば偶々躓づいて井戸へ陷ちたものゝ上から、無慚に石を投げつけるやうな不當すぎる迫害に怯えてゐる彼女は、昨夜の夢見がわるかつたので、今朝は一層氣分が憂鬱であつた。

「何だか多勢寄つてたかつて、草原のなかへ引張りだされて殺された夢なのよ。すると死んだなりに私の靈がその人達に附絡はつて呪ひつゞけるといつたやうな氣持なのよ。何うもそれが先生らしいのよ。チヤアナリズムの力で社會的に殺された私が今度は完全に先生の手によつて殺されてしまつたので、靈だけが先生に取ついて離れないんだわ。」

彼は「かうなれば何處々々までも喰着いて行つてやる」と言つて、紙上に惡用された彼の批判に對する、此頃の彼女の

呪ひの言葉を思ひ出して、今度も亦たさつと彼女の荒れだす時が來るだらうと思ふと、おち〳〵平和を樂しむ氣にもなれないのであつた。

「また例の月の病氣ぢやないか。」彼は彼女の氣分を和めるやうにわざと輕々しげに言ふのであつた。

今迄にも其の例は澤山あつた。劇しい爭鬪のあとで、彼女は屢々月の病氣を發見するのであつた。

さうした暴風の豫感に似たやうな不安が彼の頭の何處かに潜在してゐた。勿論それは其の時に限つたことではなかつた。つひ最近にも、ふとした事から彼は彼女と言爭つた揚句、ちやうど居合せた青年詩人と、若い女流洋畫家と共に、彼を引止めようと百方手を盡くしたに拘はらず、妙なはづみで彼は雨のなかを、到頭附近の旅館まで引揚げたことがあつた。

その日原稿の用事で東京へ出て行つた彼女は、約束の時間に二汽車ばかり遲れて歸つて來たのであつた。中途彼女から電話がかゝつて、是から歸つてからでは何うせ晩餐の仕度が遲れてしまふから、ホテルか何處かへ食べに行きたい。それまで食べずに待つてゐてくれと斷はつて來たけれど、電話の聞き違ひがあつたりしたことから、彼女が歸つた頃には、もう食事をすました後だつたし、彼女も取引先きの雜誌記者連と連立つて銀座の或る食堂へ寄つたりして來てゐた。彼はその事をさして不愉快に思ふ理由はなかつたが、銀座でやつて來た今夜の彼女の化粧のことから、つひ彼女の主張が、さう云ふことについての彼の無理解さ――詮じつめれば趣味の古さをそれとなく指摘したことなどが、彼の氣分を險しくしてしまつた。彼女は彼がきつと其處へ出て書くつもりであらうと思はれる近くの旅館へ、先きへ立つてづん〳〵入つて行つた。が、彼はわざと其處を通りすぎて、今一つ比較的、遠いところにある葉山の旅館の方へづん〳〵歩いて行つた。彼女は二人の若い男女と共に、先きを越して又た其の旅館で彼の落着けさうな下の部屋を擇んで彼の着くのを待つてゐたが、旋毛曲りの彼はそこでも彼女をはぐらかして、二階に部屋を取つた。そして彼女を突返へしてしまつた。翌朝二三度彼女から電話がかゝつて來た。彼は二階の部屋の眞中で、獨りで原稿紙に向ひながら、久しぶりでのう〳〵した氣持で、手招越し

に庭の新綠を眺めてゐた。電話口へ出る氣もしなかつた。彼は到頭出なかつた。長いあひだ遮ぎられてゐた自然の懐かしさと孤獨の靜けさ氣安さが、しみ〴〵彼の胸に蘇(よみが)へつて來た。

「どこか新綠の山へ行きたい！」彼の憧れが旅行慾を頻りに唆つた。

しかしさうしてゐるうちに、彼女に爲て來た昨夜から今朝へかけての自分の行爲に、何處か無理な捏ぢつけのあることが、次第に彼の心に淡い悔ひと憐れみとなつて溶けこんで來た。

午後になつてから、彼は東京から呼びよせた青年が着くと同時に、持つてこさせた金で宿の支拂ひをして、再び彼女の家へと自動車を向けてしまつたのであつた。勿論彼女は彼を待つてゐた。

しかし其の日の爭鬪は、それよりもづつと深いところの双方の惱みや苦しみを抉り合つたものであつた。辛辣な言葉の投げ合ひが、二人を遠い距離へと相互に彈き飛ばしてしまつた。

勿論それは今彼が書かうとしてゐる作品の材料についてゞあつた。

「二人のことが書けないとすると、外に材料を求めなくちやならないんでね。」

さうは言つても、彼は口に言ふほど材料に苦しみはしなかつた。時日があつて、氣分を鍊りさへすれば、書くに都合の好いものが二つ三つ頭に入れてあるのではあつたが、今はちよつと手を着けるのに難いやうなものであつた。差當つて氣輕に筆を起せるやうな手頃なものが必要であつた。彼は最近になつて、作家同士の同棲生活が、職業上ひどく窮屈なものであることに、漸と氣づかせられてゐた。それは强ち彼女をモデルに使ふ場合のみではなかつた。自分の生活の本筋とさう關係のない事實でも、双互に差控へなければならない點のあることが、多少とも免れないのであつた。彼女にもさうである通りに彼にもその不便が感じられた。勿論職業心理だけで、二人の生活が支配されなければならぬ理由は少しもなかつた。書きたいとか書きたくないとか云ふ意味が、もつと彼等の生活に取つて、もつと深い内在的な慾求から湧くもので

あることは、言ふまでもなかつた。

「書いちや厭よ。私のことは書いて下すつちや厭よ。」

彼女は古くから讀みなじんで手垢で汚れ切つたルツソオの「孤獨な散歩者の夢想」を、その時も讀んでゐたので、ふいと枕頭において言つた。

「けど「春來る」の續きを書かないと、ちよつと困るんだがな。あれはあれだけのものぢやないんで、謂はゞ序曲に過ぎないんだから。」彼は呟いた。

實を言ふと、取扱ふべき事件が、その作品では少しも手がつけてないので、それを完結しておきたいとは思つたけれど、其れを書くには可也な努力が必要だつたし、二人の生活の内面へも踏込まなければならぬので、彼も今直ぐと言つては較荷が重きに過ぎるのであつた。

「それは貴方は藝術家だから、お書きになりたいでせうけれど、私の生活を脅かしてまで書いて下すつちや困りますわ。私は食つていかなけあならないんですからね。貴方のモデルにされて、貴方の立場から見た私といふものが何んなに世間から誤解されるかは貴方も解つてる筈ぢやありませんか。」

「しかし隨分好くも書いて來たからね。それが却つて世間の反感を買ふやうな結果になつてゐるんだ。私の藝術の種々相を、もう少し世間に解つてもらつた方が可いと思ふ。」

「善くても惡くても可けません。「春來る」前のことは介意いませんけれど、最近のことは何うか止して下さい。それは表面から見れば、好くも書いてゐるけれど、隨分貴方の主觀で私の氣持を歪めてゐるところもあるわ。近頃の短篇で、貴方が自分の立場を守るために、何を書かうとしたか、私にはよく解る。あの新聞記事だつて、貴方がべら〳〵何でもお饒舌をして、まんまとヂャアナリズムの手にかゝつて醜い内輪喧嘩を世間へ曝け出したやうなものぢやありませんか。」

いつか彼女は勁烈な感情が昂奮して來て、尖鋭な舌端に恐ろしく狂熱を帶びて來ると同時に艶美な相貌までが蒼白めきつた神經の顫いで、ひどく凄味をもつて來た。

「しかしあれが僕の意志でないことは、今更ら言ふまでもないぢやないか。僕の私的批判を箇人的に話したのは落度だとしても、記者が初めから先入見をもつてかゝつてゐるんだから仕方がない。」

「貴方は新聞記者といふものが、何んなものだかと云ふことくらゐ、百萬知つてるぢやありませんか。婦人雜誌の記者に對してすら、今迄貴方は相當に注意ぶかい態度を取つて來たぢやありませんか。誰の生活にしたつて、裏表はありますさ。秘密といふ意味ぢやないまでも、洩け出していゝ事と惡い事とありますさ。私は貴方に食はしてもらつてゐる奧さんと違ふぢやありませんか。生活まで脅されて堪るものか。單に三面記事なら未だしも救はれる道はありますさ。私を愛してゐる大家の貴方の口から出ただけに、私は物の美事に踏み潰されてしまつたぢやありませんか。材料が必要なら子供さんのことも少し書いたら可いぢやありませんか。自分の子供さんのことだと蔭張書けないぢやありませんか。私の困ることは平氣で書く癖に。」

「子供のこともいづれ書くさ。が、今は駄目さ。」

いつか彼女は床を出て、彼の身邊を徘徊してゐた。荒れて來ては何う止めようもない彼女のヒステレックな狂熱なので、彼はそろ／＼手廻りのものを片づけて逃げ仕度をしてゐた。憂欝なこの家を脫れるのに、何うか好い汐を見計はうと、彼は內心そんな事を考へてゐた。彼女の戀愛事件があつてから、彼は愛を口にされゝばされるほど、動もすると氣分の憂欝になるのを何うして見ようもなかつた。

「それぢや君のことは何にも書かないことにして、僕はちよつと調べなくちやならない材料があるから……。」彼は着替の着物なんかを纏めるために立ちあがつた。

「可けない。歸つちや可けない。逃すもんか。私は貴方にあんなにまで言はれて、生活的に悉皆殺されてしまつたんだ。貴方を殺して死なうと思つたけれど、貴方には長い間の生活や澤山の係累があるから、きつと卑怯に逃げるに決まつてゐるでせうさ。私は獨りで死にますよ。子供さへ思ひ切れば何時でも死ねる私なんだ。貴方には色々醜い人生を見せてもらひましたさ。私は生きて行くのが物憂い。若いもの同志なら、あゝまで醜い嫉妬はやかないだらうつて、皆んなさう言つてゐますよ。」彼女は歪んだ顔を彼に突きつけて、悄さげに嘲るのであつた。

彼の神經はさすがに顫へた。ぶつかるものを强く大きく見てゐるので、何うかすると全力を擧げて、底を浚け出して、今迄の彼女とは全然違つた、狂燥と險惡さとで、打つてかゝつて來る彼女の弱さ、子供らしさではあつたが、其場に差し當つては産れつき大きな心臓を持合せてゐない彼は、つひ激動しない譯に行かなかつた。

「嫉妬だつて？」

「嫉妬ですとも。醜い老人の嫉妬ですさ。」彼女は口を歪めて小鼻をぴくつかせた。

勿論或時には彼に嫉妬はあつたに違ひなかつたが、大抵の場合、彼は彼女の愛の正體をはつきり見分けようと力めて來たことは明らかであつた。

「おれは氣持の外れて行つたものに、嫉妬を感じたと思つたことは一度もない。己はたゞ見極めをつけたかつたばかりなんだ。あれは己の批判だ。」彼は最後の言葉を、わざと慘忍な氣持で、押しつけるやうに言ふのであつた。

「あれが貴方の批判？　ふえん、私は何んな場合にも、あんな酷い言葉を浴びせられたことは一度もありませんでした。」

「だから僕は作品が書きたいんだ。善とか惡とかそんなことで決められる問題ぢやあないんだ。僕の立場とか愛子の不利益とか、そんな功利的なものでもないんだ。人生と藝術との妙諦が私の心にぐら〳〵渦をまいてゐるんだ。一つを書いて一つを殘しておくと云ふ譯に行かないんだ。今迄のやうに好い加減な皮相だけを塗りつけておくことは出來ないんだ。愛

子の性格なんかは勿論僕の藝術的心境なんてものも、誰にも理解してもらへないんだ。」
「貴方はさうでせうけれども、書かれる私は何うすればいゝの？」
「愛子も書く。」
「それあ書きますさ。死ぬ前には書きますさ。でも貴方のやうな大家と私とは違ふんです。私には貴方のやうな三十年も鍛へられた腕がないぢやありませんか。それを書けと言ふのは無理ぢやありませんか。――兎に角書かないで下さい。」
「ぢや止しても可い。それだと材料を取調べなければ可けない。」
「ふん、またあの家へでも行くんでせうさ。」
「いゝえ、行きません。」
「ぢや證書をかきなさい。私のことは一切書かないと云ふ……。」
そして彼女は机を隔てゝ彼の前へ坐ると、紙を並べた。
彼は仕方なし其を書いた。
「書いても何にもならないよ。」
「いや、なつてもならなくつても。」
二人とも興奮しきつてゐた。
「貴方みたいな吝な人はありやしない。私は貴方との生活を續けるために、貴方に迷惑をかけまいとして、經濟的に何んなに苦心をしたか。私は貴方を愛したために、結婚もできなくなつてしまつた。私は貴方を愛してゐました。それあ近頃は少しは御厄介にもなりましたけれど、一と頃の私の貴方への心遣なんて、今思つても可憐らしいくらゐでした。貴方は私を書けば食べて行けるでせう。書かれる私は食べて行かれなくなるんです。」

雄辯な嘲罵が止度もなく續いた。新聞記事中の彼の談話に對する憤りが、又た一時猛烈に彼女の狂熱を煽り立てた。顏が眞蒼になつてゐた。後は何時でもからりと嘘のやうに霽れあがつて、不斷の無邪氣な明るさに返る彼女であるのは判つてゐても、その瞬間の興奮狀態は、さう爽いものではなかつた。彼は仕方なし逆襲して行つた。彼女の兩腕の附根をむづと掴んで　力委せにぐん〳〵押して行くと同時に、彼女を罵り返へした。

「惡魔！お前は惡魔だ。」彼は出まかせに浴びせかけた。

彼は心から怒つてゐる譯ではなかつた。頭の好い彼女のことだから、多少のトリックはあるにしても底の底まで明るく透き通つて見える彼女の性格や氣質に、どこに惡魔らしい惡さがあらう。彼はさう思ひながらも、此の場合高壓的に出るより外なかつた。

彼女は呆れたやうに、目を圓らにして恐ろしい彼を見た。彼は爭ひ悶踠く彼女を、寢床の上まで引張つて行つて、むりやりそこに抱き据ゑてしまつた。

抱き合つたまゝ、坐つたり立つたりして座敷の次ぎの室とを、轉々としてゐたので、漸く彼女を蒲團のうへに押しすゑて、机の前へ還つて來た時には、心臟の弱い彼も疲れてゐたが、彼女もへと〳〵になつて、そのまゝ横になつてしまつた。始終おろ〳〵して、茶托や何かを、おづ〳〵彼に投げつけてゐた子供も目に一杯涙をためて、彼女に寄り添つてゐた。

彼女の鎭まつたのを見て、彼は湯殿をぬけて廁へ通ふ廊下のところから持出して來た彼女の華奢な雨傘や塗下駄をはいて、近くの車屋へ出かけた。彼はそこで持つて來た草履に穿きかへて、今度の汽車に五分ばかりしかない驛へと急がせたが、それには間に合はなかつた。切符を買はせてから、鏡台のうへに置き忘れて來た腕時計を取りにやつたあとで、彼は漸と吻とした氣持になつて、孤獨の自由さのなかに置かれた自己に還つた。

汽車のなかでも、彼は乘客の注目から全く自由であつた。彼は誰れにも見られない心安い一隅の人であつた。世間から

全く置き忘られてしまつたやうな、質素といふよりか、寧ろ小汚いといつた方が適當な風體の老人の、四十がらみの黒いセルの洋服を着た鼻の大きい紳士と話をしてゐるのが、ちやうど彼の正面に腰かけてゐた。曾ては海軍大臣の椅子に二度も坐つたことのある、同鄕の人であることが、一度宴會で見た記憶から、直ぐ判つた。彼女を伴はない今の彼は、人を觀察したり、その人の生涯を考へたりする餘裕さへ出來てゐた。

三

それが永久の別離にならうとは、はつきり意識してゐなかつたし、この儘に別れてしまふのは、餘りに無責任のやうで、曾ては自分を痛ましく思つた彼も、今は却つて頼る邊を失ふであらう彼女を痛ましく思つた。勿論物質だけに生き得る彼女ならば、彼女は何んな幸運にでも有りつくのに苦しみはしなかつた。現實生活の苦惱や藝術を離れた戀にのみ生きうる彼女ならば、相手を擇ぶのに事缺かなかつた。彼女を欲しがつてゐる異性の如何に多いかは、彼にも判つてゐた。彼女を憎み彼女を嘲ける人ですらも、彼女を嫌ひではなかつた。特異な美點と情緖とが、性格以上に彼女を不幸にしてゐた。しかも善惡ともに全部的な彼女を理解し愛するものは、何と言つても彼であつた。彼の如き作家に愛せられることが、何んなにか對社會的に不利益な結果になつてゐるかが、彼女の惱みであることは勿論であつたが、こゝまで理解し合ふまでの、過去一年半ばかりの二人の生活を思ひ返すと、さう手輕に別れられさうには思へないのであつた。

しかし彼はこれが別れるのに好い汐時だといふ氣もしてゐた。今度また引返すやうなことがあれば、また同じ悪着の枠に嵌がれ、爭鬪の捲れ返しを繰り返すに決まつてゐた。

その晩彼は友人の家で、そこの夫人の友人から、結婚の不幸から來た若い女の自殺事件に關する話を聽き取つた。そして食事をしたあとで、時間を潰すために、二三の人と花など引いてゐたが、蕭張興味がなかつた。事によると彼女がいつ

も宿を取ることにしてゐる彼の近くの旅館へ今夜あたり出て來てゐるかも知れないのであつた。そこから電話か使ひが來さうに思へた。この場合彼は一時それを避けたかつた。このまゝ棄てつぽかしてはおけない責任感はもつてゐたけれど、彼女を見るのが物憂かつた。彼は誰にも擾亂されない生活の靜かさを願つてゐた。主宰者のない家が、不安狀態に陷つてゐることも前から氣になつてゐた。彼女の魅力や若かさや情感から來る、複雜多樣な色彩や情緒や雄辯やは、總て彼の日常生活に取つて豐富すぎる饗宴であつた。餘りに美しい自然のなかに不斷生活するものが、普通短命である通り、美の耽視と愛の惑溺とは彼を疲れさせ憂欝にした。絕えざる靚裝が見飽かるるものであるやうに、藝術家にも亦藝術や戀愛を離れた日常生活の安易さが必要であつた。

　彼は今夜あたり家にゐれば、彼女から使が來なくても、事によると書生を彼女の家へ見にやるかも知れないのであつた。彼はそれを怖れた。

　彼はまた彼女と海岸を散步してゐた一昨日のことを思ひ出した。彼女はその時、自分をモデルにして貰ひたくないために、材料を獵るための他の女との交涉を避けさせるために、自身二人のことに交涉のない題材について、長々と話してくれたことなどを想ひ出さずにはゐられなかつた。

「これなんぞ私には迚も書けさうもありませんの。先生ならきつと好いものができると思ふわ。お書きになるなら、もつとデテールズにわたつて話してあげますわ。」

　彼女はそんな事を言つてゐた。それはストリンドベルグの作品にでもありさうな人生の最も深刻な部分に觸れたものであつた。美貌の妻を失つた男と、その妻に似た娘との戀愛關係から來る、父子の爭鬪的零落的運命の晦澁たる徑路と墮落の歷史であつた。

「そんな深刻なものは、私には興味がなくなつた。そんな人生を、いくら凝視めたところで何うにもならないことだから

ね。」

しかし彼女を辿つて來る其の事實には、奇しくもローマンチツクな藝術的雰圍氣がかゝつてゐるのであつた。

「その外にもいくらでも材料はありますよ。先生が默つて見てゐれば、何んな材料でも私の體驗から提供してあげられると思ふの。」

「でも愛子の體驗は愛子の體驗だからね。」

「現實をそのまゝ取扱つたものは、興味がないといふ人がありますね。」

「現實の人生も人間の頭から想像されたものぢやないか。藝術家が本や机の上で創造したものよりか、遥かに偉大な創造力をもつてゐるものが此の人生なんだと、僕は信じてゐる。」

「でも内輪のことを書かれるのは困るわね。」

「それもそうだ。」

そんな話をしたことなどを思ひ合せると、それが今日の爭ひの前兆だつたやうにも思つて、彼女の心根が可憐しく思へて來た。

遊んで居るうちに、夜が更けて來た。もう十二時近くであつた。果して彼女から電話がかゝつて來た。

「出たくないんですがな。」彼は頭をかゝえた。

「今夜逢へば又た同じことの繰返しになるんだから。」

女中や細君が應對してくれた。一度途切れて又たかゝつたりして、可なり長い時間がかゝつた。最初は愛子自身で、その次が愛子の宿の女中であつた。でも細君が彼の不在を主張したところで、終ひに男が出て嚴重に掛合つた。

「行つておあげになつたら何うですか。隨分困つておいでのやうですわ。」

大分たつてから電話口を離れて、細君が傍へやつて來て言つた。

彼は悩ましくなつて來た。しかし逢ふのは矢張り氣に進まなかつた。

「私愛子さんにお出で下さるやうに申しあげようと思ひましたけれど、誰方か男の方が電話口へお出でになつて、ずゐぶん厳しく詰問されましたの。」

「何んな風に?」彼はそれが誰れであるかを心に模索しながら訊いた。

「法律の心得でもある方ぢやないんでせうか。一度居ると言つて後で居ないといふのを可笑しい。出向いて行つて若し居たら何うするんだと極めつけるんですの。私も申しました。若しお出でになつて、居なかつたら何うするんですかつて。」

彼はそれが最近の彼女の結婚問題に關係した相手の青年の親類の男ではないかと想像した。その問題はそれきりになつてしまつたけれど、事によると苦しまぎれに、彼女が再びその人達に飛込んで行つたかも知れないと思はれた。そして其が若しその男だとすると、暴力團を控へてゐるだけに、愛子を抱き込んで、彼を脅かしはしないかと想像された。その結婚談が破れて、愛子が再び彼の懐ろへ飛込んで來たとき、總てが彼と愛子との共謀の仕事だと誤認されたところから、彼の留守宅が其の男と引率して來た辯護士や壯士とに脅かされたことがあつた。後でその誤解は釋けたにしても、双方の立場から餘りいゝ感じは殘つてゐなかつた。愛子が興奮して其處へ飛込んで行つたものとすれば、彼の身邊は危險だと思はれた。

「それは立派な紳士ですがね。何しろ暴力團を率ゐてゐるんでね。いくら自棄糞になつたからつて今更愛子がそこへ行くやうなことはない筈だけれど、外にさういふ男がないからね。」

彼はその友人の家にゐるのも危險だと思つた。一般世間が彼と愛子とをしらないと同じに、その男にも彼の氣持などの解りやう筈はなかつた。それだけ彼は危險を感じた。

彼は時を移さずその家を辭して、更に他の知合の二階に潜むことにした。

四

三四日して彼は彼の書齋へ歸つて來た。書く氣分を作るために、青年をつれて花を買ひに通りへ出たりした。

あの晩愛子が旅館からもたしてよこした手紙を、彼はその時始めて見たのであつたので、友人の家へ電話をかけたあとで、宿で彼の使つてゐる青年に、その夜三時頃まで述懷談を聞かしたことなども、彼は始めて青年から聞かされた。

「愛子さんの言分をきくと隨分道理正しい點もありますね。」青年は彼に告げた。

「僕は先生がお逢ひにならないと仰やるから避けましたけれど、結婚時代の負債で、愛子さんの連帶になつてゐるものがあるんださうで、愛子さんが此頃收入が多いといふ新聞記事を見て、債權者から督促が來て、差押へを喰ひさうなんですつて。」青年は話した。

「そんな事があるの？愛子も苦勞が多いな。」彼は嗟嘆しずにはゐられなかつた。「それも先生が新聞記者に收入の多いことをお話しになつたからだと言ふんです。今ぢや收入もあの頃の三分の一もないし、大連に殘つてゐる前夫の後妻と書生から、理由のない旅費を要求されてゐるなんかも、その爲だと言ふんです。」

「それあさうだけれど、それかと言つて何うもね。」

「それでそんなお話もしたいし、是非先生に逢はしてくれと言ふんですが……。」

「さうね。」

「愛子さんが電話をおかけになつたときも、僕は傍にゐたんです。僕の名前でおかけになるから、それぢや困ると僕も言つたんですけれど。」

「その時男が代つて掛合つたさうだが、それは誰かね。」

「宿の番頭です。」

「番頭？」彼は彼の想像と恐怖が、全く的はづれであつたことを恥じずにゐられなかつた。

「僕はまた愛子が棄鉢氣分で、大倉のところへ飛込んで行つたんぢやないかと思つてゐた。」

「愛子さんもそんなことはしないでせう。」

「とは思つたけれど。」

「僕が愛子さんをはづさうとすると、追つかけて來て、先生も私を愛してゐるんだから、生木を裂くやうなことはしてくれるな。先生が今お逢ひにならないと、あとで急度地だんだを踏んで悔ひるだらうつて……。」

「そんな事を言つた？　やつぱり子供をつれて歩いてゐた？」

「え、どこへ行くにも。」

彼はいぢらしい彼女の姿を想像した。男性的な氣慨と平安時代のやうな明るさと自由さとをもつた彼女だけに、一層痛ましく思へた。

「しかしあの女のことだから、僕が駄目だと思へば、何か又た新らしい道を切拓いて行きはしないかね。」

「さあ。」

「こんな事で參つてしまふ愛子でもないだらうと思ふけれど。」

「さうですね。子供をつれて北海道へ行つて、前夫を慰めて來たいなんてことも言つてましたけれど。」

「旅費がないだらう。でも行つたか知ら。」

「さあ、行かないでせう。」

「まだあの旅館にゐるか知ら。」
「もう居られないぢやないですかね。」

彼は苦しみのなかに取殘された愛子の姿を想像しながらも、何うにかかゝうにか自分だけの日常生活に還つて來られた安易さを感じた。彼の人生がまた〳〵廣々と目の前に擴がつて來るのを感じた。

五

それから又た三四日たつた。

時とすると彼は手紙を出さうかと思つた。書生を見にやらうかとも思つた。海岸の家へ電話をかけやうかとも考へた。

「もう東京にゐないだらう。」

「さうですね。僕は又た行くやうに言つておきましたけれど、逗子かも知れませんね。明朝にでも僕ちよつと行つて見ませうか。」

「さうね。」彼は煮え切らなかつた。

彼が家の青年と、そんな話をしてゐる處へ、ちようど青年作家が一人來合せた。

「愛子さんは。」

「しばらく逢はない。事によると是れきりになるかも知れないと思つてゐるんだがね。」

「今度は態度をはつきりさして下さいよ。」青年はそれが彼の周圍の人達の要望であるやうに言ふのであつた。

「その積りなんだけれど……。お互ひに苦しくなるばかりだからね。」

「藝術上の心配はしておあげになるでせう。」

「別れるとなれば、それもちよつと困ると思ふんだがね。彼女も厭だらうし。」
「この頃の愛子さんの心境は何うなんでせうか。」
「考へてるだらうね。」
「好い人だがな。」
彼と彼女との爭鬪のあつた前日のことであつた。海岸の家へ訪ねて來た此の青年と、彼と彼女と、彼女の子供と、四人で葉山のはづれまで自動車を驅つて、歸途夕暮の汀を傳つて話したり謳つたりして、その晩彼女の家で晩餐を共にした。その時に愛子の青年に與へた好い感じはまだ青年の印象に殘つてゐた。
「これあ好いんだとも。餘りに誤解されすぎてゐるとは思ふんだけれど……。」
「親しく話をしない人には、好いところが解らないですね。」
「利害觀念なしに逢つた人は、人生が明るくなると言つて感激してゐる人もあるんだけれど。兎に角彼是批評に上るだけでも、豪いとしなければならない。」
「世間では色仕掛で先生を釣つてゐるやうに言ふんですけれど……。」
「ちよつとさう云ふ風に見えるだらうが自己を僞ることの出來る女なら、もつと悧巧に立廻るよ。」
彼と青年とは愛子の性格や藝術や運命を論じて、互に涙ぐんでしまつた。
「僕ちよつと行つて來ませうか。愛子さんの心境を尋ねに。」
「さうね。君一箇としてなら。」
「明朝行かうかな。逗子にゐますか。」
「さあそれも解らないね。僕も後のことも相談に應ずる責任は感じてゐるけれど、その方法がね。」

「しかしこれでぴつと落着いて、勉強すれば返つて好くなるでせう。その氣力が愛子さんにありさへすれば。」

「このまゝへたばるやうなことはない。」

新綠の庭に暮色が這ひかゝつて來た。

「どこか山へ行きたいね。」

「どこかお伴したいですね。」

彼は女中の手によつて作られる晩飯を思ふと、氣分が憂鬱になつた。

「飯食ひに附合つても可いだらう。」

さう言つて彼は女を呼んで着かへに取りかゝつた。そして羽織の紐を結んでゐるところへ、

「愛子さんがおいでになりました。」と、一人の女が大急ぎでやつてきた。

はつと思つてゐるところへ青い洋服にオレンヂのスエターを著て、此のあひだ彼が見立てた帽子を眉深かに冠つた彼女が、子供を從へてひよこ／＼と入つて來た。

「先生！」彼女は懷かしげに言つて、そこに兩手をついた。

彼は狼狽てたが、目が熱くなつた。この二週間ばかりの間だに、彼女の顏はげつそり窶れてゐた。

坐邊の青年が急いで退散した。

「よく居て下すつたわね。お逃げにならうとしたぢやなくて？」

「今K―君と飯を食ひに行かうかと思つてゐたところさ。」

「さう。私さつき政雄さんに不二屋でお目にかゝつたの。貴方が家にゐるから行つてごらんなさいと言はれて來たんですけれど……でも逢へてよかつた。私今度すつかり考へたのよ。私あれから「復活」と「懺悔錄」を手から放さないのよ。

「復活」は活動や何かで見ると、あんな通俗的なものだけれど、讀んでみるとトルストイと云ふ人の深い惱みが、ネフリユドフを通してづき／＼胸を打つて來るのよ。あの人は何をやつても駄目なので、つく／＼自分と云ふものに絶望してしまふのね。」

彼女はそこにぺつたり坐つて、その作から得た生々しい感激を、何う言現はしたものかと、熱心に説きはじめた。

「ねえ先生、私じみに眞面目にやらうと思ふの。私何うしても物質や結婚生活に滿足して行けない女なのよ。ねえ先生、私これから教會にも行かうと思ふの。教會なんて詰らないでせうけれど、氣持を引締めるだけでも好いと思ふの。」

「君も苦しい性格をもつてゐるからね。」

「さうよ。」と彼女は彼の手を取りながら、

「『復活』なんても今讀んでみると、まるで意味がちがふのよ。何をやつても自己を見出すことの出來ないのに苦しんでゐるネフリユドフの人間らしい弱さに、トルストイ自身の深い惱みがあると思ふのよ。」

そして彼女はまたトルストイとルツソウについて、今の彼女の宗教的な敬虔な氣持で熱心に語るのであつた。

「ねえ先生、私は弱いのよ。先生と離れてゐられないのよ。助けてちやうだいね。もう喧嘩なんてしないから。あの時だつて、先生が一言、お前のことは書かないよと言つてほしかつたのよ。」

「あれから何うしてゐたの？」

「Kさんが私をはぐして、ちつとも來てくれないから、一旦逗子へ歸つたけれど、一昨日また出て來たの。私づゐぶん苦しんだわ。迚も駄目なら田舍へ歸らうかとも思つたの。子供は何うにかなるだらうから、私の氣持や踏んで來た道を書きのこして死なうかと思つたの。今なら本當に死ねさうな氣がするの。先生を誘ひはしないことよ。一人で死んで行きますわ。」彼女はさう言つて涙をふいた。

「まあ可い。死ぬなら何時でも死ねる。しかしさう悲觀することはないよ。今までは少し調子が好すぎたんだからね、」彼は彼女の背を撫でながら力づけた。

彼女は少しは安心したやうに、庭の方へ目をやつて、

「新綠が好いわね。もうこんなに繁つたのね。」

「家ももう少し何うかしないとね。」

「さうよ。先生も御心配が多いのね。今度は私も働くわ。」

「今どこにゐるの。やつぱり福井屋？」

「あすこは極りがわるくて。でも、皆んな同情してくれて、女中さんも番頭さんも一生懸命電話をかけてくれたのよ。」

「宿は何處？」

「神田の方なの。」

「債權者の方は？」

「辯護士のところへ行つて、私話して來たの。そしてお金三十圓だけおいて來たの。辯護士も同情してくれて、それ以上請求しないことにしてくれさうなの。」

「何のくらゐの金額だね。」

「千圓たらずなのよ。」

「何も彼も一時になつたんだね。僕も氣にはかゝつてゐたけれど……。」

「ちよつと其處まで出てくれない？」

「出よう。」

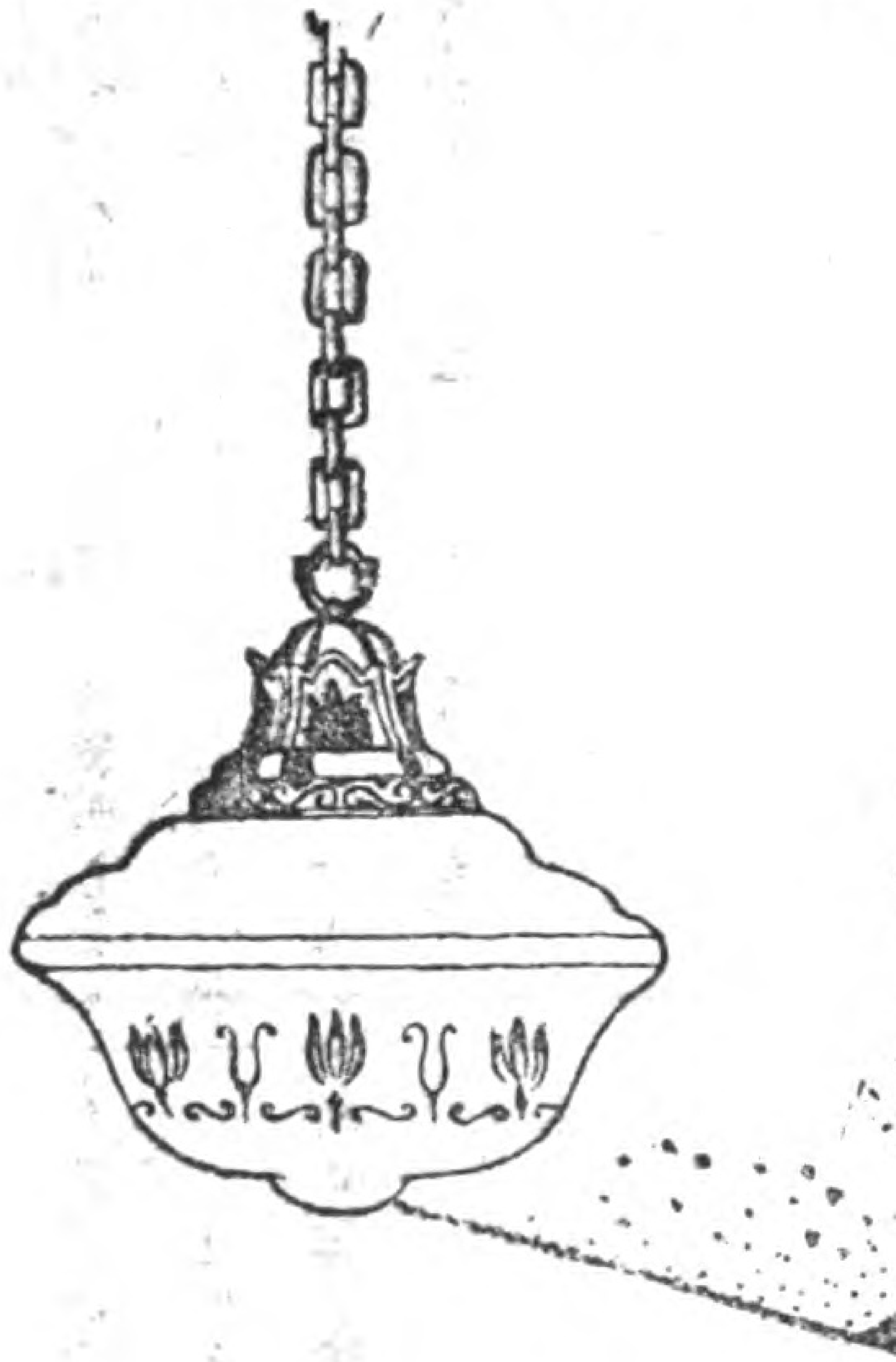
家のK―青年とT―青年も、一緒について出た。
「わたしK―さん厭よ。誰れとも厭よ。K―さんなんて隨分薄情なのよ。」彼女はそつと彼に呟いた。
「K―が薄情なんぢやないよ。僕がさういふ風にさしたんだ。」
「でも隨分ひどいのよ。先生と私のなかを知つてゐたら、あんなにまでしなくても可いと思ふわ。」
「まあ、可い。」
T―青年が寄つて來て、「田舍へ歸つちや駄目ですよ」と彼女を勵ました。
通りの方へ出ると、K―が道路の向ふ側へわたつて、タキシーの來るのを待つてゐた。
やがて一台つかまへた。彼はその方へ近づいて行つた。T―青年も寄つて來た。
「誰も一緒に行つちや厭よ。」
「大丈夫だよ。」彼はさう言つて、彼女母子を乘せてから、
「どこへ行く？」
「どこでも可いわ。」
「餘り遠いところは……。」
「さう！　では私の家へちよつとお寄りになりません？お厭？」
「いや、それでも可いけれど……。」
「ぢや神田！」彼女は運轉士に命じた。
それは去年の春、子供のことで衝突して、一度出たことのある下宿屋であつた。
「ねえ先生、人間は惱まなくちや駄目ね。」彼女はまた自分の今の心機について訴へはじめた。彼はあれほど曖かしい氣分

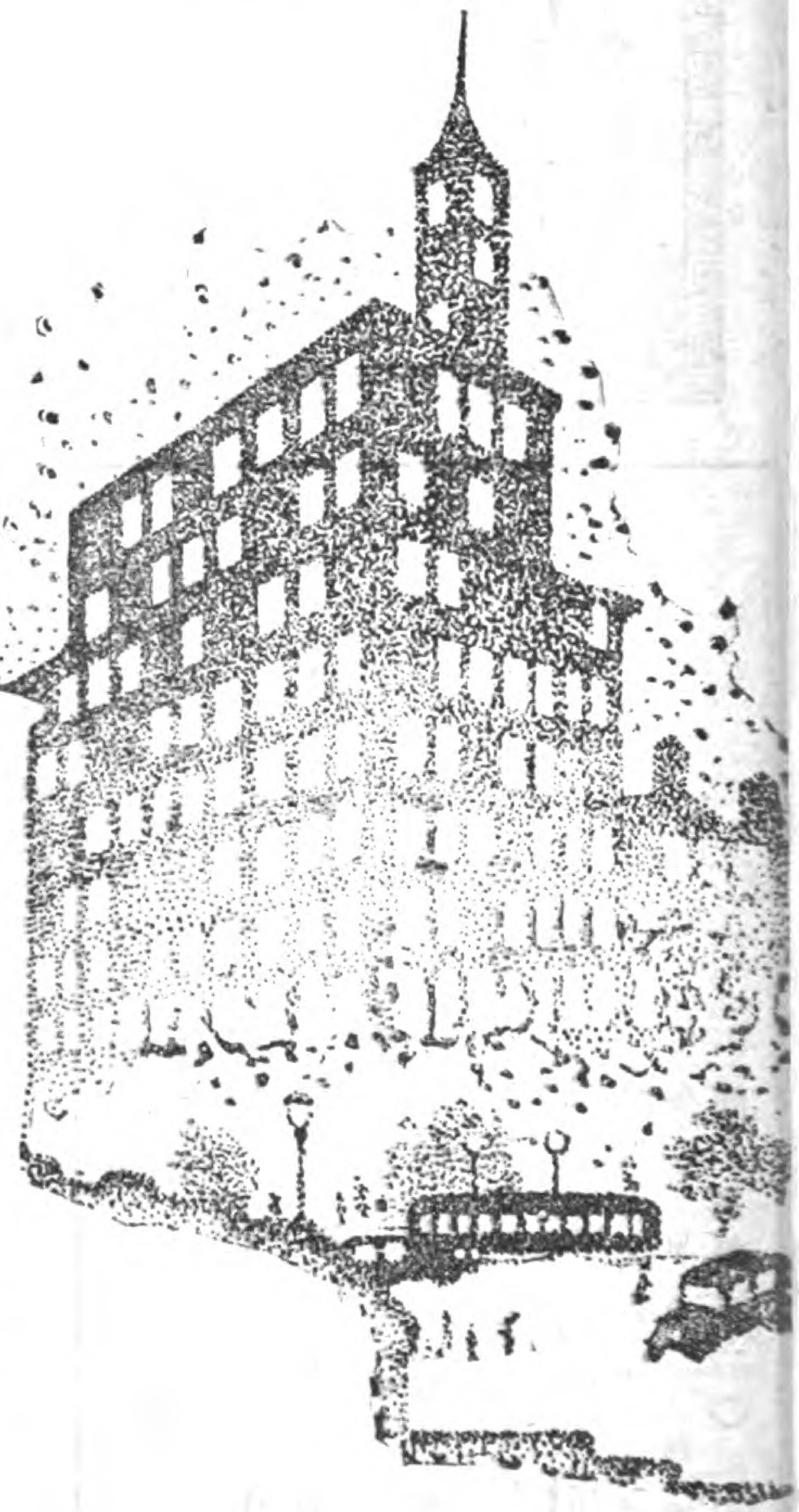
の張りつめてゐた彼女が、すつかり變つてゐるのを痛ましくも思つたが、しかし其れが彼女に取つて何んな仕合せになつてゐるかを考へると、心に感謝しないではゐられなかつた。

しかし自動車の進むにつれて、二人は互ひに警戒しあふやうに、いつか殺氣立つた沈默に陷ちてしまつた。そして行先について、再び二人の感情に一致が見出せなくなつた。彼がいつものやうに自分から決定的に落付き先きを指定しないのも、彼女の神經を苛らつかせたが、再び彼女と二人きりの世界になつたことが、また彼を不安な豫感に怯えさせた。胸に匕首をでも呑んでゐるかとさへ思はれてならなかつた。

マツダランプの

高級トロジャリヤ照明器具





従来の照明器具と異り硝子の形状優雅にして気品あり、金具は古金色を呈して居りますから荘重にして艶麗、しかも能率と撒光の良好なる事は特に本器の誇りとする所であります大建築や文化住宅には特に缺くべからざる照明器具であります。

東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市

の張りつめてゐた彼女が、すつかり變つてゐるのを痛ましくも思つたが、しかし其れが彼女に取つて何んな仕合せになつてゐるかを考へると、心に感謝しないではゐられなかつた。

しかし自動車の進むにつれて、二人は互ひに警戒しあふやうに、いつか殺氣立つた沈默に陷ちてしまつた。そして行先について、再び二人の感情に一致が見出せなくなつた。彼がいつものやうに自分から決定的に落付き先きを指定しないのも、彼女の神經を苛らつかせたが、再び彼女と二人きりの世界になつたことが、また彼を不安な豫感に怯えさせた。胸に匕首をでも呑んでゐるかとさへ思はれてならなかつた。

定價

	定價	送料
一册	八十錢	參錢
六册	四圓八十錢	送料共
十二册	九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年六月十八日印刷

昭和二年七月一日發行

（發轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　高木島三

印刷所　株式會社秀英舍

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七七六區

中央公論社

電話丸ノ内二〇六番

振替東京三四番

同　長野三二〇五番


カルピス
滋強飲料

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十二年一月廿九日第三種郵便物認可

